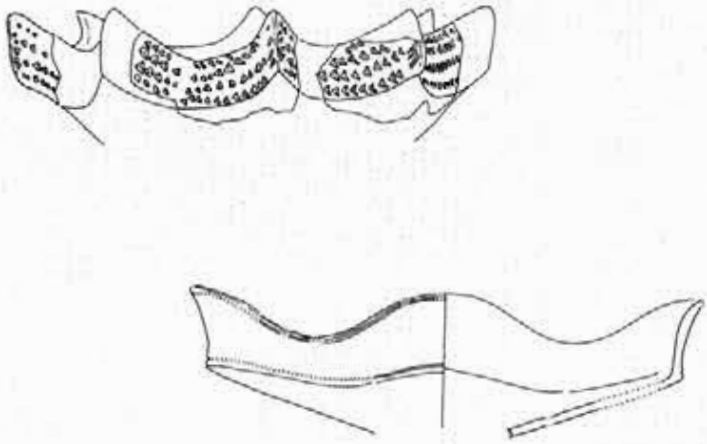
岐阜県文化財保護センター調査報告書　第55集

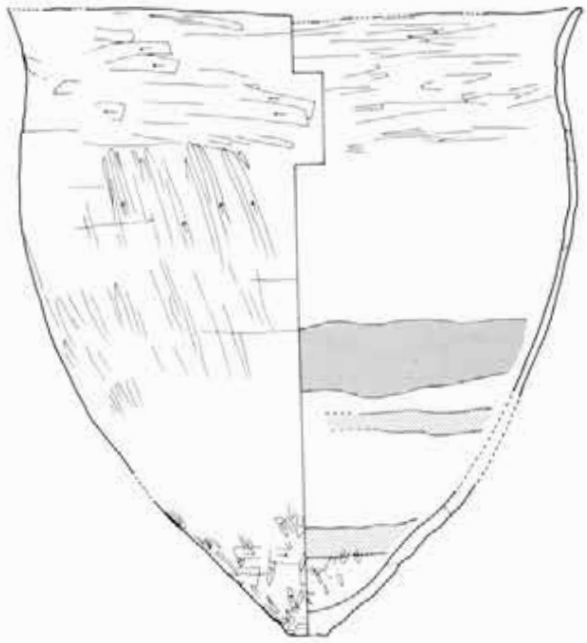
いんべ遺跡



2000

財団法人　岐阜県文化財保護センター

いんべ遺跡



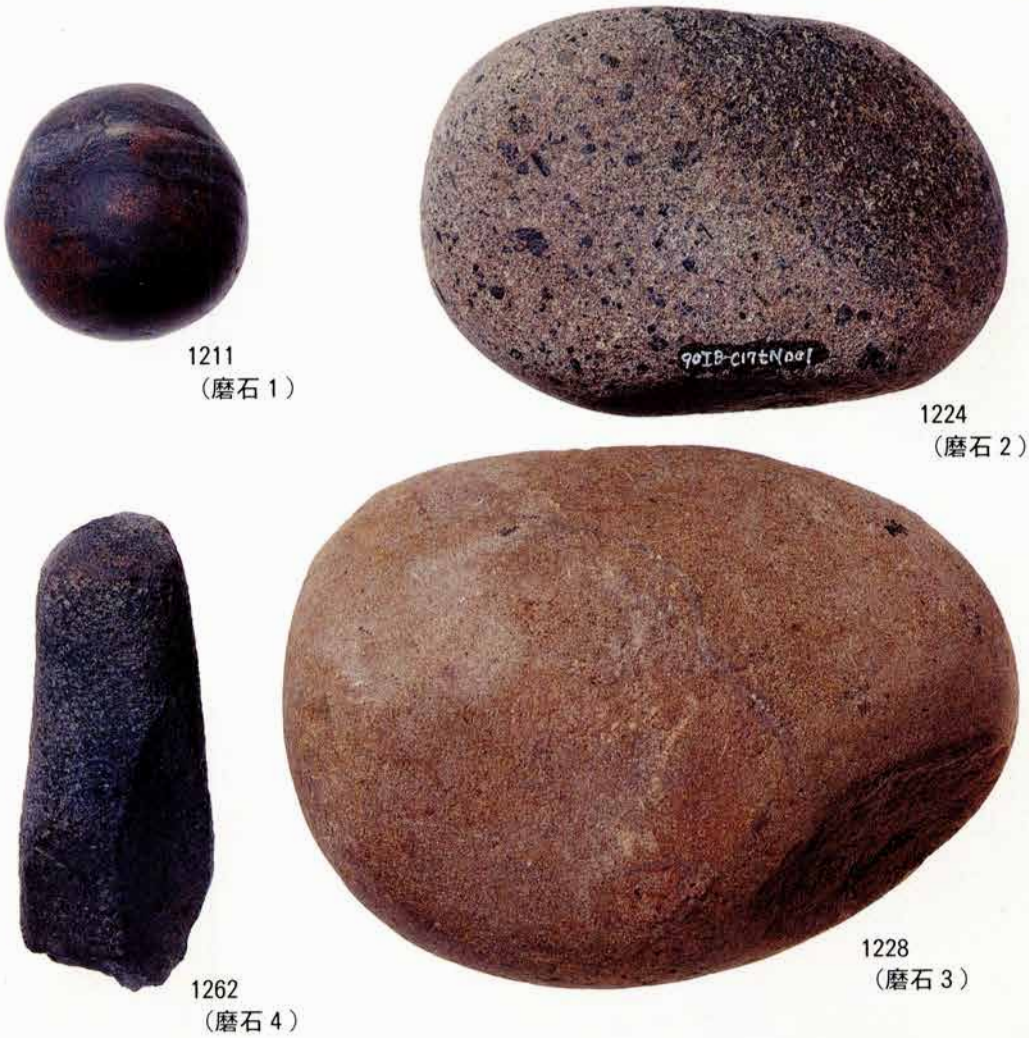
2000

財団法人　岐阜県文化財保護センター

いんべ遺跡出土　土器棺（主に晩期中葉）

いんべ遺跡出土　凹石類（総数 163 点）

赤色顔料付着土器



赤色顔料付着石器　　（　）は分析の際の番号

序

「天が開け、水のある、平らな所には遺跡がある。」
これは、廃村前の徳山村で分布調査に尽力された根尾弥七氏（故人）の言葉ですが、「いんべ遺跡」は、まさにこうしたところに立地しています。
「いんべ遺跡」は、揖斐川支流の西谷の「戸入村平遺跡」の眠っていた旧戸入集落よりさらに約4㎞上流の、海抜400m（徳山ダム建設により水没する満水時の高さとほぼ同じ）に位置しています。

この調査では、縄文時代の焼礫集積遺構や土器棺墓などの遺構、それに多くの遺物を発見することができました。なかでも、縄文時代早期末葉と晩期中葉の土器がまとまって出土し、貴重な資料を提供できたと考えます。

最後になりましたが、この報告書の刊行にあたり、発掘調査および出土品の整理・報告書の作成に際しまして御指導・御協力を賜りました関係諸機関・各位に厚くお礼申し上げるとともに、感謝申し上げます。

平成12年3月

財団法人　岐阜県文化財保護センター
理事長　村　木　光　男

例　　言

1．本書は、岐阜県揖斐郡藤橋村大字門入字立石谷に所在する「いんべ遺跡」（遺跡番号21407-06371）の発掘調査報告書である。

2．本調査は、徳山ダム建設事業に伴うもので、水資源開発公団から岐阜県が委託を受け、岐阜県教育委員会（平成２年度）及び財団法人岐阜県文化財保護センター（平成４年度以降）が実施した。

3．発掘調査は、平成２・４年度に実施し、大参義一愛知学院大学教授（故人）の指導のもとに、宇野治幸・武藤貞昭（平成２年度）、武藤（平成４年度）が担当した。

4．報告書作成は、小谷和彦が担当し、高嶌桂子・小木曽美智・藪下賀代子・村瀬俊哉・高田桂子・山口百合子・足立豊子で行った。

本書に掲載した遺物の実測については、土器の拓本・実測は高嶌・小木曽・藪下・高田・山口・村瀬・小谷、石器の実測は高嶌・村瀬・小谷が行った。

実測図等のトレースは高嶌・村瀬が行った。

5．本書の執筆は、小谷和彦・藤岡比呂志（第１章第１節）が担当分担し、全体の編集は小谷が担当した。

6．遺物の写真撮影は、フォトスタジオ サトウに委託して行った。

7．地形測量は、株式会社イビソクに委託して行った。

8．自然科学分析は、株式会社パレオ・ラボに依頼して行った。それぞれの結果は第６章に掲載した。

9．発掘調査および報告書作成にあたって、次の方々や諸機関から御助言・御指導をいただ いた。記して感謝の意を表する次第である（敬称略・五十音順）。

網谷克彦・泉拓良・池畑耕一・岩田崇・大石崇・大平愛子・小笠原永隆・加藤三千雄・木下哲夫・小阪大・小林義孝・鈴木元・高橋順之・冨井眞・長瀬治義・布尾和史・八賀晋・林直樹・宮田明・矢野健一・横幕大祐・吉田英敏・吉田正人・米沢義光・北陸の土器を見る会・
水資源開発公団徳山ダム建設所・藤橋村教育委員会・久瀬村教育委員会・揖斐川町教育委員会・揖斐川町歴史民俗資料館・揖斐県事務所・西濃教育事務所

10. 発掘調査作業、ならびに調査記録および出土品の整理等には、次の者が参加した。

（敬称略・五十音順）

補助調査員：田中弘志・西村勝弘

発掘作業員：泉武光・五十川シズ・市田岱子・臼田郷弘・小倉富恵・河合茂・小玉春子・清水おぎの・(故)清水義太・瀬里崎陽子・扇間重男・高橋しも・高橋つや・(故)高橋利美・高橋花子・高橋みやの・高橋ゆりの・竹中としえ・竹中直太・田中和一・土屋重義・中石たけ・中村菊子・福田基二・本多博道・増元なつゑ・松原保一・村山みつ子・山岸孝枝・山田定一・渡辺あきゑ

一次整理作業員：河本節子・駒田香絵・高嶌桂子・脇野伸子（穂積整理所）

11. 調査記録および出土品は、財団法人岐阜県文化財保護センターで保管している。

凡　　例

1．遺構挿図の縮尺は次のとおりで、それぞれスケールを添付した。

・焼礫集積遺構……1／20

・土器棺墓……1／20

・配石土壙……1／20

2．遺物挿図の縮尺は次のとおりで、それぞれスケールを添付した。

・縄文土器・土製品……1／3、1／4（383～386）、1／5（ＳＺ１～11）

・石器類　打製石斧・磨製石斧・石製品……1／2

凹石類……1／3

石皿……1／4

その他の石器……2／3

・縮尺の異なるものは、それぞれ添付したスケールのとおりである。

3．図中の方位は、第１～５・８～12図は真北を示し、その他はすべて国土座標第Ⅶ系の座標北を示す。

4．本書で使用した土色名については、「新版標準土色帖」（農林水産省農林水産技術会議事務局・財団法人日本色彩研究所監修）を使用した。

5．水糸レベルは標高を示し、土層図の右または左肩に記した。

6．本文・表・図中に必要に応じて遺構記号を使用したが、これらは次のように遺構の種類を表す。

・ＳＩ＝焼礫集積遺構　・ＳＺ＝土器棺墓　・ＳＵ＝土器集中区

・ＳＸ＝配石土壙　・Ｐ＝ピット　・ＳＫ＝土坑

7．石器の実測図中つぶれの表現を次のようにした。

つぶれ

8．遺構番号は種類によって次のように表記した。なお、本文・挿図・表・図版とも統一してある。

・土器類　1～518　（517点）　＊26は欠番

・石器類　1001～1262　（262点）

以上の779点を実測（拓本）し、掲載した。

目　　次

序
例　言
凡　例
目　次
　挿図目次
　表目次
　図版目次
第1章　遺跡の環境 …… 1
　第1節　いんべ遺跡周辺の地形・地質 …… 1
　第2節　歴史的環境 …… 8
第2章　発掘調査の経過 …… 17
　第1節　発掘調査に至るまでの経緯 …… 17
　第2節　発掘調査の方法と経過 …… 19
第3章　層　序 …… 21
第4章　遺　構 …… 25
　第1節　遺構の概略 …… 25
　第2節　上の段で検出した遺構 …… 25
　第3節　下の段で検出した遺構 …… 32
第5章　遺　物 …… 47
　第1節　遺物の概略 …… 47
　第2節　縄文土器 …… 47
　第3節　石　器 …… 115
第6章　自然科学分析 …… 171
第7章　まとめと考察 …… 183
引用・参考文献 …… 192
図　版 …… 196

＜挿図目次＞

第１図　いんべ遺跡周辺の地形図…… 1
第２図　いんべ遺跡周辺の接峰面図…… 2
第３図　門入地区から揖斐川本流合流点までの西谷の水系図…… 3
第４図　門入地区と戸入地区の間における西谷の水系図…… 3
第５図　西谷沿いにおける段丘分布図…… 4
第６図　西谷沿いの縦断面投影図（１）…… 5
第７図　西谷沿いの縦断面投影図（２）…… 6
第８図　徳山地域周辺の地質図…… 7
第９図　旧徳山村地内の遺跡分布図…… 10
第10図　旧徳山村地内の中世墓分布図…… 14
第11図　いんべ遺跡の位置…… 18
第12図　いんべ遺跡（Ａ・Ｂ地点）の範囲と試掘地点…… 18
第13図　いんべ遺跡（Ｃ地点）の範囲と発掘調査範囲…… 20
第14図　遺跡土層断面図…… 22
第15図　いんべ遺跡（Ｃ地点）遺構配置図…… 25
第16図　第１号焼礫集積遺構（１）…… 26
第17図　第１号焼礫集積遺構（２）…… 28
第18図　第２号焼礫集積遺構（１）…… 29
第19図　第２号焼礫集積遺構（２）…… 30
第20図　第３・４号焼礫集積遺構…… 31
第21図　第１・２・３号土器棺墓…… 33
第22図　下の段の遺構配置図…… 34
第23図　第４・５・６号土器棺墓…… 36
第24図　第７・８・９号土器棺墓…… 37
第25図　第10・11号土器棺墓…… 38
第26図　土器棺墓（ＳＺ）主軸の方向…… 40
第27図　第１号配石土壙…… 41
第28図　第２・３号配石土壙…… 42
第29図　土坑・ピット等に認められる環状の配置…… 45
第30図　配石土壙（ＳＸ）及びＳＫ・Pitの主軸の方向 …… 46
第31図　楕円形を呈し、長軸をもつ土坑・ピット…… 46
第32図　遺構出土土器（１）ＳＺ５・６…… 55
第33図　遺構出土土器（２）ＳＺ１・10・３…… 57
第34図　遺構出土土器（３）ＳＺ７・２…… 59

第35図　遺構出土土器（4）ＳＺ８・９…… 60
第36図　遺構出土土器（5）ＳＺ11…… 62
第37図　遺構出土土器（6）ＳＺ４、ＳＵ１…… 63
第38図　遺構出土土器（7）ＳＫ29出土 注口土器 …… 64
第39図　遺構出土土器（8）ＳＩ・ＳＫ・Pit出土土器 …… 65
第40図　包含層(上の段) 出土土器 （1）　第１群１類ａ種…… 67
第41図　包含層(上の段) 出土土器 （2）　第１群１類ｂ種…… 68
第42図　包含層(上の段) 出土土器 （3）　第１群１類ｂ種…… 69
第43図　包含層(上の段) 出土土器 （4）　第１群１類ｂ種…… 70
第44図　包含層(上の段) 出土土器 （5）　第１群１類ｂ・ｃ種、２類…… 72
第45図　包含層(上の段) 出土土器 （6）　第１群３類ａ種…… 74
第46図　包含層(上の段) 出土土器 （7）　第１群３類ａ・ｂ種…… 75
第47図　包含層(上の段) 出土土器 （8）　第１群３類ｃ・ｄ種…… 77
第48図　包含層(上の段) 出土土器 （9）　第１群３類ｅ・ｆ・ｇ・ｈ種…… 78
第49図　包含層(上の段) 出土土器 （10）　第１群３類ｈ種…… 80
第50図　包含層(上の段) 出土土器 （11）　第１群４類、第２群 ……82
第51図　包含層(上の段) 出土土器 （12）　第３群１類、２類ａ・ｂ種…… 84
第52図　包含層(上の段) 出土土器 （13）　第３群２類ｂ・ｃ・ｄ種…… 86
第53図　包含層(上の段) 出土土器 （14）　第３群２類ｄ種…… 88
第54図　包含層(上の段) 出土土器 （15）　第３群２類ｅ種、３類、４群…… 90
第55図　包含層(下の段) 出土土器 （16）　第３群、第４群１・２類…… 92
第56図　包含層(下の段) 出土土器 （17）　第４群３類…… 94
第57図　包含層(下の段) 出土土器 （18）　第４群４・５類…… 96
第58図　包含層(下の段) 出土土器 （19）　第４群３類、第５群１類…… 98
第59図　包含層(下の段) 出土土器 （20）　第５群２類ｂ・ｃ種……100
第60図　包含層(下の段) 出土土器 （21）　第５群３・４類……101
第61図　包含層(下の段) 出土土器 （22）　第５群４類、第６群４・５類……102
第62図　包含層(下の段) 出土土器 （23）　第５群４類……104
第63図　包含層(下の段) 出土土器 （24）　第５群４類……105
第64図　包含層(下の段) 出土土器 （25）　第６群１類ａ種①……107
第65図　包含層(下の段) 出土土器 （26）　第６群１類ａ種①②……108
第66図　包含層(下の段) 出土土器 （27）　第６群１類ａ種②……109
第67図　包含層(下の段) 出土土器 （28）　第６群１類ａ種②、ｂ種①……110
第68図　包含層(下の段) 出土土器 （29）　第６群１類ｂ種①②……111

第69図　包含層(下の段) 出土土器 (30)　第６群２類……112
第70図　包含層(下の段) 出土土器 (31)　第６群３類……114
第71図　石器組成グラフ……115
第72図　石鏃の分類……117
第73図　石鏃１ 遺構分及び上の段出土 ……118
第74図　石鏃２ 下の段出土 ……119
第75図　石錐の分類……125
第76図　石錐……125
第77図　スクレイパーの分類……126
第78図　スクレイパー１類（１ａ・１ｂ・１ｃ）……127
第79図　スクレイパー２類（２ａ・２ｂ）……128
第80図　スクレイパー２類（２ｂ・２ｃ）……129
第81図　スクレイパー３類（ノッチド・スクレイパー)、ピエス・エスキーユ ……130
第82図　打製石斧の折損の部位による分類……132
第83図　打製石斧（１）……133
第84図　打製石斧（２）……134
第85図　打製石斧（３）……135
第86図　磨製石斧……136
第87図　石核（１）……138
第88図　石核（２）……139
第89図　２次加工のある剥片（ＲＦ）……140
第90図　使用痕のある剥片（ＵＦ）……141
第91図　石錘欠損状態模式図……142
第92図　打欠石錘……143
第93図　石錘の質量分布……144
第94図　切目石錘（１）……145
第95図　切目石錘（２)、有溝石錘 ……146
第96図　打欠石錘計測部位説明図……148
第97図　凹石類の形態による分類……150
第98図　凹石類の質量分布……151
第99図　凹石類の凹みの形状と位置による分類……152
第100図　凹石類の磨面による分類……153
第101図　凹石類の敲打痕による分類……154
第102図　凹石類の折損の部位による分類……155

第103図　凹石類　上の段出土①（１・２群）……156
第104図　凹石類　上の段出土②（２～５群）……157
第105図　凹石類　遺構出土、下の段出土①（１群）……158
第106図　凹石類　下の段出土②（２群）……159
第107図　凹石類　下の段出土③（２群）……160
第108図　凹石類　下の段出土④（２・３群）……161
第109図　凹石類　下の段出土⑤（３・４群）……162
第110図　凹石類　下の段出土⑥（４・５群）……163
第111図　石皿……166
第112図　石製品……168
第113図　石製品、その他の石器……169
第114図　磨石１付着赤色顔料の蛍光Ｘ線スペクトル図……172
第115図　磨石２付着赤色顔料の蛍光Ｘ線スペクトル図……173
第116図　磨石３付着赤色顔料の蛍光Ｘ線スペクトル図……173
第117図　磨石４付着赤色顔料の蛍光Ｘ線スペクトル図……174
第118図　土器１付着赤色顔料の蛍光Ｘ線スペクトル図……174
第119図　土器２付着赤色顔料の蛍光Ｘ線スペクトル図……175
第120図　土器３付着赤色顔料の蛍光Ｘ線スペクトル図……175
第121図　いんべ遺跡焼礫集積遺構ＳＩ１出土炭化材の産状……180
第122図　石器出土地点（１）……187
第123図　石器出土地点（２）……188
第124図　サヌカイト・下呂石出土地点……189
第125図　赤色顔料付着遺物出土地点……191

<表 目 次>

第１表　旧徳山村地内の旧石器・縄文・弥生遺跡一覧 …… 9
第２表　旧徳山村地内の旧石器・縄文・弥生以外の遺跡一覧 …… 13
第３表　旧徳山村地内の中世墓一覧 …… 14
第４表　土器棺墓（ＳＺ）一覧表 …… 39
第５表　縄文時代の土坑・ピット一覧表 …… 44
第６表　楕円形を呈する遺跡の主軸の方向 …… 46
第７表　土器集計表 …… 47
第８表　上の段　土器集計表 …… 48
第９表　下の段　土器集計表 …… 50
第10表　石器一覧表 …… 116
第11表　石鏃の分類別出土点数 …… 117
第12表　石鏃計測表（１） …… 120
第13表　石鏃計測表（２） …… 121
第14表　石鏃計測表（３） …… 122
第15表　石鏃計測表（４） …… 123
第16表　石錐計測表 …… 124
第17表　スクレイパー計測表（１） …… 131
第18表　スクレイパー計測表（２） …… 131
第19表　スクレイパー計測表（３） …… 131
第20表　ピエス・エスキーユ計測表 …… 137
第21表　打製石斧計測表 …… 137
第22表　磨製石斧計測表 …… 137
第23表　剥片・砕片の石材別一覧表 …… 142
第24表　石錘欠損状態別表 …… 142
第25表　切目石錘計測表（１） …… 147
第26表　切目石錘計測表（２） …… 148
第27表　打欠石錘計測表 …… 148
第28表　凹石類の形態による分類個数 …… 150
第29表　凹石類の質量分布表 …… 151
第30表　凹石類の使用痕による分類 …… 152
第31表　凹石類の形状と位置による分類一覧表 …… 153
第32表　磨面の位置による分類一覧表 …… 154
第33表　凹石類の敲打痕による分類一覧表 …… 154
第34表　凹石類の石材別一覧表 …… 155

第35表　凹石類計測表（1）……164
第36表　凹石類計測表（2）……165
第37表　石皿計測表……166
第38表　石製品計測表……170
第39表　その他の石器計測表……170
第40表　赤色顔料が付着した磨石及び土器試料……171
第41表　ＳＩ１出土炭化材の放射性炭素年代測定結果……176
第42表　ＳＩ１・ＳＩ２・ＳＩ４出土炭化材の樹種同定結果一覧……179
第43表　焼礫集積遺構出土炭化材の樹種構成……182
第44表　石器の器種別石材一覧表……189
第45表　赤色顔料付着遺物一覧表……191

＜図版目次＞

図版１　調査前の様子、完掘状況
図版２　作業風景、完掘状況
図版３　第１・２号焼礫集積遺構
図版４　第２号焼礫集積遺構
図版５　第２・４号焼礫集積遺構
図版６　第１・２・３号土器棺墓
図版７　第４・５・６号土器棺墓
図版８　第７・８・９号土器棺墓
図版９　第10・11号土器棺墓、第１号土器集中区
図版10　第１・２・３号配石土壙
図版11　第１・２・３号配石土壙
図版12　遺構（ＳＺ）出土土器
図版13　遺構（ＳＺ）出土土器
図版14　遺構（ＳＺ、ＳＵ）出土土器
図版15　遺構（ＳＺ）出土土器、他
図版16　包含層（上の段・下の段）出土土器　復元個体
図版17　包含層（下の段）出土土器　復元個体、浅鉢、皿
図版18　遺構（ＳＩ・ＳＫ・Pit）出土土器
図版19　包含層（上の段）出土土器　第１群１類（ａ・ｂ種）
図版20　包含層（上の段）出土土器　第１群１類（ｂ種）
図版21　包含層（上の段）出土土器　第１群１類（ｂ・ｃ種）
図版22　包含層（上の段）出土土器　第１群２・３類（ａ種）
図版23　包含層（上の段）出土土器　第１群３類（ａ種）
図版24　包含層（上の段）出土土器　第１群３類（ｂ・ｃ種）
図版25　包含層（上の段）出土土器　第１群３類（ｄ～ｇ種）
図版26　包含層（上の段）出土土器　第１群３類（ｈ種）
図版27　包含層（上の段）出土土器　第１群３類（ｈ種）、４類、第２群
図版28　包含層（上の段）出土土器　第３群１・２類（ａ・ｂ種）
図版29　包含層（上の段）出土土器　第３群２類（ｂ・ｃ種）
図版30　包含層（上の段）出土土器　第３群２類（ｄ種）
図版31　包含層（上の段）出土土器　第３群２類（ｅ種）・３類、第４群
図版32　包含層（下の段）出土土器　第３群、第４群１・２類
図版33　包含層（下の段）出土土器　第４群３類
図版34　包含層（下の段）出土土器　第４群４・５類、第５群２類

図版35　包含層（下の段）出土土器　第５群３・４類
図版36　包含層（下の段）出土土器　第４群３類、第５群１類
図版37　包含層（下の段）出土土器　第４群３類、第５群１類
図版38　包含層（下の段）出土土器　第５群４類、第６群４・５類
図版39　包含層（下の段）出土土器　第６群１類（ａ種①）
図版40　包含層（下の段）出土土器　第６群１類（ａ種①②）
図版41　包含層（下の段）出土土器　第６群１類（ａ種②）
図版42　包含層（下の段）出土土器　第６群１類（ａ種②、ｂ種①）
図版43　包含層（下の段）出土土器　第６群１類（ｂ種①②）
図版44　包含層（下の段）出土土器　第６群２類
図版45　包含層（下の段）出土土器　第６群３類
図版46　石鏃（１）（遺構・上の段出土）
図版47　石鏃（２）（下の段出土）
図版48　石錐、スクレイパー１類
図版49　スクレイパー２類
図版50　スクレイパー３類、石核
図版51　打製石斧
図版52　磨製石斧
図版53　２次加工のある剥片（ＲＦ）、使用痕のある剥片（ＵＦ）
図版54　打欠石錘
図版55　切目石錘（１）
図版56　切目石錘（２）
図版57　凹石類　上の段出土①（１・２群）
図版58　凹石類　上の段出土②（２～５群）
図版59　凹石類　遺構出土、下の段出土①（１群）
図版60　凹石類　下の段出土②（２群）
図版61　凹石類　下の段出土③（２群）
図版62　凹石類　下の段出土④（２・３群）
図版63　凹石類　下の段出土⑤（３・４群）
図版64　凹石類　下の段出土⑥（４・５群）
図版65　凹石Ⅰ・Ⅱ類使用痕拡大写真、石皿
図版66　石製品（１）
図版67　石製品（２）、その他の石器
図版68　いんべ遺跡出土炭化材（１）
図版69　いんべ遺跡出土炭化材（２）
図版70　いんべ遺跡出土炭化材（３）
図版71　いんべ遺跡出土炭化材（４）

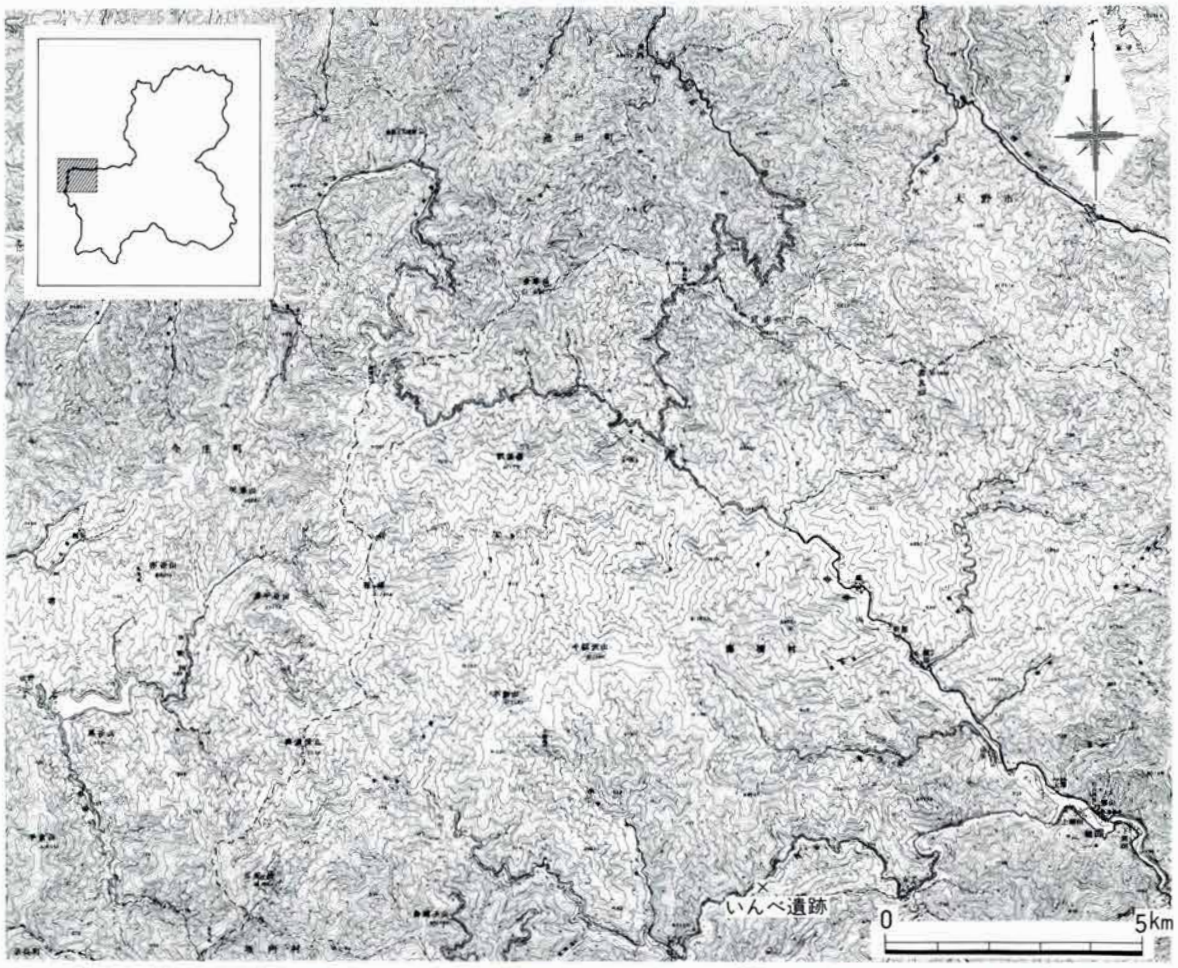
第1章　遺跡の環境

第1節　いんべ遺跡周辺の地形・地質

(1)　遺跡周辺の地形

いんべ遺跡は、藤橋村徳山地域の揖斐川支流西谷左岸の段丘上にある。まず、徳山地域における地形の概略を述べる。

第1図に5万分の1の地形図「冠山」を、第2図に第1図と同範囲の接峰面図を示した。第2図に示されるように、徳山地域及び周辺の山々の頂は、定高性を示し、ほとんど1200m前後である。また、徳山地域の中央やや西に位置する千回沢山のように、いくつかの山頂付近には小起伏侵食面[1]が認められる。徳山地域周辺の山地の分布をみると、次のようである。北方から西方にかけての福井県境には、能郷白山（標高1617m）から西へ若丸山（標高1286m）、冠山（標高1257m）、金草岳（標高1227m）が連なり、そこから南へ笹ヶ峰（標高1285m）、美濃俣丸（標高1254m）、三周ヶ岳（標高1292m）が続く。東方の本巣郡根尾村との境には、能郷白山から雷倉まで次第に低くなりながらも

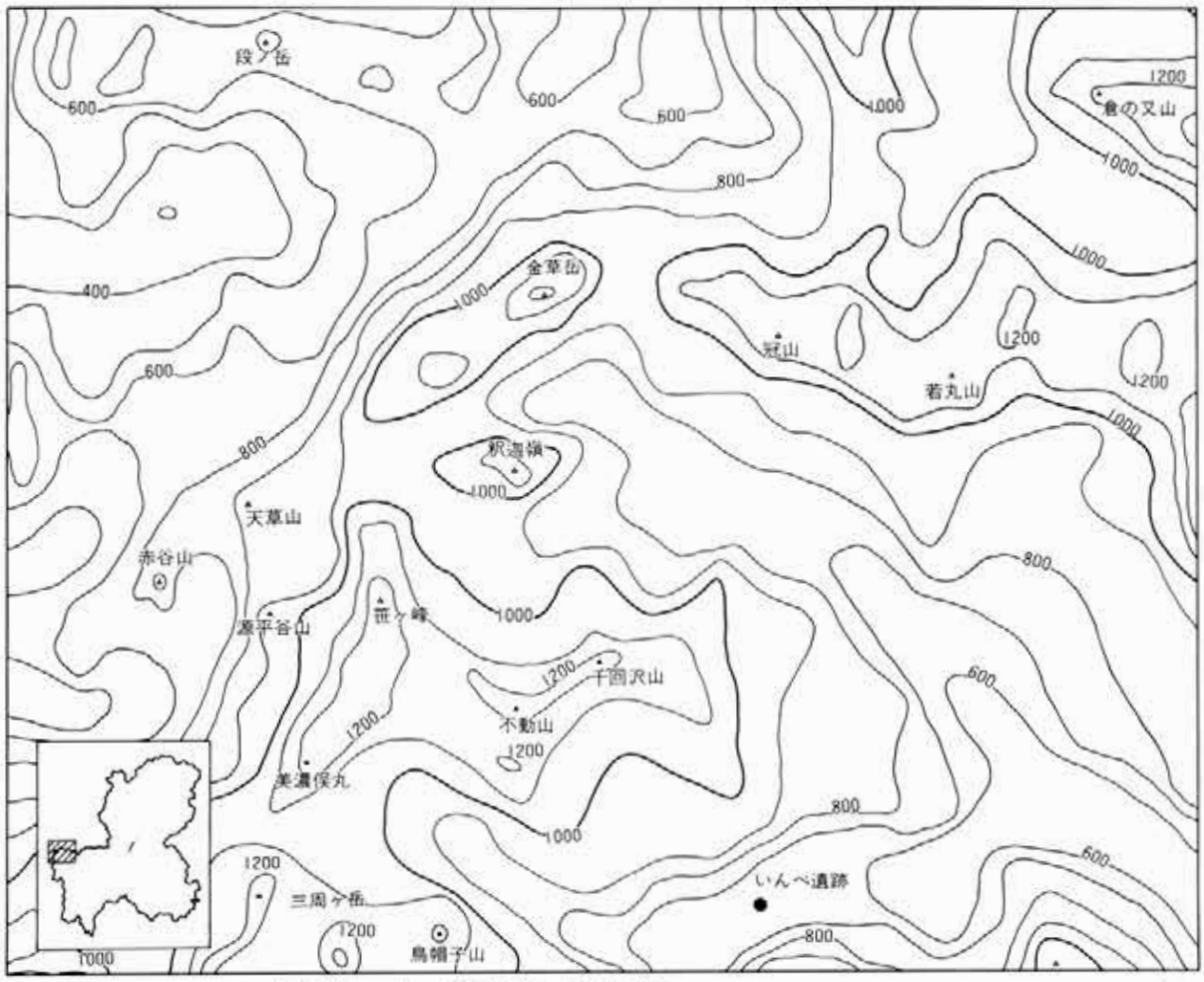


第1図　いんべ遺跡周辺の地形図　（国土地理院発行1:50,000地形図「冠山」を縮小）

1000m近くの山地が続く。また、南方の坂内村との境には、三周ヶ岳から東へ鳥帽子岳（標高1242m）、蕎麦粒山（標高1297m）、五蛇池山（標高1148m）、上谷山（標高1083m）が連なる。このように、この地域は、1000m以上の３つの山地に四方を囲まれている。

このような山地に囲まれた徳山地域をいくつもの支流が流れている。そのいくつもの支流が流れ込むのは、大きな２本の流れである。１本は揖斐川本流であり、もう１本は西谷である。徳山地域の多くの遺跡は揖斐川本流と西谷沿いにあり、現代の集落もこの２本の川沿いに存在していた。揖斐川本流は、この地域の北西端に位置する釈迦嶺に源を発する。そして、２本の流路が釈迦嶺の東南麓で合流し、ほぼ直線状をなして南東方向に流下している。直線状をなしているのは、ほぼ断層（揖斐川断層）に沿って流れているためである。一方、西谷は、この地域の西端に位置する三周ヶ岳に源を発する。揖斐川本流とは違い、源流部はやや直線的であるが、それ以外はかなり曲流の度合いが激しい。西谷は本流と比べても、水量は豊富である。流域面積を比較すると、西谷合流部から上流の本流は約119㎢であるのに対して、西谷は約93㎢である。本流の流域面積を１とすると、西谷は0.8であり、あまり変わらない。

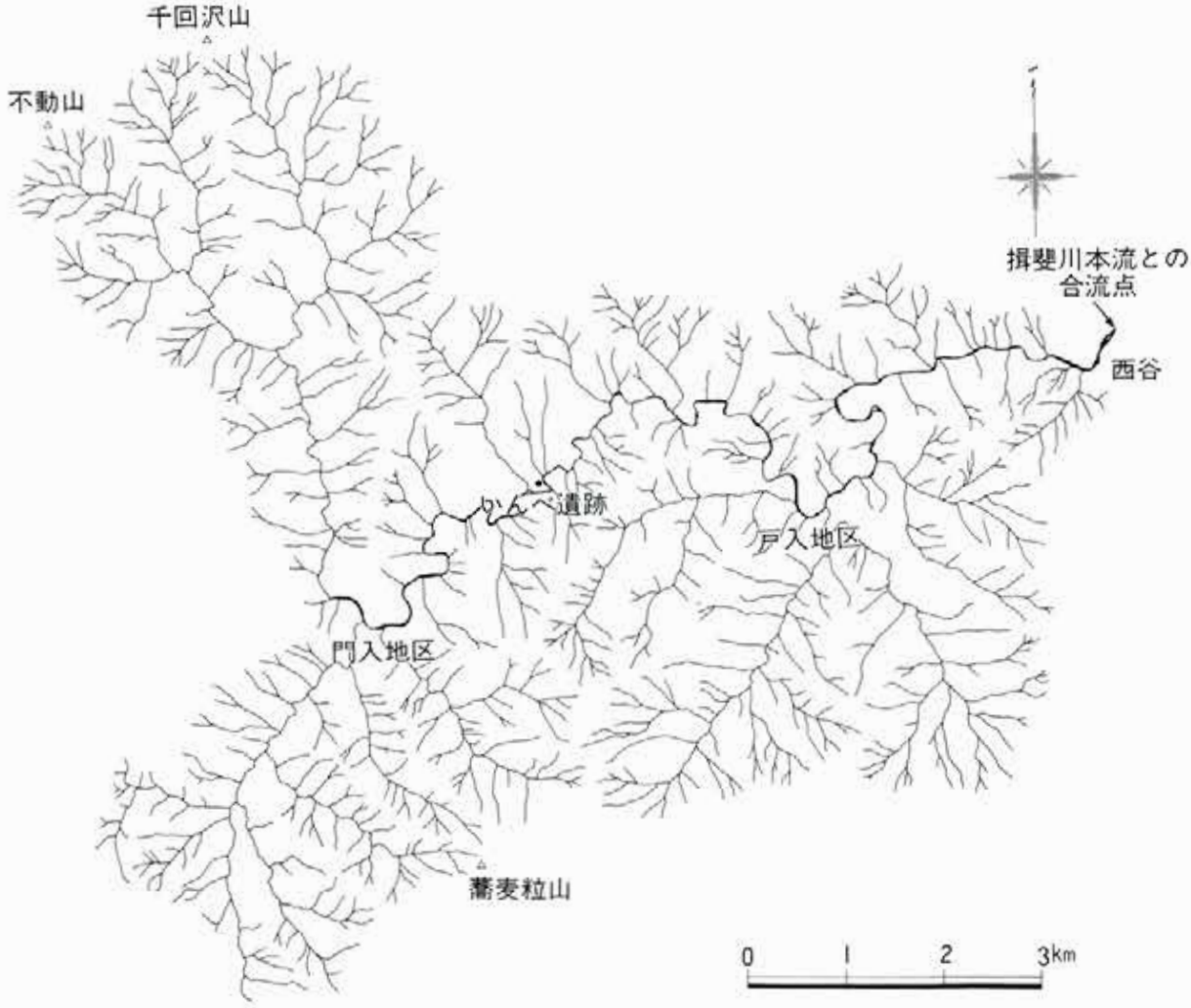
西谷沿いには、以前は戸入と門入という集落が存在した。第３図は、門入地区から揖斐川本流の合



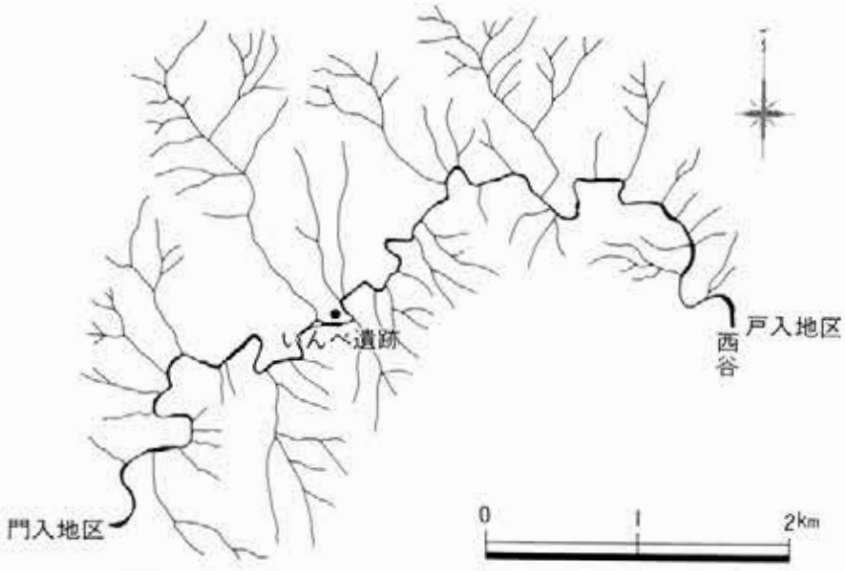
第２図　いんべ遺跡周辺の接峰面図

（1:50,000地形図「冠山」を一辺2㎞方眼の最高点の標高にもとづいて等高線作図）

0　5㎞



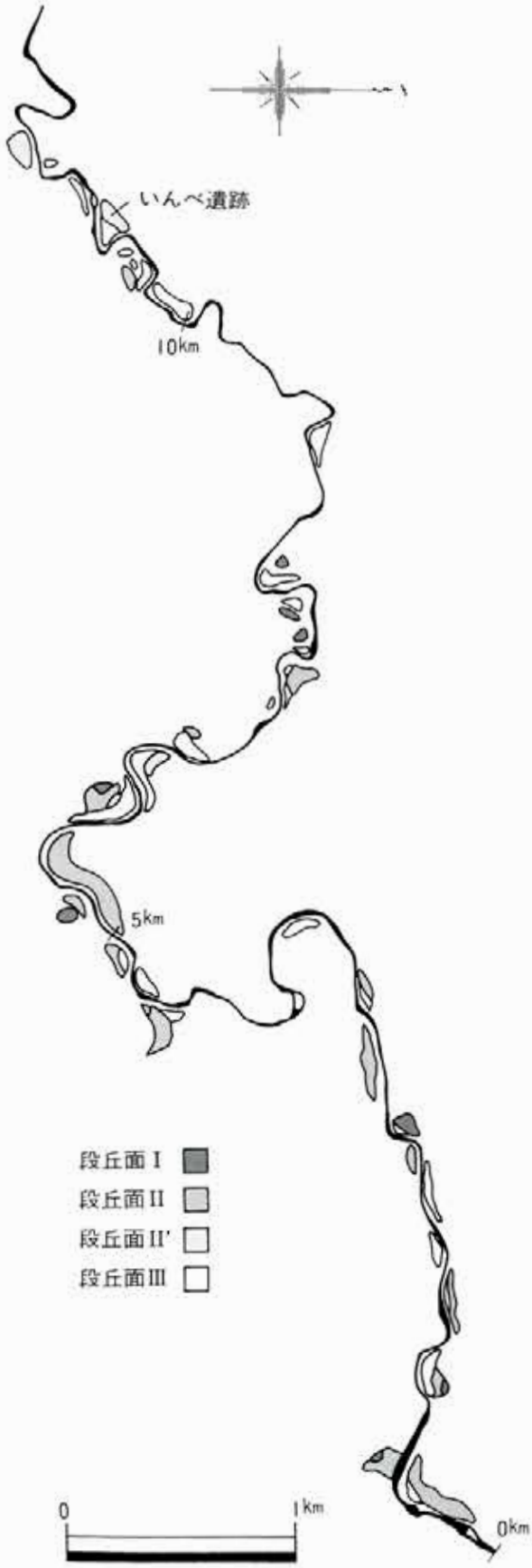
第3図　門入地区から揖斐川本流合流点までの西谷の水系図



第4図　門入地区と戸入地区の間における西谷の水系図

流点までの西谷の水系を示したものである。この図が示しているように、戸入地区と門入地区には何本もの大きな支流が流れ込んでおり、水量豊富な場所であったことがわかる。この2地区に比べると西谷沿いの他の場所では、小さな支流しか存在しない。ただし、その中でも戸入地区と門入地区の間で一番大きな支流が流れ込んでいる段丘面上にいんべ遺跡がある（第4図）。このように、いんべ遺跡は比較的水が豊富な条件にある場所であったといえる。

西谷に沿って、左岸，右岸ともに段丘が発達している。第5図に西谷沿いの段丘の水平分布を示した。また第6図は、西谷に沿って段丘面の垂直分布を示したものである。この2つの図は、1000分の1の航空写真測量図と15,000分の1の空中写真を用いて作成したものであり、第6図は現在の地形における段丘面の高さ分布をmオーダーで示した。段丘面の標高は、現在見られる段丘地形から読み取ったものであるため、本来の段丘面の高さとは限らない。第6・7図から判断すると、戸入地区（揖斐川本流との合流点から約5km上流）を境にして、下流は3面と考えられるが、それより上流は4面ありそうである。それぞれの面の現河床からの比高差は、戸入地区より下流では約5m、約10m、約20mである。また、戸入地区より上流では、約5m、8～10m、約15m、25～30mである。いんべ遺跡は、下から2番目の段丘面上にある。しかし、細かく見ると、いんべ遺跡も現在2つの段からなる。河床からすると、3段の面をもっている。一番下位の面には遺跡は存在せず、河床から4～5mという比高である。中位の面は、縄文後期・晩期の遺跡と考えており、下位の面とは比高差が約2.5mある。上位の面は、縄文早期・中期の遺跡と考えており、中位の面とは比高差が1～2mである。そのため、いんべ遺跡だけではなく、西谷に沿って発達する段丘面も下から2～3段目の面は細分できるかもしれない。



第5図　西谷沿いにおける段丘分布図

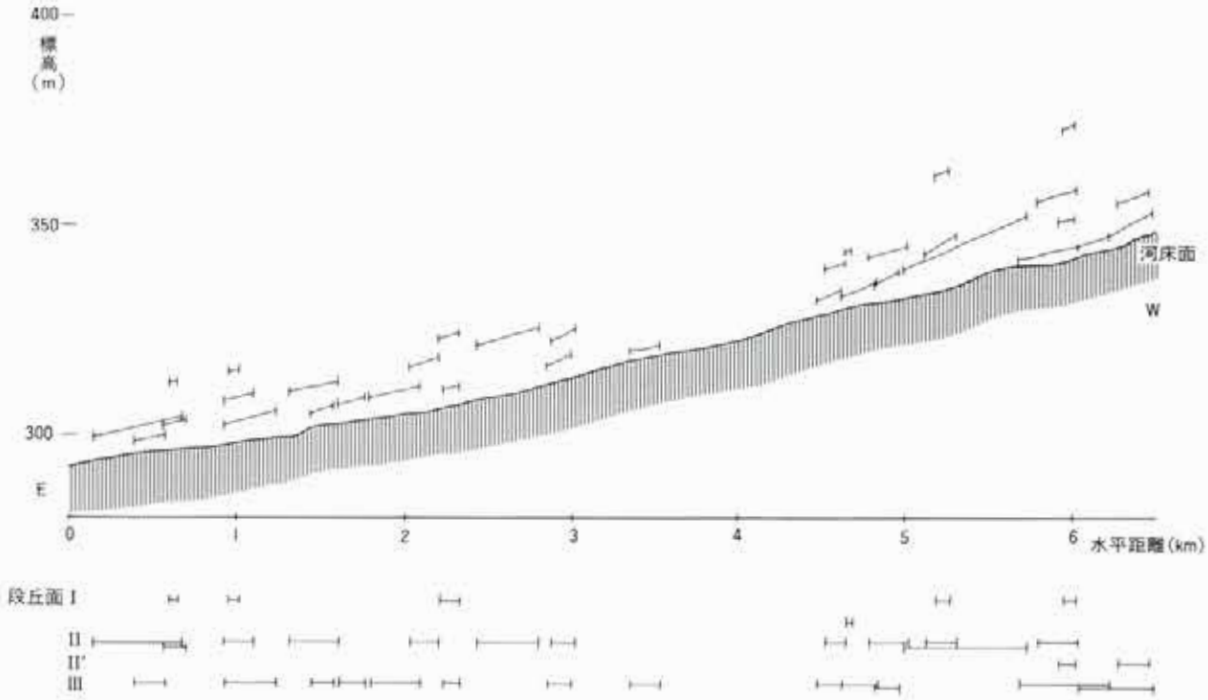
ただし、上位の面の遺跡も中位の面の遺跡も、遺構検出面の下部層は、砂岩のみの角礫～亜角礫が多く含まれる砂礫層よりなる。この堆積物は、段丘礫層の上にのる扇状地性の堆積物だと思われる。このように、段丘礫層の上に扇状地性の堆積物がのるため、段丘面の高さをわかりにくくしている。

(2)　遺跡周辺の地質

徳山地域周辺は、先新第三紀地質構造区分からすると美濃帯に属し、基盤は古生代から中生代にかけての海成堆積物の付加体[2]から成っている。そのため、徳山地域の大部分に中・古生層である砂岩、チャート、泥岩、石灰岩、玄武岩質溶岩及び火山砕屑岩などが複雑に混じりあった状態で分布する。その他には、北東部に能郷白山をつくっている花こう閃緑岩が分布し、冠山と能郷白山の間に位置する若丸山の稜線一帯に安山岩が分布する。また、徳山地域の南方には貝月山花こう岩が分布する。第8図に徳山地域周辺の地質図を示した。

いんべ遺跡は、前述したように、段丘礫層の上にのった扇状地性の堆積物を地山として存在している。扇状地性の堆積物は、砂礫層からなり、礫はすべて砂岩である。上位の面における地山の礫は、角礫～亜角礫よりなり、1～数cm径のものが多い。確認したかぎり、最大の礫は、45×30cmほどの砂岩の角礫である。また、中位の面における地山の礫は、亜角～亜円礫よりなり、1～10cm前後径のものが多く、上位の面と比べると礫はやや大きく、丸みもややある。最大の礫は、確認したかぎり35×30cmほどの砂岩の亜円礫であった。

西谷には、この地域の地質を反映して、砂岩をはじめとして、チャート、泥岩等の礫が存在する。



・距離の基準点(0km)は揖斐川本流との合流点である。

第6図　西谷沿いの縦断面投影図(1)

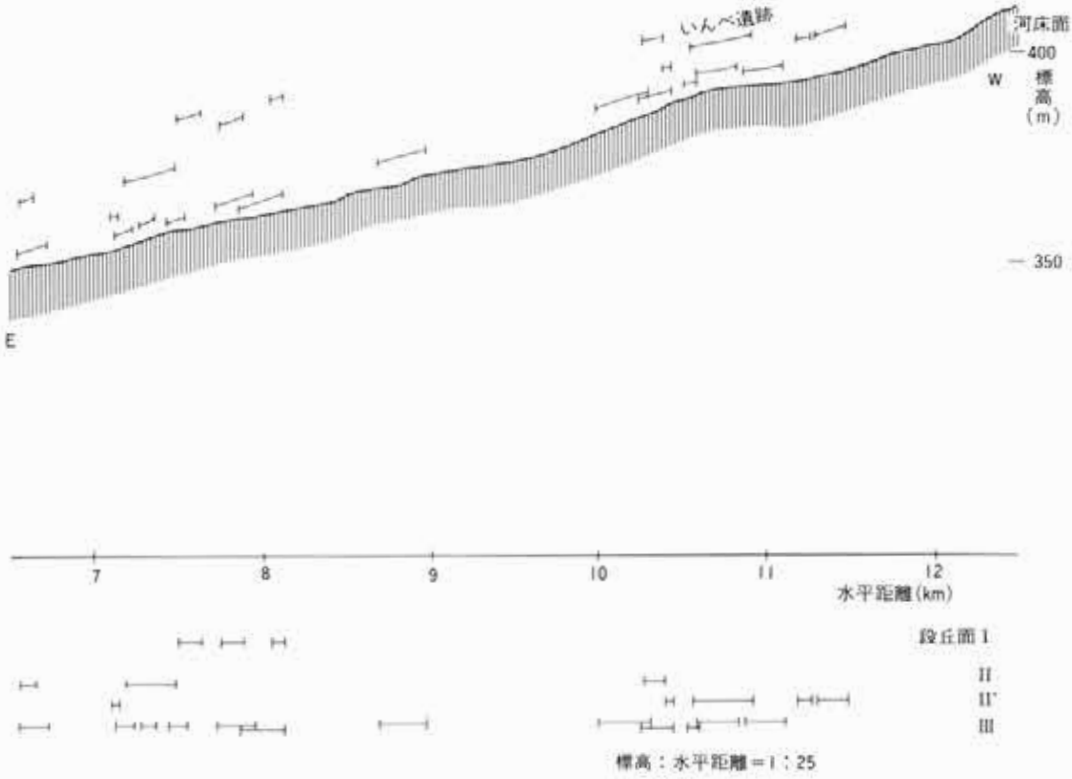
いんべ遺跡近くの川原で5㎝を超す礫種を観察したところ、砂岩が約70%、チャートが約20%、泥岩が10%弱、その他が数%であった。わずかではあるが安山岩の礫も入り、西谷上流部に安山岩の貫入があると考えられる。

1）小起伏侵食面…陸上において、様々な要因によって削り取られ形成された起伏の小さい波状の侵食面をさす。
2）付加体…海溝などにおいて、海洋プレートが沈み込むときに、海洋底にたまっていた堆積物がはぎ取られて陸側へ押しつけられていく。その結果、陸側斜面に付け加えられて積み重なった堆積物。

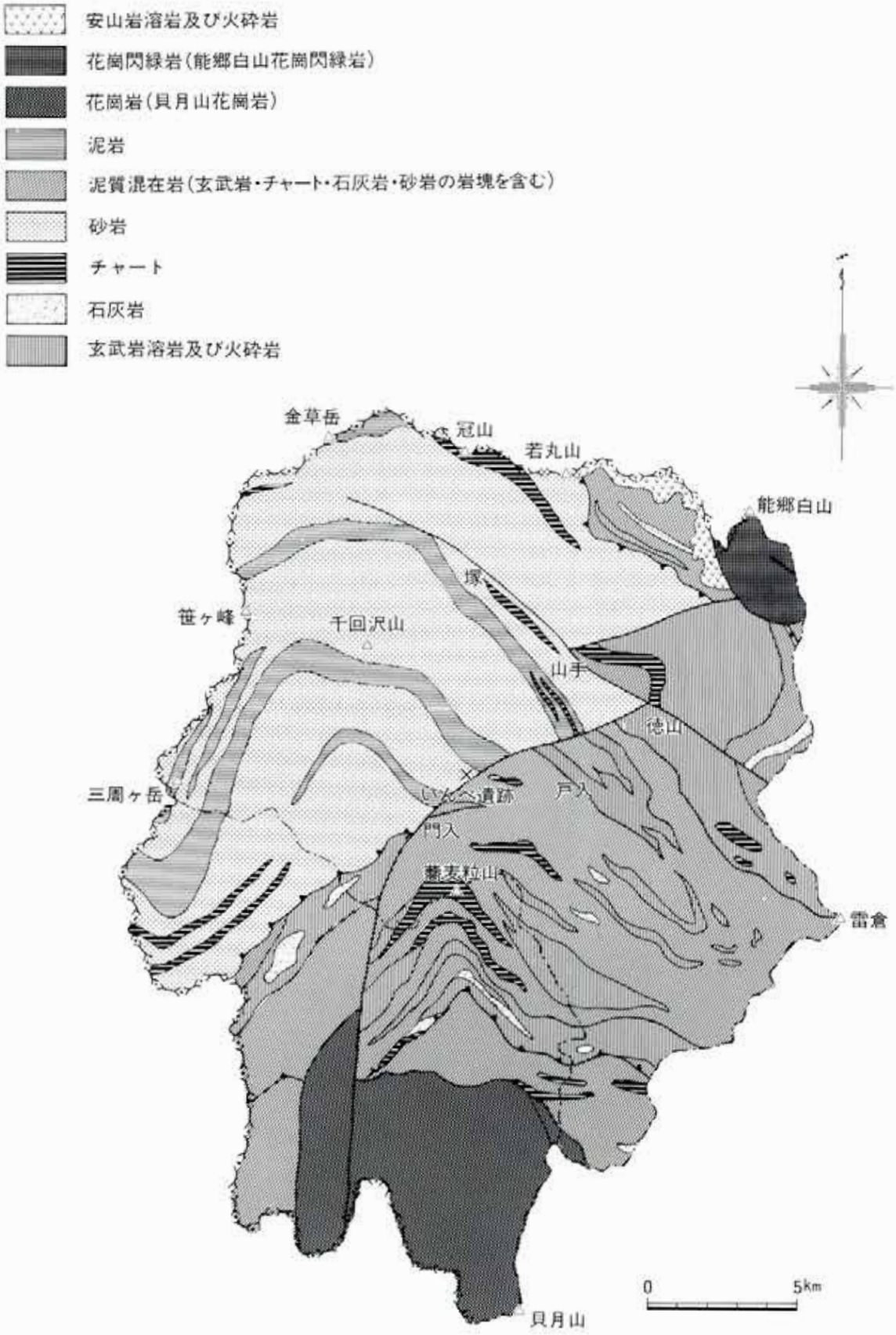
参考文献

徳山村史編集委員会（1973）　『徳山村史』

脇田浩二・原山智・鹿野和彦・三村弘二・坂本亨・広島俊男・駒澤正夫・中島和敏編（1992）20万分の1地質図「岐阜」、地質調査所



第7図　西谷沿いの縦断面投影図(2)



第8図　徳山地域周辺の地質図

通産省工業技術院地質調査所
「1:200,000地質図岐阜」(1992)を一部改変(藤岡比呂志)

第２節　歴史的環境

「いんべ遺跡」は、揖斐郡藤橋村大字門入字立石谷に所在し、揖斐川支流西谷の左岸段丘上に位置する。「戸入村平遺跡」や「はいづめ遺跡」の存在する旧戸入集落と、「門入村平遺跡」の存在する旧門入集落の中間点に位置する。

徳山ダム建設に伴って廃村になった旧徳山村（昭和62年３月31日廃村）には、平成10年11月現在、38ヶ所[1]の遺跡が知られている。このうち、徳山ダム建設事業に伴う水没地区内に所在する遺跡は29ヶ所である。

旧徳山村の遺跡は、すでに大正年間に小川栄一氏によって調査され報告されている。第二次大戦後も小川氏の調査によって報告されたが、５ヶ所の遺跡しか知られていなかった。その後も、小澤一弘氏らによって「塚奥山（宮ヶ原）遺跡」（以下「塚奥山遺跡」とする）の遺物紹介がなされただけであった。ダム建設計画が本格化した頃から、根尾弥七氏（故人）・篠田通弘氏ら地元研究者らが、村内を踏査し、多くの成果を発表した。昭和59年度、岐阜県教育委員会は、先達の成果を踏まえ、徳山ダム建設事業に伴う埋蔵文化財の分布調査を実施し報告した。そして、昭和62年度から岐阜県教育委員会が、平成３年度からは(財)岐阜県文化財保護センターが発掘調査を実施している。ここでは、平成10年11月までの発掘調査や整理作業の結果を中心に、概観を述べることにする。

旧石器時代　徳山地区では、地元研究者らの分布調査によって「塚奥山遺跡」や「小の原遺跡」などの５ヶ所の遺跡から旧石器時代遺跡の可能性が報告された。そして、平成５年度から７年度まで発掘調査を実施した「寺屋敷遺跡」では、姶良火山灰の層を検出し、さらにその下層からはナイフ形石器を含む旧石器集中箇所を確認したことから、徳山地区の歴史が２万年以上前の旧石器時代から始まることが確かめられた。これらの石器の出土状況は撹乱を受けていない極めて良好なものである。また、「上原遺跡」においても平成７年度の調査で、ナイフ形石器が出土している。

縄文時代　縄文時代の遺跡は、現在30ヶ所（第９図、第１表）が知られている。このうち、水没地区内にある遺跡は24ヶ所で、平成９年度までに15ヶ所の調査が終了している。

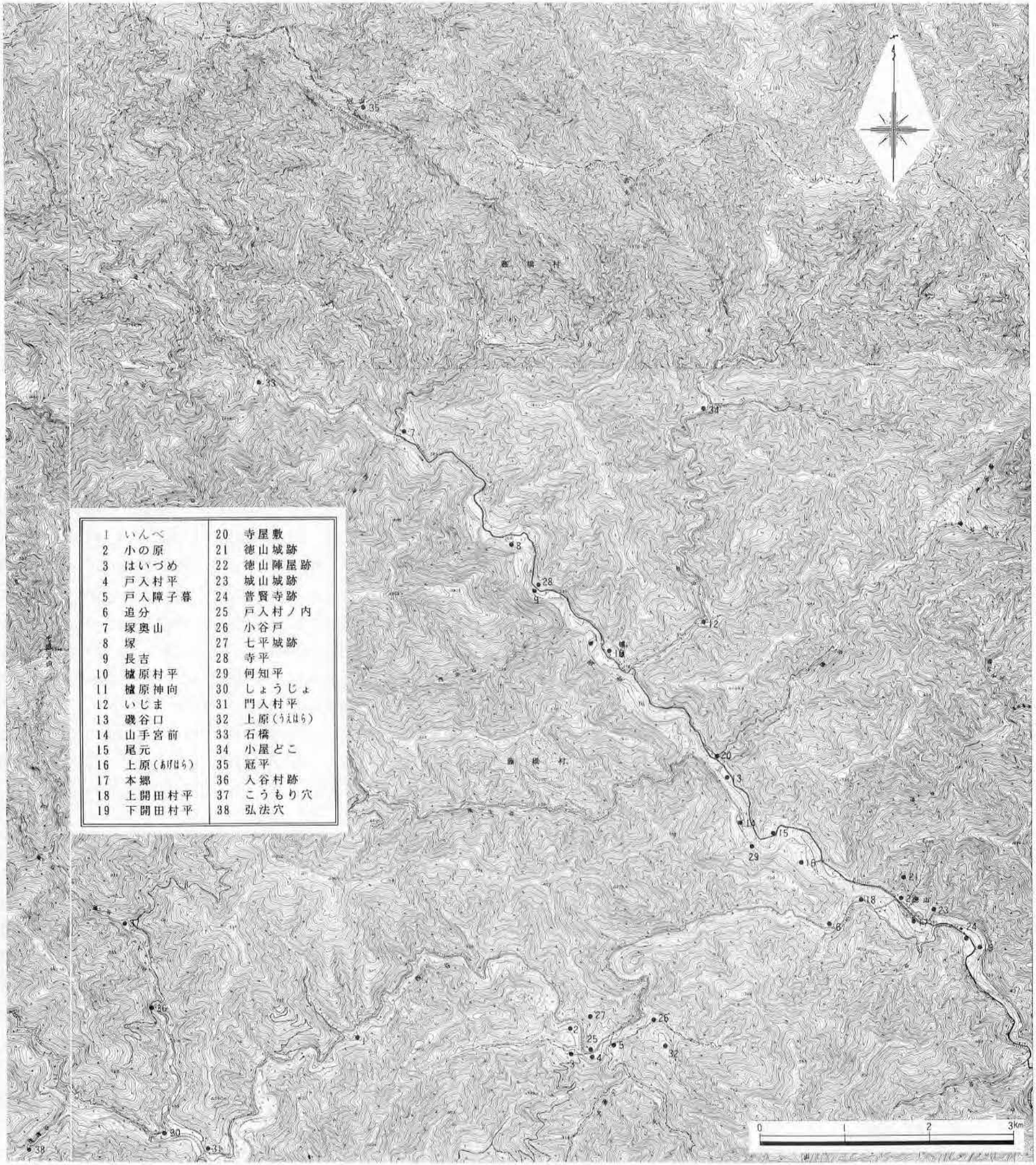
縄文時代草創期の遺跡は、現在のところ有舌尖頭器を検出した「小の原遺跡」だけである。「小の原遺跡」では、多縄文系の表裏縄文土器を検出しており、草創期末の遺跡といえる。現時点において他にはこの時期のものは認められない。今後、調査の進展に伴い、東谷筋でもこの時期の遺跡の増加が期待される。

早期になると徳山地区の各地に遺跡が点在してくる（15ヶ所）。揖斐川本流域の東谷筋では、「塚奥山遺跡」・「長吉遺跡」・「寺屋敷遺跡」・「山手宮前遺跡」・「尾元遺跡」・「上原遺跡」・「上開田村平遺跡」・「下開田村平遺跡」などで遺物が出土している。特に「尾元遺跡」では、付替道路進入路の確認調査時に、大型の異形部分磨製石器が出土した。「下開田村平遺跡」では、押型文土器・茅山下層式土器・上ノ山式土器やこの時期の焼礫集積遺構・配石遺構を検出した。「長吉遺跡」では、第５集で述べているように、少量ながら茅山下層式土器がまとまって出土している。「上開田村平遺跡」では、押型文土器・茅山下層式土器が出土しているほか、炭化材を多量に含む直径４ｍの焼礫集積遺構が検

第1表　旧徳山村地内の旧石器・縄文遺跡一覧

No.	遺跡名	旧石器	縄文時代 草	縄文時代 早	縄文時代 前	縄文時代 中	縄文時代 後	縄文時代 晩	弥生	発掘調査結果 遺物	発掘調査結果 遺構	備考	
1	いんべ			◎	△	◎	○	◎		・早期：押型文土器(穂谷式など)、粕畑式、入海式土器など ・前期：清水ノ上Ⅱ式　・中期：北屋敷Ⅱ式、船元・里木式 ・後期：凹線文系土器など　・晩期：滋賀里Ⅲｂ・稲荷山式、突帯文系土器など ・凹石類、石製品など石器多数出土	・焼礫集積遺構 4基 ・土器棺墓 11基 ・配石土壙 3基等	H2・4年度 発掘調査 報告書刊行	水没地区内に所在し発掘調査を実施する遺跡
2	小の原		○	◎	◎					・草創期：表裏縄文土器など ・早期：押型文土器(穂谷式など)、茅山下層式、粕畑式など ・後期：清水ノ上1・Ⅱ式、北白川下層Ⅰａ～Ⅱｂ式、諸磯式土器など多数出土 ・有舌尖頭器・他各種の石器多数出土	・前期の住居跡 2軒 ・早前期の集石炉13基等	S62・63年度 発掘調査 報告書刊行	
3	はいづめ			△	○	△	△	◎	○	・早期から後期までの土器は少量 ・晩期：西之山式、五貫之森式～下り松式、大洞B-C式～C2式 ・弥生：前期の遠賀川系土器2個体検出 ・石器：異形部分磨製石器、石冠・石刀・石棒など各種石器多数出土	・住居跡 3軒 ・土器棺墓16基等	S61・62年度 発掘調査 報告書刊行	
4	戸入村平			△	△	◎	◎	◎		・船元式、里木Ⅱ式、咲畑様式（中富、神明、島崎Ⅲ）、北白川C式、古府式などの中期土器を中心に晩期までの土器多数 ・晩期土器棺は、稲荷山式～西之山式　・各種の石器多数出土	・住居跡 8軒 ・後晩期の土器棺墓13基 ・配石土壙 1基等	S63・H1年度 発掘調査 報告書刊行	
5	戸入障子暮									・土器小破片出土（時期不明） ・石器少量出土	・未検出	H1年度調査 報告書刊行	
6	追分			○			○	○		・早期・後晩期の縄文土器少量 ・打製石斧多数出土、他の石器は少量	・未検出	H1・2年度 発掘調査 報告書刊行	
7	塚奥山			△	△	◎	◎			・中期・後期を中心に多くの土器・石器類出土	・住居跡、配石遺構 多数検出中	H8年度～ 発掘調査中	
8	塚					◎	◎			・中期から後期までの縄文土器や石器各種多数出土	・住居跡 6軒 ・集石遺構 8基 ・土器埋設遺構 1基等	H2・3年度 発掘調査 報告書刊行	
9	長吉			○	○	△		○		・茅山下層式・樫王式土器など出土 ・石器類少量	・遺跡の中心は滅失 ・土器埋設遺構 1基	H3年度 発掘調査 報告書刊行	
10	櫨原村平				△	○	◎	○		・後期を中心に多くの土器・石器が出土			
11	櫨原神向									・石鏃・打製石斧・スクレイパー少し			
12	いじま					○				・中期の縄文土器出土。打製石斧・スクレイパー他各種石器類出土			
13	磯谷口					◎	△			・中期の船元式土器など出土	・未検出	H2年度 発掘調査	
14	山手宮前			○	○	◎	△	△		・中期後半の土器（船元・里木式、咲畑式など）多数出土 ・切目石錘・打欠石錘などの石器多数出土	・住居跡 8軒 ・土器埋設遺構 1基 ・配石土壙群等	H4・5年度 発掘調査 報告書刊行	
15	尾元			△	△					・石器のみ。異形部分磨製石器			
16	上原 (あげはら)			○	◎	◎	◎	◎	○	・縄文早期～弥生前期(遠賀川式)の土器・石器多数出土	・住居跡 14軒 ・炉跡 9基 ・土器棺墓 7基等	H2～8年 度発掘調査 報告書刊行	
17	本郷									・石皿のみ			
18	上開田村平			△		◎	○			・中期末葉～後期の土器や石器各種出土	・炉跡 4基 ・早期末の焼礫集積遺構 1基等	H4年度 発掘調査 報告書刊行	
19	下開田村平			◎		◎	◎	○		・早期、中期後半～晩期樫王式土器まで出土。石器は多くない ・押型文土器、茅山下層式、上ノ山式土器など	・住居跡 1軒 ・早期末の焼礫集積遺構 3基等	H2年度 発掘調査 報告書刊行	
20	寺屋敷	○		◎						・ナイフ形石器、石核、フレイク、チップ ・茅山下層式、入海Ⅱ式土器	・住居跡 1軒等	H5～7年度 発掘調査	
24	普賢寺跡							△		・晩期後半以降の縄文土器少量。打製石斧などの石器少量	・未検出	H3年度 発掘調査 報告書刊行	
25	戸入村ノ内				△	◎	◎	△		・中期後半～後期の土器や石器多数出土	・住居跡 9軒等	H10年度 発掘調査	
26	小谷戸			△		△				・早期・中期前葉の土器や石器少量出土	・集石遺構 1基	H10年度 発掘調査	
29	何知平									・縄文土器小破片			
30	しょうじょ									石鏃・打製石斧・石匙・スクレイパー			水没地区以外の遺跡
31	門入村平									石鏃少し			
32	上原									縄文土器小片少し。石鏃・石錘少量			
33	石橋					△				縄文土器少し。石鏃・石錘・石匙			
34	小屋どこ			△	○	◎	△	△		中期を中心に早期から晩期の土器・石器類			
35	冠平									石鏃			

＊表内の○・◎・△は、発掘調査で出土した土器の量による。ただし、未調査遺跡については、徳山村の歴史を語る会（1984）、徳山村教育委員会（1986）、事前調査(1994)による。　No.は、第9図の遺跡番号に準ずる。



第9図　旧徳山村地内の遺跡分布図

(建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図「美濃徳山」より)

出されており、炭化材の年代測定の結果、早期末の遺構であることが判明している。「寺屋敷遺跡」では、茅山下層式土器・入海Ⅱ式土器が出土し、「山手宮前遺跡」では、高山寺式土器が出土した。さらに、「上原遺跡」においても押型文土器が出土し、特に、アカホヤ火山灰層の下層から高山寺式土器がまとまって出土している。なお、「山手宮前遺跡」・「上原遺跡」からは、型式学的にみて、早期に下ると考えられる有舌尖頭器各1点が出土している。西谷筋では、「いんべ遺跡」・「はいづめ遺跡」・「小の原遺跡」・「戸入村平遺跡」・「小谷戸遺跡」・「追分遺跡」で遺物が出土している。「小の原遺跡」については、既刊の第2集で述べているように、早期の集石炉や石器を大量に検出している。また、土器では早期の各小時期のものが出土しており、山形や楕円の押型文土器をはじめとして、関東系の田戸下層式・田戸上層式・野島式・鵜ヶ島台式・茅山下層式土器や、東海系の八ッ崎Ⅰ式・粕畑式・上ノ山式・入海式土器などが出土している。「いんべ遺跡」では、第5章で述べるように、穂谷式を中心とする押型文土器をはじめとして早期後半の茅山下層式・八ッ崎Ⅰ式・粕畑式・上ノ山式・入海式・石山式・塩屋下層式・天神山式・塩屋上層式土器等や焼礫集積遺構を検出した。また、平成10年度に調査した「小谷戸遺跡」でも焼礫集積遺構1基を検出し、押型文土器が出土している。「はいづめ遺跡」・「戸入村平遺跡」・「追分遺跡」でも少量ながら押型文土器や繊維土器が出土している。

前期では、東谷・西谷両筋に12ヶ所の遺跡が分布する。東谷筋では、「櫨原村平遺跡」・「尾元遺跡」・「山手宮前遺跡」・「上原遺跡」・「小屋どこ遺跡」・「塚奥山遺跡」などが知られている。特に、「上原遺跡」では・玦状耳飾や、北白川下層式～大歳山式土器、十三菩提式土器が出土し、前期後葉から末葉にかけての住居跡10軒を検出した。その結果、「上原遺跡」には前期後葉から末葉を中心とした集落が存在したことが判明した。徳山地区でこの時期の集落遺跡の検出は初めてのことである。また、多数の切目石錘も出土し、切目石錘の初現が前期後葉から末葉までさかのぼる可能性が出てきた。なお「山手宮前遺跡」や「塚奥山遺跡」からも同時期の土器が出土している。西谷筋の「小の原遺跡」では、住居跡や集石炉を検出し、前期全般にわたる大量の遺物が出土している。土器を見ると、前期前半では東海系の清水ノ上Ⅰ・Ⅱ式土器が主体をなす。後半では関西系の北白川下層式土器やこの影響を強く受けた在地系のものが主体となり、関東系の諸磯式土器は列孔文土器が主で他のものは非常に少ない。「いんべ遺跡」では、清水ノ上Ⅱ式土器と少量ながら諸磯式土器を確認した。他に「はいづめ遺跡」で若干の遺物が出土している。

中期になると遺跡数が17ヶ所に増大する。東谷筋では、「塚奥山遺跡」や「上原遺跡」などのように面積的に広く、大集落が営まれていた可能性の高い遺跡がある。「上原遺跡」では、住居跡を検出しており、土器・石器も大量に出土している。また、「山手宮前遺跡」でも中期後葉を中心とした住居跡を8軒検出し、このうちの2軒は埋甕を伴っていた。このような集落の営まれていた遺跡が存在する一方で、「下開田村平遺跡」や「磯谷口遺跡」のような小規模な遺跡も散在する。「下開田村平遺跡」では住居跡を1軒検出したが、遺物量は少なく遺跡の範囲も狭い。「磯谷口遺跡」も遺跡の範囲は狭く、遺物は出土したが、遺構は検出できなかった。また「塚遺跡」では、中期後葉の住居跡・配石遺構のほか、土器・石器なども大量に出土した。「上開田村平遺跡」でも中期末葉の土器がまとまって出土し、中期末から後期初頭にかけてと考えられる炉跡4基と埋設土器2基を検出している。「櫨原村平遺跡」・「石橋遺跡」・「小屋どこ遺跡」なども表採資料からこの時期の遺跡と思われる。西

谷筋では、「戸入村平遺跡」が中心であり中期後半の住居跡を8軒検出した。中でも第4号住居跡からは、咲畑式・神明式土器が多数出土し注目を集めている。土器を見ると東海系・関東系・信州系・関西系・北陸系のものが混在する。平成10年度に調査した「戸入村ノ内遺跡」でも、中期後半の住居跡9軒を検出し、中期後半を中心とした土器多数が出土した。[3] また、「いんべ遺跡」では、中期前半の北屋敷Ⅱ式土器や、中期後葉の関西系の船元Ⅲ・Ⅳ式、里木Ⅱ式土器が出土している。このように、中期になると遺跡が増大するが中期後葉の遺跡が多い。

後期になると一般的に遺跡数は減少する傾向であるといわれているが、徳山地区では後期に属する遺跡は14ヶ所確認されており、この傾向は認められないと思われる。東谷筋で発掘調査によって確認されたのは、「塚奥山遺跡」・「塚遺跡」・「山手宮前遺跡」・「上原遺跡」・「上開田村平遺跡」・「下開田村平遺跡」である。「塚遺跡」・「上開田村平遺跡」・「下開田村平遺跡」では、後期前半の磨消縄文系土器と縁帯文系土器が多数出土している。「上原遺跡」では、炉跡を検出し、土器も多数出土している。また、平成8年度から発掘調査を実施している「塚奥山遺跡」においても後期後葉の土器がまとまって出土している。表採資料では、「櫨原村平遺跡」・「小屋どこ遺跡」などがある。また、「山手宮前遺跡」でも少量の土器が出土している。西谷筋では、「いんべ遺跡」・「はいづめ遺跡」・「戸入村平遺跡」・「戸入村ノ内遺跡」・「追分遺跡」がある。「戸入村平遺跡」では、土器棺墓を4基検出した。土器棺には、中津式・福田KⅡ式の土器が用いられていた。また、関東系や東海系・北陸系の土器が出土している。「いんべ遺跡」でも第5章で述べるように、後期後葉の土器が比較的まとまって出土しており、後期前葉・中葉の土器もみられた。

晩期では、東谷・西谷両筋で12ヶ所の遺跡が確認されている。しかし、東谷筋では、遺跡の規模が縮小すると思われる。この東谷筋では、「櫨原村平遺跡」・「上原遺跡」・「小屋どこ遺跡」・「長吉遺跡」・「下開田村平遺跡」・「山手宮前遺跡」がある。「上原遺跡」では、土器棺墓6基を検出した。「長吉遺跡」では、晩期後半の可能性が高い土器埋設遺構1基を検出した。西谷筋には「はいづめ遺跡」14基、「戸入村平遺跡」7基、「いんべ遺跡」11基と大量にこの時期の土器棺墓を検出した。「はいづめ遺跡」で検出した土器棺墓は、晩期後半の五貫森式期から下り松式期のものと考えられる。また、大洞式系土器なども出土している。「戸入村平遺跡」で検出した土器棺墓は、東海地方では、稲荷山式から西之山式、畿内では、滋賀里Ⅲb式に併行する資料と考えられる。「いんべ遺跡」で検出した土器棺墓も稲荷山式・滋賀里Ⅲb式と考えられる（第4・5章）。しかしながら、「はいづめ遺跡」で3軒の住居跡を検出した以外に他の遺跡では現在のところ住居跡は検出していない。なお、「追分遺跡」でも少量の土器が出土している。

弥生時代　弥生時代の遺物を出土している遺跡としては、現在のところ「はいづめ遺跡」と「上原遺跡」をあげることができる。「はいづめ遺跡」では、前期の遠賀川式系土器が2個体とその他のものが出土している。遠賀川式系土器は土器棺墓として使用されていた。また、「上原遺跡」でも数点の遠賀川式系土器片及び中期の朝日式土器が出土している。これ以外には「上原遺跡」・「下開田村平遺跡」・「山手宮前遺跡」でも、晩期末葉から弥生時代前期にかけてと考えられる樫王式土器が出土しているが、この時代の徳山地区の様相については資料が少ないため、今後の調査の進展によって明らかにされることを期待したい。

古　代　古代に属する遺跡は、現在のところ7ヶ所である。そのうち「寺屋敷遺跡」では、平安時代の礎石建物跡が検出され、平安時代後期の灰釉陶器や鉄製の角釘が多数出土した。また、「磯谷口遺跡」・「山手宮前遺跡」・「上原遺跡」・「下開田村平遺跡」・「上開田村平遺跡」・「追分遺跡」・「いんべ遺跡」でも須恵器や灰釉陶器が出土し、「石橋遺跡」でも表採されている。「磯谷口遺跡」については、「寺屋敷遺跡」との関連が注目され、土坑より黒色土器が1点出土している。「上原遺跡」では、平安時代の掘立柱建物跡や奈良時代の土師器を伴う礫集積遺構が検出され、灰釉陶器を伴う土壙墓や岐阜県内でも類例の少ない中国産の越州窯青磁椀も出土している。「下開田村平遺跡」・「上開田村平遺跡」・「追分遺跡」・「いんべ遺跡」でも若干の遺物が出土している。少しずつ明らかにされてはいるものの、この時代の状況は現在のところはっきりしていない。

中世以降　中世以降の遺跡としては、中世墓の「戸入障子暮遺跡」・「徳山城跡」・「城山城跡」・「徳山陣屋跡」などがある。「戸入障子暮遺跡」では既刊の第2集で述べているように、蔵骨器として使われた鎌倉時代の古瀬戸瓶子が出土した。この遺跡の対岸に位置する「戸入村平遺跡」の発掘調査では、宋銭や明銭、古瀬戸後期以降の陶磁器類が出土し、「戸入村ノ内遺跡」でも、銭貨や陶磁器類が出土している。このほか「下開田村平遺跡」では、この時期の遺構は検出できなかったが山茶碗や陶磁

第2表　旧徳山村地内の旧石器・縄文以外の遺跡一覧

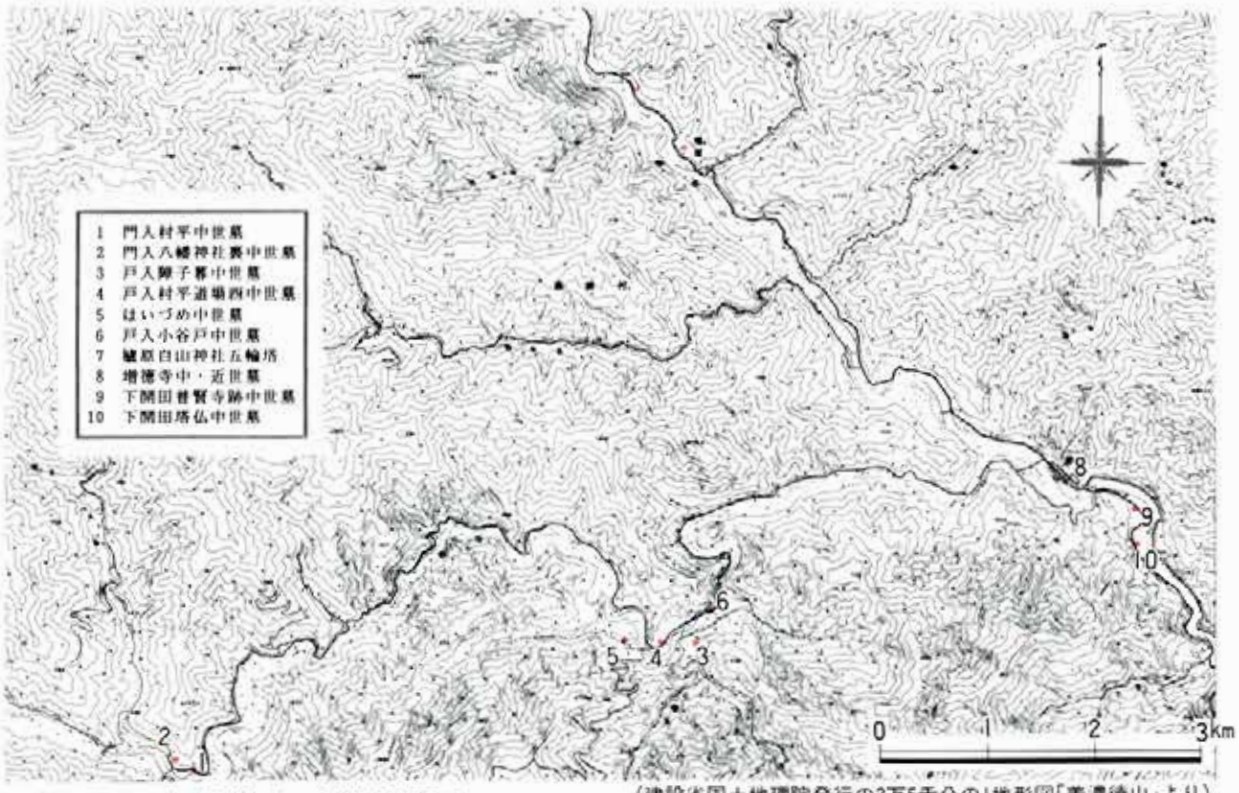
No.	遺跡名	古代	中世	近世	不明	遺構	遺物	備考	
4	戸入村平		◎	◎			天目茶碗・銭貨・陶磁器類他	S63・H1年度発掘調査	水没地区内に所在し発掘調査を実施する遺跡
5	戸入障子暮		◎	◎		中世墓	古瀬戸瓶子・近世陶器他	H1年度発掘調査	
6	追分	△		△			須恵器・近世陶器他	H1・2年度発掘調査	
7	塚奥山			○				H8年度～発掘調査中	
8	塚		○	○			中近世陶磁器・銭貨	H2・3年度発掘調査	
10	櫨原村平			○					
13	磯谷口	◎					須恵器・灰釉陶器他	H2年度発掘調査	
14	山手宮前		◎	◎		掘立柱建物跡	山茶碗・中近世陶磁器・銭貨	H4・5年度発掘調査	
16	上原	◎	○	○		掘立柱建物跡・礫集積遺構	須恵器・灰釉陶器など検出	H2～8年度発掘調査	
17	本郷		○	○					
18	上開田村平		◎	◎		中世墓・廟跡	山茶碗・中近世陶磁器・銭貨・和鏡	H4年度発掘調査	
19	下開田村平	△	△	○			須恵器・山茶碗・中近世陶磁器	H2年度発掘調査	
20	寺屋敷	◎				礎石建物跡	灰釉陶器・鉄製角釘	H5～7年度発掘調査	
21	徳山城跡		○			中世城館跡			
22	徳山陣屋跡		○	○		近世陣屋跡			
23	城山城跡		○			中世城館跡			
24	普賢寺跡		△			伝中世寺院跡・遺構検出できず	寺院跡に伴う遺物検出できず	H3年度発掘調査	
25	戸入村ノ内		△	○			銭貨・陶磁器類他	H10年度発掘調査	
27	七平城跡		○			中世城館跡・調査区では遺構検出できず。		H10年度発掘調査	
28	寺平	△					土師器・灰釉陶器		
31	門入村平			○		集落跡			水没地区以外の遺跡
33	石橋	○							
36	入谷村跡			○		集落跡			
37	こうもり穴				○	水銀採掘鉱山跡			
38	弘法穴				○	水銀採掘鉱山跡			

・表内の○・◎・△は、発掘調査で出土した土器の量による。ただし、未調査遺跡については、徳山村の歴史を語る会（1984）、徳山村教育委員会（1986）、事前調査(1994)による。　No.は、第9図の遺跡番号に準ずる。

第３表　旧徳山村地内の中世墓一覧

No.	名　　称	旧　所　在　地	備　　考
1	門入村平中世墓	揖斐郡藤橋村大字門入 字門入2071-1	門入集落の入口の墓域の一角に２群からなる五輪塔４基が建つ。１基は総高30cmの一石五輪塔。１基は地輪・水輪・火輪・風輪・空輪ともよく残る総高39cmの五輪塔。１基は台石に火輪がのるだけのもの。１基は地輪が失われているが、自然石の台石に水輪・火輪・風輪・空輪が残るもの。
2	門入八幡神社裏中世墓	〃　藤橋村大字門入 字門入2166-1	八幡神社境内地の本殿裏の一段高くなったところに前列に五輪塔２基、後列に宝篋印塔３基が建つ。宝篋印塔は右端のものが宝珠と請花が欠失する他はほぼ完全に残っており、姿体は秀美である。
3	戸入障子暮中世墓	〃　藤橋村大字戸入 字障子暮552-2	宝篋印塔１基、五輪塔２基および自然石を利用した墓石からなる。宝篋印塔の前庭部に頸部を打ち欠いた古瀬戸瓶子が、蔵骨器として転用され埋納されている。宝篋印塔は露盤と塔身のみが残る。五輪塔は一石五輪塔であり、全高42cmを測る。
4	戸入村平道場西中世墓	〃　藤橋村大字戸入 字村の内163-13	宝篋印塔１基、五輪塔１基、道祖神１基からなる。傍らの自然石に「(表銘)当区歴代道場坊之碑(裏銘)昭和二十八年三月二十八日喜寿記念広瀬新次郎」と刻された碑が建ち、これら中世墓の基壇もこの時に再整備されたものとみられる。宝篋印塔は相輪部が残り、塔身・基礎部は五輪塔の転用である。五輪塔は各輪ともよく残り、総高55cmを測る。
5	はいづめ中世墓	〃　藤橋村大字戸入 字ハイヅメ715	宝篋印塔１基が祀られる。宝珠・露盤・塔身・基礎が残り、現存高55cmを測る。露盤の馬耳形突起が直立し、古い様式を留めている。
6	戸入小谷戸中世墓	〃　藤橋村大字戸入 字小谷戸467-89	宝篋印塔１基が祀られる。宝珠・塔身・基礎が残り、現存高38.5cmを測る。宝珠が塔身上に逆置されている。
7	櫨原白山神社五輪塔	〃　藤橋村大字櫨原 字村平230-1 境内地の内	水輪・火輪のみ残る。傍らに自然石に陰刻された「奉納仁田四郎由定烏山神社五月廿八日ハセ原村中」の碑が建つ（年号不詳）。
8	増徳寺中・近世墓	〃　藤橋村大字徳山 字村平360　墓地の内	徳山村内で唯一の宗教法人である曹洞宗増徳寺の境内に墓域が設けられ、中世以降の墓碑が建っている。
9	下開田普賢寺跡中世墓	〃　藤橋村大字開田 字村ノ内145、146	中世の寺跡と伝えている普賢寺跡の一角に、近世以降の墓碑に混じって３基の五輪塔が建っていたと伝えるが、分布調査においては確認されなかった。
10	下開田塔仏中世墓	〃　藤橋村大字開田 字北野64-1	かつて宝篋印塔が建っていたが、昭和46年に盗難にあい、今日では所在不明である。

（『揖斐川上流域徳山ダム・杉原ダム水没地区埋蔵文化財分布調査報告書』昭和60年３月　岐阜県教育委員会より）



第10図　旧徳山村地内の中世墓分布図

（建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図「美濃徳山」より）

器類の小破片が出土した。「普賢寺跡」では、寺跡を検出することはできなかったが古瀬戸、瀬戸美濃系陶器が若干出土している。また、「上開田村平遺跡」では、中世墓・厠跡が検出され、和鏡・さし銭（宋銭他）が出土している。「山手宮前遺跡」でも掘立柱建物跡群が検出され、さし銭（宋銭他）も出土している。以上のように、この時代についての多くの情報を提供した。なお、「上原遺跡」でも山茶碗が出土している。

1）戸入障子暮遺跡は・改訂版・岐阜県遺跡地図・（平成2年3月　岐阜県教育委員会）では戸入障子暮中世墓（中世墓）と障子暮遺跡（縄文時代遺物散布地）の2遺跡として登録されている。　そのため遺跡数は39ヶ所になる。

2）H11年度「戸入村ノ内遺跡」は、「戸入村平遺跡」と同遺跡として認定される。

文献等より見る古代中近世の徳山

律令制下の西濃地方北部は、揖斐川を境として右岸を池田郡、左岸を大野郡に区分し、徳山の地も東西に二分されている。「徳山」関係の史料は、江戸時代以降のものがほとんどである。近代以前の集落の地名として、揖斐川上流東谷左岸に「塚」・「櫨原」・「徳山（本郷）」が、東谷右岸に「山手」・「池田（上開田）」・「漆原・志津原（下開田）」、西谷に「門入」・「戸入」が挙げられている。

徳山の古代については、史料がないため不明な部分が多い。「徳山」関係の地名が史料に現れるのは、『美濃神名帳』（天慶～天徳［947～957］年間の頃に修撰された官簿）の「山手」集落の加茂神社の記載が最初である。『揖斐郡志』・『徳山村史』では、「上開田（池田）」の六社神社の創祀は保元元(1156)年としている。

平安時代のこの地方の歴史を解く鍵の一つに、白山信仰がある。この信仰は岐阜・石川県境の白山を中心に、僧泰澄によって開かれた山岳宗教である。平安末期に成立した『白山之記』には天長9(832)年に美濃・加賀・越前に信仰の三馬場を開いたと記している。『日本三代実録』には元慶8(884)年の僧宗叡による白山修行の記事があり、平安初期に白山がすでに山岳修験の霊場として著名であったことを示している。越美山地で最も標高の高い能郷白山は、福井県大野市・岐阜県根尾村・藤橋村（徳山）の境界に位置し、白山を中心とする広域な山岳修験の霊場の一つと位置付けられていたと考えられる。僧泰澄の開山と伝える能郷白山神社は、根尾村能郷にあり、能郷白山信仰の中心馬場として栄えた。越前馬場の福井県勝山市の白山平泉寺への道は、温見峠（能郷～温見）を越えて通じている。能郷と徳山は同じ大野郡に含まれ、江戸時代にはともに旗本徳山氏の領地であり、歴史的に密接な関係を持つ両地の往来は、能郷白山信仰が展開された時代にも活発に行われていたと考えられる。

「塚」・「本郷」・「櫨原」にあった白山神社の神像には、いずれも興国元(1340)年の銘文があり、能郷白山信仰が南北朝時代にも徳山に浸透していたと考えられる。平成4年度に発掘調査された「上開田村平遺跡」から室町期の鋳造と考えられる和鏡（松鶴鏡）一面と、「さし銭」の状態で唐代の「開元通寶」9枚・宋銭21種の合わせて87枚が出土した。また、「山手宮前遺跡」でも「開元通寶」3

枚・宋銭22種・明銭1種の合わせて81枚の「さし銭」が出土している。徳山でこの信仰がどのように展開していたかは不明であるが、能郷白山信仰との関連も推測される。『徳山村史』によれば、「下開田」集落にあった普賢寺は真言宗の寺院と伝え、山岳信仰との結びつきが考えられる。「普賢寺跡」の発掘調査は平成3年度に完了しているが、信仰に関連した遺構・遺物については確認されていない。徳山・根尾の地が、南北朝抗争の中で南朝方の拠点の一つであったことは、『太平記』等に記載されている。「櫨原」には新田義貞の櫨原死亡説伝承が残されている。越前で再挙を計った義貞が、越前藤島での敗北後、徳山の地で没したという。勿論、この説は伝承の域を出ないが、この時代に美濃［杉ノ谷］峠（徳山～福井県大野市）・冠峠（徳山～福井県池田町）・檜尾峠（徳山～福井県池田町）・高倉峠（徳山～福井県今庄町）等を経由した徳山と越前の往来が想定できる。

近世における徳山と隣国との往来は、東谷から越前への街道の他、西谷の「門入」からホハレ峠を越え、坂内村に入り、八草峠を経て近江の木之本へ通ずる街道がある。追分遺跡では、少量の須恵器や中近世の陶片が出土した。西谷下流の「追分」は、東谷右岸を遡り「山手」・「塚」から越前への街道と、「上開田」・「徳山（本郷）」・馬坂峠を経て「能郷」への街道の分岐点にあたる。近江・越前・能郷へ向かうこの地は、その出土遺物等から中世以前よりの往来の可能性を示している。西谷の集落形成は、14～15世紀頃と考えられる。「上開田（池田）」の六社神社の鰐口には、応永13(1406)年銘が刻まれており、「門入」の八幡神社の鰐口には、文明8(1476)年銘が刻まれている。昭和63・平成元年度の「戸入村平遺跡」の発掘調査では、古瀬戸の陶片と宋・明銭等が出土している。『揖斐郡志』には、永享3(1431)年の年貢、永享6(1434)年の畑作・土地所有・麻作・狩猟等に関する史料が記載され、「はしはら・やまて・いそたに・さもと・とにゅう・かんたに・つか」などの地名も確認できる。

古代・中世に栄えた白山信仰は、蓮如を中心とした浄土真宗本願寺派の布教活動の前に衰退していく。徳山へも越前との各峠道を通り、浄土真宗の勢力が浸透してくる。中世以降、徳山では殆どの住人が浄土真宗に転宗し、在地の人々の手で作られた道場を中心に展開していく。近世以降各道場は、越前にある誠照寺派西福寺、根尾村にある誠照寺派専念寺・西本願寺派西光寺に属している。

戦国時代以降、土着の豪族として「徳山」を支配していたのは、鎌倉・室町時代に美濃国守護の土岐氏の支族、徳山氏である。『徳山村史』によれば、徳山氏が活躍し始めたのは、室町時代の応永年間(1394～1427)以降としている。徳山氏の家系図によると、永享10(1438)年頃に、本郷の徳山氏の菩提寺である増徳寺（曹洞宗）の記載があり、徳山氏の出現とほぼ一致する。戦国時代の徳山氏は、美濃国に在住しながらその地理的環境から越前との結びつきも強く、東海地方の勢力に左右されない行動をとっている。戦国期の道三・信長の頃でもこの様相の変化はない。

江戸時代、徳山氏は徳山の領地（約800石）が安堵されたのに加え、各務郡更木領（約4,300石）を新たに封ぜられ、5,000石の旗本となった。これに伴って、徳山の地には徳山陣屋が設けられ、大政奉還に至るまで代官と在地の庄屋によりその統治が行われている。なお、西谷に関する最古の記録として、「戸入」の六社神社に寛文5(1665)年の造立を記す棟札がある。

江戸時代初期の古文書に現れる徳山氏領の村名として、徳山の「徳山（本郷）」・「山手」・「櫨原」・「塚」・「漆原・志津原（下開田）」・「池田（上開田）」・「戸入」・「門入」の8カ所と根尾の「能郷」名が記録されている。

（第10集の「歴史的環境」を加筆・修正）

第2章　発掘調査の経過

第1節　発掘調査に至るまでの経緯

徳山ダム建設は、昭和32年(1957)、電源開発株式会社が発電を主目的に建設計画を発表した。その後、伊勢湾台風をはじめとして相次ぐ下流域の大出水により、昭和46年(1971)からは、建設省が引き継いで調査を行ってきた。そして、昭和48年(1973)3月、木曽川水系の水資源開発基本計画の変更により、水資源開発公団が事業を実施することになった。

徳山ダムは流水の正常な機能の維持、水道水および工業用水の供給、ならびに発電を目的として建設する多目的ダムで、ロックフィル形式である。貯水容量は6億6千万㎥、堤高は161mである。ダム建設により、洪水満水位水没線は海抜401mとなり、旧徳山村のほぼ全戸が水没（門入地区だけが水没からまぬがれる）し、旧徳山村内の埋蔵文化財の殆どが湖底に沈むことになる。

このため、昭和58年(1983)10月12日に、水資源開発公団徳山ダム建設所長より遺跡の分布調査の依頼が岐阜県教育委員会にあった。これを受けて、岐阜県教育委員会は、昭和59年(1984)10月2日から11月17日にかけて、国庫補助事業として分布調査を実施した。そして、昭和60年(1985)3月に調査に基づき、『揖斐川上流域徳山ダム・杉原ダム水没地区埋蔵文化財分布調査報告書』を発刊した。

さらに、昭和60年5月9日、水資源開発公団徳山ダム建設所において、徳山ダム水没地区内埋蔵文化財発掘調査計画のための打ち合わせを行った。昭和60年夏から秋にかけて、発掘調査計画策定のために、岐阜県文化財保護審議会委員（当時信州大学教授）の大参義一氏の指導のもとに、数回にわたる現地調査を実施した。そして、調査の結果に基づき、昭和61年(1986)3月17日、徳山ダム水没地区埋蔵文化財発掘調査計画書を水資源開発公団に提出した。

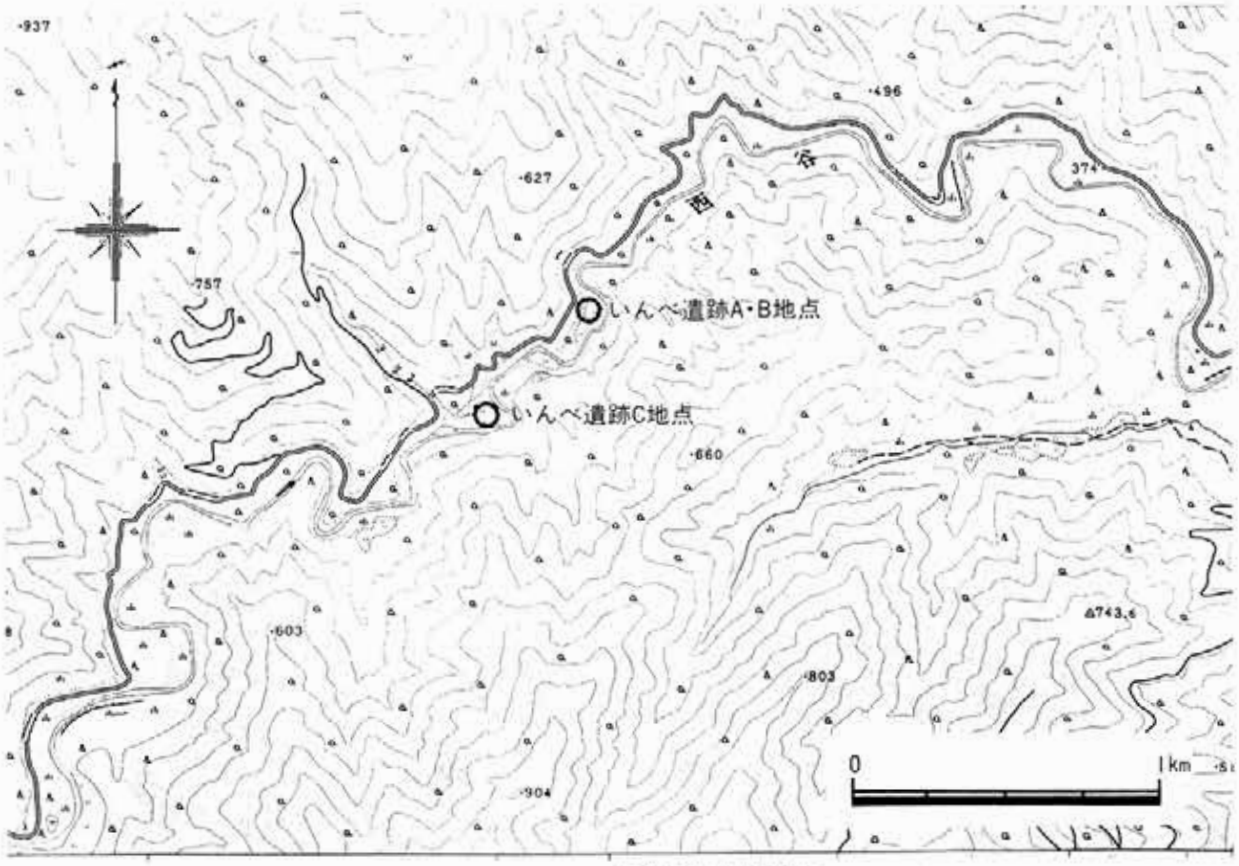
昭和61年4月7日、水資源開発公団から岐阜県に対し、昭和61年度の発掘調査実施の依頼があり、岐阜県教育委員会は、「はいづめ遺跡」の本発掘調査を行った。

昭和62年(1987)3月27日、計画書の一部手直しを行い、水資源開発公団と岐阜県の間で「徳山ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査に関する協定」を締結した。岐阜県教育委員会では、この協定書に基づき、昭和62年度から発掘調査を実施することになった。

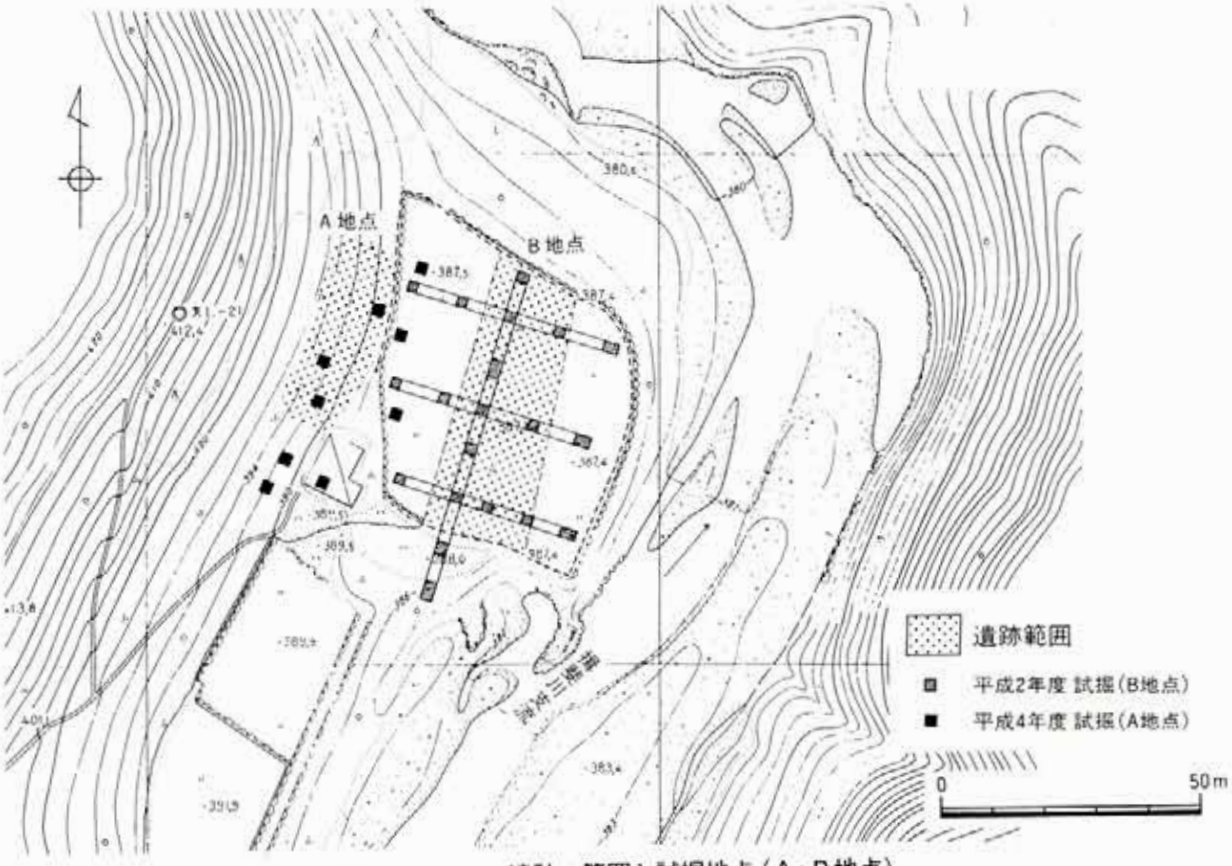
「いんべ遺跡」は、先ず、平成2年度にB・C地点1,858㎡の発掘調査を行った。

その後、平成3年(1991)4月1日、財団法人岐阜県文化財保護センターが発足し、水資源開発公団から岐阜県が受託した発掘調査は、財団法人岐阜県文化財保護センターが実施することになった。平成4年度(1992)に「いんべ遺跡」A地点48㎡の発掘調査を実施した。

（第8集に加筆）



第11図　いんべ遺跡の位置（建設省国土地理院発行の2万5千分の1地形図「美濃徳山」より）



第12図　いんべ遺跡の範囲と試掘地点（A・B地点）

第2節　発掘調査の方法と経過

「いんべ遺跡」は、旧戸入集落と旧門入集落のほぼ中間地点にあたる、揖斐川支流西谷の左岸段丘上に立地する。いんべ谷の下に広がるC地点と、約450m下流のA・B地点とがある。

最も広いC地点で石器が散乱していることは以前から知られており、多数の石鏃が採集されていたという。

最も広いC地点では、グリッドを設定し、トレンチ調査と全面調査を併用した。グリッドは、地形に合わせて基線を設定し、4m単位とした。上流・山側にあたる南西端を基点に、南北方向に南から1．2．3……とアラビア数字を、東西方向に東からp．q．r……x．y．z．A．B……とアルファベットの小文字・大文字を順次付し、グリッドの北東コーナー杭にグリッド名を記した（第13図）。なお、南北方向の基線は、上の段を基線とした場合に、中の段では、1.0m西へ、下の段では、0.5m東へずれている。

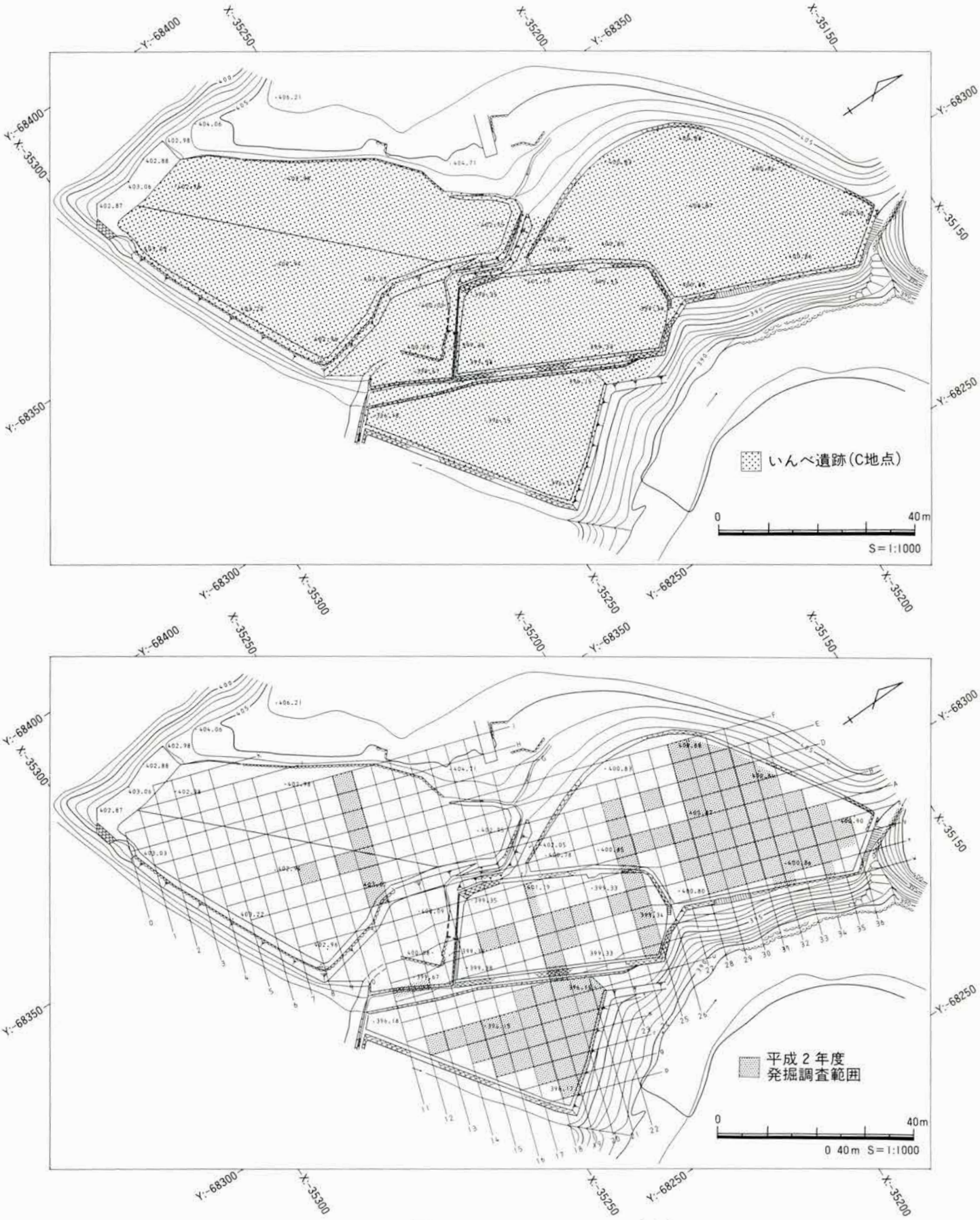
掘削はすべて人力で実施し、表土除去などに一部重機を使用した。遺物の取り上げは、出土したグリッドと層位を記録しながら取り上げた。土層セクション図のほか、遺構の平面図・断面図などは、必要に応じて実測し、写真の記録を行った。発掘調査区全体の遺構プラン図の作成は平板測量で行った。一方、下流側のB地点では、地形に合わせて設定した20カ所のトレンチ（2m×2m程　90㎡）を掘削し、平成4年度に調査したB地点に隣接するA地点では、9カ所のトレンチ（2m×2m程48㎡）を掘削した（第12図）。

次に発掘調査経過について簡単に述べておく。

平成2年度は、B地点及びC地点の調査を6月5日より12月14日迄行った。C地点の調査は上の段より着手し、中の段、下の段へと調査を進めていき、1,768㎡を掘削した。上の段では中期の土器、早期の土器が出土し、早期の焼礫集積遺構を検出した。下の段では、後期後葉から晩期の土器が出土し、晩期の土器棺墓（埋設土器）多数を検出した。中の段では、トレンチ調査を実施したが、遺物の出土はほとんどなく、遺構の検出もなかった。B地点の方は、遺物の出土や遺構の検出はなかった。

平成4年度は、A地点の調査を行った。調査は同じ西谷の上開田村平遺跡の調査を行う中で、草刈り後7月7日から9日の3日間、8～16名の作業員によるトレンチ調査を行った。しかしながらB地点同様にA地点でも遺構の検出や遺物の出土はみられず、遺物包含層は存在しないと判断した。

本報告書では、いんべ遺跡C地点の調査結果について、以下報告するものである。



第13図　いんべ遺跡の範囲と発掘調査範囲（Ｃ地点）

第3章　層　序

本遺跡は西谷を流れる揖斐川支流の左岸段丘上に立地し、近現代の開田により上中下3段の水田として利用されていた。ここでは、遺物の出土した上の段と下の段の層序について述べる。

調査に伴い、上の段ではBおよび29・32列、下の段ではUおよび19列のセクションベルトを残し、土層断面を記録した。各セクションベルトの土層断面より代表的な部分を図示した（第14図）ので、これにより本遺跡の土層堆積について述べていく。

(1)　上の段の層序

第Ⅰ層　表土（耕作土）。厚さは10～20cmである。

第Ⅰ′層　水田耕作に伴う敷土で鉄分の沈着がみられる。

第Ⅱ層　開田の際の盛土で、5～10cm大の角礫を含む。段丘端部（川側）ほど厚く堆積し、この中には中期や早期の土器も多数混入していた。元はより高い山側にあったものが、削平され、より低い川側に盛られたと考えられる。

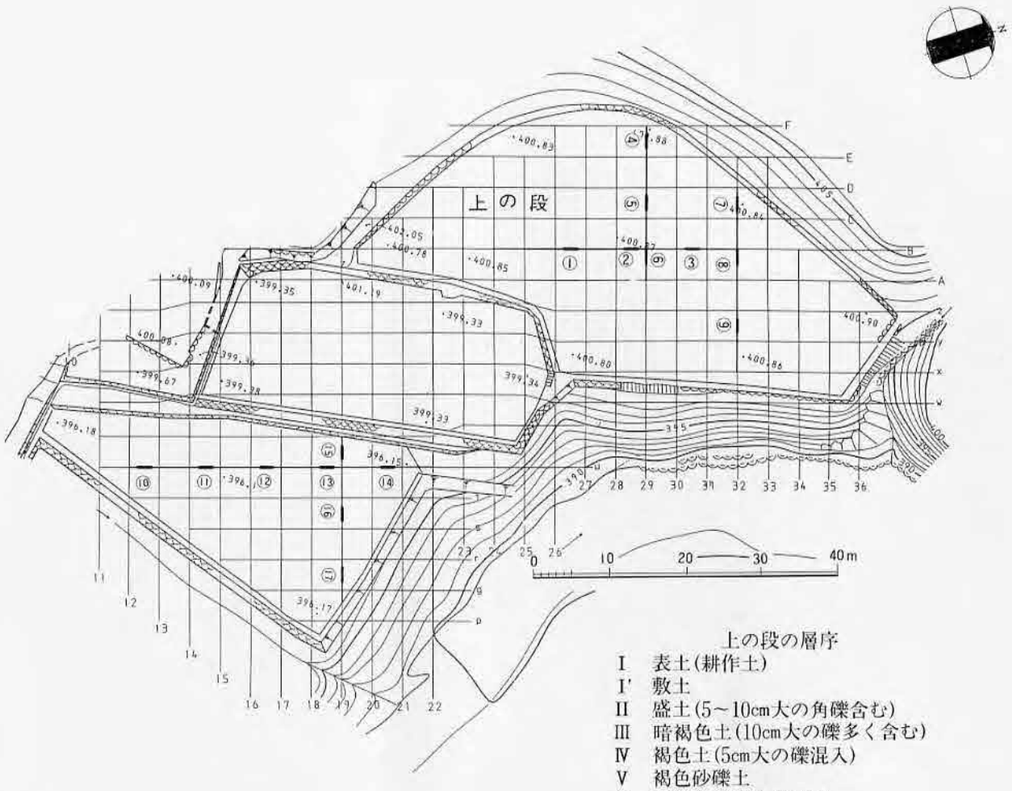
第Ⅲ章　暗褐色土。10cm大の礫を多く含む。主に中期の土器を含み、中期の遺物包含層と考えられるが、早期の遺物も少しみられた。

第Ⅳ層　褐色土。5cm大の礫混入。主に早期の土器を含み、数は少なかったが前期の土器もこの層より出土した。早（前）期の遺物包含層と考えられるが、中期の土器も若干みられた。

第Ⅴ層　褐色砂礫土。Ⅳ層とⅥ層の漸移層と考えられ、早期の土器を少し含むことから、Ⅳ層同様早期の遺物包含層と考えられる。

第Ⅵ層　黄褐色砂礫土で、地山である。

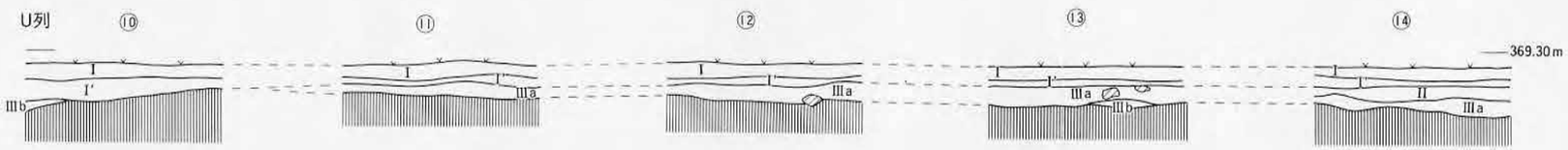
上の段では、第Ⅲ層が中期の包含層。第Ⅳ・Ⅴ層が早（前）期の遺物包含層と考えられるが、若干の混在もみられ、厳密に分層することはできなかった。



上の段の層序

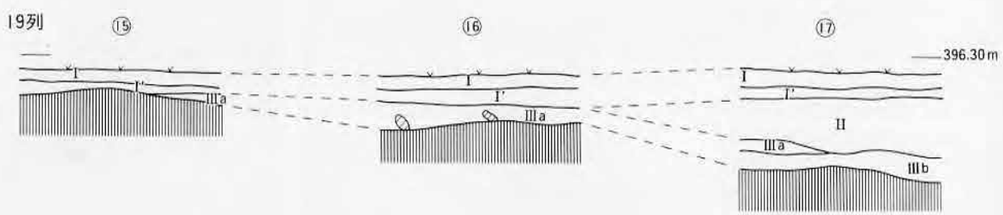
I　表土(耕作土)
I'　敷土
II　盛土(5～10cm大の角礫含む)
III　暗褐色土(10cm大の礫多く含む)
IV　褐色土(5cm大の礫混入)
V　褐色砂礫土
VI　黄褐色砂礫土(地山)
(VIはスクリントーン部分)

下の段の層序(⑩～⑰)

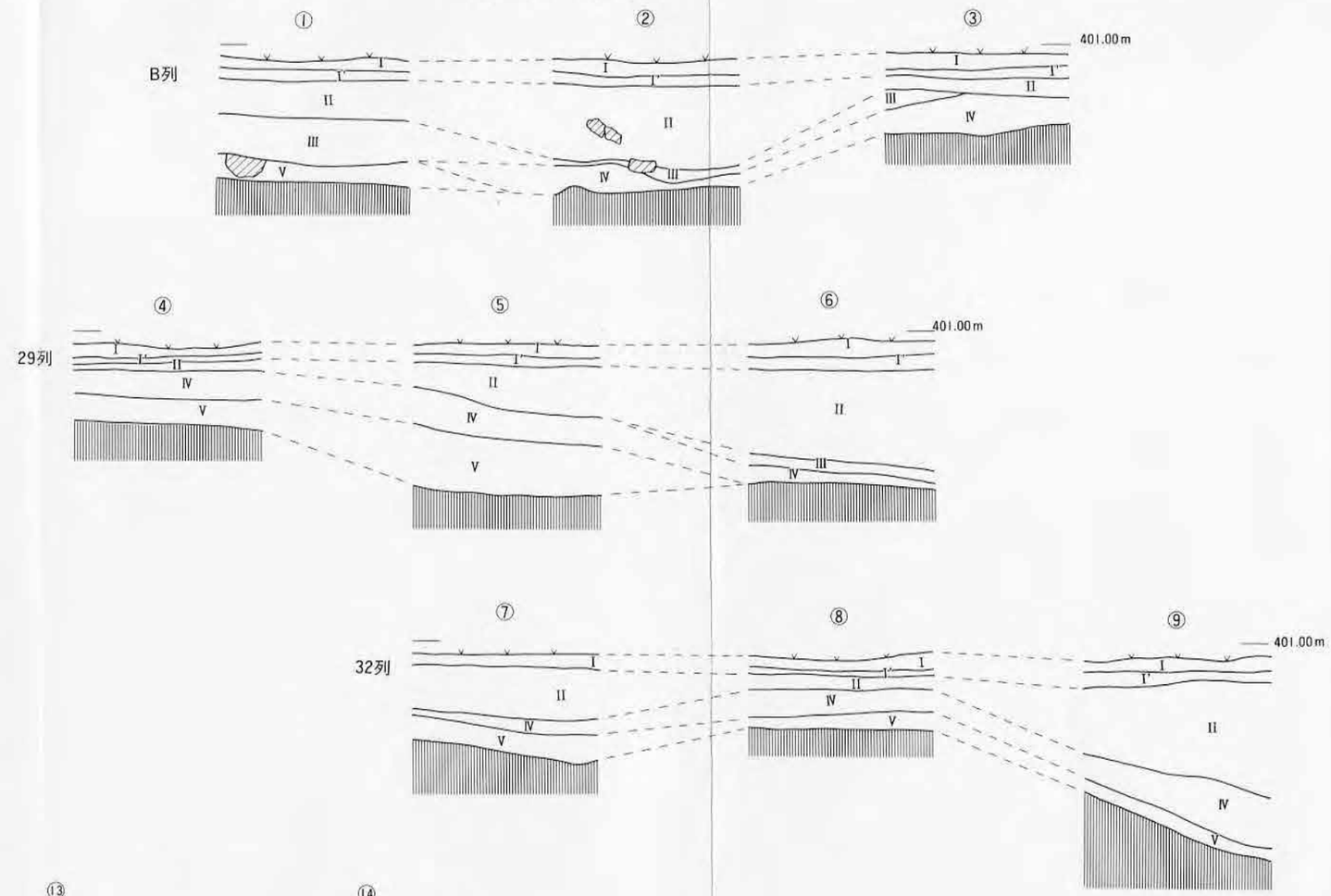


下の段の層序

I　表土(耕作土)
I'　敷土
II　盛土
IIIa　暗褐色土
IIIb　黒褐色土
VI　黄褐色砂礫土(地山)
(VIはスクリントーン部分)



上の段の層序(①～⑨)



第14図　遺跡土層断面図

(2) 下の段の層序

第Ⅰ層　表土（耕作土）。厚さは10～20cmである。

第Ⅰ′層　水田耕作に伴う敷土で鉄分の沈着がみられる。

第Ⅱ層　開田の際の盛土で、段丘端部（川側）にみられる。この中にはローリングを受けた土器（ほとんどが晩期）も混入していた。

第Ⅲａ層　暗褐色土。

第Ⅲｂ層　黒褐色土。

Ⅲａ・Ⅲｂ層は、後期後葉から晩期の土器を含み、後期後葉から晩期にかけての遺物包含層と考えられるが、中期および後期前・中葉の土器も少しみられた。

第Ⅵ層　黄褐色砂礫土で、地山である。

下の段では、第Ⅲａ・Ⅲｂ層が後期後葉から晩期にかけての遺物包含層と考えられる。

なお、上の段の第Ⅲ層と下の段の第Ⅲａ・Ⅲｂ層とは、面（段の高さ）も異なり、全く別の層と考えたい。

なお、試掘調査を行った、「いんべ遺跡Ａ・Ｂ地点」の層序についても、簡単に触れておく。

Ａ・Ｂ地点では、合わせて29ヶ所のトレンチを掘削したが、その基本的層序は、表土（耕作土）約20cm、敷土約10cm、黒褐色～暗褐色土（角礫混入）10～50cm、黄褐色砂礫土（砂と径５～30cm大の円礫からなる）で、黒褐色土・暗褐色土中には、背後の山から崩れてきたと考えられる角礫が多数混入しており、ガサガサとした感じであった。

第4章　遺　　構

第1節　遺構の概略

本遺跡で検出した遺構は、焼礫集積遺構4基、土器棺墓11基、土器集中区1ヶ所、配石土壙3基、土坑・ピット240基である。焼礫集積遺構は上の段で検出し、残りの遺構は下の段で検出した（第15図）。伴出した土器より、上の段で検出した遺構は早期、下の段で検出した遺構は、後期後葉から晩期にかけて営まれたものと考えられる。

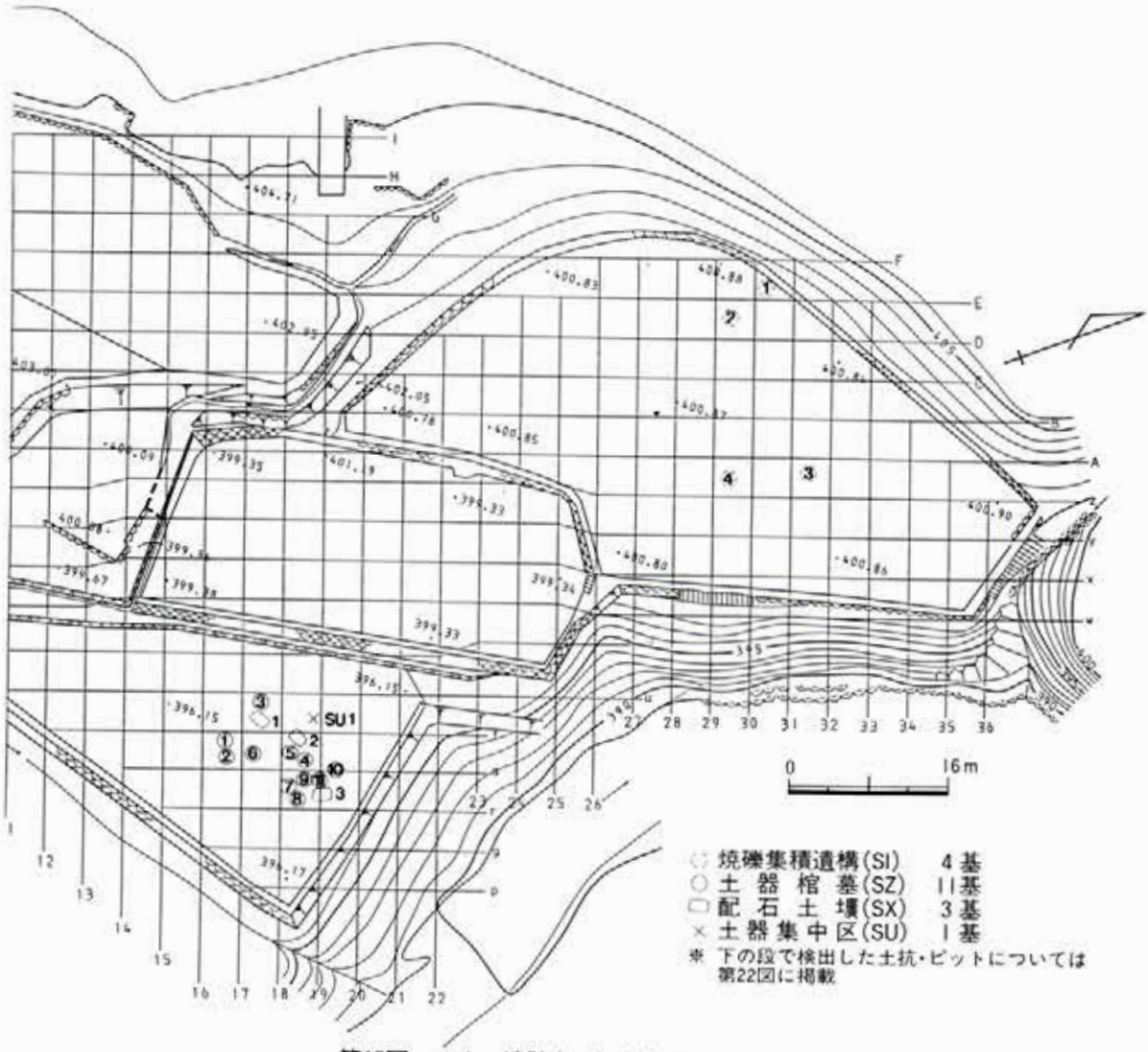
以下、上の段・下の段の順で各遺構について述べていく。

第2節　上の段で検出した遺構

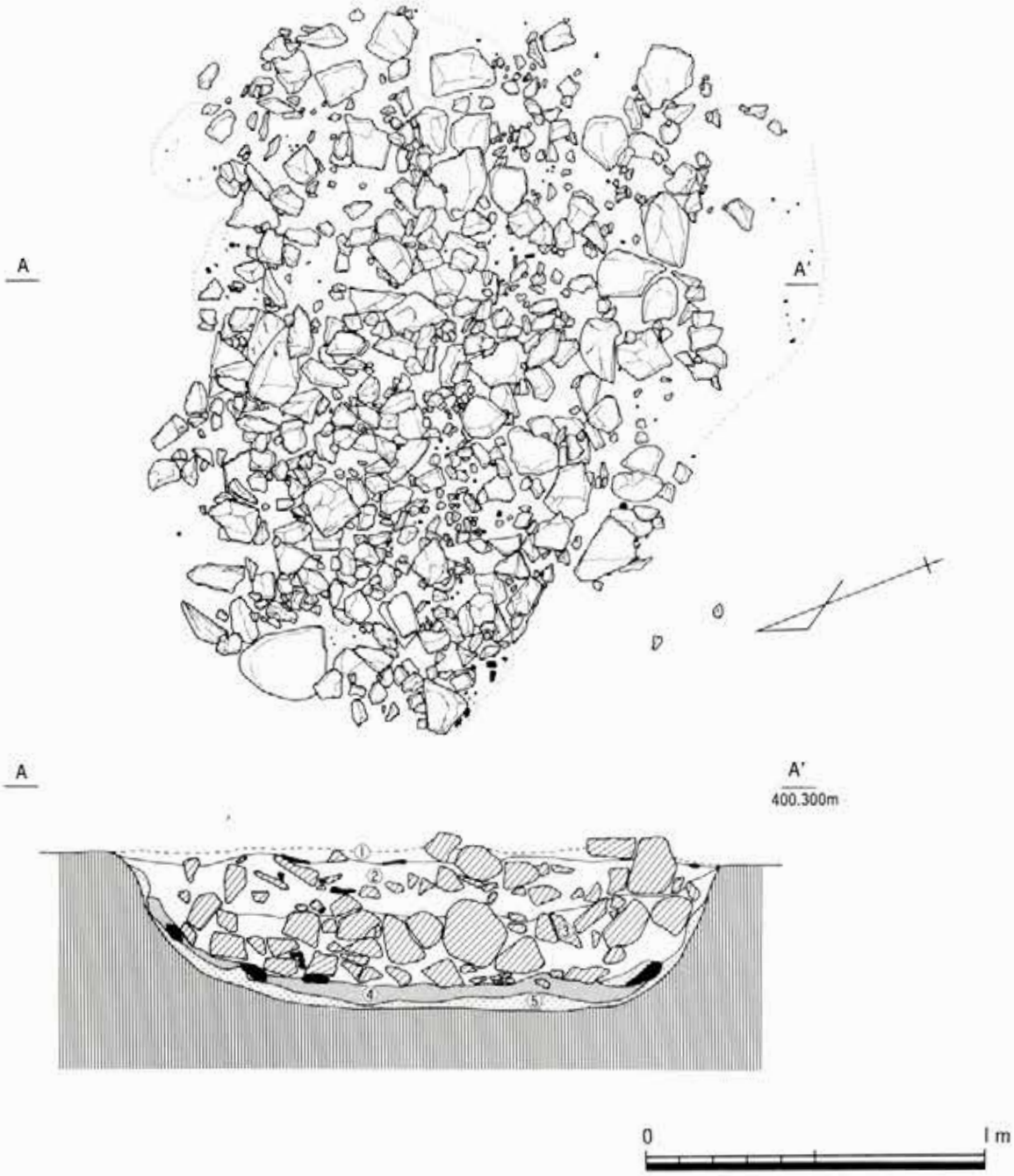
(1)　焼礫集積遺構（ＳＩ）

①　第1号　焼礫集積遺構（ＳＩ１）

31Ｆから31Ｅグリッドに位置する。平面プランは、径約1.8mの円形と考えられるが、検出時には、



第15図　いんべ遺跡（Ｃ地点）遺構配置図



①7.5YR3/2～2/2　黒褐色土

②7.5YR3/2～2/2　黒褐色土　5－10cm大の角礫を中心に、1－2cmの小礫も含む。炭化材を多く含む。

③7.5YR3/4　暗褐色土　10－20cm大の比較的大きな礫を含む。炭化物も少し含む。

④　炭化物を多く含む層　一部、土壌化しているが、材として認められるものもかなりある。

⑤　焼　土　土坑の内壁に沿って全体にみられる。

⑥10YR4/6　褐色土　砂礫層（地山）（スクリントーン部分）

黒ぬりは炭化物

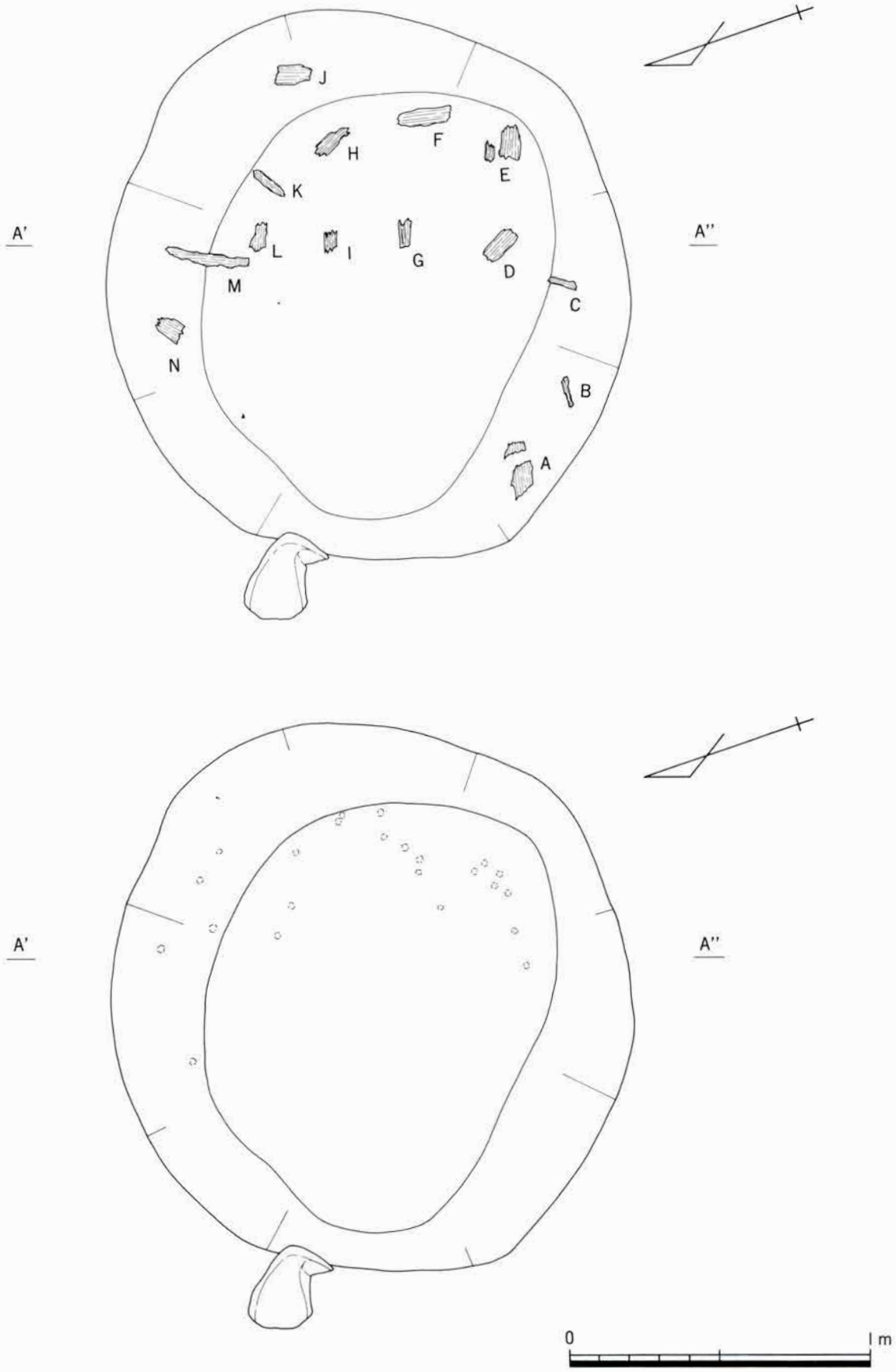
第16図　第１号焼礫集積遺構（SI 1）（その１）

長径約2m、短径約1.5mの楕円形の範囲に多数の焼礫が、炭化物と共にみられた。礫は、角礫（90.7%）と一部円礫（9.3%）とがみられ、そのほとんど（97.7%）は被熱により割れていた。石材は砂岩がほとんどで、一部チャートもみられた。ＳＩ１には、深さ約50cmの掘り込みがみられ、この土坑内には焼礫がびっしりと詰まっており焼礫集積遺構[1]と考えられる。使われていた礫858点の総重量は約853.7kgであり、平均0.99kgであったが中には7.8kg、6.3kgといったかなり重いものも含まれていた。 埋土は5層に分層でき一番下（土坑内一面）に焼土の層（第⑤層）がみられる。その上に炭化物を多く含む層（第④層）がありこの中には炭化材として残っているものも何点か認められた（第16図)。これらの炭化材を分析したところ、大半はクリであったがコナラ節・フジ属・ブナ属も認められた（第6章)。なお、ＳＩ１出土炭化材の放射性炭素年代測定を行ったところ、7,270±150 yrBPという結果が得られた。その上に10～20cm大の角礫を多数含む褐色の層（第③層）があり更にその上にやや小さめの5～10cm大の角礫を中心に1～2cmの小礫を含む暗褐色の層（第②層）が認められる。一番上の層（第①層、黒褐色土）については、ＳＩ１の後の堆積土の可能性も考えられる。土坑を完掘すると、一番底から径2～3cmの円形の炭化物の跡が多数検出された（第17図)。これらの炭化物痕のいくつかを半截すると、深さは約2～3cmと浅く、残存状況が悪い為にはっきりとはしないものの、炭化材は土坑の底から土坑の縁の方へと斜めに伸びており、土坑内に太さ2～3cm大の薪炭材を軽く突き差すように入れ、土坑の縁にもたせかけて並べた後に、火を使ったと考えることもできそうである。土坑底面で検出した炭化材を採取し（ＳＩ１・O)、樹種同定にかけたが、残念ながら同定不可であった（第6章)。

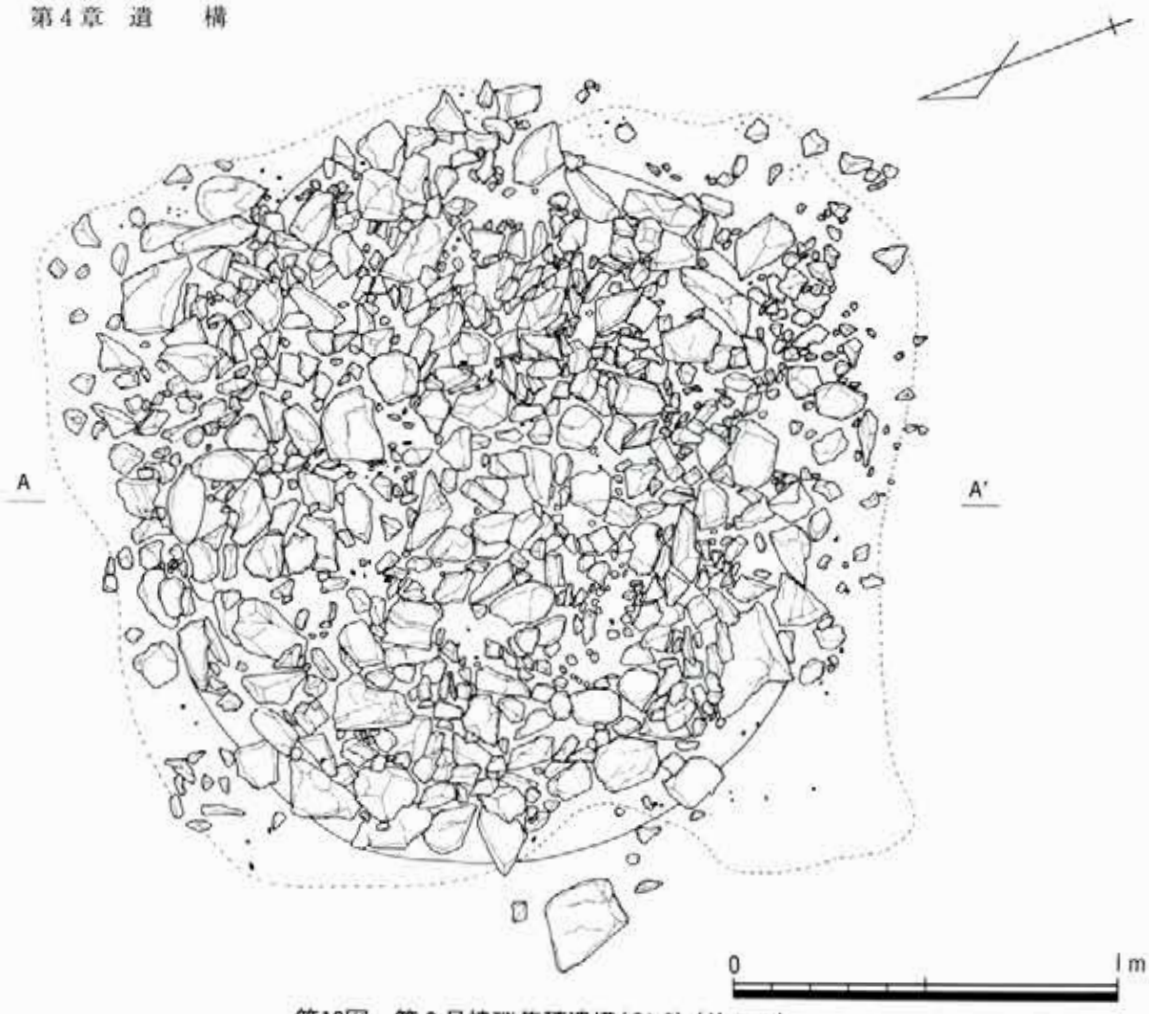
1）土坑を掘ってその中に円礫あるいは角礫を置いた遺構で、礫の多くは火熱を受け土坑中からは炭化材や焼土が検出される遺構を「焼礫集積遺構」とした。この類の遺構は焼いた礫を土坑内に詰めて、その上に肉・魚介類・根菜類などを置き、その余熱で焼いたり、木の葉で包んで蒸したりした調理施設だったと考えられる。同様の遺構は小の原遺跡（第2集)、下開田村平遺跡（第3集)、上開田村平遺跡（第6集)、上原遺跡第4・5地点（整理中）などでも検出されている。

②　第2号　焼礫集積遺構（ＳＩ２）

ＳＩ１のすぐ隣りの30Ｅグリッドに位置する。平面形は、径約2.1mの円形と考えられるが、検出時にはもう少し広い範囲で焼礫や炭化物の分布がみられた。礫はＳＩ１と同様に角礫と一部円礫とがみられ そのほとんどは被熱により割れていた。石材は、ほとんどが砂岩であった。ＳＩ２にも深さ約25～30cmの掘り込みがみられ、この土坑内に多数の焼礫がつまっていた。埋土は大きく2層に分層でき、第①層黒褐色土には5～15cm大の礫や炭化物が多くみられ、第②層暗褐色土には、10～30cmの人頭大の礫がびっしりと充填されており（第19図)、中には40～45cm大の礫もみられた。土坑の底面付近には、焼土や炭化物がみられ、炭化物を分析した所、クリ・オニグルミ・コナラ節・ブナ属・ケヤキが含まれていた（第6章)。ＳＩ２からの遺物の出土は土器小片1点とフレイク1点のみであった。土器（28、第39図）は、厚手で早期と考えられる。フレイクはチャート製であった。なお、土器およびフレイクは、最下層の焼土中より出土した。



第17図　第１号焼礫集積遺構（SI 1）（その２）



第18図　第2号焼礫集積遺構(SI 2)(その1)

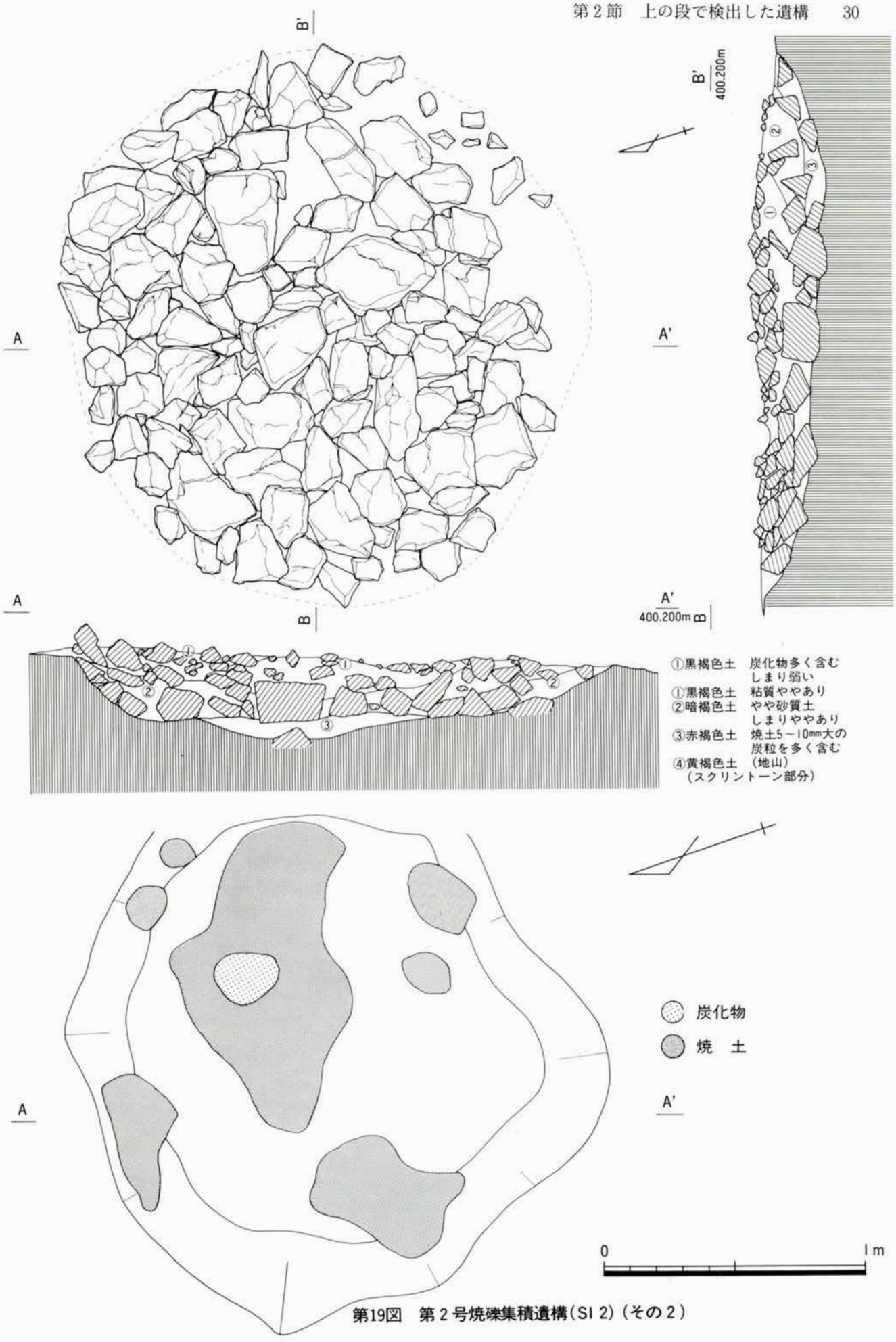
③　第3号　焼礫集積遺構（ＳＩ３）

32Ａグリッドに位置する。平面プランは、約80×60cmの円形で、土坑上に多数の礫がみられる。礫は5～20cm大の円礫と角礫が数十個みられ、その多くは被熱し、割れているものもみられた。土坑の深さは5～10cmと浅く、埋土は炭化物を含む黒褐色土がみられた。ＳＩ３は、ＳＩ１・ＳＩ２と比べてかなり規模が小さい。

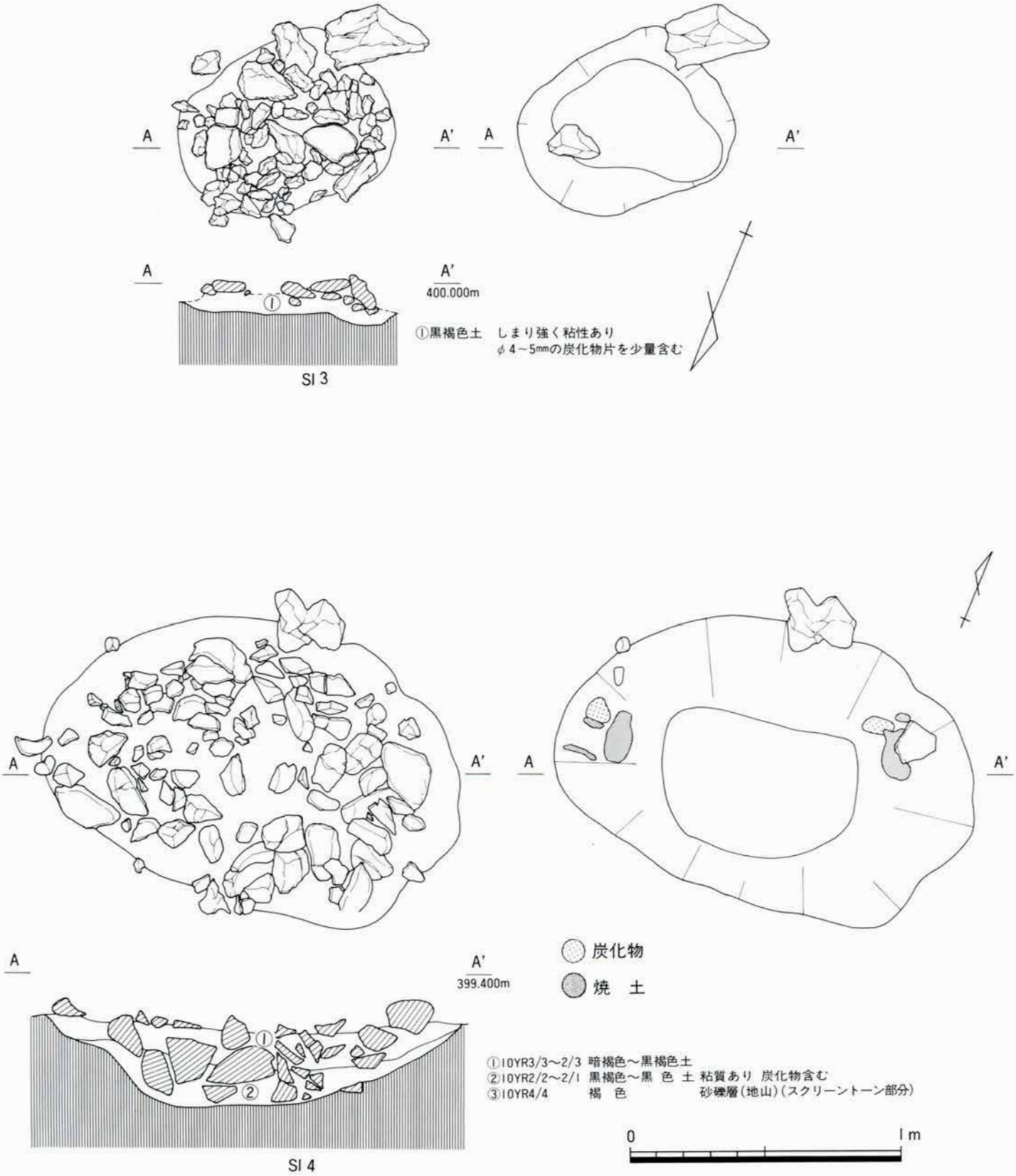
④　第4号　焼礫集積遺構（ＳＩ４）

30Ａグリッドに位置する。平面プランは、約160×100cmの楕円形で表面に多数の礫がみられる。ＳＩ４に使われていた礫223点を計測したところ、総重量は230.95kgあり、平均1.04kgであった。角礫が122点（54.7%）と多いが、円礫も101点（45.3%）含まれていた。136点（61.0%）は、肉眼でも被熱が観察され、割れているものも多かった。石材はほとんどが砂岩であった。

断面は皿状で深さは約30cmである。土坑内は、多数の礫が充填されている。人頭大くらいのかなり大きな石も使われている。埋土は2層に分層でき、上が暗褐色土、下が黒褐色土～黒色粘質土（炭化物含む）で炭化物を含む黒褐色土は土坑の底（縁）一面に見られた。なお、最下層には礫が少なかった。この黒褐色土を掘りぬくと炭化物や焼土も見られた。この炭化物の樹種はブナ属・カエデ属・サクラ属・ナシ亜科他であった（第6章）。



第19図　第２号焼礫集積遺構（SI 2）（その２）



第20図　第3・4号焼礫集積遺構(SI 3・4)

第３節　下の段で検出した遺構

下の段では、土器棺墓11基、土器集中区１ヶ所、配石土壙３基、土坑・ピット 240 基を検出した（第22図）。以下、各遺構について述べていき、最後に土坑・ピットの配置および主軸の方向について述べていく。なお、土器棺に利用されていた各土器については、第５章で触れる。

(1) 土器棺墓

①　第１号土器棺墓（ＳＺ１）

17ｔグリッド北西隅に位置する。平面プランは長径約60㎝、短径約50㎝の（楕）円形を呈し深さは現存する土器の最高部より約35㎝である。土器（ＳＺ１－Ａ）はこの掘り方に立位で設置されていた。土器の周りには10～15㎝の礫が土器を安定させる為に配されていた。なお、別の土器（ＳＺ１－Ｂ・Ｃ）も出土したが、その関係は不明である。

②　第２号土器棺墓（ＳＺ２）

17ｔグリッド北東隅に位置する。北側を別のピットに切られており全体の形は不明であるが現存する平面プランは、長径約70㎝、短径約45㎝楕円形を呈し、深さは現存する土器の最高部より25～30㎝である。棺身に使用された土器（ＳＺ２－Ａ）は、やや傾きながらもほぼ横位に置かれ、主軸の方位は、Ｎ－35°－Ｅである。

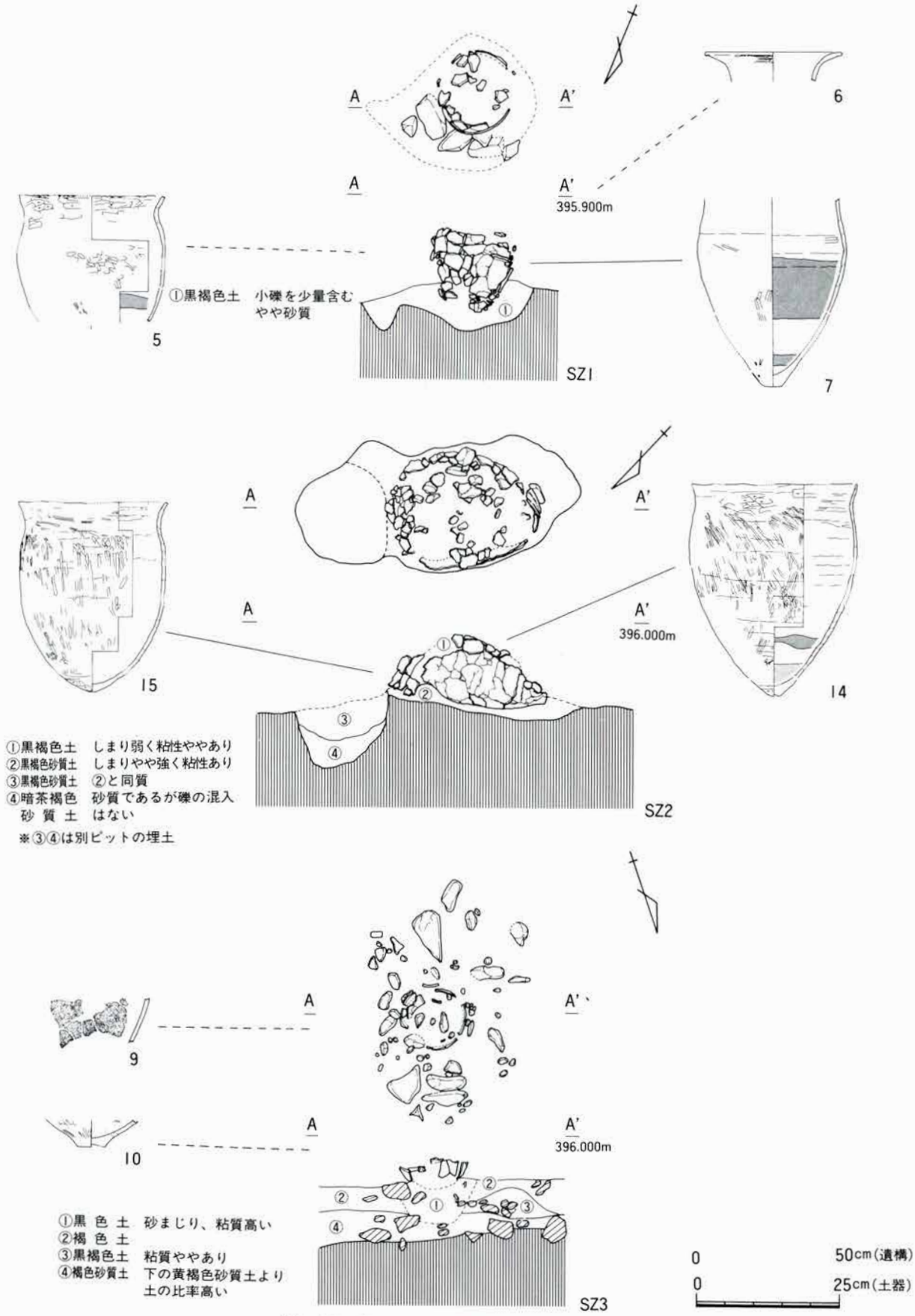
棺身の土器とは別の土器（ＳＺ２－Ｂ）も出土した。遺存状態は悪いが、棺身の土器の口縁部と接するようにして出土したため、破損した大きな破片を棺身の蓋として利用した「合わせ蓋土器棺墓」の可能性も考えられる。

③　第３号土器棺墓（ＳＺ３）

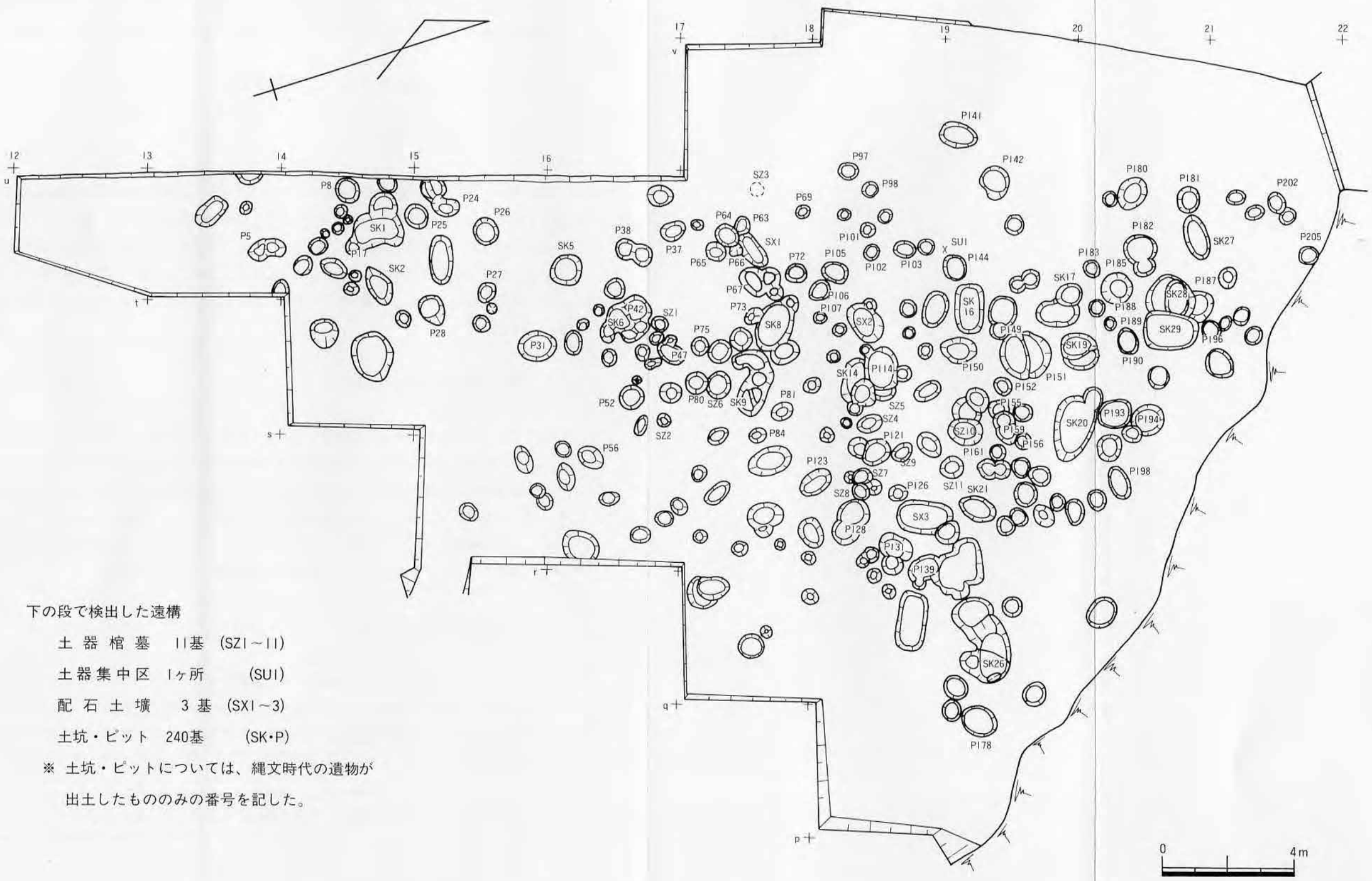
18ｕグリッド西隅に位置する。褐色土中に掘り込まれており、プランの検出は十分にはできなかった。更に、上部は削平を受けており、土器の底部付近がわずかに残るだけで遺存状態も極めて悪かった。平面プランは径約30㎝の円形を呈し、深さは現存する土器の最高部より約25㎝と考えられる。土器はこの掘り方に立位で設置されており、土器の周りには５～15㎝大の礫が多数みられた。

④　第４号土器棺墓（ＳＺ４）

19ｔグリッド東隅に位置する。平面プランは長径約70㎝、短径約50㎝の楕円形を呈し、深さは現存する土器の最高部より約30㎝である。棺身に使用された土器（ＳＺ４）は、やや傾きながらも口縁部を南東方向に向けてほぼ横位に置かれ、主軸の方位は、Ｎ－27°－Ｗである。上面は削平を受けており、土器の片面は失われていた。



第21図　第1・2・3号土器棺墓(SZ1・2・3)



下の段で検出した遺構

土 器 棺 墓　11基　(SZ1～11)

土器集中区　1ヶ所　(SU1)

配 石 土 壙　3 基　(SX1～3)

土坑・ピット　240基　(SK・P)

※ 土坑・ピットについては、縄文時代の遺物が出土したもののみの番号を記した。

第22図　下の段の遺構配置図

⑤　第5号土器棺墓（ＳＺ５）

19ｔグリッドのほぼ中央に位置する。南西側を別のピットに切られており全体像は不明であるが、現存する平面プランは、長径約65㎝、短径約60㎝の楕円形を呈し、深さは現存する土器の最高部より約35㎝である。棺身に使用された土器（ＳＺ５－Ａ）は、やや傾きながらも口縁部を南西側にしてほぼ横位に置かれ、主軸の方向はＮ－32°－Ｅである。上面は削平を受けており、土器の一部は失われていた。

なお、ＳＺ５のすぐ東隣りには、ＳＺ４が位置する。

⑥　第6号土器棺墓（ＳＺ６）

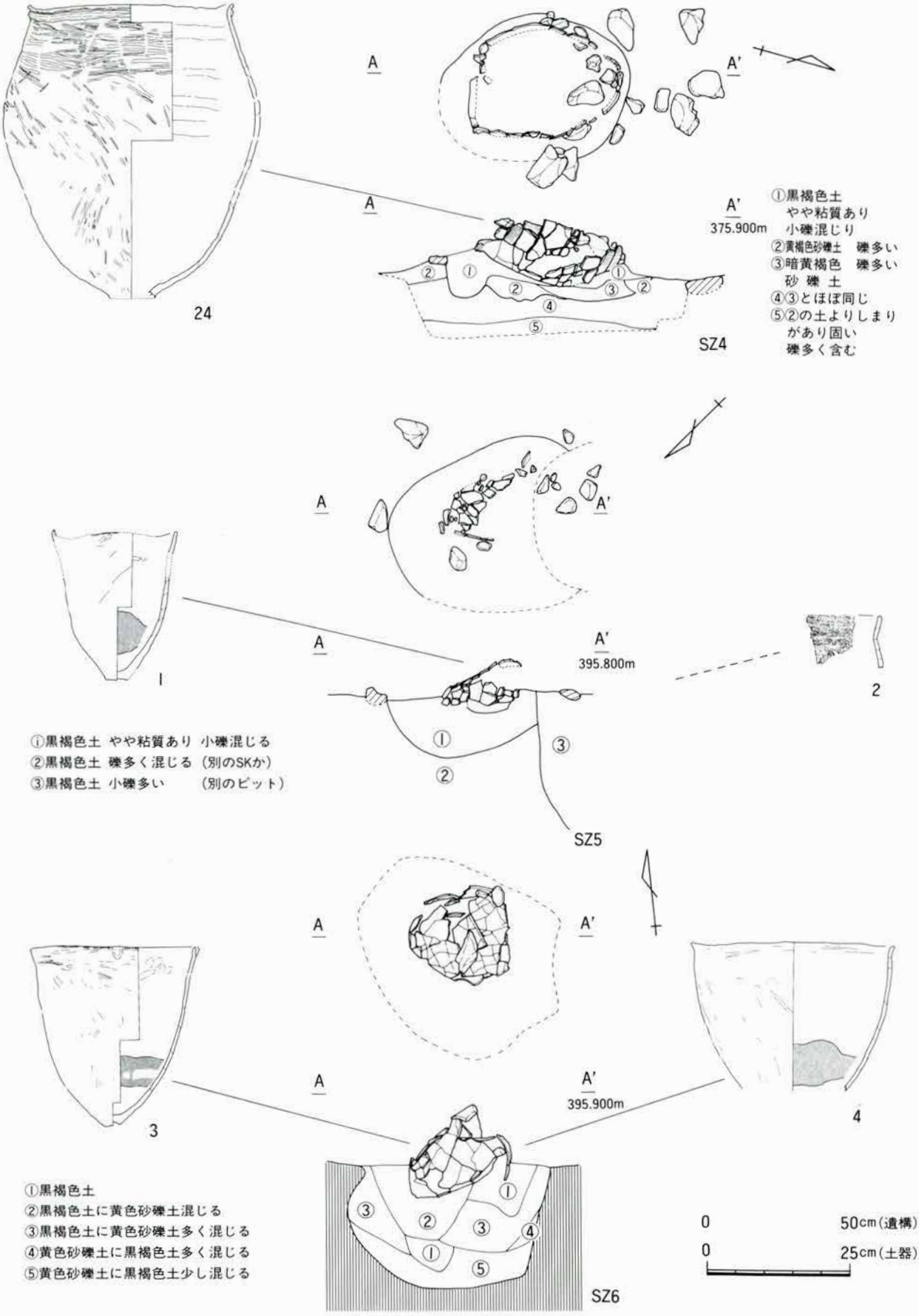
18ｔグリッド南側中央付近に位置する。平面プランは、長径約80㎝、短径約60㎝の楕円形を呈し、深さは現存する土器の最高部より約65㎝である。棺身に使用された土器（ＳＺ６－Ａ）は、口縁部を東側に向けて斜位に置かれ、主軸の方向は、Ｗ－５°－Ｎである。棺身の土器とは別の土器（ＳＺ６－Ｂ）が、棺身の土器の口縁部分に蓋をするようにして出土し、「合わせ蓋土器棺墓」と考えられる。なお、土器棺内には径１㎝～拳大までの小石が多く入っており、中からは長さ１㎝大の骨片も出土した。

⑦　第7号基土器棺墓（ＳＺ７）

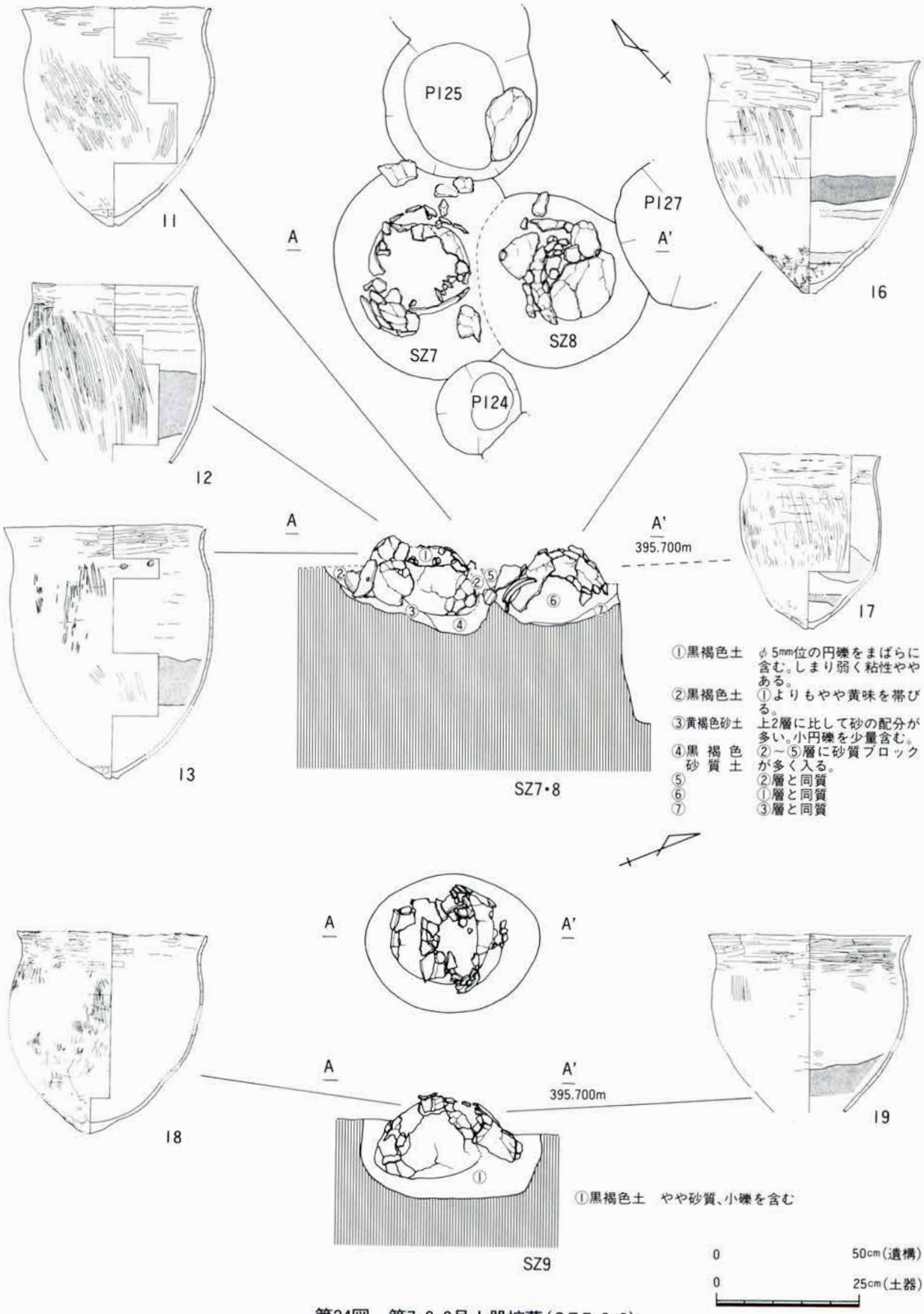
19ｓグリッド中央やや南よりに位置する。すぐ南東隣りに位置するＳＺ８に切られる。さらに、ピット124（Ｐ124）125（Ｐ125）にも切られ、全体像は不明であるが、現存する平面プランは、長径約75㎝、短径約65㎝の楕円形を呈し、深さは現存する土器の最高部より約35㎝である。棺身に使用された土器（ＳＺ７－Ａ）は、口縁部を北西に向けて斜位に置かれ、主軸の方向はＮ－38°－Ｗである。なお、棺身の土器とは別の２個体の土器（ＳＺ７－Ｂ・ＳＺ７－Ｃ）の破片が、棺身の土器の口縁部付近に蓋をするようにして出土し、「合わせ蓋土器棺墓」と考えられる。

⑧　第8号土器棺墓（ＳＺ８）

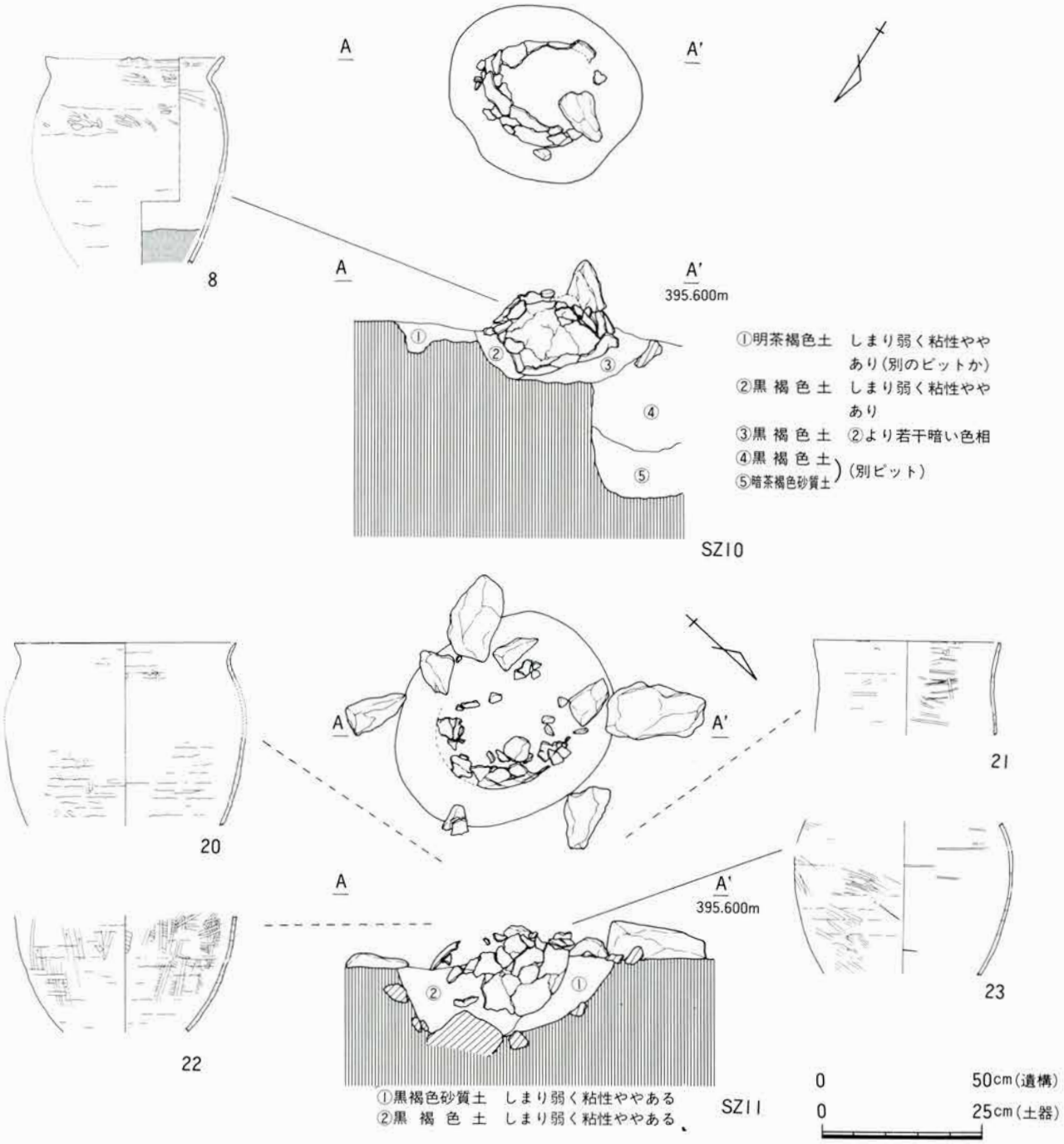
19ｓグリッド中央やや南東寄りに位置する。東側をピット127（Ｐ127）に切られ、全体像は不明であるが、現存する平面プランは、長径約65㎝、短径約55㎝の楕円形を呈し、深さは現存する土器の最高部より約28㎝である。棺身に使用された土器（ＳＺ８－Ａ）は、底部の向きより口縁部を南東に向けて横位に置かれたと考えられ、主軸の方向はＮ－40°－Ｗである。なお、ＳＺ８のもう一個体の土器（ＳＺ８－Ｂ）もほぼ完型に復元され、ＳＺ８は「合わせ口土器棺墓」であったと考えられる。ＳＺ８のすぐ北西にはＳＺ７が位置し、ＳＺ８がＳＺ７を切っている。



第23図　第4・5・6号土器棺墓（ＳＺ４・５・６）



第24図　第7・8・9号土器棺墓(SZ7・8・9)



第25図　第10・11号 土器棺墓(ＳＺ10・11)

⑨　第９号土器棺墓（ＳＺ９）

19ｓグリッドの中央やや北西よりに位置する。平面プランは、長径約63㎝、短径約50㎝の楕円形を呈し、深さは現存する土器の最高部より約38㎝である。棺身に使われた土器（ＳＺ９－Ａ）は、口縁部を北に向けて斜位に置かれ、主軸はＮ－18°－Ｅである。棺身の土器とは別の土器（ＳＺ９－Ｂ）の破片も棺身の土器の口縁部に蓋をするようにして出土し、「合わせ蓋土器棺墓」と考えられる。なお、土器棺内の黒褐色土からは、骨片も出土した。

⑩　第10号土器棺墓（ＳＺ10）

20ｓグリッドと20ｔグリッドにまたがる南側部分に位置する。平面プランは、長径約60㎝、短径約55㎝の（楕）円形を呈し、 深さは現存する土器の最高部より約30㎝であるが、棺身の土器（ＳＺ10）の口縁部付近にみられる立石の上面からは約40㎝を測る。棺身の土器は口縁部を南西に向けて斜位に置かれ、主軸の方向は、W―28°―Ｓである。上面は削平を受けており残っていないが、前述の立石（20㎝大、円礫）が土器の口縁部付近にみられ何らかの関係が想定される。なお、ＳＺ10は、別のピット（径35～40㎝、深さは約50㎝）を切っている。

⑪　第11号土器棺墓（ＳＺ11）

19ｓグリッドと20ｓグリッドにまたがる中央やや西側部分に位置する。平面プランは、長径約75㎝短径約60㎝の楕円形を呈し、深さは現存する土器の最高部より約30㎝である。棺身に利用されたと考えられる土器（ＳＺ11―Ｃ）は、口縁部を南東に向けて斜位に置かれ、主軸の方位はW―42°―Ｅである。上面は削平により失われており、また、底部も欠損していた。ＳＺ11では、これ以外にも３個体分の土器の破片（ＳＺ11―Ａ・Ｂ・Ｄ）が出土し、「合わせ蓋土器棺墓」と考えられる。土器の周囲には10～25㎝大の礫がみられた。

(2)　土器集中区（ＳＵ１）

19ｕグリッド北隅より土器１個体分がまとまって出土した。掘り込みなどは検出されず現場では土器溜まりとして出土状況の写真撮影（図版９）のみを行い、実測は行っていない。そのため詳細は不明であるが、ほぼ完形に復元でき、土器棺墓の可能性も考えられる。

第４表　土器棺墓（ＳＺ）一覧表

No.	グリッド	大きさ(cm) 長軸×短軸	平面形	深さ(cm)	個体数	状　況	埋設状態	主軸の方向	時　期	切り合い・他
ＳＺ１	１７ｔ	６０×５０	(楕)円形	(35)	2		立位		晩期中葉（滋賀里Ⅲｂ）	
ＳＺ２	１７ｔ	(70)×４５	楕円形	(30)	2	合わせ蓋	横位	N-35°-E	晩期中葉（滋賀里Ⅲｂ）	
ＳＺ３	１８ｕ	(30)×(30)	円　形	(25)	1		立位		晩期	
ＳＺ４	１９ｔ	７０×５０	楕円形	(30)	1		横位	N-27°-W	晩期後葉（馬見塚）	
ＳＺ５	１９ｔ	(65)×６０	楕円形	(35)	1		横位	N-32°-E	晩期前半か	
ＳＺ６	１８ｔ	８０×６０	楕円形	(65)	2	合わせ蓋	斜位	W-５°-N	晩期中葉（滋賀里Ⅱ～Ⅲａ）	骨片出土
ＳＺ７	１９ｓ	７５×(65)	楕円形	(35)	3	合わせ蓋	斜位	N-38°-W	晩期中葉（滋賀里Ⅲｂ）	＜SZ8、＜P124、P125
ＳＺ８	１９ｓ	６５×(55)	楕円形	(28)	2	合わせ口？	横位	N-40°-W	晩期中葉（滋賀里Ⅲｂ）	＞SZ7、＜P127
ＳＺ９	１９ｓ	６３×５０	楕円形	(38)	2	合わせ蓋	斜位	N-18°-E	晩期中葉（滋賀里Ⅲｂ）	骨片出土
ＳＺ10	２０ｔ	６０×５５	(楕)円形	(30)	1		斜位	W-28°-S	晩期中葉（滋賀里Ⅲｂ）	口縁部に立石有り
ＳＺ11	２０ｓ	７５×６０	楕円形	(30)	4	合わせ蓋？	斜位	W-42°-E	晩期中葉（滋賀里Ⅲｂ）	

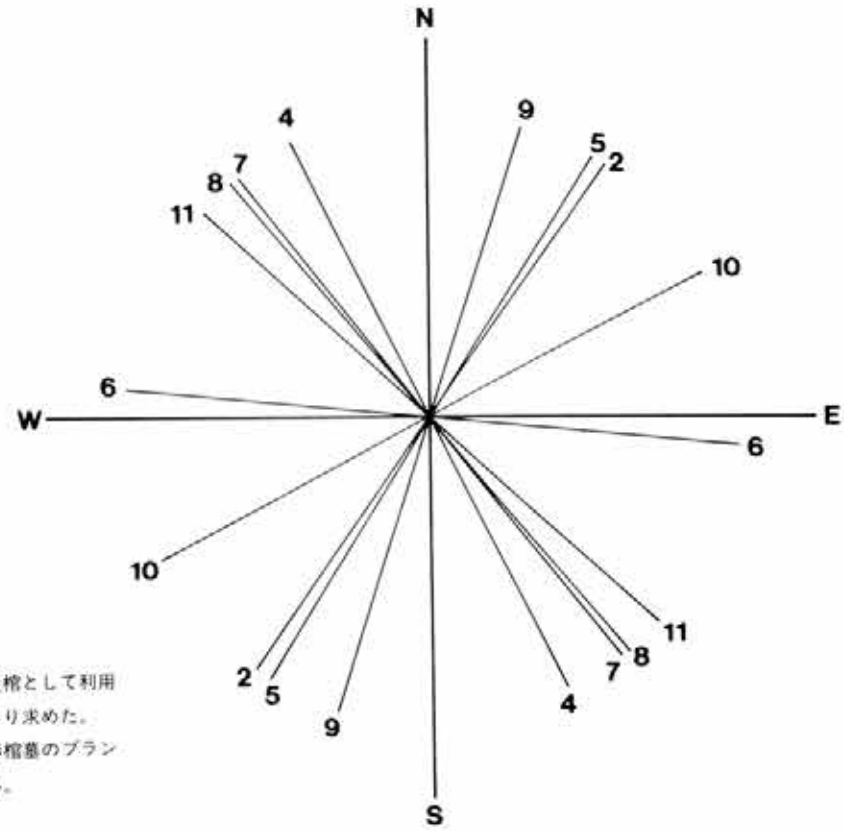
＊グリッド：複数にかかる場合は面積の広い方のグリッドとした。
（　）：残存部の大きさ・形
切り合い：＞切る、＜切られる

(3) いんべ遺跡で検出した土器棺墓について

本遺跡では、全部で11基の土器棺墓を検出した。これらについて一覧表にしたのが第４表である。ここでは、本遺跡で検出した土器棺墓の全体像について、簡単にまとめてみたい。

まず、土器棺墓の分布については、下の段の中央やや北東寄りの限られた範囲内（10m四方の範囲内）に分布しており、この範囲が墓域であったと考えられる。その時期については、使用されていた土器より滋賀里Ⅲｂ・稲荷山～馬見塚式にかけてであり、その中でも晩期の中葉（滋賀里Ⅲｂ・稲荷山式）が主体を占めている。土器棺に使用されていた土器は、１個体の場合と複数の場合とがみられ、複数の場合には、２個体の土器を口縁部同士合わせた「合わせ口土器棺」（ＳＺ８）と、２個体以上の土器を使い、１個体の土器を棺身として埋設し、別の土器片で蓋をしたと考えられる「合わせ蓋土器棺」（ＳＺ２・６・７・９・11）とがみられた。このうち、ＳＺ７は３個体分の土器の使用が認められた。また、ＳＺ11には、破片ながら４個体分の土器が使われていた。

次に、埋設状況のわかるものについては、斜位が５例、横位が４例、立位が２例で、斜位と横位が多かった。主軸の方向には、南東もしくは北西を向くものと、南西もしくは北東を向くものの直交する２群がみられた（第26図）。ＳＺ６とＳＺ９からは骨片が出土した。骨片は、細片化しており、人骨か否か、また焼けているか否かは判断できなかった。



※　土器棺墓(SZ)の主軸は主棺として利用された土器の中心線により求めた。
なお、土器の主軸と土器棺墓のプランの主軸とは概ね一致する。

第26図　土器棺墓（ＳＺ）主軸の方向

(4) 配石土壙（石棺墓）

本遺跡では、長方形のプランの両端に扁平な川原石を立てて並べた「配石土壙」が3基検出されている。[1] これらは、土器棺墓群に近接して検出し、土壙墓の可能性が高い。しかしながら遺物の出土はほとんどなく、性格は不明である。なお、本遺跡に類似するものは、「はいづめ遺跡」・「戸入村平遺跡」でも検出され報告されている。[2]

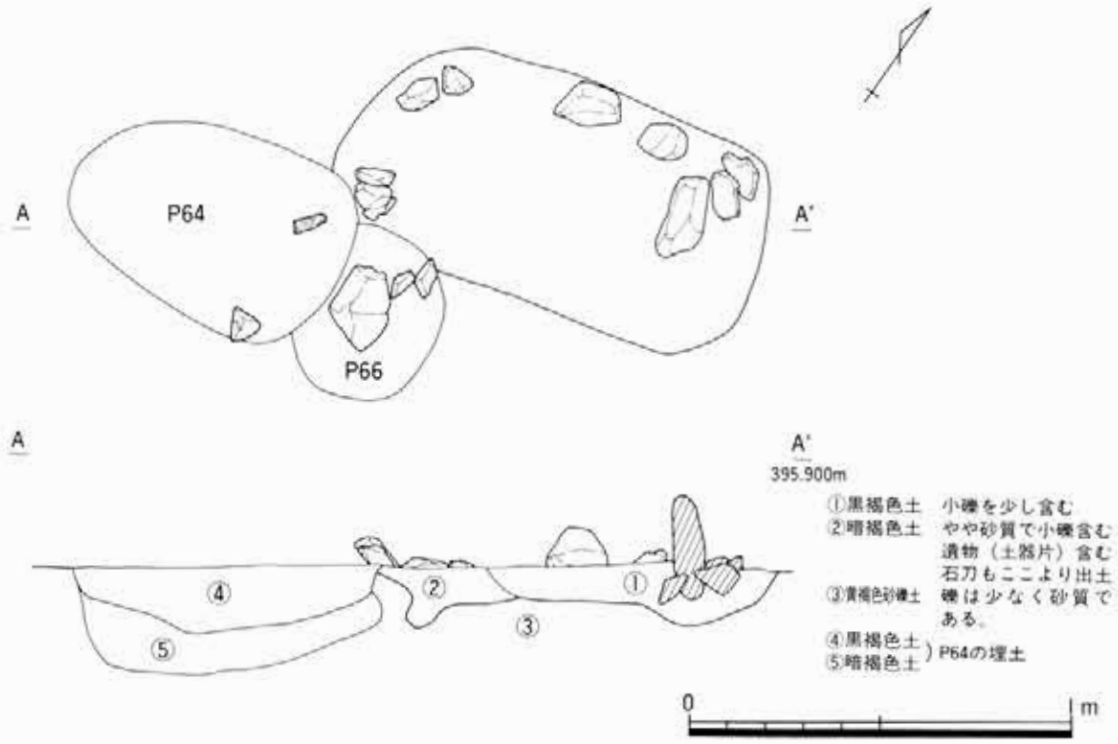
1）泉拓良氏より、配石の様子より石棺墓ではないかとの御教示を得た。

2）「はいづめ遺跡」では1基検出し、『石囲い遺構』として報告されている。
「戸入村平遺跡」でも1基検出し、『配石土壙』として報告するとともに、これ以外に3基が同様の遺構の可能性があるとしている。

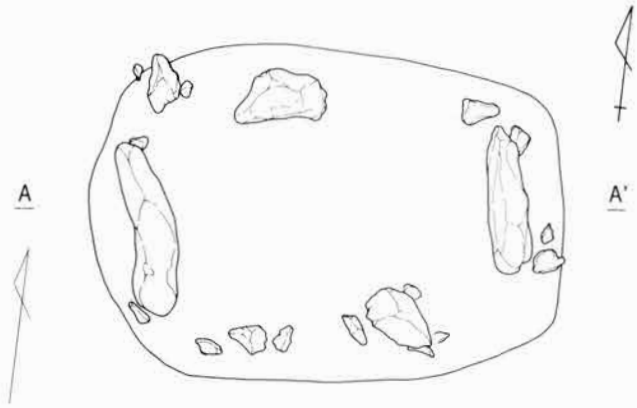
①　第1号配石土壙（ＳＸ１）

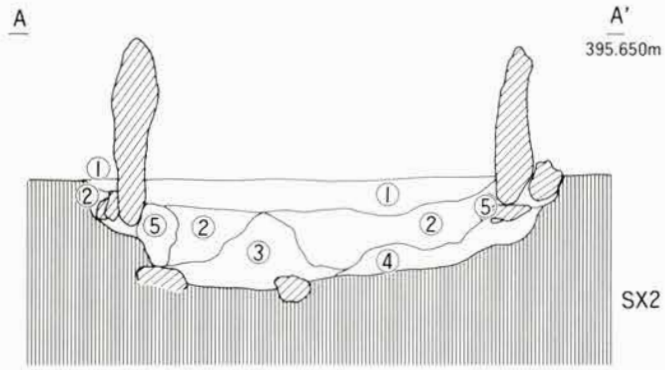
18ｕグリッド中央やや東寄りの位置で検出した。長径約115cm、短径約60cmの長方形を呈し、土壙上には周縁部に10～30cm大の（亜）円礫8個が配されている。このうちの東側に配された30cm大の扁平円礫は、立石状に立てられており、この石の周りには10cm大の礫が配されていた。

土壙の深さは10～15cmである。土器小片11点が出土し、胴部片にみられる調整痕（粗いミガキ）よ

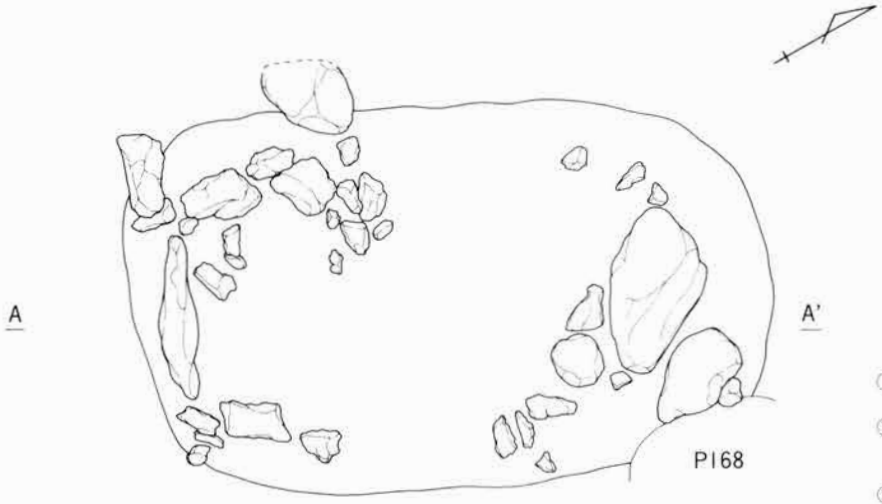


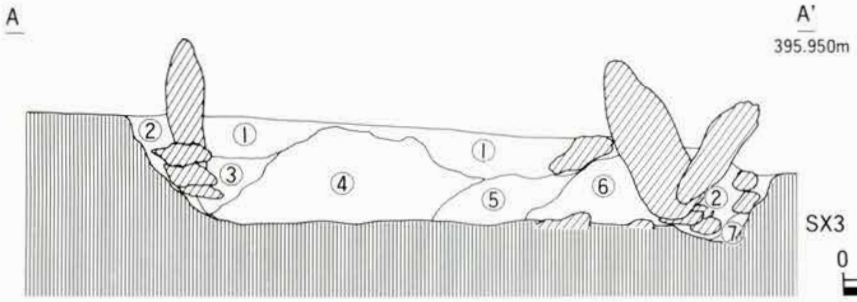
第27図　第1号配石土壙(S×1)





①黒褐色土　しまり弱く粘性ややあり φ10m以下の亜角礫を多く含み砂利質が強い
②暗褐色土　しまり弱く粘性あり 砂質に富むが、礫の混入は非常に少ない
③明黄褐色砂礫土　しまりあり粘性ややある 地山を掘り込んだ際の客土がブロック状に再度充てんされたものと考えられる
④明黄褐色砂礫土　③と同じ しかし地山層の可能性もあり
⑤暗黄褐色土　②と同質。やや色相が明るくブロック状で偏平石の内側を支えるようなかたちで観察された





①黒褐色土　黒褐色を呈するが、礫が多い
②黒褐色土　しまり弱く粘性ある φ1～2cmの円礫を少量含む
③黒褐色土
④暗茶褐色土
⑤暗茶褐色土　しまり弱く粘性ややある φ2～3cmの礫を多く含む(亜円礫)
⑥黒褐色土　②よりやや明るい色調その分砂質が増す
⑦明黄褐色砂礫土　地山層の崩壊したもの

第28図　第2・3号配石土壙(SX2・3)

り晩期と考えられ、ＳＸ１の時期も晩期と考えられる。なお、埋土の②層より石刀が出土したとの記録があるが、遺物との確認はできなかった。土壙の主軸は、W—15°—Ｓで、ＳＫ１は、Ｐ64とＰ66に切られている。

② 第２号配石土壙（ＳＸ２）

19ｕグリッドと19ｔグリッドにまたがった位置で検出した。長径約125cm、短径約85cmの長方形を呈し、土壙上には周縁部に５～50cm大の（亜）円礫20個程が配され、特に長軸上の両端には、40～50cm大の扁平円礫が向き合うように立てられていた。これらの立石の根元部分には、５～10cm大の礫が支え石として配されていた。土壙の深さは25～30cmである。出土遺物は、土器小片６点のみで、胴部にみられる調整痕（粗いミガキ）より晩期と考えられ、ＳＸ２の時期も晩期と考えられる。土壙の主軸は、W—７°—Ｓである。

ＳＸ１とＳＸ２は比較的位置も近く主軸の方向も似ている。

③ 第３号配石土壙（ＳＸ３）

19ｓグリッドと20ｓグリッドにまたがった位置で検出した。長径約165cm、短径約100cmの長方形を呈し、土壙上の周縁部には、５～45cm大の（亜）円礫30数個が配され、特に長軸上の両端付近には、45cm大の（扁平）円礫がやや斜めに立った状態でみられた。一方、南側の立石の中央部には凹みがみられ、石皿を転用した可能性も考えられる（図版28）。北側の立石には磨面も観察され、そのすぐ隣りにも30cm大の扁平円礫がやや斜めに立った状態でみられた。これらの立石の根元部分には、５～15cm大の礫が支え石として配されていた。土壙の深さは25～30cmである。

出土遺物は、土器小片５点のみで、時期のわかるものはなかったが、ＳＸ１・ＳＸ２との類似性により、晩期と考えられる。

なお、土壙の主軸は、N—24°—Ｅで、ＳＸ３は、Ｐ168に切られている。

(5) 土坑・ピット

本遺跡の下の段からは、240基の土坑（ＳＫ）・ピット（Pit）を検出した。このうち、遺物の出土より縄文時代の土坑・ピットと考えられるものについて第５表にまとめた。その総数は、土坑16基・ピット83基である。これらの土坑・ピットのほとんどは、出土遺物より後期後葉から晩期にかけてと考えられる。性格は、不明であるが土器棺墓や配石土壙の近くに分布し、切り合いも多数見られる。なお、ＳＫ29（21ｔグリッド）からは、後期後葉の注口土器の大型片（27）が出土した。また、隣接するＰ152とＰ155（20ｔグリッド）から出土した遺物は接合関係がみられた（44）。なお、遺物の出土しなかった土坑・ピットについても、縄文時代のものである可能性が高いと考えられる。

第５表　縄文時代の土坑・ピット一覧表

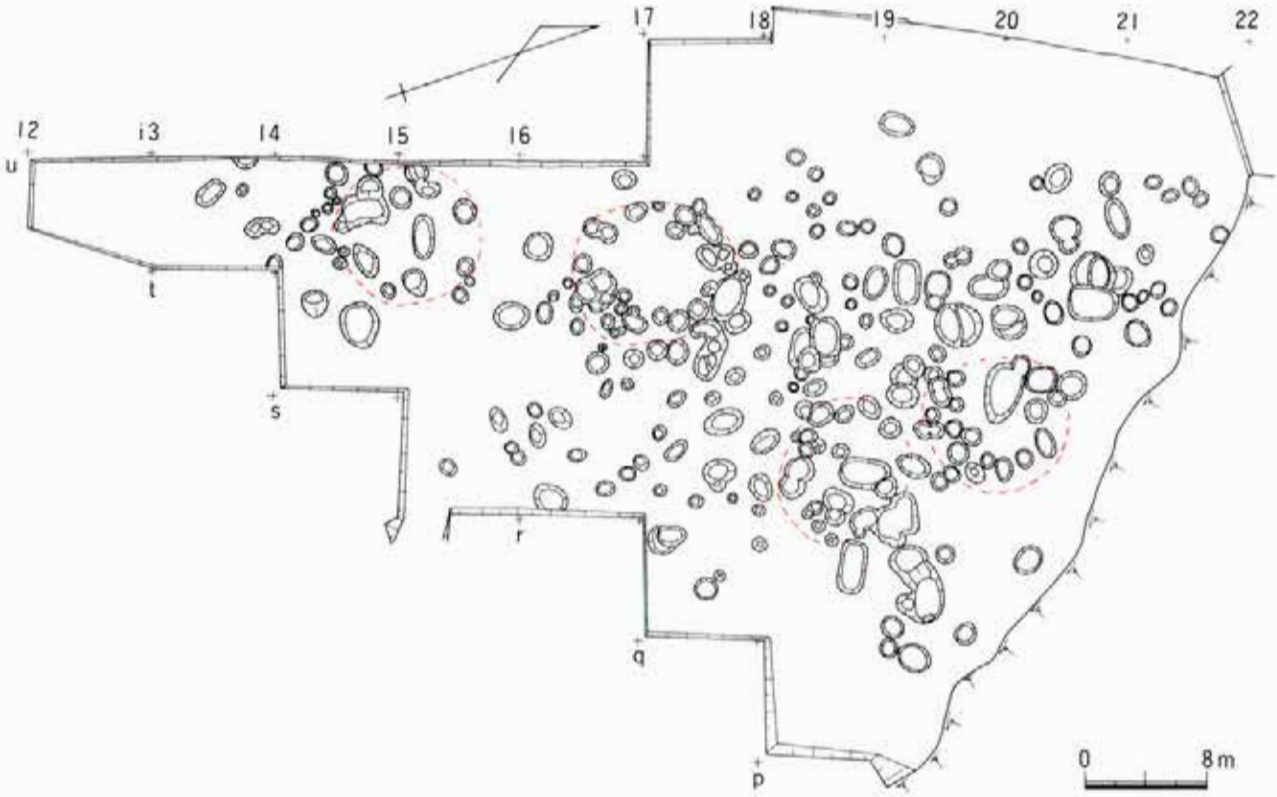
遺構名	グリッド	大きさ（cm）長軸×短軸	平面形	出土遺物（点数）土器	出土遺物（点数）石器	時期	切り合い他
ＳＫ１	１５ｕ	１５０×１００	隅丸方形	36		晩	＞Ｐ１７、＜Ｐ１６
ＳＫ２	１５ｕ	１２０×７０	楕円形	3	1(1260)	晩	
ＳＫ５	１７ｕ	９０×９０	円形	22	1(1002)	晩	
ＳＫ６	１７ｔ	７０×７０	円形	5		晩	＞Ｐ４２、＞Ｐ４４
ＳＫ８	１８ｔ	１５０×１００	楕円形	13		後	＜Ｐ７２、＜Ｐ７３、＜Ｐ７９
ＳＫ９	１８ｔ	１６０×８０	楕円形	19	2	晩	
ＳＫ１４	１９ｔ	１４０×６０	（楕円形）	24		晩	＜ＳＺ４、＜Ｐ１１４
ＳＫ１６	２０ｔ	１４０×３０	楕円形	10	1	後・晩	＞Ｐ１４８
ＳＫ１７	２０ｔ	８０×６０	円形	1			
ＳＫ１９	２０ｔ	１１０×８０	楕円形	16		晩	
ＳＫ２０	２０ｔ	２００×１２０	楕円形	21	1	晩	
ＳＫ２１	２０ｓ	１１０×７０	楕円形	3		晩	
ＳＫ２６	２０ｒ	１５０×８０	（楕円形）	4		晩	
ＳＫ２７	２１ｕ	１３０×７０	楕円形	30(37)		後・晩	
ＳＫ２８	２１ｕ	９０×７０	（楕円形）	43(30)		後・（晩）	＜ＳＫ２９
ＳＫ２９	２１ｕ	１６０×１１０	隅丸方形	18(27)		後	＞ＳＫ２８、＞Ｐ１８７
Ｐ５	１４ｕ	７０×５０	楕円形	3			＞Ｐ６
Ｐ８	１５ｕ	７０×７０	円形	4(38・39)		晩	
Ｐ１７	１５ｕ	６０×４０	円形	3		晩	＜ＳＫ１
Ｐ２４	１６ｕ	７０×５０	楕円形	1	1		
Ｐ２５	１６ｕ	８０×７０	円形	9		後・晩	
Ｐ２６	１６ｕ	８０×７０	円形	19		晩	
Ｐ２７	１６ｕ	６０×５０	円形	2		後・晩	
Ｐ２８	１６ｔ	９０×７０	楕円形	3			
Ｐ３１	１６ｔ	１２０×９０	楕円形	5		晩	
Ｐ３７	１７ｕ	８０×５０	楕円形	4		晩	
Ｐ３８	１７ｕ	６０×５０	円形	7(36)		晩	
Ｐ４２	１７ｔ	８０×７０	円形	3		晩	＞ＳＫ６
Ｐ４７	１７ｔ	８０×６０	楕円形	4	3(1164)	後・晩	＞Ｐ４６
Ｐ５２	１７ｔ	７０×７０	円形	10		晩	
Ｐ５６	１７ｓ	８０×６０	楕円形	6(49)		晩	
Ｐ６３	１８ｕ	５０×４０	（楕円形）	2		晩	＜Ｐ６４
Ｐ６４	１８ｕ	７０×６０	円形	10(32)	1(1249)	晩	＞Ｐ６３、＞Ｐ６６
Ｐ６５	１８ｕ	６０×５０	円形	1		晩	
Ｐ６６	１８ｕ	４０×３０	円形	4			＜Ｐ６４
Ｐ６７	１８ｕ	９０×７０	楕円形	2	1	晩	＜Ｐ６８
Ｐ６９	１８ｕ	４０×４０	円形	2			
Ｐ７２	１８ｕ	５０×５０	円形	4(31)	1	後	
Ｐ７３	１８ｔ	５０×５０	円形	2		後・晩	
Ｐ７５	１８ｔ	６０×５０	円形	2		晩	
Ｐ８０	１８ｔ	７０×７０	円形	3		後・晩	
Ｐ８１	１８ｔ	７０×５０	円形	3			
Ｐ８４	１８ｓ	５０×５０	円形	2			
Ｐ９５	１８ｒ	８０×７０	円形	1		晩	
Ｐ９７	１９ｕ	６０×５０	円形	3		晩	
Ｐ９８	１９ｕ	５０×５０	円形	1		後・晩	
Ｐ１０１	１９ｕ	５０×５０	円形	1			
Ｐ１０２	１９ｕ	５０×４０	円形	3			
Ｐ１０３	１９ｕ	６０×５０	楕円形	10		晩	
Ｐ１０５	１９ｕ	８０×６０	楕円形	3		後・晩	
Ｐ１０６	１９ｕ	６０×６０	楕円形	2			
Ｐ１０７	１９ｔ	４０×３０	円形	1			
Ｐ１１４	１９ｔ	１３０×１００	隅丸方形	12	1	晩	＞ＳＺ５、＜ＳＺ４
Ｐ１２１	１９ｓ	９０×７０	楕円形	2		晩	
Ｐ１２３	１９ｓ	１１０×７０	楕円形	3	1		
Ｐ１２６	１９ｓ	５０×５０	円形	1	1	晩	
Ｐ１２８	１９ｓ	８０×７０	円形	1			
Ｐ１３１	１９ｓ	１１０×７０	楕円形	7		晩	
Ｐ１４１	２０ｖ	１１０×７０	楕円形	2			
Ｐ１４２	２０ｕ	１１０×９０	楕円形	21	1	後・晩	
Ｐ１４４	２０ｕ	８０×７０	楕円形	18		晩	
Ｐ１４９	２０ｔ	６０×５０	楕円形	4			＞Ｐ１４７
Ｐ１５０	２０ｔ	１１０×７０	楕円形	11(40・41)	3(1209)	晩	
Ｐ１５１	２０ｔ	１３０×７０	楕円形	55(48)		晩	＞ＳＫ１８
Ｐ１５２	２０ｔ	６０×６０	円形	8(44)		晩	P155の遺物と接合
Ｐ１５５	２０ｔ	６０×４０	（円形）	12(42・43・44)		晩	＜Ｐ１５７　P152の遺物と接合
Ｐ１５６	２０ｔ	６０×５０	円形	10		晩	
Ｐ１５９	２０ｓ	６０×６０	円形	2		（中）	
Ｐ１６１	２０ｓ	５０×５０	円形	1		後・晩	
Ｐ１７８	２０ｑ	１１０×９０	楕円形	1	1(1208)		
Ｐ１８０	２１ｕ	１００×９０	楕円形	24(47)		晩	
Ｐ１８１	２１ｕ	８０×７０	楕円形	1	1		
Ｐ１８２	２１ｕ	１００×８０	楕円形	1		晩	＞Ｐ１８４
Ｐ１８３	２１ｕ	５０×５０	円形	1		晩	
Ｐ１８５	２１ｕ	１００×９０	円形	34(33・34・35)	1	後	
Ｐ１８７	２１ｕ	９０×６０	（楕円形）	3(45)			＜Ｐ１８６
Ｐ１８８	２１ｔ	５０×５０	円形	3		晩	
Ｐ１８９	２１ｔ	４０×４０	円形	1			
Ｐ１９０	２１ｔ	７０×６０	楕円形	2			
Ｐ１９３	２１ｔ	１００×９０	楕円形	9	4	晩	
Ｐ１９４	２１ｔ	１００×９０	（楕円形）	1(46)		晩	＜Ｐ１９５
Ｐ１９６	２１ｔ	６０×６０	円形	1			
Ｐ１９８	２１ｓ	１００×６０	楕円形	6(29)		後・晩	
Ｐ２０２	２２ｕ	６０×５０	楕円形	3			＞Ｐ２０３
Ｐ２０５	２２ｕ	６０×５０	円形	4			

＊グリッド：複数にかかる場合は面積の広い方のグリッドとした。
（　）：残存部の大きさ・形
切り合い：＞切る、＜切られる
出土遺物の（　）内は遺物番号

(6) 土坑・ピット等の配置について

土坑・ピットが土器棺墓（ＳＺ）や配石土壙（ＳＸ）の近くに多く分布することは前にも述べたが、これらの土坑・ピットのうち、環状の配置が認められる所が何ヶ所かみられる（第29図）。特に、17ｔから18ｕグリッド付近には、直径4.5～5.5ｍの円形を描く配置がみられ、その中央は空白域となっている。この環状に並ぶ土坑・ピットの中には、第１号土器棺墓（ＳＺ１）や第１号配石土壙（ＳＸ１）も含まれている。また、15ｕ～16ｕグリッド付近にも直径4.5ｍの円形を描く配置がみられ、その中央には楕円形の土坑（遺物は出土せず）が位置する。19ｓグリッドや20ｓグリッド付近にも同規模の配置がみられそうである。19ｓグリッドでは、直径4.5ｍの円形内に土坑・ピットが並び、この中には、第７～９・11号土器棺墓（ＳＺ７～９・11）が含まれる。また、その中央付近には、第３号配石土壙（ＳＸ３）が位置する。20ｓグリッド付近でも、東側・南側で土坑・ピットが直径４～4.5ｍの円形を描く配置が認められ、中央やや西よりの位置に楕円形の土坑がみられる。これらの土坑・ピットおよび土器棺墓・配石土壙の配置にみられる環状構造の性格についての特定は困難であるが、少なくとも、土器棺墓や配石土壙を含むことより、墓に関連するものと言えそうである。その時期としては、晩期と考えられる。近畿地方では、後期後半から環状の配置をもつ土壙墓群が作られるようになり、晩期になると、環状土壙墓群などの環状の墓域が顕著となるが、[1] 本遺跡でみられる土坑・ピット等の配置にみられる環状構造についても、そうした性格をもつ可能性が考えられる。

1）向出遺跡（大阪府阪南市）・日下遺跡（大阪府東大阪市）などでこうした例がみられる。
　　渡辺昌宏　1998　「近畿における縄紋後・晩期の墓制」
　　『縄紋時代の祈り・弥生の心』　大阪府立弥生文化博物館



第29図　土坑・ピット等に認められる環状の配置

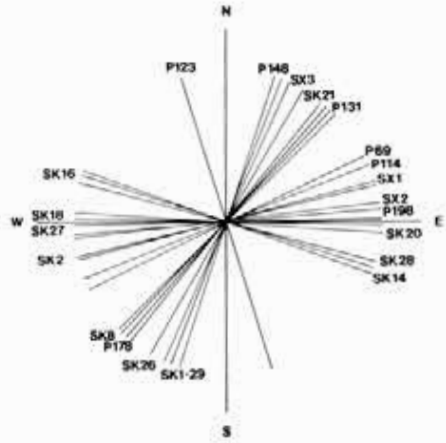
(7)　土坑・ピットおよび配石土壙の主軸の方向について

土坑・ピットの中で、楕円形を呈し長軸をもつもの（第31図）のうち、遺物の出土した土坑・ピットおよび配石土壙（ＳＸ）の主軸を求めたのが第６表である。さらに、これらの主軸の方向をグラフ化したものが第30図である。これを見ると、楕円形を呈する土坑・ピットの主軸には偏りがみられ、概ねＳ—18°—ＷからＷ—20°—Ｎの範囲に入りそうである。配石土壙の３基（ＳＸ１～３）の主軸もこの中に入り、これらの遺構は一定の方向を意識して構築されたと考えられる。なお、遺物の出土していない楕円形を呈する土坑・ピットの主軸の方向についても同様のことが言えそうである。しかしながら、前にみた土器棺墓（ＳＺ）の主軸の方向（第26図）とは、若干異なり、相関関係は認められない。

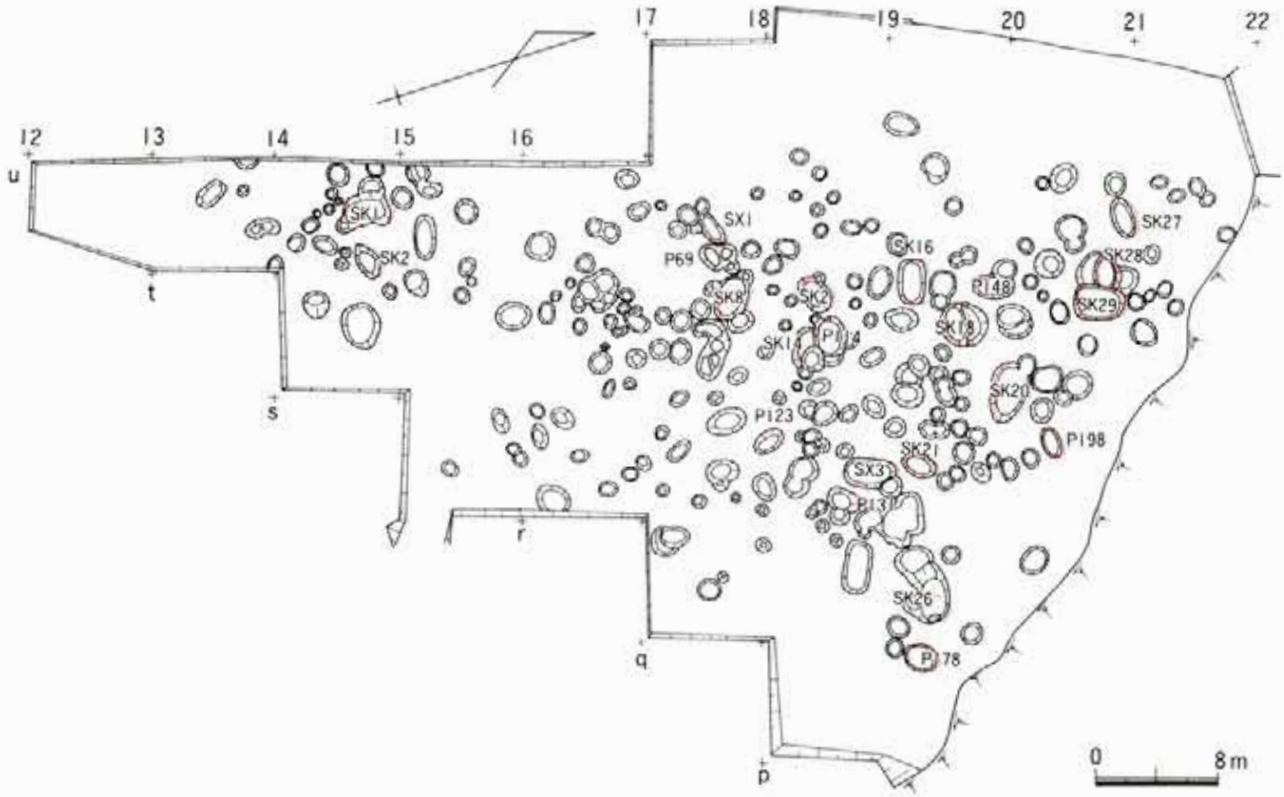
第６表　楕円形を呈する遺構の主軸の方向

遺構名	主軸の方向	遺構名	主軸の方向
ＳＸ　１	Ｗ-１５°-Ｓ	ＳＫ２６	Ｎ-３０°-Ｅ
ＳＸ　２	Ｗ-　７°-Ｓ	ＳＫ２７	Ｗ-　１°-Ｓ
ＳＸ　３	Ｎ-２４°-Ｅ	ＳＫ２８	Ｗ-１５°-Ｎ
ＳＫ　１	Ｎ-２１°-Ｅ	ＳＫ２９	Ｎ-２１°-Ｅ
ＳＫ　２	Ｗ-１４°-Ｓ	Ｐ　６９	Ｗ-２６°-Ｓ
ＳＫ　８	Ｎ-４５°-Ｅ	Ｐ１１４	Ｗ-２２°-Ｓ
ＳＫ１４	Ｗ-２０°-Ｎ	Ｐ１２３	Ｎ-１７°-Ｗ
ＳＫ１６	Ｗ-１８°-Ｎ	Ｐ１３１	Ｎ-４２°-Ｅ
ＳＫ１８	Ｗ-　１°-Ｎ	Ｐ１４８	Ｎ-１８°-Ｅ
ＳＫ２０	Ｗ-　４°-Ｎ	Ｐ１７８	Ｎ-４１°-Ｅ
ＳＫ２１	Ｎ-３０°-Ｅ	Ｐ１９８	Ｗ-　５°-Ｓ

＊　ＳＸ(配石土坑)及び、縄文時代の遺物の出土したＳＫ・Ｐｉｔのうち、楕円形を呈し長軸を求められるものについて主軸を求めた。



第30図　配石土壙(ＳＸ)及びＳＫ・Pitの主軸の方向



第31図　楕円形を呈し長軸をもつ土坑・ピット(赤印)

第5章　遺　物

第1節　遺物の概略

本遺跡で出土した遺物は、縄文時代の遺物30,335点、その他の時代の遺物172点の計30,507点である。

縄文時代の遺物としては、土器25,168点、石器5,167点が出土し、このうち上の段からは、12,299点（土器8,283点、石器4,016点）、下の段からは、17,923点（土器16,812点、石器1,111点）出土した。表採は113点（土器73点　石器40点）であった。土器・石器共に上の段と下の段とでは時期差によると考えられる様相の違いがみられた。

なお、その他の時代の遺物としては、灰釉陶器片4点、近世以降の陶磁器片165点、硯片1点、金属片2点の計172点が出土した。多数の小片が出土した陶磁器片は、18世紀（江戸時代後期）以降のもので、156点は下の段から出土した。硯は泥岩製であるが時期は不明である。小片ながら、灰釉陶器片の出土は注目に値する。[1] 灰釉陶器のうち、1点は10世紀前半のものであるが、他の時期は不明である。器種は4点とも椀である。

1）同じ西谷の戸入村平遺跡では、灰釉陶器の出土は無かった（第4集）。

第2節　縄文土器

第1項　概　略

今回の調査では25,168点の土器(片)が出土した。その地点(段)別、分類別集計表は第7表の通りである。上の段から出土した土器は早期と中期を主体とするのに対して、下の段から出土した土器は後期後葉から晩期を主体とし、明確な時期差が認められた。以下、土器については遺構出土と包含層出土、さらに包含層出土土器については、上の段出土と下の段出土に分けて述べていく。

第7表　土器集計表

種別＼時期		早期	前期	中期	後期	晩期	(後)・晩、その他	一括	合計
	分類	1群	2群	3群	4群	5群	6群	—	
上の段	遺構	1	0	0	0	0	0	0	1
	包含層	1473	13	2720	6	38	40	3992	8282
	小計	1474	13	2720	6	38	40	3992	8283
下の段	遺構	0	0	2	13	27	636	276	954
	包含層	1	0	89	163	165	7390	8050	15858
	小計	1	0	91	176	192	8026	8326	16812
表採		0	0	3	0	0	10	60	73
総計		1475	13	2814	182	230	8076	12378	25168

＊　下の段で出土した土器で第6群に分類したもののほとんどは、(後)晩期の可能性が高い。
約2cm以下の小片で分類不可能なものを一括とした。

第８表　上の段　土器集計表

種別	時期	早期																			前期			中期														
	分類	押型			茅山	八ッ崎 柏畑	上ノ山	入海(Ⅱ)	石山	塩屋 下層	天神山	塩屋 上層	条痕		縄文	刺突	不明	底部	無文		清水ノ上Ⅱ	諸磯	その他	中期前半		中期後半				その他の中期				後期	晩期	不明	一括	計
		高山寺	穂谷	その他									(薄)	(厚)					口縁	胴部				北屋敷	その他	船元Ⅲ	船元Ⅳ	里木Ⅱ	その他	不明	土製品	底部	無文					
		1・1・a	1・1・b	1・1・c	1・2	1・3・a	1・3・b	1・3・c	1・3・d	1・3・e	1・3・f	1・3・g	1・3・h		1・4・a	1・4・b	1・4・c	1・4・d	1・4・e		2・1	2・2	2・3	3・1・a	3・1・b	3・2・a・b	3・2・c	3・2・d	3・2・e	3・3・a	3・3・b	3・3・c	3・3・e	4	5	6		
遺構	Ｓ１２																			1																		
	小計																			1																		
包含層	２７Ｂ																			1						1											3	5
	２８Ａ																			1						1		1	2				1				5	11
	２９ｚ																			1							7	11	8				1				14	42
	２９Ａ												1							4		1				2		4	3				6				23	44
	２９Ｂ																			2										1			3				7	13
	２９Ｃ					2			1								1			5						1	7	4	6			1					14	41
	２９Ｄ	1				1			2		1	10	18				2	1		23						1	1	3	6				20			3	88	182
	２９Ｅ					10							2				2	1		4								7	11			2	11	1			29	78
	２９Ｆ					3			1				1				1			7		1											1			1	25	43
	３０ｚ											1							1	5						2		4	4			1	2			1	10	30
	３０Ａ					4	2		1			8	8							25		3			2	4	8	24	1			1	35				101	227
	３０Ｂ					2						2	13						1	27						2	2	24	22				6			1	96	199
	３０Ｃ	2	1			6						1	1			3	2			19		1				4	23	14	29				20			1	86	213
	３０Ｄ		4			5	2				3	4	4	2				1	1	30				1		2	30	27	11				23	1			154	305
	３０Ｅ				2	3							4	1				1	2	22							3	5	10				12				72	137
	３０Ｆ																																2			1		3
	３１ｙ					1							1				3			5								1	5								5	21
	３１ｚ												2				1			2						2	2	7	3								13	32
	３１Ａ					4			1			1	23				1			51		1					7	9	13				9			1	82	203
	３１Ｂ		3		1	2		1	5			5	7		1		5		1	86	1	1					3	10	4			1	38			3	346	524
	３１Ｃ		2			8	1	4	11			2	37	3			2	1		126		1				1	3	22	5				61			3	322	615
	３１Ｄ		1		8	3	2					6	6	2	3	3	1	1		59			3	3		1	32	23	18		1	1	45			3	208	433
	３１Ｅ					5	2			4			3	8			2	2		23								5	2		1	1	12			1	42	113
	３２ｙ												1				1	1		15								35					1			1	41	96
	３２ｚ								1				3			1				8								1	8								23	45
	３２Ａ					1						2	15							16								11	3				3				47	98
	３２Ｂ					4		1	2			5	45	7	1	1			1	67								2	6				7			2	164	315
	３２Ｃ		1		1	7		1	2			3	43	6			1	1		26						3	17	23					6			2	116	259
	３２Ｄ		1			2		3	1				2	6			3			30							3	6	18			1	19				81	176
	３３ｙ		3	1		22	1						31	7			3			54						2	16	101	25			1	77		36	5	585	970
	３３ｚ		1										1				2	2	1	45				7	2	63	131	369	126	3		13	156		1	2	646	1571
	３３Ａ						1									1				4						2	2	13	3								9	35
	３３Ｂ												1							5								3	2				3			1	8	23
	３３Ｃ												3				2			24								28	3				4				33	97
	３４ｙ												2							4							27	3	5								36	77
	３４ｚ					2											1			6						44	170	39	39			2	49		1	6	341	700
	３４Ａ																			1							1		1				1			1	3	8
	３４Ｂ																			3								1	2				4				5	15
	３５ｙ																																1	1			4	6
	３５ｚ					1	1													6							40	55	22	1			36	3		1	101	267
	３５Ａ					1			1																			1	1				2				1	7
	３６ｙ																																				3	3
	小計	3	7	1	12	99	12	10	29	4	4	50	278	42	5	9	36	12	8	842	1	9	3	11	4	138	535	896	427	5	2	25	677	6	38	40	3992	8282
	中計	早期 1473																			前期 13			中期 2720										後期 6	晩期 38	不明 40		
合計		3	7	1	12	99	12	10	29	4	4	50	278	42	5	9	36	12	8	843	1	9	3	11	4	138	535	896	427	5	2	25	677	6	38	40	3992	8283

第９表　下の段　土器集計表

種別	時期	早期	中期	後期						晩期										(後・)晩期か												一括	計
										前葉		中葉			後葉					無文口縁					胴部	底部				浅鉢(椀)	不明		
															突帯文																		
	分類			前葉	中葉	後葉	注口	浅鉢	精製	八日市～御経塚	滋里Ⅱ	滋里Ⅲa	滋里Ⅲb 稲荷山	中屋 大洞系	五貫森	馬見塚	浮線文	浅鉢(壺)	a①	a②	b①	b②	c		尖底 丸底	凹底	平底	不明				
		1	3	4・1	4・2	4・3	4・4	4・4	4・5	5・1・a	5・1・b	5・2・a	5・2・a	5・2・b	5・3・a	5・3・a	5・3・b	5・4	6・1・a①	6・1・a②	6・1・b①	6・1・b②	6・1・c	6・2	6・3・a	6・3・b	6・3・c	6・3・d	6・4	6・5		
遺構	ＳＺ											3	15			2			2					2		1						25
	ＳＸ																							19						1	19	39
	ＳＫ・Ｐ		2		1	12					1				3	1		2	11		10		9	546	1	4	4	5		21	257	890
	小計		2		1	12					1	3	15		3	3		2	13		10		9	567	1	5	4	5		22	276	954
包含層	１３ｕ																						1	24							11	36
	１４ｕ																			1			1	6			1			1	45	55
	１５ｔ		1							1									3	1				47	1			1		3	63	121
	１５ｕ													1			2		3	13			1	120	1		2				63	206
	１６ｓ				2					16				1	1	1			7	2	10	2	2	119	1	1	7	2	1	11	285	471
	１６ｔ			1						1					2				2		1			42	1	2	1	3		4	60	120
	１６ｕ		3							1				2						4		2	2	146	1			2		3	208	374
	１７ｓ				1					3									3	4	7		2	90	1		4	3		4	140	262
	１７ｔ																						1	15							29	45
	１７ｕ		2							1				1	2	2			3	5	6		6	131		2				3	216	380
	１８ｒ																		4	1	1			48			2	5			61	122
	１８ｓ						1			1					3				2	2	4		2	84		1	7	2		4	181	294
	１８ｔ						1												2	4	8		1	50					2	2	142	212
	１８ｕ					2		1		2				1					5	5	7	1	3	242		2			1	12	317	601
	１８ｖ			1																	1										5	7
	１９ｑ														1									20			1			4	29	55
	１９ｒ		2											1					1	4	3	1	2	49		1	1	2		6	67	140
	１９ｓ				1	1								1	3			3	3	4	2	2	5	162	1		1	4		12	192	397
	１９ｔ					1									2					1	5	1	3	135				2	1	4	183	338
	１９ｕ		4			2				1				1					3	3	8		3	210		2	2	5	1	8	242	495
	１９ｖ													1										6						4	12	23
	２０ｒ		3			2				1					1	1			5	12	10		5	238	1		3	2		13	428	725
	２０ｓ		2			2		1		1				1	9	8		1	6	4	9	3	2	304	1	2	10	2		11	319	698
	２０ｔ					1			3						17	6	1	2	22	10	16	1	2	502	1	5	11	15		59	639	1313
	２０ｕ		6		2	5								2	2			1	13	3	17	2		219	1	2	5	8		4	354	646
	２０ｖ		1			4								1						5	4			44		1	2			11	140	213
	２１ｓ														1	1							2	46						1	26	77
	２１ｔ		6	2	3	43		1		4				6	13	1		3	39	31	43	4	25	1317		10	13	12	7		1497	3080
	２１ｕ		14	4	3	48	4			2	1				2			1	23	9	27	2	5	567	1	4	6	11	6	28	779	1547
	２１ｖ		1		1																2			16						5	29	54
	２２ｔ																		5	4	6		3	133		2		2		3	128	286
	２２ｕ	1	43	2	11	6				1				9	2			4	45	40	24	3	7	1022		2	4	10	4	41	1120	2401
	２２ｖ		1																	1				18						4	40	64
	小計		89	10	24	117	6	3	3	36	1	0	0	29	61	20	3	15	199	173	221	24	86	6172	12	39	83	93	23	265	8050	15858
	中計	早期 1	中期89			後期 163							晩期 165										(後・)晩期か 7390								8050	15858
合計		1	91	10	25	129	6	3	3	36	2	3	15	29	64	23	3	17	212	173	231	24	95	6739	13	44	87	98	23	287	8326	16812

＊　包含層出土無文粗製土器（第６群土器）の多くは、滋賀里Ⅲｂ式・稲荷山～西之山式土器と考えられる。

第2項　土器分類について

本遺跡では縄文時代早期から晩期までの土器が出土した。今回の報告にあたり、現在用いられている型式設定を適用しつつ、文様要素・文様構成・型式等を考慮し、次の第1～6群に分類した。各群の内容は次の通りである。

第1群土器　縄文時代早期の土器
- 1類　押型文土器
  - a種　高山寺式土器
  - b種　穂谷式土器
  - c種　その他の押型文土器
- 2類　条痕文系土器
  - 茅山下層式土器
- 3類　東海条痕文系土器
  - a種　八ッ崎Ⅰ式～粕畑式土器
    - (1)　八ッ崎Ⅰ式
    - (2)　粕畑式
  - b種　上ノ山式土器
  - c種　入海式土器
  - d種　石山式土器
  - e種　塩屋下層式土器
  - f種　天神山式土器
  - g種　塩屋上層式土器
  - h種　条痕文のみのもの
- 4類　その他の早期の土器
  - a種　縄文のみのもの
  - b種　刺突の施されたもの
  - c種　型式等不明の土器
  - d種　底部
  - e種　無文土器

第2群土器　縄文時代前期の土器
- 1類　清水ノ上Ⅱ式に類似した土器
- 2類　諸磯式土器
- 3群　その他の前期の土器

第3群土器　縄文時代中期の土器

1類　中期前半の土器

a種　北屋敷Ⅱ式土器

b種　その他の土器

2類　中期後半の土器

a種　船元Ⅲ式土器

b種　隆帯や沈線を多用し、船元Ⅲ式が在地化したと考えられるもの[1]

c種　船元Ⅳ式土器

d種　里木Ⅱ式[2]に類似する土器

e種　その他の土器

3類　その他の中期の土器

a種　型式等不明の土器

b種　土製品（土製加工円盤）

c種　底部

e種　無文土器

第4群土器　縄文時代後期の土器

1類　後期前葉の土器

2類　後期中葉の土器

3類　後期後葉の土器

4類　注口土器・浅鉢

5類　その他の後期の土器（精製土器）

第5群土器　縄文時代後期末葉～晩期の土器

1類　後期末葉～晩期前葉の土器

a種　八日市新保式～御経塚式土器

b種　その他の土器

2類　晩期中葉の土器

a種　滋賀里Ⅲa式および滋賀里Ⅲb式・稲荷山式～西之山式土器

b種　中屋式（大洞系）・その他の土器

3類　晩期後葉の土器

a種　突帯文系の土器

b種　浮線網状文系の土器

4類　浅鉢・壺

第６群土器　後晩期と考えられるが、時期を決めかねる無文粗製土器

１類　無文口縁

ａ種　口縁部が外反するもの

①　口縁部に刺突や押し引きのみられないもの

②　口唇部に刺突や押し引きのみられるもの

ｂ種　口縁部が内湾するもの

①　口唇部に刺突や押し引きのみられないもの

②　口唇部に刺突や押し引きのみられるもの

ｃ種　その他不明なもの

２類　胴部片

３類　底部

ａ種　尖底および丸底

ｂ種　凹み底

ｃ種　平底

ｄ種　不明

４類　浅鉢・椀

５類　その他

1）戸入村平遺跡（武藤1994）のＣ２群土器では、貼付隆帯による施文を基調とするキャリパー形口縁を持つ器形の土器を船元Ⅲ式の在地化したものとしている。

2）増子康真氏は、東海西部中期後半の地文に撚糸文を施す土器を中富Ⅰ～Ⅲ式に分類している。

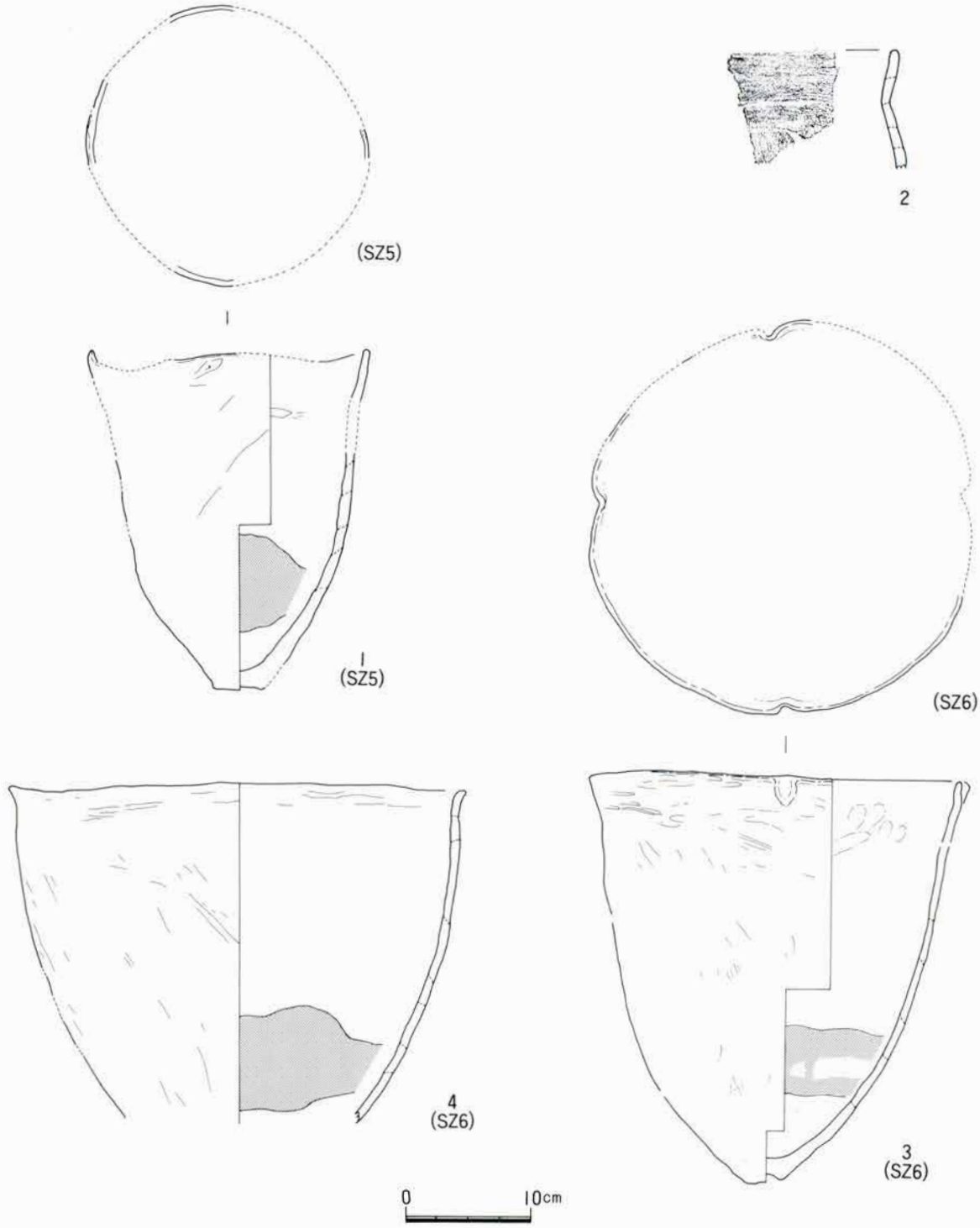
第３項　遺構出土土器

①　焼礫集積遺構出土土器（第39図　28　図版18）

(28)は第２号焼礫集積遺構（ＳＩ２）より出土した。厚手で、胎土に繊維を含む早期の土器である。

②　土器棺墓に利用されていた土器（第32～37図　１～24　図版12～15）

本遺跡で出土した土器棺墓に利用された土器の多くは、晩期中葉の近畿地方でいう滋賀里Ⅲｂ式、東海地方でいう稲荷山式に併行する土器と考えられる。これらの土器の調整手法としては、篦状工具もしくは、（丸）棒状工具によると考えられる、比較的幅狭の条痕様にもみえる削り調整の施されたものが多い。こうした調整手法について、「戸入村平遺跡」（第４集）の中では、『粗いミガキ』と呼称し、当概期（晩期中葉）の粗製土器に多用される調整手法としている。ここではそれを受けて、同様の調整手法について『粗いミガキ』と呼称することとする。



第32図　遺構出土土器(1)　SZ5　SZ6

(1)はＳＺ５の棺身に利用されていた土器で、口径約23cm、器高約26.4cmを測る。口縁部は頸部から外反気味に開き端部でやや内湾する。口縁部に最大径を持つ。波状口縁を呈し、４単位の波頂部のうち、対向する２つは三角形の山形を呈し、端部を外側から指で押さえている。他の２つの波頂部は半円形の緩やかな曲線を持つ。底部は底径約3.9cmと小さく、やや凹んでいる。調整手法は撫でを主体とⅣ、内面には横位の粗いミガキが観察できる。器厚は７～８mmを測り、他の土器棺に使われていた土器と比べてやや厚手である。晩期前半と考えられる。なお、北裏遺跡（岐阜県可児市）でも同様の器形の土器が出土している。[1]

(2)は口縁部片で、(1)と共に出土した。口径は約27.0cmを測る。口縁部は頸部より外反気味に立ち上がり、端部はやや内湾する。比較的厚手で、口縁端部は丸みを持って仕上げられている。胎土は緻密な感じで、長石・金雲母を含み、焼成は良好である。

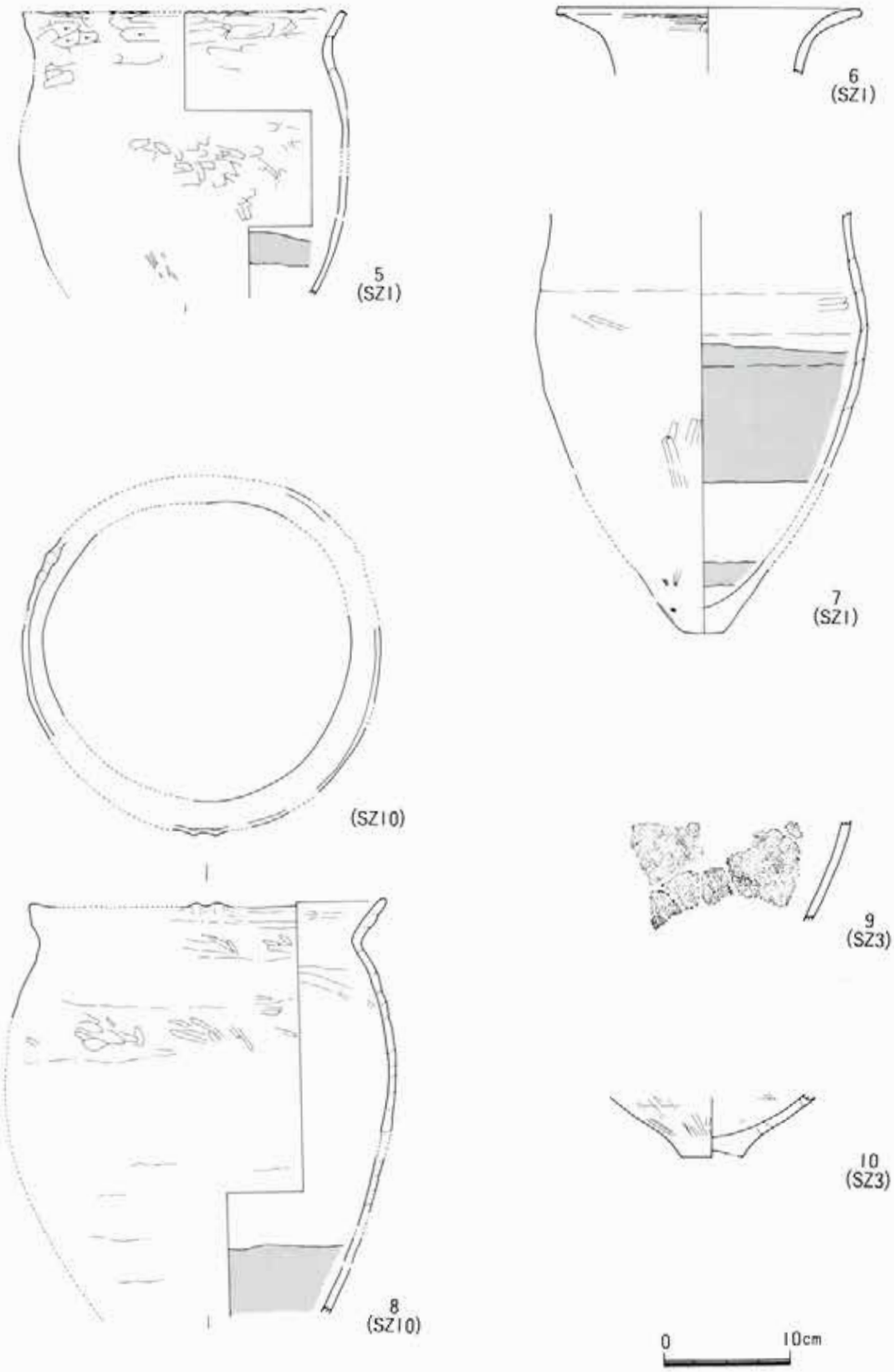
(3)はＳＺ６の棺身に利用されていた土器で、口径約29.6cm、器高約31.9cmを測る。口縁部は頸部より外反して大きく開き、口縁部に最大径を持つ。口縁部には、４単位で指頭によると思われる内側への押圧による凹み（逆注ぎ口状の凹み）がみられる。[2] 胴部は膨らまず、尖底で先端部がやや凹む底部に向かって緩やかな曲線を描く、砲弾形を呈する。調整手法は、口縁部から頸部にかけては横位の粗いミガキが観察される。頸部から胴上半部にかけては斜位（左上から右下へ）の、胴下半部にかけては縦位の粗いミガキが一部観察できるが、撫で調整が主体である。内面にも横位の撫でが施されており、一部指頭による圧痕も残る。内面下半部には、炭化物が幅６～８cmの帯状に残る。この炭化物の帯の中央部の大半は欠落し、上下に２本（２重）の炭化物の帯が認められる（図版15）。(3)は、凹み底を持つことからも、西日本的で、滋賀里Ⅱ～Ⅲａ式併行と考えられる。[3]

(4)はＳＺ６の蓋として利用されていた土器で、口径約35.7cmを測り、底部を欠損するものの残存器高約26.1cmを測る。頸部から外反気味に立ち上がる幅の狭い口縁部を持つ。口縁端部は、やや丸みを持って仕上げられている。口縁部に最大径を持ち、頸部以下の胴部は、底部に向かって緩やかな曲線を描きながら収束していく。調整手法は、ミガキを主体とし、口縁部には横位の粗いミガキが観察される。内面にも、口縁部に横位の粗いミガキが観察される。土器は全体に赤褐色を呈しており、胎土は比較的緻密で、長石・金雲母を含んでいる。(3)と同様に滋賀里Ⅱ～Ⅲａ式と考えられる。

(5)と(6)はＳＺ１に利用されていた土器で、(5)は底部を欠くものの、口縁部と胴部の約２／３が残存し、口径約25.4cm、残存器高約22.8cmを測る。口縁部は頸部から外反気味に開き、口縁端部には棒状工具による連続刺突が施されている。胴部は膨らみ、最大径約25.8cmを測る。調整手法は口縁部から頸部にかけて篦状工具による横位の削りが施され、胴部にも撫でを主体とするものの同様の工具による調整が残る。胴下半部には斜位の粗いミガキがみられる。内面は、口縁部から頸部にかけて篦状工具による横位の削りが施されている。褐灰色を呈し、焼成良好である。胎土に若干の長石を含むが雲母はみられない。滋賀里Ⅲｂ（新）と考えられる。(6)は口縁部片で、頸部から大きく外反し壺状の器形と考えられる。口縁端部はやや丸みを持って平坦に仕上げられている。調整手法は撫でを主体とし、外面には横位の削り痕も観察できる。やや厚手で、(7)と同一個体である可能性も考えられる。

(7)はＳＺ１の棺身に利用されていたと考えられる土器で、口縁部を欠損するも胴部の約１／２と底部が残存し、胴部最大径約26.2cm、残存器高約32.6cmを測る。底部は平底で、底径約3.4cmとかなり小さい。調整手法は撫でを主体とし、横位および縦位の削りが施されている。内面にも横位の削りが観察できる。やや厚手で、胎土には雲母を含まない。

(8)はＳＺ10の棺身に利用されていた土器で、口径約27.8cm、残存器高約32.9cmを測る。口縁部は頸部から「く」の字状に強く外反し、端部はやや面を持ちながらも、丸みを持って仕上げられている。瘤状の小突起２個を３単位で配す。胴部は膨らみを持ち、最大径約31.1cmを測る。底部は欠損し、不明である。調整手法は、撫でを主体とし、頸部および胴上半部に横位・斜位の削り痕が認められる。内面にも同様の工具による削り痕が口縁部では横位・頸部から胴上半部にかけては斜位に残る。外面には輪積み痕が残る。比較的厚手の土器で、にぶい黄褐色から褐色を呈し、胎土には長石を含むが、



第33図　遺構出土土器(2)　SZ1　SZ10　SZ3

雲母はみられない。器形は北陸的であるが、滋賀里Ⅲｂ式併行と考えられる。

(9)と(10)はＳＺ３に利用されていた土器で、(9)は胴部片で、調整手法としては撫でが施されており、胎土に雲母はみられない。(10)は底部片で、底部は径約4.8cmの凹み底である。調整手法はミガキを主体とし、縦位および斜位のミガキ痕が観察できる。焼成良好でにぶい褐色を呈し、(9)とは別個体である。

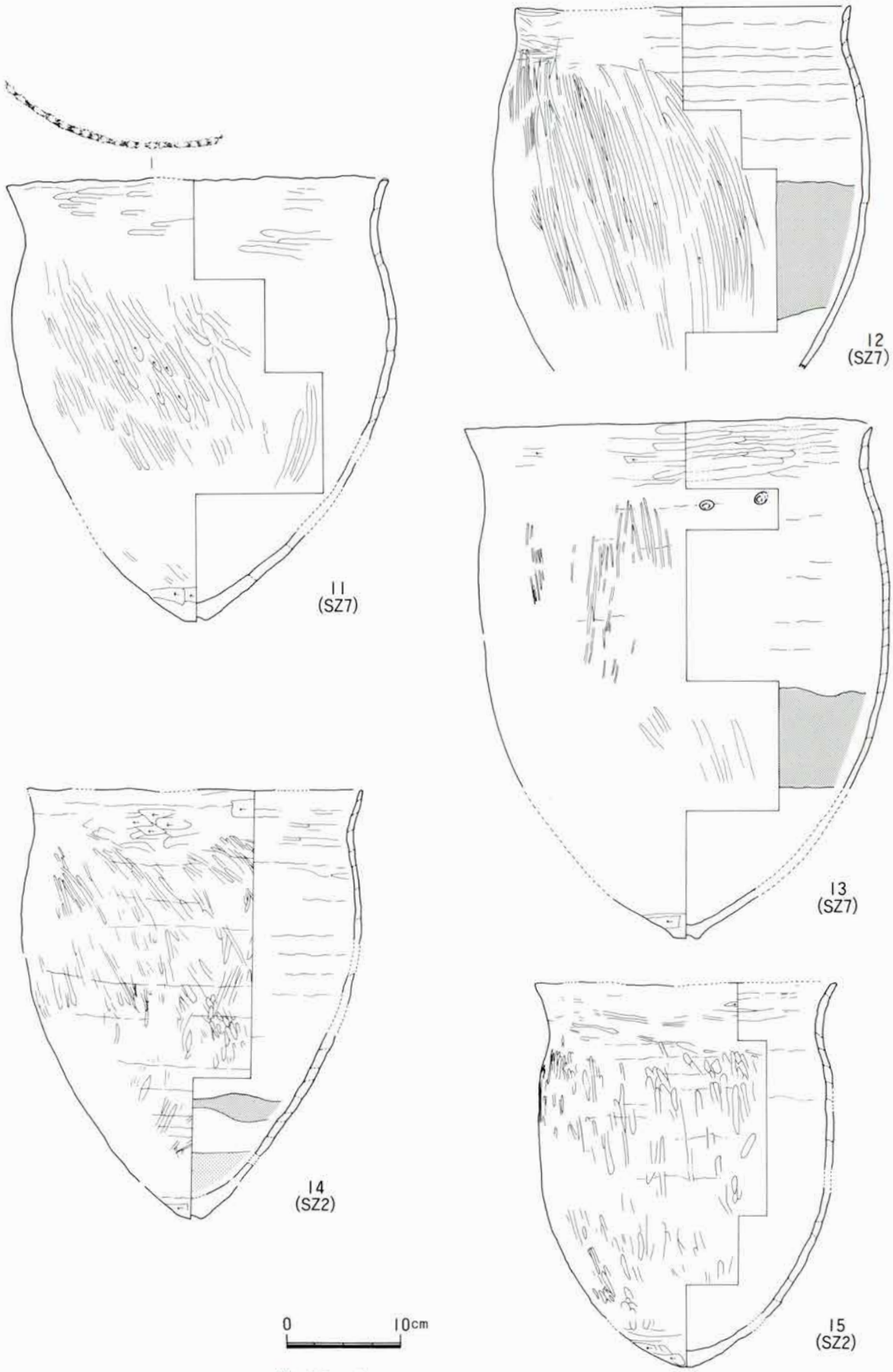
(11)はＳＺ７の棺身に利用されていた土器で、口径約33cm、器高約38.2cmを測る。口縁部は頸部から外反気味に開き、端部には連続圧痕がみられる。胴上半部に膨らみを持ち、最大径約33.2cmを測る。尖底状の底部を持ち、先端部は凹んでいる。調整手法は、口縁部には横位の、胴部には斜位の粗いミガキが施され、底部付近には回転篦削りが施されている。内面では、口縁部付近に横位の粗いミガキが観察される。滋賀里Ⅲｂ式と考えられる。

(12)はＳＺ７の蓋として利用されていた土器で、全体の約１／４が残存し底部は欠損する。口径は約29cmを測り、残存器高は約28.6cmである。口縁部は頸部からほぼ垂直、やや外反気味に立ち上がり、口縁端部はやや丸みを持って仕上げられている。胴部は膨らみ、最大径約31.6cmを測る。調整手法は、口縁部では横位、頸部から胴部にかけては斜位の粗いミガキが施されており、内面は撫でを主体とし、口縁部から頸部にかけて輪積み痕も比較的よく残る。焼成は良好で、にぶい橙色を呈し、胎土には長石・金雲母を含む。滋賀里Ⅲｂ式と考えられる。

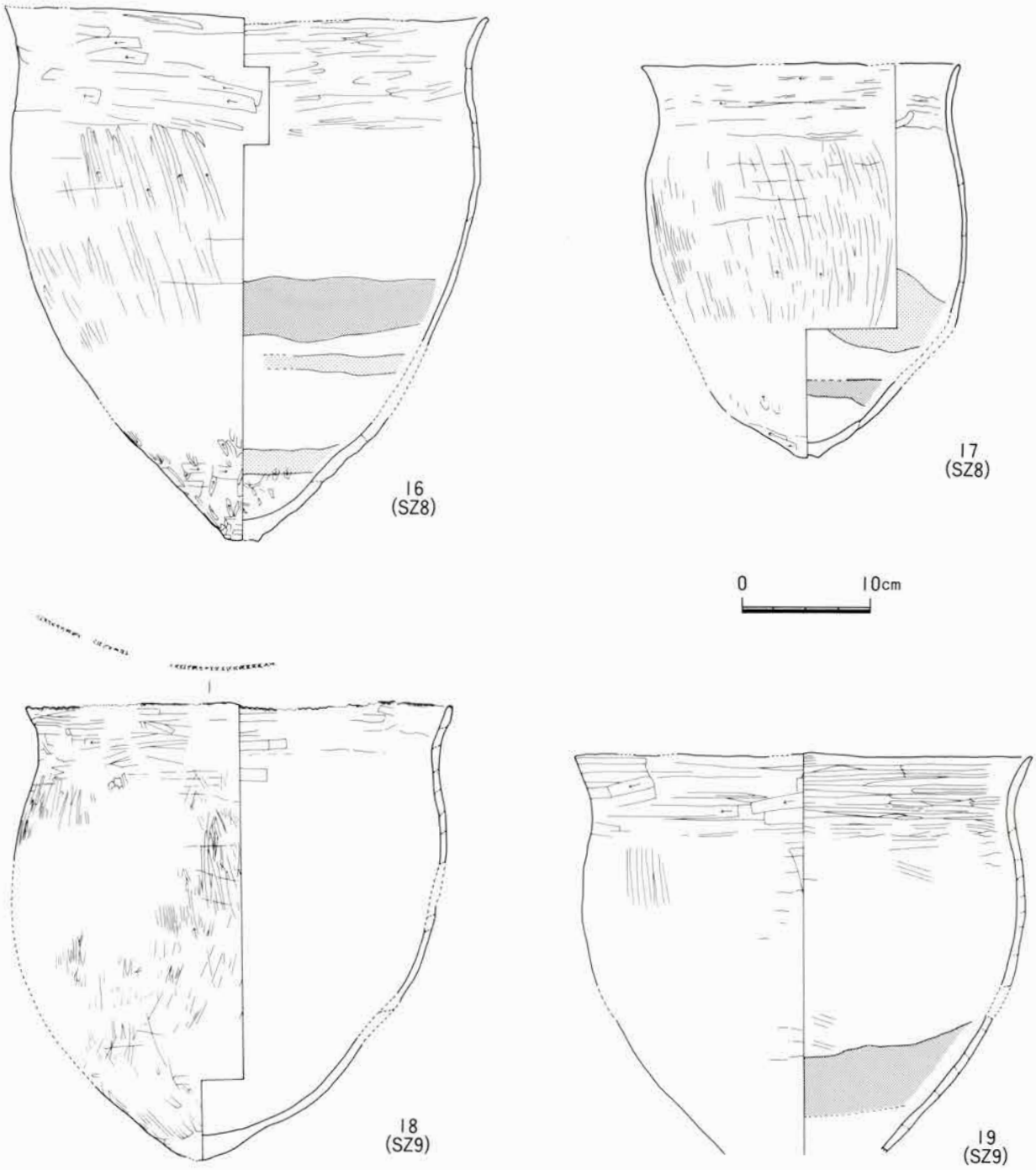
(13)もＳＺ７の蓋として利用されていた土器で、全体の約１／２が残存し、胴下半部は欠損する。口径は約35.3cmを測り、推定器高は約32.5cmである。口縁部は、頸部から垂直、やや外反気味に立ち上がり、口縁端部は薄くなりながら尖り気味に外反する。胴部は膨らみを持ち、最大径約35.6cmを測る。尖底気味の底部を持ち、先端部は凹み底となっている。調整手法は、口縁部で横位、頸部から胴部にかけては縦位から斜位（左上から右下）の粗いミガキが施され、底部付近には回転篦削りが施されている。内面は、口縁部に横位の粗いミガキ調整が施されている。なお、内外面共に輪積み痕が観察でき、また、頸部付近には、補修孔２個が残る。滋賀里Ⅲｂ（古）と考えられる。

(14)はＳＺ２の棺身として利用されていた土器で、口径約28.9cm、器高約38.0cmを測る。口縁部は頸部より外反気味に開き、端部は丸みを持たせながらもやや平坦に仕上げられている。胴部は膨らみを持ち、最大径約29.2cmを測る。底部は尖底で先端部がやや凹む。調整手法は、口縁部から頸部にかけては篦状工具による横位の削りが施され、底部にも篦削り痕が残る。頸部から胴部にかけては、斜位および縦位の粗いミガキが施されている。内面は、口縁部から頸部にかけて幅狭の横位の削りが観察され、下半部には炭化物の帯が複数みられる。内面には輪積み痕がよく残る。橙色を呈し、胎土に長石・金雲母を含む。滋賀里Ⅲｂ式と考えられる。

(15)はＳＺ２の蓋として利用されていた土器で、全体の約１／３が残存し、口径約26.0cm、残存器高約28.8cmを測る。口縁部は頸部から外反気味に開き、口縁部に最大径を持つ。口縁端部はやや薄くなり、少し丸みをもって仕上げられている。胴部は少し膨らみを持ち、口縁部とほぼ同じ径（約25.4cm）を持つ。底部は尖底気味に丸く仕上げられており、凹みは持たない。調整手法は口縁部から頸部にかけては横位の、胴部には縦位の粗いミガキが施され、底部には回転篦削りも観察される。内面には横位の削りが施されている。なお、内外面ともに輪積み痕がよく残る。にぶい褐色を呈し、胎土に長石・金雲母を含む。滋賀里Ⅲｂ式と考えられる。



第34図　遺構出土土器(3)　SZ7　SZ2



第35図　遺構出土土器(4)　SZ8　SZ9

(16)はＳＺ８の棺身に利用されていた土器で、口径約37.6cm、器高約41.0cmを測る。口縁部は頸部から外反気味に開き、口縁部に最大径を持つ。胴部はやや膨らみを持ち、胴部最大径も約36.6cmを有する。底部は尖底気味で、底径は約2.6cmを測り、やや凹んでいる。調整手法は、口縁部および底部には箆状工具による横位の削りが施され、胴部と底部には斜位（底部から口縁部の方向へ）の粗いミガキが施されている。内面は、口縁部から頸部にかけて、横位の幅狭の削りが施され、底部付近にも斜位の粗いミガキの痕が観察される。内面下半部には、炭化物が２～３本の帯状に残る（図版15）。焼

成は良好で、にぶい橙色を呈し、胎土には長石・金雲母を含む。滋賀里Ⅲｂ（新）と考えられる。

(17)もＳＺ８の棺身に利用されていた土器で、口径約24.5cm、器高約30.5cmを測る。口縁部は頸部からやや外反気味に開き、口縁端部も尖り気味に外反する。胴部はやや膨らみを持ち、最大径約24.6cmを持つ。底部は尖底で、先端部がやや凹む。調整手法は口縁部から頸部にかけては横位の調整の痕が観察できる。底部付近には、回転篦削りが施され、胴部には縦位の粗いミガキが底部から口縁部方向に施されている。内面では、口縁部から頸部にかけて横位の粗いミガキがみられ、下半部には炭化物の帯が２本観察できる。にぶい黄橙色を呈し、胎土には長石を含む。滋賀里Ⅲｂ式と考えられる。

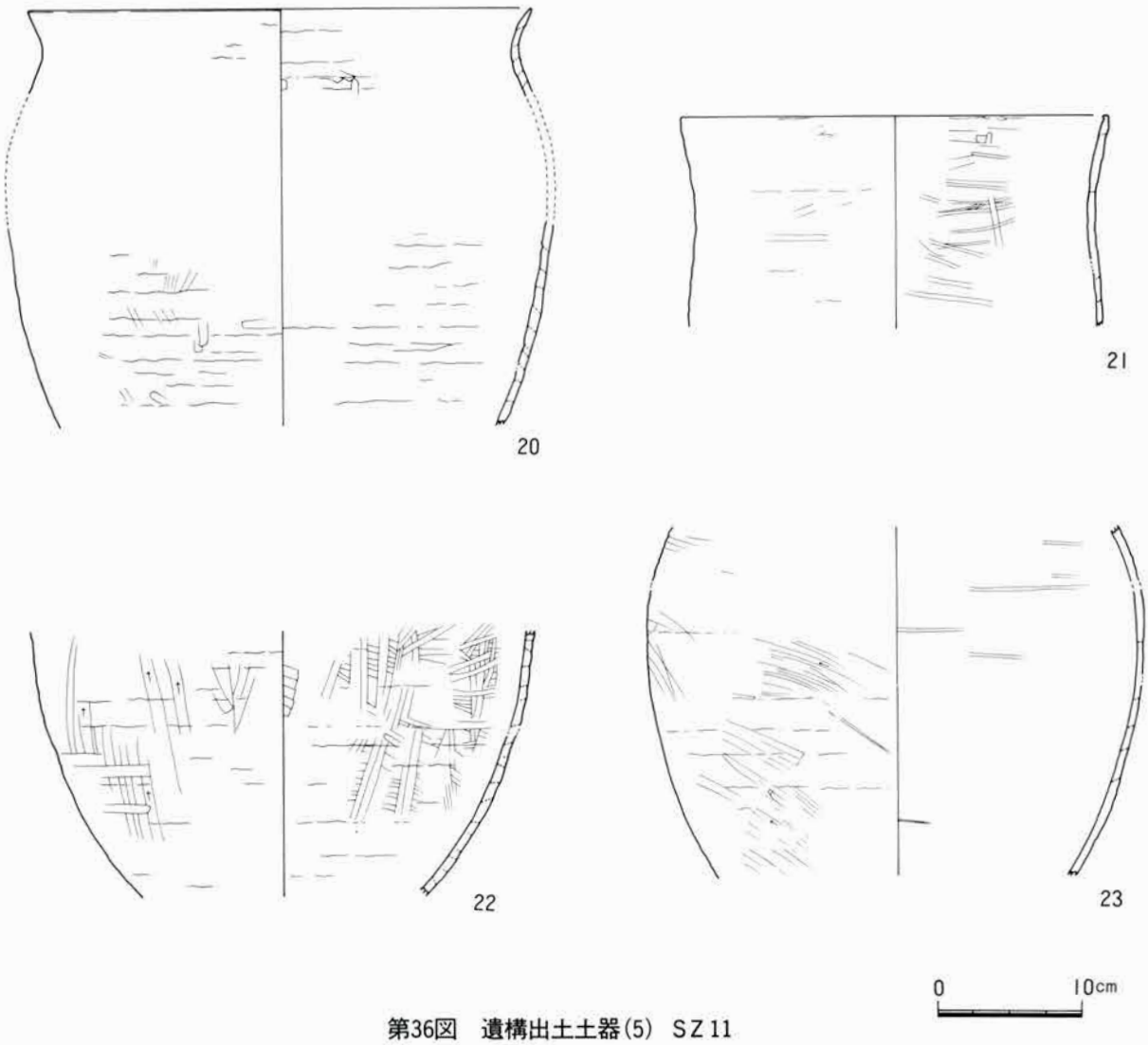
(18)はＳＺ９の棺身に利用されていた土器で、口径約33.3cm、器高約35.3cmを測る。口縁部は、頸部から外反気味に開き、口縁端部には篦状工具による押し引き状の連続刻みが施されている。胴部はやや膨らみを持ち、胴部最大径約33.5cmを有する。底部は尖底である。調整手法は、口縁部から頸部にかけては篦状工具による横位の削りが施され、胴部から底部にかけては縦位からやや斜位の粗いミガキが施されている。内面は口縁部から頸部にかけて篦状工具による横位の削りが施されている。外面には輪積み痕が残る。にぶい黄褐色を呈し、胎土に長石・金雲母を含む。滋賀里Ⅲｂ（新）と考えられる。

(19)はＳＺ９の蓋として利用されていた土器で、全体の約１／３が残り、底部は欠損する。口径は約35.2cmを測り、残存器高は約31.1cmである。口縁部は頸部から外反気味に開き、口縁部に最大径輪持つ。口縁端部はやや平らな面を持つ。胴部は膨らみ、胴部最大径は約34.2cmである。調整手法は、口縁部から頸部にかけては、篦状工具による横位の削りが施され、胴部はミガキ調整を主体とし、縦方向の粗いミガキも認められる。内面は、口縁部から頸部にかけて篦状工具による横位の幅狭の削りが施されている。胴下半部にも同様の調整が観察できる。焼成良好で浅黄橙色を呈し、胎土に長石・金雲母を含む。滋賀里Ⅲｂ式と考えられる。

(20)はＳＺ11の蓋として利用されていたと考えられる土器で、全体の約１／６が残存する。口径約34.6cm、残存器高約28.8cmを測る。頸部からやや強く外反する幅狭の口縁部を持ち、口縁端部は尖り気味に外反する。胴部は膨らみを持ち、最大径約37.6cmを持つ。調整手法は撫でを主体とし、胴部には斜位の粗いミガキおよび縦位の削りが観察される。内外面に輪積み痕がよく残る。にぶい橙色を呈し、胎土に長石・金雲母を含む。滋賀里Ⅲｂ式と考えられる。

(21)もＳＺ11の蓋として利用されていたと考えられる土器で、口縁部を中心に全体の約１／12程度が残る。口径約33.2cm、残存器高約14.5cmを測る。口縁部は頸部から緩く外反しながら立ち上がり、頸部にはあまりくびれがみられない。口縁端部は平坦に仕上げられている。調整手法は、撫でを主体とし、外面には横位および斜位の調整痕がわずかに観察される。内面には、口縁部から胴部にかけて横位および縦位の幅狭の削り痕が残る。灰白からにぶい黄橙色を呈し、胎土には若干の長石を含むものの、雲母は含まない。

(22)はＳＺ11の棺身として、また(23)はＳＺ11の蓋として利用されていたと考えられる土器で、共に胴部片のみが残存する。(22)の胴部は膨らみを持ち、胴部最大径は約34.2cmを測る。一方、(23)は胴下半部片で、残存する胴部最大径は約34.4cmである。いずれも口縁部および底部については不明である。調整手法は、(22)の胴部には斜位の粗いミガキが施され、内面にも同様の調整痕が観察される。一方、(23)の胴部には撫で消されているものの縦位および横位の削り痕が観察でき、内面にも同様の



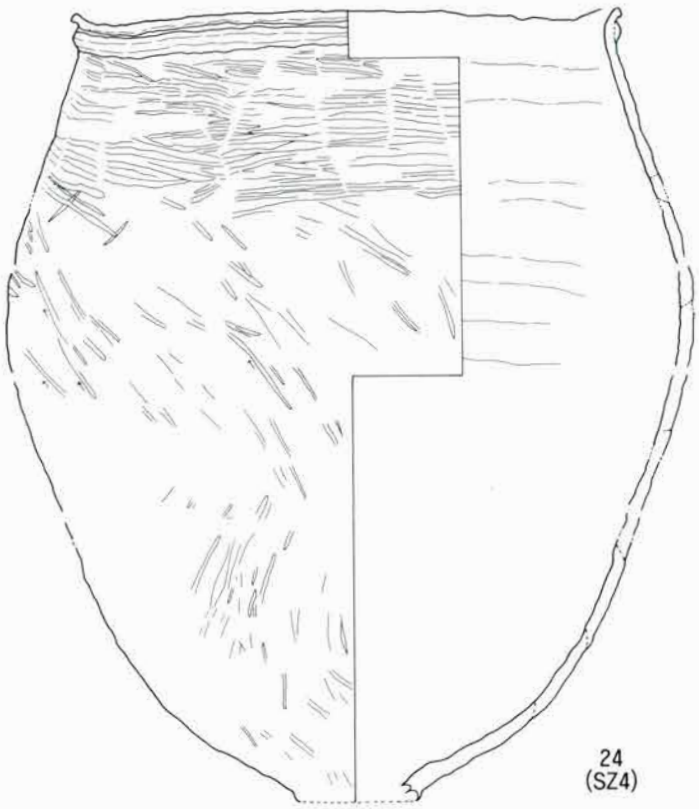
第36図　遺構出土土器(5)　ＳＺ11

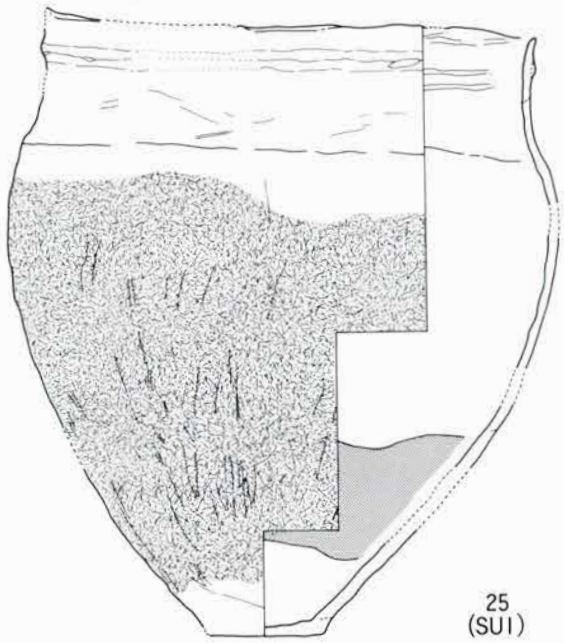
調整が施されている。(23)の内外面には輪積み痕がよく残る。(23)は焼成良好で、胎土には長石・金雲母を含む。一方、(22)の胎土には雲母はみられない。

(24)はＳＺ４の棺身に利用されていた土器で、全体の約１／２が残存する。口径約35.4cm、器高約51.1cmとかなり大型である。肩部が大きく張り出しており、最大径約44cmを有する。口縁部は肩部から内径し端部でやや外反する。端部は肥厚し、丸く仕上げられている。その直下には、粘土紐を貼り付けた１条の素文突帯がめぐる。底部は平底と考えられ、底径は約7.7cmである。調整手法は、口縁部には横位の貝殻条痕文を施し、その上から撫で調整が行われている。肩部から胴下半部にかけては、斜位および縦位の削り痕が残る。内面には、輪積み痕が残る。にぶい黄橙色を呈し、胎土には長石を含む。馬見塚式と考えられる。

1)「北裏遺跡」1973　可児町北裏遺跡発掘調査団　　挿図29―(3)

2) 布尾和史氏（石川県野々市市教委）より、(11)のような「逆注ぎ口上」の凹みを４単位で持つ完形品が、藤江Ｃ遺跡（石川、後期後葉～晩期前葉）でも出土しているとの御教示を得た。また、宮田明氏（石川県小松市教委）より、口縁部の内側への凹みは富山でもみられ、その時期は後期末～晩期初頭に多いとの御教示を得た。





0　10cm

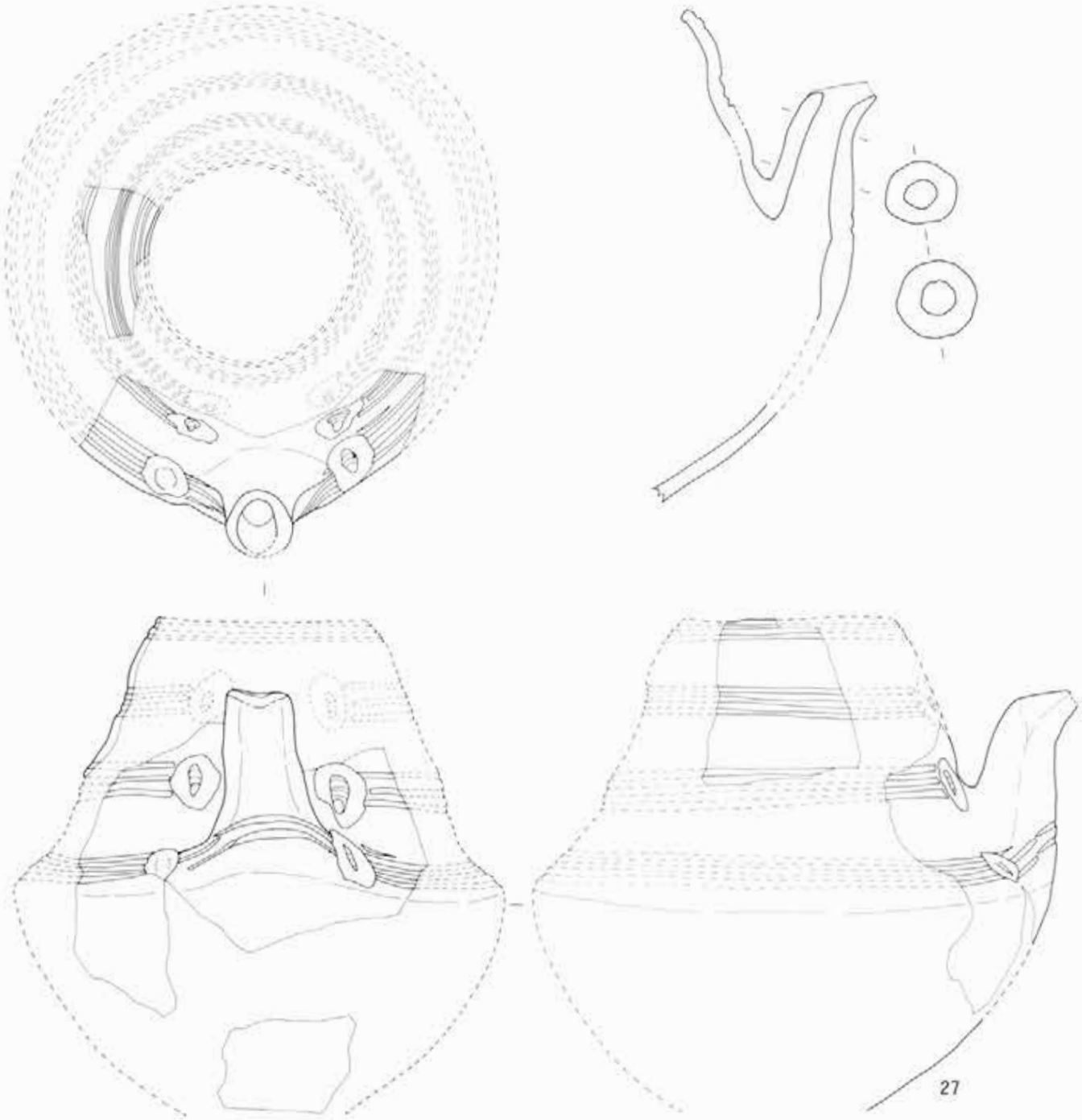
第37図　遺構出土土器(6)　SZ4　SU1

3）泉拓良氏の御教示による。泉氏によると、北陸地方ではこの時期平底が主体となり、凹み底はみられないのではないかとのことである。(11)のような口縁部への押圧手法の類例は北陸地方でもみられるようであるが（註2）、凹み底を持つ(11)は西日本の影響を受けた土器と考えられる。

③　土器集中区（ＳＵ１）として取り上げられた土器

（第37図　25　図版14）

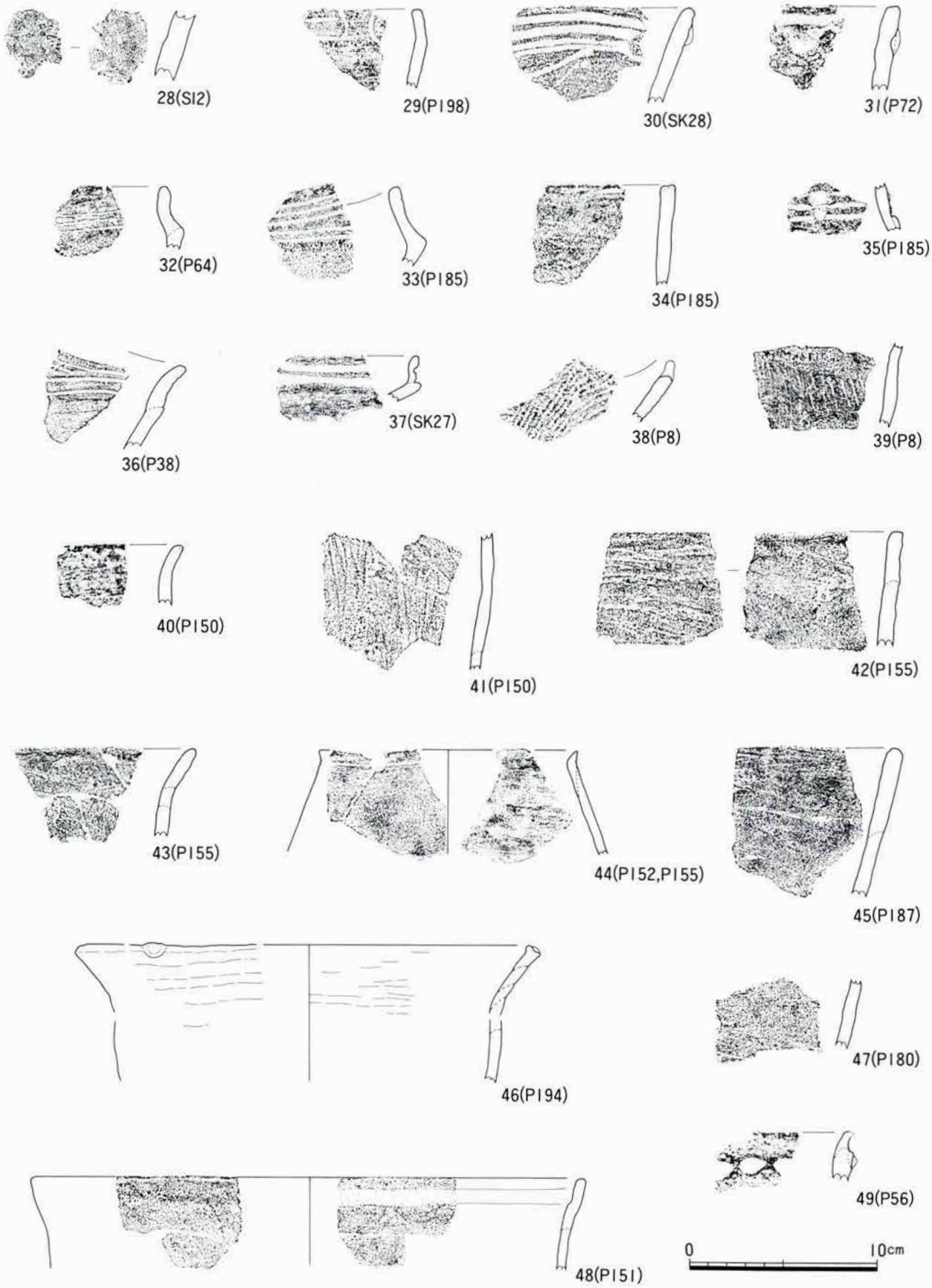
(25)は土器棺墓としてではなく、土器集中区（ＳＵ１）として検出し、全体の約４／５が残存する。口径約32.0cm、器高約41.3cmを測る。肩部には明瞭な段がみられ、その下が大きく張り出し、最大径約35.9cmを有する。口縁部は肩部の上にほぼ垂直に立ち上がり、端部がやや外反している。端面はやや内傾する平坦面に仕上げられている。口縁部には粘土紐を貼り付けて指でつまんだと考えられる１条の低い素文突帯が巡る。底部は平底で、底径は約7.5cmである。調整手法は撫でを主体とし、口縁部および肩部には横位の調整痕が観察され、胴部から底部にかけては縦位の削り痕が残る。内面は、口縁部に横位の幅狭の削り痕が施されている。外面の肩部以下には炭化物が付着する。焼成は良好で、胎土には長石を含む。馬見塚式と考えられる。



第38図　遺構出土土器(7)　SK29出土 注口土器　0　10cm

④　土坑・ピット出土土器（第38・39図　27・29～49　図版16・18）

(27)はＳＫ29より出土した注口土器で、底部を除いてほぼ完全に復元することができた。(推定)口径は約10.2cm、(推定)胴部最大径は約24.2cm、(推定)残存器高は約24.2cmとかなり大型である。口縁部に２条の凹線を引き、その下には約３cmの間隔をあけて３条の凹線３組を引いている。凹線の端（注口部の両側）には、粘土紐をＯ字状に貼付し、その中央部に巻き貝を先端の尖った部分を下に向けて押し付けている。なお、注口の根元部分にも２条の凹線を引いている。注口部の長さは、（中心部で）約８cmを測り、内径は1.5～1.6cmである。器厚は７～８ミリで、暗褐色を呈し、胎土には長



第39図　遺構出土土器(8)　SI・SK・Pit 出土土器

石・雲母の混入がみられる。[1]

(29)は口縁部に横位に引かれた2条の沈線をC字形文・逆C字形文で切っている。元住吉山Ⅰ式と考えられる。(30)(31)(35)は凹線文系の土器で、(30)と(31)は口縁部片で、凹線および貝殻圧痕がみられる。(35)もやや幅の狭い凹線文と貝殻圧痕が施されている。(32)～(34)は口縁部片で、(32)(33)は屈曲部を持ち、(32)は3条、(33)は5条の沈線が施されている。(33)は波状口縁を呈する。八日市新保式と考えられる。(34)は無文であるが、口縁端部に平坦面を持つ。(33)～(35)はP185出土である。(36)は小波状口縁を呈し、口縁部には3条の箆描沈線が施されており、その下には屈曲部がみられる。滋賀里Ⅲb式の外反口縁浅鉢と考えられる。(37)も浅鉢で、口縁部に2条の凹線がみられる。(38)と(39)はP8から出土し、(38)は波状口縁を呈し、外面には縄文が充填されている。(39)は胴部片で、斜行（左上から右下へ）する粗いミガキ調整が施されている。(40)と(41)はP150から出土し、(40)はやや外反する口縁部、(41)は粗いミガキ調整の施された胴部片である。(39)および(41)はその調整より本遺跡で多数検出した土器棺墓に利用されていた土器と同じ晩期中葉の土器と考えられる。(42)～(43)はP155から出土し、(44) はP152とP155から出土した土器片が接合したものである。(42)は無文口縁で、内外面に横位の粗いミガキが施されている。(43)は外反する口縁部で、端部はやや丸い感じに仕上げられている。(44)は内傾する口縁部片で、端部は外反気味に仕上げられている。穿孔がみられる。(45)は無文口縁で、外面に粗いミガキが施され、胎土には長石・雲母が含まれている。(46)は外反する口縁部片で、外面には輪積み痕がよく残り、口縁部の内面には横位の粗いミガキが施されている。口縁端部には棒状工具による刻みもみられる。(47)は胴部片で粗いミガキ調整が施されている。(46)(47)も晩期中葉と考えられる。(48)は外反する口縁部片で、口縁内面に指頭によると考えられる横位の凹線がみられる。[2]

(49)は突帯文土器で、突帯上に指頭による連続押圧を施し、突帯と口縁部の間にも指頭による凹線がみられる。

1）胎土は井口式（北陸）に近い。林直樹氏の御教示による。

2）同様の内面に凹線を持つ土器は、戸入村平遺跡（1994）でもみられる（SZ7-B、511）。

第4項　包含層（上の段）出土土器

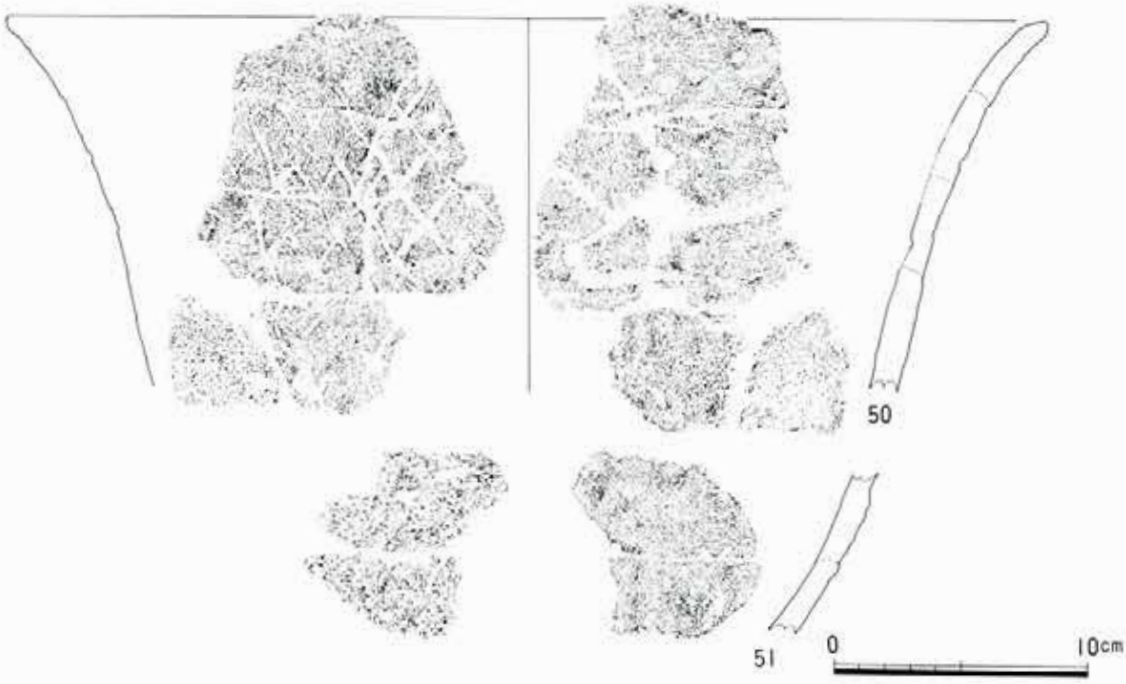
第1群土器　縄文時代早期の土器（第40～50図　50～178　図版19～27）

1類　押型文土器

a種　高山寺式土器（第40図　50・51　図版19）

(50)は外反する口縁部で、推定口径は約41.5cmである。外面には、網目状の撚糸文（0段のr）が施されている。内面は無文で、斜行沈線はみられない。輪積み痕がよく残り、その幅は3.7～3.8cmとほぼ同じである。器厚は0.9～1.2cmと厚手で、胎土には5ミリ大の小礫（長石含む）が混入し、繊維痕が認められる。高山寺の新段階と考えられる。

(51)も(50)と同一個体と考えられ、内外面共に無文で、胴下半部と考えられる。



第40図　包含層出土土器(1)　第1群1類a種
(上の段)

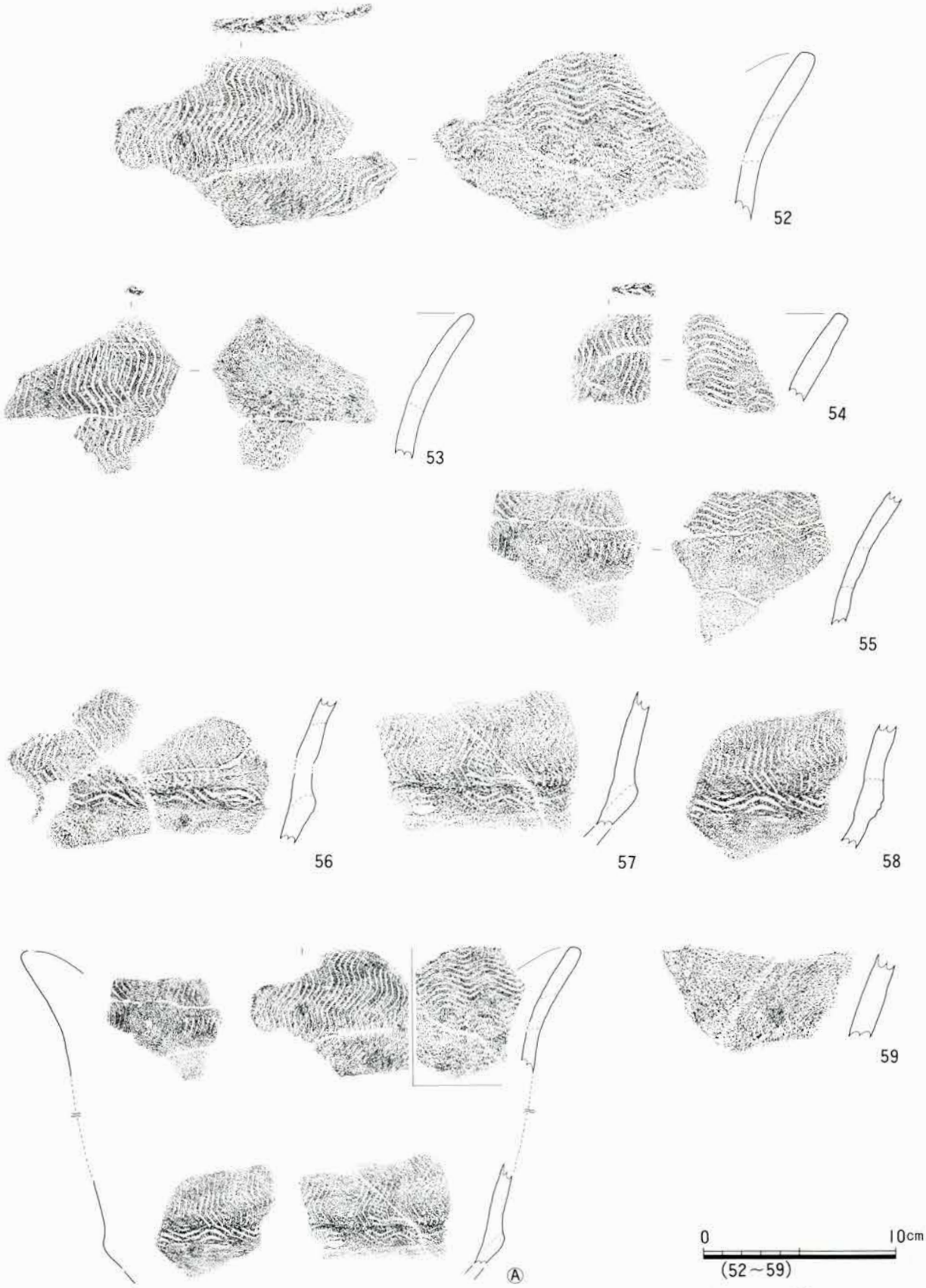
b種　穂谷式土器（図版41～44図　52～90　図版19～21）

(52)～(59)は同一個体で、(52)～(55)が口縁部、(56)～(59)が胴部である。これらをもとに推定復元したものが（Ⓐ）で穂谷式と考えられる。口縁部は外反し、波状口縁（4単位か）を呈する。胴部には肥厚した屈曲部がみられる。[11]

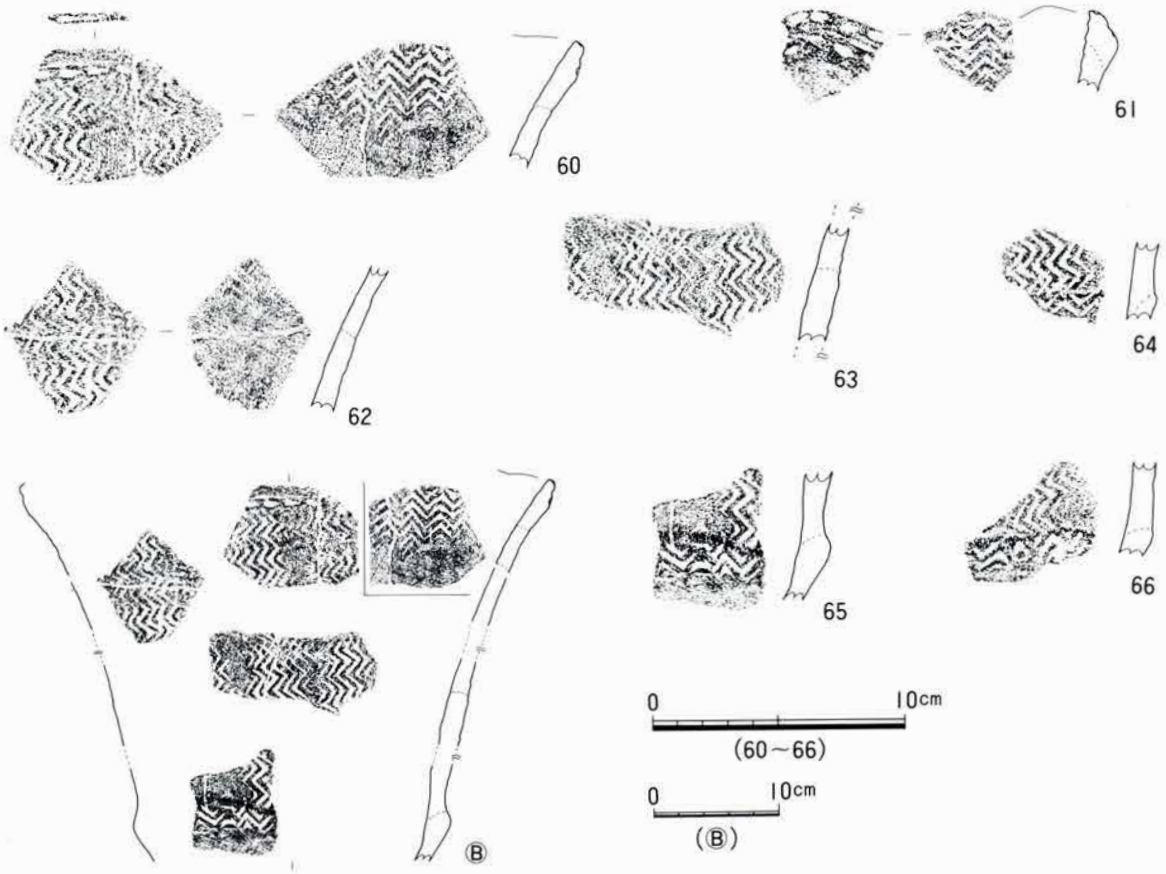
土器の外面には、口縁部から胴部屈曲部にかけて波形をした丸山形文（9条1単位か、原体の長さ約35ミリ、直径約11.1ミリ、1回転の長さ約35ミリ）を縦位に充填し、屈曲部には横位に充填している。屈曲部以下は無文である。口縁部の内面にも丸山形文を横位に充填している。口縁端部は平坦面を持ち、篦状工具による連続した刻みを矢羽状に施している(52)(54)。器厚は8～11ミリとやや厚手で、屈曲部の厚さは約14ミリを測る。にぶい黄褐色を呈し、胎土には角閃石・長石・雲母を含む。これらの土器は、(50)(51)の高山寺式土器と同一グリッド・同一層位（30Cグリッド Ⅳ層）で、同じ日に出土しており、その併行関係を考えていく上で重要である。

(60)～(66)も同一個体で、(60)～(62)が口縁部、(63)～(66)が胴部である。これらをもとに推定復元したものが、(Ⓑ 推定口径約27.4cm）で穂谷式と考えられる。口縁部は外反し、波状口縁を呈すると考えられる(60・61)。胴部には（Ⓐ）同様に肥厚した屈曲部がみられ、この屈曲部についても、粘土のつなぎ目を重ねることによって屈曲部を強調したと考えられる。土器の外面には、口縁部から胴部にかけて山形文（5条1単位か。原体の長さ約28ミリ、直径約9ミリ、1回転の長さ約28ミリ）を間隔をあけて縦位に充填し、屈曲部には横位に充填している。屈曲部以下は無文である。口縁部の内面には、同じ山形文を横位に充填している。口縁部上端は肥厚し、棒状工具による列点状の連続刺突と1条の沈線が施され、口唇部にも同様の工具による連続刺突が施されている(60・61)。器厚は7～9ミリとⒶに比べてやや薄手であるが、口縁の肥厚部は10～12ミリ、屈曲部の厚さは約13ミリを測る。にぶい褐色を呈し、胎土に角閃石・長石を含む。

(67)～(73)も同一個体で、(67)～(70)が口縁部、(71)～(73)が胴部である。これらをもとに推定復



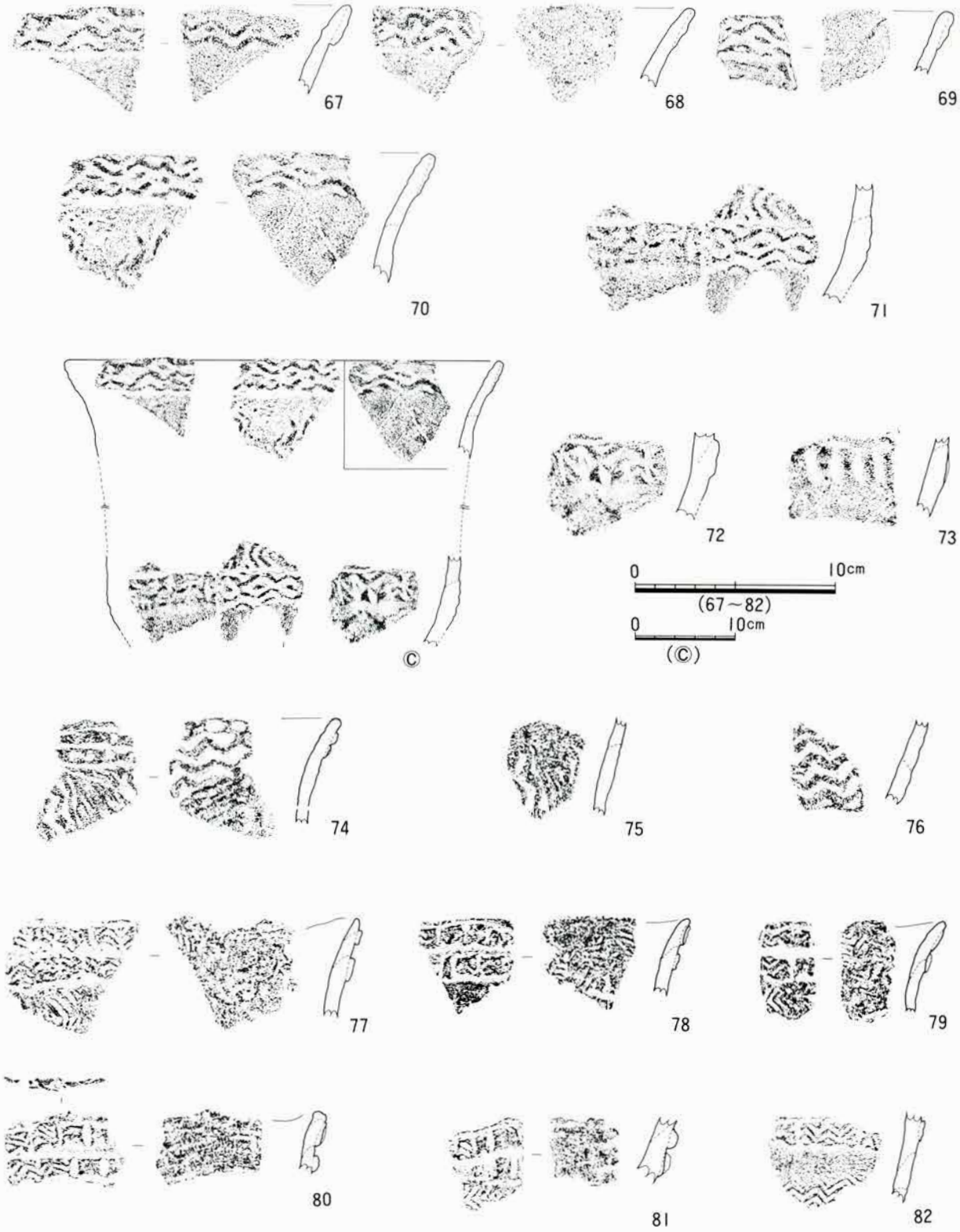
第41図　包含層出土土器(2)　第1群1類ｂ種
(上の段)



第42図　包含層出土土器(3) 第1群1類b種（上の段）

元したものが（Ⓒ 推定口径約29.5㎝）で、穂谷式と考えられる。口縁は平口縁で口縁部は外反し、端部は粘土を貼り付けて外側へ肥厚させたいわゆる折り返し口縁である。胴部には（Ⓐ）や（Ⓑ）同様に、粘土のつなぎ目を重ねることによって屈曲部を強調したと考えられる肥厚した屈曲部がみられる。土器の外面には山形文（3条1単位か。1条目と2条目の山形は頂部をずらして対向させ、菱形をつくり、その中に横位の楕円形がみられ、連続菱形文のようにもみえる。原体の長さは約25ミリ、直径約13ミリ、1回転の長さ約42ミリ）を口縁部の肥厚部と胴部の肥厚した屈曲部に横位に充填し、その間に間隔をあけて縦位に充填している。屈曲部以下は無文で、口縁部内面に山形文を横位に充填するのは（Ⓐ）や（Ⓑ）と同じであるが、赤褐色を呈し、胎土に長石を含むが角閃石を含まない点は（Ⓐ）や（Ⓑ）と異なる。器厚は6～9ミリとやや薄手で、口縁部と胴部の肥厚部は9～12ミリを測る。なお、(72)の胴部の肥厚した屈曲部には、前述の横位の山形文の上から箆状工具による連続刻みもみられ同一個体と考えられる。(73)の屈曲部には箆状工具による連続刻みのみが施されている。

(74)～(76)は同一個体で(74)が口縁部、(75)・(76)が胴部で穂谷式と考えられる。口縁部は平口縁で外反し、口縁部の外面には、端部よりやや下がった所に（Ⓒ）のように幅広の粘土を貼り付けて肥厚させ、それを沈線で2つに分けて、更に右上から左下へと斜行する刻みを施している。突帯状の肥厚部の下には山形文（4条1単位か。原体の長さ約39ミリ、直径約11ミリ、1回転の長さ約35ミリ）を間隔をあけて縦位に充填している。口縁部内面には山形文を横位に充填し、更にその上から上端部には連続した押し引き状の削りを施している(74)。(75)には縦位の、(76)には横位の山形文が施されている。器厚は6～8ミリとやや薄手で、にぶい褐色を呈し、胎土には角閃石・長石・雲母が含まれる。



第43図　包含層出土土器(4)　第1群1類b種
(上の段)

(77)～(80)は同一個体で、共に口縁部である。口縁部はやや外反し、小波状を呈する。波頂部には円管状の工具による刺突もみられる(80)。外面には2条の張り付け隆帯がみられ、隆帯上には丸棒状工具による縦の連続刻みを施したあと、横位の山形文（3条1単位か。原体の長さ約14ミリ）を充填

し、更に隆帯の下には間隔をあけて山形文を縦位に充填している。口縁部の内面にも山形文を横位に充填している。なお、(80)の隆帯の右半分には山形文が充填されていない為に、隆帯は蒲鉾型を残し、丸棒状工具による刻みも当初のままの形を残している。にぶい黄褐色を呈し、胎土には角閃石・長石を含む。(81)と(82)にも各々2条と1条の張り付け隆帯がみられ、(77)～(80)同様に丸棒状工具で縦に連続して刻んだ後で山形文を横位に充填している。隆帯の下には、(81)には縦位の、(82)には横位の山形文の充填がみられる。(77)～(82)も穂谷式と考えられる。

(83)～(86)は同一個体で共に胴部片である。これらをもとに推定復元したものが（Ⓓ）で、胴部の径は隆帯の部分で約27.2cmを測る。隆帯のすぐ下には、隆帯を貼り付けた際の爪の跡が明瞭に残る。隆帯上を櫛状工具もしくは貝殻腹縁で縦に連続して刻んでおり、隆帯の上側には山形文の縦の充填と考えられる文様がみられる。隆帯の下側および内面には貝殻条痕様の調整が各々縦位および斜位に施されている。褐色を呈し、胎土には角閃石・長石・雲母が含まれている。(83)～(86)も穂谷式と考えられる。[2]

(87)～(90)は胴部片で(87)は(丸)棒状工具による横位の沈線を引き、それを縦に連続して刻んでおり、沈線の下には山形を縦に充填し、内面には条痕様の調整が施されている。(88)～(90)には縦位の山形文が充填されている。(87)～(90)も穂谷式と考えられる。(87)と(88)がにぶい黄褐色を呈し、やや薄手であるのに対して、(89)と(90)は橙色を呈し、厚手で胎土も他の穂谷式土器とは異なる。

1）この屈曲部については、突帯状にみえるが、粘土のつなぎ目を重ねることによって屈曲部を強調した可能性が考えられる。長野県でみられる高山寺式土器の胴部の屈曲の影響がみられる。以上、矢野健一氏（辰馬考古資料館）の御教示による。

2）角閃石を含む同様の土器が小の原遺跡(1991)でも出土しており、入海Ⅰ式に分類していたが、山形の押型文もみられることから、ここでは穂谷式に分類した。

c種　その他押型文土器　　（第44図　91・92 図版21）

(91)は小片であるが、外面に楕円文が充填されている。原体については定かでないが、楕円の粒の大きさは長さ約10ミリ、幅約4ミリである。器厚は約12ミリと厚手である。

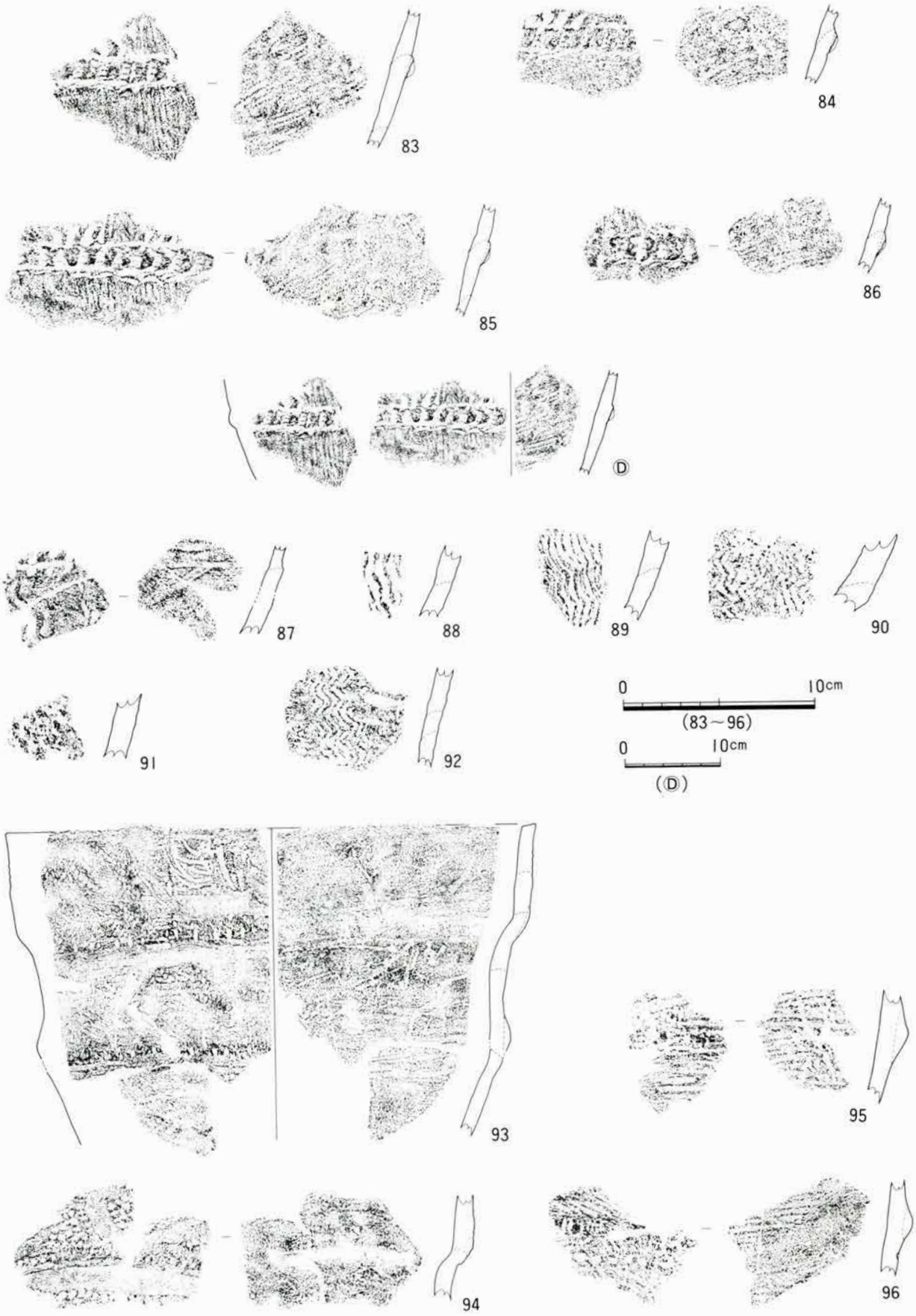
(92)は胴部片で、山形文（6条1単位か。原体の長さ約19ミリ）を縦に帯状に充填し、その左右に幅広の無文部をもつもので、胎土はb種の穂谷式土器とはやや異なる。

2類　条痕文系土器

茅山下層式土器（第44図　93～96　図版22）

(93)～(96)は茅山下層式土器で、(93)は口縁部、(94)～(96)は胴部である。(93)は推定口径約28.2cmで、2段の屈曲部を有し、口唇部は平らに整形されている。外面には縄文(RL)を充填し、その上から指頭で描かれたような凹線による曲線の文様を施している。口縁部付近には、同様の曲線の中に棒状工具による弧状沈線を引いている。屈曲部には棒状工具による連続刻みが施されている。内面には横位の条痕や指頭による圧痕がみられ、胎土には繊維を含む。

(94)～(96)は屈曲部がみられ、(94)には連続刺突による曲線文様が、(95)には条痕文、(96)には横位の連続刺突が施され、(95)・(96)の内面には横位の条痕文がみられる。



第44図　包含層出土土器(5)　第1群1類b・c種、2類
（上の段）

3類　東海条痕文系土器

a種　八ッ崎Ⅰ式～粕畑式土器（第45・46図　97～116　図版22・23）

(1)　八ッ崎Ⅰ式土器

(97)～(116)は八ッ崎Ⅰ式～粕畑式土器で、このうちの口縁部下方（胴上部）に屈曲部をもつもの(99)～(101)、爪形文帯が蛇行して変化に富むもの(97)・(98)を八ッ崎Ⅰ式とした。

(97)・(98)は口縁部片で、(97)には斜行する爪形文帯がみられ、爪形文帯の間には指頭による撫でも施されている。内面には条痕が施されている。(98)の内外面には条痕が施され、外面には連続爪形文を弧状に施している。口唇部には連続刻みが施されている。(99)～(101)には屈折部がみられ、(99)の外面、(100)の内外面には条痕が施されている。(99)・(101)の屈折部の上には爪形文帯が横走し、(101)では、その上に2条の爪形文帯が弧状に配されている。

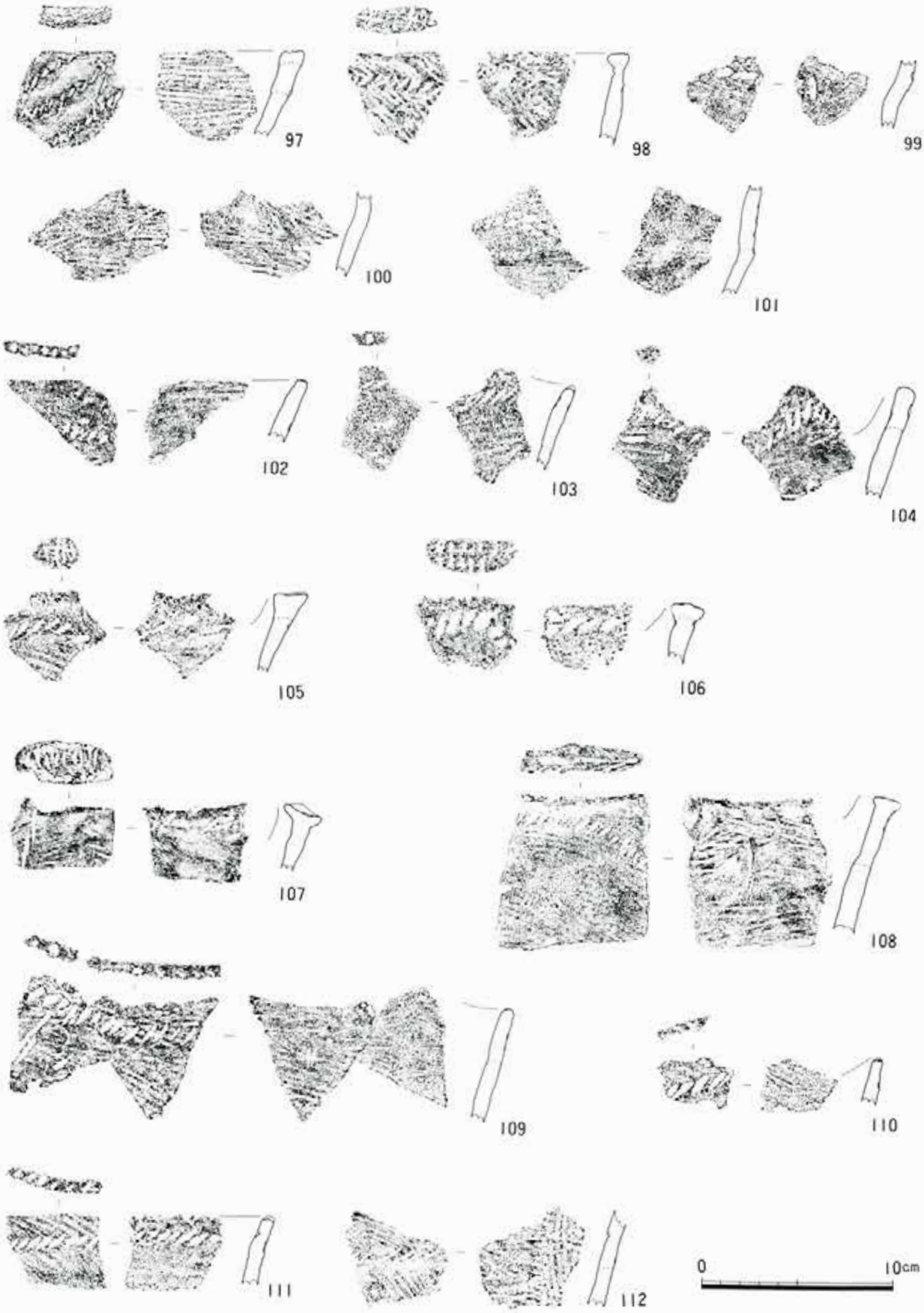
(2)　粕畑式

(102)～(116)は粕畑式で、(102)～(111)は口縁部片、他は胴部片である。(102)および(111)は平口縁、(103)～(110)は波状口縁を呈し、(104)～(108)の波頂部は台形を呈し、皿状の突起がみられる。(102)の外面には爪形文帯が横走し、口唇部には連続刻みが施されている。(103)の内外面には爪形文が施され、口唇部には刻みがみられる。(104)～(107)の内外面には爪形文が施され、波頂部の皿状の部分にも刻みが施されている。(105)～(107)の波頂部も台形を呈し、(105)は楕円形、(106)・(107)は長楕円形の突起部をもつ。特に(107)の突起部は中央部が凹み、酒杯状を呈している。(108)の波頂部は台形を呈し、口唇部は更に細長い面をもち、「ハ」の字状の刻みが施されている。内外面に条痕文が施され、特に内面の条痕文はよく残る。外面には爪形文帯がみられる。

(109)・(110)は同一個体で、内外面に条痕文が残り、外面には1条の爪形文帯がみられ、口唇部には連続刻みが施されている。(110)には穿孔もみられる。(111)・(112)の外面には、斜行する条痕文地に爪形文帯を横走させ、一見矢羽根状にもみえるが、爪形文の感じより粕畑式とした。(111)の内面にも爪形文帯が横走し、口唇部には連続刻みを施している。(113)～(116)の外面には爪形文がみられ、(114)の内面および(113)・(115)・(116)の内外面には条痕文が施されている。

b種　上ノ山式（第46図　117～124　図版24）

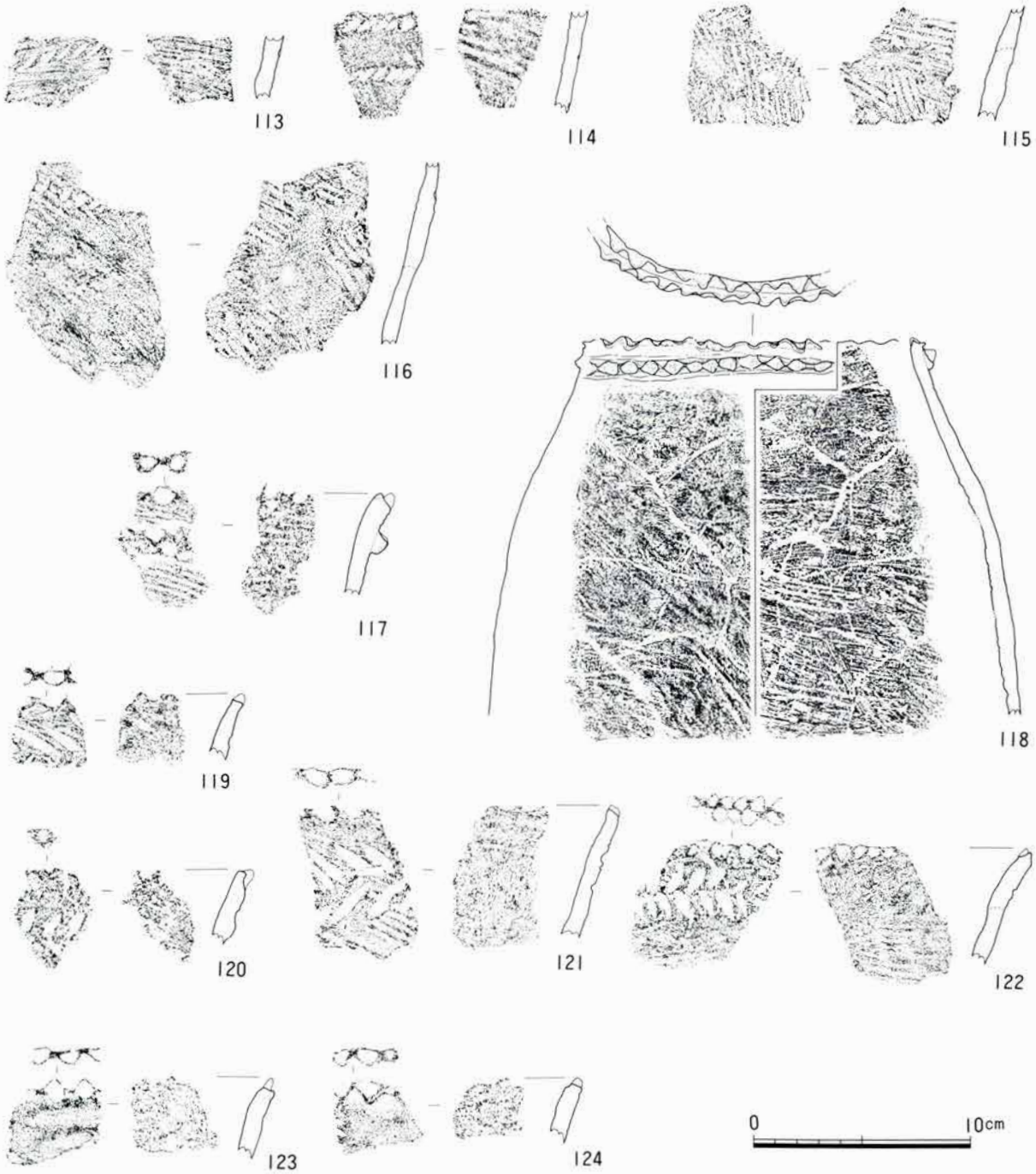
(117)～(124)は上ノ山式で、全て口縁部片であるが、(118)は胴下半部を除く全体の器形が復元できる大型片である。(117)・(118)の口縁部には1条の突帯を横位に巡らせ、(117)の突帯は上下から交互に押圧を加えており、口唇部にも同様の押圧を施している。また、外面には条痕文が施されている。(118)の突帯は、上下から指でつまんで断面が三角形状を呈しており、その上に連続押圧を施している。口唇部には(117)同様に外面と上面から交互に押圧を加えている。口径約15.8cm、肩部の径約20.5cm、（残存する）胴部最大径約24.6cmと口縁部が内傾し、口の狭い形を呈している。外面の肩部以下と内面には条痕がみられるが、外面には指頭による撫でが施されており、指頭圧痕も観察できる。胎土には繊維を含む。肩部以下には炭化物の付着がみられる。



第45図　包含層出土土器(6)　第1群3類ａ種
（上の段）

(119)～(122)には羽状沈線が施されており、(121)の外面と(122)の内面には条痕も残る。(122)の口唇部には外面と内面より、また(120)の口唇部には外面と上面より交互の押圧が施されている。

(119)と(121)および(123)・(124)の口唇部には連続して押圧が施され、特に(123)では押圧間の小波頂部を指頭により前後からつまむようにしており、小波頂部の前面が凹み、上部が尖り気味に仕上げられている。



第46図　包含層出土土器(7) 第1群3類a・b種
(上の段)

ｃ種　入海式土器（第47図　125～134　図版24）

(125)～(134)は入海式土器で、いずれも突帯上に篦状工具による連続刻みを施しており、入海Ⅱ式と考えられる。(125)～(127)は同一個体で、推定口径は約29.0cmである。口縁部に３条の突帯をもち、一番上の突帯は口縁に平行に横走させ、下の２条の突帯は蛇行させて、突帯上には篦状工具による斜位の刻み目を施している。一番上の突帯の上部には横位に１条、一番下の蛇行する突帯の下には蛇行する２条の連続刻みを横位に施している。口唇部にも刻み目を施しており、器厚は７～９ミリと比較的厚手である。(128)・(129)は同一個体で、(125)～(127)と同様に突帯上に斜位の刻み目を施し、突帯の上部には縦位の連続刻みを施している。突帯上の刻みは(125)に比べやや密である。口縁部は小波状を呈し、口唇部には刻みが施されている。

(130)は３条の突帯がみられ、一番上は横走し、下の２条は蛇行する。突帯上は篦状工具による比較的密な刻みを斜位に施している。一番上の突帯の上部には同様の工具による斜位の刻みを間隔をややあけながら施している。口縁部は平口縁を呈し、口唇部には刻みが施されていると思われるが、ローリングが激しい為にはっきりしない。(131)の突帯は三角形の頂点のような形に配され、他とは異なる様相も感じられるが、突帯上に連続刺突状の刻み目を施しており、突帯の上部には刻みもみられるので入海式に含めた。胎土には繊維が含まれる。

(132)～(134)は低い突帯上に篦状工具による密な連続刻みを縦位に施しており、いずれも器厚は４～５ミリと薄手である。(132)・(133)の突帯の上部には２条の連続刻みもみられる。(132)は波状口縁を呈し、波頂部には３つの小波頂部を作出し、口唇部には刻み目を施している。(134)には３条の突帯がみられ、一番下の突帯は蛇行気味である。

ｄ種　石山式（第47図　135～137　図版25）

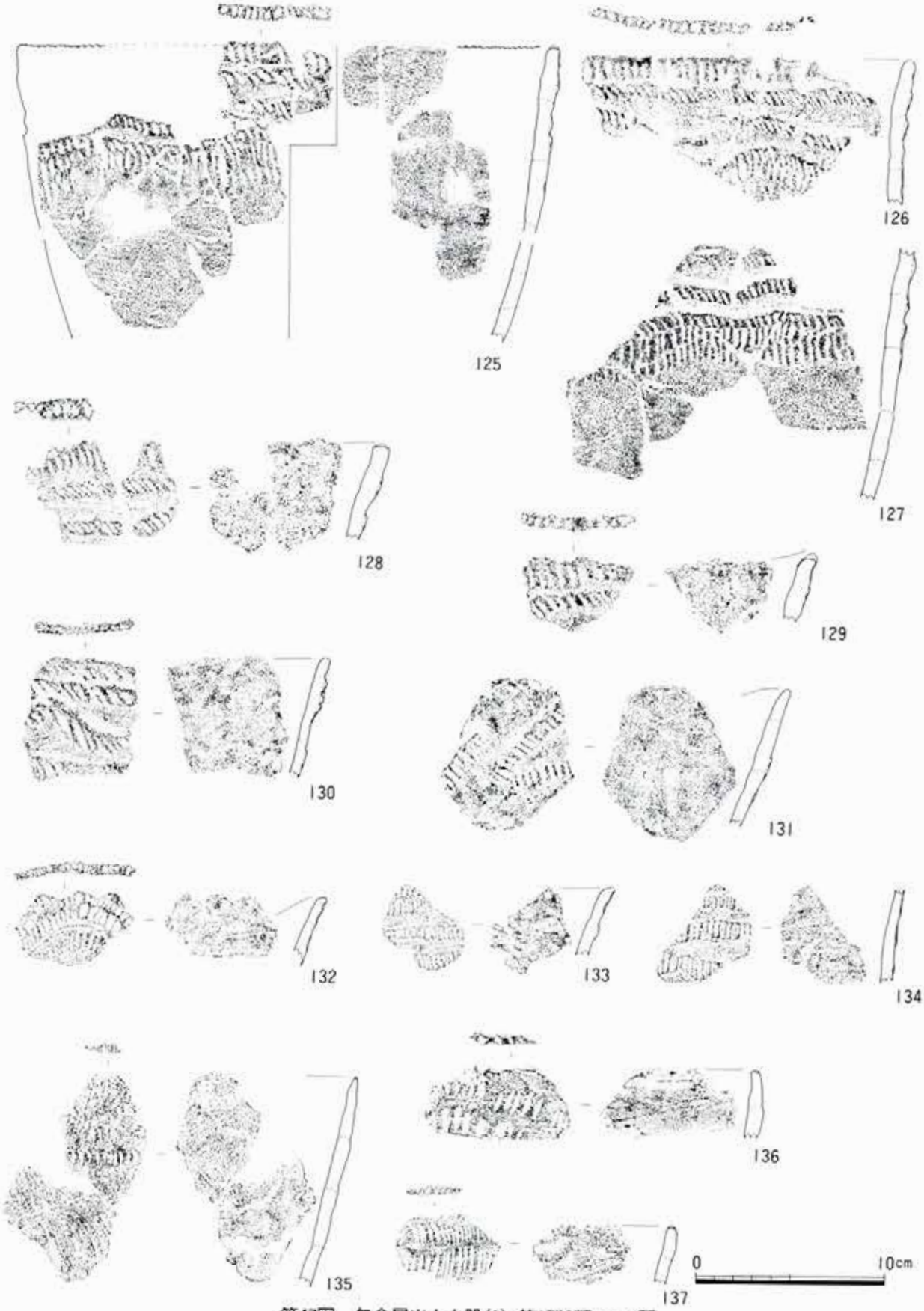
(135)～(137)は隆帯はみられず、篦状工具による連続刻みのみが施されており、石山式に分類[1]した。いずれも口縁部片で口唇部には刻みが施されている。(135)には３条の刻み目帯がみられ、上下の刻み目帯は横走し、中央の刻み目帯は蛇行する。(136)・(137)には共に２条の刻み目帯がみられ、内面には条痕文が施されている。

1）泉拓良氏の御教示による。

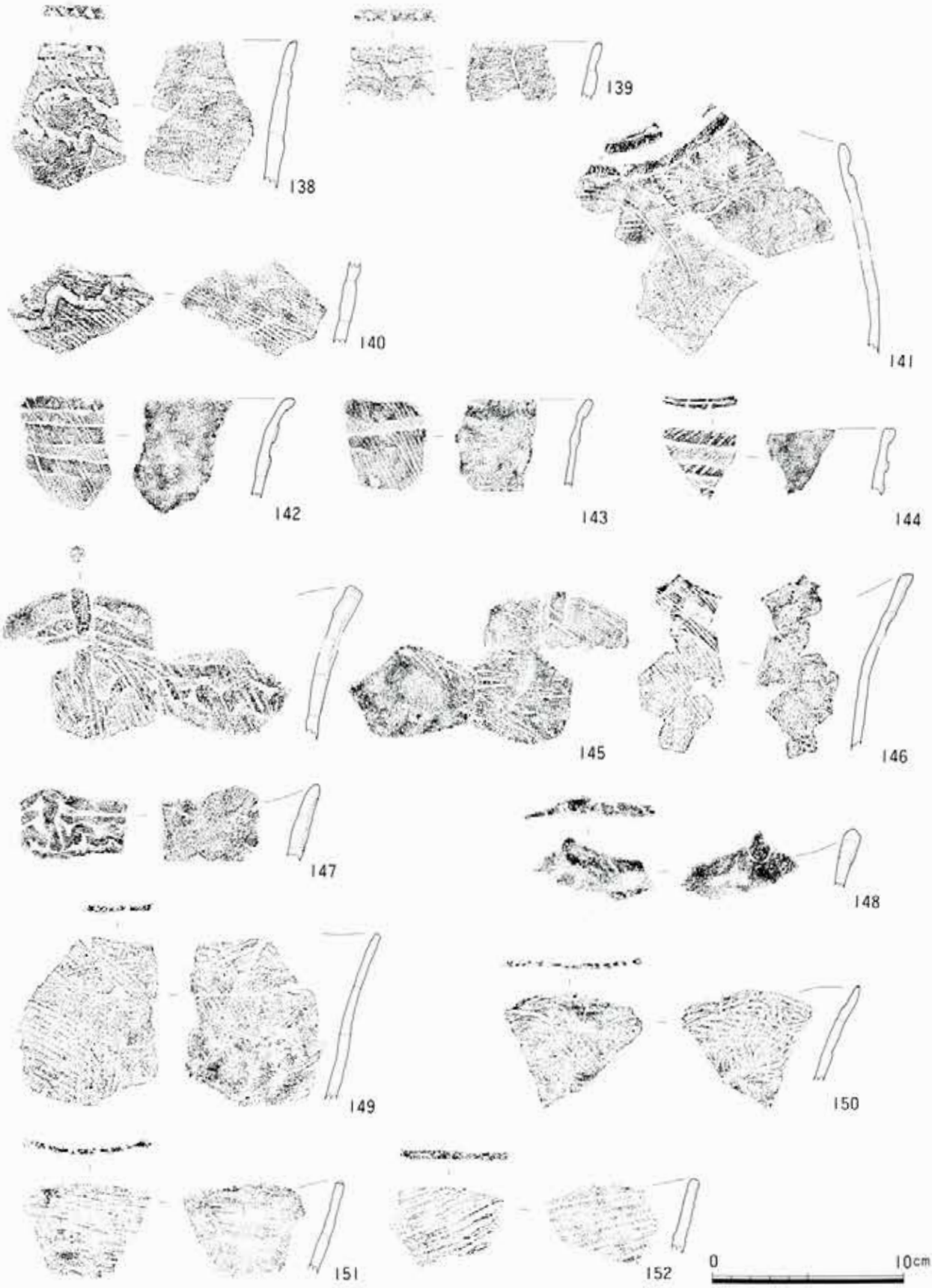
ｅ種　塩屋下層式土器（第48図　138～140　図版25）

(138)～(140)は同一個体で押し引き沈線がみられ、塩屋下層式とした。[1]口縁部に３条の沈線がみられるが、上の２条は篦状工具による押し引き沈線で、上の沈線は横走し、下の沈線は大きく蛇行する。一番下の沈線は、同様の工具により小さく蛇行して小さな弧を描くように引かれているが、上の２本のような押し引き沈線にはなっていない。内外面には条痕が残り、特に内面は横位の沈線がよく残る。口唇部には連続した押圧が施されている。器厚は６～８ミリと比較的薄手である。

1）泉拓良氏の御教示による。



第47図　包含層出土土器(8)　第1群3類c・d種
(上の段)



第48図　包含層出土土器(9)　第1群3類e・f・g・h種
(上の段)

f種　天神山式土器（第48図　141　図版25）

(141)は口縁部に2条の貼付隆帯をもち、その下には貝殻背面を用いた条痕による弧状の曲線を重ねて不規則な文様を描いており、天神山式と考えられる。口縁部は内傾し、波状になると考えられる。器厚は4～5ミリと薄手で、焼成は硬い感じである。繊維はほとんど含まない。

g種　塩屋上層式土器（第48図　142～148　図版25）

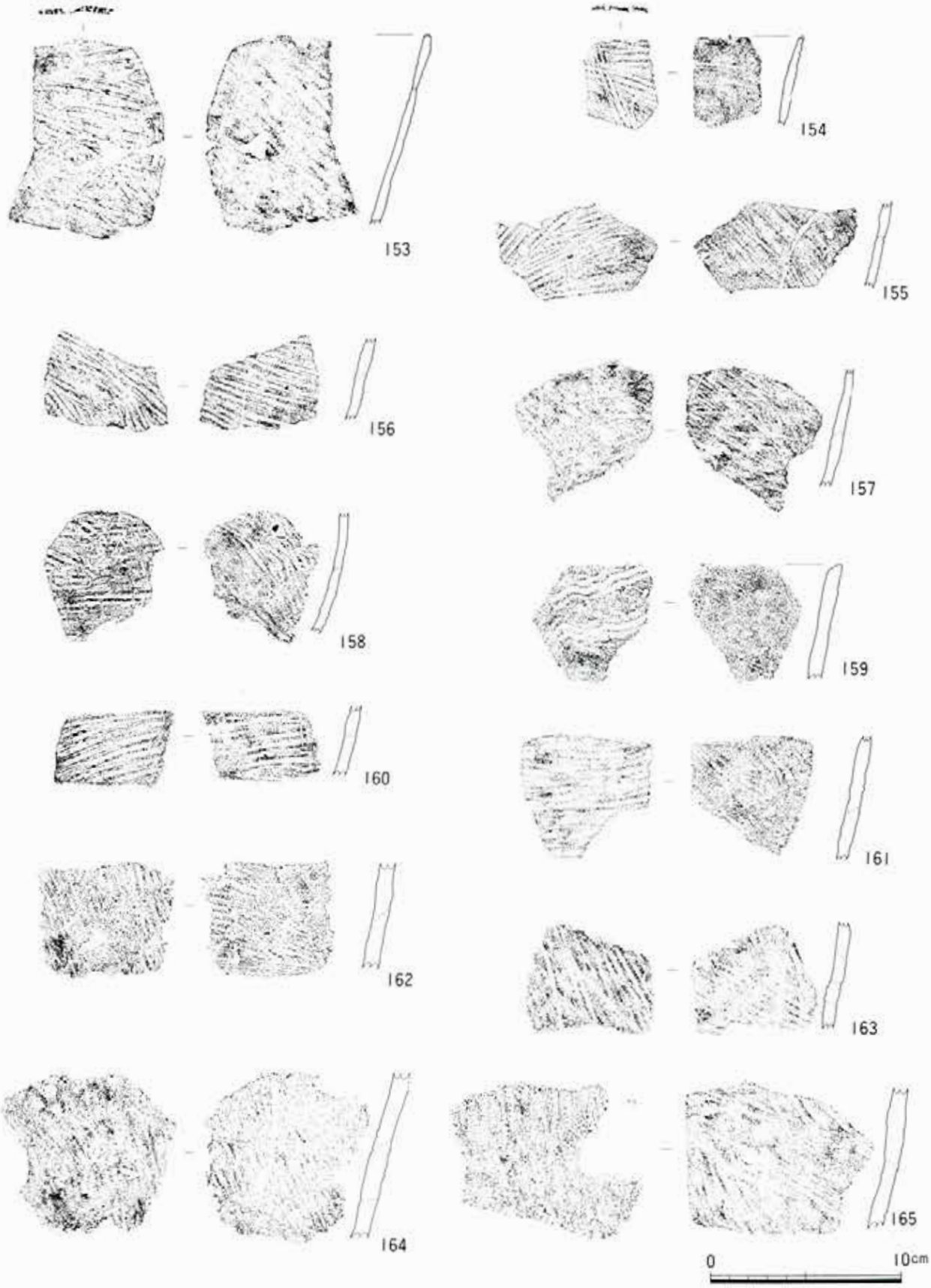
(142)～(148)は塩屋上層式で、全て口縁部片である。(142)～(144)は平口縁を呈し、(142)と(143)は外反気味に立ち上がり、各々3条と2条の低い隆帯を貼付して、その上から条痕を（左上から右下へ）施している。なお、条痕は隆帯上だけではなくて土器の器面にも施されている。また、内面には指頭による圧痕がよく残る。(144)は3条の隆帯がみられ、隆帯上に右上から左下へと貝殻条痕を施し、その一部は土器の器面にもみられる。口唇部は平坦に整えられ、貝殻腹縁による押圧が2ヶ所で確認できる。なお、土器の器面と貼付隆帯との境目が明瞭に残る。(145)～(148)は外反気味に立ち上がる波状口縁を呈し、波頂部には縦方向の隆帯も貼付されている。(145)は丸みのある波頂部をもち、口縁部には口縁に平行する2条の低い隆帯が貼付され、波頂部からは縦の隆帯が垂下し、この隆帯はそのまま右へ曲げられて、2条の隆帯の下の蛇行する3条目の隆帯となっている。さらに、この縦の隆帯は内面にもつながって波頂部の内面にも約1.5㎝垂下し、波頂部には指で押圧を加えている。内外面には貝殻条痕が施され、外面に施された条痕は隆帯上および土器の器面にもみられる。

(146)～(148)の波頂部は三角形に尖り、(146)の外面には口縁に平行な隆帯2条と波頂部より垂下する隆帯を、口縁端部の隆帯、垂下隆帯、2条目の隆帯の順で貼付し、最後に隆帯上および土器の器面に貝殻条痕を施している。波頂部の縦の隆帯はやはり内面にも続き、わずかに折り曲げられている。

(147)は横走する3条の隆帯と、波頂部より垂下する1本の隆帯がみられ、口縁に平行に横走する2条の隆帯とその下で蛇行する1条の隆帯、そして縦の隆帯の順で貼付している。(148)には2条の隆帯と波頂部より外面と内面にまたがるように貼付された縦の隆帯がみられ、口唇部には(144)同様に貝殻腹縁による押圧が施されている。(142)～(148)は全体に薄手で、特に(142)～(144)・(146)は器厚約4ミリと薄い。(142)と(147)は赤褐色を呈し、他は褐色～黒褐色である。

h種　条痕文のみられるもの（第48・49図　149～165　図版26・27）

(149)～(165)は条痕文のみが施されており、(149)～(154)・(159)は口縁部片、残りは胴部片である。(149)～(158)は薄手、(159)～(165)は比較的厚手である。(149)・(150)は同一個体で、小波状口縁を呈し、口唇部には刻みが施されている。また、内外面には不規則な条痕が施されている。(152)の内外面には、右上から左下へ斜行する条痕が施されている。(153)・(154)の口唇部には刻みが施されている。(154)・(155)は同一個体で、(155)には穿孔もみられる。(156)～(158)は胴部片で、内外面に条痕文が施されている。(159)の外面には貝殻条痕を蛇行して施した文様2条がみられる。内面には条痕がみられない。胎土には繊維を含む。(160)～(165)の内外面には条痕文が施されている。(163)～(165)は底部に近い胴下半部である。



第49図　包含層出土土器(10)　第1群3類h種
(上の段)

4類　その他の早期の土器

a種　縄文のみのもの（第50図　166　図版27）

(166)は外面に縄文が施されている。器厚は9～11ミリとかなり厚手である。胎土にはチャート・長石もみられる。

b種　刺突の施されたもの（第50図　167・168　図版27）

(167)・(168)の外面には刺突が施されている。(167)は羽状縄文を施し、その上から割り箸状の工具による横位の連続刺突を施しており、補修孔と考えられる穿孔もみられる。器厚11～13ミリとかなり厚手である。(168)は外反する口縁部片で、外面には丸棒状工具による横位の連続刺突が施され、内面には条痕が残る。内面の口縁上端部近くには連続刺突もみられ、口唇部にも連続した押圧が施されている。胎土には繊維を含む。

c種　型式等不明の土器（第50図　169・170　図版27）

(169)は波状口縁を呈し、波頂部は台形でその中央部はU字状にくぼむ。内外面には条痕が残り、胎土には繊維も含まれる。爪形文がみられないが、粕畑式に近いと考えられる。
(170)は波状口縁を呈すると考えられる口縁部片で、波頂部には2本の粘土紐による隆帯を内外面にまたがるように貼り付けており、隆帯上には連続刻みも施されている。胎土には繊維を含む。

d種　底部（第50図　171～178　図版27）

(171)～(178)は底部片で、(171)・(172)は平底、(173)は小型の平底、(174)～(178)は乳頭状に整形された尖底である。(171)の内外面と(172)の外面には条痕が施され、(171)～(174)、(177)・(178)の胎土には繊維を含む。

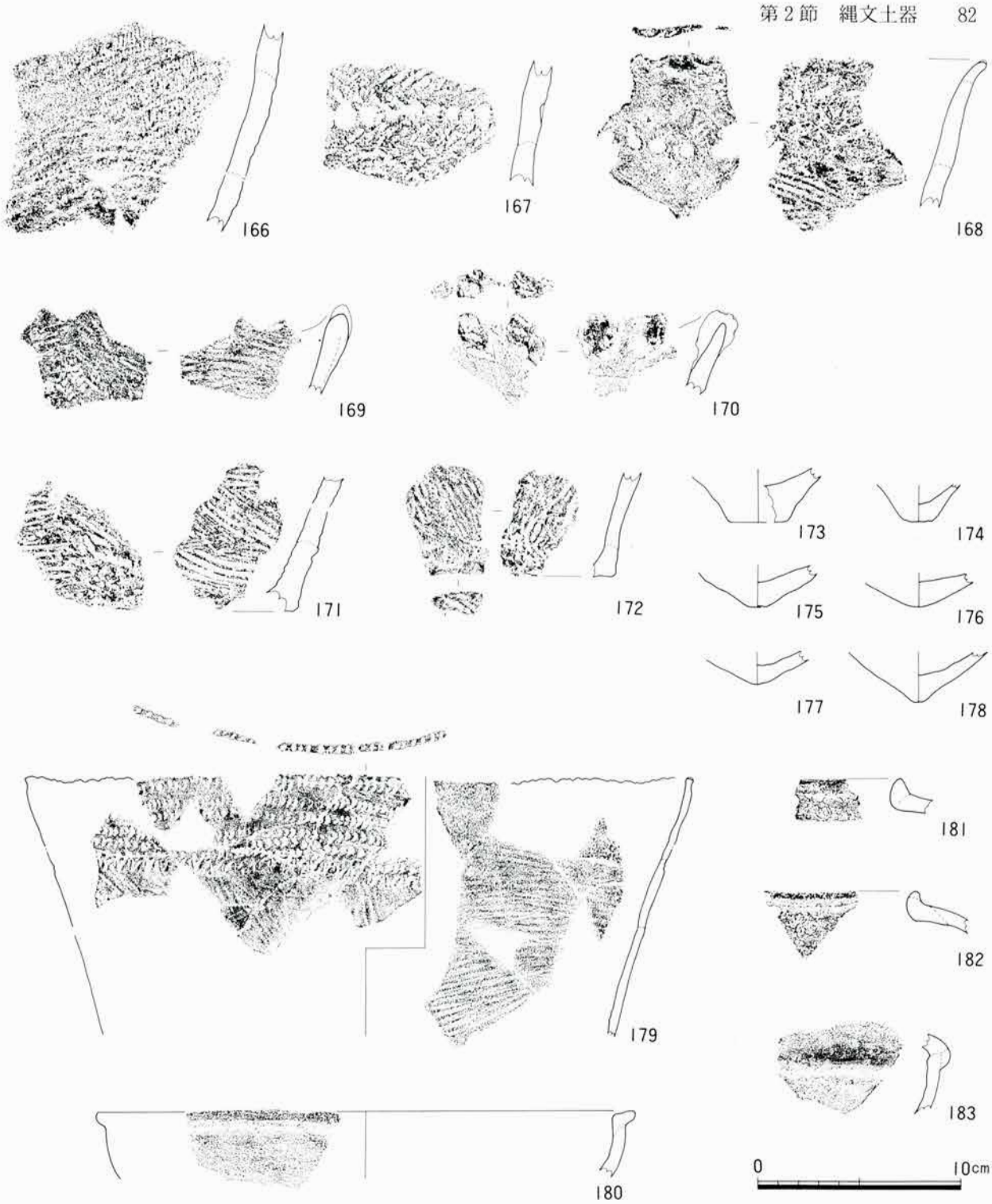
e種　無文土器

胎土に繊維を含む等より、早期と考えられる無文土器は、850点出土した。内訳は、口縁部8点、胴部842点である。（第8表）

第2群土器　縄文時代前期の土器

1類　清水ノ上Ⅱ式に類似した土器（第50図　179　図版16）

(179)の口縁部は、先端が二股に分かれた半截竹管状工具による押し引き状の連続刺突列6条を巡らし、さらにその下には爪形文を巡らせている。胴部には貝殻腹縁によると考えられる条痕調整が左上から右下へ浅めに施されており、残存部をみる限りでは胴部への刺突列は認められない。内面は条痕調整を横位に施しており、口唇部には細い棒状工具による連続刻みを施している。口径約33.5cm、残存器高約12.9cmを測る。器厚は約4～5ミリと薄手で黒褐色を呈する。(179)は前期初頭の清水ノ上Ⅱ式に類似し、羽島下層Ⅱ式に併行すると考えられる。



第50図　包含層出土土器(11)　第1群4類　第2群
(上の段)

２類　諸磯式土器（第50図　180～183　図版27）

(180)～(183)は諸磯ｂ式の列孔浅鉢と考えられ、(180)～(182)は口縁部片、(183)は胴部片である。(180)の口縁端部は外側へ開き、口唇部は平坦な面をもつ。推定口径約27.0cmである。(181)と(182)の口縁端部は立ち上がり、各々に列孔が２つみられる。列孔の間隔は、(181)が約3.0cm、(182)が約3.4cmである。(183)は２段の浅鉢と考えられる。

第3群土器　縄文時代中期の土器

1類　中期前半の土器

a種　北屋敷Ⅱ式土器（第51図　184～187　図版16・28）

(184)～(187)は北屋敷Ⅱ式で、共に口縁部片である。(184)は頸部から口縁部にかけてほぼ完全に復元することができ、口径約26cm、残存器高約7cmを測る。口縁部は、頸部より外反気味に開いたあと屈曲部を境にほぼ直立して立ち上がり、北屋敷式の特徴である角状の突起部を8単位で作出している。各突起部の間には、各々の正面に対してほぼ平らな面を作出し、この面に北屋敷式のもう一つの特徴といえる「く」の字状の連続刺突を、波状を呈する口縁に沿って横位に4条（一部3条）施している。各突起部では、突起部から垂下する稜の左右に同様の連続刺突を縦位に施している。なお、内面は無文であり、残存部でみる限り外面の頸部も無文である。器厚は4～7ミリと比較的薄手である。

(185)と(186)には3条、(187)には2条の「く」の字状の連続刺突が施され、(185)には突起の一部もみられる。(185)の口縁部は、口縁端部に粘土紐をのせて、それを前後から巻き込むようにして肥厚させ、口唇部には平坦な面を作出している。(186)は口縁部外面に粘土を貼付して肥厚させ、その上に文様を施している。(187)の口縁端部は三角形状に整形されており、外面には庇状に張り出した平らな面もみられる。(185)は比較的厚手、(186)・(187)は比較的薄手である。

b種　その他の中期前半の土器（第51図　188～191　図版28）

(188)～(191)は中期前半と考えられるその他の土器で、(188)は小片であるが貼付隆帯による文様の一部と半截竹管状工具による連続爪形文（キャタピラー文）が施され、信州系（藤内～井戸尻式か）である。(189)は杯状の凹みを2つ組み合わせたような突起部である。外面には2つの杯状の凹みの連結部より1本の隆帯を垂下させ、その左右には連続刺突による沈線で文様（角の丸い四角形か）を描いている。内面にも連続刺突による沈線を横位に引いている。なお、内面には赤色物の付着も一部観察できる。沈線内に刺突のみられることより船元式（船元Ⅰ式か）と考えられる。[1]

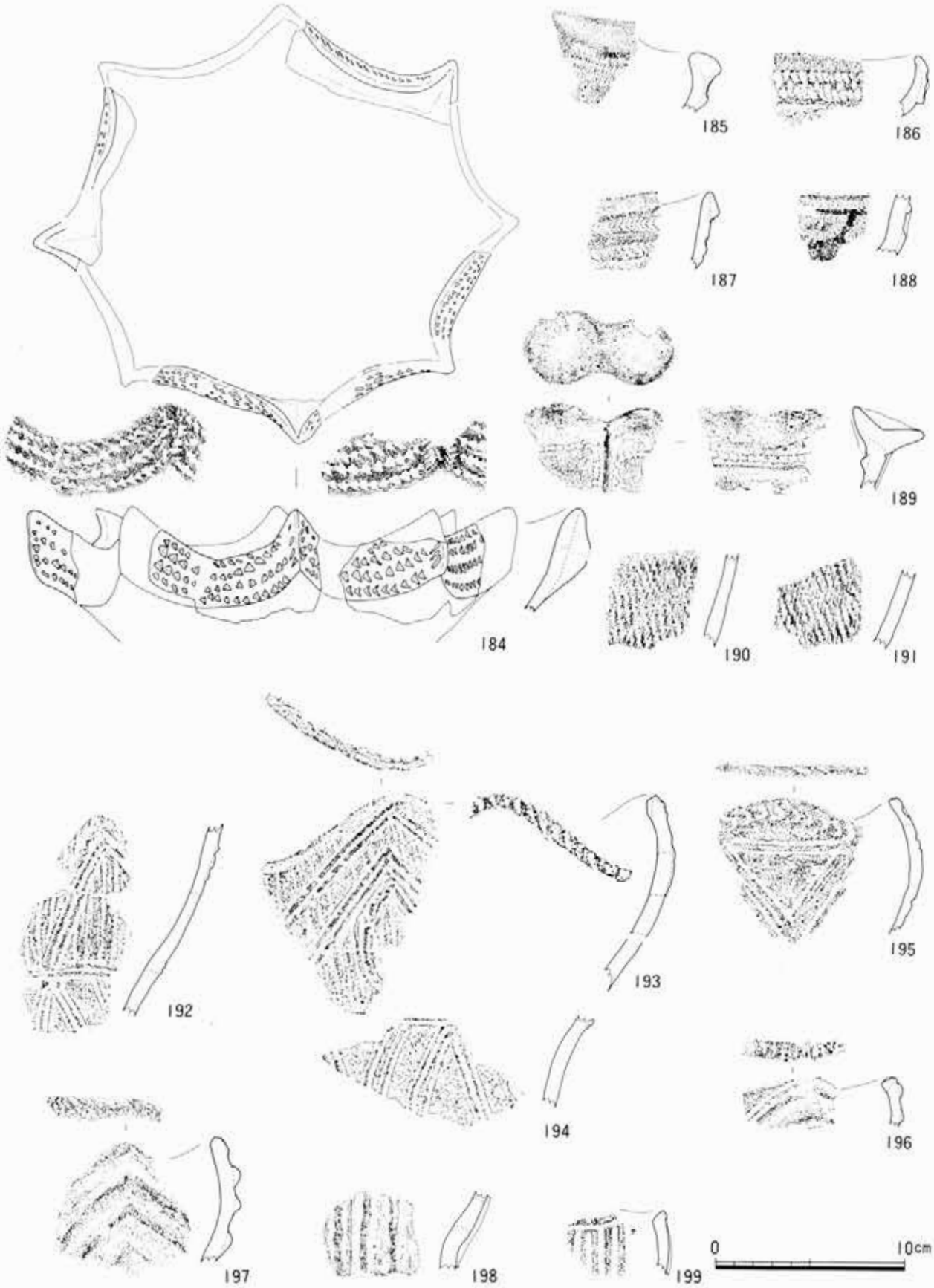
(190)と(191)は同一個体でやや粗めの特殊な縄文が充填されており、船元Ⅰ～Ⅱ式と考えられる。

1）泉拓良氏の御教示による。なお、粟津湖底遺跡第3貝塚でも同様の突起部が出土している。滋賀県教育委員会・(財)滋賀県文化財保護協会　1997
「粟津湖底遺跡第3貝塚（粟津湖底遺跡Ⅰ）本文編」図7-20　255、図7-23　296

2類　中期後半の土器

a種　船元Ⅲ式土器（第51図　192～196・199　図版28）

(192)～(196)・(199)が船元Ⅲ式で、このうち(192)～(194)は同一個体で波状口縁を呈し、丸みをもって内湾する口縁部には粗い縄文を充填し、頸部は無文である。貼付隆帯と竹管による平行沈線で文様を描いており、やや肥厚した口縁部内面には粗い縄文を充填している。口唇部には平坦な面をもつ。(195)は波状口縁を呈し、半截竹管状工具による平行沈線による逆三角形の文様を描いており、



第51図　包含層出土土器(12)　第3群1類、2類a・b種
(上の段)

口縁端部には同様の工具による逆「C」字状の連続刺突を施している。口唇部には刻み目もみられる。(196)は貼付隆帯と竹管による平行沈線で文様を描いており、口唇部には連続刻みが施されている。波状口縁を呈すると考えられる。(199)は縦位の(短)沈線が施され、船元Ⅲ式E類[1]に類似する。波状口縁を呈し、口唇部には平坦な面をもつ。

1）間壁忠彦・間壁葭子　1971　「里木貝塚」

b種　隆帯や沈線を多用し、船元Ⅲ式が在地化したと考えられるもの

（第51・52図　197・198・200～205　図版28・29）

(197)・(198)・(200)～(205)は船元Ⅲ式が在地化したと考えられるもの[1]で口縁部の形態や文様の構成、さらには文様が隆帯か沈線か等により細分が可能である[2]が、ここでは出土点数も少ない事からひとまとめにして取り扱う。(197)の外面には、波状を呈する口縁と平行に粘土紐3条を貼付し、それを上から指頭によりつまみながら撫でて整形した断面三角形の隆帯で文様を描いている。[3] (197)の口唇部には粗い縄文を充填している。(197)は器形・口縁部の形態、口唇部への縄文の施文等より後述の(198)・(200)～(205)よりも船元Ⅲ式により近いと考えられ、他とは分類することも可能である。(198)は口縁部から頸部にかけての破片で、縦の貼付隆帯の間に櫛描沈線を引いている。(200)は端部がやや内湾する口縁部片で、貼付隆帯と刺突列、および沈線による文様を施している。[4]

(201)は口縁部に刺突列、その下に多重（4条以上）の波状沈線文を施している。(202)は(200)同様に端部が内湾する口縁部片で隆帯を縦横および斜めに貼付し、さらにその間に刺突や短い沈線を施すことによって口縁端部には蜂の巣状の、またその下には格子目状の複雑な文様を作出している。[5] なお、横位の隆帯上には細かい連続刻みが施され、隆帯間には櫛描沈線も観察できる。(203)は推定口径約16.4cmを測り、口縁端部に隆帯を波頂部をずらして重ね合わせながら波状に貼付し、連続した眼鏡状の文様を施している。(204)も同様に波状の隆帯を重ね合わせて、互いに波頂部が接するように貼付して文様を施している。(205)は推定口径約23.2cmで、内湾気味に立ち上がる口縁部の外面には粘土紐を貼付し、そこに指頭によると考えられる刺突を施して連続する眼鏡状の文様を作出し、その下には粘土紐による隆帯を2条の弧状に貼付し、眼鏡状の隆帯と弧状の隆帯の間には、縦の短沈線を引いている。

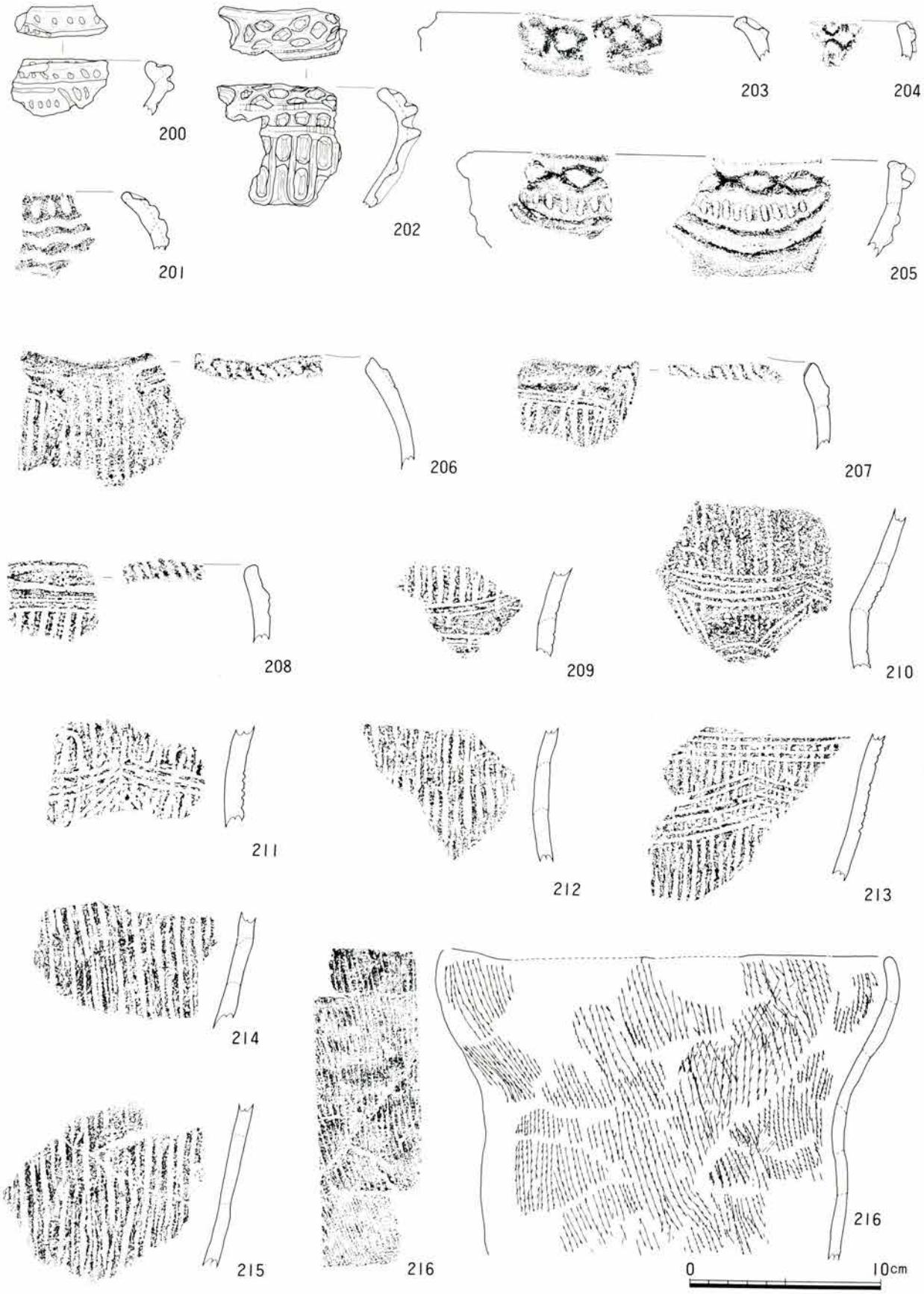
1）第2節　(1)　土器分類の註参照

2）「戸入村平遺跡」（武藤　1994）ではこれらの土器をC2群土器とし、隆帯か沈線か等によってA～E類に分類している。また、「上原遺跡Ⅰ」（近藤　1998）では、大きく外反し、端部付近で内側に屈曲した口縁部をもつものと、それに類する器形で無文地に隆帯や沈線を主文様として施した土器群をC5群とし、隆帯を多用するもの（Ⅰ類）と沈線を多用するもの（Ⅱ類）とに分類している。

3）(197)とよく似た土器が上原遺跡第2地点（「上原遺跡Ⅰ」C4群(1547)）で出土している。また、「醍醐遺跡」（滋賀県浅井町）でもこうした土器の出土が知られている。

4）(200)とよく似た土器が「山手宮前遺跡」（「山手宮前遺跡」第8集　第Ⅲ群1類（1241)～(1243)）や「上原遺跡第2地点」（「上原遺跡Ⅰ」C5群Ⅱ類(1581)他）でも出土している。

5）(202)とよく似た土器が本遺跡の下の段でも出土している（(262)・(263)）。また、「戸入村平遺跡」（「戸入村平遺跡」(1738)）や、「上原遺跡第2地点」（「上原遺跡Ⅰ」C5群Ⅰ類(1554)他）でも出土している。



第52図　包含層出土土器(13)　第3群2類b・c・d種
(上の段)

c種　船元Ⅳ式土器（第52図　206～215 図版29）

(206)～(215)は縄巻縄文を地文とし、半截竹管状工具による平行沈線文を施す船元Ⅳ式土器で、(206)～(208)は口縁部、(209)～(212)は頸部、(213)は頸部もしくは胴部、(214)～(215)は胴部片である。(206)～(209)は同一個体で縄巻縄文地に隆帯を縦横に貼付し、隆帯に沿って半截竹管状工具による平行沈線を引いている。口縁部は小波状を呈し、口縁部内面には縄文を充填している。(209)は頸部で無文帯もみられ、半截竹管状工具による平行沈線を連弧状および横位に引いている。(210)と(211)も頸部で、共に半截竹管状工具による平行沈線を連弧状および斜めに引いて文様を施している。(210)には無文帯もみられる。(213)は同様の工具による横位および連弧状の沈線を各々2条・3条引いている。(212)・(214)および(215)は縄巻縄文を縦位に施している。

d種　里木Ⅱ式に類似する土器（第52・53図　216・217～239　図版16・30）

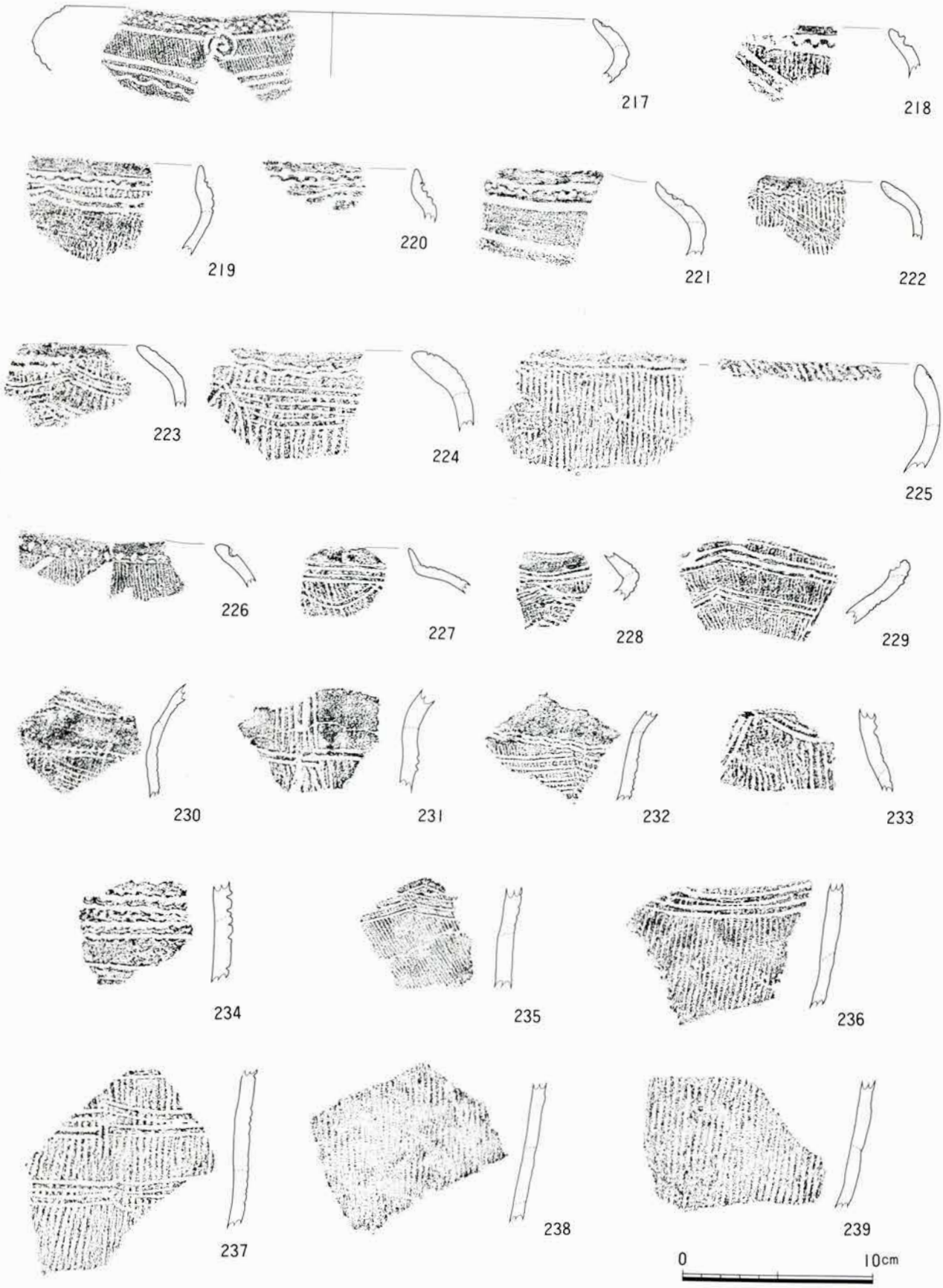
(216)および(217)～(239)は撚糸文を地文とする里木Ⅱ式に類似する土器[1]で、(216)は口縁部から頸部、胴部にかけてほぼ完全に復元することができた。口径約23.8cm、頸部の径約19.2cmで、口縁部が外反して内湾するキャリパー形の器形を呈する。全面に撚糸文を充填し、半截竹管状工具による平行沈線等の文様はみられない。8本を1単位とし、その幅は約2.8cmと考えられ、撚糸の間隔は3～4ミリとかなり広い。撚糸は縦位および左上から右下へやや斜行して施されているが、右上から左下へと施され、重なり合った部分も観察できる。器厚は6～8ミリ、輪積みの幅は2.3～3.3ミリである。

(217)～(229)はキャリパー形を呈する口縁部、(230)～(233)は頸部、(234)～(239)は頸部から胴部にかけての破片で、(234)を除いて地文には撚糸文を施している。(217)～(221)の口縁端部には、半截竹管状工具による平行沈線（(218)と(221)は棒状工具による平行する2条の沈線か）内に上下の交互刺突を施しており、特に(217)には密な刺突が施されている。(222)～(224)には半截竹管状工具による平行沈線で波状文を引き、(225)は串状工具による密な連続刺突2条を施している。これらは平行沈線内の交互刺突を簡略化させたものと考えられ、(226)には1条の沈線内に刺突列を施しており、さらに簡略化が進んだと考えられる。[2] (219)～(220)・(222)～(224)には半截竹管状工具による平行沈線で横位および連弧状の文様を描き、(224)には縦方向の施文（紡錘形か）もみられる。(217)・(218)・(221)・(226)には棒状工具による沈線を横位・斜位および波状に引いており、(217)には同様の工具による渦巻き文も施されている。(227)は半截竹管状工具による平行沈線を横位および連弧状に引いており、刺突はみられない。(227)の口縁端部は立ち上がる。(219)や(220)の口縁端部も若干の立ち上がりがみられる。なお、(221)と(226)は波状口縁を呈し、他の口縁部は平口縁を呈すると考えられる。

(228)と(229)は同一個体で、口縁端部を欠くものの、頸部から外反し内湾するところまでが残る。撚糸文地に半截竹管状工具による2本を1組とする平行沈線を横位および連弧状に引いており、一部縦の沈線もみられる。なお、沈線および撚糸文内に若干の赤色顔料が観察できる。(230)～(233)は頸部で、(230)～(232)には無文帯もみられる。共に半截竹管状工具による平行沈線を縦位・横位に引き、波状文や連弧状の文様を施している。(234)は同様の工具による2条の波状文と2条（下部は欠損）以上の横位の沈線が無文地に施され、頸部の可能性が考えられる。(235)～(237)には撚糸文地に半截竹管状工具による平行沈線を連弧状および横位に引いており、(238)と(239)には撚糸文が施されている。

1）第2節　(1)土器分類の註参照

2）春日井恒　1996「東海地方縄文中期における中富式土器群の問題」『美濃の考古学』創刊号



第53図　包含層出土土器(14) 第3群2類ｄ種
(上の段)

e種　その他の土器（第54図　240～244　図版16・31）

(240)～(244)は中期後半と考えられるその他の土器で、(240)は頸部から外反し、屈曲してほぼまっすぐに立ち上がった後、口縁端部でやや内湾するキャリパー形器形を呈し、外面には縄文地に半截竹管状工具によるC字形の連続刺突2条を口縁部に施しており、口縁部内面にも平坦な面をもち、縄文（RL）を充填している。推定口径約25.4cmを測る。(241)・(242)は同一個体で、小波状を呈する口縁部片である。斜行する沈線状の文様（撚糸文の可能性も考えられる）を施し、口縁端部には棒状工具による小連弧文1条を引き、波頂部にはやや長めに2条引いている。口縁部内面には平坦な面をもち、連続刻みを施している。(243)は頸部から外反し内湾するキャリパー形の口縁部で、端部は立ち上がり、波状口縁を呈する。推定口径約26.0cmを測る。左上から右下へ斜行する縄文（串状の工具による擬縄文か、撚糸文の可能性も考えられる。）を地文とし、半截竹管状工具による平行沈線で口縁端部および口縁部の張り出し部には交互刺突状の文様を、頸部には波状文を描いている。口縁上端部には波頂部から左右に流れる連弧状の沈線2条を引き、さらに波頂部の下から縦に垂下する2本の平行沈線を引いている。(244)は把手状の突起部で、半截竹管状工具の押し引き沈線による連続爪形文（キャタピラー状の文様）を施している。上面から棒状工具による穿孔が施され、そのまま縦の沈線が引かれている。内面の上端には炭化物の付着もみられる。

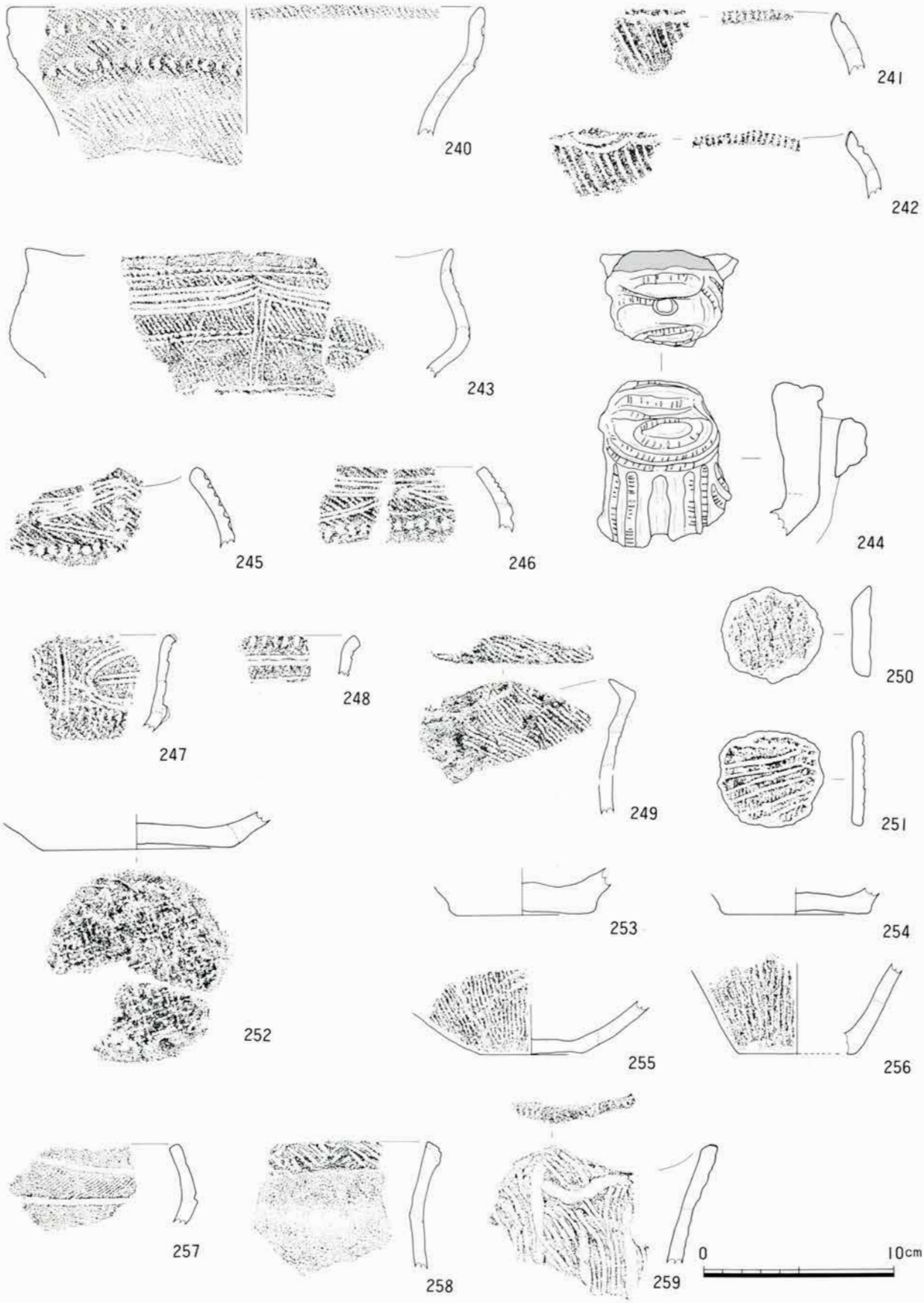
3類　その他の中期の土器

a種　型式等不明の土器（第54図　245～249　図版31）

(245)と(246)は同一個体で内湾する口縁部片である。波状口縁を呈し、波頂部は2つの頂点をもつ台形になると考えられる。縄文地に半截竹管状工具による平行沈線文を口縁に沿って横位に引き、その下には三角形状の文様を施している。(245)の波底部には渦巻き文の一部と考えられる文様もみられる。半截竹管状工具による連続刺突列を波頂部から縦位に、口縁下半部には横位に施している。口唇部は平坦な面をもつ。(247)と(248)も同一個体で、口縁下半部に粘土紐を貼付し、屈曲部を作出した後、その上下に縄文を施しこれを地文としている。さらに篦状工具で口縁端部と屈曲部の隆帯上に連続刻みを施し、それらの間に半截竹管状工具による平行沈線で縦位および、楕円形でその中央に横位に引く文様を施している。(249)は外反する口縁部で、緩やかな波状を呈し、口縁端部は内側に折り返されて平坦な面をもつ。口縁端部のこの面と外面には縄文が充填されているが、外面には縄文（原体はRLで5つの節をもち、長さは約1.1cmか）の施された所と無文の所とがみられる。

b種　土製品（土製加工円盤）（第54図　250・251　図版31）

(250)と(251)は土製品（土製加工円盤）で、(250)は約5.1cm×約5.3cm、(251)は約5.1cm×約5.6cmを測る。(250)の外面には縄巻縄文（2類c種）がみられ、(251)の外面には撚糸文地に半截竹管状工具による平行沈線で波状文と連弧文状の文様3条（2類d種）がみられる。



第54図　包含層出土土器(15)　第3群2類e種・3類、4群
(上の段)

c種　底部（第54図　252～256　図版31）

(252)～(256)は底部片で、(252)の底部には編み物痕（もじり網状か）がみられ、(255)と(256)の胴下半部には撚糸文が施されている。(252)～(255)の底部は平底でわずかに凹む。

第4群　縄文時代後期の土器　　（第54図　257～259　図版31）

(257)～(259)は後期の土器で全て口縁部片である。(257)は磨消縄文が施され中津式と考えられる。(258)は縁帯部を肥厚させ、その部分に斜めの沈線による文様を施しており、福田KⅡ～四ツ池式と考えられる。(259)は波状口縁を呈し、口唇部には刻みが施されている。外面には径約2ミリ程度の棒状工具による斜行および縦走する沈線で器面をおおい、その上に径約6～7ミリのやや太めの棒状工具（もしくは指頭）による縦位および横位に蛇行する沈線を引いている。[1]

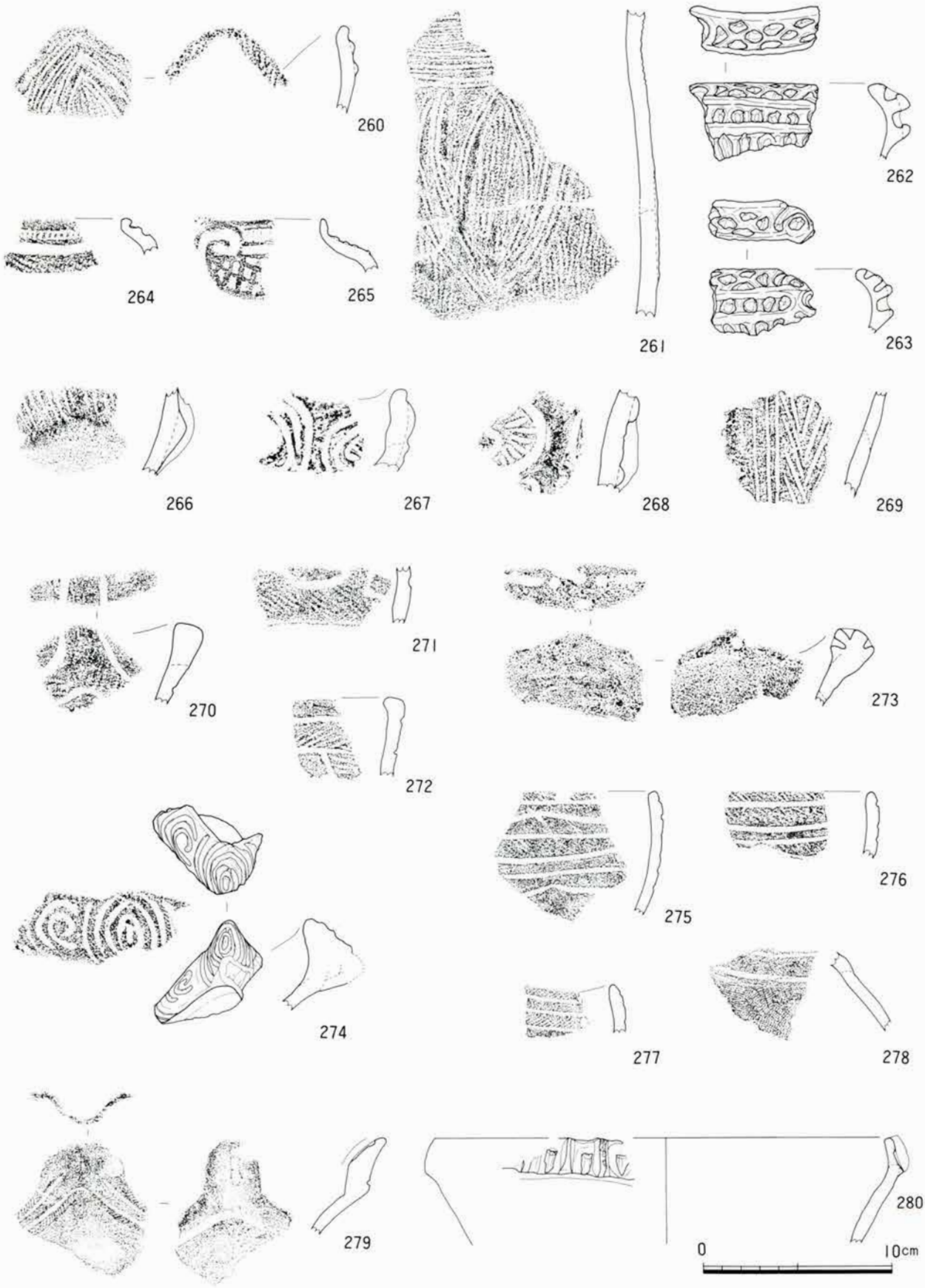
1）北白川上層Ⅱ式に併行する東海系の土器ではないかと考えられる。泉拓良氏の御教示による。

第5項　包含層（下の段）から出土した土器

第3群土器　縄文時代中期の土器　（第55図　260～269　図版32）

(260)・(261)は船元Ⅲ式（a種）、(262)・(263)は船元Ⅲ式が在地化したと考えられるもの（b種）で、(260)・(261)は縄文地に貼付隆帯と半截竹管状工具による平行沈線で文様を描いており、(260)は口縁部で波状口縁を呈し、口唇部には縄文の充填もみられる。(261)は頸部から胴部にかけての破片で、頸部には無文地に半截竹管状工具による横位の平行沈線が引かれている。(262)・(263)は、上の段で出土した(202)(第52図）同様に内湾する口縁部片で、隆帯を縦横および斜めに貼付し、さらにその間に刺突や短い沈線を施すことによって口縁端部には蜂の巣状の、またその下には格子目状の文様を作出している。口縁端部には同心円状の文様もみられる。(264)・(265)はいずれもキャリパー形を呈する口縁部片である。(264)は口縁上端部に横位の沈線を引き、その中に連続刺突を施している。その下には沈線による楕円区画内に縄文を充填したと考えられる。横位の沈線と縄文がみられる。(265)の口縁端部は若干の立ち上がりをもち、この部分に横位の沈線2条（上方の沈線は半截竹管状工具による押し引き沈線）と沈線による渦巻き文が施され、その上下には素麺状の粘土紐による（楕円区画内への）格子目文もみられる。(264)め(265)はいわゆる咲畑式土器[1]である。(266)は、口縁下半部から頸部にかけての部分で、粘土を貼付した厚手の隆帯区画内に斜行沈線の充填がみられ、神明式[2]と考えられる。(267)は小波状を呈する口縁部片で、波頂部には沈線による文様が施され、その中央部には径約15ミリの穿孔がみられる。その隣にも沈線による楕円区画が引かれ、区画内にも沈線による文様が施されている。(268)も口縁部片で、口縁端部を欠損するものの隆帯による楕円区画内に沈線による渦巻文を引き、さらにその中を沈線で充填している。(269)は胴部片で、縦に引かれた3本の沈線による右側の区画内には矢羽状沈線を充填し、左側の区画内は無文である。(267)～(269)は中期後葉～末葉の土器と考えられる。

1）山手宮前遺跡では、いわゆる咲畑式土器が多数出土している。(第8集)
2）戸入村平遺跡では、いわゆる神明式土器が多数出土している。(第4集)



第55図　包含層出土土器(16)　第3群、第4群1・2類
(下の段)

第4群土器　縄文時代後期の土器

1類　後期前葉の土器（第55図　270～272　図版32）

(270)～(272)は磨消縄文を施す後期前葉の土器で、(270)と(272)は口縁部である。(270)は波状口縁を呈し、波頂部から垂下する沈線による文様帯の中に縄文を施している。口縁端部は肥厚し、口唇部は平坦な面をもつ。(272)は平口縁を呈し、口縁端部はやや内湾する。口縁部には平坦面がみられる。(270)・(271)は中津式、(272)は福田KⅡ式と考えられる。

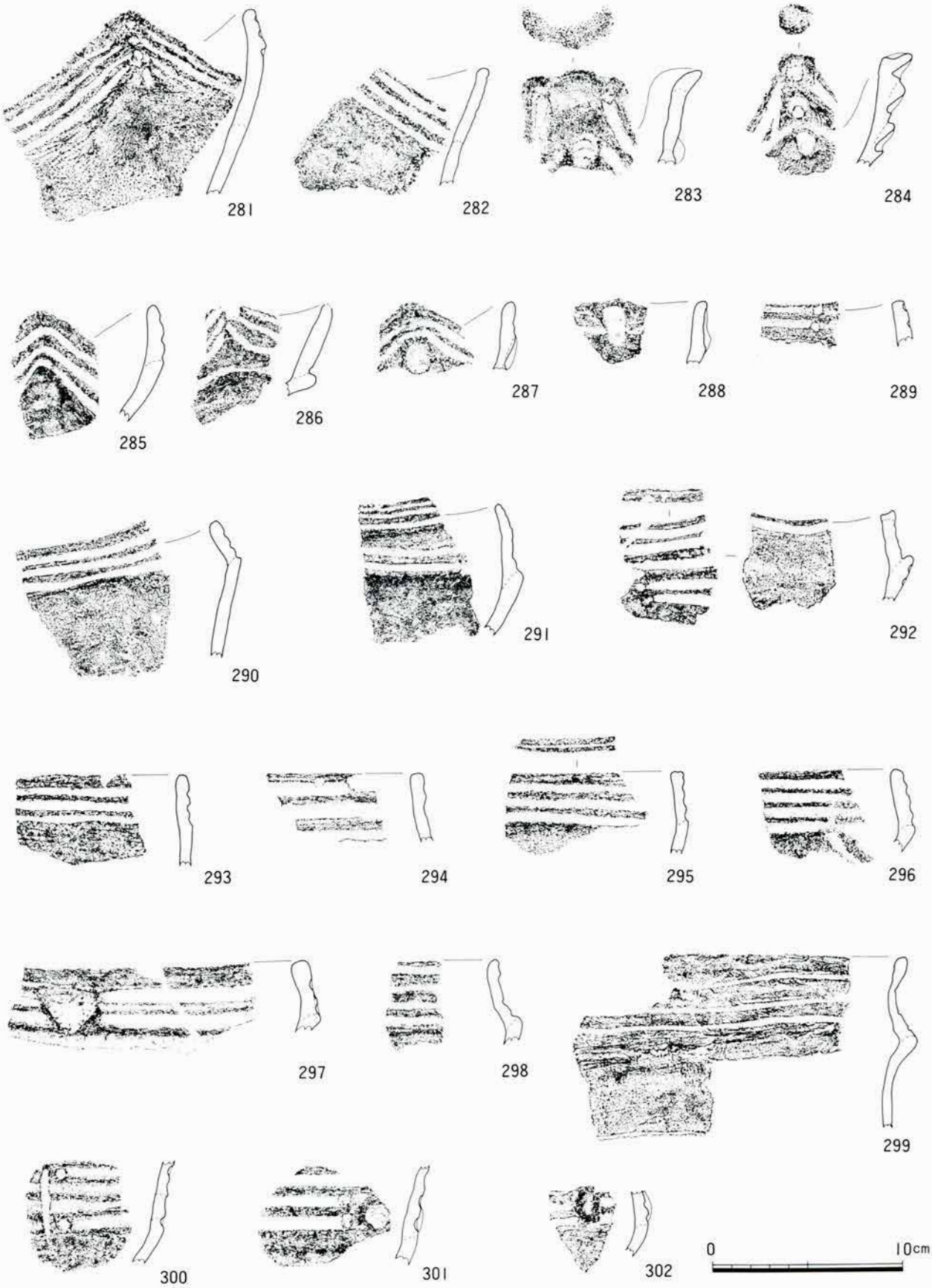
2類　後期中葉の土器（第55図　273～280　図版32）

(273)と(274)は縁帯文系の土器で、共に波状口縁を呈し、(273)は口縁端部を肥厚させ、口唇部に棒状工具による横位の沈線を引いている。波頂部には、その中央と左右および内外面に5つの刺突を施している。(274)は口縁端部に断面T字状の面を作出し、この面に縄文を充填して棒状工具による沈線で波頂部には同心円（5重)、その隣には渦巻き文を施している。波頂部は三角形を呈する。(275)と(276)は同一個体で、内湾する口縁部をもち椀形を呈すると考えられる。口縁に平行な横位の沈線と弧状の沈線を交互に各3条引き、磨消縄文を施している。北白川上層Ⅲ式併行と考えられる。(277)は波状口縁を呈し、横位の沈線3条と磨消縄文帯2本がみられる。なお、波底部には棒状工具による刺突が2つ施されている。北白川上層Ⅲ式～一乗寺K式併行と考えられる。[1] (278)は低い隆帯の上下に沈線を引き、その下には貝殻擬縄文を施している。隆帯上には細かい連続刻みもみられる。一乗寺K式の注口土器胴上半部と考えられる。(279)は波状口縁を呈し（4単位か）波頂部に突起を作出し、屈曲部より上の外面には口縁に沿って2条の細い沈線を引き、その上と下に斜行する細かい連続刻みを施している。屈曲部以下は無文である。外反気味に開き、内側がU字形に凹む突起部の内面には円棒状工具による縦の細かい沈線（両端が刺突状に凹む）がみられる。元住吉山Ⅰ式と考えられる。(280)は頸部から外反気味に立ち上がり、口縁部には内傾する面を作出し、この面に粘土紐を約2cm間隔で縦に貼付し、その上に縄文を充填している。隆帯と隆帯の間には縦の短沈線を引いている。口唇部には平坦な面がみられる。（後期後葉でも後半にみられる）蜆塚Ⅲタイプの土器と考えられる。

1）曽万布遺跡（福井県福井市）でこれとよく似た土器が出土しているとのことである。
　木下哲夫氏の御教示による。

3類　後期後葉の土器（第56図　281～302　図版33）

(281)～(302)は後期後葉の凹線文系土器（宮滝・井口式）で、共に口縁部である。このうち、(281)～(292)は波状もしくは小波状を呈し、このうち(283)・(284)は突起部である。(293)～(299)は平口縁を呈する。(300)～(302)は口縁端部を欠損する。(281)は内湾する口縁部で、波頂部には縦に3個の刺突が施され、その左右には口縁に沿って3条の凹線が引かれている。(282)はやや外反気味に開きな



第56図　包含層出土土器(17)　第4群3類
(下の段)

がらやや内湾する口縁部で、波状を呈する口縁に沿って3条の凹線がみられる。胎土には金雲母を含む。(283)と(284)は突起部で、(283)はまっすぐに立ち上がった後、口縁端部が外反し、内面はU字状にくぼむ。外面の中央下半部には粘土を貼付し、その上に巻き貝の回転圧痕文を（先端部を下にして）施している。その左右には各々2条の凹線がみられる。(284)の突起部は、(285)の波頂部がせり上がったような形をしており、粘土を貼付しその左右に各々2条の凹線を引いて、3層（重）の段を作出し、各段の前面に巻き貝の先端部による斜めの刺突を施している。上端部には指頭による押圧が加えられている。(285)～(287)は波状口縁の波頂部で、(285)には口縁に沿って3条の凹線が引かれ、(286)には波頂部より左右に各々3条の凹線を引き、波頂部の前面には刺突もみられる。屈曲部を前面に張り出させ、その上部（側）には凹線を引いている。(287)の波頂部には2条の凹線と、(283)のように貼付粘土上に巻き貝による回転圧痕文を施している。小波状を呈する(288)の波頂部にも同様の回転圧痕文が施されている。(289)も小波状を呈し、3条の凹線内に巻き貝の先端部によると考えられる円形の刺突を施している。(290)～(292)は波状口縁を呈し、共に明瞭な屈曲部をもち、(290)は屈曲部より上の面に3条の凹線を引き、(291)は屈曲部の上にもう一つの緩やかな屈曲部を作出し、上の面には3条、下の面には2条の凹線を引いている。(292)の屈曲部は(286)のように前へ張り出し、屈曲部の上に3条、屈曲分の下に2条の凹線を引き、下の2条の凹線の左端には円形の刺突もみられる。(292)の内面には1条の凹線が引かれている。(293)～(299)は平口縁を呈し、(294)～(299)は屈曲部を有する。特に(298)・(299)は明瞭な屈曲部を有し、(299)の口縁部は内湾し、外反する。各々の屈曲部より上の部分、(293)は口縁上端部に2～4条の凹線を横位に引き、(297)は巻き貝による（先端部を下にした）回転圧痕文で凹線を切っている。(295)の口唇部には沈線もみられる。(299)の凹線は、他と比べてやや細く、また多少蛇行気味に引かれている。(300)も口縁部片と考えられ、屈曲部より上には横位に引かれたやや幅広の凹線4条を縦の沈線で切り、[1] さらにその右側には円形の刺突2個を一番上と一番下の凹線内に施している。(301)は3条の凹線のうち、下の2条の凹線上に粘土を貼付して、その上に巻き貝の回転圧痕文を先端部を下にして施し、さらにその左側には円形の刺突2個を各々の凹線内に施している。(302)はやや丸みをもった屈曲部（肩部）の上の内湾していく部分に引かれた3条の凹線上に粘土を貼付し、その上に縦の短沈線を刺突状に施している。

1）凹線を沈線で切るのは東海的である。凹線文系の土器ははじめは1つ（同じ）であったものが、後半になって近畿・北陸・東海の3地域で分化するようである。泉拓良氏の御教示による。

4類　注口土器・浅鉢（第57図　303～309　図版34）

(303)～(306)は注口土器で、(303)と(304)は同一個体と考えられ、(305)と(306)は注口部である。(303)は注口土器の口縁部で、推定口径は約10cmである。横位の2条の隆帯を貼付し、巻き貝の回転施文（先端部を上にして施文）の3段重ね（下が先、上が後）を4単位で施文している。巻き貝の回転施文の中には赤色顔料の付着もみられ、分析の結果ベンガラとの結果を得た（巻頭図版2および第6章参照）。巻き貝の回転施文の間には2条1組の横位の沈線を3本（以上）引いている。[1] (304)は口縁の下部で、明瞭な屈曲部とその上に引かれた2条の横位の沈線がみられ、沈線内には赤色顔料の

付着がみられる。

(303)・(304)は黒く光沢のある器面に仕上げられ、精緻な作りである。(305)と(306)は注口部で共に先端部が下向し、特に(306)の先端部は緩やかな弧を描いて下向する。(305)の注口部は長さ約5.5㎝、根元部分の径3.0～3.5㎝を測り、(306)の注口部は長さ約14.5㎝、根元部分の径3.8～4.0㎝を測る。2点とも、注口部内の穴の断面形に穿孔に使われた工具の後が残り、特に(306)では幅約7ミリの角ばった痕がみられることから、割り箸状の角ばった工具で穿孔した可能性も考えられる。(306)の根元部分の下側には、凹線3本が引かれ、特に先端部側の2条の凹線は両端が各々つながっており、閉じた長楕円形を描いている。(307)～(309)は浅鉢で、(307)は内面に1条、(308)は内面に2条の沈線を引いている。(308)と(309)の口唇部は平坦な面をもち、(308)は口唇部に1条、(309)は口唇部に2条の沈線が施されている。(307)・(308)は凹線文系の後期の浅鉢と考えられ、(309)も後期末葉（～晩期初頭）の浅鉢と考えられる。

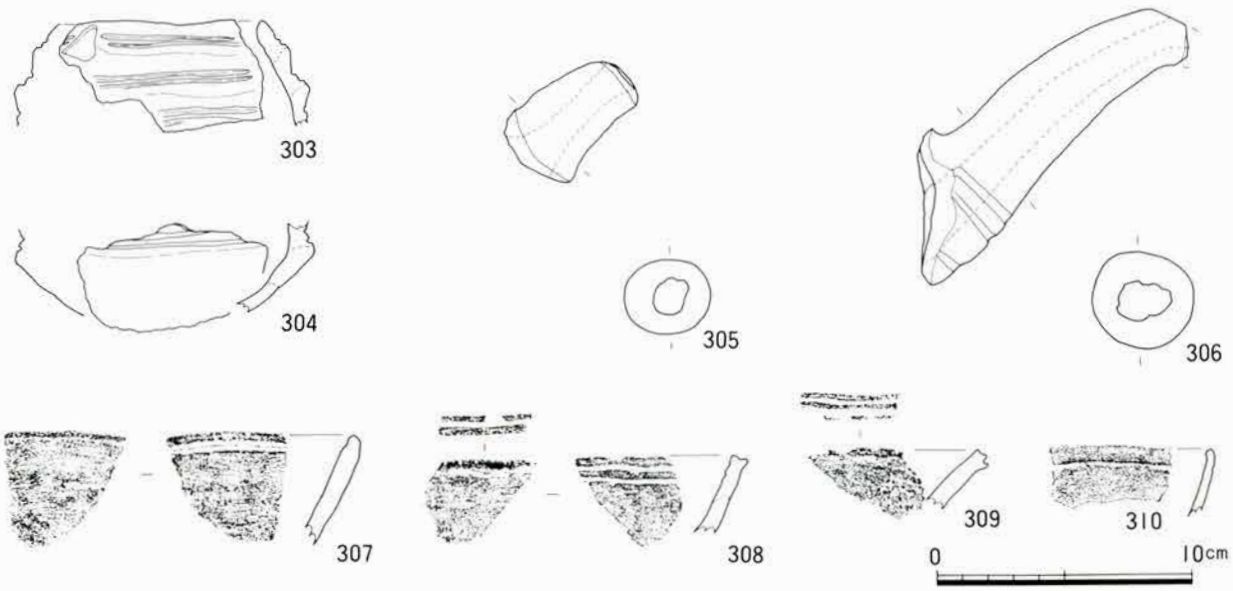
1）泉拓良氏より北陸的であるとの御教示を得た。

5類　その他の後期の土器（精製土器）（第57図　310　図版34）

(310)は(303)・(304)と同様に黒く光沢のある器面に仕上げられた精緻な作り（精製土器）である。外面には口縁の下約7ミリの所に弱い段が認められ、口縁端部は内面にやや肥厚する。器厚約4ミリと薄手である。

第5群　縄文時代後期末葉～晩期の土器

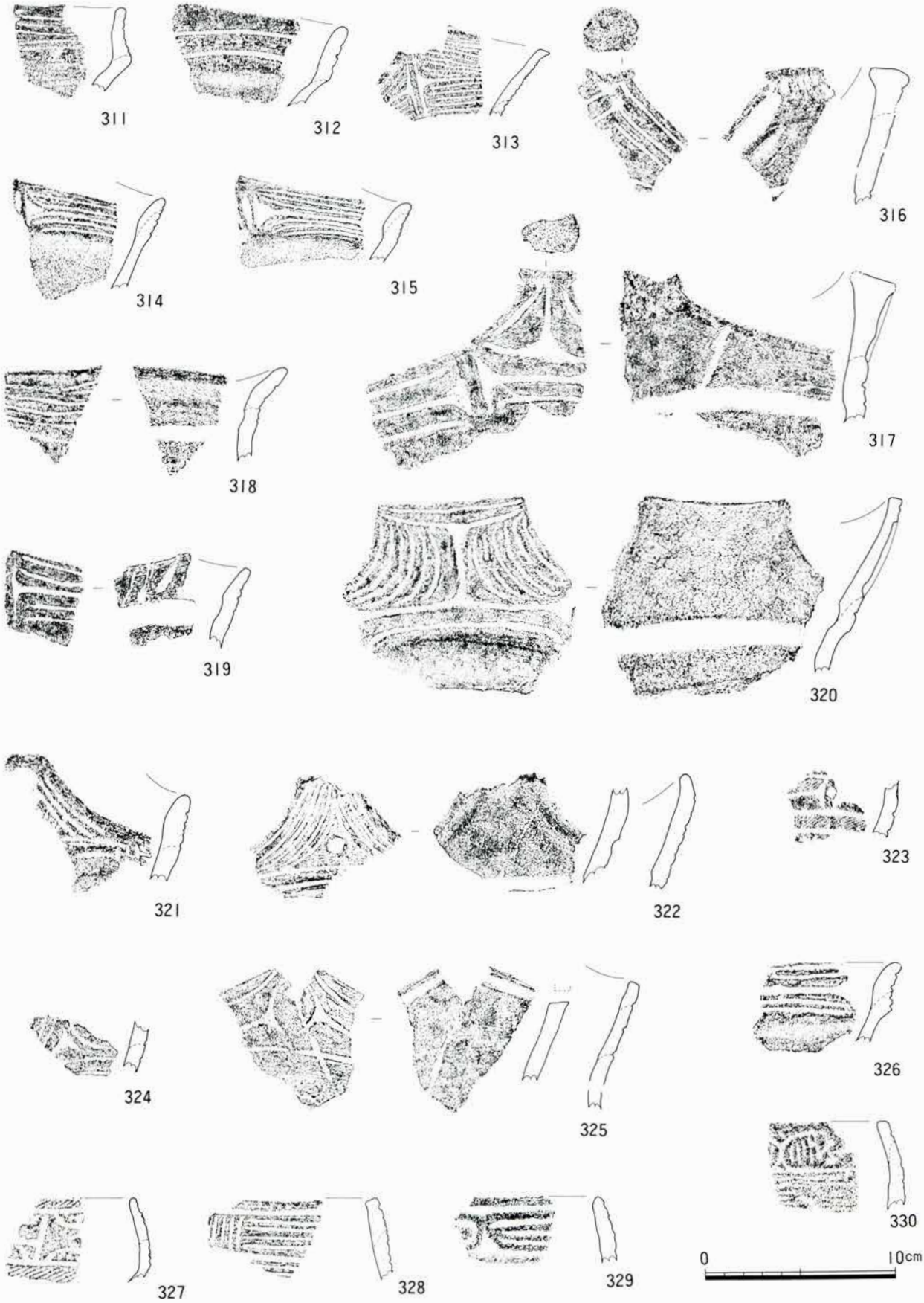
1類　後期末葉～晩期前葉の土器



第57図　包含層出土土器(18)　第4群4.5類
（下の段）

a種　八日市新保式～御経塚式土器（第58図　311～330　図版36・37）

(311)～(330)は後期後葉（末葉）～晩期前葉にかけての土器で、(315)を除いてすべて口縁部片である。(311)～(322)、(324)・(325)は波状口縁を呈し、(316)・(317)は突起部である。(311)と(312)は屈曲部（段）をもち、屈曲部の上の面に(311)は5条、(312)は3条の横位の沈線を引いている。(312)の中央の沈線内には、約1㎝間隔で列点文を充填している。(311)は波状を呈すると考えられ、(312)の波頂部は丸く仕上げられている。いずれも後期末葉の八日市新保式と考えられる。(313)の波頂部は上辺の中央がやや下がる台形を呈し、波頂部より垂下する2本の沈線内に列点文を施し、その左右には連続三叉文を描いてその上下に多数の集合沈線を引いている。(313)も(312)と同様八日市新保式と考えられる。[1] (314)・(315)は波状口縁を呈し、口縁部には波頂部に縦に引かれた短沈線の隣り（左右か）に連結三叉文と考えられる文様を横位に施し、その上下には(314)は各2条、(315)は各3条の横位の沈線を引いている。2点とも口縁部の内面が肥厚しているが、その肥厚部の断面形の微妙な差から両者は別個体と考えられる。(316)と(317)は波頂部がせり上がって突起状を呈しており、その上端には平坦な面を作り出している。(316)の外面には口縁に沿って左右に分かれる3条の沈線とその下に横位の沈線がみられ、(317)の外面には波頂部に山字文、その下に連結三叉文、さらにその下に横位の沈線1条を引き、その左側にも連結三叉文をはさんで上下に横位の沈線1条を引いている。(316)の内面には波頂部から左右に分かれる指頭によると考えられる凹線と、それらの下に横位に引かれた凹線の一部がみられる。(317)の内面には指頭によると考えられる横位の凹線1条がみられる。これらは別個体と考えられるが、いずれも八日市新保I式と考えられる。[2] (318)は波状口縁を呈し、外面には口縁に沿って7条の沈線が引かれ、内面には2条の指頭によると考えられる凹線がみられる。(318)は(316)と同一個体の可能性も考えられる。(319)・(320)も同一個体と考えられ、共に波状口縁を呈し、外面には（集合）沈線による文様を施し、内面には指頭によると考えられる横位の凹線1条がみられる。(319)の外面には連結三叉文を施してその上下に各2条の沈線を引いている。(320)の波頂部は台形を呈し、その中央部に連結三叉文を縦位に施して、その上下には各1条の沈線を、また左右には各6本の沈線を対向する弧状に引いている。これらの文様は屈曲部（段）の上に描かれている。(319)・(320)は御経塚式と考えられる。[3] (321)・(322)・(324)・(325)は波頂部で、(321)・(322)の波頂部は台形を呈し、この左右の辺は前方に外反し、上の辺は後方へ反っている。2点とも口縁にそって多重沈線を引き、その下には横位の沈線2本を引いている。(321)ではこの横位の沈線を切る縦の刺突状の短沈線3本が施され、(322)の中央部には凹点が施されている。(324)・(325)は口縁に沿って各々2条・1条の沈線を引き、その下にはその下には横位の沈線を各々2条・1条引いている。そしてその中央部には(324)は三叉文と2本の曲線、(325)は玉抱三叉文（中央には穿孔有り）を施している。(323)にも玉抱三叉文とその上下に磨消縄文が施され、一部赤色顔料の付着も観察できる。(322)の内面には(317)や(320)にみられたような指頭によると考えられる横位の凹線が引かれ、(325)の口縁部内面には波頂部に沿って左右に凹線が引かれている。(321)～(325)は御経塚式と考えられる。(326)は平口縁を呈し、屈曲部（段）の上部には連結三叉文と考えられる文様の上下に各2条の沈線がみられ、口縁部内面にも段を有する。(326)も八日市新保式～御経塚式と考えられる。



第58図　包含層出土土器(19)　第4群3類、第5群1類
(下の段)

1）犀川鉄橋遺跡（石川県）で類例がみられる。
　石川県立埋蔵文化財センター　(1982)
　金沢市犀川鉄橋遺跡第1・2次発掘調査報告書　(第6図　11、21)
米沢義光氏の御教示による。
2）布尾和史氏（石川県野々市町教委）の御教示による。(317)や(320)の類例は「藤江C遺跡」（石川県野々市町）でも出土しており、台形を呈する口縁部の方が新しいとのことである。
なお、(316)や(317)によく似た土器が「北裏遺跡」(岐阜県可児市）でも出土している。
　可児町北裏遺跡調査団　(1973)　「北裏遺跡」　(挿図21—19)

b種　その他の土器（第58図　327～330　図版36・37）

(327)～(330)も平口縁を呈し、(327)は内湾する口縁部片で、2条の平行沈線の間に縦の沈線や対向する沈線を引き、対向する沈線で区画された半円内に列点を施している。2条の沈線の上下には縄文帯がみられる。後期後葉～末葉と考えられる。[1] (328)は口縁上端部に1条の沈線を横位に引き、その下に縦位の4本の沈線と横位の4条の沈線を引き、さらにその下にも横位の沈線を引いている。口唇部は平坦な面をもつ。(329)は口縁に沿って横位の沈線1条を引き、その下には沈線による楕円形状の文様や三角形抉り文を施している。(327)～(329)も後期後葉（末葉）～晩期前葉にかけての土器と考えられる。(330)の口縁部には、三角形抉り文を上下対向して施文し、楕円形区画内を縦の沈線で充填している。これらの下にも横位の沈線がみられるが、摩耗が激しくはっきりしない。(320)は滋賀里的（滋賀里Ⅱ式に近い）である。[2]

1）判ノ木山西遺跡（長野県）に類例がみられる。
　縄文セミナーの会　(1996)「第9回　縄文セミナー　後期中葉の諸様相」(P236-図32、1・3)
　大石崇氏（高山市教委）の御教示による。
2）滋賀里的だが、滋賀里なら楕円区画内に横位の沈線を引くのに対して、(330)は縦位の沈線を引いており、他地域の影響も考えられる。泉拓良氏の御教示による。なお本遺跡では、滋賀里の典型である三角形抉り文をもついわゆる「橿原式」の土器は、(330)を含めて2～3点しか出土していない。

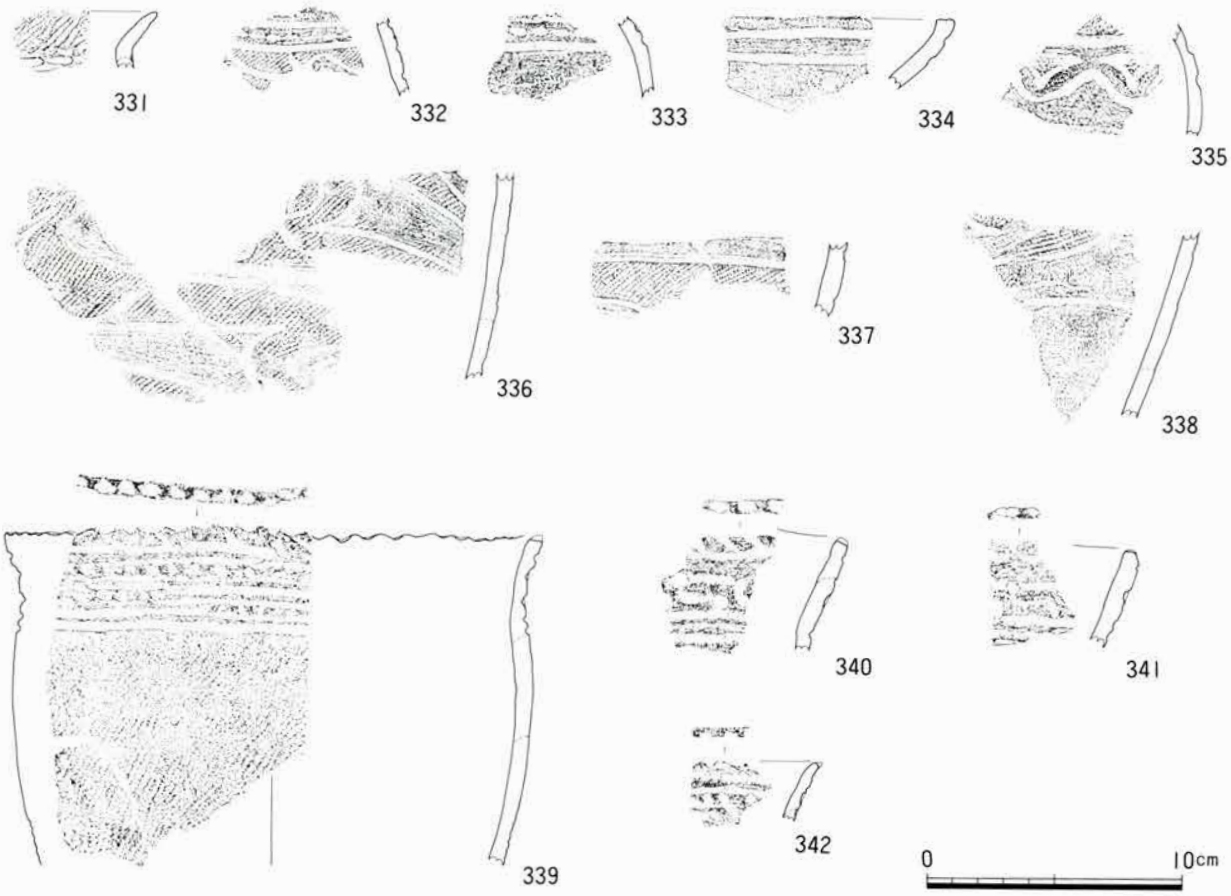
2類　晩期中葉の土器

a種　滋賀里Ⅲa式および滋賀里Ⅲb式・稲荷山式～西之山式土器

土器棺墓に利用されていた土器の多くは滋賀里Ⅲb式・稲荷山式（～西之山式）土器であり、滋賀里Ⅲa式土器もみられた（(2)遺構出土土器　②土器棺墓に利用されていた土器参照)。包含層（下の段）で出土した土器についても、これらの土器の存在が十分に考えられるが、そのほとんどは無文の粗製土器であるために、破片資料での断定は困難であった。そこで、それらの無文粗製土器については、後述の第6群土器の無文口縁・胴部片の中に含めた。

b種　中屋式（大洞系）・その他の土器（第59図　331～342　図版17・34）

(331)～(342)は晩期中葉の中屋式（大洞系）およびその他の土器で、(336)～(338)、(340)・(341)



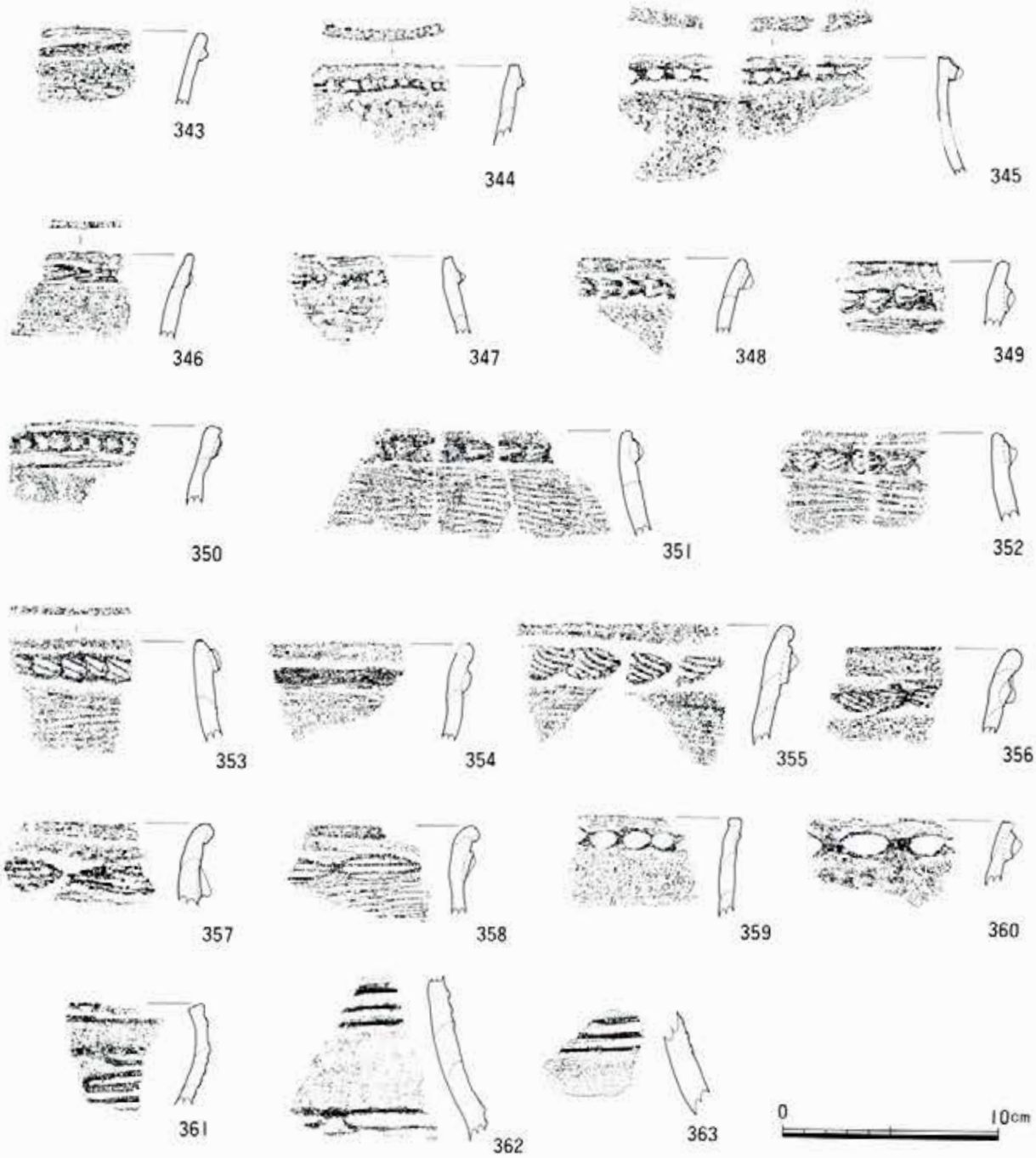
第59図　包含層出土土器(20)　第5群2類Ｄ・Ｃ種
（下の段）

は各々同一個体である。(331)はくの字状に外反する口縁部片で、口縁部には縄文を充填し、その下には横位の列点文が施されている。(332)は平行沈線内に列点文が施され、その下には、沈線を弧状に引き、縄文を充填している。(331)と(332)には赤色顔料の付着がみられる。(333)も平行沈線内に列点文が施されている。(334)は口縁部で、平滑に仕上げられた外面には横位の沈線２条が引かれ、沈線内には赤色顔料の付着がみられる。口唇部は平坦な面をもつ。(334)は浅鉢の可能性も考えられる。(335)は平滑な器面に棒状工具で平行沈線を引き、その間に三叉文状の逆三角形の文様や横位の蛇行沈線を引いている。平行沈線の上側には縄文も施され、器面全体に赤色顔料の付着もみられる。(336)～(338)は同一個体で器面に縄文（ＲＬ）を施した後に棒状工具による沈線で入組文と考えられる文様を描き、文様内の一部の縄文を磨り消している。器面は平滑に仕上げられ、赤色顔料（ベンガラ　巻頭図版(２)および第６章参照）を施している。(御経塚式～）中屋式併行と考えられる。

(339)は口径約21.2cm、残存器高約13.3cmを測る。頸部は少しくびれ、口縁部はやや外反する。口唇部には連続刻みが施されている。器面には縄文が施され、その上から、口縁部文様帯として口縁上端部には、刻みの部分より右斜めに下がる刻み状の短沈線による文様を描く。その下には６条の横位の沈線を引き、１本目と２本目の沈線の間に列点文を施し、さらに３本目と４本目、４本目と５本目の沈線の間には、各６個の列点を上下上下と交互に施している。色調は赤褐色を呈し、器厚は６～７ミリと比較的薄手である。胴中央部から口縁部にかけては炭化物が付着する。口縁部文様帯には少し磨きも施されているが、(340)・(341)のような器面の磨きはみられない。大洞ＢＣ式併行と考えられる。

(340)～(342)は口縁部片で、共に円棒状工具による横位の沈線や刺突による入組文状の文様が施され、口唇部には連続刻みが施されている。(340)・(341)は同一個体で口縁上端部にも刻みが施され、器面には丁寧な磨きが施されており大洞的である。(342)の口唇部は平坦な面をもち、連続刻みはその外側にみられる。

3類　晩期後葉の土器



第60図　包含層出土土器(21)　第5群3・4類
(下の段)

a種　突帯文系の土器（第60図　343～360　図版35）

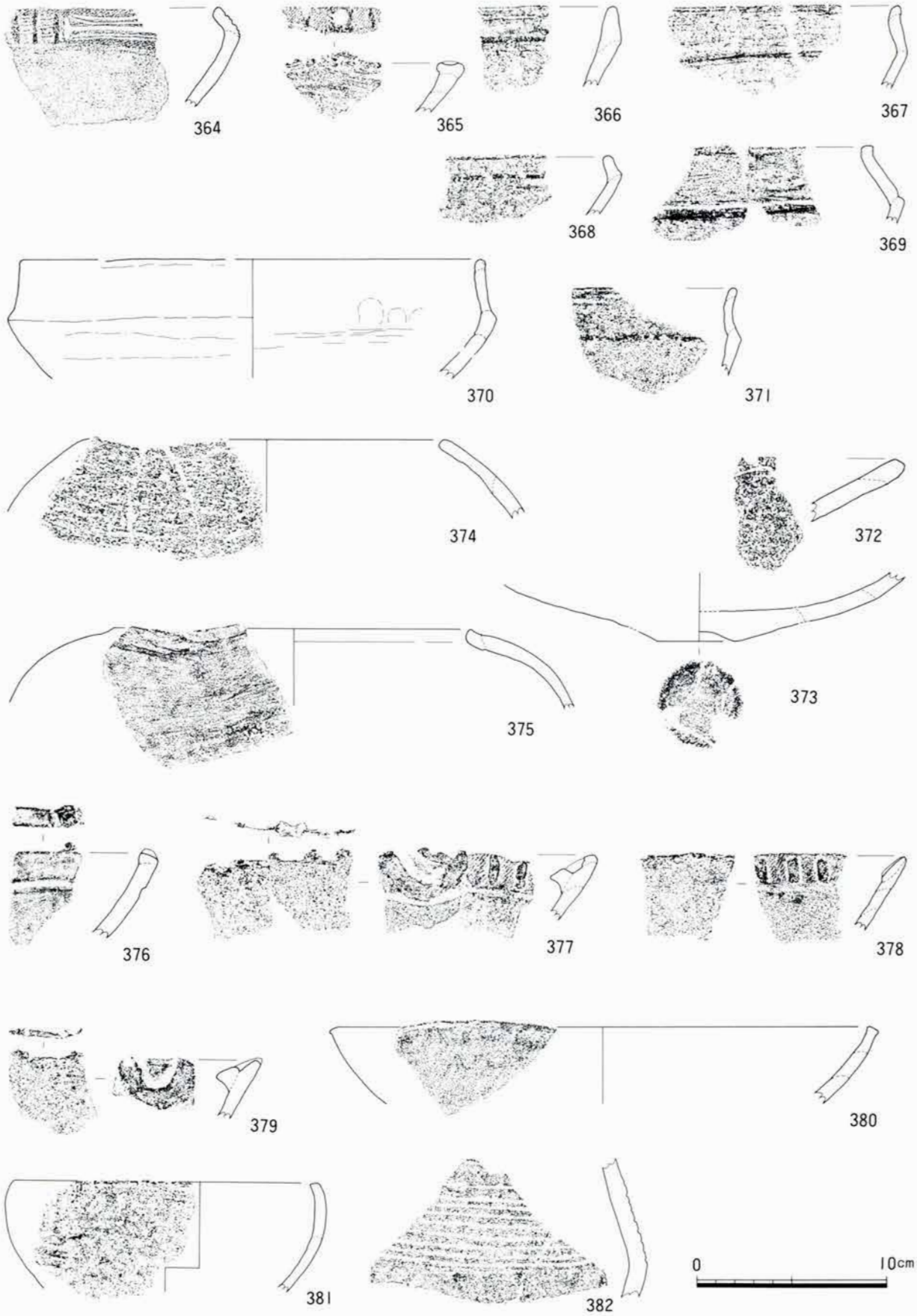
(343)～(360)は突帯文系土器の口縁部片で、口縁から下がった位置に1条の突帯がみられる。(343)は口縁部に断面三角形状の素文突帯を貼り付けている。(344)～(346)は突帯上および口唇部に刻みを施している。(347)～(353)は突帯上に押し引き状の刻みを施しており、(351)～(353)の突帯の下には貝殻条痕文が施されている。(351)と(352)は同一個体で、(353)の口唇部には刻みが施されている。(354)～(358)の口縁上端部は折り返し口縁状に肥厚して丸く仕上げられており、そこから少し下がった位置に1条の突帯をつけている。(354)では断面蒲鉾状の素文突帯がみられる。(355)～(358)は突帯上を貝殻腹縁で、(355)・(356)は斜位、(357)・(358)は横位にD字状又はO字状の押し引きを施している。(355)・(358)の突帯の下には貝殻条痕もみられる。(359)・(360)は突帯上にO字状の押し引きが施されている。(343)～(353)は五貫森式、(354)～(360)は馬見塚式と考えられる。

b種　浮線網状文系の土器（第60図　361～363　図版35）

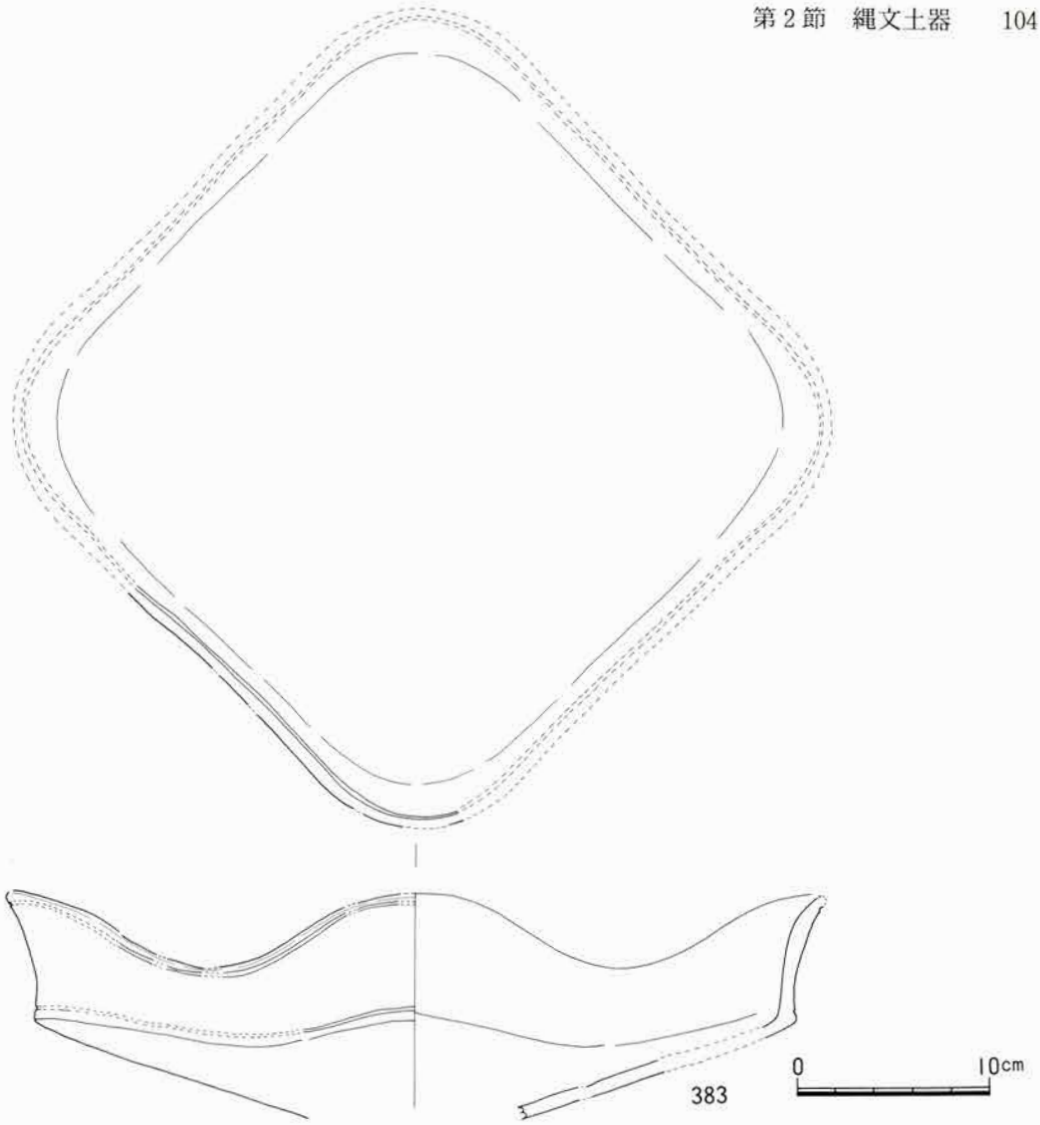
(361)～(363)は浮線（網状）文系の土器で、(362)・(363)は同一個体である。(361)は口縁部で、口唇部は平坦な面をもち、その下に1条・さらに少し下がった所に5条（3組か）の浮線による眼鏡状の文様を施している。(362)は内傾する口縁部片で、端部を欠くものの口縁上端部に3条の浮線を横位に施し、約4㎝下に浮線による眼鏡状の文様を施している。(363)には横走する3条の浮線とその下の無文部がみられるが、この3条の浮線は器厚からいっても口縁部の可能性は低く、(362)の下の浮線に対応すると考えられる。(362)・(363)は大洞A式併行と考えられる。

4類　浅鉢・壺（第61～63図　364～386　図版38・17）

(364)～(373)は晩期の浅鉢で、いずれも平口縁を呈し、(372)・(373)は同一個体である。(364)は口縁部が内側へ屈曲し、それによってできた幅約1.8㎝の面に文様を施している。文様は、短隆帯3本を縦位に貼付し、その間に横位の短沈線3条を引いている。それらの右側部分には横位の連結三叉文を施し、その上下に各2条の横位の沈線をやや弧状に引いている。口縁端部と屈曲部および縦位短隆帯上には縄文を充填し、さらに口縁部文様帯には赤色顔料（ベンガラ、巻頭図版(2)および第6章参照）もみられる。(310)程ではないが、器面は平滑に仕上げられている。(364)は八日市新保式～御経塚式と考えられる。[1] (365)はやや肥厚した口縁部に貼付隆帯による円形等の文様を施し、隆帯間に縄文を充填している。御経塚式の浅鉢と考えられる。(366)の口縁部は屈曲部（段）から直立気味に立ち上がり、(367)はやや内傾気味に立ち上がり、(368)は内傾する。(369)の口縁部は屈曲部（段）より内傾し、口縁端部はやや外反する。屈曲部の上には1条の沈線が横位に引かれている。(370)は明瞭な屈曲部を有し、屈曲部は内湾気味に立ち上がる。屈曲部より上の口縁部は丁寧な磨きが施され、黒く光沢のある器面に仕上げられている。また、内面も比較的丁寧に磨かれており、指頭による圧痕も観察できる。外面の屈曲部以下には輪積み痕がよく残る。推定口径約24.2㎝を測る。(371)は屈曲部より内湾し、外反する口縁部をもち、明瞭な屈曲部を有する。(372)と(373)は同一個体と考えられ、皿形の浅鉢である。底部は凹み底で底径約4㎝、凹みの深さ約5ミリである。(374)と(375)は晩期の壺と考えられ、(374)は口径約18.8㎝で外面には粗い削りが残る。(375)は口径約19.0㎝を測り、口縁端部はやや立ち上がる。外面は丁寧な磨きが施されている。

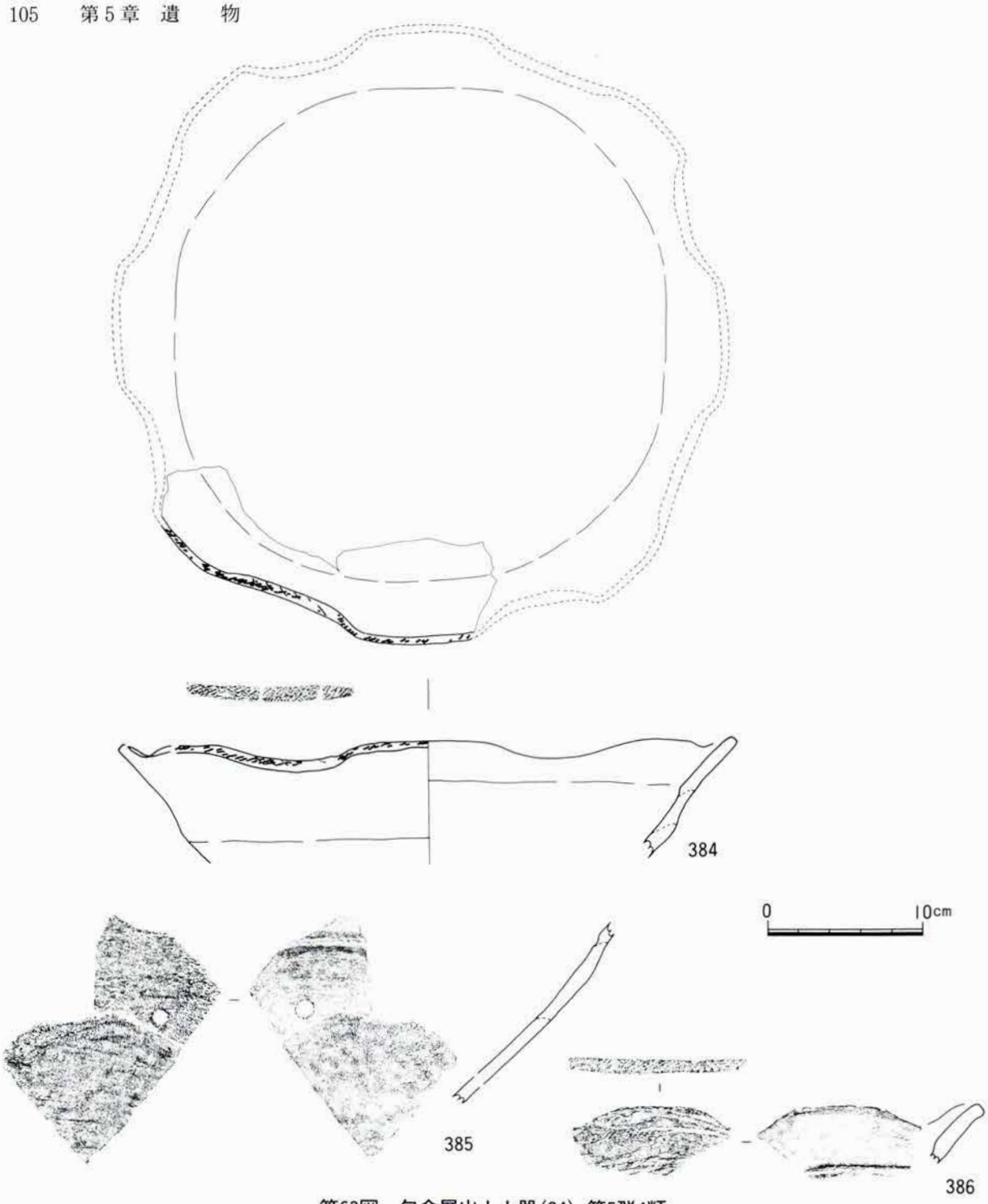


第61図　包含層出土土器(22)　第5群4類、第6群4・5類
(下の段)



第62図　包含層出土土器(23)　第5群4類
(下の段)

(383)は突帯文系土器様式独特の逆「く」の字形口縁浅鉢と考えられ、その中でも第1・2様式[2]に特徴的な波状口縁方形浅鉢と考えられる。その名の通り4単位の波状口縁を呈し、上から見るとまさに方形を呈する。口径約43cm(1辺の長さは約34cm)、残存器高約11.2cmを測る。口縁部は屈曲部(段)から直立・やや外反気味に立ち上がり、口縁上端部と屈曲部の上には棒状工具による沈線を口縁に沿って各1条引いている。また、内面の口縁上端部にも同様の工具による沈線1条を引いている。[3]屈曲部より上の外面と内面には丁寧な磨きが施され、屈曲部以下の外面(下の面)には削りがみられる。底部については不明である。(384)も波状口縁を呈する浅鉢で、残存部より8単位を呈すると考えられる。内外面には屈曲部(段)がみられる。内外面とも器厚は平滑に磨き調整が施されている。口唇部には縄文が充填されている。[4](385)も浅鉢の一部で内外面に屈曲部(段)がみられ、特に内面の段は明瞭で、段に沿って1条の凹線が引かれている。内面には比較的丁寧な磨きが施されているが、外面は削りのみで磨きがみられないことより、(384)とは別個体と考えられる。なお、(385)には内側よりあけられたと考えられる穿孔もみられる。(386)も(384)と同様に波状を呈する浅鉢の口縁部片で、内面には明瞭な段がみられ、口唇部には縄文を充填している。内面は平滑に磨かれ、黒く光沢のある器面に仕上げられている。外面は削り調整が施され、内面のような磨きはみられない。口縁端部がやや



第63図　包含層出土土器(24)　第5群4類
(下の段)

外反し、(384)とは別個体と考えられる。

1)「犀川鉄橋遺跡Ⅱ」(1989　石川県立埋蔵文化財センター)で類例(第13図　147)が出土している。米沢義光氏の御教示による。

2)「凸帯文系土器様式」(1989)　泉拓良・山崎純男　『縄文土器大観4』より

3)これらの沈線は型式学的にみて、口縁内外面の突帯が省略されて沈線と化したと考えられ、波状口縁方形浅鉢の中でも比較的新しい部類に入ると考えられる。

泉拓良　1990　「西日本凸帯文土器の編年」『奈良大学文学部文化財学科　文化財學報　第八集』

4)「西田遺跡」(1998)(財)岐阜県文化財保護センターの中に比較的似た土器がみられる。(P68　Ⅲ1　晩期前葉)

第６群土器　後晩期と考えられるが、時期を決めかねる無文粗製土器

１類　無文口縁（第64～67図　387～456　図版39～42）

ａ種　口縁部が外反するもの

①　口縁部に刺突や押し引きがのみられないもの（第64～65図　387～420　図版39・40）

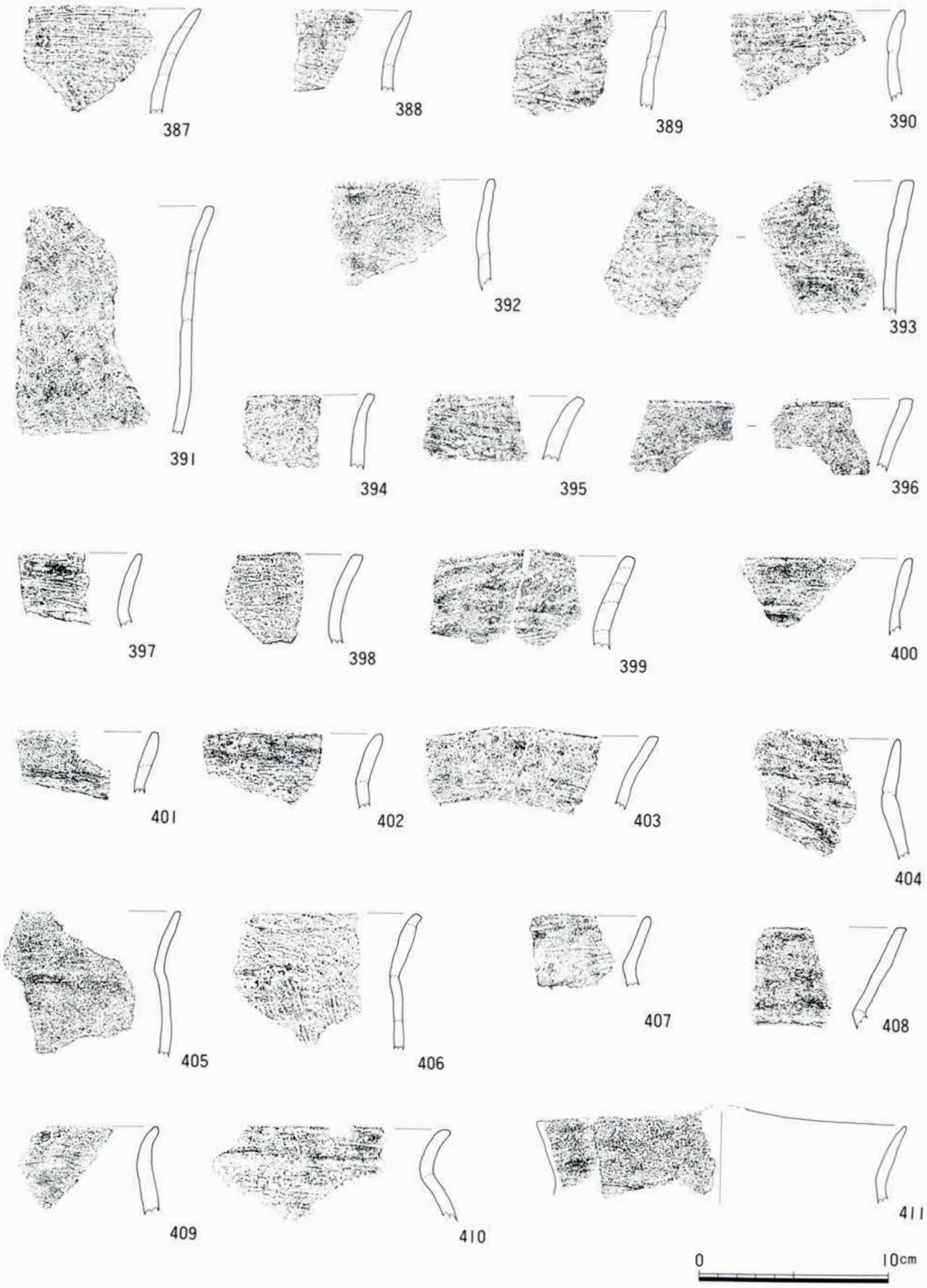
(387)から(420)は口縁部が外反するもので、口縁部に刺突や押し引きのみられないものである。このうち(387)から(394)の口縁部は外反気味に開き、(387)から(390)の口縁端部は尖り気味に仕上げられている。これらは、ＳＺ７（(12)・(13)）の口縁部とよく似ており、滋賀里Ⅲｂ式・稲荷山式（に併行する）と考えられている。(391)～(396)の口縁端部は平坦な面をもつ。(397)～(493)の口縁部は外反の度合いが強くなり、(404)～(408)はくの字状に外反し、内面に屈曲部がみられる。(409)は頸部から強く外反している。(411)は波状口縁を呈する。(412)・(413)の口縁部は外反し、端部がやや内湾する。(414)の口縁部は内面に段を有する。(415)は外面に２条、内面に１条の横位の沈線を引いており、(416)も内面に１条の沈線がみられる。(417)は外面に屈曲部を有し、内面には指頭によると考えられる浅い凹線を引いている。(418)～(420)の外面には貝殻条痕文が横位に施されている。

②　口唇部に刺突や押し引きのみられるもの（第65～67図　421～456　図版40～42）

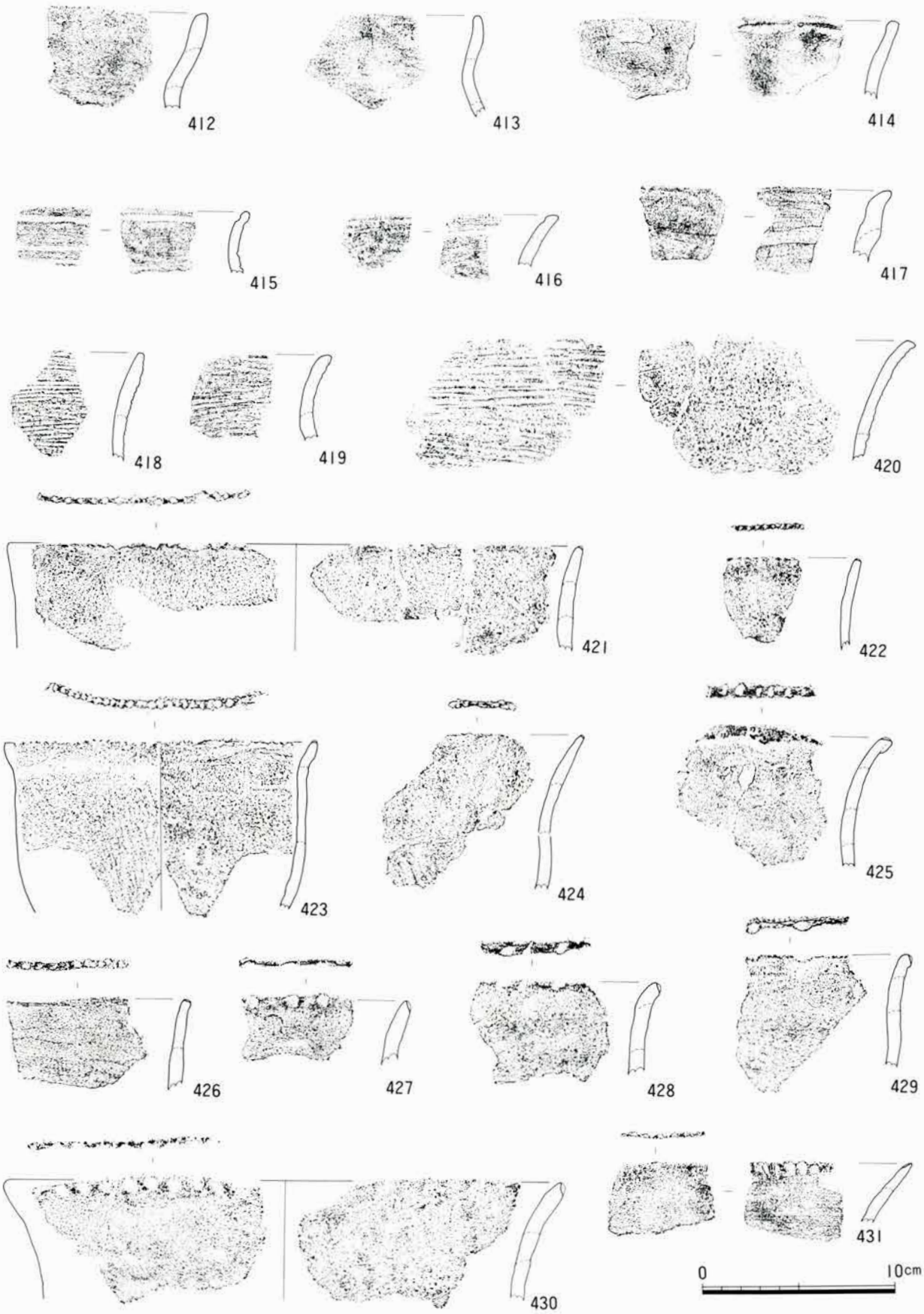
(421)～(456)は口縁部が外反するもので、口縁部に刺突や押し引きのみられるものである。(421)は口径約39.4cmで、口唇部には棒状工具による連続刺突が施されている。(422)の口唇部には篦状工具による比較的密な連続刻みが施され、(423)は口径約16.4cmで、外面の頸部以下は縦位（斜位）に、内面は横位に粗いミガキが施され、口唇部には刻み状の連続刺突が施されている。(424)～(426)の口唇部にも連続刺突が施され、(427)～(429)の口唇部には外側からやや間隔をあけた刺突が施されている。(430)は口径約29.4cmで、口唇部には外側から比較的密な連続刺突がみられる。(431)の口唇部は内側から刻み状の刺突が施されている。(432)・(433)の口唇部には押し引き状の刺突が施され、(434)の口唇部には円管状工具による連続刺突が施されている。(435)～(439)の口唇部には棒状工具または指頭によると考えられるＯ字状の押し引きが施され、特に(437)の口縁部内面には連弧状の沈線が引かれ、その１つの弧に対応して５つの押し引きがみられる。(439)の口径は約32.8cmである。(440)は口縁端部に指頭によると思われる内側への押圧による凹み（逆注ぎ口状の凹み）がみられる。[1] (441)は外反する口縁端部に小突起を作出し両側を指頭により押さえている。[2] (442)～(447)は平坦に仕上げられた口唇部に１条の沈線を引いており、このうち(446)・(447)の外面には横位および斜位の貝殻条痕文が施されている。(448)～(456)の外面にも横位の貝殻条痕文が施され、(448)～(451)の口唇部には刻み、(452)の口唇部には上から(453)には前方から連続押圧が施されている。(454)の口唇部には貝殻腹縁による押し引きがみられる。(454)は口唇部のやや内側に同様の押し引きがみられる。(456)は口径約25.0cmで、外側口縁部付近には横位の貝殻条痕が施され、口唇部にも貝殻腹縁による連続刺突が施されている。

１）同様の凹みはＳＺ６の棺身に利用されていた(3)でもみられた。なお、こうした凹みのみられたのは(3)と(440)の２点のみであった。

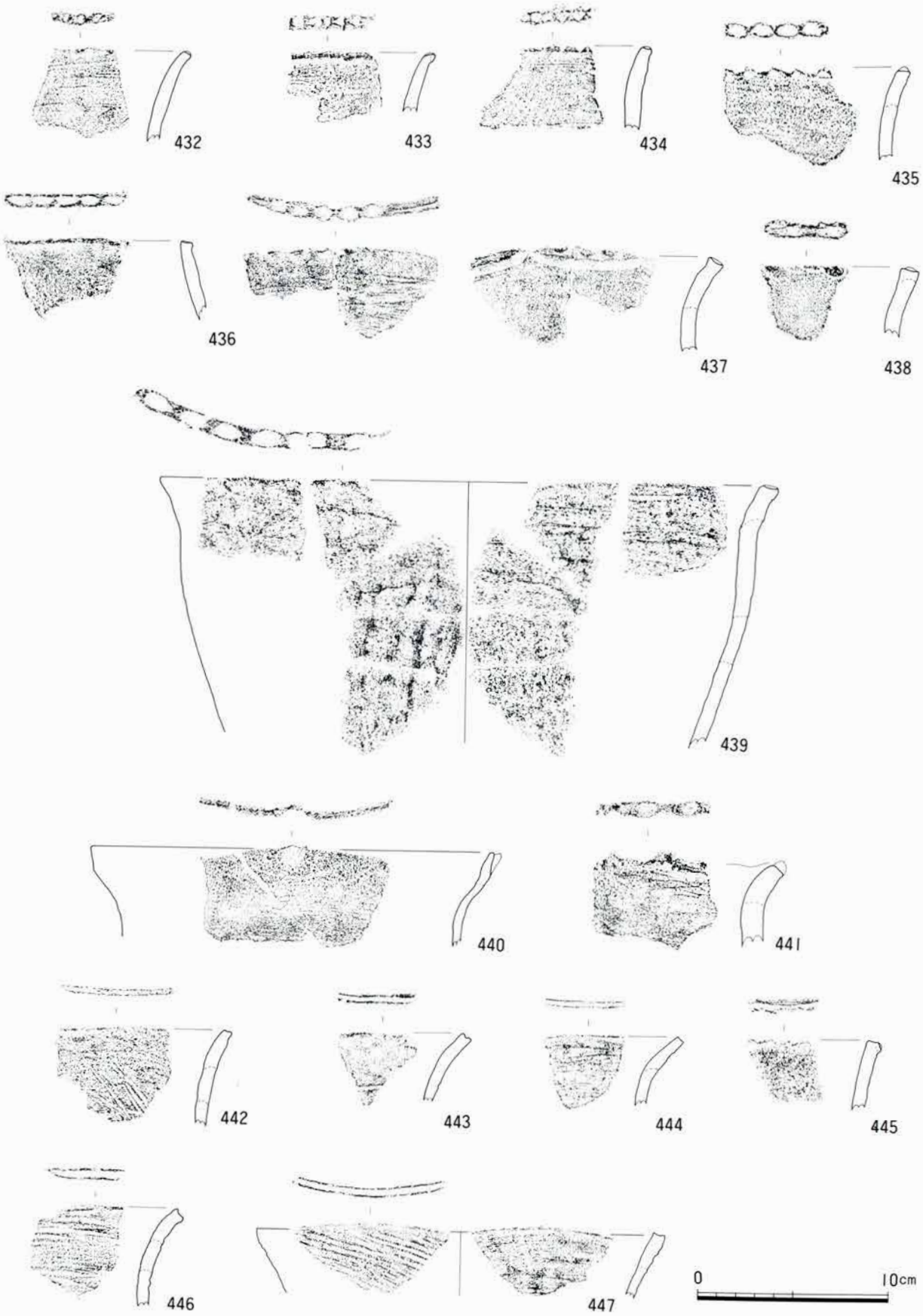
２）ＳＺ10の棺身に利用されていた(8)の口縁端部に(441)とよく似た小突起がみられる。



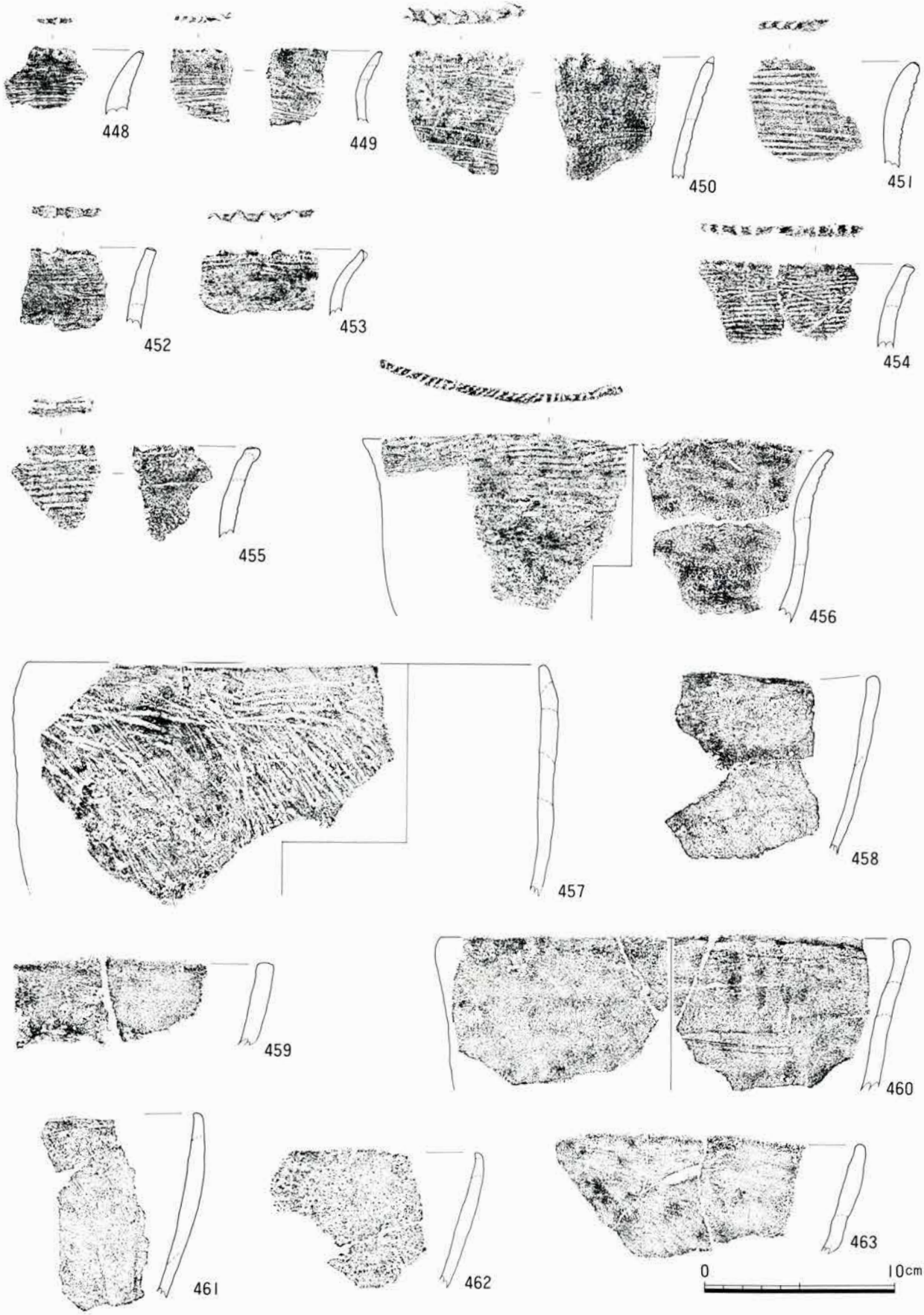
第64図　包含層出土土器(25)　第6群1類a種①
(下の段)



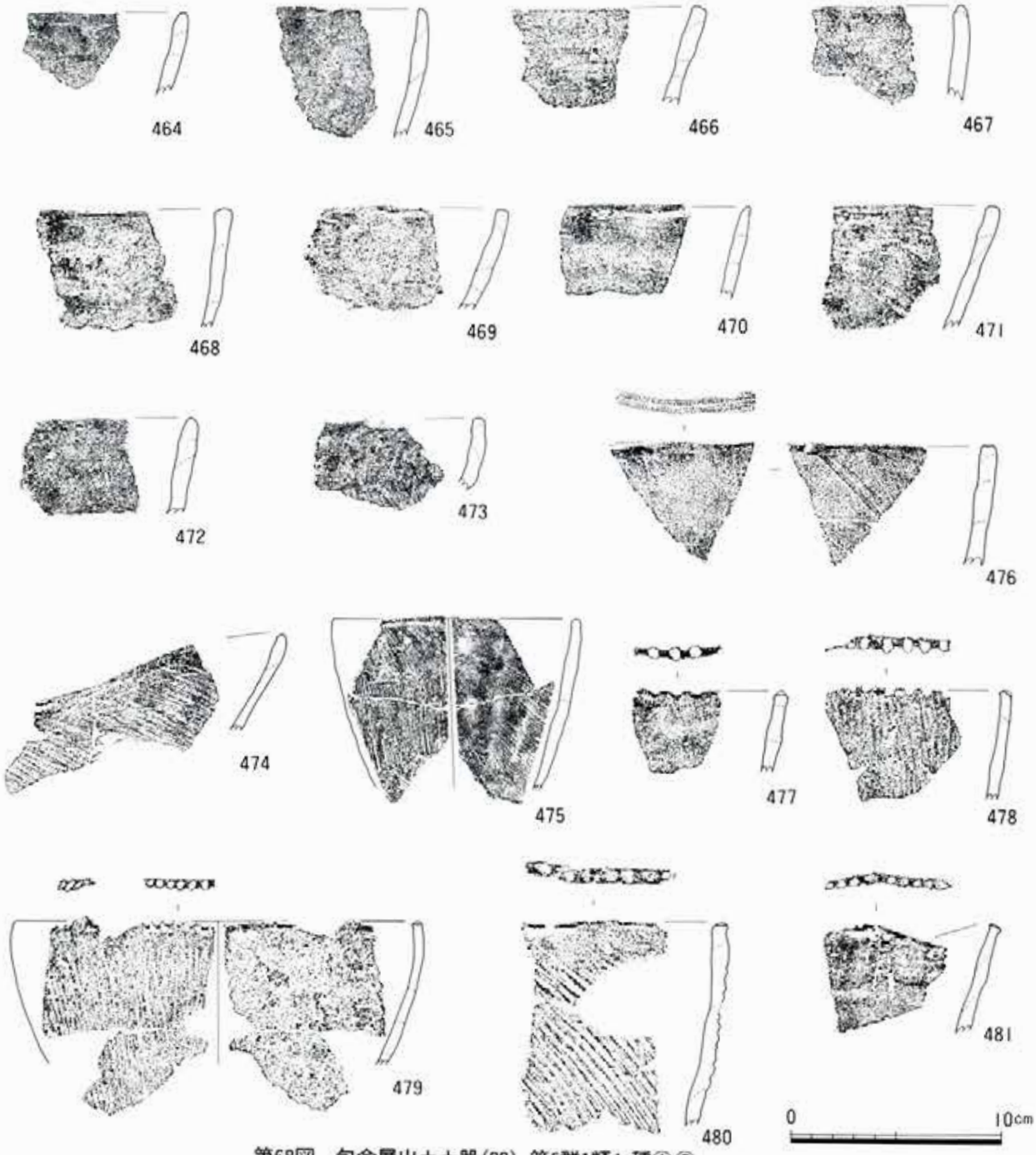
第65図　包含層出土土器(26)　第6群1類a種①、②
(下の段)



第66図　包含層出土土器(27)　第6群1類a種②
(下の段)



第67図　包含層出土土器(28)　第6群1類ａ種②ｂ種①
（下の段）

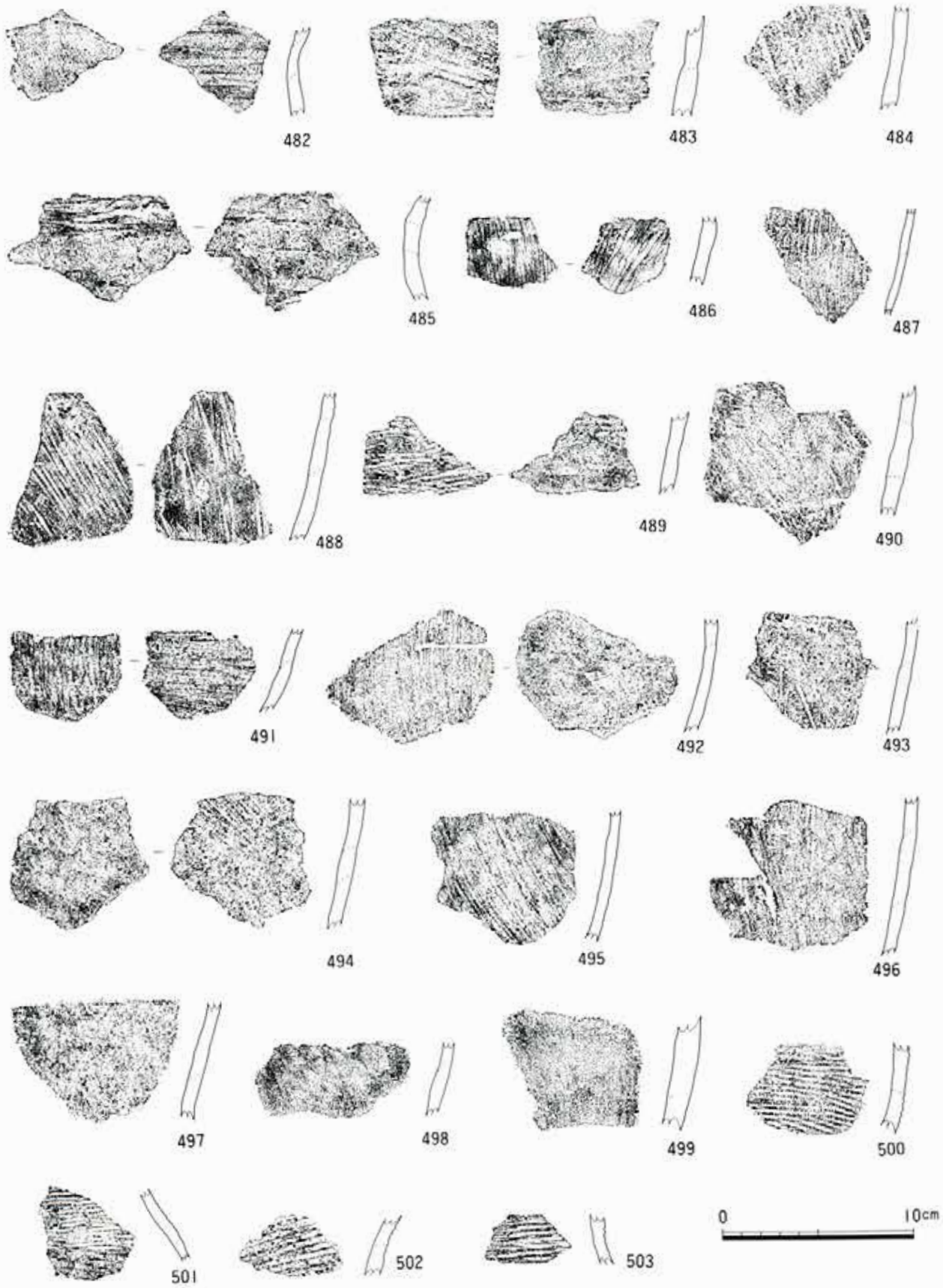


第68図　包含層出土土器(29)　第6群1類ｂ種①②
(下の段)

ｂ種　口縁部が内湾するもの

①　口縁部に刺突や押し引きがのみられないもの（第67・68図　457～475　図版42・43）

(457)～(475)は口縁部が内湾し、口唇部に刺突や押し引きのみられないもので、(457)は口径約26.2cm、(460)は口径約25.2cmを測る。(457)の外面には口縁部に横位、頸部から胴部にかけて斜位の削りがみられる。(474)は波状口縁を呈し、口唇部には平坦な面をもつ。外面には粗いミガキが施され、胎土には雲母を含む。(475)はコップ形を呈し、口径約11.0cmである。外面には縦位、内面には斜位の削り痕がみられる。



第69図　包含層出土土器(30)　第6群2類
(下の段)

② 口縁部に刺突や押し引きのみられるもの（第68図　476～481　図版43）

(476)～(481)は口縁部が内湾し、口唇部に刺突や押し引きのみられるもので、(476)～(480)は平口縁を呈し、(481)は波状口縁を呈する。(477)～(481)の口唇部には棒状工具による連続刺突が施され、(476)の口唇部には浅い沈線1条が施されている。(478)の口唇部は前方やや上からの刺突である。(479)は口径約19.2cmを測る。(478)・(479)の外面には縦位の削り痕がみられ、(480)の外面には斜位の貝殻条痕が施されている。(481)の波頂部は指頭による押圧が加えられている。

2類　胴部片（第69図　482～503　図版44）

(482)～(503)は胴部片で、このうち(482)・(485)は頸部片と考えられる。(482)・(483)・(485)・(486)・(488)・(489)・(491)・(492)は内外面に粗いミガキ等の調整がみられ、(484)・(487)・(490)・(493)・(495)・(496)は外面に、(494)は内面に粗いミガキや削り調整が認められる。(497)～(499)の内外面には目立った調整は認められない。(500)～(503)の外面には横位の条痕が施されている。

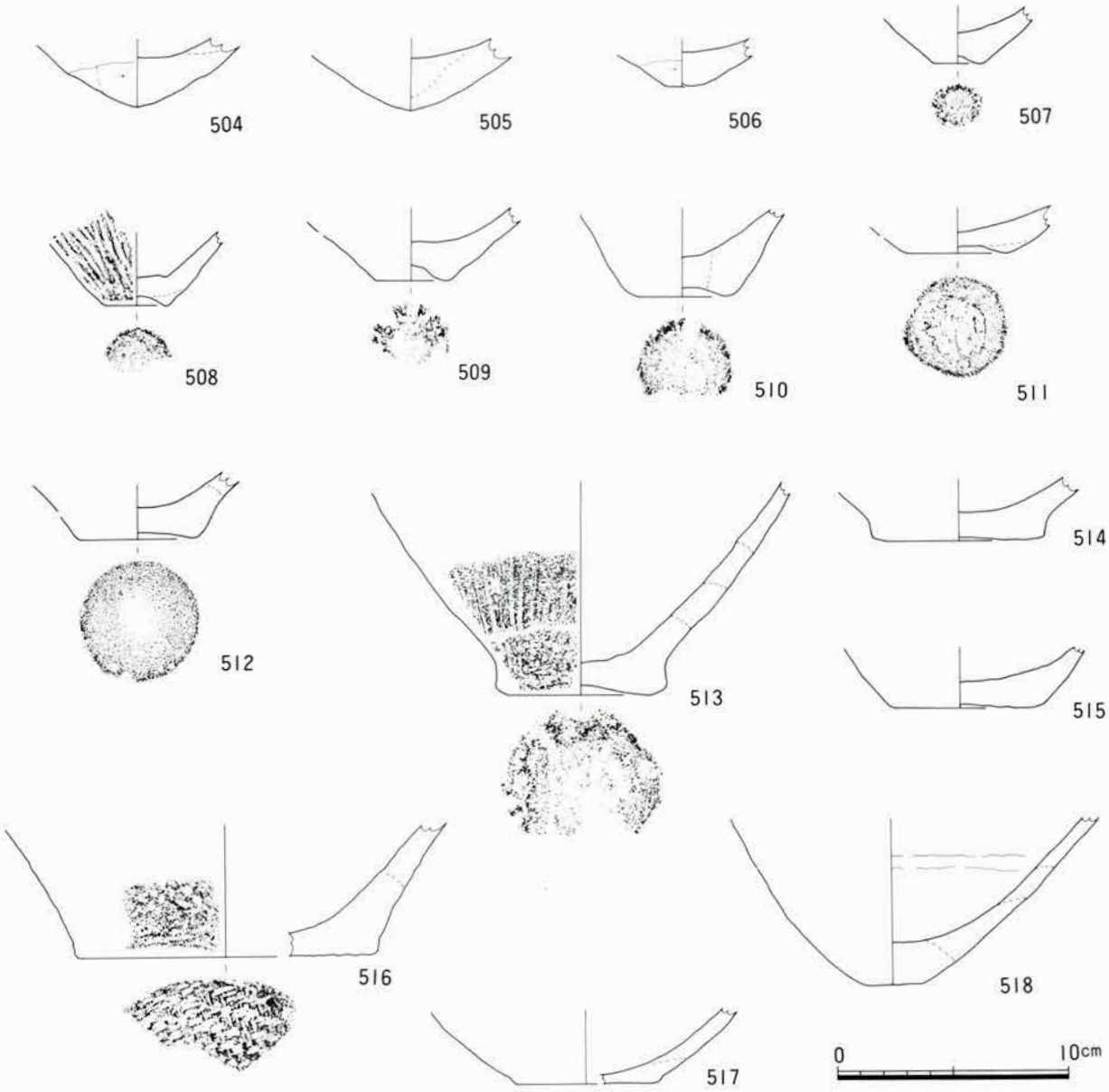
なお、第6群に分類した無文粗製土器6,172点の調整手法について観察したところ、外面では、粗いミガキ（含む削り）1,870点(68.5%)、撫で824点(30.2%)、条痕35点(1.3%)（摩滅3,443点）と粗いミガキが多くみられたのに対して、内面では、粗いミガキ（含む削り）338点(12.5%)、撫で2,374点(87.5%)、条痕0点（摩滅3,460点）と撫でが中心であった。

3類　底部（第70図　504～518　図版45）

(504)～(518)は底部で、このうち(504)～(506)は尖底および丸底（a種）、(507)～(513)は凹み底（b種）、(514)～(518)は平底（c種）である。(514)と(515)の底部は平底であるが、若干の凹みも認められる。(507)は矮小な底部に小さな凹みがみられる。(508)・(509)の凹みも小さく、(510)～(513)は凹面鏡状の凹み底をもつ。(512)は内外面共に丁寧に仕上げられている。(508)と(513)の外面には縦位の条線が施され、(516)の外面には縄文が施されている。(516)の底部には、網代痕も認められる。(517)は器厚約6ミリと薄手で、(518)の底部は底径約2.5cmと小型である。(513)や(516)は中期の可能性も考えられるが、他は後晩期と考えられる。

4類　浅鉢・椀（第61図　376～381　図版38）

(376)～(380)は浅鉢で、(377)～(379)は同一個体と考えられる。(376)の外面には1条の沈線が施され、口唇部には豆状の突起がみられる。内外面共に比較的丁寧に磨かれている。突起の部分にわずかではあるが、赤色顔料の付着も観察できる。(377)～(379)は同一個体と考えられ、浅鉢の口縁部内側を肥厚させ、その上に(377)の内面の右半分や(378)の内面のように、短隆帯を縦位に貼付し、隆帯間に縄文を充填している。また、(377)の内面の左半分や(379)の内面のように粘土紐を弧状に貼付してU字状の装飾隆帯を作出し、(377)ではさらに、U字状の隆帯の右側から中央部にかけて粘土紐を貼付している。口縁端部は尖り気味に仕上げられ、内外面は比較的平滑に仕上げられている。なお、



第70図　包含層出土土器(31)　第6群3類（下の段）

内面の肥厚部に赤色顔料の付着がみられる。(380)は椀形の浅鉢で口径約29.2cmを有する。内外面、特に内面は平滑に仕上げられている。(381)は 椀で口径約16.0cmを測る。口唇部は平坦な面をもつ。胎土には雲母を含む。

5類　その他（第61図　382　図版38）

(382)は内傾する頸部片と考えられ、横位の併行沈線9条が施され、沈線内等には赤色顔料の付着もみられる。

第3節　石　器

第1項　石器類の概要

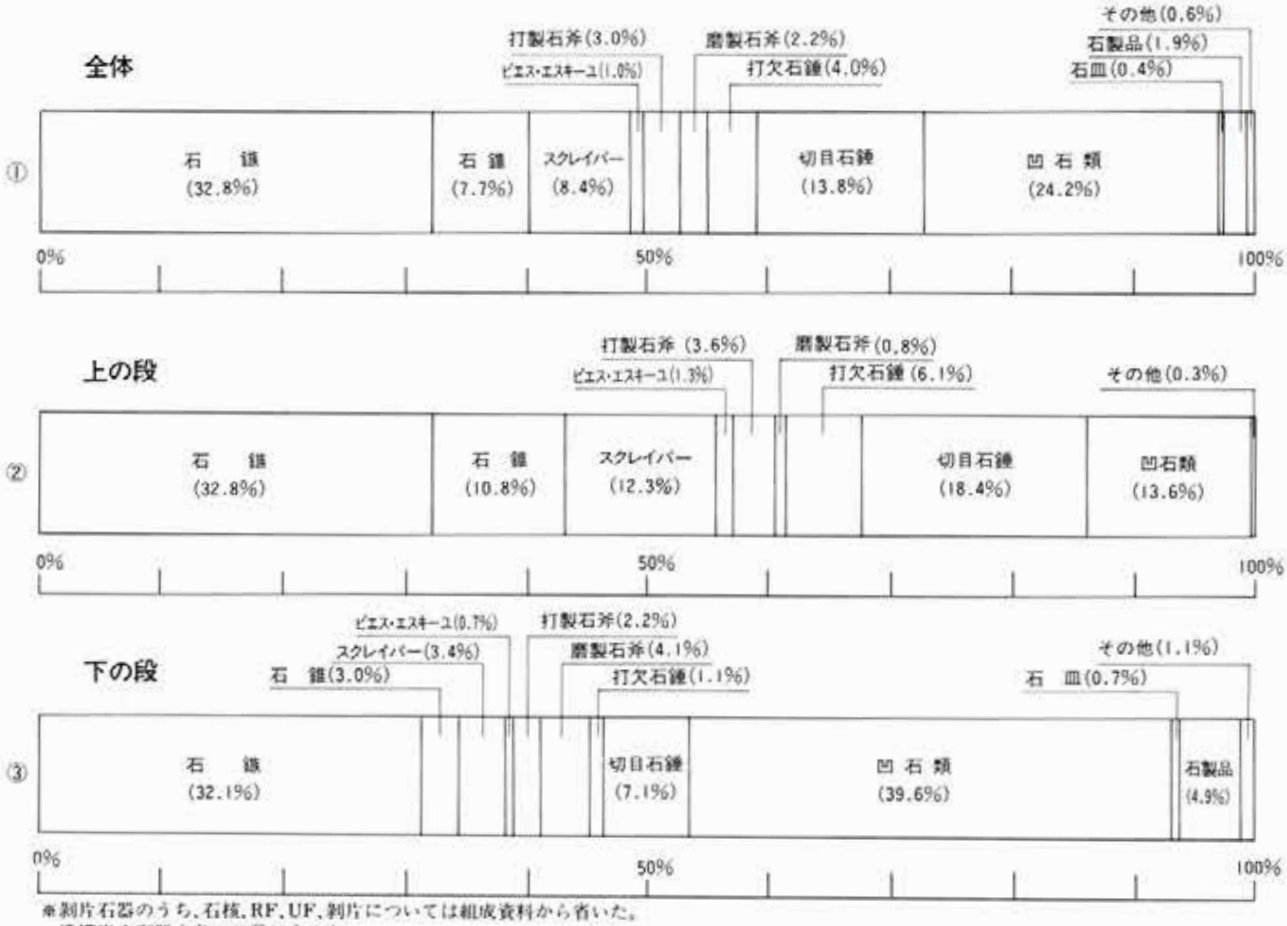
今回の調査において、5,169点の石器および剥片・石核類が出土した。その種類と点数は、第10表の通りである。これらの石器類は、遺構内からの出土36点、包含層からの出土5,133点である。遺構は、土器棺墓、焼礫集積遺構、土坑・ピットで焼礫集積遺構が早期、他の遺構は後期後葉から晩期にかけてのものである。

包含層から出土した石器については、伴出土器（第5章、第2節）からみて上の段から出土したものは早期および中期と考えられ、下の段から出土したものは後期後葉から晩期と考えられる。

石器組成グラフは第71図の①の通りである。なお、剥片石器のうち石核、二次加工のある剥片（RF、以下RFとする）、使用痕のある剥片（UF、以下UFとする）、剥片については組成資料から省いた。これを見ると、本遺跡では石鏃、凹石類[1]、切目石錘、スクレイパー、石錐の出土の割合が高い。なお、上の段・下の段各々の石器組成については、まとめの中で触れる。

以下各器種ごとに分類を中心に説明する。遺構から出土した石器についても、包含層から出土した石器に含めて説明していく。

1）判別が難しく見逃しやすい凹石類について、本遺跡では調査時に可能性のある石全てを持ち帰り、二次整理で丹念に判別するという作業を行った。従って、石器組成中に占める凹石類の割合については正確性が保証されていると考える。



※剥片石器のうち、石核、RF、UF、剥片については組成資料から省いた。
遺構出土石器も各々の段に含めた。

第71図　石器組成グラフ

第10表　石器一覧表

器種 / 遺構	石鏃	石錐	Sc	ピエス・エスキーユ	打製石斧	磨製石斧	石核	RF	UF	剥片	打欠石錘	切目石錘	凹石類	石皿	石製品	他	計
SI 2										1							1
SZ 7										2							2
SZ10									1								1
SZ11										1							1
SK 2																1	1
SK 5	1																1
SK 9										1	1						2
SK16					1												1
SK18	1									1							2
SK20											1						1
SK26									1								1
P 24										1							1
P 47										2		1					3
P 64															1		1
P 67										1							1
P 72										1							1
P114										1							1
P123								1									1
P126																1	1
P139													1				1
P142													1				1
P150										1			2				3
P178													1				1
P181										1							1
P185									1								1
P193								2	1	1							4
遺構計	2	0	0	0	1	0	0	3	4	15	2	1	5	0	1	2	36
包含層上の段	130	42	48	5	14	3	53	81	96	3395	24	72	53	0	0	1	4017
包含層下の段	84	8	9	2	5	11	3	14	10	795	1	18	101	2	12	1	1076
表採	5	2	0	0	0	1	0	1	1	23	0	2	4	1	0	0	40
包含層計	219	52	57	7	19	15	56	96	107	4213	25	92	158	3	12	2	5133
合計	221	52	57	7	20	15	56	99	111	4228	27	93	163	3	13	4	5169

＊　包含層計には表採も含む

＊　Sc＝スクレイパー

第2項　器種ごとの分類

(1)　石鏃（第73・74図　1001～1068　図版46・47）

221点出土した。石材はチャート182点（80.9%）、サヌカイト26点（13.5%）、下呂石10点（4.5%）流紋岩質溶岩1点（0.5%）、不明1点で徳山地域で手に入りやすいチャートが多いが、サヌカイト・下呂石といった他地域から搬入された石材もかなりみられる。石鏃の矢先としての機能から、尖頭部と矢柄との装着部である基部に着目してそれぞれ以下のように分類し（第72図）[1]、そして、それぞれの石鏃を尖頭部との組み合わせで分類した。折損等で形態がわからないものを除いた各種の点数を第11表に示した。

尖頭部の分類

1類；鋭角な尖頭部を持つもの。

2類；1類と同じだが、全長が長い（全長が全幅の1.5倍以上）もの。

3類；鋭角な尖頭部を持つもの。

4類；先端が小さく尖り側縁部の肩が張った形状を持つもの。

5類；先端が尖らず、丸いカーブを描くもの。

6類；意図的に、歯状の側縁部を作出したもの。

基部の分類

A類；基部の中央部がU字型にえぐられているもの。

B類；凹状のわずかなえぐりの入るもの。

C類；深いえぐりの入るもの。

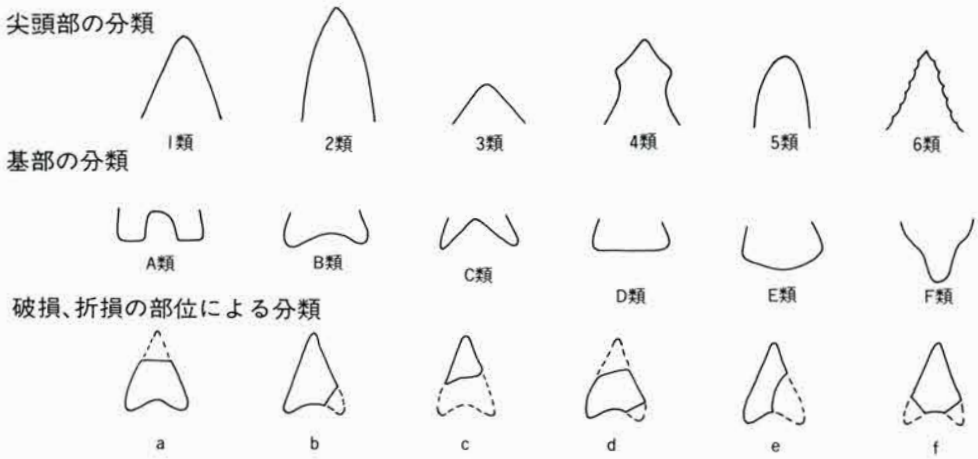
D類；いわゆる平基鏃で、基部が直線状になるもの。

E類；いわゆる円基鏃で基部が丸みを帯びて突出するもの。

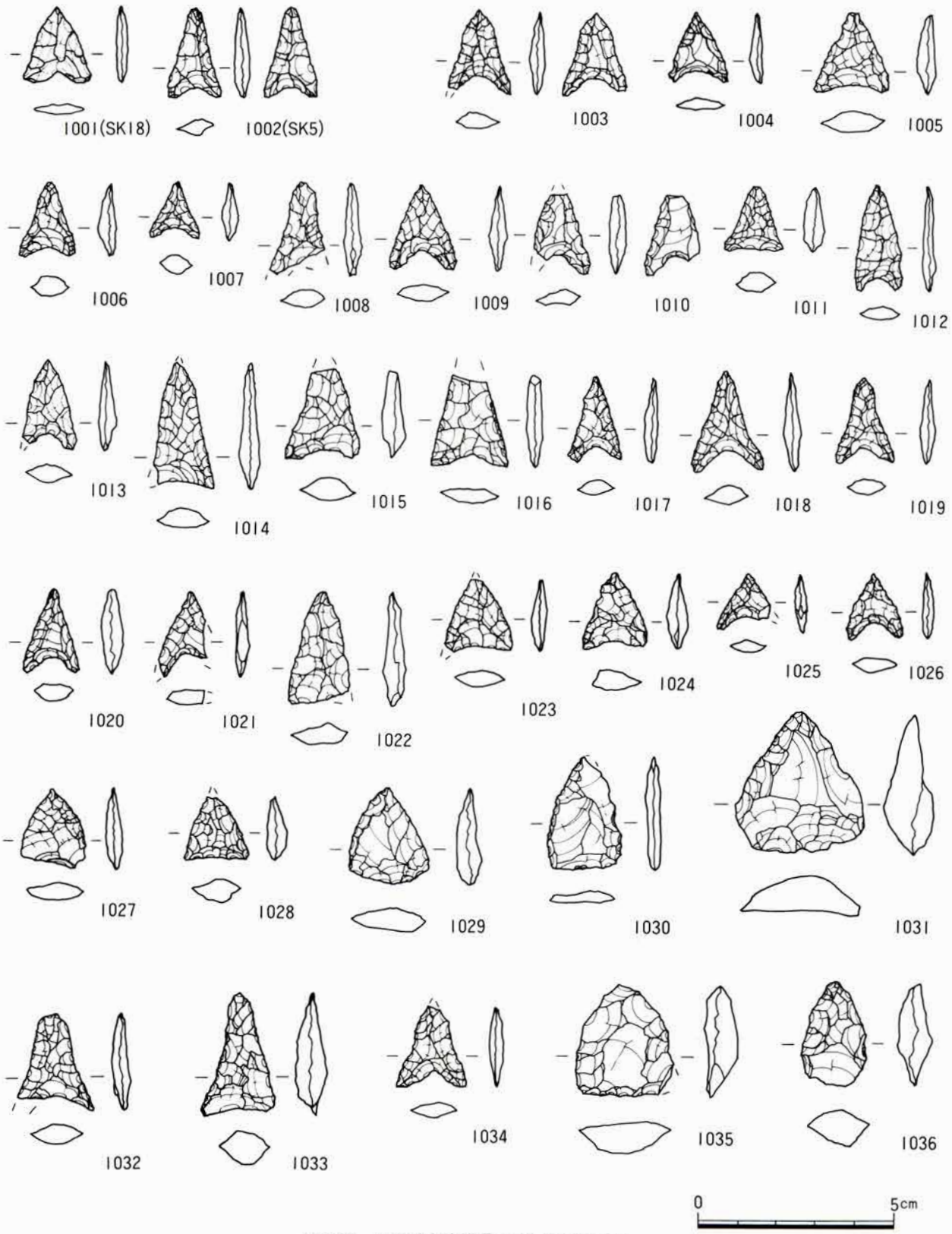
F類；いわゆる有茎鏃で、基部に茎を持つもの。

第11表　石鏃の分類別出土点数

	A	B	C	D	E	F	計
1類	4	19	15	4	3		45
2類	4	22	11	2	2	3	44
3類	1	18	8	4	5		36
4類		2				1	3
5類		7	2	11	5		25
6類			1				1
計	9	68	37	21	15	4	154



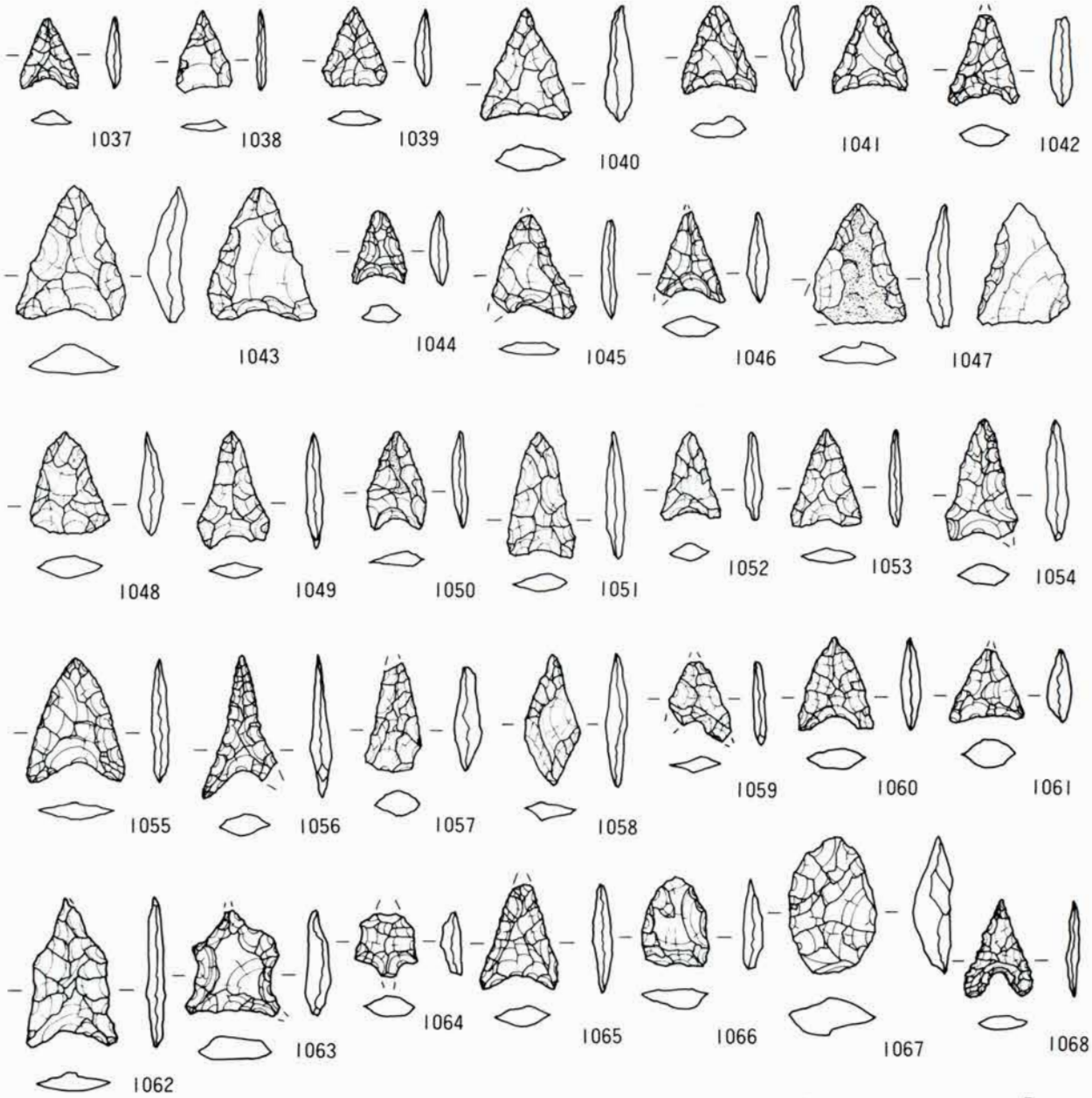
第72図　石鏃の分類



第73図　石鏃(1)遺構分及び上の段出土

破損や折損のみられるものは総数86点であった。破損、折損の部位によって第72図のように分類した。それぞれの点数は次の通りである。

a 17点　b 25点　c 16点　d 10点　e 10点　f 8点　なお、未製品が46点あった。



第74図　石鏃(2) 下の段出土

本報告書では、各類より抽出して68点を実測した。このうち、(1001)と(1002)は遺構(各々ＳK18・ＳＫ５）出土、(1003)～(1036)は上の段、(1037)～(1067)は下の段からの出土、(1068)は表採資料である。上の段から出土したものは、伴出した土器より早期・中期の可能性が高く、下の段から出土したものは、後・晩期の可能性が高い。(1025)・(1026)は、基部に深い抉りが入るタイプで早期によくみられるものである。(1062)～(1064)は五角形状を呈しており、いわゆる飛行機鏃で、後・晩期に多いとされるものである。

石材についてみてみると、サヌカイトや下呂石製のものは下の段では多くみられるものの、上の段ではほとんどみられない。

1）石器の分類については、戸入村平遺跡（1994千藤）の石器の分類を参考とした。

第12表　石鏃計測表(1)

No.	出土区	層　位	石　材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	質量(g)	形　態	折　損	遺物番号
1	SK5		チャート	23	14	4.5	0.9	2B		1002
2	SK18		サヌカイト	19	18	3.1	0.7	1C		1001
3	12G	I	チャート	(14)	(12)	2.9	(0.4)	1	c	
4	13u	III	サヌカイト	23	(19)	3.6	(1.2)	1C	b	1045
5	14u	I	サヌカイト	(21)	(10)	(3.7)	(0.8)	未製品		
6	16s	III	チャート	(19)	(14)	3.8	(0.7)	1	f	
7	16s	III	サヌカイト	20	13	4.2	0.7	2B		1052
8	16s	III	チャート	(16)	17	6.1	(1.3)	3B	a	1061
9	16s	III	チャート	22	15	5.9	2.1	5D		
10	16t	I	チャート	(31)	(18)	4.8	(1.1)	2C	b	1056
11	16t	I	下呂石	22	14	4.0	(0.8)	5B	b	
12	16t	I	チャート	28	(16)	7.4	(3.2)	3	e	
13	16t	I	チャート	17	12	2.8	0.5	1B		
14	16u	I (N)	チャート	(17)	(15)	(4.2)	(0.9)	未製品		
15	16u	III	チャート	(18)	(14)	(3.5)	(0.9)	未製品		
16	17s	III	チャート	(25)	16	8.5	(1.9)	2B	a	
17	18s	I	サヌカイト	27	(21)	5.3	(2.4)	1D	b	1047
18	18s	I	サヌカイト	23	18	6.1	1.7	1E		1048
19	18s	I	サヌカイト	19	12	2.3	0.4	2B		
20	18s	I	チャート	25	13	3.5	1.1	2F		
21	18s	I	チャート	21	17	4.8	1.2	3B		1060
22	18s	I (W)	チャート	(21)	(22)	(6.2)	(3.2)	未製品		
23	18t	III	下呂石	29	24	7.9	3.8	1B		1043
24	18t	I	サヌカイト	(23)	11	3.1	(0.7)	2	c	
25	18t	I (N)	チャート	24	18	5.0	1.4	5B		1065
26	18t	III	チャート	31	21	9.0	5.6	5E		1067
27	18u	III	チャート	16	12	3.8	(0.6)	1	c	
28	18u	III	下呂石	29	13	4.8	1.2	2F		1058
29	18u	III	チャート	(13)	(13)	4.1	0.5	3	c	
30	18u	III	サヌカイト	14	14	4.7	0.6	5D		
31	18u	I (N)	チャート	(14)	14	3.9	(0.5)	1B	a	
32	18v	I	チャート	(21)	(16)	(5.4)	(1.3)	未製品		
33	19q	I (N)	チャート	31	30	8.0	7.2	5E		
34	19q	IIIb	チャート	(18)	(11)	(6.8)	(1.2)	未製品		
35	19r	III	チャート	(31)	(25)	(9.7)	(9.2)	未製品		
36	19s	I (N)	サヌカイト	(24)	12	6.3	(1.4)	2E	a	1057
37	19s	I	チャート	29	21	9.1	4.5	1E		
38	19s	III	サヌカイト	(20)	(14)	4	(0.8)	2B	b	
39	19s	III	下呂石	22	16	3.5	0.8	2B		1053
40	19s	III	下呂石	(18)	(15)	3.4	0.4	3A	d	1059
41	19s	III	下呂石	15	14	3.5	0.5	3B		
42	19s	III	サヌカイト	(17)	(14)	(3.3)	(0.9)	未製品		
43	19t	I	サヌカイト	23	14	41	(0.9)	2B	a	
44	19t	I	安山岩	28	16	4.6	1.4	2B		1051
45	19t	I	下呂石	18	17	4.3	0.5	3B		
46	19t	III	チャート	(9)	(15)	(4.3)	(0.6)	未製品		
47	19t	III	チャート	(14)	14	5.2	(0.9)	4F		1064
48	19t	III	チャート	26	15	6.1	2.4	3E		
49	19u	III	チャート	(15)	(13)	3.7	(0.5)	1	c	
50	19v	I	チャート	(19)	(13)	3.3	(0.4)	1C	e	
51	20r	I	チャート	(16)	15	3.9	(0.6)	1B	a	
52	20r	I	チャート	(24)	21	7.6	(3.7)	3B	a	
53	20r	III	サヌカイト	(25)	20	3.5	(1.6)	2C	a	
54	20r	III	チャート	19	(15)	4.7	(0.8)	1C	b	1046
55	20s	I	チャート	16	12	4.4	0.7	1B		1044

第13表　石鏃計測表(2)

No.	出土区	層　位	石　材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	質量(g)	形　態	折　損	遺物番号
56	20s	Ⅲ	チャート	21	12	3.8	(0.4)	2	c	
57	20s	Ⅰ(W)	チャート	(25)	(9)	(7.0)	(1.3)	未製品		
58	20s	Ⅰ(W)	チャート	(24)	22	6.1	(2.8)	4B	a	1063
59	20s	Ⅰ	チャート	22	(12)	4.2	(0.8)	2E	c	
60	20s	Ⅲ	サヌカイト	20	16	5.3	1.5	5D		1066
61	20t	Ⅰ	サヌカイト	(25)	21	6.2	(2.2)	1B	b	1040
62	20t	Ⅰ	チャート	26	(16)	5.1	(1.6)	2B	b	1054
63	20t	Ⅰ	チャート	15	15	3.5	0.6	3B		
64	20t	Ⅰ	チャート	(24)	(17)	(7.2)	(2.3)	未製品		
65	20u	Ⅰ	下呂石	(24)	(16)	5.7	(1.0)	2A	f	
66	20u	Ⅰ	チャート	16	13	3.3	0.5	1A		1037
67	20u	Ⅲ	チャート	28	22	4.4	1.9	2C		1055
68	20u	Ⅲ	チャート	(17)	(14)	(5.2)	(1.2)	未製品		
69	21s	Ⅰ	サヌカイト	18	14	3.5	0.7	1B		1039
70	21t	Ⅲ	サヌカイト	26	(16)	3.7	(1.0)	2B	b	1049
71	21t	Ⅰ	チャート	(24)	(15)	4.1	0.9	5B		
72	21u	Ⅲ	サヌカイト	(17)	12	2.3	(0.4)	1B	b	1038
73	21u	Ⅲ	チャート	20	17	5.6	1.1	1B		1041
74	21u	Ⅲ	サヌカイト	22	14	3.5	0.8	2B		1050
75	21u	Ⅲ	サヌカイト	19	12	4.9	0.8	2B		
76	21u	Ⅲ	サヌカイト	17	11	4.1	0.6	2B		
77	21u	Ⅲ	チャート	(18)	(17)	(5.6)	(1.9)	未製品		
78	21u	Ⅲ	チャート	(20)	(19)	(6.5)	(2.0)	未製品		
79	21u	Ⅲ	下呂石	(16)	(23)	(3.9)	(0.9)	未製品		
80	21u	Ⅲ	サヌカイト	(19)	(15)	(3.5)	(0.9)	未製品		
81	21y	Ⅰ	サヌカイト	33	21	4.8	2.0	4B		1062
82	22u	Ⅲ	チャート	(20)	16	4.9	1.1	1B	a	1042
83	22u	Ⅲ	チャート	17	17	3.9	0.7	3B		
84	22u	Ⅲ	チャート	(18)	(15)	(3.9)	(1.0)	未製品		
85	22v	Ⅲ	チャート	19	15	5.3	1.0	5B		
86	22v	Ⅲ	チャート	(10)	(18)	(5.3)	(0.7)	未製品		
87	25B	Ⅱ	チャート	(22)	(19)	(6.8)	2.6	3D		
88	27B	Ⅰ	チャート	22	13	3.7	0.6	2C		
89	27B	Ⅰ	チャート	(11)	(16)	(5.3)	(0.6)	未製品		
90	29A	Ⅰ	サヌカイト	(15)	12	3.4	(0.6)	1C	d	
91	29A	Ⅰ	チャート	31	20	9.3	3.5	5B		1033
92	29A	Ⅰ	チャート	(22)	(13)	3.2	(0.6)	2C	e	1021
93	29A	Ⅰ	チャート	16	16	6.4	1.1	3B		
94	29A	Ⅰ	チャート	(17)	(15)	(4.7)	(0.9)	未製品		
95	29B	Ⅲ	チャート	(23)	(15)	4.8	(1.4)	2B	b	
96	29B	Ⅲ	チャート	(22)	(15)	6.9	(1.3)	2	f	
97	29B	Ⅲ	チャート	(15)	(15)	3.7	(0.3)	3C	b	1025
98	29B	Ⅲ	チャート	(30)	(27)	(9.8)	(7.6)	未製品		
99	29C	Ⅲ	チャート	(25)	(20)	(7.6)	(3.8)	未製品		
100	29D	Ⅰ(N)	チャート	(19)	(12)	4.8	(1.0)	1B	e	
101	29D	Ⅰ(N)	チャート	(25)	(19)	6.3	(2.0)	1D	d	
102	29D	Ⅰ(N)	チャート	15	15	4.8	0.7	3B		
103	29D	Ⅲ	チャート	(23)	(13)	4.7	(1.0)	2	f	
104	29D	Ⅲ	チャート	29	20	3.8	2.0	3E		1030
105	29D	Ⅲ	チャート	(25)	(20)	5.1	(1.5)	5B	b	1032
106	29E	Ⅰ	チャート	22	15	42	0.7	2C		1019
107	29E	Ⅰ	チャート	(14)	(20)	(7.5)	(1.7)	未製品		
108	29E	Ⅱ	チャート	(22)	15	5.4	(1.1)	2	c	
109	29E	Ⅳ	チャート	(22)	15	4.8	(0.8)	2B	d	
110	29E	Ⅳ	チャート	(33)	(18)	9.8	(4.0)	2	f	

第14表　石鏃計測表(3)

No.	出土区	層　位	石　材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	質量(g)	形　態	折　損	遺物番号
111	29E	Ⅳ	チャート	(34)	(23)	(8.3)	(6.0)	未製品		
112	29E	Ⅴ	チャート	14	13	4.4	0.3	1C		1007
113	29E	Ⅴ	チャート	(16)	(19)	(4.3)	(1.4)	未製品		
114	29E	Ⅴ	チャート	(23)	(18)	(8.1)	(2.8)	未製品		
115	29E	Ⅴ	チャート	(18)	(7)	(3.9)	(0.2)	未製品		
116	30A	Ⅰ	チャート	(23)	(15)	5.0	(1.1)	2C	b	
117	30A	Ⅱ	チャート	(16)	18	4.6	(1.2)	1B	a	
118	30A	Ⅱ	チャート	(24)	(15)	(6.0)	(2.5)	未製品		
119	30B	Ⅰ	チャート	18	15	3.4	0.6	1B		
120	30B	Ⅰ	チャート	(33)	(26)	(12.1)	(10.8)	未製品		
121	30C	Ⅲ	チャート	(23)	(17)	(8.1)	(3.1)	未製品		
122	30C	Ⅲ	チャート	21	19	5.1	1.4	1B		
123	30C	Ⅲ	チャート	(23)	(16)	(7.1)	(3.2)	未製品		
124	30C	Ⅳ	チャート	(28)	(16)	7.0	(2.8)	2	c	
125	30C	Ⅴ	チャート	(19)	18	4.3	1.0	3B	b	1023
126	30C	Ⅴ	チャート	14	16	3.5	0.5	3B		
127	30C	Ⅴ	チャート	(24)	20	4.1	(1.7)	2B	a	1016
128	30D	Ⅰ(N)	流紋岩質溶岩	37	33	9.6	(9.8)	3E	b	
129	30D	Ⅱ	チャート	(22)	(17)	7.2	2.0	1B	b	1004
130	30D	Ⅱ	チャート	15	15	4.6	0.9	3B		
131	30D	Ⅱ	チャート	31	24	9.6	6.1	5D		
132	30D	Ⅳ	チャート	27	18	9.6	3.4	1E		
133	30E	Ⅰ	チャート	(24)	20	6.2	(2.1)	2B	a	1015
134	30E	Ⅰ	チャート	22	17	4.3	0.9	1C		1009
135	30E	Ⅳ	チャート	27	12	3.9	0.9	2A		1012
136	30E	Ⅳ	チャート	17	17	5.9	1.2	3D		1028
137	30z	Ⅰ	チャート	26	23	7.8	4.5	5D		1034
138	30z	Ⅲ	チャート	21	19	4.0	1.0	5C		
139	31A	Ⅰ	チャート	(18)	(15)	5.1	(0.8)	2	f	
140	31A	Ⅰ	チャート	(22)	11	3.9	(0.8)	2	c	
141	31A	Ⅰ	チャート	18	10	5.1	1.1	5E		
142	31A	Ⅱ	チャート	14	15	3.8	0.4	3B		
143	31A	Ⅲ	チャート	24	15	5.9	1.5	2F		
144	31A	Ⅲ	チャート	20	17	5.5	1.3	3B		1024
145	31A	Ⅲ	チャート	(20)	(8)	(3.6)	(0.5)	未製品		
146	31B	Ⅰ	チャート	36	(23)	9.0	(8.0)	5D	e	
147	31B	Ⅰ	チャート	23	18	5.6	2.5	5E		
148	31B	Ⅱ	チャート	(21)	(14)	4.2	(0.9)	1C	e	
149	31B	Ⅱ	チャート	(32)	(22)	(10.1)	(6.0)	未製品		
150	31C	Ⅰ	チャート	19	15	5.2	0.8	1C		1006
151	31C	Ⅰ	チャート	17	16	5.1	1.0	5B		
152	31C	Ⅰ	チャート	20	17	4.7	1.4	3D		1027
153	31C	Ⅱ	チャート	30	25	8.7	5.3	5D		
154	31C	Ⅱ	チャート	15	14	4.0	0.6	3C		
155	31C	Ⅱ	チャート	18	12	4.2	0.7	2D		
156	31C	Ⅲ	チャート	(22)	(10)	4.4	(0.6)	1C	e	1008
157	31C	Ⅲ	チャート	11	10	2.2	0.1	1A		
158	31C	Ⅲ	チャート	16	13	4.5	0.7	1B		
159	31C	Ⅲ	チャート	22	14	4.6	(1.3)	1	c	
160	31C	Ⅲ	チャート	(29)	(14)	6.2	(2.0)	2	f	
161	31C	Ⅲ	チャート	15	14	3.2	0.6	3B		
162	31C	Ⅲ	チャート	(17)	(17)	4.8	(0.8)	3C	b	
163	31C	Ⅳ	下呂石	(22)	(14)	4.9	(0.9)	2A	b	1013
164	31C	Ⅳ	チャート	28	17	5.8	2.1	2D		1022
165	31C	Ⅳ	チャート	27	18	9.1	3.9	5E		1036

第15表　石鏃計測表(4)

No	出土区	層　位	石　材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	質量(g)	形　態	折　損	遺物番号
166	3 1 C	Ⅳ	チャート	(18)	(16)	3.8	(1.0)		d	
167	3 1 C	Ⅳ	チャート	(28)	(15)	(5.7)	(2.5)	未製品		
168	3 1 C	Ⅳ	チャート	(16)	(17)	(6.4)	(1.6)	未製品		
169	3 1 D	Ⅱ	チャート	(14)	(16)	(7.1)	(1.6)	未製品		
170	3 1 D	Ⅳ	チャート	21	16	7.6	1.5	2 B		
171	3 1 D	Ⅳ	チャート	(27)	(24)	7.8	(3.9)	3 B	d	
172	3 1 E	Ⅳ	チャート	15	14	3.8	0.5	3 C		
173	3 2 A	Ⅲ	チャート	(16)	16	4.5	(1.0)	2 B	a	
174	3 2 B	Ⅰ	チャート	(34)	(29)	(8.5)	(9.4)	未製品		
175	3 2 B	Ⅰ (W)	チャート	(18)	(14)	6.2	(1.3)	2 C	d	
176	3 2 B	Ⅰ	チャート	26	19	5.2	1.0	2 C		1018
177	3 2 B	Ⅰ	チャート	(21)	(20)	10.2	(2.0)	3	c	
178	3 2 B	Ⅱ	チャート	(20)	(14)	4.8	(0.9)	3 B	b	
179	3 2 B	Ⅳ	チャート	29	22	7.7	3.9	3 E		
180	3 2 B	Ⅳ	チャート	(21)	(15)	(4.5)	(1.3)	未製品		
181	3 2 C	Ⅲ	チャート	(25)	(22)	(8.0)	(4.7)	未製品		
182	3 2 C	Ⅳ	チャート	17	15	5.3	0.9	1 D		1011
183	3 2 C	Ⅳ	チャート	25	21	6.5	3.0	3 E		1029
184	3 2 C	Ⅳ	チャート	(12)	(13)	3.8	(0.5)	3	c	
185	3 2 C	Ⅳ	チャート	(18)	(12)	3.7	(0.6)	1 C	d	
186	3 2 D	Ⅳ	チャート	(18)	13	3.5	(0.7)	1 B	a	
187	3 2 D	Ⅳ	チャート	(31)	(16)	5.1	(1.9)	2 B	b	1014
188	3 2 z	Ⅰ	チャート	(21)	16	4.3	(0.9)	1 A	b	1003
189	3 3 A	Ⅲ	チャート	(20)	(13)	5.4	(1.3)	1	c	
190	3 3 y	Ⅰ	チャート	20	18	6.5	1.7	3 D	c	
191	3 3 y	Ⅰ	チャート	(21)	(17)	5.5	(1.0)	1 C	e	
192	3 3 y	Ⅰ	チャート	13	13	3.8	0.5	3 C		
193	3 3 y	Ⅰ	チャート	21	(14)	4.3	(1.0)	1 C	d	1010
194	3 3 y	Ⅱ	チャート	17	15	3.9	0.5	3 C		1026
195	3 3 y	Ⅱ	チャート	35	18	8.6	7.7	5 D		
196	3 3 y	Ⅱ	チャート	(17)	19	4.6	(1.3)	1 B		
197	3 3 y	Ⅱ	チャート	(34)	(26)	(7.4)	(6.2)	未製品		
198	3 3 y	Ⅲ	下呂石	(18)	18	3.7	(0.8)	3 C	c	
199	3 3 y	Ⅲ	チャート	28	23	6.0	3.3	1 D		
200	3 3 z	Ⅱ	チャート	20	16	5.2	1.2	3 B		
201	3 3 z	Ⅱ	チャート	27	19	6.5	3.2	5 D		
202	3 3 z	Ⅲ	チャート	(23)	(18)	(7.8)	(3.5)	未製品		
203	3 3 z	Ⅳ	チャート	(22)	(14)	4.6	(1.0)	1 A	d	
204	3 3 z	Ⅳ	チャート	22	15	5.2	1.1	2 C		1020
205	3 4 y	Ⅱ	チャート	29	26	8.2	6.3	5 D		1035
206	3 4 y	Ⅱ	チャート	(27)	(24)	(9.2)	(5.0)	未製品		
207	3 4 z	Ⅰ	チャート	22	(14)	3.9	(0.7)	2 C	b	1017
208	3 4 z	Ⅲ	チャート	22	(15)	5.0	(1.3)	2 B	b	
209	3 4 z	Ⅲ	チャート	16	17	3.6	0.5	3 C		
210	3 4 z	Ⅲ	チャート	(19)	(12)	(4.2)	(0.9)	未製品		
211	3 4 z	Ⅲ	チャート	(32)	(24)	(7.3)	(6.7)	未製品		
212	3 4 z	Ⅲ	チャート	(30)	(23)	(9.4)	(6.5)	未製品		
213	3 5 A	Ⅰ	チャート	(18)	(18)	(7.5)	(2.1)	未製品		
214	3 5 z	Ⅱ	チャート	(23)	(14)	3.7	(0.7)	1 C	e	
215	3 5 z	Ⅲ	チャート	(26)	(18)	5.9	(1.6)	2 B	f	
216	3 5 z	Ⅲ	チャート	28	23	7.5	4.7	5 D		
217	表採		チャート	(17)	(11)	2.2	(0.2)	1 C	b	
218	表採		サヌカイト	22	16	3.5	0.6	6 C		1068
219	表採		チャート	(25)	24	6.8	(4.1)	5	c	
220	表採		チャート	18	17	3.5	(0.8)	1 B	a	
221	表採		チャート	22	19	7.0	2.3	5 B		

第16表　石錐計測表

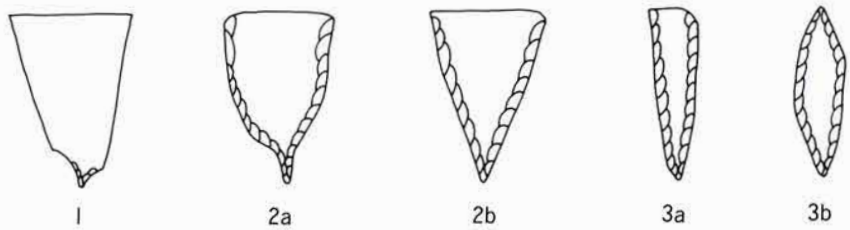
No.	出土区	層位	石材	大きさ（mm）			質量（g）	錐部			断面形	折損	分類	遺物番号
				全長	全幅	全厚		長（mm）	幅（mm）	厚（mm）				
1	15t	Ⅰ	チャート	(21)	12	4.6	(1.1)	—	—	—		有	3b	
2	16s	Ⅰ	チャート	17	12	4.5	(0.9)	6	9	3	ひし形	有	2b	
3	18s	Ⅰ	チャート	30	12	6.6	2.3	上14下9	上11下9	上5下5	上ひし形下ひし形	無	3b	1085
4	19q	Ⅲb	チャート	(36)	21	9.2	(5.6)	—	—	6	ひし形	有	2b	
5	20s	Ⅰ	チャート	(28)	10	5.3	(1.3)	—	—	—		有	3b	
6	20t	Ⅲ	チャート	23	9	5.0	0.8	上7下5	上5下4	上3下3	上ひし形下ひし形	無	3b	
7	20t	Ⅲ	チャート	21	14	7.0	1.1	10	8	4	三角形	無	2a	
8	21v	Ⅰ	チャート	(18)	16	6.7	(3.5)	—	—	—		無	2b	
9	28A	Ⅱ	チャート	(32)	22	10.6	(6.7)	(10)	9	4	三角形	有	1	
10	29B	Ⅲ	チャート	(43)	20	8.7	(6.7)	—	—	—	ひし形	有	2b	
11	29C	Ⅰ	チャート	28	16	5.5	1.6	6	5	3	三角形	無	1	1071
12	29C	Ⅱ	チャート	27	11	5.0	1.3	8	7	3	三角形	無	3a	
13	29C	Ⅲ	チャート	(30)	21	6.9	(3.3)	—	—	—		有	2a	
14	29D	Ⅱ	チャート	24	12	8.5	1.6	4	5	3	三角形	無	1	
15	29D	Ⅲ	チャート	(36)	19	8.5	(5.1)	—	—	—		有	2b	
16	29D	Ⅲ	チャート	32	11	8.0	2.1	上10下15	上7下8	上6下8	上三角形下三角形	無	3b	
17	29E	Ⅱ	チャート	(29)	16	8.5	(2.5)	—	—	—		有	3b	
18	30A	Ⅰ	チャート	27	10	5.3	1.1	—	—	—	ひし形	無	3a	
19	30A	Ⅰ	チャート	34	17	6.1	2.8	8	6	3	ひし形	無	2b	1078
20	30A	Ⅱ	チャート	29	16	8.7	3.5	11	9	6	ひし形	無	2a	1074
21	30C	Ⅲ	チャート	(34)	18	6.5	(3.0)	—	—	—	三角形	有	2b	
22	30C	Ⅳ	チャート	32	10	5.7	1.6	上4下10	上5下7	上3下4	上ひし形下ひし形	無	3b	1084
23	30D	Ⅰ	チャート	(34)	25	8.5	(4.9)	—	—	—		有	2a	
24	30D	Ⅱ	チャート	35	12	7.1	2.4	10	8	6	ひし形	無	3a	1080
25	30D	Ⅳ	チャート	21	11	6.5	1.5	8	9	4	三角形	無	2b	
26	31C	Ⅰ	チャート	(39)	12	8.5	(3.4)	14	9	5	ひし形	有	3b	1082
27	31C	Ⅱ	チャート	(46)	28	10.6	(12.3)	—	—	—	三角形	有	2b	
28	31C	Ⅱ	チャート	30	11	5.1	1.4	11	7	4	ひし形	無	3a	1081
29	31C	Ⅱ	チャート	29	14	6.5	1.8	—	—	—		有	1	
30	31C	Ⅱ	チャート	39	15	8.0	4.3	9	8	4	三角形	無	1	
31	31C	Ⅴ	チャート	41	19	6.6	3.7	7	7	2	三角形	無	1	1070
32	31D	Ⅳ	チャート	31	15	8.0	3.1	4	4	2	ひし形	無	1	1069
33	31D	Ⅳ	チャート	35	19	7.4	3.9	9	7	5	ひし形	無	2b	1077
34	31E	Ⅳ	チャート	29	18	7.1	2.9	10	11	4	ひし形	無	2b	
35	31E	Ⅳ	チャート	32	20	10.5	5.4	5	4	3	ひし形	無	2a	1073
36	31z	Ⅱ	チャート	(22)	13	8.2	(1.5)	7	6	4	ひし形	有	2a	
37	31z	Ⅱ	チャート	15	7	4.9	0.5	上4下5	上5下4	上4下3	上だ円形下ひし形	無	3b	
38	32E	Ⅳ	チャート	(22)	15	5.8	(1.9)	15	12	5	三角形	有	2a	
39	33C	Ⅱ	チャート	30	10	6.2	1.7	上7下7	上7下7	上5下3	上三角形下三角形	無	3b	
40	33C	Ⅳ	チャート	(40)	16	8.4	(5.6)	—	—	—	ひし形	有	2b	
41	33y	Ⅱ	チャート	(33)	12	6.7	(1.9)	—	—	—	三角形	有	1	
42	33y	Ⅲ	チャート	22	11	7.1	1.4	5	4	3	ひし形	無	2b	1075
43	33z	Ⅰ	チャート	(25)	11	6.6	(1.5)	上3下12	上5下10	上3下5	上ひし形下ひし形	有	3b	1083
44	33z	Ⅱ	チャート	(41)	28	8.1	(6.5)	(13)	11	4	三角形	有	2a	
45	33z	Ⅲ	チャート	22	12	5.6	1.4	11	9	4	三角形	無	3a	
46	34y	Ⅱ	チャート	28	19	5.5	2.7	4	5	4	三角形	無	2b	1076
47	34y	Ⅲ	チャート	27	10	6.7	1.5	上7下10	上7下7	上4下5	上ひし形下ひし形	無	3b	
48	34z	Ⅲ	チャート	(32)	25	5.3	(3.5)	—	—	—		有	2b	
49	35y	Ⅱ	チャート	27	16	7.7	2.4	14	8	4	ひし形	無	2a	1072
50	35z	Ⅱ	チャート	32	15	5.5	2.4	11	9	5	ひし形	無	3a	1079
51	表採		チャート	32	19	7.9	4.0	12	11	4	三角形	無	2b	
52	表採		チャート	21	14	6.1	1.6	—	—	—		無	1	

断面形は、錐部先端から3～4mmの部分を測定位置とした。
錐部の測定は、磨耗痕、つぶれ痕が両側縁部にあり、その最上部の位置で測定した。

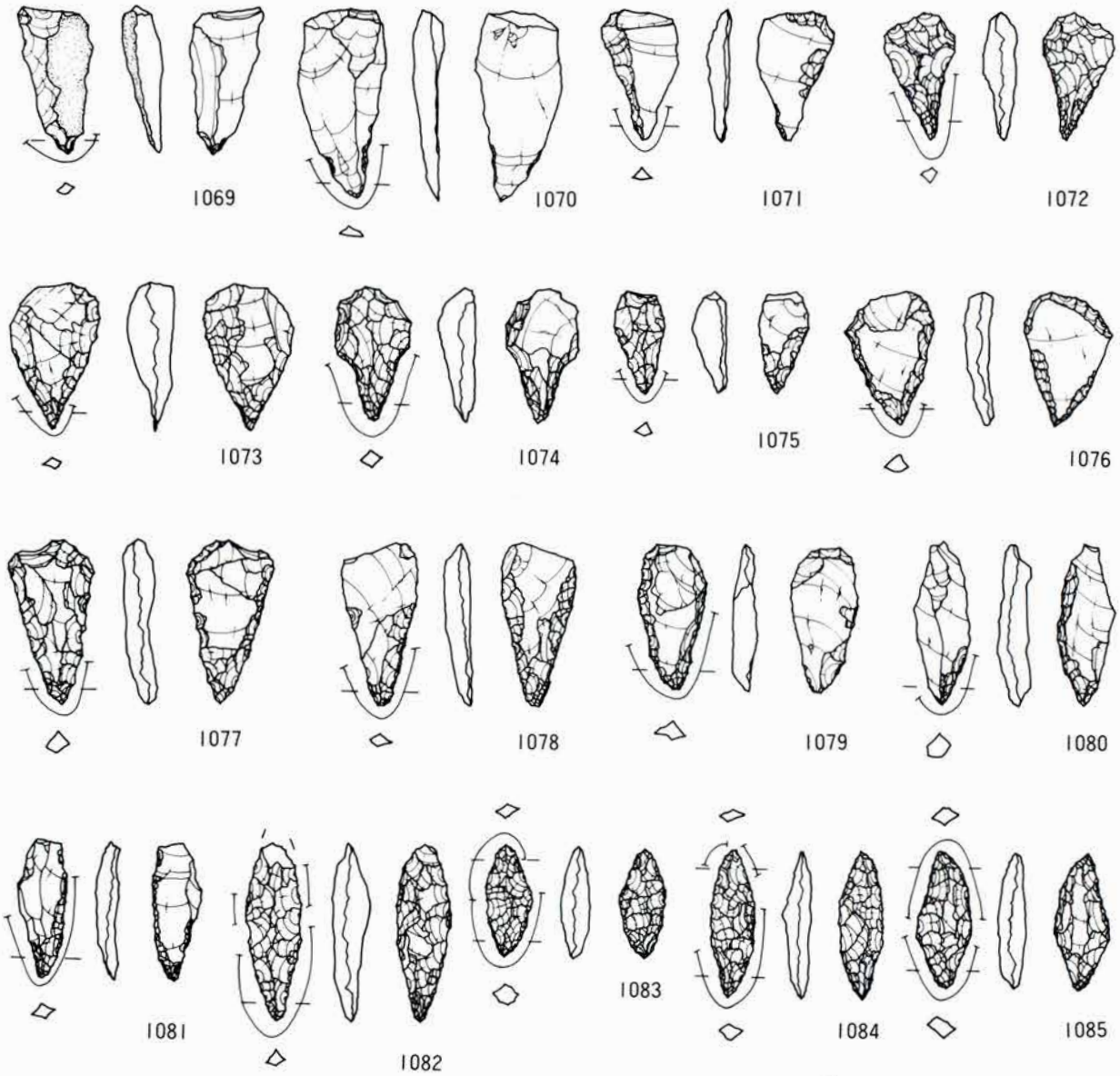
(2)　石錐（第76図　1069～1085　図版48）

52点出土した。遺構からの出土はなく、すべて包含層からの出土で、上の段から42点、下の段から8点出土し上の段からの出土が多い。石材は、すべてチャート製である。

形態と錐部の数により、次の3つに分類した（第75図）。



第75図　石錐の分類



第76図　石錐

1類；剥片の一端を尖らせて錐部を作り出したもの。9点出土した。(1069～1071)

2類；剥片の全体を整形して錐部を作り出したもの。

基部と錐部の区分がはっきりしているものa種と、区分がはっきりしていないものb種とがある。

2a；9点出土した。(1072～1074)

2b；16点出土した。(1075～1078)

3類；長い棒状の形態を呈し、基部と錐部の区分が不明瞭なもの。調整が全体に及び、形態に統一性がみられる。錐部が一端にあるものa種と、両端にあるものb種とがある。

3a；6点出土した。(1079～1081)

3b；12点出土した。(1082～1085)

(3)　スクレイパー（第78～81図　1086～1107　図版48～50）

RF（2次加工のある剥片）の中で特に連続的な剥離痕の顕著なものをスクレイパーとした。

1類；（石匙）

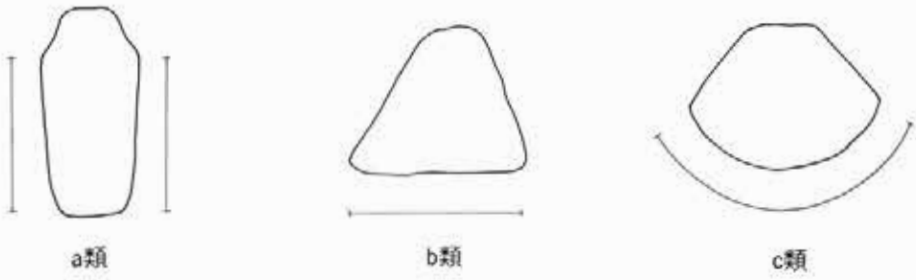
スクレイパーの中でもより定形化したもの、即ち、つまみ部を作出したものを1類とした。いわゆる石匙、連続的な剥離痕（刃部）の位置により、次の3つに分類した（第77図）。

a種；つまみ部を上方においたとき、平行する側縁が刃部となるもの。いわゆる縦形。
9点出土した。(1086～1088)

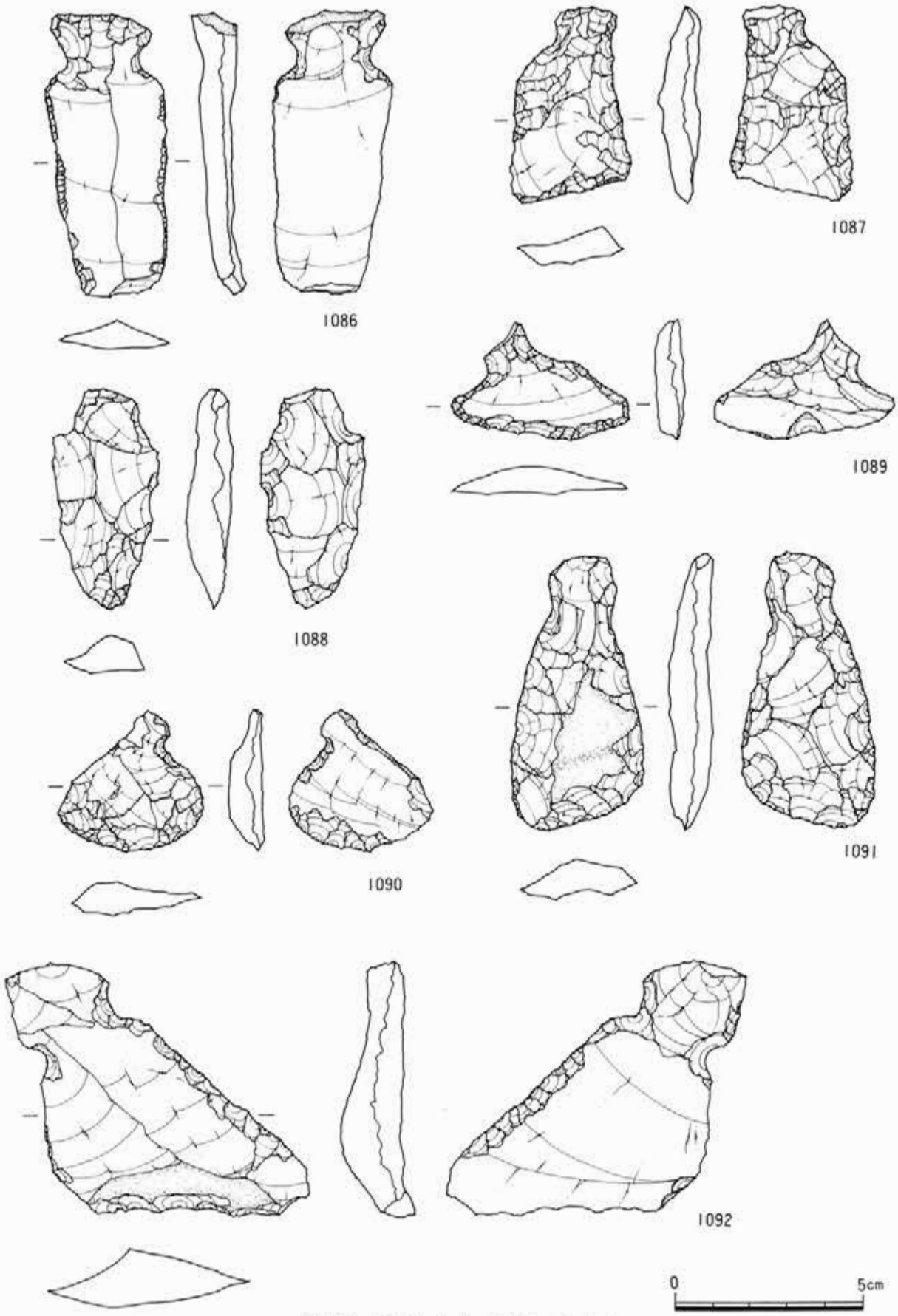
b種；つまみ部を上方においたとき、直交するその下端の縁部が刃部となるもの。いわゆる横形。
6点出土した。(1089・1092)

c種；つまみ部を上方においたとき、直交するその下端及び側縁が刃部となるもの。刃部は曲線的に作出されている。5点出土した。(1090・1091)

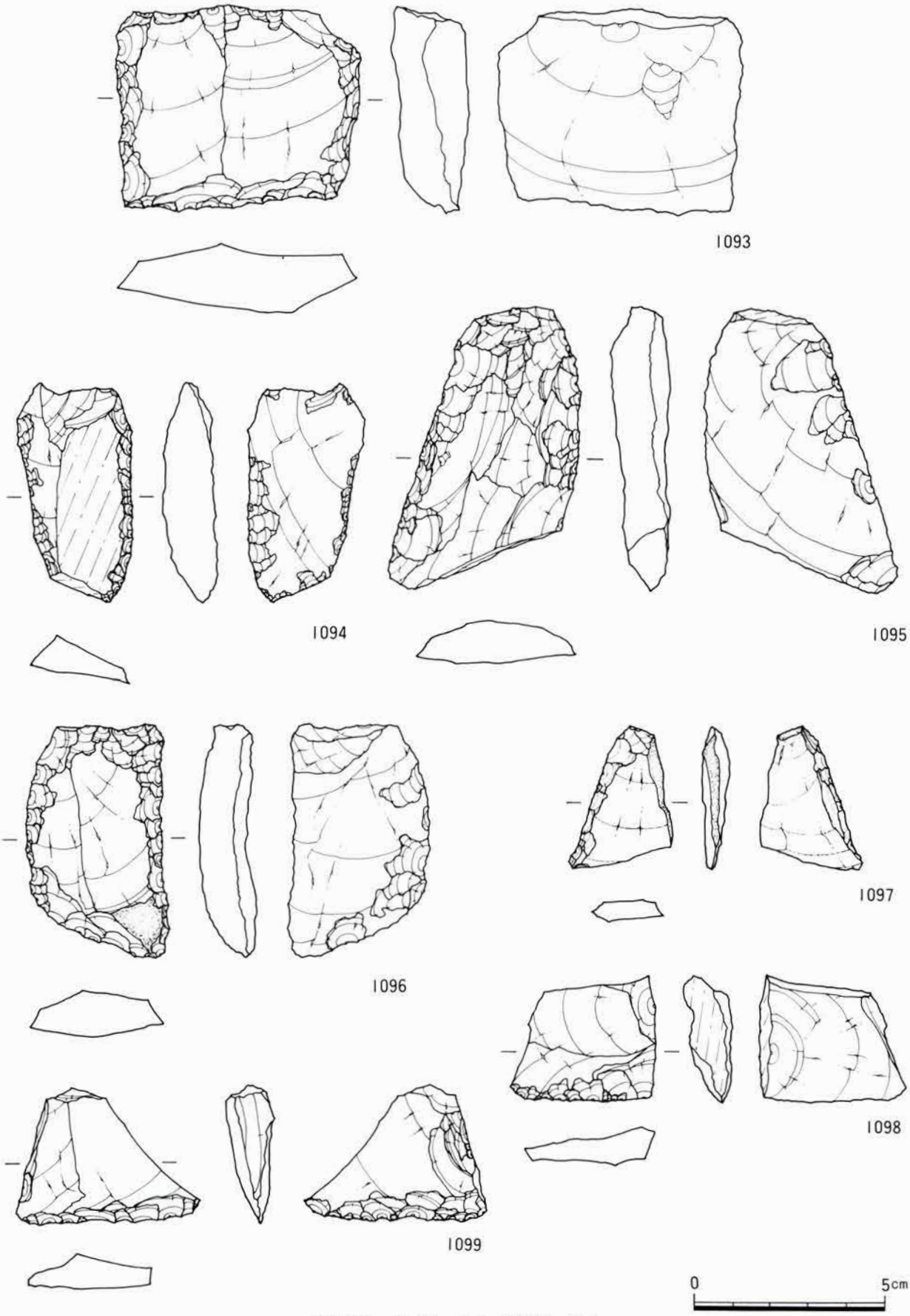
1類の20点のうち18点は上の段から出土し、下の段からの出土は2点であった。石材は1点(1091)がサヌカイト製、他はチャート製である。



第77図　スクレイパーの分類



第78図　スクレイパー1類(Ia・Ib・Ic)



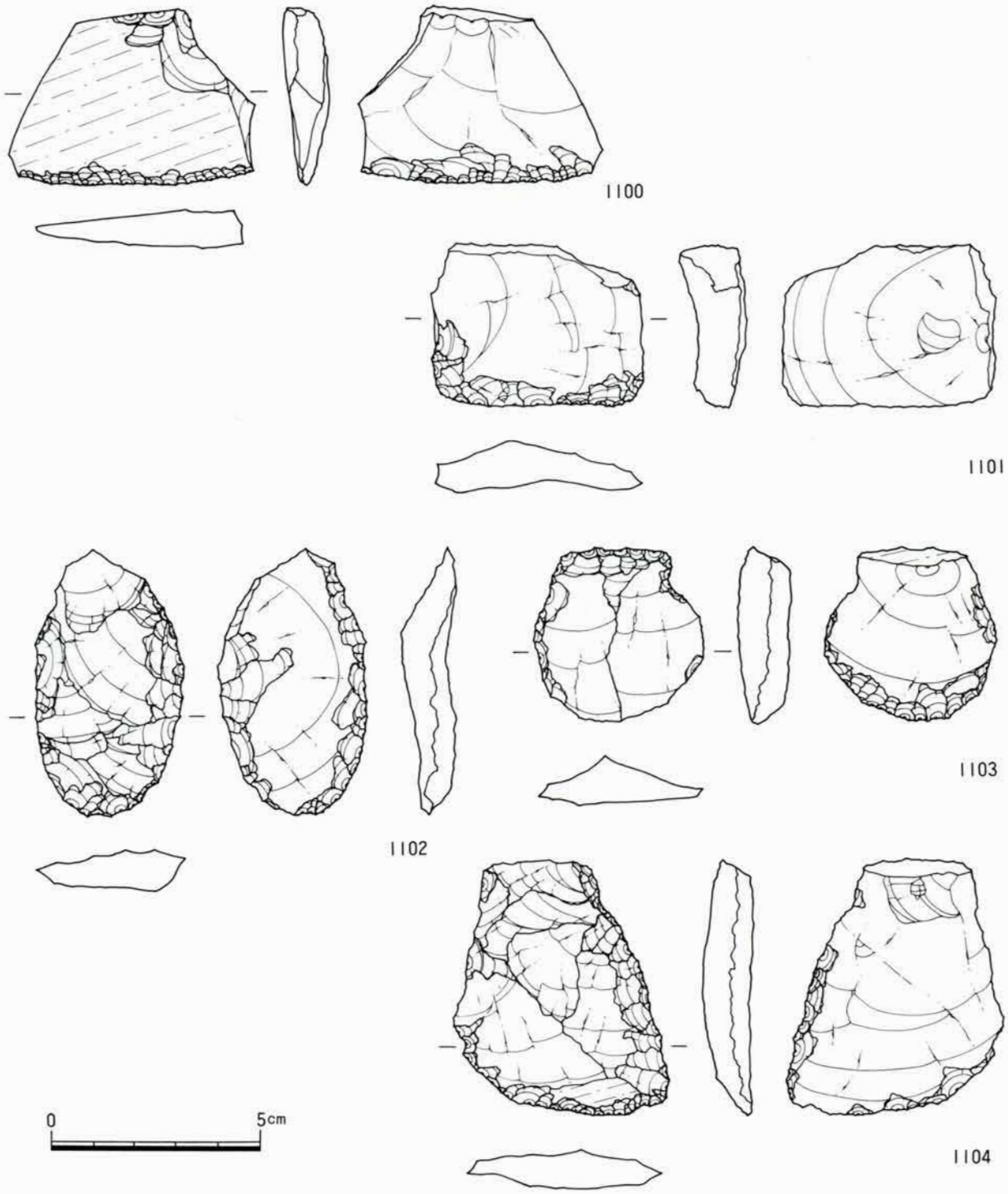
第79図　スクレイパー2類(2a・2b)

2類；スクレイパーの中でもあまり定形化していないもの、即ち、つまみ部を作出していないものを2類とした。連続的な剥離痕（刃部）の位置により1類同様、次の3つに分類した（第77図）。

a種；側縁が刃部となるもの。いわゆるサイドスクレイパー。12点出土(1093～1097)

b種；下端の縁部が刃部となるもの。いわゆるエンドスクレイパー。8点出土(1098～1101)

c種；下端及び側縁が刃部となるもの。刃部は曲線的に作出されている。10点出土(1102～1104)



第80図　スクレイパー2類(2b・2c)

2類のスクレイパーについては、刃部の角度（刃角）が概ね60°以上のものを掻器、60°未満のものを削器とし[1]表にまとめた。それによると、掻器26点、削器10点で掻器が多いが、刃部を複数持つもの（刃部2ヶ所7点、3ヶ所4点）もみられ、その中には掻器と削器の両方認められるものも6点存在した。刃部調整は片面が18点、両面が12点であった。

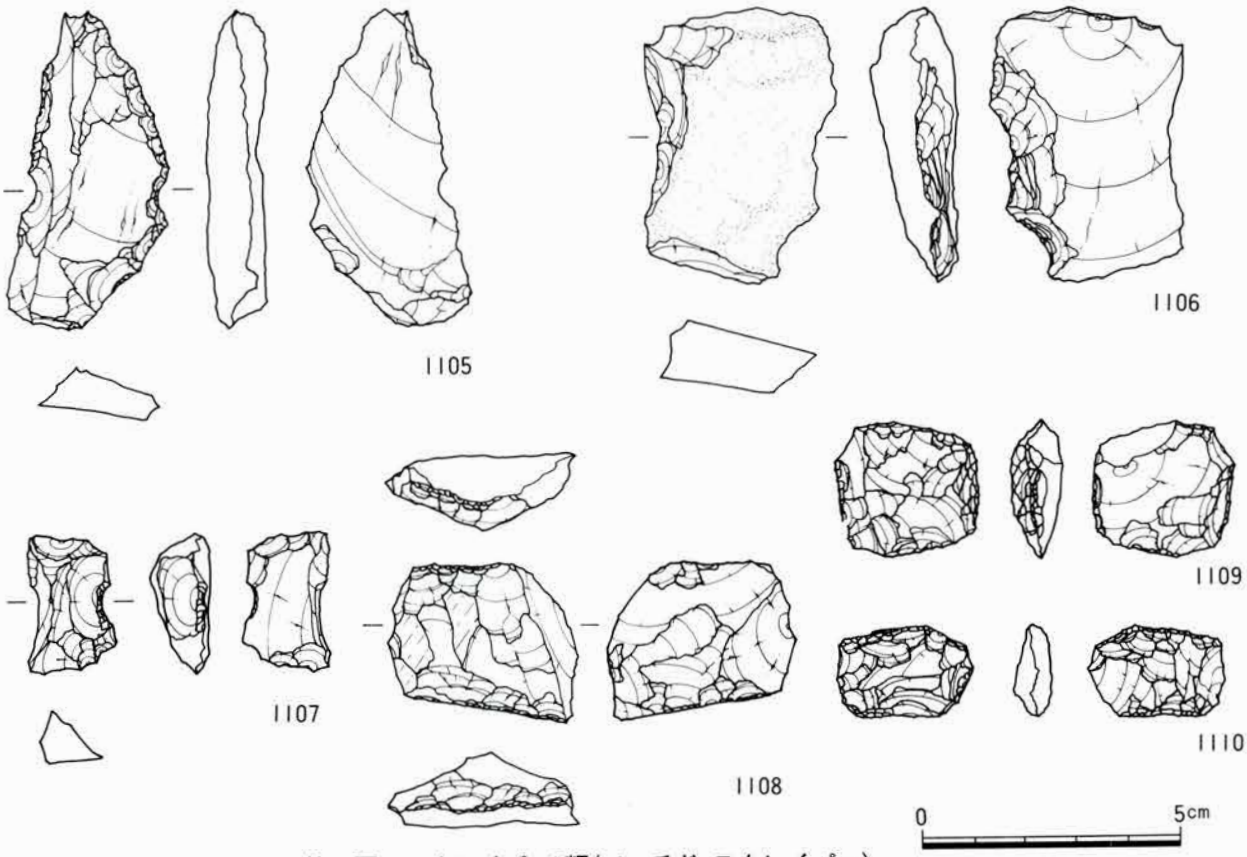
石材は、ほとんどがチャートでサヌカイト製5点下呂石製1点もみられた。

2類の30点のうち24点は上の段から出土し、下の段からの出土は6点であった。

3類；スクレイパーの中で抉り（ノッチ）の入ったものを3類とした。いわゆる、ノッチド・スレイパー（抉入石器）(1105～1107)

7点出土した。すべての包含層からの出土で上の段から6点、下の段から1点出土した。ノッチが1ヶ所のもの4点(1107)と、2ヶ所のもの2点(1105・1106)は、他と比べてかなり大きい縦長の形をしている。石材はほとんどがチャートで、下呂石製1点もみられた。

1）上原遺跡Ⅰの石器分類に従った



第81図　スクレイパー3類(ノッチド・スクレイパー)
ピエス・エスキーユ

(4)　ピエス・　エスキーユ（第81図　1108～1110　図版50）

向かい合った二辺ないしは四辺の縁辺部に、階段状の剥離痕やつぶれが認められる石器をピエス・エスキーユとした。7点出土した(1108～1110)。全て包含層からの出土で、上の段から5点、下の段から2点出土した。石材は、7点ともチャートである。

第17表　スクレイパー計測表(1)　1類

No.	出土区	層　位	石　材	全長（mm）	全幅（mm）	全厚（mm）	質量（g）	分　類	遺物番号
1	18u	Ⅲ	チャート	31	48	7.3	9.6	1b	1089
2	20u	Ⅲ	チャート	41	42	8.6	11.2	1c	
3	29D	Ⅲ	チャート	75	32	11	23.0	1a	1086
4	29E	Ⅳ	チャート	(42)	33	11	(13.5)	1a	
5	30D	Ⅱ	チャート	50	28	10	17.9	1c	
6	30D	Ⅱ	チャート	38	51	4.5	7.8	1c	
7	30E	なし	チャート	65	67	16.1	59.2	1b	1092
8	30E	Ⅳ	チャート	(54)	33	12.1	(19.7)	1a	
9	31B	Ⅱ	チャート	47	33	10	16.1	1a	1087
10	31B	Ⅱ	チャート	35	38	9	11.4	1c	1090
11	31B	Ⅱ	サヌカイト	71	36	11.1	28.2	1c	1091
12	31C	Ⅳ	チャート	(41)	30	9.9	(13.7)	1a	
13	31C	Ⅴ	チャート	28	65	12.5	26.9	1b	
14	31y	Ⅰ	チャート	57	28	11	25.0	1b	
15	31y	Ⅰ	チャート	39	54	10.8	17.3	1a	1088
16	32C	Ⅲ	チャート	54	96	6.4	86.2	1b	
17	33B	Ⅱ	チャート	33	(37)	7.8	(10.5)	1b	
18	33C	Ⅳ	チャート	48	33	9.3	16.9	1a	
19	33y	Ⅱ	チャート	49	39	9.2	18.1	1a	
20	35y	Ⅱ	チャート	(45)	35	9	(13.9)	1a	

第18表　スクレイパー計測表(2)　2類

No.	出土区	層　位	石　材	全長（mm）	全幅（mm）	全厚（mm）	質量（g）	分類	刃部調整	刃部数	掻器	削器	遺物番号
1	18s	Ⅰ（W）	サヌカイト	29	72	10.9	21.1	2c	両面		○		
2	18t	Ⅲ	サヌカイト	42	59	9.6	26.8	2b	両面	1		○	1100
3	19s	Ⅲ	サヌカイト	35	28	5.8	5.0	2a	両面	2	○	○	1097
4	20t	Ⅰ（W）	下呂石	36	48	11.1	15.8	2b	両面	1		○	1099
5	21t	Ⅲ	サヌカイト	43	69	10.2	26.2	2c	両面		○		
6	22u	Ⅲ	サヌカイト	47	30	9.4	9.3	2c	両面		○		
7	22A	Ⅲ	チャート	31	42	8.2	12.1	2b	片面	1	○		
8	30A	Ⅱ	チャート	31	46	10.9	19.4	2c	片面		○		
9	30B	Ⅳ	チャート	38	51	12.4	31.2	2b	片面	1	○		1101
10	30C	Ⅰ	チャート	62	36	13.5	35.9	2a	片面	3	○		1096
11	30C	Ⅳ	チャート	59	34	12.6	22.8	2a	両面	3	○	○	
12	30C	Ⅳ	チャート	46	59	14.2	47.4	2b	両面	1	○		
13	30D	Ⅱ	チャート	58	25	12.3	21.6	2a	両面	2	○		
14	30D	Ⅱ	チャート	52	34	16.1	30.1	2c	片面		○		
15	30D	Ⅳ	チャート	44	57	10.3	21.2	2b	片面	1	○		
16	31A	Ⅲ	チャート	51	65	19.7	87.3	2a	片面	3	○		1093
17	31B	Ⅱ	チャート	62	19	8.8	12.8	2a	片面	2	○		
18	31B	Ⅱ	チャート	45	26	7.6	11.1	2a	片面	2	○	○	
19	31C	Ⅱ	チャート	31	54	11.3	25.5	2b	片面	1	○		
20	31C	Ⅲ	チャート	43	16	6.8	6.4	2a	片面	2	○		
21	31C	Ⅳ	チャート	73	41	14.5	52.4	2a	片面	2	○		1095
22	31C	Ⅳ	チャート	33	37	10	22.7	2b	片面	1		○	1098
23	31D	Ⅱ	チャート	45	74	12.3	45.0	2c	片面		○		
24	32A	Ⅱ	チャート	58	32	10	20.8	2a	片面	3	○	○	
25	32B	Ⅳ	チャート	64	36	10.1	26.6	2c	両面		○		1102
26	32C	Ⅳ	チャート	42	41	11.8	22.9	2c	片面		○		1103
27	32D	Ⅳ下	チャート	62	27	8.7	14.2	2a	片面	1		○	
28	32D	Ⅳ	チャート	62	51	10.7	39.0	2c	片面		○		1104
29	33C	Ⅱ	チャート	72	32	11.5	26.1	2c	両面		○	○	
30	33z	Ⅱ	チャート	56	30	13.5	20.4	2a	両面	2	○	○	1094

第19表　スクレイパー計測表(3)　3類

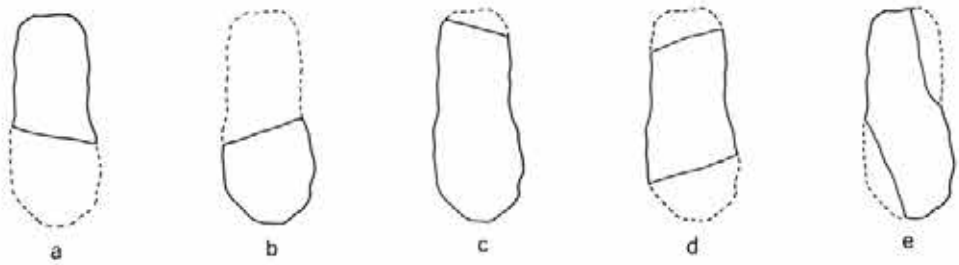
No.	出土区	層　位	石　材	全長（mm）	全幅（mm）	全厚（mm）	質量（g）	遺物番号
1	19t	Ⅲ	チャート	24	20	7.9	4.1	
2	20v	Ⅰ	チャート	23	10	3.8	0.9	
3	29D	Ⅲ	チャート	43	17	4.6	3.3	
4	29E	Ⅰ	チャート	53	37	13.4	32.0	1106
5	30C	Ⅴ	チャート	26	17	11	4.9	1107
6	32B	Ⅳ	チャート	62	28	10.4	19.5	1105

(5)　打製石斧（石器土掘り具）（第83～85図　1111～1119　図版51）

20点出土している。遺構から１点（ＳＫ16より１点）、包含層より19点である。各石材ごとの点数は、砂岩10点、泥岩（ホルンフェルス化したものも含む）10点と砂岩と泥岩が半々である。砂岩を用いたものは、川原石を用いたとわかる表皮（自然面）を残しているものがほとんどである。
打製石斧の形状から次の３つに分類した。

１類；胴部がほぼ平行な、いわゆる短冊型と呼ばれるもの。14点出土した。（1111～1116）
２類；胴部がくびれる、いわゆる分銅型と呼ばれるもの。１点出土した。（1117）
３類；形状が基部に向かってやや収束する、いわゆるバチ型と呼ばれるもの。５点出土した。（1118・1119）

石斧の刃部に擦痕（使用痕）のみられるもの８点。基部に装着痕のみられるもの７点。
20点のうち14点は、明らかに折損していると思われる。その折損の部位によって第82図のように分類した。



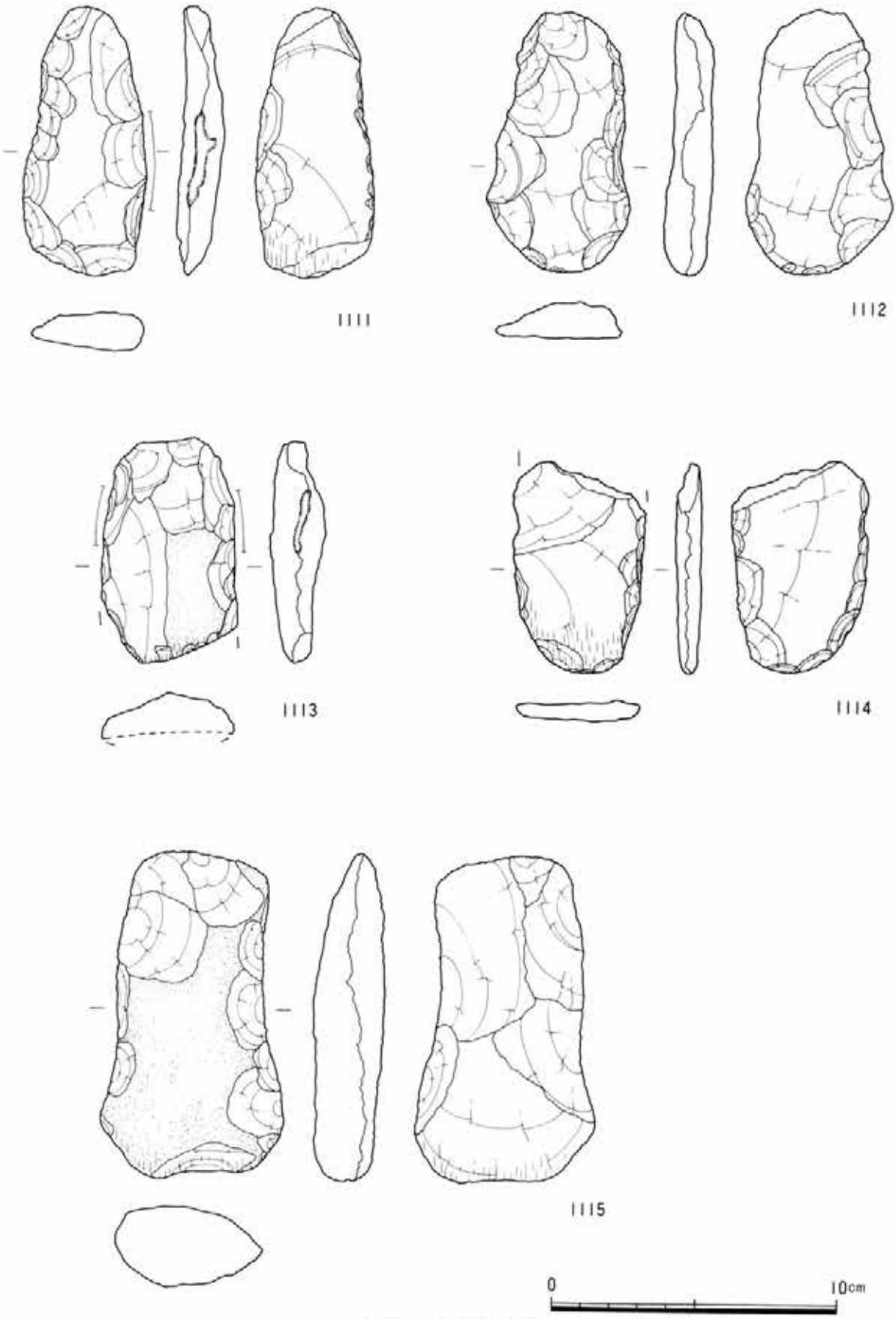
第82図　打製石斧の折損の部位による分類

それぞれの点数は、次の通りである。
　ａ６点、ｂ４点、ｃ１点、ｄ１点、ｅ２点
刃部や基部の折損が多い。なお、(1113)は折損部にも使用痕が認められ、刃部折損後も使用したと考えられる。

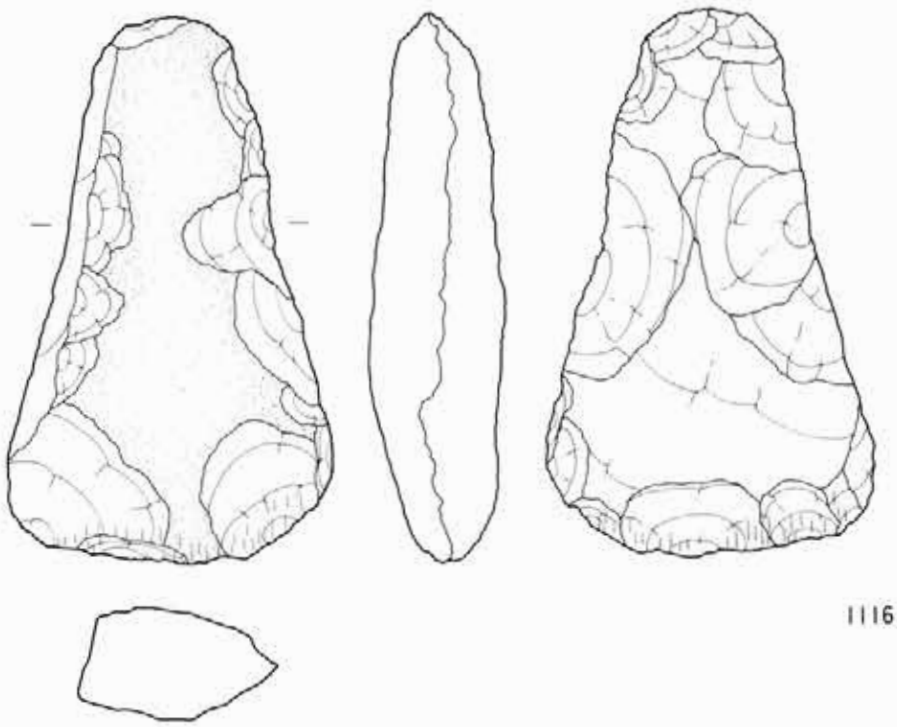
(6)　磨製石斧（第86図　1120～1128 図版52）

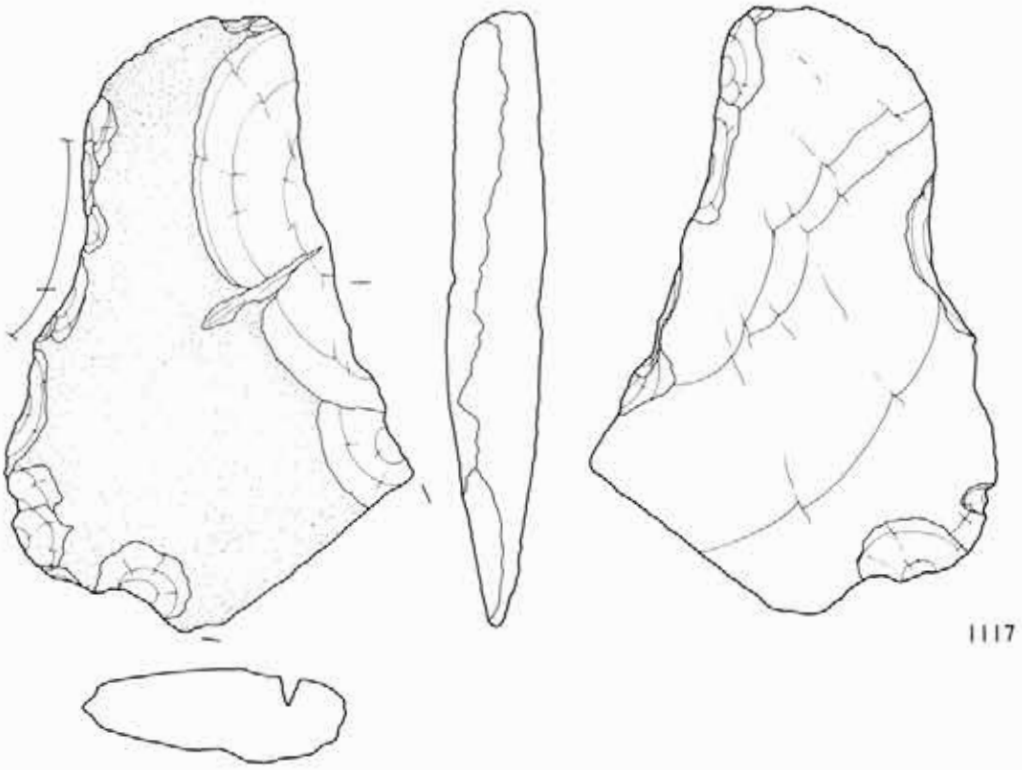
15点出土した。上の段より３点(1120)、下の段11点(1121～1128)、表採１点で下の段からの出土が多い。(1121)はミニチュア磨斧で、石材はアプライトである。(1122)の石材は蛇紋岩である。
(1126)は、富山県常願寺川の川原に見られる硬質砂岩とにている。[1]
(1127)は、中央やや上に装着痕が認められる。
(1122)は、刃部を(1123・1128)は、基部を折損している。

１）林直樹氏の御教示による。



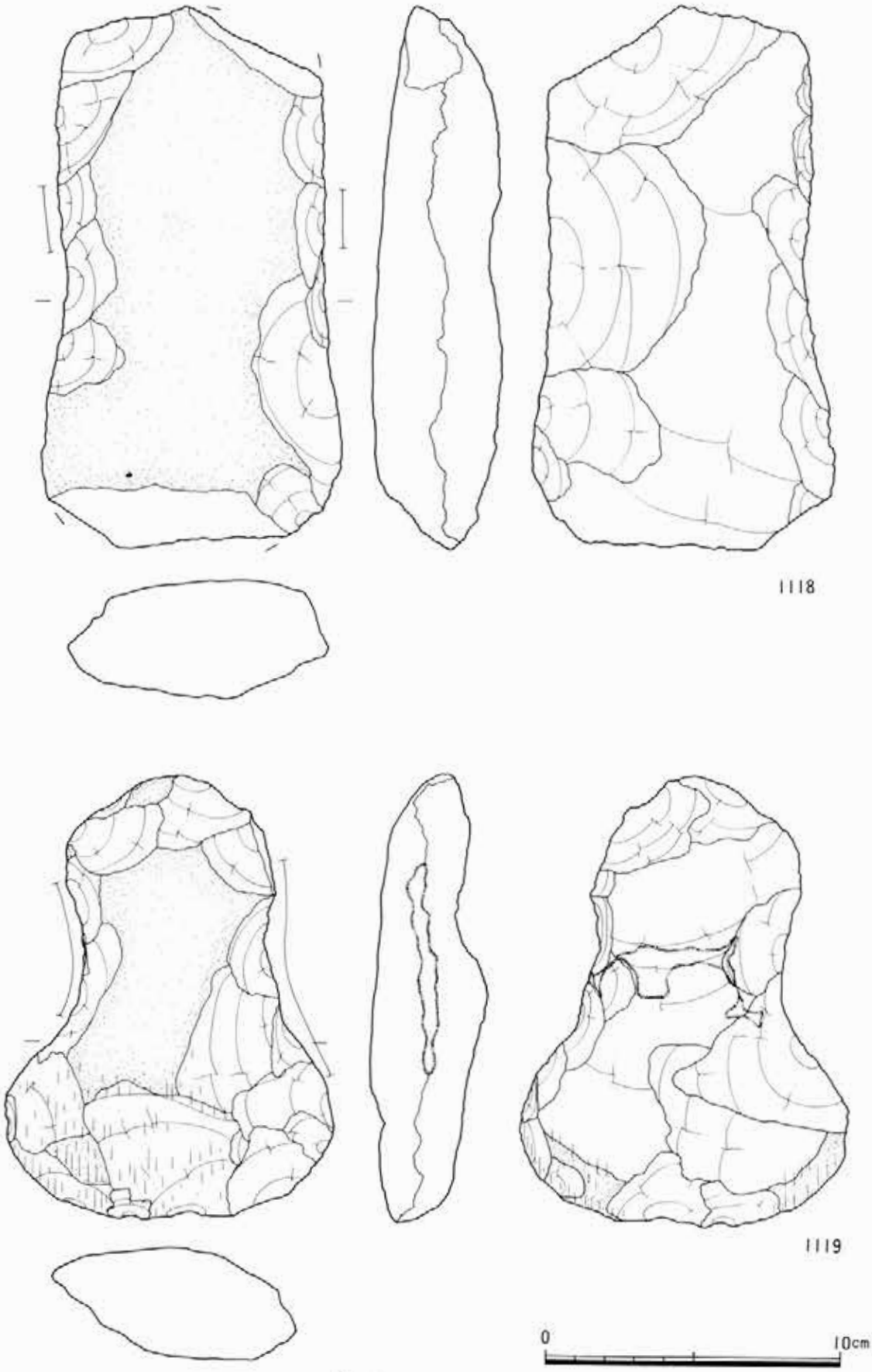
第83図　打製石斧(1)



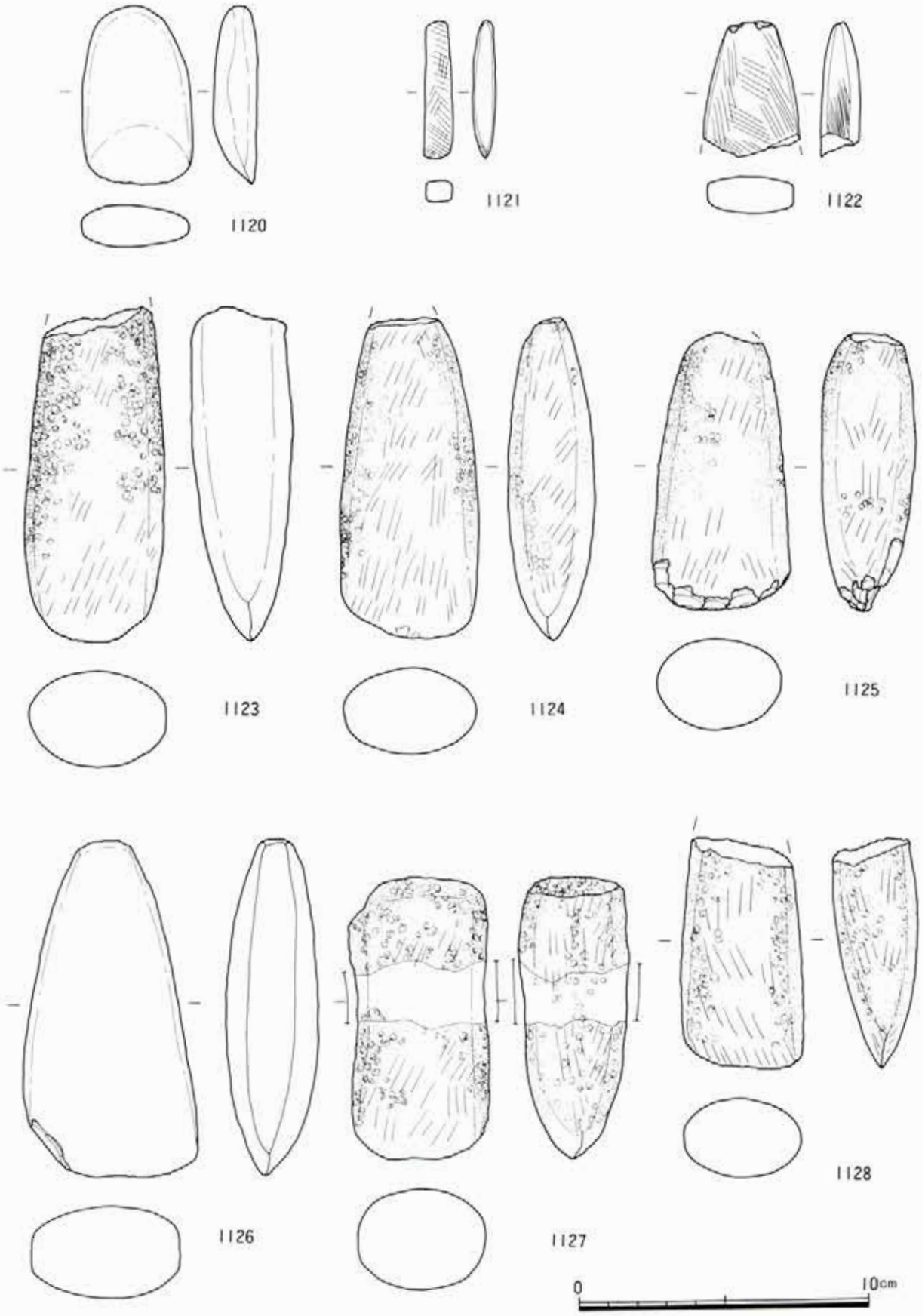


0　10cm

第84図　打製石斧(2)



第85図　打製石斧(3)



第86図　磨製石斧

第20表　ピエス・エスキーユ計測表

No.	出土区	層　位	石　材	全長（mm）	全幅（mm）	全厚（mm）	質量（g）	遺物番号
1	18r	Ⅲ	チャート	26	18	6.9	3.5	1110
2	21t	Ⅲ	チャート	38	30	15.3	16	1108
3	30D	Ⅳ	チャート	26	24	7.3	5.7	
4	30E	Ⅳ	チャート	28	23	7.6	5.4	
5	31A	Ⅰ	チャート	28	26	9.7	7.9	1109
6	31A	Ⅱ	チャート	24	26	8.1	4.5	
7	32C	Ⅱ	チャート	26	23	7.9	6.6	

第21表　打製石斧計測表

No.	出土区	層位	石　材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	質量(g)	分類	折損	遺物番号	備　考
1	SK16		泥岩	(72)	44	13	47	1	a		
2	13u	Ⅲ	砂岩	118	66	26	206	1		1115	使用痕有
3	13u	Ⅲ	泥岩	(80)	(48)	15	62	1	b		使用痕有
4	16s	Ⅰ(N)	砂岩	144	86	35	464	3		1118	使用痕有
5	16s	Ⅲ	泥岩	97	61	21	166	1	e		
6	18r	Ⅰ	砂岩	152	112	40	587	2		1117	装着痕有
7	18r	Ⅲ	泥岩（ホルンフェルス化）	90	43	15	78	1			
8	19s	Ⅲ	砂岩	(100)	(79)	26	288	3	b		使用痕有
9	19s	Ⅲ	砂岩	(98)	66	19	139	3	a		装着痕有
10	20t	Ⅲ	砂岩	(162)	(109)	23	380	3	a	1119	装着痕有
11	20s	Ⅲ	泥岩（ホルンフェルス化）	93	52	14	76	1		1112	使用痕有
12	20s	Ⅲ	砂岩	185	105	44	1051	1	e	1116	装着痕有
13	20r	Ⅲ	砂岩	(129)	(75)	31	327	1	a		装着痕有
14	20r	Ⅲ	砂岩	(88)	(65)	34	208	1	a		装着痕有
15	21s	Ⅰ(W)	砂岩	(99)	(105)	30	319	3	d		
16	33z	Ⅳ	泥岩（ホルンフェルス化）	(76)	48	7	36	1	c	1114	使用痕有
17	33z	Ⅳ	泥岩（ホルンフェルス化）	(74)	60	12	68	1	b		使用痕有
18	33y	Ⅰ	泥岩	98	42	13	66	1		1111	
19	35y	Ⅱ	泥岩（ホルンフェルス化）	(62)	72	16	105	1	b		
20	35y	Ⅲ	泥岩	79	48	20	86	1	a	1113	使用痕・装着痕有

第22表　磨製石斧計測表

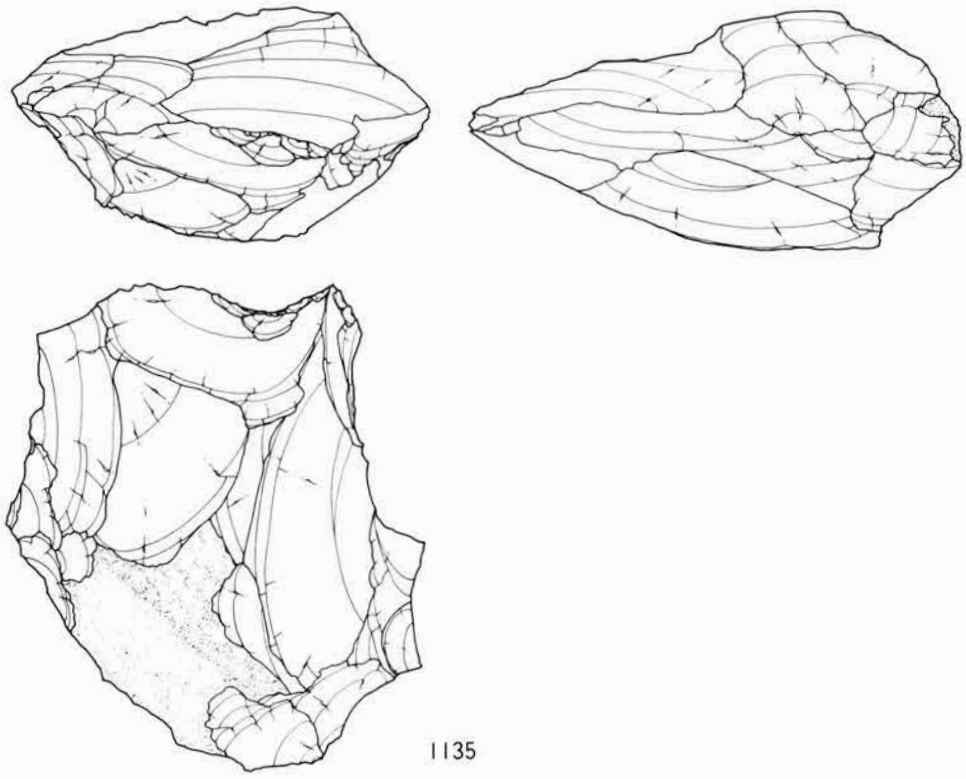
No.	出土区	層　位	石　材	全長（mm）	全幅（mm）	全厚（mm）	質量（g）	折損	遺物番号
1	15t	Ⅲ	安山岩	99	49	37.5	332		1127
2	15u	Ⅲ	安山岩質凝灰岩	(113)	48	30.0	(265)	c	1124
3	18r	Ⅲ	閃緑ひん岩	(98)	48	32.6	(220)	d	1125
4	18s	Ⅲ	アプライト	48	11	8.2	7		1121
5	19q	Ⅲb	安山岩質凝灰岩	(77)	(62)	(37.6)	(233)	b	
6	19q	Ⅲb	アプライト	(66)	(45)	(31.4)	(104)	a	
7	19t	Ⅰ	安山岩質凝灰岩	119	60	32.6	317		1126
8	20s	Ⅲ	閃緑岩	(118)	49	35.0	(309)	c	1123
9	20t	Ⅲ	玄武岩	(93)	(52)	(34.0)	(249)	a	
10	20u	Ⅲ	玄武岩	(81)	(43)	(28.5)	(160)	a	1128
11	21t	Ⅲ	蛇紋岩	(47)	34	(13.8)	(35)	c	1122
12	31C	Ⅳ	安山岩	62	39	15.3	58		1120
13	32B	Ⅰ	花こう閃緑斑岩	(99)	(61)	(37.8)	(240)	b	
14	32B	Ⅳ	泥岩	(87)	(58)	(32.3)	(157)	b	
15	表採		デイサイト	(48)	(50)	(31.8)	(114)	a	

(7)　石核（コア）（第87・88図　1129～1135　図版50）

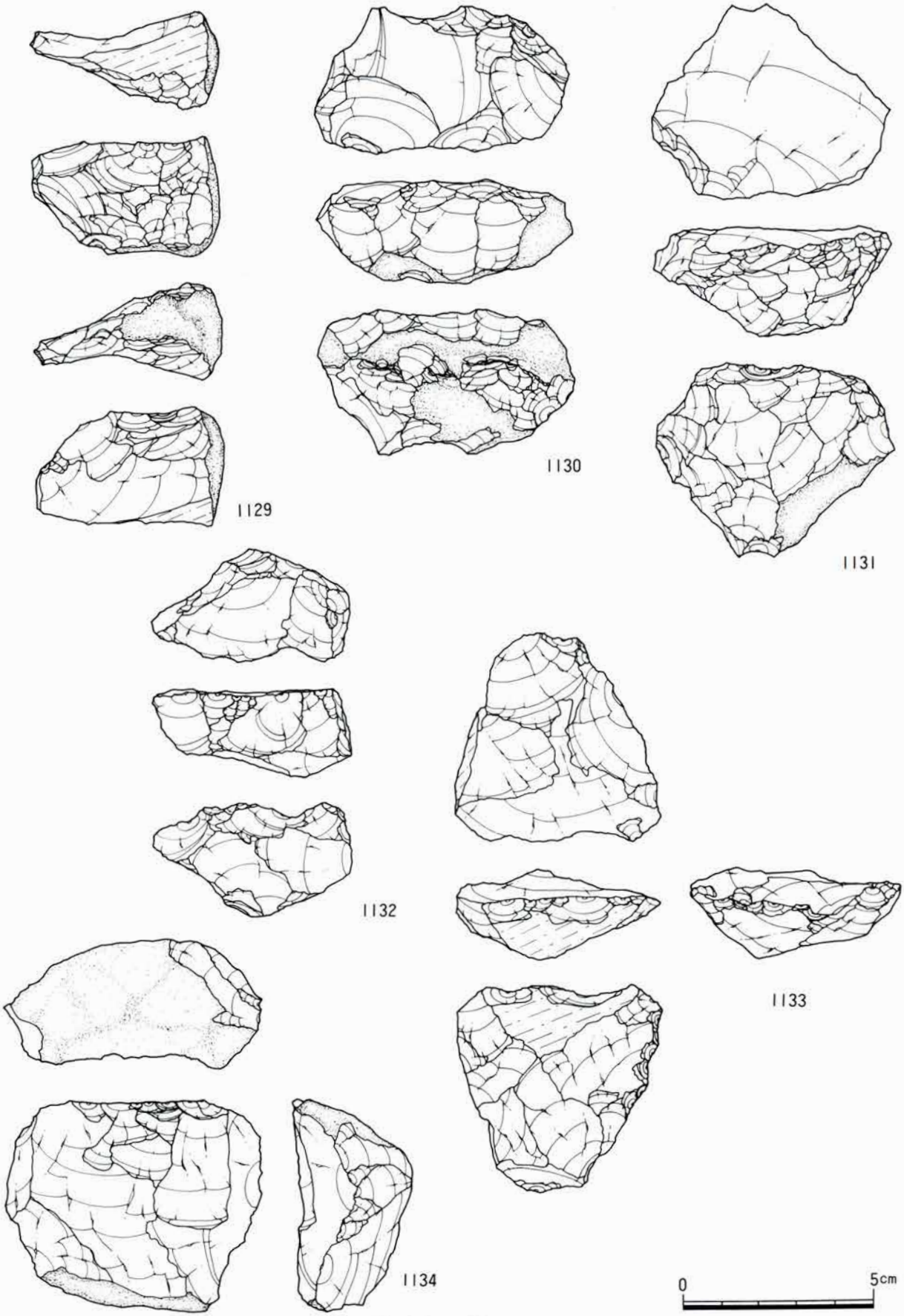
56点出土した。遺構からの出土はなく、全て包含層からの出土で上の段から53点、下の段から3点と上の段からの出土が多い。石材はほとんどがチャートで、下の段から出土した1点（1135）のみサヌカイトである。このサヌカイトの石核と近辺より出土したサヌカイトの剥片やスクレイパーとの接合を試みたが、接合は出来なかった。なお、サヌカイト製の石器の出土状況は第40表の通りである。

(8)　2次加工のある剥片（ＲＦ）（第89図　1136～1142　図版53）

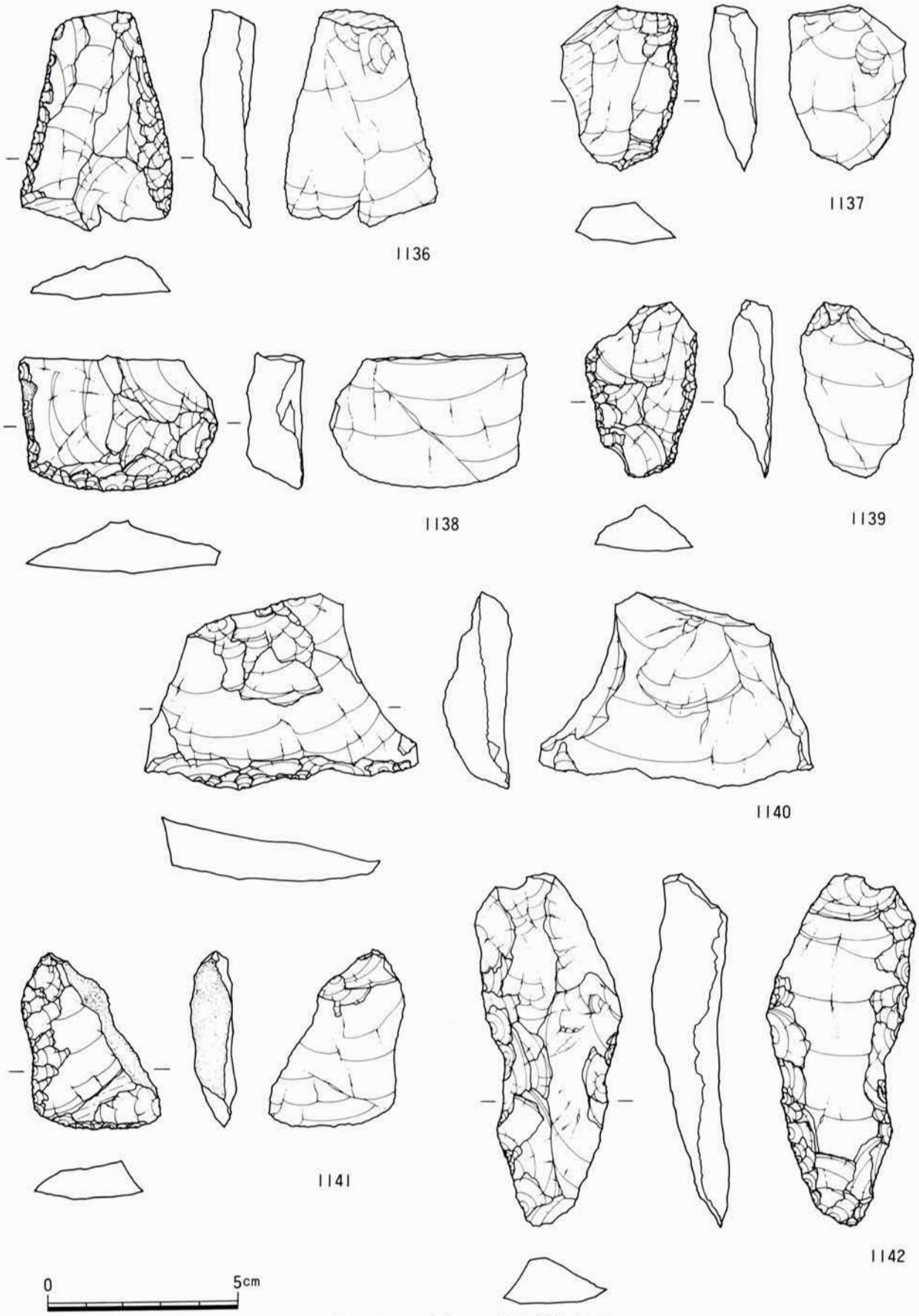
剥片の側縁に連続的な剥離痕を有するものを2次加工のある剥片（ＲＦ）とした。合計99点出土した。遺構より3点、包含層より96点出土し、上の段より81点、下の段より14点、表採1点と上の段からの出土が多い。石材はチャートがほとんどで、下の段よりサヌカイト製のものが2点、下呂石製のものが1点出土している。



第87図　石核(1)



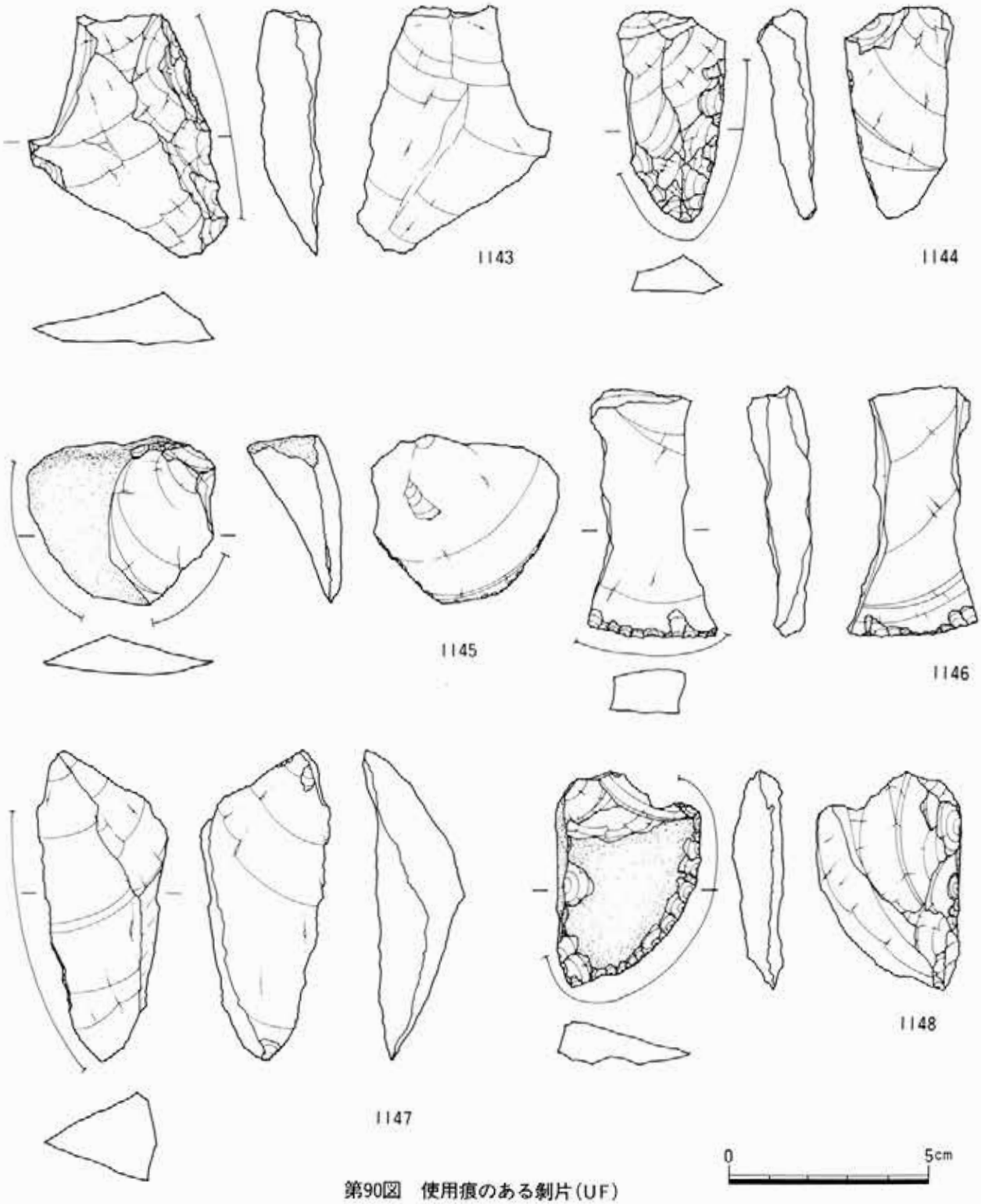
第88図　石核(2)



第89図　2次加工のある剥片(RF)

(9)　使用痕のある剥片（ＵＦ）（第90図　1143～1148　図版53）

剥片の側縁に大小の微細な剥離痕を有するものを使用痕のある剥片（ＵＦ）とした。合計111点出土した。遺構より４点包含層より107点出土し、上の段より96点、下の段より10点、表採１点と上の段からの出土が多い。石材はチャートがほとんどで、チャート以外の石材は上の段からの出土の１点（流紋岩質溶岩）のみであった。



第90図　使用痕のある剥片（UF）

(10)　剥片・砕片

出土総数は、4,228点(23.331kg)である。遺構からの出土15点、包含層からの出土4,213点で、上の段から3,395点(19.458kg)、下の段から795点(3.672kg)と上の段からの出土が多かった。石材は、チャートがほとんどであるがサヌカイト・砂岩・下呂石・泥岩・安山岩・石英・流紋岩質溶岩・アプライトもみられる。このうち、サヌカイトや下呂石の多くは、下の段から出土しており、特にサヌカイトの剥片・砕片は92点すべて（含遺構分６点)が下の段からの出土である（第23表)。

第23表　剥片・砕片の石材別一覧表

	数	質量(g)	チャート		サヌカイト		下呂石		砂岩		流紋石質溶岩		泥岩		安山岩		石英		アプライト	
			数	質量(g)	数	質量(g)	数	質量(g)	数	質量(g)	数	質量(g)	数	質量(g)	数	質量(g)	数	質量(g)	数	質量(g)
上の段	3395	19456	3366 (99.1)	19002 (97.7)	0	0	9 (0.2)	24 (0.1)	9 (0.2)	265 (1.4)	6 (0.1)	37 (0.2)	4 (0.1)	121 (0.6)	0	0	0	0	1	7
下の段	795	3672	650 (81.8)	2609 (71.1)	86 (10.8)	665 (18.1)	42 (5.3)	116 (3.2)	3 (0.4)	183 (5.0)	1 (0.1)	2 (0.5)	10 (1.3)	70 (1.9)	1 (0.1)	22 (0.6)	2 (0.2)	5 (0.1)	0	0
表採	23	142	23	142	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
遺構分	15	61	8	45	6	13	1	2	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
計	4228	23331	4047 (95.6)	21798 (93.4)	92 (2.2)	678 (2.9)	52 (1.2)	142 (0.6)	12 (0.3)	448 (1.9)	7 (0.2)	39 (0.2)	14 (0.3)	191 (0.8)	1 (0.0)	22 (0.0)	2 (0.0)	5 (0.0)	1 (0.0)	7 (0.0)

(11)　打欠石錘（第92図　1149～1163　図版54）

27点出土している。遺構より２点（ＳＫ９より１点、ＳＫ20より１点)、包含層より25点である。石材は、泥岩13点(48.1%)、砂岩11点(41.0%)、安山岩２点(7.4%)、花こう閃緑斑岩１点(3.7%)である。

27点中４点が欠損しておりこのうち３点は横割である（第91図・第24表)。「糸巻きの帯状痕跡」[1] は７点(25.9%)にみられ、片面にみられるもの５点、両面にみられるもの２点である。

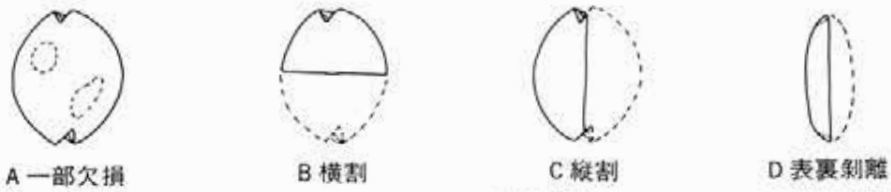
打欠石錘の質量分布をみると、20～40ｇのものが多く、平均質量は34.5ｇである。なお、(1163)は欠損品で横割しているが、質量が154.9ｇとかなり大きなものである。

打欠石錘は、上の段の特に33ｚグリッドより多数出土している。このグリッドからは、撚糸文の施された中期後葉の土器が伴出している。下の段からは、１点（1163）のみの出土である。

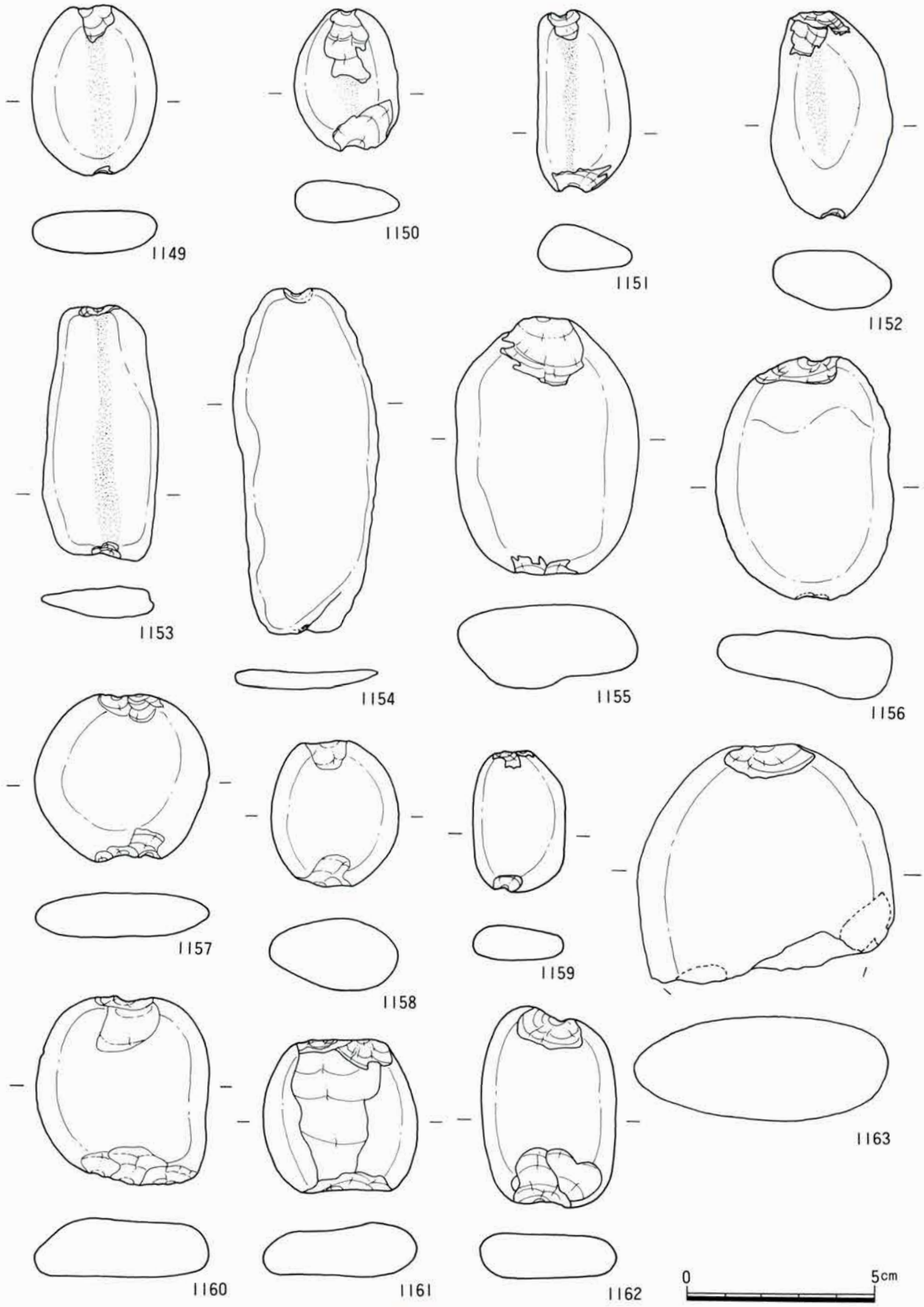
1）石錘の表面は摩滅するが、長軸中央部に摩滅を受けない部分が帯状に残る。これを吉田英敏氏は「糸巻きの帯状痕跡」と称している。(吉田　1989)

第24表　石錘欠損状態別表

	A	B	C	D	A・B	B・D	計
切目石錘	22	9	5	3	1	1	41
打欠石錘	1	2			1		4



第91図　石錘欠損状態模式図


1149
1150
1151
1152
1153
1154
1155
1156
1157
1158
1159
1160
1161
1162
1163
0
5cm

第92図　打欠石錘

⑿　切目石錘（第94・95図　1164～1193　図版55・56）

94点出土している。遺構から1点（P47より1点）、包含層より93点である。

石材は、砂岩55点（59.1%）、泥岩26点（26.9%）、アプライト4点（4.4%）、花こう閃緑斑岩3点（3.3%）、安山岩・はんれい岩・凝灰岩・閃緑岩が各1点（1.1%）で砂岩が過半数を占める。

94点中41点は欠損しており、このうちA．一部欠損（52.5%）、B．横割（22.5%）が多いが、C．縦割（12.5%）やD．表裏剥離（7.5%）もみられる（第91図・第24表）。

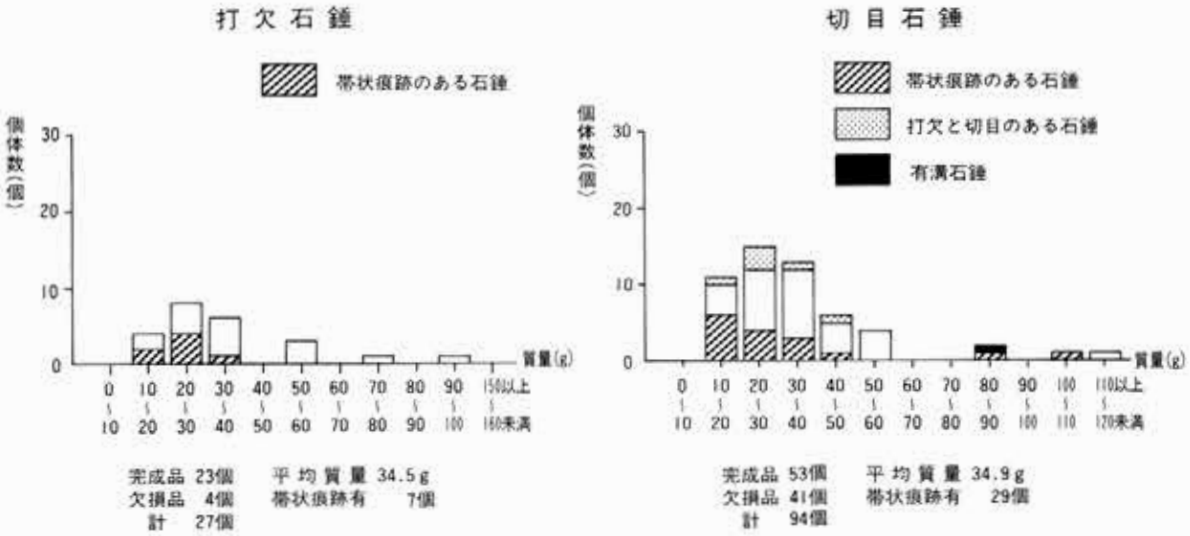
また「糸巻きの帯状痕跡」についてみてみると、29点（31.2%）にみられ、このうち片面にみられるもの16点、両面にみられるもの13点である。

切目石錘の質量分布をみてみると、10～40gのものがほとんどで、平均質量は34.7gと、打欠石錘の平均質量（34.5g）とほぼ同じである。[1] 中には、105.5g、111.4gという重いものもあり、他との用途の違いも考えられる。なお、打ち欠きと切り目の両方がみられるものについては、切目石錘に含めた。打ち欠きと切り目の両方がみられる石錘の平均質量は、41.1gである。

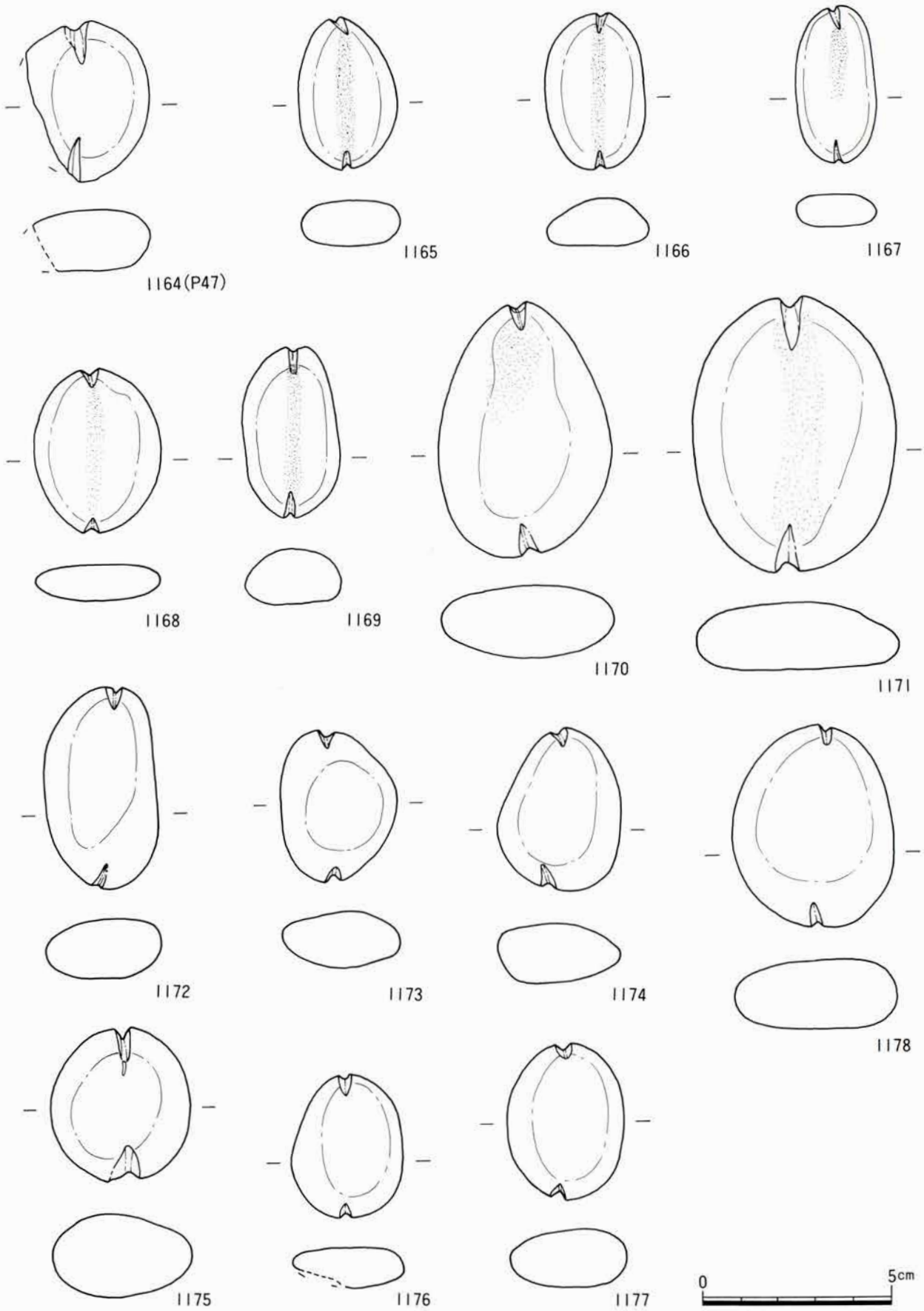
有溝石錘が1点(1193)出土している。質量は86.4gと切目石錘の平均質量に比べ、かなり重い(2.5倍)。

出土地点としては、打欠石錘と同様に上の段の33zグリッドより多数出土している（このグリッドからは、撚糸文の施された中期後葉の土器が伴出している)。なお、後・晩期の土器の出土した下の段からも17点の切目石錘が出土しており、このうちの1点(1193)は有溝石錘である。

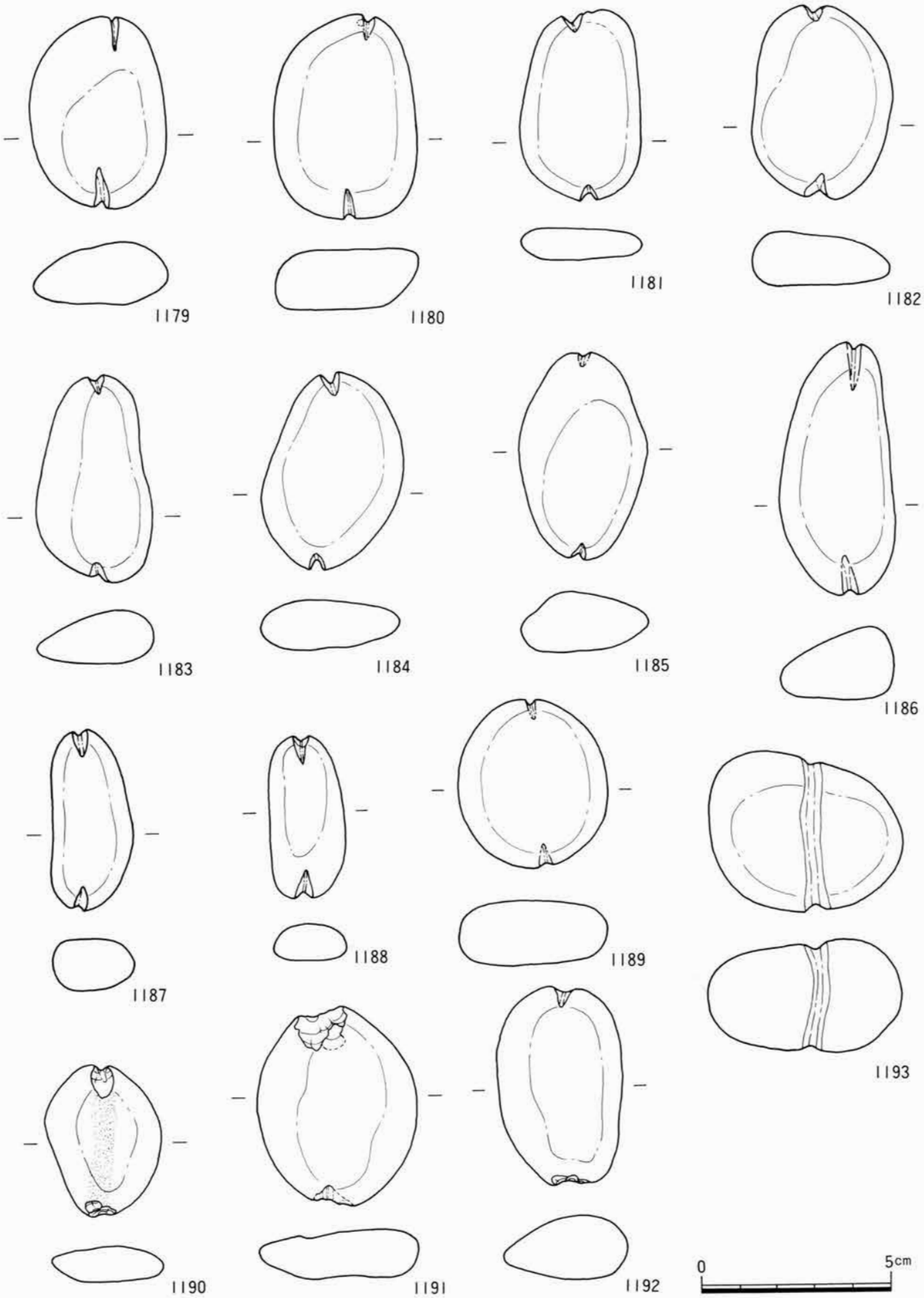
1）山手宮前遺跡（第8集）では、切目石錘の平均質量(22.5g)のほうが、打欠石錘のそれ(40.4g)よりもかなり軽量であった。



第93図　石錘の質量分布表


1164(P47)
1165
1166
1167
1168
1169
1170
1171
1172
1173
1174
1178
1175
1176
1177
0
5cm

第94図　切目石錘(1)



第95図　切目石錘(2)、有溝石錘

第25表　切目石錘計測表(1)

No.	出土区	層位	石　材	全長（mm）	全幅（mm）	全厚（mm）	質量（g）	欠損	備　考	遺物番号
1	P47		泥岩	43	(32)	16.5	29.9	C		1164
2	16t	I	泥岩	73	54	17.9	105.5		帯状痕跡（両面）	1171
3	16t	Ⅲ	花こう閃緑斑岩	53	43	18.3	54.8	A		1178
4	18u	Ⅲ	砂岩	32	24	13.2	13.3			
5	18r	Ⅲ	砂岩	(63)	(32)	13.0	32.7	A・B		
6	19q	I		38	26	9.7	11.5		帯状痕跡（片面）	
7	20u	I	砂岩	56	32	14.0	32.9			1183
8	20s	Ⅲ	泥岩	(45)	37	17.7	33.0	B		
9	20r	I	安山岩	68	30	18.5	56.1			1186
10	20r	Ⅲ	砂岩	(32)	38	12.5	18.1	B		
11	20r	Ⅲ	砂岩	52	36	16.2	44.2			1179
12	21u	Ⅲ	泥岩	43	29	13.3	20.5	A		
13	21u	Ⅲ	砂岩	44	20	9.4	13.1			1188
14	21t	I	砂岩	50	48	21.5	69.6	A		
15	21t	Ⅲ	泥岩	(51)	(31)	(15.5)	28.9	C		
16	22u	Ⅲ	砂岩	40	28	11.4	18.2	A	帯状痕跡（片面）	
17	29A	I	泥岩	48	40	19.6	43.3			
18	29D	I	砂岩	47	38	12.1	29.9	A	帯状痕跡（片面）	
19	29D	I	砂岩	40	38	11.2	20.3	A		
20	30A	Ⅱ	泥岩	37	36	(12.3)	21.4	D	帯状痕跡（片面）	
21	30A	Ⅱ	砂岩	46	28	12.8	23.7			
22	30B	Ⅲ	泥岩	54	27	14.1	30.8	A	帯状痕跡（両面）	
23	30B	Ⅲ	砂岩	43	33	9.7	20.5		帯状痕跡（片面）	1168
24	30C	I	砂岩	(65)	(55)	20.3	80.1	B		
25	30D	Ⅱ	砂岩	42	32	16.5	30.6			1177
26	30D	Ⅱ	アプライト	46	38	13.1	25.6			
27	30D	Ⅱ	アプライト	47	32	17.0	28.0	A		
28	30D	Ⅱ	砂岩	51	39	15.6	41.7	A		
29	30D	Ⅱ	砂岩	48	38	18.8	36.6			
30	30D	Ⅱ	泥岩	52	37	13.3	31.0			1184
31	30D	Ⅱ	泥岩	48	43	19.1	50.5			
32	30D	Ⅱ	泥岩	41	32	15.0	22.0			1173
33	30D	Ⅱ	花こう閃緑斑岩	61	41	13.3	37.8			
34	30D	Ⅱ	泥岩	51	35	17.9	40.2			
35	31y	I	砂岩	46	29	16.5	26.5	B		
36	31y	I	（ひん岩）	(37)	31	16.3	17.1	B		
37	31A	Ⅱ	砂岩	41	27	(7.0)	9.9	D	帯状痕跡（片面）	
38	31A	Ⅲ	砂岩	47	26	11.9	18.4	A		
39	31B	I	砂岩	48	22	13.5	20.1			1187
40	31C	Ⅱ	砂岩	(43)	33	11.8	23.5	A		
41	32y	I	砂岩	56	35	11.0	33.3			
42	32C	Ⅱ	砂岩	42	26	14.7	19.5			
43	32C	Ⅱ	泥岩（泥質混在岩）	38	29	17.5	22.5		帯状痕跡（両面）	
44	32C	Ⅳ	砂岩	47	25	11.1	20.5	A	帯状痕跡（片面）	
45	33z		砂岩	54	38	15.4	51.2			1180
46	33z	Ⅲ	砂岩	45	34	11.0	27.8			
47	33z	Ⅲ	砂岩	43	34	15.8	27.6			1174
48	33z	Ⅲ	泥岩（泥質混在岩）	49	29	14.0	26.1	A	帯状痕跡（片面）	
49	33z	Ⅲ	泥岩	49	28	11.9	23.5	A		
50	33z	Ⅲ	泥岩	(31)	26	(11.0)	9.7	B		
51	33z	Ⅲ	砂岩	53	31	15.5	33.8			1172
52	33z	Ⅲ	閃緑岩	68	47	19.1	86.2		帯状痕跡（片面）	1170
53	33z	Ⅳ	砂岩	42	28	12.5	19.9		帯状痕跡（両面）	1166
54	33z	Ⅳ	砂岩	49	32	16.3	35.8		帯状痕跡（両面）	
55	33z	Ⅳ	アプライト	(62)	33	(15.7)	40.1	B		
56	33z	Ⅳ	砂岩	52	41	(13.2)	31.6	A		
57	33z	Ⅳ	砂岩	(29)	(25)	(14.4)	(11.2)	C		
58	33z	Ⅳ	泥岩	(38)	(28)	13.0	14.4	C		
59	33z	Ⅳ	砂岩	38	30	(11.6)	16.7	A		1176
60	33z	Ⅳ	砂岩	41	21	8.6	11.9		帯状痕跡（片面）	1167
61	33z	Ⅳ	砂岩	40	31	11.4	17.8		帯状痕跡（片面）	
62	33z	Ⅳ	砂岩	51	33	8.7	23.3		帯状痕跡（両面）	1181
63	33z	Ⅳ	砂岩	48	29	11.5	21.5			
64	33z	Ⅳ	泥岩	37	32	11.9	19.8		帯状痕跡（両面）	
65	33z	Ⅳ	砂岩	43	(26)	11.7	16.5	C	帯状痕跡（両面）	
66	33z	Ⅳ	泥岩	55	37	15.4	38.6			
67	33z	Ⅳ	砂岩	60	23	13.4	21.4	A		
68	33A	Ⅲ	はんれい岩	56	34	15.6	34.9	A		1185
69	33B	I	砂岩	53	38	11.8	32.5		帯状痕跡（両面）	

第26表　切目石錘計測表(2)

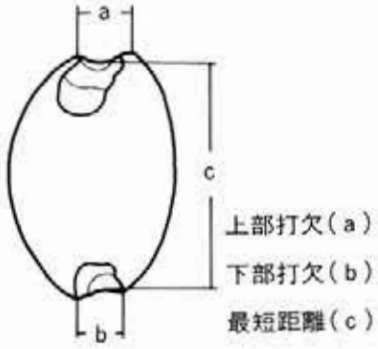
No.	出土区	層位	石材	全長（mm）	全幅（mm）	全厚（mm）	質量（g）	欠損	備考	遺物番号
70	33C	Ⅰ	砂岩	45	32	10.7	17.1		帯状痕跡（片面）	1169
71	33C	Ⅱ	砂岩	45	26	14.7	23.8	A		
72	34y	Ⅲ	泥岩	(44)	32	13.5	23.1	B		
73	34z	Ⅱ	砂岩	(40)	30	12.0	16.4	B	帯状痕跡（片面）	
74	34z	Ⅲ	砂岩	61	32	15.7	37.8	A		
75	34z	Ⅲ	凝灰岩	49	36	13.7	28.0			
76	34z	Ⅲ	アプライト	(43)	34	10.7	22.7	B		
77	34z	Ⅲ	泥岩	40	27	12.8	18.8		帯状痕跡（両面）	1165
78	34z	Ⅲ	花こう閃緑斑岩	41	37	22.6	40.3	A		1175
79	34z	Ⅲ	砂岩	44	34	14.0	28.3			
80	34A	Ⅰ	砂岩	56	38	19.1	48.8		帯状痕跡（片面）	
81	35z	Ⅱ	泥岩	70	31	(11.9)	34.1	(D)	帯状痕跡（片面）	
82	35z	Ⅲ	砂岩	52	36	14.3	39.3			1182
83	35z	Ⅲ	砂岩	42	38	15.9	35.5			
84	16s	Ⅱ	砂岩	85	62	15.5	111.4			
85	22u	Ⅱ	泥岩	60	36	7.1	25.6			
86	30D	Ⅱ	泥岩	(45)	(40)	(13.3)	27.5	A		
87	31C	Ⅱ	砂岩	53	43	14.8	39.8		帯状痕跡（片面） 切目＋打欠	1191
88	31y	Ⅰ	砂岩	47	32	11.3	21.1		帯状痕跡（両面） 打欠の後に切目	
89	33z	Ⅳ	砂岩	55	34	17.1	41.3		切目＋打欠	1192
90	33z	Ⅳ	泥岩 （ホルンフェルス化）	42	40	12.4	27.4		帯状痕跡（両面） 切目＋打欠	
91	33z	Ⅳ	砂岩 （ホルンフェルス化）	41	32	9.5	15.7		帯状痕跡（両面） 切目＋打欠	1190
92	16s	Ⅰ	砂岩	43	54	30.4	86.4		有溝石錘	1193
93	表採		泥岩	(66)	(52)	(21.0)	75.6	B・D		
94	表採		砂岩	45	40	17.2	44.7			1189

第27表　打欠石錘計測表

No	出土区	層位	石　材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	質量(g)	欠損	C(mm)	a(mm)	b(mm)	備考	遺物番号
1	SK9		泥岩（ホルンフェルス化）	(42)	(25)	(11.8)	12.9	B		6			
2	SK20		砂岩	46	45	19.0	52.3		42	11	13		
3	19r	N	花こう閃緑斑岩	(64)	(69)	27.2	154.9	A・B		14			1163
4	30D	Ⅱ	泥岩	69	49	21.8	97.4		68	10	18		1155
5	30D	Ⅱ	砂岩	40	35	20.2	34.6		39	8	10		1158
6	31C	Ⅱ	砂岩	54	45	20.4	57.8		53	5	5		
7	32B	Ⅱ	泥岩	45	47	12.0	39.7		43	10	14		1157
8	32C	Ⅱ	泥岩	46	34	11.3	25.8		44	8	5	帯状痕跡(片面)	1149
9	33y	Ⅲ	砂岩	49	29	12.6	23.0		48	6	8	帯状痕跡(片面)	
10	33y	Ⅲ	砂岩	53	37	11.9	38.1		48	8	9		1162
11	33z	Ⅳ	泥岩(ホルンフェルス化)	48	26	13.0	22.0		45	4	6	帯状痕跡(片面)	1151
12	33z	Ⅲ	泥岩	68	31	8.1	22.2		65	6	7	帯状痕跡(片面)	1153
13	33z	Ⅲ	泥岩	64	47	17.5	72.7		62	9	6		1156
14	33z	Ⅳ	泥岩	44	29	12.1	21.2		42	6	9		
15	33z	Ⅲ	安山岩	42	41	14.1	30.5		40	22	24		1161
16	33z	Ⅳ	砂岩（ホルンフェルス化）	47	36	17.4	34.0		47	12	11		
17	33z	Ⅲ	泥岩	38	28	10.5	15.2		36	6	6	帯状痕跡(片面)	1150
18	33z	Ⅳ	砂岩	50	31	14.5	28.0		48	7	6		
19	33z	Ⅳ	砂岩	45	26	9.2	14.1		43	5	6		
20	33z	Ⅳ	砂岩	(42)	32	13.8	22.5	A			8		
21	33z	Ⅲ	泥岩	36	32	9.4	15.0		34	7	7	帯状痕跡(両面)	
22	33z	Ⅳ	砂岩	48	42	11.7	29.1		46	5	6		
23	33z	Ⅳ	泥岩	55	32	15.8	34.1		54	8	7	帯状痕跡(両面)	1152
24	33z	Ⅲ	安山岩	38	25	9.6	12.6		36	7	6		1159
25	33z	Ⅳ	泥岩	(59)	34	6.1	17.6	B		6			
26	34z	Ⅲ	泥岩	93	38	5.1	23.9		89	5	3		1154
27	35z	Ⅱ	砂岩	52	47	15.3	50.6		49	10	20		1160

打欠石錘（礫石錘）の計測部位については、渡辺　誠氏の提唱を参考とした。

1）渡辺　誠 1991「石錘ピット出土の礫石錘について」「垣内遺跡発掘調査報告書」（高山市教育委員会）



第96図　打欠石錘計測部位説明図

⒀　凹石類（第103～110図　1194～1246　図版57～65）

主に円礫を素材とし、その表面に使用痕としての凹みや敲打痕、叩き痕[1]、磨面などの観察できる石器を凹石類とした。これらの石器は従来、その使用痕により、凹石、磨石、叩石と分類されてきたが、複数の使用痕のみられるものも多く、複数の機能を併せもつものも多いと考えられる。そこで、ここでは凹石類として大きくひとくくりにした上で、形態、質量、使用痕、石材、折損等により分類し、最後に出土地点による様相のちがいを通して時期差についても考えていきたい。なお、凹石類は全部で163点出土し、本遺跡では石鏃に次いで数多く出土した。遺構から5点（P139・P142・P178より各1点、P150より2点）、包含層から158点（含表採4点）出土している。ここではこのうちの53点(1194～1246)を実測した。

①　形態による分類

まずはじめに形態による分類を行う。ここでは、縦軸に長さ／幅、横軸に厚さ／幅を表示したグラフによって形のまとまりを求めていく。本遺跡で出土した凹石類についてこの方法でグラフを作成したものが第97図で、これを表にしたものが第28表である。図中のドットの分布より次の5群に分類した。

1群　球状の礫
　グラフの下の方右隅に位置するグループで、おおむね、縦の数字が1.15未満、横の数字が0.5以上となる。

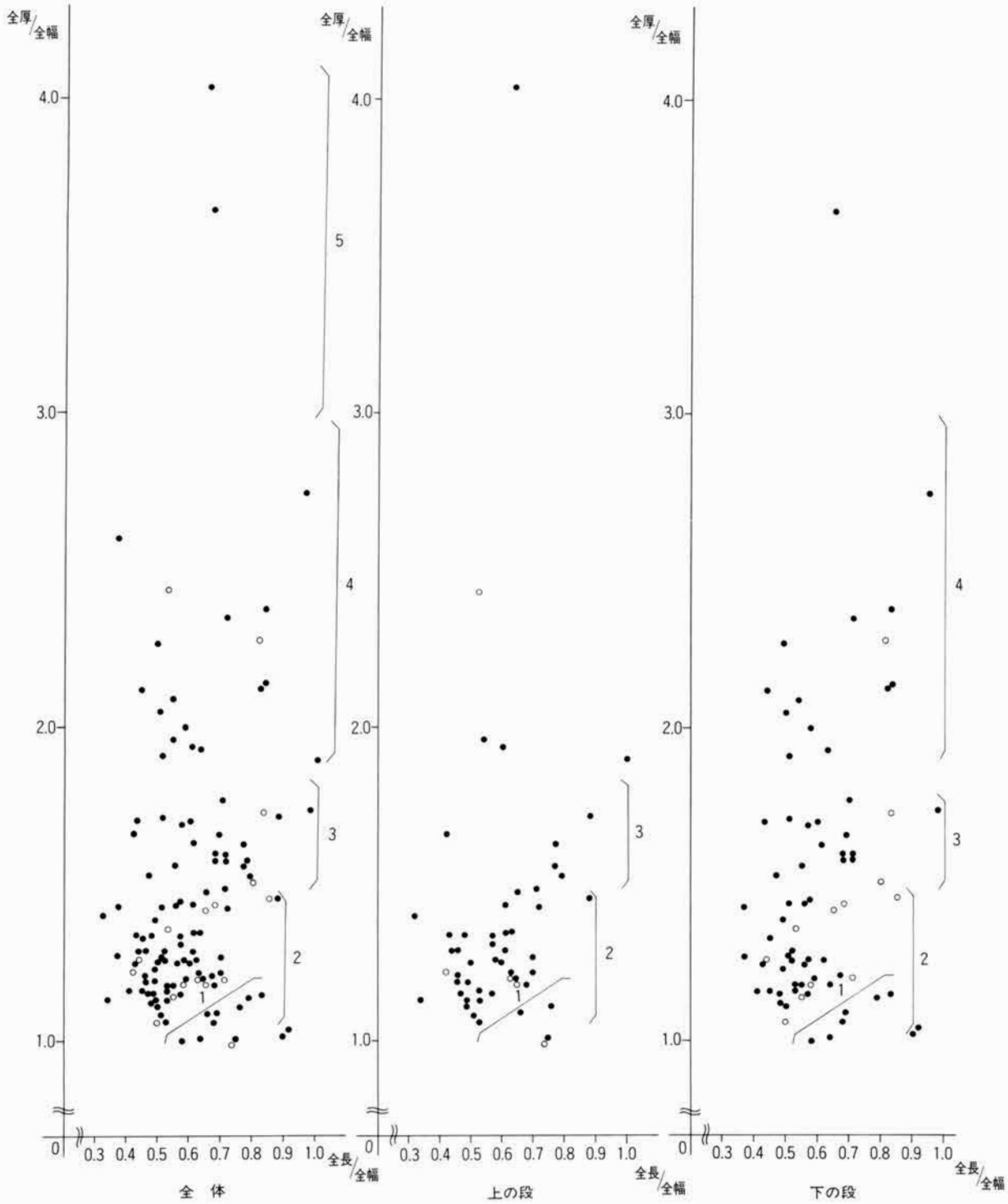
2群　円礫
　グラフ中、縦の数字が1.5未満となるでグループで1群を除いたもの。

3群　楕円礫
　グラフ中、縦の数字が1.5以上、1.90未満 となるグループ。

4群　長楕円礫
　グラフ中、縦の数字が1.90以上、3.00未満となるグループ。

5群　棒状の礫
　グラフ中、縦の数字が3.00以上となる、グラフの一番上に位置するグループ。

この分類によると163点のうち折損等による形態の不明なものを除いた127点中、1群11点(1194・1210・1211～1215)、2群75点(1195・1202・1208・1216～1228・1232・1233)、3群22点(1203・1209・1229～1231・1234～1236)、4群17点(1204～1206・1237～1245)、5群2点(1207・1246)となり、2群の円礫の多いのが目につく。2群の円礫にはいわゆる石鹸形のものが多い。3群の楕円礫、4群の長楕円礫も比較的多数みられた。



第97図　凹石類の形態による分類　○は1000g 以上

第28表　凹石類の形態による分類個数　　（　）は%

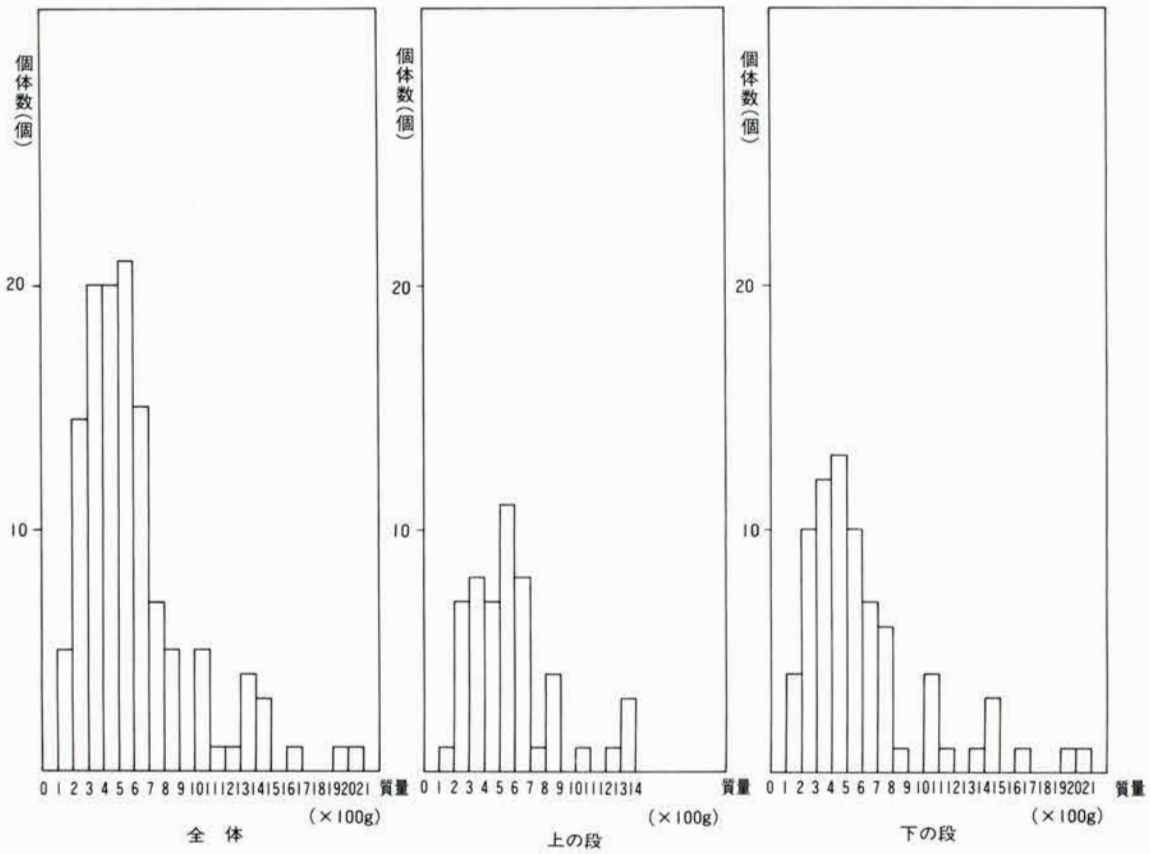
	1　群	2　群	3　群	4　群	5　群	計
上　の　段	3（5.8）	39（75.0）	6（11.5）	3（5.8）	1（1.9）	52
下　の　段	8（10.7）	36（48.0）	16（21.3）	14（18.7）	1（1.3）	75
計	11（8.7）	75（59.1）	22（29.3）	17（22.7）	2（1.6）	127

② 質量について

次に①で分類したそれぞれのまとまりの中で質量分布を検討する。即ち、1～5群の凹石類の質量ごとの数を表にしたものが第29表でグラフにしたものが第98図である。これをみると、①で多かった2群の中でも201～700 gのものの割合が多く、この傾向は他の群にもあてはまりそうである。この質量は、片手にもって作業する際に丁度よい位の質量といえる。一方で1000 g以上のものもみられ、中には2000 g以上のものも1点(1222)みられる。これらは手に持つというよりは、下に置いたまま台として利用したと考えたいが、(1222)には側面に磨面もみられることから手に持って使用したとも考えられる。

第29表　凹石類の質量分布表

	1群	2群	3群	4群	5群	計
1～ 100 g		1				1
101～ 200 g	3	2				5
201～ 300 g	1	8	3	5		17
301～ 400 g	2	11	4	3		20
401～ 500 g	1	13	4	2		20
501～ 600 g	1	13	4	1	2	21
601～ 700 g		11	2	2		15
701～ 800 g	2	2	3			7
801～ 900 g		3		2		5
901～1000 g						
1001～1100 g		3	2			5
1101～1200 g		1				1
1201～1300 g	1					1
1301～1400 g		3		1		4
1401～1500 g		2		1		3
1501～1600 g						
1601～1700 g		1				1
1701～1800 g						
1801～1900 g						
1901～2000 g		1				1
2001～2100 g		1				1
計	11	75	22	17	2	127



第98図　凹石類の質量分布図

③　使用痕による分類

使用痕としては、はじめにも述べたように凹み、磨面、敲打痕や叩き痕がみられるが、これらが単独でみられるものと、複数認められるもの、即ち、凹み＋磨、凹み＋敲打、凹み＋磨＋敲打、磨＋敲打の認められるものとがある。（なおここでは叩き痕も敲打痕に含めた）。こうした使用痕と①形態、②質量との関係を表にしたのが第30表である。これをみると、2群の1000ｇ未満のもの、即ち片手に持てる質量の石鹸形の円礫で使用痕として凹みのみられるものが多数存在し、2群の1000ｇ未満のもので凹み＋磨の使用痕のみられるものも12点存在する。3群・4群の1000ｇ未満のもの、即ち、片手に持てる質量の楕円礫や長楕円礫で凹みのみられるものも比較的多くみられる。

第30表　凹石類の使用痕による分類

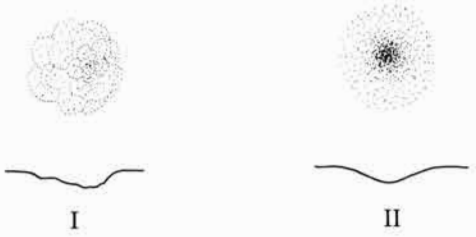
使用痕＼形態		1群		2群		3群		4群		5群		計	
		A	B	A	B	A	B	A	B	A	B		
凹み	上	4	1	25	2	3			1			36	79
	下	1		15	5	9	2	10		1		43	
凹＋磨	上	1		4		2						7	20
	下			8	2	1		2				13	
凹＋敲	上			2	1	1		1		1		6	14
	下	2		2	1	2		1				8	
凹＋磨＋敲	上											0	4
	下	1		2					1			4	
磨痕	上			4								4	7
	下	1			2							3	
敲打痕	上											0	1
	下					1						1	
磨＋敲	上							1				1	2
	下					1						1	
計		10	1	62	13	20	2	15	2	2	0		127
		11		75		22		17		2			

＊　Aは1000ｇ未満、Bは1000ｇ以上のもの

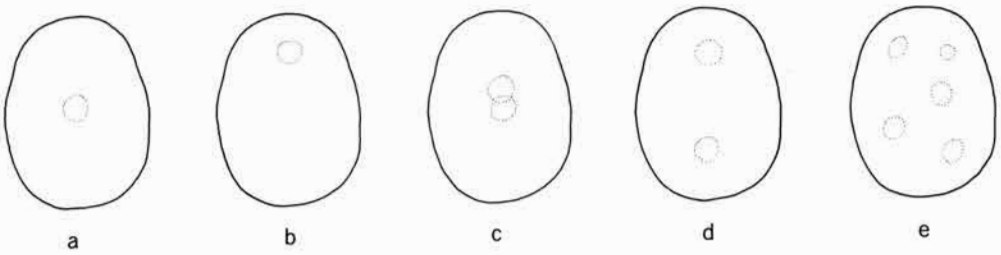
ア．凹みによる分類

凹みのみられる148点のうち、凹みが片面にみられるものは83点（56.0%）、両面にみられるものは61点（41.2%）あり、更に3面にみられるもの（1242）と4面にみられるもの（1236・1238）が各々2点（1.4%）あった。これらの凹みをその形状と凹みのみられる各々の面の中での位置により第99図のように分類した。

凹みの形状による分類（実測図での凹みの表現は、基本的にこの模式図に合わせた）



凹みの位置による分類



第99図　凹石類の凹みの形状と位置による分類

・凹みの形状による分類（実測図での凹みの表現は、基本的にこの模式図に合わせた）

Ⅰ群：細かい敲打痕が集中して凹みを作っているもの。

Ⅱ群：すり鉢状に凹みができているもの。（敲打によるものでなく、磨られたものと思われる。）

・凹みの位置による分類

a類：中心に凹みが1つあるもの

b類：中心からずれて凹みが1つあるもの

c類：2つ以上の凹みが中心付近で重なってあるもの

d類：2つ以上の凹みが中心付近で離れてあるもの

e類：3つ以上の凹みが不規則にあるもの

f類：折損により凹みの数が不明なもの

第31表　凹みの形状と位置による分類一覧表

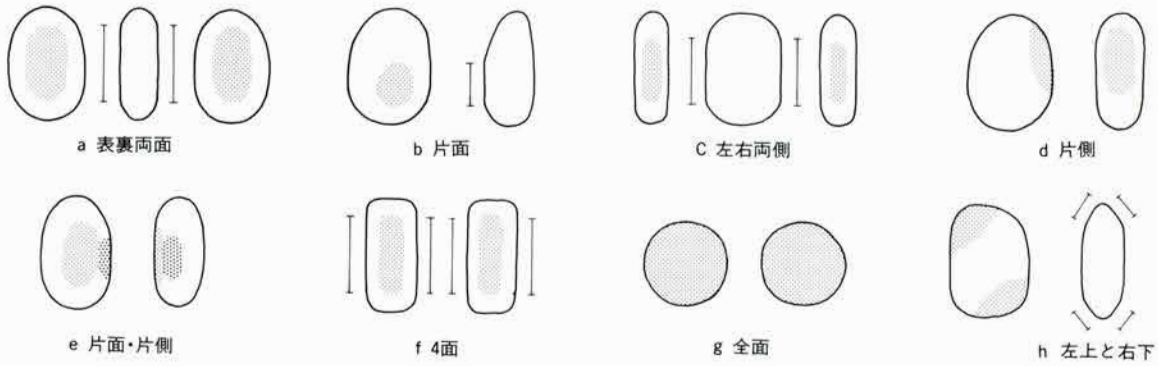
形態＼凹み	1群		2群		3群		4群		5群		計
	上	下	上	下	上	下	上	下	上	下	
Ⅰa	4	5	19	19	2	4	1	2			56
Ⅰb		1	5	5	3	3	1	2	1	2	23
Ⅰc	1	1	7	8		5					22
Ⅰd			5	9	2	7	2	7			32
Ⅰe			3	6				8			17
Ⅰ計	5	7	39	47	7	19	4	19	1	2	150
Ⅱa			3	1	1						5
Ⅱb			3		1			1			5
Ⅱc		2	2			1					5
Ⅱd				2		2		1	1		6
Ⅱe				1				1			2
Ⅱ計	0	2	8	4	2	3	0	3	1	0	23
計	5	9	47	51	9	22	4	22	2	2	173

＊　1つの石器に複数の凹みの見られる場合は、各々を1点とした。

これを表にしたものが第31表である。この表より凹みの形状としては、Ⅰ群 とした細かい敲打痕が集中して凹みをつくっているものが150点とほとんどで、Ⅱ群としたすり鉢状に凹みができているものは23点と少ない。この中で2群の円礫にすり鉢状の凹みが1つみられるもの（Ⅱa、Ⅱb）は上の段に多くみられ、古い様相を呈する。1つの面に凹みの数が1つのもの（a類とb類）が89点、2つのもの（c類とd類）が65点、3つ以上のもの19点で、1つのものが多いが2つのものも多数みられる。凹みが2つみられるものでは、2つの凹みが重なってあるもの（c類）は1～3群にみられるのに対して2つの凹みが離れてあるもの（d類）は2～5群にみられ長い礫に2つの凹みが離れるものが多くみられるようである。

イ．磨面による分類

磨面の見られる位置により、第100図のように分類した。



第100図　凹石類の磨面による分類

a類：磨面が表・裏両面にみられるもの
b類：磨面が片面(の一部)にみられるもの
c類：磨面が左右両側にみられるもの
d類：磨面が片側にみられるもの
e類：磨面が片面と片側(隣り合わせの面)にみられるもの
f類：磨面が四面にみられるもの
g類：磨面が全面にみられるもの
h類：磨面が表面と裏面の左上と右下に斜めに見られるもの

第32表　磨面の位置による分類一覧表

	a	b	c	d	e	f	g	h	計
上の段	9	2	1						12
下の段	13	2	1	3	2	3	2	3	41

これを表にしたものが第32表である。

これによると、磨面が表・裏両面にみられるa類が多くみられ、以下、片面(1228)、両サイド(1222)、片側(1233)、片面と片側(隣り合わせの面)(1244)、四面(1236・1240)、全面(1210・1211)に磨面のみられるものも若干みられる。表面と裏面の左上と右下に斜めの磨面のみられる特殊なタイプ（h類）も3点(1223～1225)みられる。このタイプの磨面は、石を右手に持った場合に右斜め前方（外側）へ押したり引いたりするようにして磨る行為を行った結果できたと考えられる。なお、このタイプの3点およびb類の(1228)、g類の(1211)には赤色顔料の付着がみられ（巻頭図版2）、このらの石器が赤色顔料を磨りつぶす道具であったと考えられる。

ウ．敲打痕による分類　　敲打痕の見られる位置により第101図のように分類した。

a類：長軸上の先端部に敲打痕(叩き痕)のみられるもの　　b類：短軸上の先端部(端)に敲打痕のみられるもの

第101図　凹石類の敲打痕による分類

これを表にしたものが第33表である。これによると長軸上の先端部に敲打痕（叩き痕）のみられるa類は3群・4群の楕円礫・長楕円礫に多くみられ、これらはハンマーのように使用した結果ついた使用痕と考えられる。一方、短軸上の先端部(端)に敲打痕のみられるb類は、2群の円礫にみられる。

第33表　凹石類の敲打痕による分類一覧表

		1群	2群	3群	4群	5群	小計	計
a類	上の段			1	3	1	5	22
	下の段	4	2	5	6		17	
b類	上の段		3				3	7
	下の段		4				4	
計		4	9	6	9	1	29	

④　石材による分類

凹石類の石材についてみてみると（第34表）、一番多いのが砂岩で83点（51.0%）、次が安山岩の47点（28.8%）である。以下、閃緑岩20点（12.2%）、はんれい岩8点（4.9%）、花こう岩4点(2.5%)、石英斑岩1点（0.6%）であった。

なお、いんべ遺跡の下を流れる揖斐川支流の西谷川の川原の礫を観察したところ[3]、砂岩94点(72.8%)チャート23点(17.8%)、泥岩(熱変成を受けるものもあり）9点（7.0%)、安山岩2点（1.6%)、礫岩1点（0.8%）であった。凹石類の石材は、西谷川の川原でみられる礫の中でも、特に安山岩を選択的に拾ってきたと考えられる。更に、西谷川の川原ではみられない閃緑岩・はんれい岩・花こう閃緑岩については、西谷川およびその支流以外の川原で採取して持ち込んだと考えられる。[4]

第34表　凹石類の石材別一覧表

石材／出土	砂　岩	安山岩	閃緑岩	はんれい岩	花こう閃緑斑岩	石英斑岩	計
上の段	34 (20.9)	10 (6.1)	9 (5.5)	0	3 (1.8)	1 (0.6)	57 (35.0)
下の段	49 (30.0)	35 (21.5)	10 (6.1)	8 (4.9)	0	0	102 (62.5)
表　採	0	2 (1.2)	1 (0.6)	0	1 (0.6)	0	4 (2.5)
計	83 (51.0)	47 (28.8)	20 (12.2)	8 (4.9)	4 (2.5)	1 (0.6)	163

（　）は%

形態＼折損部位		a	b	c	d	e		
1群	上							1
	下			1			1	
2群	上			2		1	3	15
	下	2	2	5	1	2	12	
3群	上							3
	下	2		1			3	
4群	上	2					2	13
	下	7	2	1		1	11	
5群	上							0
	下							
計	上	2		2		1	5	32
	下	11	4	8	1	3	27	
合　計		13(40.6)	4 (12.5)	10(31.3)	1 (3.1)	4 (12.5)	32	

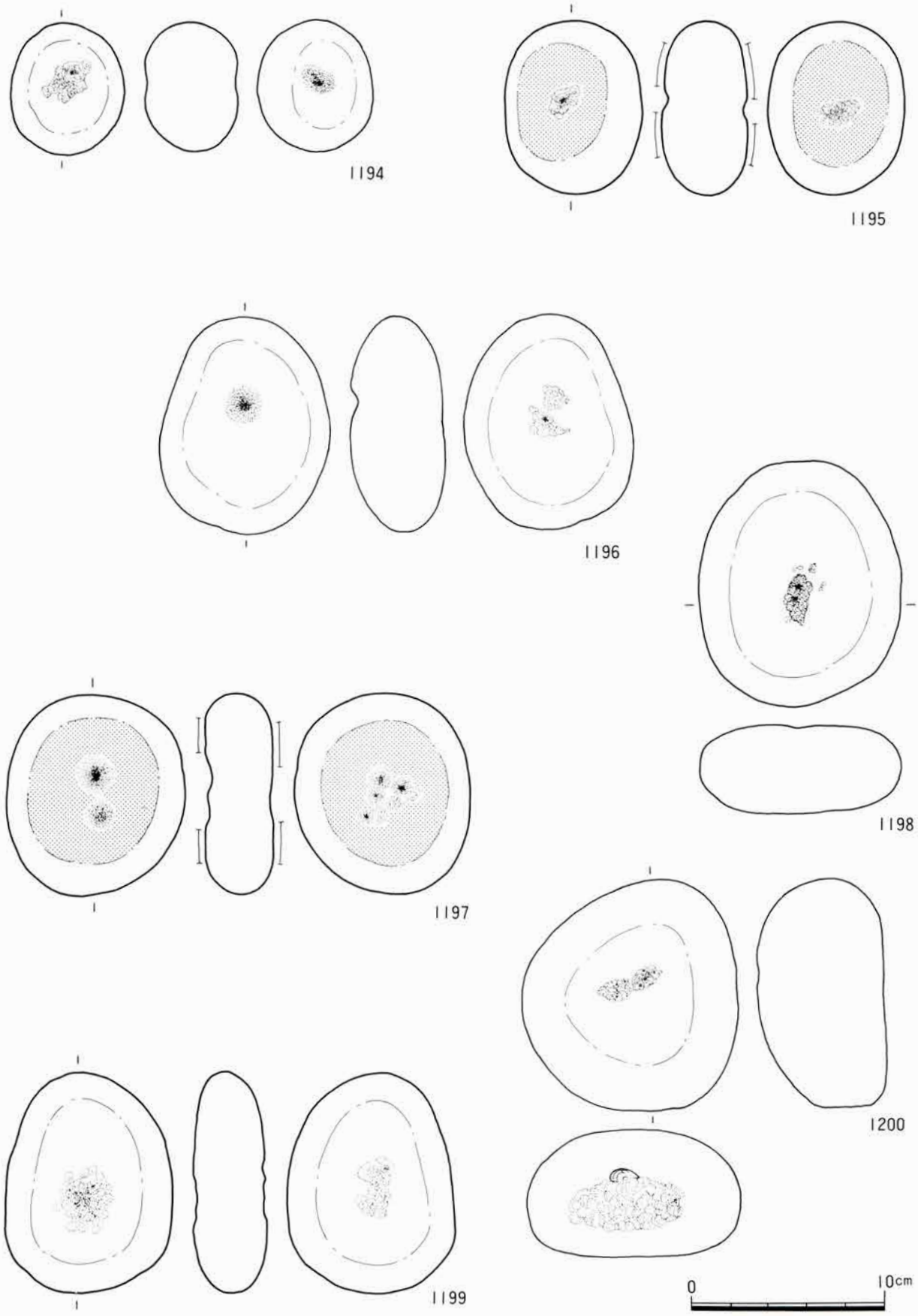
（　）は%　　※形態については残存部位により推定

第102図　凹石類の折損の部位による分類

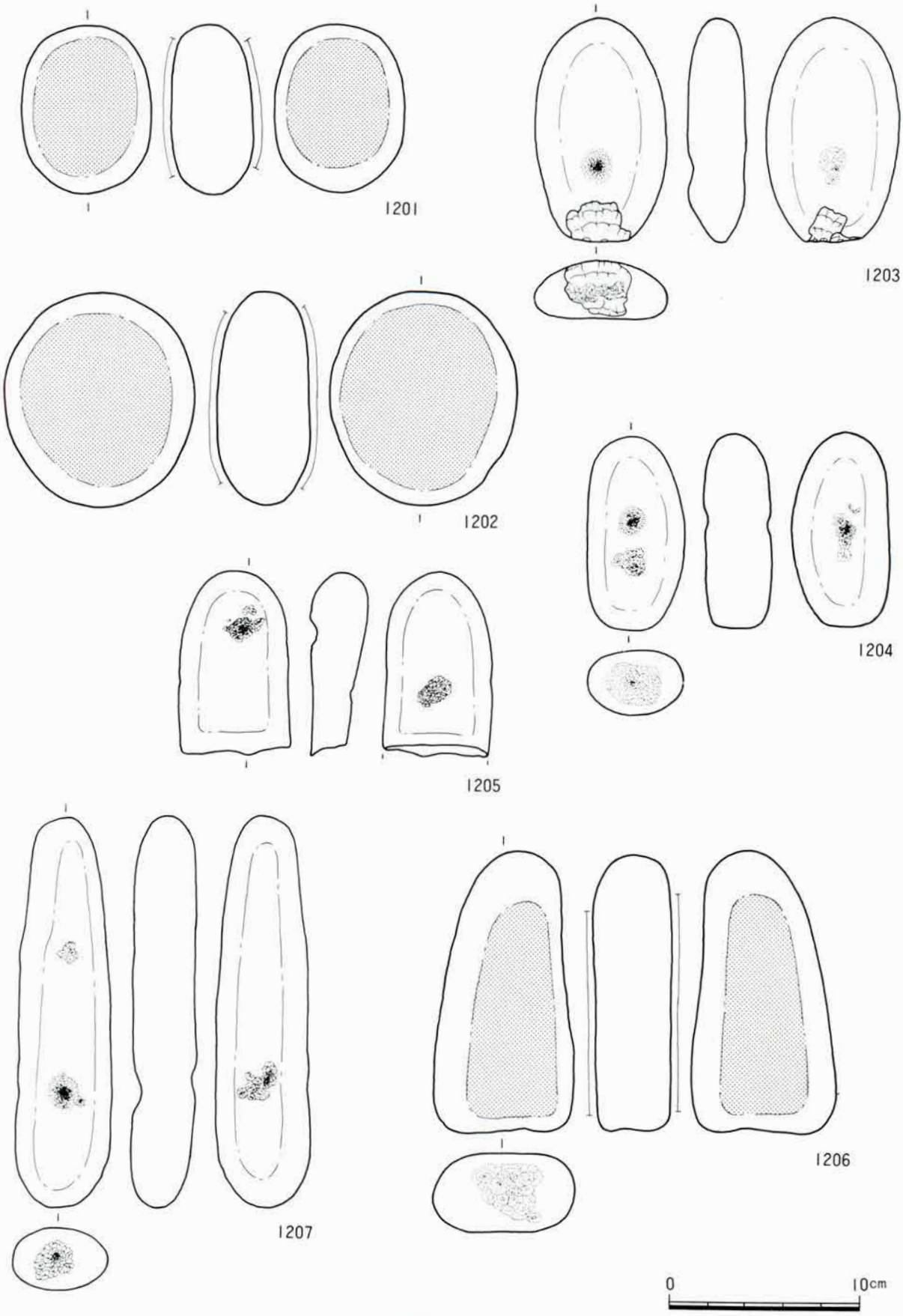
⑤　折損による分類

折損した凹石類について、折損の部位によって第102図のように分類した。それによると中央部付近で折れたａ類が13点と一番多く、次に先端部の欠損したｃ類の10点が続く。形態との関係でみてみると第２群の円礫は、先端部の欠損したｃ類や、斜めに折損したｅ類が多くみられ、第４群の長楕円礫は中央部や先端部近くで横割するａ類、ｂ類が多くみられる。これらの折損は、石器の使用に伴って生じたと考えると各々の折損（欠損）は、各群の凹石類の使用法を考えていく上で参考となる。即ち、長楕円礫（第４群）は、手に持ってハンマーのように使用し、ａ類及びｂ類のように折損したと考えられ、円礫（第２群）は、手に持って何か敲く作業に使用してｃ類やｅ類のように折損（欠損）したと考えられる。

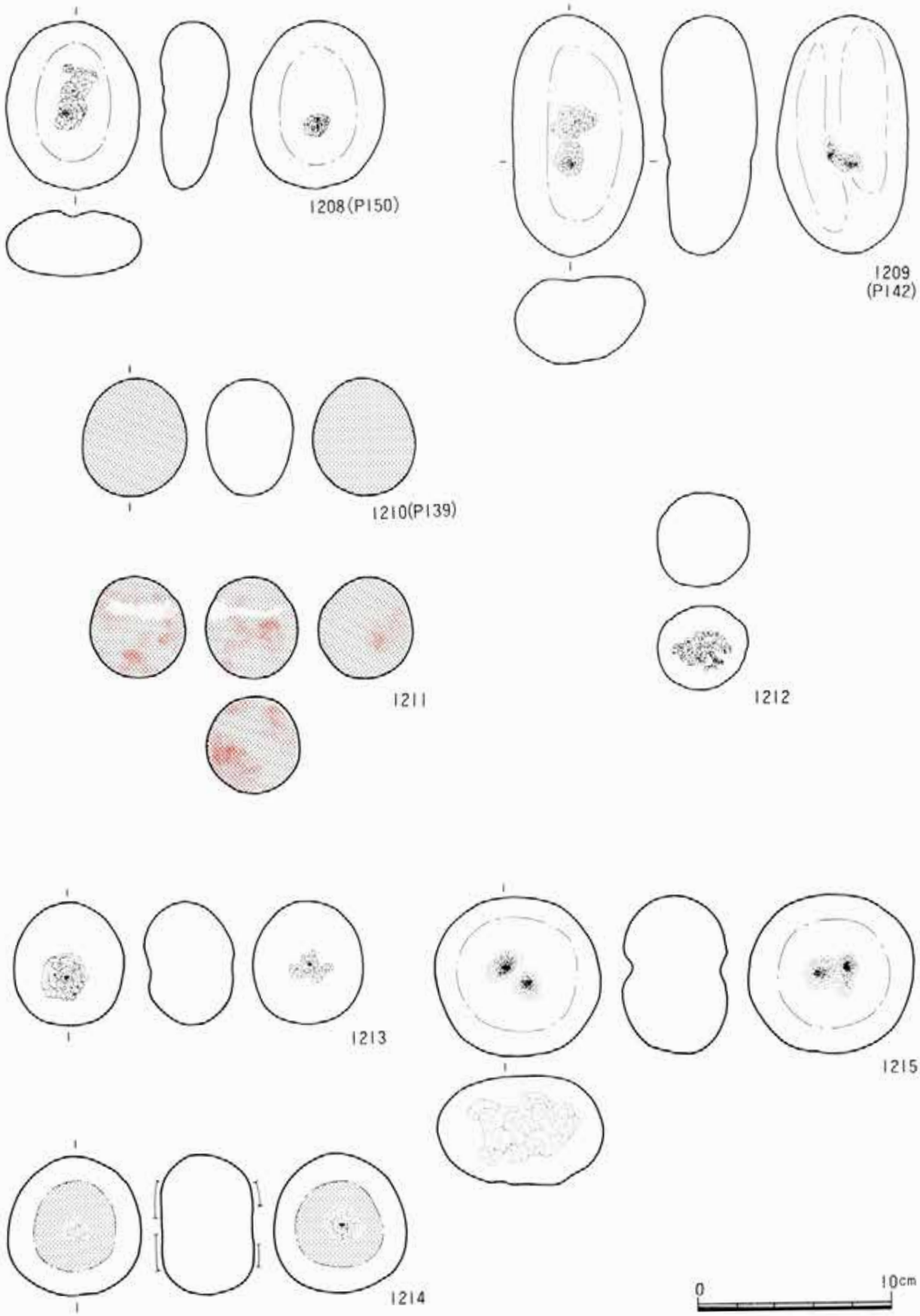
1）ここでは、ハンマーとしての用途による使用痕を想定して、棒状の礫を素材とし、その長軸の一端又は両端に集中する敲打痕を叩き痕とする。
2）後藤秀一　1983　「縄文時代石器研究の基礎作業　凹石、敲石、磨石の器種分類についての検討」　『考古学論叢Ⅰ』のなかのグラフに従った。
3）１㎡内にみられる５㎝以上の礫について観察した。
4）これらの石材は、能郷白山を中心に分布する能郷白山花こう閃緑岩の可能性がある。この石材は、白谷をはじめ能郷白山の西および南側を流れる支流によって下流に運ばれている。



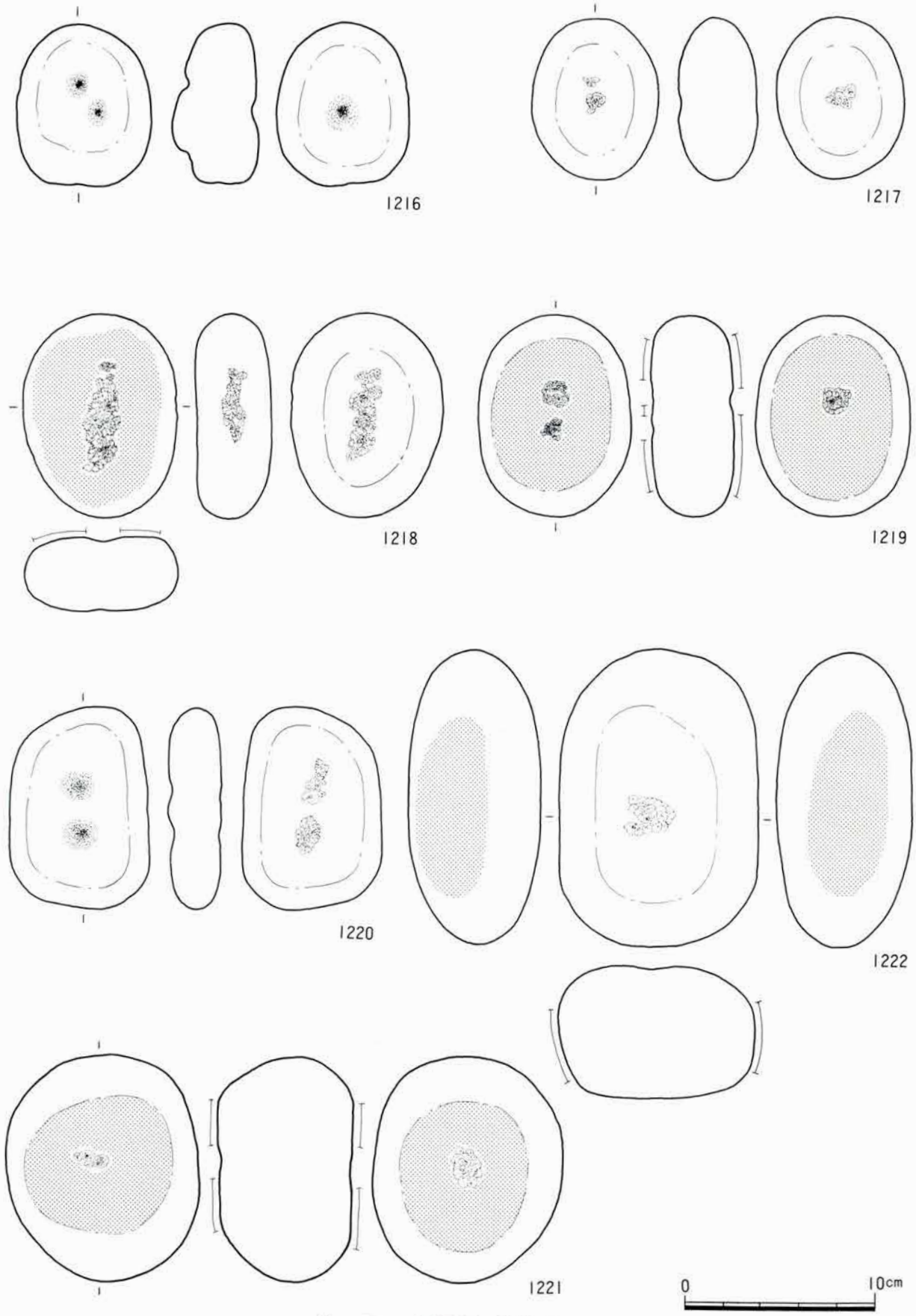
第103図　凹石類 上の段出土①(1・2群)



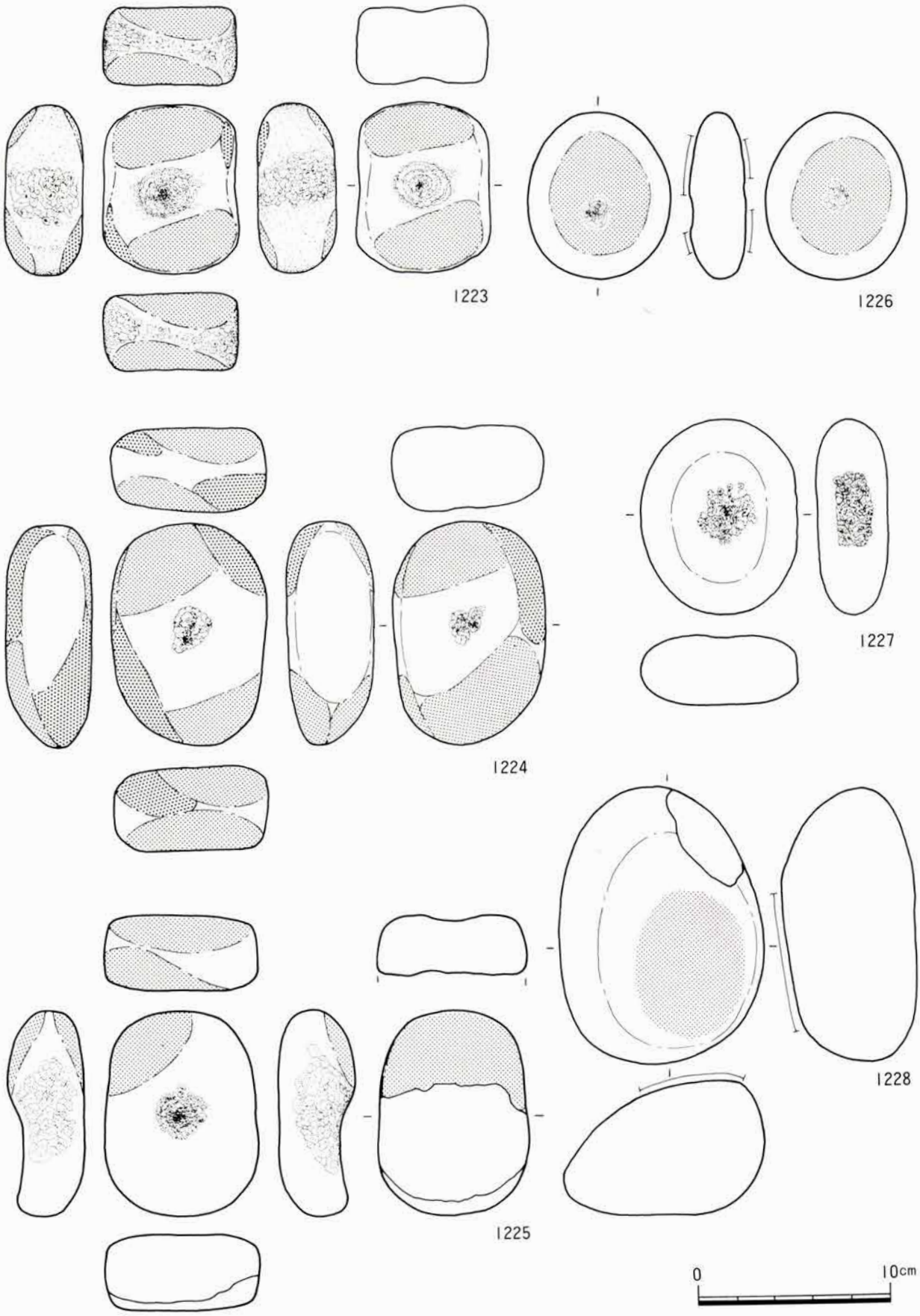
第104図　凹石類 上の段出土②(2～5群)



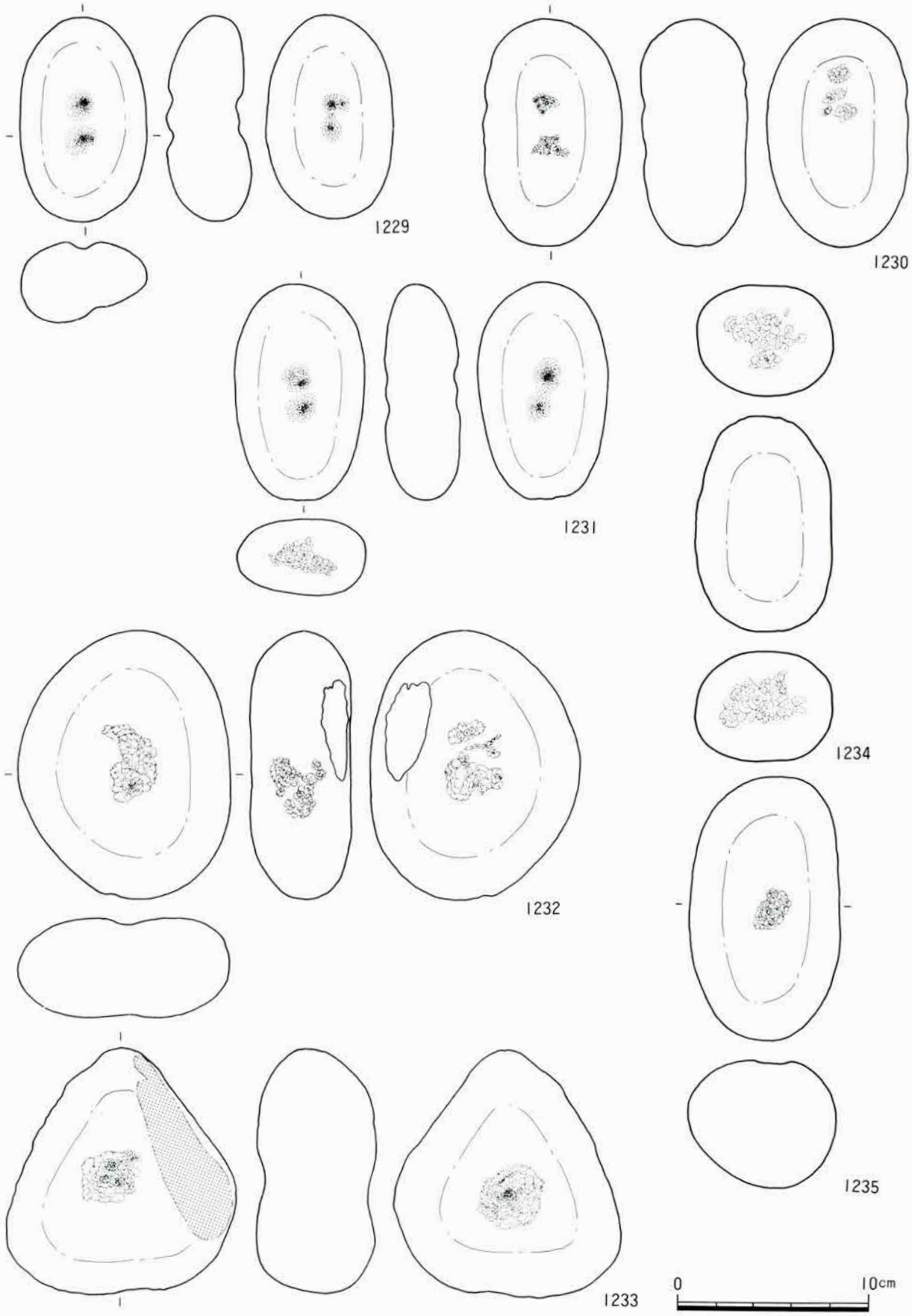
第105図　凹石類 遺構出土 下の段出土①(1群)



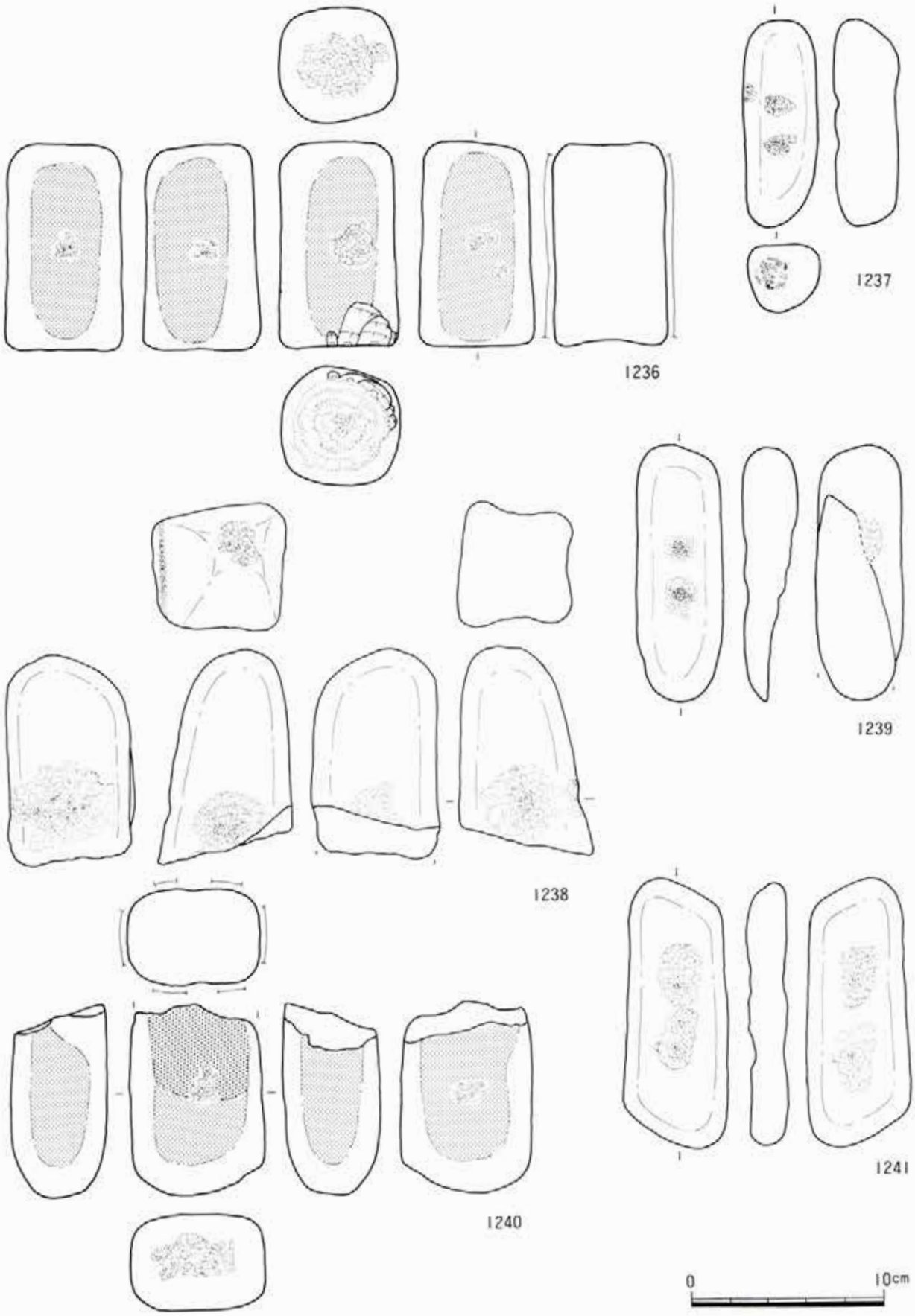
第106図　凹石類 下の段出土②(2群)



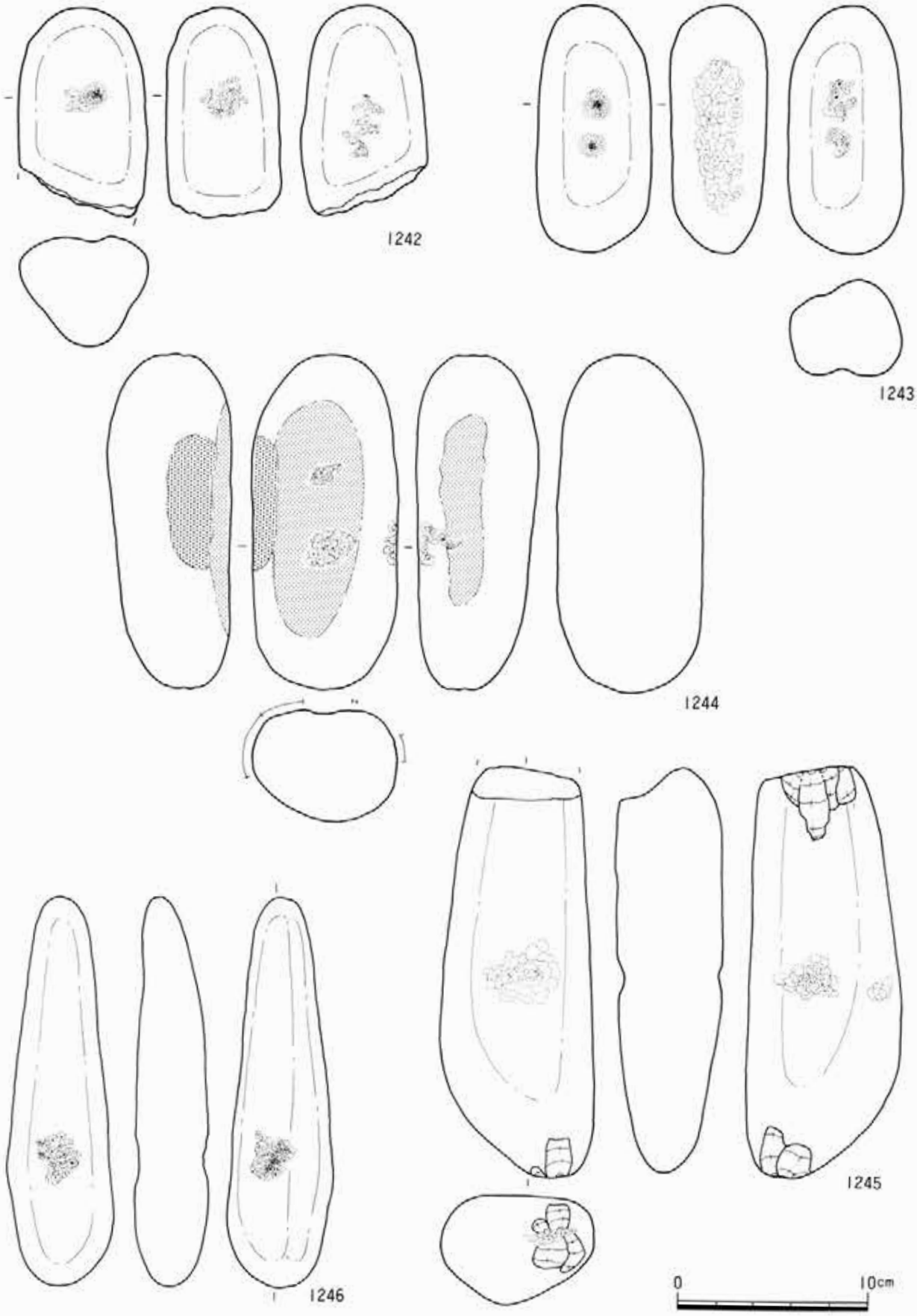
第107図　凹石類 下の段出土③(2群)



第108図　凹石類 下の段出土④(2・3群)



第109図　凹石類 下の段出土⑤(3・4群)



第110図　凹石類 下の段出土⑥(4・5群)

第35表　凹石類計測表(1)

No.	出土区	層位	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	質量(g)	全長／全幅	全厚／全幅	形態	凹みの位置と形状 表	凹みの位置と形状 裏	磨痕	敲打痕 長軸上	敲打痕 短軸上	備考	遺物番号
1	P139		砂岩	62	54	45	209	1.15	0.83	1			g				1210
2	P142		砂岩	110	96	55	807	1.15	0.57	2	Ⅰc	Ⅰc					
3	P150		安山岩	140	103	55	1133	1.36	0.53	2B	Ⅰc	Ⅰe					
4	P178		はんれい岩	90	71	36	336	1.27	0.51	2							1208
5	P150		砂岩	126	71	50	568	1.77	0.70	3	Ⅰc	Ⅰc					1209
6	14u	Ⅲ	砂岩	119	82	47	684	1.45	0.57	2	Ⅰc						
7	15t	Ⅲ	砂岩	97	89	61	794	1.09	0.69	1	Ⅰb			○			
8	15t	Ⅲ	砂岩	110	40	38	230	2.75	0.95	4	Ⅰd			○			1237
9	15u	Ⅰ	砂岩	109	65	45	464	1.66	0.69	3	Ⅰb	Ⅰa					
10	15u	Ⅲ	砂岩	129	76	33	466	1.70	0.43	3	Ⅰd						
11	16s	Ⅰ	砂岩	104	68	32	313	1.53	0.47	3	Ⅰc	Ⅰc					
12	16s	Ⅲ	安山岩	122	102	72	1448	1.20	0.71	2D	Ⅰa		a				1221
13	16t	Ⅰ	閃緑斑岩	118	69	35	473	1.71	0.51	3	Ⅰd	Ⅰd					
14	16t	Ⅰ	砂岩	107	75	28	366	1.43	0.37	2	Ⅱd	Ⅰd					1220
15	16t	Ⅰ	砂岩	89	77	35	312	1.16	0.45	2	Ⅰa						
16	16t	Ⅲ	安山岩	150	132	72	1959	1.14	0.55	2B	Ⅰb						
17	16u	Ⅲ	安山岩	109	82	37	584	1.33	0.45	2	Ⅰe	Ⅰe	b		○		1218
18	16u	Ⅲ	安山岩	110	57	36	337	1.93	0.63	4	Ⅰe	Ⅰe					
19	16u	Ⅲ	砂岩	88	87	56	544	1.01	0.64	1	Ⅱc	Ⅱc		○			1215
20	16u	Ⅲ	砂岩	104	83	36	470	1.25	0.43	2	Ⅰa				○		1227
21	17s	Ⅰ	砂岩	113	79	40	495	1.43	0.51	2							
22	17s	Ⅲ	安山岩	123	97	36	621	1.27	0.37	2	Ⅰd	Ⅰd			○		
23	17s	Ⅲ	砂岩	88	76	31	290	1.16	0.41	2	Ⅰb	Ⅰa	a				1226
24	17t	Ⅰ	安山岩	118	82	46	771	1.44	0.56	2	Ⅰa	Ⅰa	h			赤色顔料付着	1224
25	17t	Ⅲ	砂岩	142	68	37	535	2.09	0.54	4	Ⅰd	Ⅰd					
26	17t	Ⅲ	安山岩	180	79	64	1459	2.28	0.81	4B	Ⅰa		e	○			1244
27	17t	Ⅲ	はんれい岩	139	118	69	1634	1.18	0.58	2D	Ⅰe	Ⅰa					
28	18r	Ⅰ	安山岩	99	85	45	594	1.16	0.53	2	Ⅰa		a				
29	18r	Ⅰ	砂岩	87	72	48	392	1.21	0.67	2	Ⅰe	Ⅱa					1216
30	18r	Ⅰ	砂岩	102	60	36	300	1.70	0.60	3	Ⅰa		e				
31	18r	Ⅲ	砂岩	73	65	31	194	1.12	0.48	2	Ⅰa						
32	18s	Ⅰ	砂岩	72	61	39	223	1.18	0.64	2	Ⅰa						
33	18s	Ⅰ	はんれい岩	87	69	43	404	1.26	0.62	2	Ⅰa	Ⅰa					1217
34	18s	Ⅰ	安山岩	119	79	63	1065	1.51	0.80	3B	Ⅰb	Ⅰa					
35	18s	Ⅲ	砂岩	52	50	46	176	1.04	0.92	1			g			赤色顔料付着	1211
36	18s	Ⅲ	砂岩	90	75	44	412	1.20	0.59	2	Ⅰd						
37	18s	Ⅲ	はんれい岩	109	67	41	513	1.63	0.61	3	Ⅱd	Ⅰc					1229
38	18t	Ⅲ	閃緑斑岩	98	83	46	620	1.18	0.55	2	Ⅰc		a				
39	18u	Ⅲ	安山岩	142	113	50	1341	1.26	0.44	2B	Ⅰd	Ⅰd			○		1232
40	19r	Ⅰ	砂岩	123	60	30	330	2.05	0.50	4	Ⅰe						
41	19r	Ⅰ	安山岩	92	75	37	368	1.23	0.49	2	Ⅰa		b				
42	19r	Ⅰ	安山岩	89	80	40	386	1.11	0.50	2	Ⅰa						
43	19r	Ⅲ	砂岩	120	89	76	1035	1.36	0.85	2B			d				
44	19s	Ⅲ	安山岩	157	109	74	2024	1.44	0.68	2B	Ⅰb		c				1222
45	19s	Ⅲ	安山岩	75	71	48	416	1.06	0.68	1	Ⅰa		a				1214
46	19s	Ⅲ	砂岩	113	48	34	267	2.35	0.71	4	Ⅰd						
47	19u	Ⅲ	砂岩	123	77	52	656	1.60	0.68	3	Ⅱd			○			
48	20r	Ⅰ	閃緑岩	83	66	34	306	1.26	0.52	2	Ⅰa						
49	20r	Ⅲ	砂岩	120	60	35	358	2.00	0.58	4	Ⅰd						
50	20r	Ⅲ	閃緑斑岩	130	68	35	459	1.91	0.51	4	Ⅱe	Ⅰe					
51	20r	Ⅲ	砂岩	140	81	67	1062	1.73	0.83	3B	Ⅰa						1235
52	20r	Ⅲ	砂岩	159	75	33	653	2.12	0.44	4	Ⅰa		a				
53	20r	Ⅲ	安山岩	132	125	63	1416	1.06	0.50	2D	Ⅰa	Ⅰa	d				1233
54	20s	Ⅲ	安山岩	100	64	35	343	1.56	0.55	3	Ⅰd						
55	20s	Ⅲ	安山岩	125	55	27	230	2.27	0.49	4	Ⅰc	Ⅰc					
56	20s	Ⅲ	砂岩	124	58	48	464	2.14	0.83	4							
57	20t	Ⅲ	安山岩	120	76	52	741	1.58	0.68	3	Ⅰd						1230
58	20t	Ⅲ	安山岩	108	62	61	746	1.74	0.98	3			f	○			1236
59	20t	Ⅲ	安山岩	208	57	37	566	3.65	0.65	5	Ⅰb	Ⅰb					1246
60	20t	Ⅲ	安山岩	106	82	43	595	1.29	0.52	2	Ⅰb	Ⅰb	a				1219
61	20t	Ⅲ	砂岩	118	85	42	626	1.39	0.49	2	Ⅰe		a				
62	20t	Ⅲ	安山岩	50	49	44	140	1.02	0.90	1	Ⅰa			○			1212
63	20u	Ⅲ	閃緑斑岩	66	58	46	249	1.14	0.79	1	Ⅰa	Ⅰa					1213
64	20u	Ⅲ	砂岩	76	66	32	216	1.15	0.48	2	Ⅰa						
65	20u	Ⅲ	砂岩	93	74	42	416	1.26	0.57	2	Ⅰc	Ⅰc					
66	20u	Ⅲ	砂岩	104	88	47	549	1.18	0.53	2	Ⅰd	Ⅱd					
67	21s	Ⅰ	砂岩	135	95	62	1033	1.42	0.65	2B	Ⅰb						
68	21t	Ⅲ	はんれい岩	77	77	45	386	1.00	0.58	1	Ⅰc	Ⅰa					
69	21t	Ⅲ	砂岩	115	68	39	447	1.69	0.57	3	Ⅰd	Ⅱc		○			1231
70	21t	Ⅲ	砂岩	143	55	20	274	2.60	0.36	4	Ⅰe	Ⅰe					1241
71	21t	Ⅲ	閃緑斑岩	143	66	50	897	2.38	0.83	4	Ⅰa		f				
72	21t	Ⅲ	砂岩	90	72	40	461	1.25	0.56	2	Ⅰa	Ⅰa	h	○		赤色顔料付着	1223
73	21u	Ⅲ	砂岩	109	68	48	503	1.60	0.71	3	Ⅰd	Ⅰb					
74	22u	Ⅲ	閃緑斑岩	115	73	57	767	1.58	0.78	3				○			1234
75	22u	Ⅲ	閃緑岩	130	61	50	691	2.13	0.82	4	Ⅱd	Ⅰd					1243
76	29z	Ⅱ	安山岩	208	51	32	517	4.04	0.63	5	Ⅱd	Ⅰb		○			1207
77	29C	Ⅱ	閃緑斑岩	131	107	45	1017	1.22	0.42	2D	Ⅰa						1198
78	29D	Ⅲ	安山岩	90	67	38	356	1.34	0.57	2			a				
79	29E	Ⅳ	閃緑岩	111	83	36	516	1.34	0.43	2	Ⅰa						
80	30A	Ⅲ	安山岩	107	70	55	585	1.53	0.79	3	Ⅰa		c				
81	30B	Ⅳ	閃緑斑岩	105	71	46	504	1.48	0.65	2	Ⅱc						
82	30C	Ⅰ	砂岩	214	88	46	1371	2.43	0.52	4B	Ⅰc	Ⅱa					
83	30C	Ⅲ	砂岩	115	88	50	630	1.31	0.57	2	Ⅱb						1196
84	30C	Ⅳ	砂岩	76	52	46	224	1.46	0.88	3	Ⅱb						

* 形態のBは質量が1000g以上を表す。
* 磨痕のa～hは磨面の見られる位置を示す。(第100図参照)

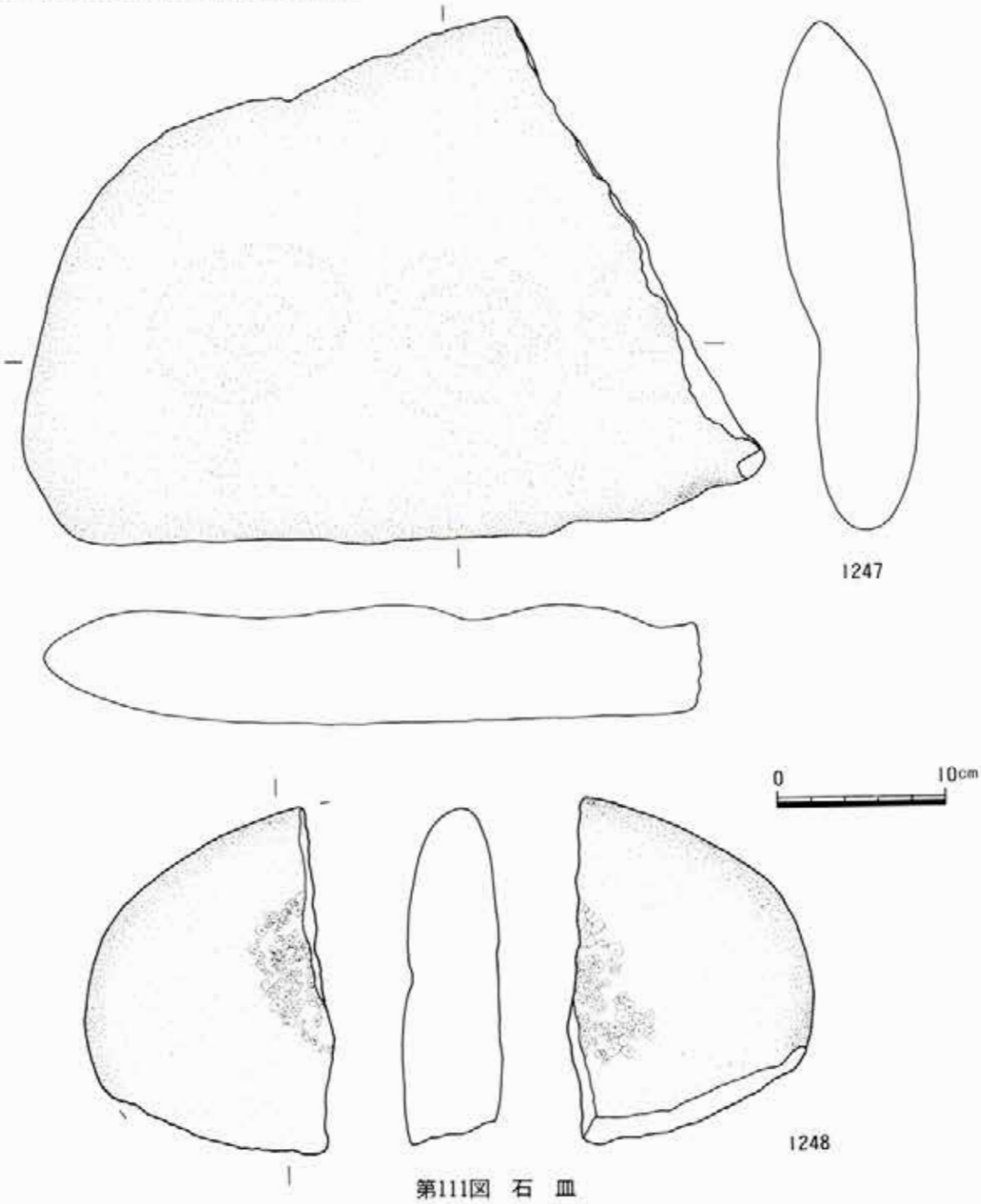
第36表　凹石類計測表(2)

No.	出土区	層位	石材	全長(mm)	全幅(mm)	全厚(mm)	質量(g)	全長／全幅	全厚／全幅	形態	凹みの位置と形状 表	凹みの位置と形状 裏	磨痕	敲打痕 長軸上	敲打痕 短軸上	備考(折損)	遺物番号
85	30C	Ⅳ	砂岩	106	92	52	673	1.15	0.57	2	Ⅰa						
86	30D	Ⅱ	砂岩	95	50	50	367	1.90	1.00	3	Ⅰd	Ⅰd		○			
87	30E	Ⅳ	石英斑岩	114	101	49	815	1.13	0.49	2			a				1202
88	30E	Ⅳ	砂岩	91	73	44	444	1.25	0.60	2	Ⅰb	Ⅰa	a				1195
89	30E	Ⅳ	砂岩	89	70	49	366	1.27	0.70	2	Ⅰa	Ⅰa					
90	31A	Ⅲ	安山岩	133	95	30	492	1.40	0.32	2	Ⅰa	Ⅰc					
91	31A	Ⅲ	花こう閃緑斑岩	96	85	45	543	1.13	0.53	2	Ⅰd						
92	31A	Ⅲ	砂岩	99	83	38	468	1.19	0.46	2	Ⅰc	Ⅱc					
93	31B	Ⅱ	砂岩	108	80	50	619	1.35	0.63	2	Ⅰb						
94	31B	Ⅱ	安山岩	124	83	59	843	1.49	0.71	2	Ⅰd	Ⅰd					
95	31B	Ⅲ	砂岩	130	110	72	1309	1.18	0.65	2B	Ⅱa						
96	31C	Ⅲ	砂岩	87	69	40	352	1.26	0.58	2			a				
97	31C	Ⅳ	安山岩	100	83	53	644	1.20	0.64	2	Ⅰb	Ⅰb					
98	31C	Ⅳ	砂岩	105	88	43	546	1.19	0.49	2	Ⅰc	Ⅰc			○		
99	31D	Ⅳ	砂岩	125	104	66	1317	1.20	0.63	2B	Ⅰd				○		1200
100	31D	Ⅳ	砂岩	102	88	47	534	1.16	0.53	2	Ⅰa		a				
101	31E	Ⅳ	砂岩	86	50	44	246	1.72	0.88	3	Ⅱa	Ⅰa					
102	31E	Ⅳ	花こう閃緑斑岩	88	65	40	329	1.35	0.62	2	Ⅰa	Ⅰa					
103	32A	Ⅳ	安山岩	107	96	47	631	1.11	0.49	2	Ⅰa						
104	32B	Ⅱ	砂岩	104	96	49	647	1.08	0.51	3	Ⅱb	Ⅰb					
105	32B	Ⅱ	砂岩	80	64	32	238	1.25	0.50	3	Ⅰa						
106	32B	Ⅳ	安山岩	76	66	31	222	1.15	0.47	2	Ⅰa						
107	32B	Ⅳ	砂岩	68	64	34	181	1.06	0.53	2	Ⅱa	Ⅰa					
108	32C	Ⅲ	閃緑斑岩	93	72	33	361	1.29	0.46	2	Ⅰa		a				
109	32C	Ⅳ	閃緑斑岩	90	70	43	436	1.29	0.61	2			a				1201
110	32D	Ⅰ	砂岩	90	74	52	449	1.22	0.70	3	Ⅰa						
111	32D	Ⅰ	砂岩	69	62	47	251	1.11	0.76	2	Ⅰe	Ⅰa					1194
112	32D	Ⅰ	砂岩	106	94	32	547	1.13	0.34	2	Ⅰc	Ⅰc	a				1197
113	32D	Ⅳ	砂岩	105	87	40	504	1.21	0.46	3	Ⅰe						
114	33x	Ⅲ	安山岩	101	93	61	765	1.09	0.66	1	Ⅰa						
115	33z	Ⅲ	閃緑斑岩	103	104	77	1277	0.99	0.74	1B	Ⅰa						
116	33x	Ⅲ	砂岩	127	78	60	822	1.63	0.77	3	Ⅰb	Ⅰb	b				
117	33x	Ⅲ	砂岩	117	87	42	567	1.34	0.48	2	Ⅰb						
118	33z	Ⅲ	閃緑斑岩	149	76	41	859	1.96	0.54	4			a	○			1206
119	33x	Ⅲ	砂岩	81	52	40	237	1.56	0.77	3	Ⅰd						
120	33x	Ⅲ	砂岩	99	69	50	448	1.43	0.72	2	Ⅰd						
121	33x	Ⅳ	花こう閃緑斑岩	73	72	54	399	1.01	0.75	1	Ⅰa						
122	33z	Ⅳ	砂岩	118	71	30	327	1.66	0.42	3	Ⅰb			○			1203
123	33z	Ⅳ	砂岩	103	53	32	252	1.94	0.60	4	Ⅰd	Ⅰa		○			1204
124	33C	Ⅳ	砂岩	90	76	52	451	1.18	0.68	2	Ⅱa				○		
125	34Y	Ⅱ	砂岩	118	82	50	647	1.44	0.61	2	Ⅰd						
126	35x	Ⅱ	砂岩	115	89	39	572	1.29	0.44	2	Ⅰa	Ⅰc					1199
127	35z	Ⅲ	閃緑岩	101	83	52	622	1.22	0.63	2	Ⅰe	Ⅰe	b				
128	表採		花こう閃緑斑岩	108	87	60	799	1.24	0.69	2	Ⅰa						
129	表採		閃緑斑岩	100	91	45	579	1.10	0.49	2			a				
130	表採		安山岩	118	68	40	426	1.74	0.59	3	Ⅰd						
131	表採		安山岩	106	79	50	549	1.34	0.63	2	Ⅰa	Ⅰa	a		○		
132	15t	Ⅰ	砂岩	(111)	67	(61)	(726)				4面 Ⅰb Ⅰb	Ⅰb		○		折損・a	1238
133	15u	Ⅲ	閃緑斑岩	(113)	86	58	(915)						d			折損・a	
134	17s	Ⅲ	安山岩	(130)	108	50	(1003)				Ⅰa					折損・c	
135	17t	Ⅲ	安山岩	(77)	75	29	(260)				Ⅰc			○		折損・a	
136	18t	Ⅲ	砂岩	(72)	65	50	(321)				Ⅰc					折損・c	
137	19q	Ⅰ	砂岩	(96)	54	24	(205)				Ⅰc					欠損・a	
138	19q	Ⅲb	安山岩	(114)	70	62	(595)				3面 Ⅰb Ⅰb	Ⅱb				折損・a	1242
139	19q	Ⅲb	砂岩	(70)	94	50	(483)				Ⅰc	Ⅰc				折損・b	
140	19q	Ⅲb	安山岩	(109)	77	50	(633)				Ⅰf	Ⅰf				折損・a	
141	19r	Ⅲ	はんれい岩	(121)	101	65	(1327)				Ⅰb					折損・c	
142	19s	Ⅲ	砂岩	109	82	(41)	(570)				Ⅰa		h	○		折損・e 赤色顔料付着	1225
143	19s	Ⅲ	安山岩	(83)	(85)	(43)	(380)				Ⅰf			○		折損・a	
144	20r	Ⅲ	安山岩	(90)	63	36	(280)				Ⅰf					折損・a	
145	20s	Ⅰ	安山岩	(217)	83	55	(1586)				Ⅰd	Ⅰa		○		折損・b	1245
146	20s	Ⅲ	砂岩	103	93	(58)	(700)				Ⅰc					折損・c	
147	20s	Ⅲ	砂岩	110	104	59	(820)				Ⅰa					欠損・c	
148	21t	Ⅲ	安山岩	146	108	70	(1602)						b			欠損・c 赤色顔料付着	1228
149	21t	Ⅰ	はんれい岩	(95)	92	48	(655)				Ⅰa					折損・b	
150	21t	Ⅰ	砂岩	133	(78)	69	(1032)				Ⅰb					折損・d	
151	21t	Ⅲ	はんれい岩	(114)	87	50	(887)				Ⅰc					折損・e	
152	21t	Ⅲ	安山岩	137	(92)	78	(1277)				Ⅰd					折損・c	
153	21t	Ⅲ	安山岩	133	44	(29)	(249)				Ⅰd					折損・e	1239
154	21t	Ⅲ	砂岩	(113)	54	40	(327)				Ⅰd					折損・c	
155	21t	Ⅲ	安山岩	(67)	(93)	52	(458)						a			折損・a	
156	22u	Ⅲ	安山岩	(103)	51	20	(161)				Ⅰc	Ⅰc				折損・a	
157	22u	Ⅲ	砂岩	(140)	48	37	(340)				Ⅰc	Ⅰc		○		折損・b	
158	22u	Ⅲ	閃緑斑岩	(104)	71	49	(654)				Ⅰb		f	○		折損・a	1240
159	31B	Ⅱ	砂岩	(100)	59	30	(231)				Ⅰb	Ⅰb				折損・a	1205
160	31C	Ⅰ	閃緑斑岩	(111)	(96)	(54)	(657)				Ⅰb					折損・e	
161	31E	Ⅰ	砂岩	(112)	60	26	(225)				Ⅰf					折損・a	
162	32z	Ⅰ	砂岩	91	80	43	(362)				Ⅰd					欠損・c	
163	32A	Ⅳ	安山岩	88	(75)	33	(267)						a			折損・c	

- 形態のBは質量が1000g以上を表す。
- 磨痕のa～hは磨面の見られる位置を示す。(第100図参照)
- 備考のu～eは折損の部位を示す。(第102図参照)

⑭ 石皿（第111図　1247・1248　図版65）

3点出土した。3点とも包含層からの出土で、下の段より2点（1247・1248）、表採1点である。石材は3点とも砂岩である。（1247）は折損しているが、敲打による凹みが3つ（以上）みられる。（1248）も折損しているが、表裏両面に敲打痕が多数集中した凹みがみられる。石皿というよりも、台石として使用したとも考えられる。



第111図　石　皿

第37表　石皿計測表

No.	出土区	層　位	石　材	全長（mm）	全幅（mm）	全厚（mm）	質量(kg)	遺物番号
1	20r	Ⅲ	砂岩	(208)	(146)	60	1.5	1248
2	21t	Ⅲ	砂岩	(443)	313	75	13.5	1247
3	表採		砂岩	246	241	60	5.0	

⒂　石製品（第112・113図　1249～1258　図版66・67）

13点出土した。遺構より1点(1249)、包含層より12点(1250～1258)の出土で、すべて下の段からの出土である（第123図)。これらの石製品は、土器棺墓や配石土壙の分布する墓域と近接して出土し、一部は重複もみられ、その関連が注目される所である。(1249～1252)は石刀で、すべて折損しているが、(1249・1251)には基部、(1252)には頭部がみられた。特に、(1252)は先端を瘤状に整えている。(1253～1255)は石棒で、(1253)には頭部、(1254・1255)には基部が残る。(1253)は敲打により頭部を作出している。(1254)は全体を研磨によって整形し、胴部の断面が卵形を呈している。(1256)は石剣で、折損している。

(1257)は石冠で半分を欠損するが、全面を研磨によって整形し、特に斧状の部分の側縁は丁寧に面取りがされている。底面には、敲打による凹みもみられる。(1258)は御物石器の一部と考えられ、曲線や直線を組み合わせた文様が刻まれている。被熱により割れており、包含層ながら、土器棺墓が多数分布するグリッド(19ｓグリッド)のすぐ隣り(18ｓグリッド)で出土したことと合わせ興味深い。[1] 御物石器だとしたら、徳山地区では初めての出土となる。このグリッドからは、北陸系の八日市新保式や東海系の五貫森式土器の出土もみられたが、点数としては少なく、むしろ多数の土器棺墓のみられる晩期中葉の可能性も考えられる。しかしながら、時期等の断定は困難である。

1）林直樹氏によると、被熱して割れた状態での出土は、家ノ下遺跡（岐阜県宮川村）の御物石器の出土状況と似ているとのことである。なお、石材がいわゆる粘板岩（泥岩）製であることも北陸と似た状況であるとの御教示を得た。

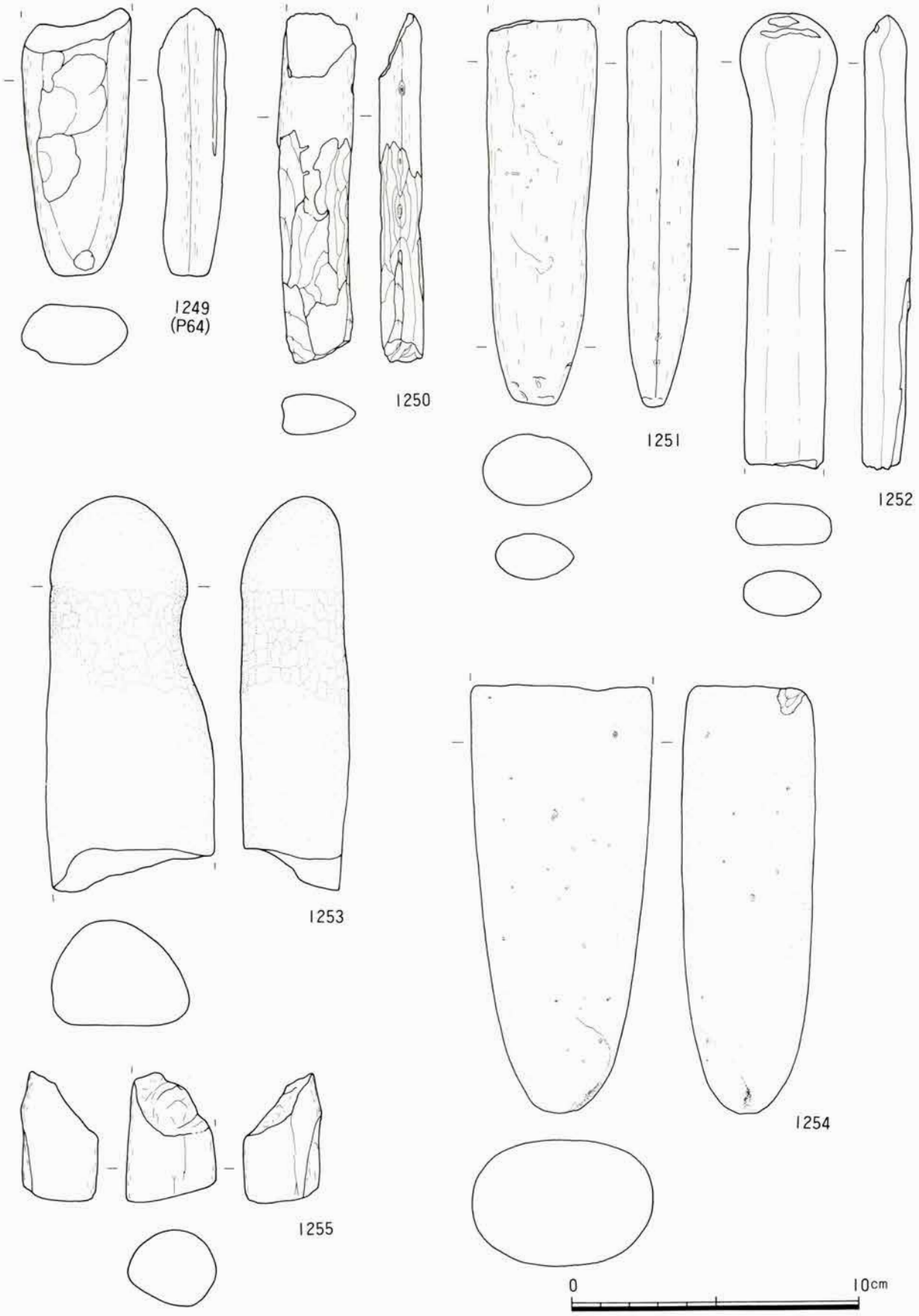
⒃　その他の石器（第113図　1259～1262　図版67）

①　異形石器（1259）

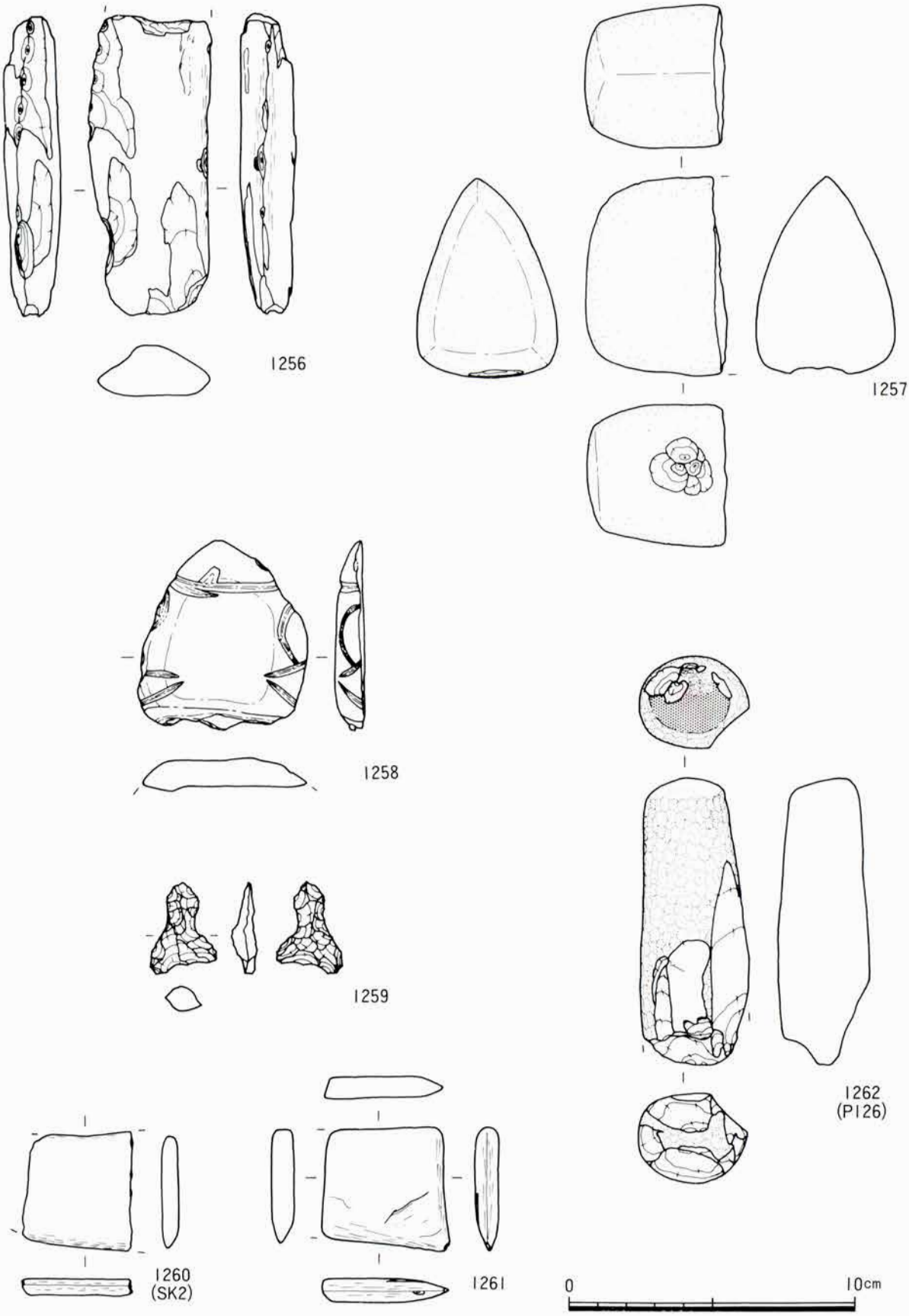
(1259)はチャート製で、両側縁に抉りがいれられている。[1] 上端は尖り気味に、下端は凹刃気味に調整を施しており三足状の形を呈している。上の段からの出土であり、早期もしくは中期の石器と考えられる。

②　擦り切り石器（1260・1261）

剥片を素材とし、その一端に擦り切りの機能を有すると考えられる刃部を有する石器を「擦り切り石器」とした。2点出土した。石材はいずれも乳白色のアプライト製（これまで流紋岩質凝灰岩と呼ぶこともあった）で、(1260)はＳＫ２（晩期か）より出土し、(1261)は包含層（下の段の出土であり、後期後葉から晩期にかけてと考えられる。）より出土した。(1260)は両端を折損するが片側に刃部を作出している。(1261)は2ヶ所の刃部とそれに対応する2ヶ所の背を作出しており、刃部の1つは凹刃である。この2点は、「上原遺跡」[2] で、「石鋸」として報告されたもののうちの1点(557) と



第112図　石製品



第113図　石製品、その他の石器

形状や石材が非常によく似ている。[3] 同様の石器は、「はいづめ遺跡」でも複数出土しており、佐野康雄氏はこれを「石鎌様石器」として紹介している。[4] なお、これによく似た石器が鹿児島県でも出土している。[5]

③　不明石製品　(1262)

(1262)は、石製品もしくは磨製石斧を叩石か磨石として転用したと考えられ、不明石製品としてその他の石器に含めた。先端部付近には、敲打（叩打）による剥離の跡がみられ、[6] このうちの1つには剥離後に磨った跡も認められる。基部（細い方）の先端部付近には、わずかではあるが赤色顔料の付着がみられ、磨石（石杵）として利用したことも考えられる。

1）桑野遺跡（福井県金津町）では、出土状況からみて、異形石器を石製装飾品の範疇で取り扱っている。
　(1993　桑野遺跡発掘調査概要　金津町教育委員会)
2）1998　(財)岐阜県文化財保護センター　「上原遺跡Ⅰ」
3）上原遺跡の石鋸を観察された渡辺誠氏は、有溝石錘の溝の作出に使用した可能性を指摘された。
4）1997　佐野康雄　「岐阜県の石器　岐阜県の石器組成の変遷」
　『国立歴史民俗博物館資料調査報告書7　農耕開始期の石器組成4　中部・近畿』
　この中では、同様の石材について凝灰岩製と報告している。
5）池畑耕一氏（鹿児島県埋文センター）の御教示による。同様の石器を「擦り切り用砥石」・「擦り切り石器」・「板状磨製石器」等と呼称し、石器を製作する際の擦り切りの道具（砥石）と考えられているとのことである。なお、鹿児島県では、後期後葉の市来式土器に共伴するとのことである。
6）被熱により割れた可能性も考えられる。佐野康雄氏の御教示による。

第38表　石製品計測表

No.	出土区	層位	石　　材	全長（mm）	全幅（mm）	全厚（mm）	質量（g）	備　　考	遺物番号
1	P64		黒雲母片岩	(93)	38	23	121	石刀　折損	1249
2	16s	Ⅲ	結晶片岩	(123)	26	16	81.3	石刀　折損	1250
3	18t	Ⅲ	泥岩	(38)	23	11	13.1	石刀　折損	
4	19s	Ⅲ	泥岩（ホルンフェルス化）	(70)	17	7	11.2	石刀　折損	
5	21u	Ⅲ	結晶片岩	(137)	38	24	197.5	石刀　折損	1251
6	21u	Ⅲ	泥岩	(161)	34	18	143.1	石刀　折損	1252
7	19r	Ⅲ	泥岩	(106)	42	19	110.8	石剣　折損	1256
8	19r	Ⅲ	花こう閃緑斑岩	(150)	65	46	675	石棒　折損	1254
9	19s	Ⅲ	泥岩	(56)	(46)	(7)	31.8	石棒　欠損	
10	20s	Ⅲ	砂岩	(138)	59	38	445.7	石棒　折損	1253
11	21t	Ⅲ	泥岩	(41)	32	27	36.2	石棒　折損	1255
12	17s	Ⅲ	閃緑ひん岩	(45)	68	50	239.4	石冠　折損	1257
13	18s	Ⅲ	砂岩	(68)	(57)	(10)	54.8	御物石器　欠損	1258

第39表　その他の石器計測表

No.	出土区	層　位	石　　材	全長（mm）	全幅（mm）	全厚（mm）	質量（g）	備　　考	遺物番号
1	33y	Ⅱ	チャート	32	23	8	3.9	異物石器	1259
2	SK2		アプライト	(38)	42	6	15	擦り切り石器	1260
3	17u	Ⅲ	アプライト	(45)	44	8	19.6	擦り切り石器	1261
4	P126		玄武岩	(103)	40	31	219	不明石製品 赤色顔料付着	1262

第6章　自然科学分析

第1節　磨石および土器表面に付着する赤色顔料

藤根　久（パレオ・ラボ）

1．はじめに

いんべ遺跡からは、縄文時代の赤色顔料が付着した磨石および土器が出土した．ここでは、この赤色顔料を構成する元素を、蛍光X線分析計を用いて調べた。

2．試料と方法

試料は、いずれも赤色顔料が付着している部分に、セロハン粘着テープを張り付け、付着赤色部を剥離して採取した。採取した赤色顔料は、エネルギー分散型蛍光X線分析計を用いて、構成元素を定性分析した。

分析装置は、セイコー電子工業㈱製卓上型蛍光X線分析計SEA-2001Lである。X線発生部の管球はロジウム(Rh)ターゲット、ベリリウム(Be)窓、X線検出器はSi(Li)半導体検出器である。測定条件は、測定時間300秒、照射径10㎜、電流50μA、電圧50kV、試料室内は真空である。

結果は、各試料の蛍光X線スペクトル図を示し、各ピークのX線名称を示した。なお、Rh(ロジウム)のピークは、X線管球ターゲットに由来するピークであり、赤色顔料とは関係がない。

第40表　いんべ遺跡から出土した赤色顔料が付着した磨石および土器試料

番号	注記番号	種　類	時　　代	遺物番号
1	18sⅡ007	磨石1	縄文後期後葉～晩期	1211
2	17tN001,31	磨石2	縄文後期後葉～晩期	1224
3	21tⅡ004	磨石3	縄文後期後葉～晩期	1228
4	P126001	磨石4	縄文後期後葉～晩期	1262
5	21uⅡ777	土器1	後期後葉	303
6	18sⅡ004	土器2	後期末葉	364
7	17sⅡ014	土器3	晩期前半	337

3．分析結果

第114図～第120図に赤色顔料の蛍光X線スペクトルを示した。

測定の結果、磨石1では水銀(Hg)の複数のピークが確認された。その他では、アルミニウム（Al）やケイ素(Si)あるいは鉄(Fe)のピークが確認された。このことから、この磨石1に付着する赤色顔料は、水銀朱であることが分った。一方、磨石2～4や土器1～3では、水銀は検出されない。検出された元素は、主成分としてアルミニウム(Al)、ケイ素(Si)、鉄(Fe)、カリウム(K)、カルシウム(Ca)、チタン（Ti）などが検出された。その他では、イオウ(S)、クロム（Cr)、亜鉛(Zn)などが微量元素として検出された。このうち、赤色顔料に由来する元素は鉄である。このことから、これら付着する赤色顔料はベンガラと考える。なお、これらの試料中からイオウがいずれも検出されることから、硫化鉄（FeSなど）起源のベンガラである可能性が考えられる。

４．赤色顔料について

従来、赤色顔料の種類としては、水銀朱(HgS)、ベンガラ(Fe_2O_3など)などが知られている（たとえば、市毛、1984)。このうち、水銀朱は、主成分が硫化第二水銀(HgS)からなる辰砂(Cinnabar)から磨り潰して作られる。一方、ベンガラは、赤色の由来となる主成分元素が鉄(Fe)であるものを総称していう。天然には、赤鉄鉱などの鉄鉱石やいわゆる赤土などを原料とする。あるいは、鉄分が多い土壌や褐鉄鉱、硫化鉄(磁硫鉄鉱：FeS、黄鉄鉱：FeS_2)などを焼いたりするなど、種々の製法が考えられている（本田、1995、北野、1994など)。

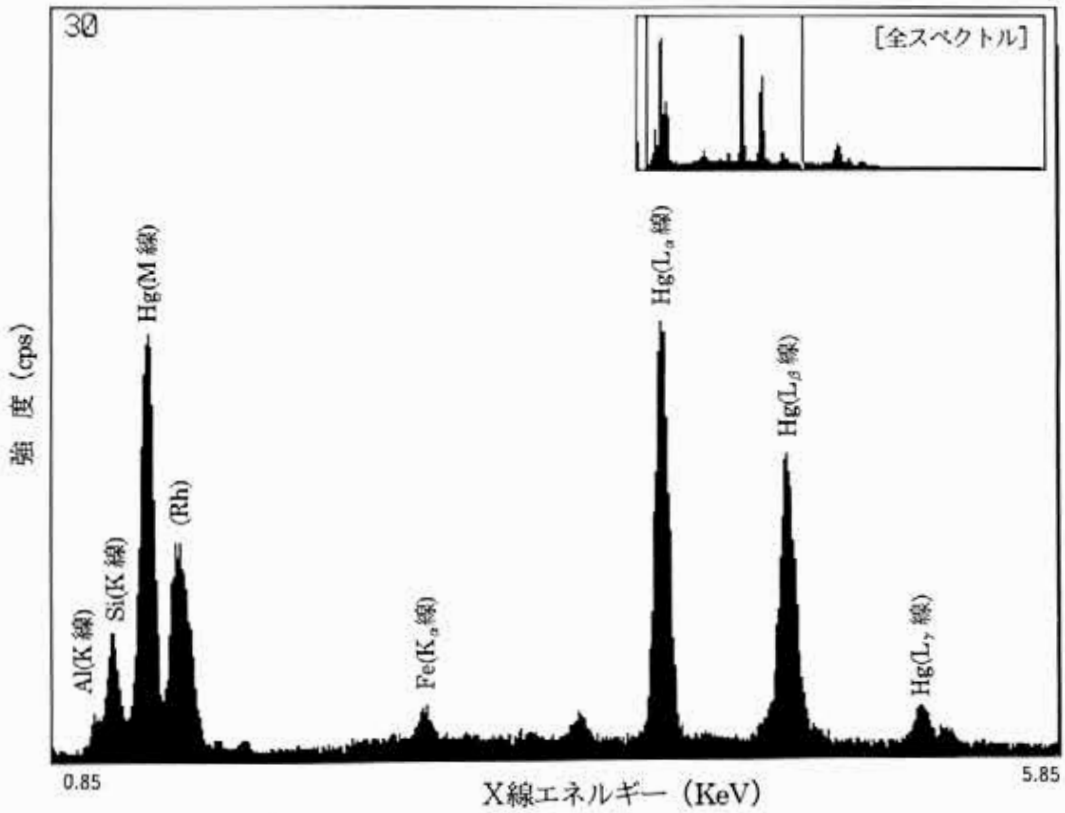
この磨石に付着した赤色顔料は水銀朱であることが判明したが、遺跡周辺ではかつて水銀鉱山が稼行していたことが知られていることから、当地域に産する水銀が顔料として利用された可能性は高いと考える。

引用文献

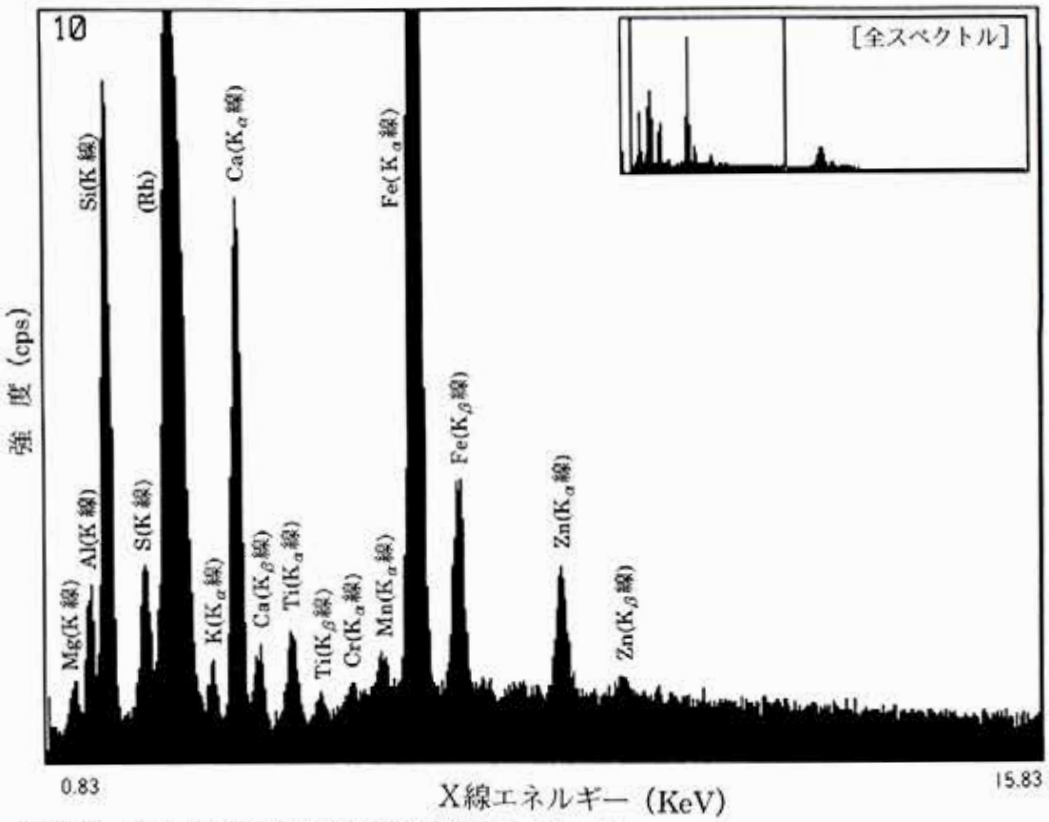
市毛　勲（1984)『増補　朱の考古学』、第２版、考古学選書12、雄山閣出版。324p。

本田光子（1995)「古墳時代の赤色顔料」『考古学と自然科学』、31・32、63-79.

北野信彦（1994)「近世出土漆器資料の保存処理に関する問題点Ⅱ－文献史料からみた赤色系漆に使用するベンガラの製法について－」『古文化財の科学』、39、93-102。



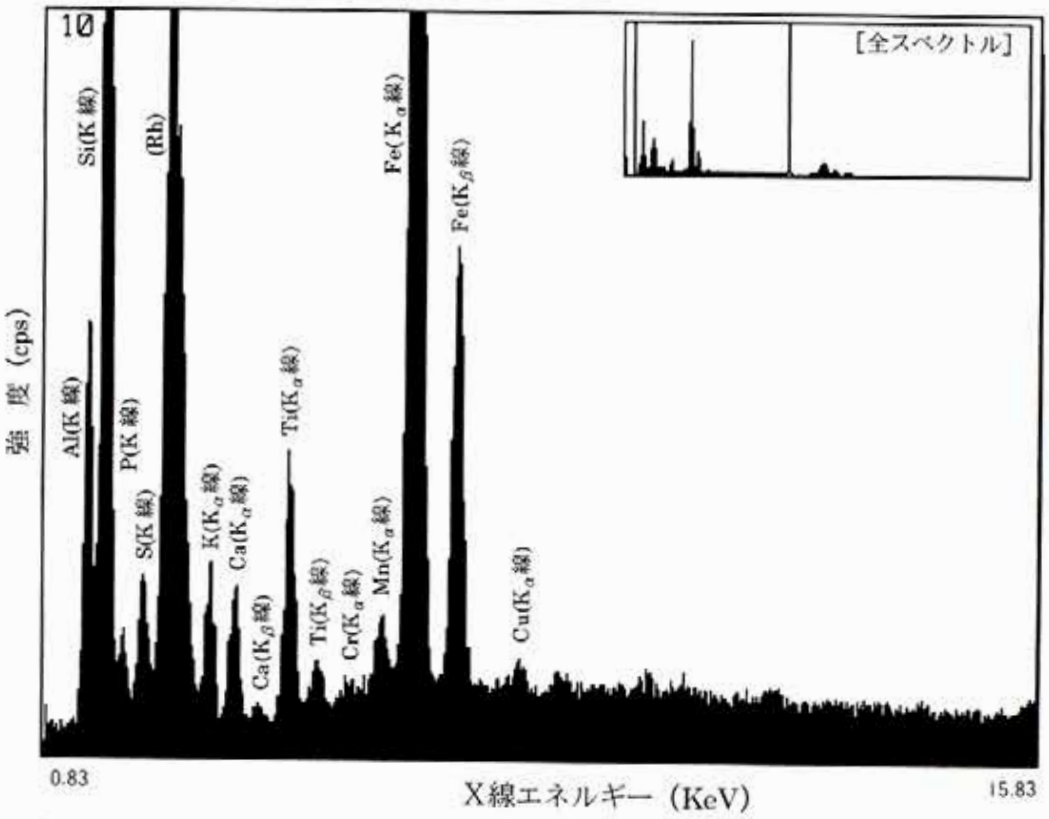
第114図　磨石１付着赤色顔料の蛍光Ｘ線スペクトル図
〔元素記号〕
Al:アルミニウム、Si:ケイ素、Fe:鉄、g:水銀、Rh:ロジウム(検出器から)



第115図　磨石2付着赤色顔料の蛍光X線スペクトル図

〔元素記号〕

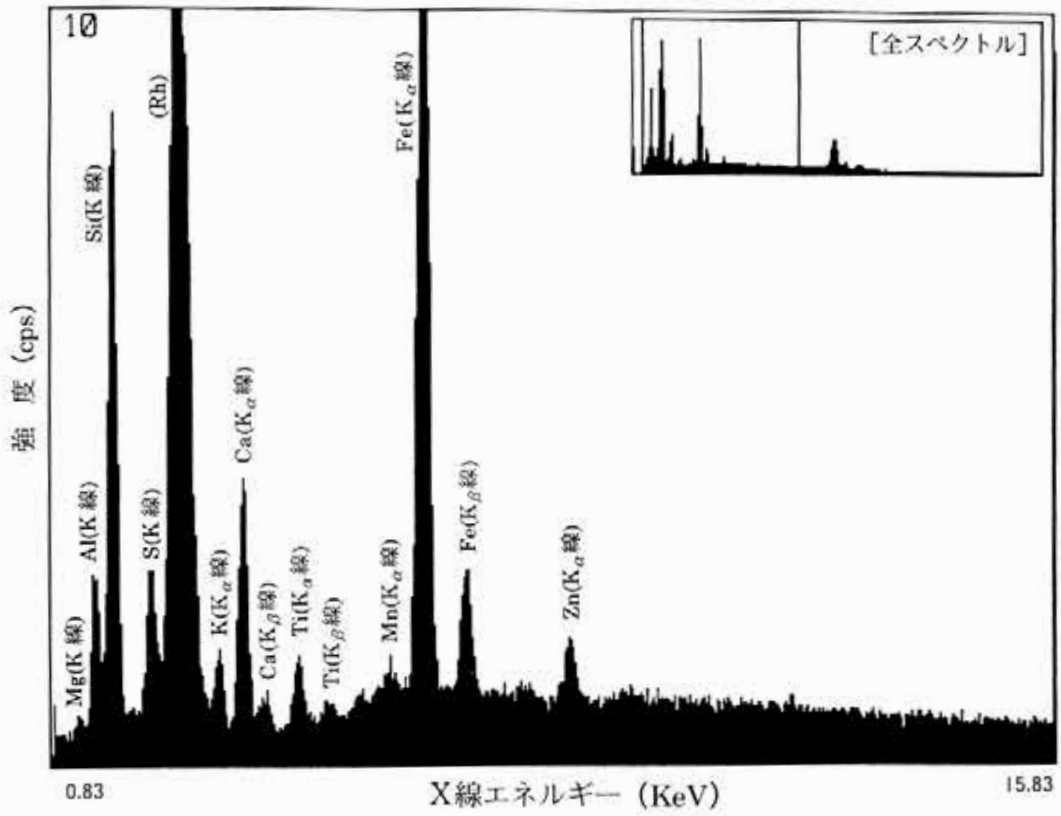
Mg:マグネシウム、Al:アルミニウム、Si:ケイ素、S:イオウ、K:カリウム、Ca:カルシウム、Ti:チタン、Mn:マンガン、Fe:鉄、Zn:亜鉛、Rh:ロジウム(検出器から)



第116図　磨石3付着赤色顔料の蛍光X線スペクトル図

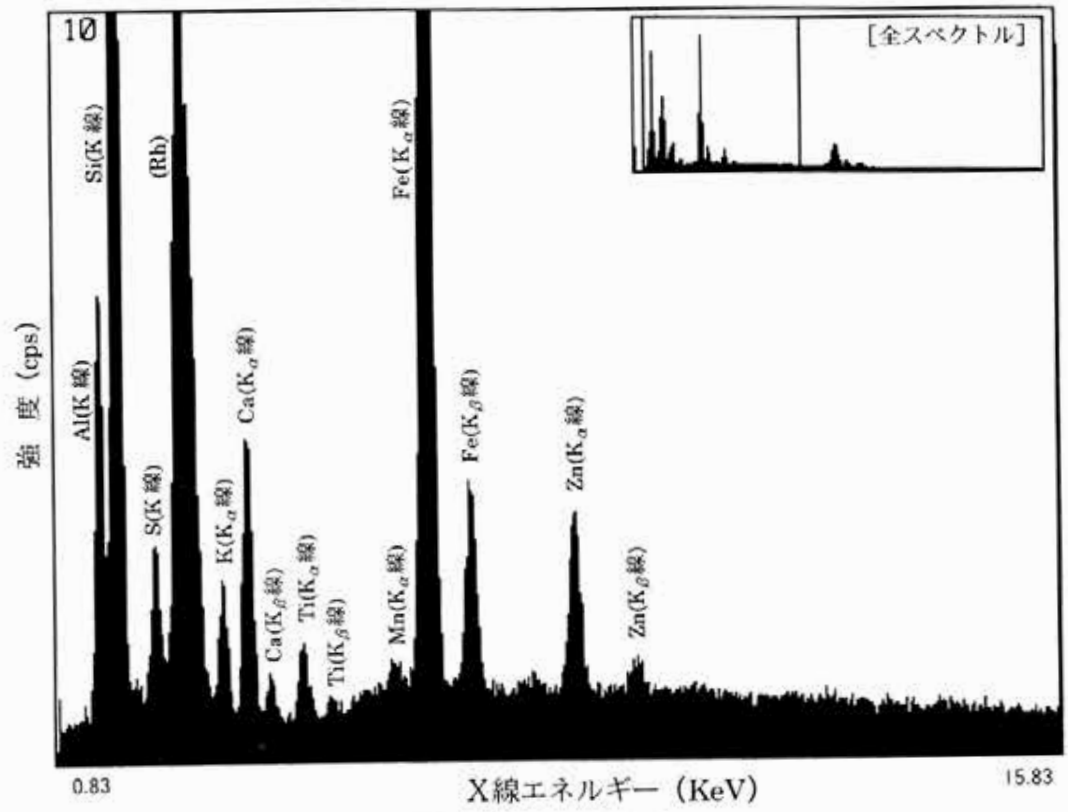
〔元素記号〕

Al:アルミニウム、Si:ケイ素、S:イオウ、K:カリウム、Ca:カルシウム、Ti:チタン、Mn:マンガン、Fe:鉄、Zn:亜鉛、Rh:ロジウム(検出器から)



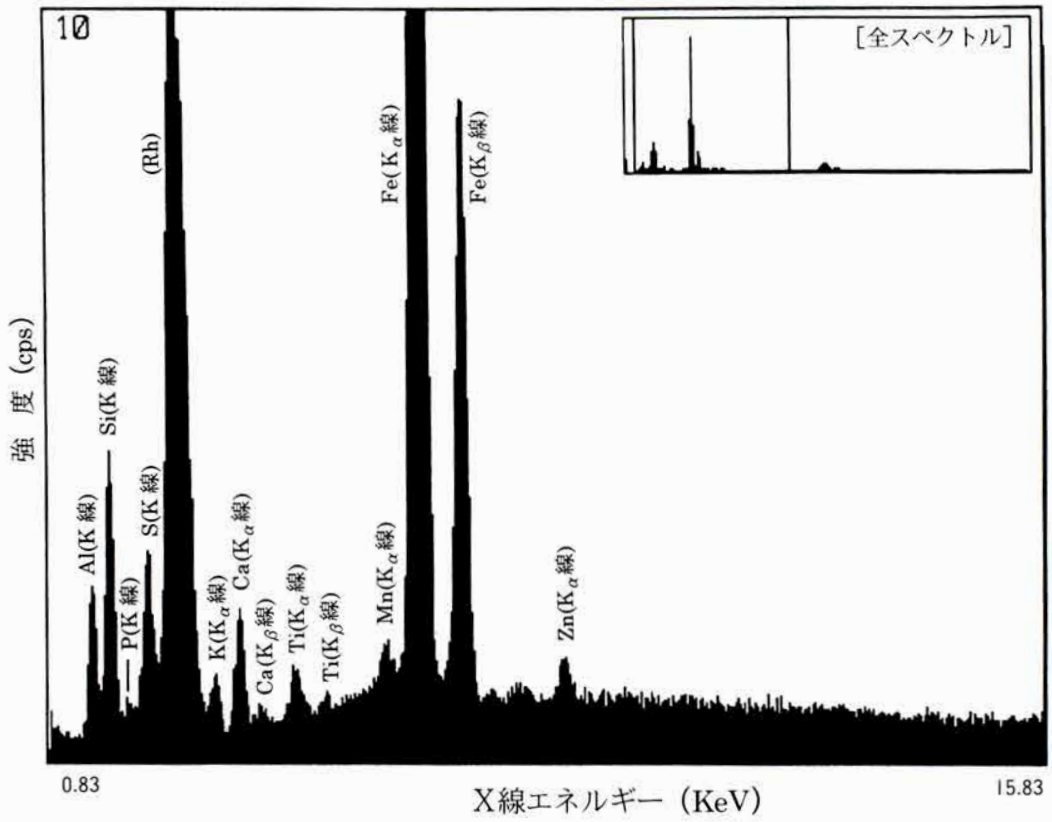
第117図　磨石４付着赤色顔料の蛍光Ｘ線スペクトル図

〔元素記号〕
Mg:マグネシウム、Al:アルミニウム、Si:ケイ素、S:イオウ、K:カリウム、Ca:カルシウム、Ti:チタン、Cr:クロム、Mn:マンガン、Fe:鉄、Zn:亜鉛、Rh:ロジウム（検出器から）



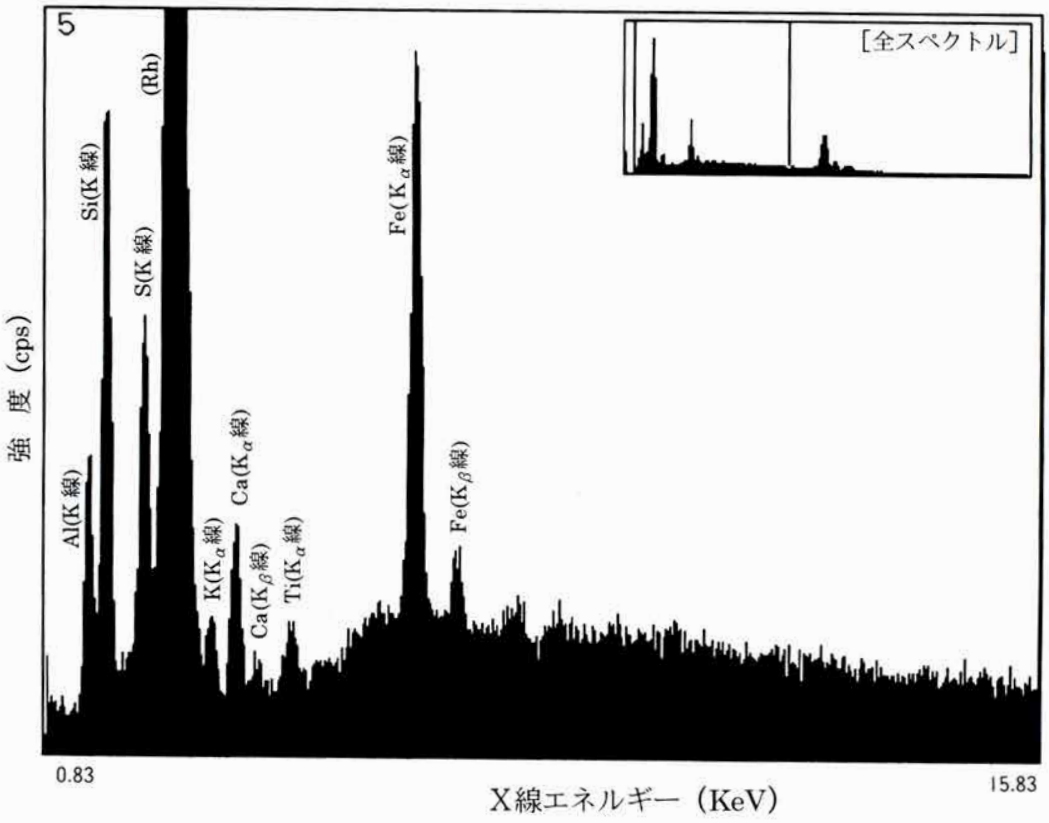
第118図　土器１付着赤色顔料の蛍光Ｘ線スペクトル図

〔元素記号〕
Al:アルミニウム、Si:ケイ素、P:リン、S:イオウ、K:カリウム、Ca:カルシウム、Ti:チタン、Cr:クロム、Mn:マンガン、Fe:鉄、Zn:亜鉛、Rh:ロジウム（検出器から）



第119図　土器2付着赤色顔料の蛍光X線スペクトル図

〔元素記号〕
Al:アルミニウム、Si:ケイ素、P:リン、S:イオウ、K:カリウム、Ca:カルシウム、Ti:チタン、Mn:マンガン、Fe:鉄、Zn:亜鉛、Rh:ロジウム(検出器から)



第120図　土器3付着赤色顔料の蛍光X線スペクトル図

〔元素記号〕
Al:アルミニウム、Si:ケイ素、S:イオウ、K:カリウム、Ca:カルシウム、Ti:チタン、Fe:鉄、Rh:ロジウム(検出器から)

第２節　いんべ遺跡出土炭化材の樹種同定および放射性炭素年代測定

植田弥生・藤根　久・山形秀樹（パレオ・ラボ）

１．はじめに

当遺跡は揖斐川上流の支流である西谷川の標高約400ｍ前後の段丘上に位置し、縄文時代早期から晩期の焼礫集積遺構・土器棺墓・配石土壙を検出している。当遺跡周辺の河川沿いには多くの遺跡が分布しており、縄文時代早期の焼礫集積遺構や中期の住居跡・土坑などから出土した炭化材の樹種の情報が蓄積されつつあり、当地区のこの時期の古植生や木材利用が明らかになりつつある。ここでは縄文時代早期後半から前期の、30Cグリットの Ｖ層から出土した炭化材２点と３基の焼礫集積遺構（ＳＩ１・ＳＩ２・ＳＩ４）から出土した炭化材複数の樹種同定結果を報告する。また、ＳＩ１から出土した炭化材を用いて放射性炭素年代測定を行い、考古遺物から推定されていた焼礫集積遺構の時期をクロスチェックした。

２．放射性炭素年代測定と結果

焼礫集積遺構ＳＩ１から出土した炭化材破片複数を処理し測定した。まず、アルカリ・酸処理を施して不純物を除去し、炭化処理をした後にリチウムと混合して反応管内に入れ真空ポンプで引きながら800℃まで加熱し炭化リチウム（カーバイド）を生成後、加水分解によりアセチレンを生成した。

約１ヶ月放置した後、精製したアセチレンを比例計数管（400CC）を用いてβ-線を計数し測定した（表41）。年代値の算出には^{14}Ｃの半減期として、Libbyの半減期5570年を使用した。また付記した年代誤差は、計数値の標準偏差σに基づいて算出し、標準偏差（One sigma）に相当する年代である。暦年代の補正は、大気中の^{14}Ｃ濃度が一定で半減期が5568年として算出された^{14}Ｃ年代値（yrBP）に対し過去の宇宙線強度の変動による大気中の^{14}Ｃ濃度の変動および半減期の違い（^{14}Ｃの半減期5730±30年）を補正してより正確な年代を求めたものである。補正暦年代の算出には、CALIB 3.0（Stuiver and Reimer、1993：IBM-PC 用）を使用した。交点年代値は、^{14}Ｃ年代測定値に相当する補正曲線上の年代値であり、１σ年代幅は^{14}Ｃ年代誤差に相当する補正曲線上の年代範囲を示す。年代を検討する場合は、68%の確率で１σ年代幅に示すいずれかの年代になる。暦年代の補正は約１万年前からAD 1950年までが有効である。

測定結果を表41にまとめた。遺構ＳＩ１から出土した炭化材の放射性炭素年代値は、縄文時代早期後半の年代に対応する7270±150 yrBPであった。考古遺物や発掘状況からは縄文時代早期後葉と考えられており、放射性炭素年代値もほぼこの時期を示す結果であった。

表41　いんべ遺跡焼礫集積遺構SI1出土炭化材の放射性炭素年代測定結果

測定No.	試　料	遺構	^{14}Ｃ年代測定値	補正暦年代
PLD-392	炭化材複数	ＳＩ１	270±150 yrBP （BC 5320 年）	交点年代値：BC 6110、6090、6050年 1σ年代幅　：BC 6210 to 5960

3．炭化材の樹種同定

1）試料と方法

試料は30Cグリットの V層から出土した2点と、焼礫集積遺構SI1・SI2・SI4から出土した燃料材と考えられる炭化材である。焼礫集積遺構から採取された炭化材は、個別に取上げられたものと、一括して採取されたものがある。炭化材は破片が散在して出土することが多く、元来の形状や数を正確に復元することは難しい。もとはひとつであった材が炭化後に割れて破片数が増えたり、割れた破片が飛散して分布位置が広がり複数のものとして認識される可能性も考えられる。また、樹種により炭化後の保存性が異なったり消失しやすい種類もあるかもしれないが、この点についてはほとんど調べられていない。従って現時点では検出樹種に偏りが出ない様、数量や樹種構成を反映できるよう、採取された炭化材は破片の大小にかかわらず同定することとした。一括採取された試料の中には接合はしないが同一の材が割れた可能性がある破片も見られたので破片数は特に記録せず、10点以上は多数、5～9点は複数、5点以下は特に数量は明記していない。各分類群ごとの炭化材片の形状や大きさの傾向も記録するよう努めた。

樹種同定は、炭化材の3方向（横断面・接線断面・放射断面）の断面を走査電子顕微鏡（日本電子㈱製　JSM-T100型）で観察して同定し、各分類群の写真撮影を行った。

残りの炭化材は、各遺構ごとに各分類群に小分けしてビニール袋に入れ、㈶岐阜県文化財保護センターに保管されている。

2）結果

炭化材の樹種同定結果の一欄を表42、各遺構ごとの検出された樹種構成を表43に示した。
また第121図に、遺構SI1から出土した炭化材の産状を示した。

30CグリットのV層（縄文時代早期の遺物包含層）から採取された炭化材2点は、カエデ属とコナラ節であった。

3つの焼礫集積遺構から出土した炭化材はすべて落葉広葉樹材であり、各遺構からは4～5分類群が検出され、合計10分類群が出土した。SI1からは、クリが最も多く、次にブナ属が多く、ほかにコナラ節とフジ属？が検出された。SI2も、クリが最も多く、次にブナ属が多く、ほかにコナラ節とケヤキが検出された。SI4は、ブナ属が最も多く、次にカエデ属、ほかにイヌシデ節・サクラ属・ナシ亜科が検出された。

SI1とSI2は隣接しており、出土樹種もクリが最も多く次にブナ属が多いという共通点が見られた。最も多く出土したクリは、単独で取り上げた試料においても一括して取り上げた試料においても最も多く検出されている。SI1とSI2から約20m南西に位置し、規模の小さいSI4は、ブナ属とカエデ属が多くクリは検出されず、クリとブナ属が多いSI1とSI2とはそのほかの樹種もやや異なる傾向が見られた。全般に炭化材の横断面の形状や年輪線のカーブから推定される材の太さは、直径が10cm以下で、年輪数も20年以下が多かった。

SI1は比較的保存状況が良く炭化材の産状がとらえられている（第121図）。焼礫集積遺構の土坑底部付近と地山の砂礫層との境に焼土層があり、その上部に炭化材を多く含む層があり、さらにその上位は礫の大きさや土色により3層に区分される。SI1で検討した炭化材のうちの試料A～Nは、焼土層の上位の炭化材を多く含む層から採取されたものである。

同定された樹種の材組織記載

① オニグルミ　*Juglans mandshurica Maxim. subsp. sieboldiana* (Maxim.) Kitamura　クルミ科　図版68　1a.-1c.(S I 2)

単独あるいは2～3個が複合した中型で楕円形の管孔が散在し年輪界では径が減じ、接線状柔組織が顕著な散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、チロースが顕著である。放射組織はほぼ同性または上下端部に方形細胞がある異性、3細胞幅が多い。

オニグルミは暖帯から温帯のやや湿った所に生育する落葉高木である。

② クマシデ属イヌシデ節　*Carpinus sect. Eucarpinus*　カバノキ科　図版68　2a.-2c.(S I 4)

放射組織が集合する部分と2～数個の小型の管孔が主に放射方向に複合して配列する部分とがある放射孔材。ピスフレックが現われる。道管の壁孔は小型で交互状に密在、穿孔は単一である。放射組織は方形細胞が混じるがほぼ同性、1～2細胞幅、道管との壁孔はやや大きい。集合放射組織があり、穿孔も単一であることから、イヌシデ節と同定した。なおクマシデ節は集合放射組織の出現頻度が低く、穿孔は横棒が10本以下の階段状のものが多いことで区別している。

クマシデ節は暖帯および温帯の山地に生育する落葉高木または大形低木で、山野に普通のイヌシデとアカシデ、乾いた山稜に生育するイワシデがある。

③ ブナ属　*Fagus*　ブナ科　図版68　3a.-3c.(S I 2)

小型の管孔が密在し徐々に径を減じてゆき、年輪界付近では極めて小型となり分布数も減る散孔材。道管の壁孔は交互状で孔口がレンズ状に水平に大きく開く部分があり、穿孔は階段数が10～20本の階段状と単穿孔が見られる。放射組織は異性、1～3細胞幅のものと幅が広く背の高い広放射組織があり上下端に方形細胞が見られ、道管との壁孔は大きなレンズ状である。

ブナ属は温帯域の極相林の主要構成樹種で、大木となる落葉樹である。北海道南部以南の肥沃な山地に群生するブナと、本州以南のおもに太平洋側に分布しブナより低地から生育しているイヌブナの2種がある。

④ コナラ属コナラ亜属コナラ節　*Quercus. subgen. Quercus* sect. *Prinus*　ブナ科　図版69 4a.-4c.(30C V層)

年輪の始めに大型の管孔が配列し、晩材部では薄壁・角形で小型の管孔が火炎状・放射方向に配列する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にチロースがある。放射組織は単列のものと広放射組織・複合状のものとがある。

コナラ節は暖帯から温帯に生育する落葉高木でカシワ・ミズナラ・コナラ・ナラガシワがある。

⑤ クリ　*Castanea crenata* Sieb. et Zucc.　ブナ科　図版69　5a.-5c.(S I 2)

年輪の始めに中型～大型の管孔が密に配列し徐々に径を減じてゆき、晩材部では非常に小型の管孔が火炎状に配列し、柔組織が接線状に配列する環孔材。道管の壁孔は小型で交互状、穿孔は単一、内腔にはチロースがある。放射組織は単列同性、道管との壁孔は孔口が大きく交互状である。

クリは北海道西南部以南の暖帯から温帯下部の山野に普通の落葉高木である。

⑥ ケヤキ　*Zelkova serrata* (Thunb.) Makino　ニレ科　図版71　10a.-10c.(S I 2)

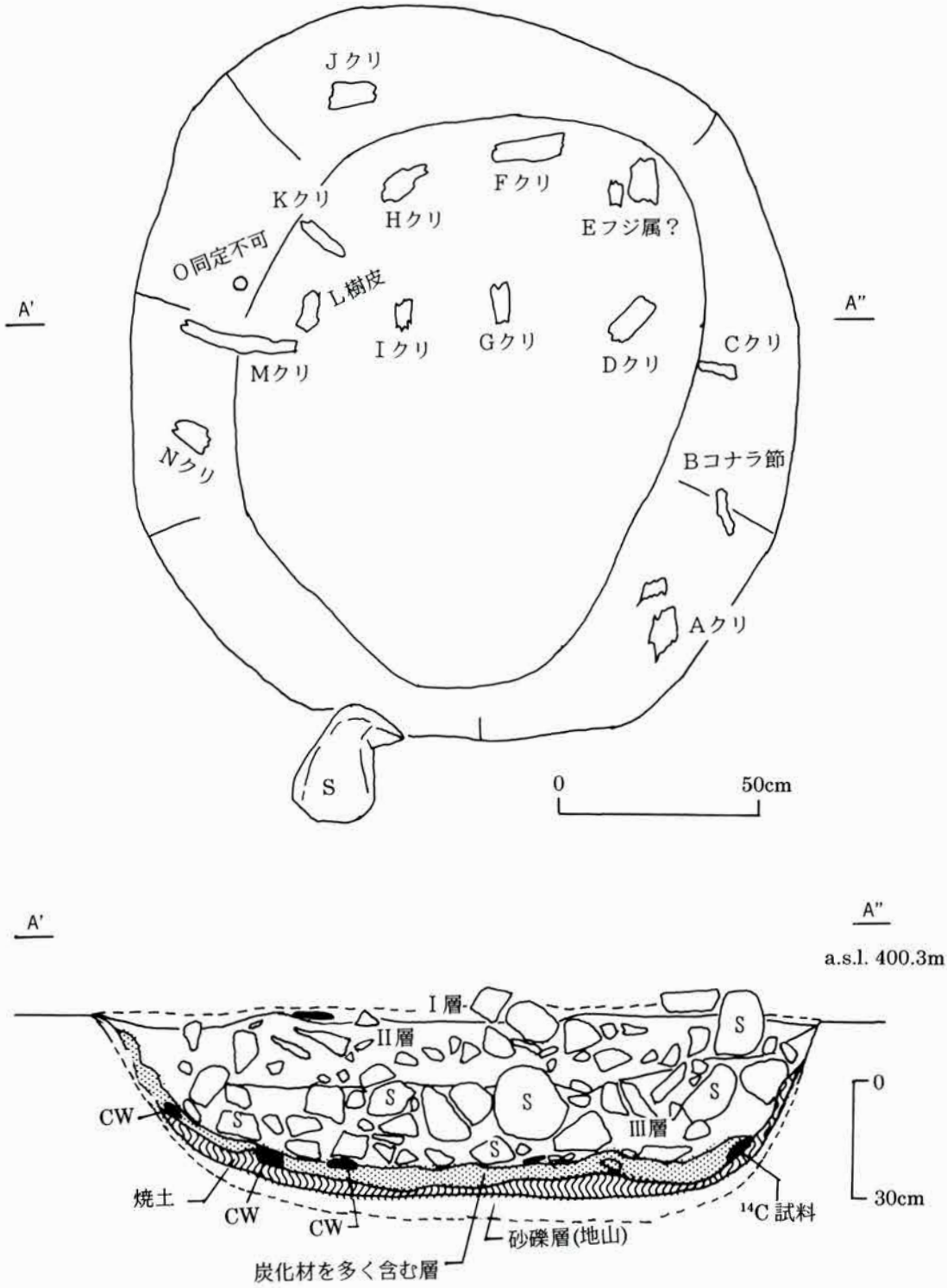
年輪の始めに中型の管孔が分布し、晩材部は非常に小型の管孔が単独または2～複数が複合し斜状に分布し、周囲柔組織が顕著な環孔材。道管の壁孔は交互状。穿孔は単一である。放射組織は異性、

表42　いんべ遺跡焼礫集積遺構 ＳＩ１・ＳＩ２・ＳＩ４出土炭化材の樹種同定結果一覧

一括採取試料の同定結果は、破片試料数がおおよそ多い分類群から記した。

（ φ：直径、 r：横断面の放射方向の径）

遺構	試料	樹　種	形　状　備　考
ＳＩ１	Ａ	クリ	φ３cm　７年輪
ＳＩ１	Ｂ	コナラ節	r4.5cm
ＳＩ１	Ｃ	クリ	破片
ＳＩ１	Ｄ	クリ	破片　ぬか目
ＳＩ１	Ｅ	フジ属？	r3.5cm
ＳＩ１	Ｆ	クリ	r3.5cm　11年輪
ＳＩ１	Ｇ	クリ	破片
ＳＩ１	Ｈ	クリ	破片
ＳＩ１	Ｉ	クリ	破片
ＳＩ１	Ｊ	クリ	破片
ＳＩ１	Ｋ	クリ	φ２cm　９年輪
ＳＩ１	Ｌ	樹皮	破片
ＳＩ１	Ｍ	クリ	破片
ＳＩ１	Ｎ	クリ	破片
ＳＩ１	Ｏ	不可	微破片・保存悪い
ＳＩ１	一括	クリ	φ直径２cm・12年輪の丸木、大小破片多数
ＳＩ１	一括	ブナ属	φ直径２cm・17年輪、大小破片複数
ＳＩ１	一括	フジ属？	大小破片多数
ＳＩ２	№3	クリ	
ＳＩ２	№4	クリ	
ＳＩ２	№5	ブナ属・クリ	
ＳＩ２	一括	クリ	大小破片複数
ＳＩ２	一括	ブナ属	φ２cm・17年輪、大小破片複数
ＳＩ２	一括	オニグルミ	小破片複数
ＳＩ２	一括	コナラ節	小破片１
ＳＩ２	一括	ケヤキ	小破片２
ＳＩ４	一括	ブナ属	大小破片多数
ＳＩ４	一括	カエデ属	大小破片複数
ＳＩ４	一括	サクラ属	小破片複数
ＳＩ４	一括	ナシ亜科	小破片複数
ＳＩ４	一括	イヌシデ節	破片
30Ｃ	Ｖ層№1	カエデ属	
30Ｃ	Ｖ層№2	コナラ節	



第121図　いんべ遺跡焼礫集積遺構SI1出土炭化材の産状

上図：底部から出土した炭化材A～Oの位置と樹種

下図：断面図　⋚⋚⋚：焼土　▒：炭化物を多く含む層

S(白抜き)：石　CW：炭化材

主に5細胞幅の紡錘形で上下端や縁に結晶細胞がある。

ケヤキは本州以南の温帯から暖帯下部の山地や丘陵地に普通に生育する落葉高木である。

⑦　サクラ属　*Prunus*　バラ科　図版69　6a.-6c.(SI4)

小型の管孔が年輪の始めにやや密に分布し、その後放射方向・接線方向・斜状に複合し分布している散孔材。道管の壁孔は対列状または交互状、穿孔は単一、内腔にせん肥厚がある。放射組織はほぼ同性、1～5細胞幅、道管との壁孔は小型で密在する。

サクラ属は暖帯から温帯の山地に生育する落葉広葉樹林の代表的な属でありヤマザクラ・ウワミズザクラなど多くの種があり、モモ・ウメ・スモモなどの栽培種も含まれる。

⑧　ナシ亜科　Rosaceae subfam. Maloideae　バラ科　図版70 7a.-7c.(SI4)

円形で小型の管孔が年輪の始めはやや密に分布し、晩材部では分布数が少なくなり孔口も小さくなり、管孔は単独または2～3個が複合している散孔材。木部柔組織はあまり目だ立たない。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔にらせん肥厚がある。放射組織は異性、1～2細胞幅、道管との壁孔は小型で交互状である。

ナシ亜科にはカナメモチ属、ナナカマド属、カマツカ属、リンゴ属、ナシ属などがあるが、いずれも材構造は類似しており識別できない。

⑨　フジ属？　*Wisteria*　？　マメ科　図版70　8a.-8c.(SI-E)

中型～大型の管孔が主に単独で分布し小型の管孔が混在する環孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、小道管にらせん肥厚がある。放射組織は同性、主に3細胞幅、道管との壁孔は交互状である。全体に保存状況が悪く破片も小さいためかフジ属の特徴の一つである木繊維の層階性は確認できなかったため、フジ属とは断定できなかった。

本州以南の暖帯から温帯の林縁の樹木に巻き付き生育する落葉性ツル植物であり、本州以南に分布するフジと兵庫県以西の分布するヤマフジがある。

⑩　カエデ属　*Acer*　カエデ科　図版70　9a.-9c.(30C V層)

小型の管孔が単独または2～3個が放射方向に複合して散在し、帯状柔組織がある散孔材。道管の壁孔は交互状、穿孔は単一、内腔に細いらせん肥厚がある。放射組織は同性、1～3細胞幅、道管との壁孔は交互状で孔口はやや大きい。

カエデ属は日本全土の暖帯から温帯の山地や谷間に生育し、落葉広葉樹林の主要構成樹であり、約26種と多くの変種が知られている。

4．まとめ

現在の当遺跡周辺はスギ・ヒノキの植林やミズナラ・クリなどの2次林が見られるが、潜在自然植生はブナ・ミズナラなどの冷温帯落葉樹林とクリを中心とする中間温帯林であり、このような森林域の広がりも見られる。縄文時代早期後葉の焼礫集積遺構から出土した燃料材と考えられる炭化材は、クリとブナ属が圧倒的に多くこれらが当時の主要燃料材であったことが判った。そしてこの他にも少量ながら、オニグルミ・イヌシデ節・コナラ節・ケヤキ・サクラ属・ナシ亜科・フジ属？・カエデ属が検出された。当遺跡から約6㎞下流の上開田村平遺跡からも、多数の炭化材を伴った縄文時代早期の焼礫集積遺構（SI3）が出土し、炭化材樹種同定が行われた（第6集）。上開田村平遺跡の焼礫集

表43　いんべ遺跡焼礫集積遺構出土炭化材の樹種構成

○：検出された分類群

●：各遺構で量・数が最も多く検出された分類群

◎：二番目に多い分類群

分類群	ＳＩ１	ＳＩ２	ＳＩ４
オニグルミ		○	
イヌシデ節			○
ブナ属	◎	◎	●
コナラ節	○	○	
クリ	●	●	
ケヤキ		○	
サクラ属			○
ナシ亜科			○
フジ属？	○		
カエデ属			◎

積遺構は深さは約20cmであるが同様な遺構に比べ径が約４ｍもある大型のものであり、焼礫を除いた底部からは多数の炭化材が検出された。その炭化材173点の樹種同定結果は23分類群が検出され、クリとブナ属が圧倒的に多く次にヤシャブシ亜属とカエデ属が多く、その他はコナラ節・エノキ属・カツラ・トネリコ属・ケヤキ・トチノキ・コシアブラなど落葉広葉樹がほとんどで、それらの樹種構成も冷温帯落葉広葉樹林や中間温帯林の組成と非常によく一致していた。 これらの調査結果から縄文時代早期後葉の当地区は、樹種構成の豊富な冷温帯落葉広葉樹林や中間温帯林の環境下にあり、当時の人々はその森林から複数の樹種を燃料材として利用していたが、特にクリとブナ属を多く利用していたことが判った。

当遺跡の３基の焼礫集積遺構からは、それぞれ４～５分類群の炭化材が検出された。千野（1983）は、一定地域において縄文人の用材選択とその周辺植生との関係を考察するために、おもに関東地方の遺跡報告書資料を集積し、炉穴・集石・住居跡の燃料材や建築材の樹種を検討している。その結果、燃料材はクリが多用されており、また一つの遺構から検出される樹種は１～２種類と少ないことが指摘された。クリの多用は当遺跡と上開田村平遺跡においても特徴的であり、縄文時代には燃料材にクリが多用されていた地域は関東地方のみならず当地域も同様であったことが判った。当地域ではクリと同様にブナ属も多用されており、ブナ属の多用は関東地方では見られず、当地域の特徴であった。また当遺跡では一つの遺構から４～５分類群が検出され、関東地方の１～２種類よりやや多い傾向を示していた。各遺構ごとに検出される樹種構成が少しずつ異なるが、一つの遺構から出土する樹種数はいずれも少ないということは、一度に燃やす材の樹種はそのつど限定されていたことの現われかもしれない。

引用文献

千野裕道、1983、縄文時代のクリと集落周辺植生―南関東地方を中心に―、25-42、図版1-4、「研究論集Ⅱ」、財団法人東京都埋蔵文化財センター

（財）岐阜県文化財保護センター、1999「上開田村平遺跡」

第７章　まとめと考察

平成２年度に行われた「いんべ遺跡」Ｃ地点の発掘調査によって検出された層序、遺構、そして出土遺物の概要は次のように要約できるであろう。

本遺跡では高さの異なる３枚の水田面を調査した。上の段の基本的層序は、表土および耕作土（第Ⅰ層）と、敷土（第Ⅰ'層）、開田の際の盛り土（第Ⅱ層）、暗褐色土（第Ⅲ層）、褐色土（第Ⅳ層）、褐色砂礫土（第Ⅴ層）、そして黄褐色砂礫土（第Ⅵ層）で、第Ⅲ層が主に中期の遺物包含層、第Ⅳ・Ⅴ層が主に早・前期の遺物包含層と考えられる。

上の段では、４基の焼礫集積遺構を検出した。山側で検出した２基（ＳＩ１・２）は径約２ｍと比較的大きなもので、土坑内には多数の焼礫が充填されており、炭化物も多数みられた。ＳＩ１内の炭化物を分析したところ、大半はクリであった。また、放射性炭素年代測定を行ったところ、7,270±150yr ＢＰという結果が得られた（第６章）。上の段では、主に第Ⅳ層より、約1,500点と多数の早期の土器が出土した。中でも、押型文終末期と考えられる穂谷式土器がまとまって出土したことは特筆でき（後述）、高山寺式土器（新段階）との伴出もみられた。また、八ッ崎Ⅰ式、粕畑式、上ノ山式、入海式、石山式、塩屋下層式、天神山式、塩屋上層式といった早期末葉の東海条痕文系土器が連続してみられたことも本遺跡の特徴の一つであり、同じ西谷の約４㎞下流に位置する「小の原遺跡」（第２集）との関連が注目されるところである。上の段の第Ⅲ層および第Ⅱ層（盛り土）からは、中期後半の土器も多数（約2,700点）出土した。中でも、撚糸文を地文とする里木Ⅱ式土器が主体を占め、船元Ⅳ式土器もかなりみられた。この時期の活発な営みが想定されるが、開田の際の削平により、遺構は飛ばされたと考えられ、遺物の大半も川側の盛り土より出土した。なお、上の段から出土した前期初頭の清水ノ上Ⅱ式土器・中期前半の北屋敷Ⅱ式土器の器形復元（主に口縁部）が進み、これまで徳山地域であまり知られていなかった概期の良好な資料をえることができた。

次に下の段について述べる。下の段の基本的層序は、表土および耕作土（第Ⅰ層）と敷土（第Ⅰ'層）、開田の際の盛り土（第Ⅱ層）、暗褐色～黒褐色土（第Ⅲ層）、そして黄褐色砂礫土（第Ⅳ層）で、第Ⅲ層（上の段の第Ⅲ層とは対応しない）が主に後期後葉から晩期にかけての遺物包含層と考えられる。下の段では、土器棺墓11基、土器集中区１ヶ所、配石土壙３基、土坑・ピット240基を検出した。土器棺墓は下の段でも中央やや北東寄りの比較的狭い範囲内（約10ｍ四方）に分布しており、この範囲が墓域であったと考えられる。土器棺に利用されていた土器は、晩期中葉の滋賀里Ⅲｂ式・稲荷山式のものが主体を占め、その埋設状況としては、斜位と横位が中心で、「合わせ蓋」の土器棺が５例みられた。また、土器棺の主軸の方向にも直交する２群が認められた。長方形プランの両端に扁平な川原石の立石を伴う、「配石土壙」３基も土器棺墓に近接して検出し、土壙墓と考えられる。なお、下の段で検出した土坑・ピットの配置に直径４～５ｍ程の環状構造もみられ、環状土壙墓群の可能性も考えられる。楕円形を呈する土坑・ピットの主軸には偏りがみられ、一定の方向を意識して構築されたと考えられる。下の段では、後期後葉から晩期にかけての土器が多数出土した。特に前述の土器棺に利用されていた晩期中葉の滋賀里Ⅲｂ式・稲荷山式土器の器形復元がかなり進み、後述するように晩期中葉の土器の様相がわかってきた。同じ西谷の役５㎞下流に位置する「はいづめ遺跡」（第１集）や、「戸入村平遺跡」（第４集）でも多数の土器棺墓を検出し、その中には晩期中葉の稲荷山式か

ら西之山式にかけての土器もみられ、その関連が注目されるところであるが、本遺跡で出土した滋賀里Ⅲｂ式・稲荷山式期の土器は、「はいづめ」・「戸入村平」両遺跡で出土した概期の土器群に（重なりつつも）やや先行すると考えられる。下の段では、後期後葉の凹線文系の土器も比較的まとまって出土し、注口土器の大型片も出土した。さらには、後期末葉～晩期前葉にかけての八日市新保式～御経塚式、晩期中葉の中屋式（含大洞系）といった北陸系の土器もみられ、これらの有文土器には赤色顔料の塗られたものもみられた（赤色顔料付着遺物については、後で述べる）。また、晩期末葉の突帯文系の土器も出土し、この時期を中心とする浅鉢も比較的多数みられた。この中では、西日本で突帯文系の土器に伴出する「逆く字形波状口縁方形浅鉢」が徳山地域で初めて出土したことが特筆される。

次に石器についてみてみると、本遺跡では5,169点（上の段から4,018点、下の段から1,111点、表採40点）の石器および剥片・石核類が出土した。石鏃・凹石類・切目石錘の出土が多かったが、早期や中期の土器が多数出土した上の段では、石鏃・切目石錘・凹石類・スクレイパー・石錐の出土の割合が高く、後期後葉から晩期の土器が多数出土した下の段では、凹石類・石鏃の出土の割合が高いという違いがみられた。こうした地点（上の段と下の段）による様相の違いは、石器の石材についてもみられた。即ち、サヌカイトおよび下呂石の石器はそのほとんどが下の段からの出土であった。また、本遺跡では163点という多数の凹石類が出土した。特に下の段から出土した102点は、下の段の石器組成の約40％を占め、「はいづめ遺跡」（第１集）と同様に（後期後葉～）晩期の中心的な石器であったと考えられる。本報告書では、凹石類について種々のデータを基に分類し、考察を試みた。その骨子については後述するが、詳細については本文を参照されたい。

概要については以上の通りであるが、整理の過程で見えてきた点、考えた事について、以下項目を立てて紙幅の許す限り記述する。

1　土器について

(1)　いんべ遺跡で出土した穂谷式土器について

本遺跡では、穂谷式土器が比較的まとまって出土した。穂谷式土器については、押型文土器の最終段階に位置づけられているが、これまであまりまとまった出土に恵まれず、その全体像については十分にわかっていなかった土器型式である。そこで本報告では、可能な限り、穂谷式と考えられる土器片の掲載を心掛けるとともに、全体像を把握するために、多数の破片の出土した個体については極力図上での推定器形復元も試みた（Ⓐ～Ⓓ）。こうした整理を踏まえて、本遺跡で出土した穂谷式土器についてまとめてみると、口縁部は外反し、波状口縁と平口縁とがみられ、波状口縁を呈する(Ⓓ)や(Ⓑ)は、口縁部には突帯を持たず、外面には縦位の山形文、口縁部内面には横位の山形文が充填され、口唇部には連続刺突、刻みが施されている。そして胴部には粘土のつなぎ目を重ねることによって屈曲部を強調したと考えられる突帯状の屈曲部がみられ、屈曲部上には山形文を充填している。屈曲部以下は無文である。この２点は厚手で胎土には角閃石を含む。（穂谷式でもより古い段階と考えられる。[1]）このうち(Ⓓ)は高山寺式土器でも新しい段階と考えられている(50・51)と共に出土し、現場での出土状況よりその併行関係がいえそうである。一方、平口縁もしくは小波状口縁を呈し、口

縁部に折り返し口縁状の肥厚帯をもつ(Ⓒ)や、口縁部に粘土を貼付した肥厚部を沈線で二分した(74)～(76)、さらには口縁部に2条の隆帯（突帯）を持つ(77)～(80)は、肥厚帯や隆帯上に山形文の充填や、箆状工具による刻みが施され、その下には山形文を縦位に充填している。そして口縁部内面には横位の山形文が充填されている。(Ⓒ）の胴部には、肥厚した屈曲部がみられ、屈曲部上には山形文の充填や、箆状工具による刻みが施されており、屈曲部以下は無文である。これらは(Ⓓ)や(Ⓑ)と比べてやや薄手で、胎土には角閃石を含むものの(Ⓒ)には角閃石がみられない。以上口縁部が残り、比較的全体像の推定できる穂谷式土器について概観してきたが、これらの編年について若干言及するならば、波状口縁を呈し、口縁部には突帯をもたず、胴部に屈曲部を強調した肥厚部がみられ、厚手の(Ⓓ)や(Ⓑ)が古く、平口縁もしくは小波状口縁を呈し、口縁部に肥厚帯や隆帯（突帯）をもつ、やや薄手の(Ⓒ)や(74)～(82)が新しいと考えられる。さらに、後者のうち、口縁部の肥厚帯については、型式学的に1条の肥厚帯が古く、それを2分した(74)、さらには完全に2条の(77)～(80)がより新しいと考えられる。[1]（Ⓓ)や(Ⓑ)、そして(74)～(82)、さらには(Ⓐ)の胎土には角閃石の混入がみられ、このことも当地域でみられる穂谷式土器の特徴の一つと考えられる。[2]

1）穂谷式土器については、小笠原永隆氏・矢野健一氏・泉拓良氏および当センターの早野壽人より貴重な助言を多数賜った。特に本遺跡で出土した穂谷式土器の編年に関しては、矢野氏の助言による処が大であることを記し、感謝の意を表する次第である。と同時にこれ以上の分析ができなかったことは、筆者の力量不足によるものであることをお断りしたい。今後、穂谷式土器の位置づけを含めた編年研究のより一層の進展を切望するものである。

2）徳山地区西谷の「小の原遺跡」で出土した概期の土器の胎土にも、角閃石の混入がみられる。

(2)　土器棺墓に利用されていた土器について

本遺跡で出土した土器棺墓に利用されていた土器の多くは、晩期中葉の粗製土器で、滋賀里Ⅲｂ・稲荷山期のものと考えられる。これらの土器の特徴についてまとめると、口縁部は頸部から外反気味に立ち上がり、口縁部に最大径を持つ場合が多い。口縁端部は尖り気味に外反するものが多くみられる。その一方で、端部を平坦に仕上げたり、端面に押し引き状の刺突や刻みを施す例もみられ、これらはやや新しい様相と考えられる。胴部は膨らみを持ち、口径と同じくらいの径を持つものが多いが、中には胴部に最大径を持つものもみられる。底部は尖底で、先端部がやや凹むものがほとんどである。調整手法は、口縁部には箆状工具による横位の削りが施され、頸部から胴部にかけては斜位および縦位の粗いミガキを（底部から口縁部の方向に）施し、底部付近には回転箆削りを施すものが多い。内面は、口縁部に横位の幅狭な削りを施す。内外面に輪積み痕の残るものが多数みられ、このことから、さほど丁寧な調整は行われていないようである。また、二枚貝による条痕調整はほとんどみられなかった。土器は薄手のものが多く、粗製土器であるが、焼成は比較的良好で、色調は黄色からにぶい橙色を呈し、胎土には長石や金雲母を含んでいる場合が多い。

ところで、徳山地区の西谷では、はいづめ遺跡（1989）や戸入村平遺跡（1994）でも多数の土器棺墓が検出され、その中には、晩期中葉の稲荷山式から西之山式の土器も利用されていた。これらの土器は、口縁端部が平坦に調整され、貝殻腹縁による押し引きや、棒・箆状工具による連続圧痕を施す

ものもみられる。また、口縁部の内面に１条の凹線を引くものもみられる。調整手法としては、二枚貝による条痕調整が施されるものがみられるようになる。これらは、西之山式の特徴であり、滋賀里Ⅲｂ式でも新段階と考えられる。従って、いんべ遺跡で出土した滋賀里Ⅲｂ式・稲荷山式期の土器群は、はいづめ・戸入村平遺跡で出土した概期の土器群に、重なりつつもやや先行すると考えられる。

2　石器について

(1)　各石器の出土地点

本石器で出土した石器の出土地点をグリッド別に示したものが第114・115図である。これを見ると石錐（114―２図）、スクレイパー（114―３図）ピエス・エスキーユ（114―４図）、打欠石錘（115―７図）異形石器（115―12図）は上の段からの出土が多い。一方 、打製石斧（114―５図）、磨製石斧（114―６図）、石皿（115―10図）、石製品（115―11図）、擦り切り砥石（115―12図）は下の段からの出土が多く、特に石製品はすべてが下の段からの出土である。石鏃（114―９図）、切目石錘（115―８図）、凹石類（115―９図）は、上の段、下の段の両方から多数出土しているが、切目石錘は上の段、凹石類は、下の段からの出土がやや優勢である。以上のように、各石器の器種ごとの出土地点には差位がみられた。

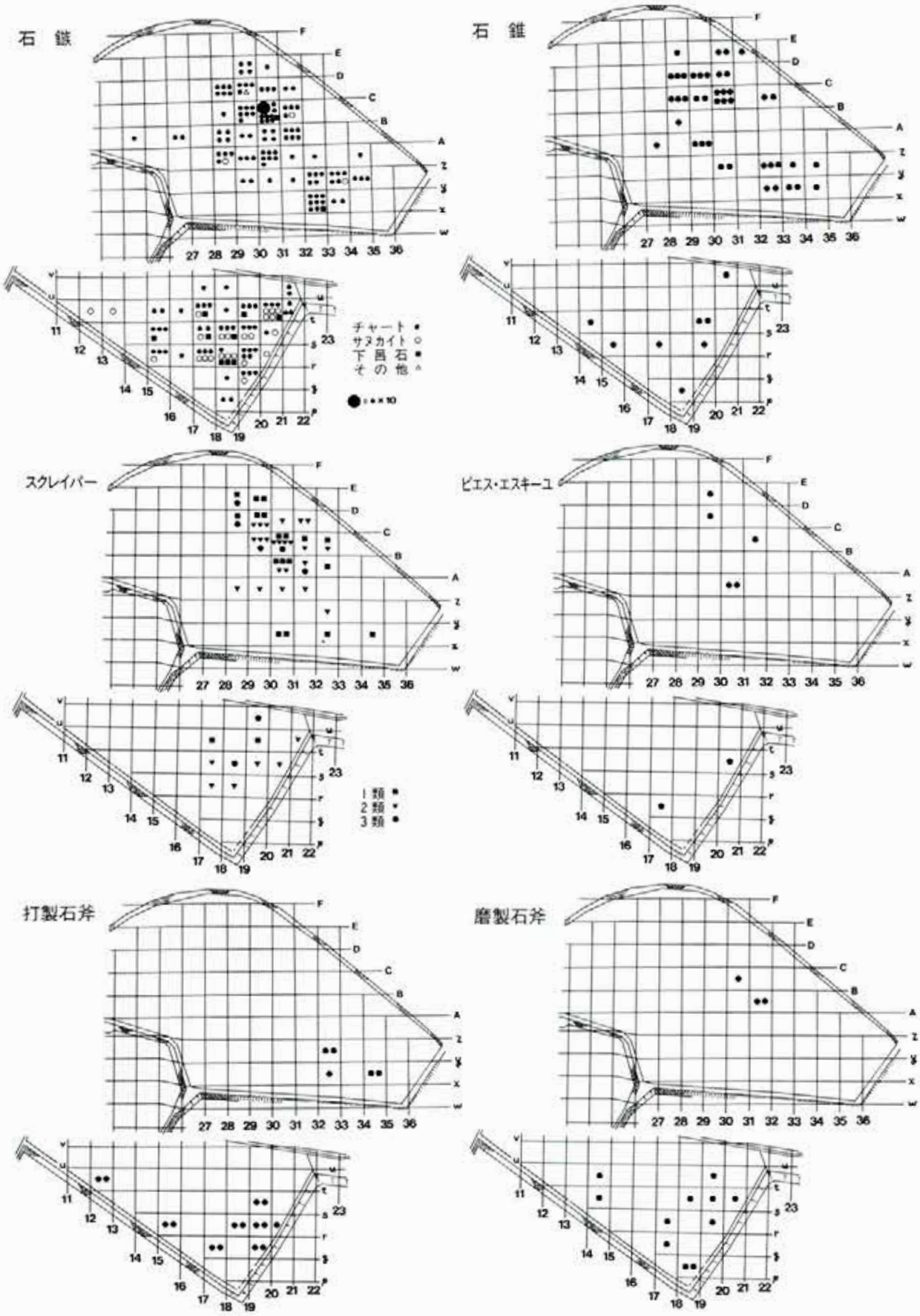
(2)　各時期の石器組成について

(1)でみられた出土地点の差は、上の段が早期・中期の土器を主体とし、下の段が後期後葉から晩期の土器を主体とした（第５章、第２節）ことから時期差によると考えられる。上の段から出土した4,016点（遺構出土石器も含む）のうち石核、ＲＦ、ＵＦ、剥片を除いた390点の組成は第71図②（Ｐ115）の通りである。これを見ると、上の段では石鏃、切目石錘、凹石類、スクレイパー、石錐の出土の割合が高い。上の段では、早期と中期の土器が出土し、石器もこれらの時期と考えられ、石鏃、スクレイパー、石錐は主に早期、切目石錘は主に中期と予想出来るが、その特定はできなかった。

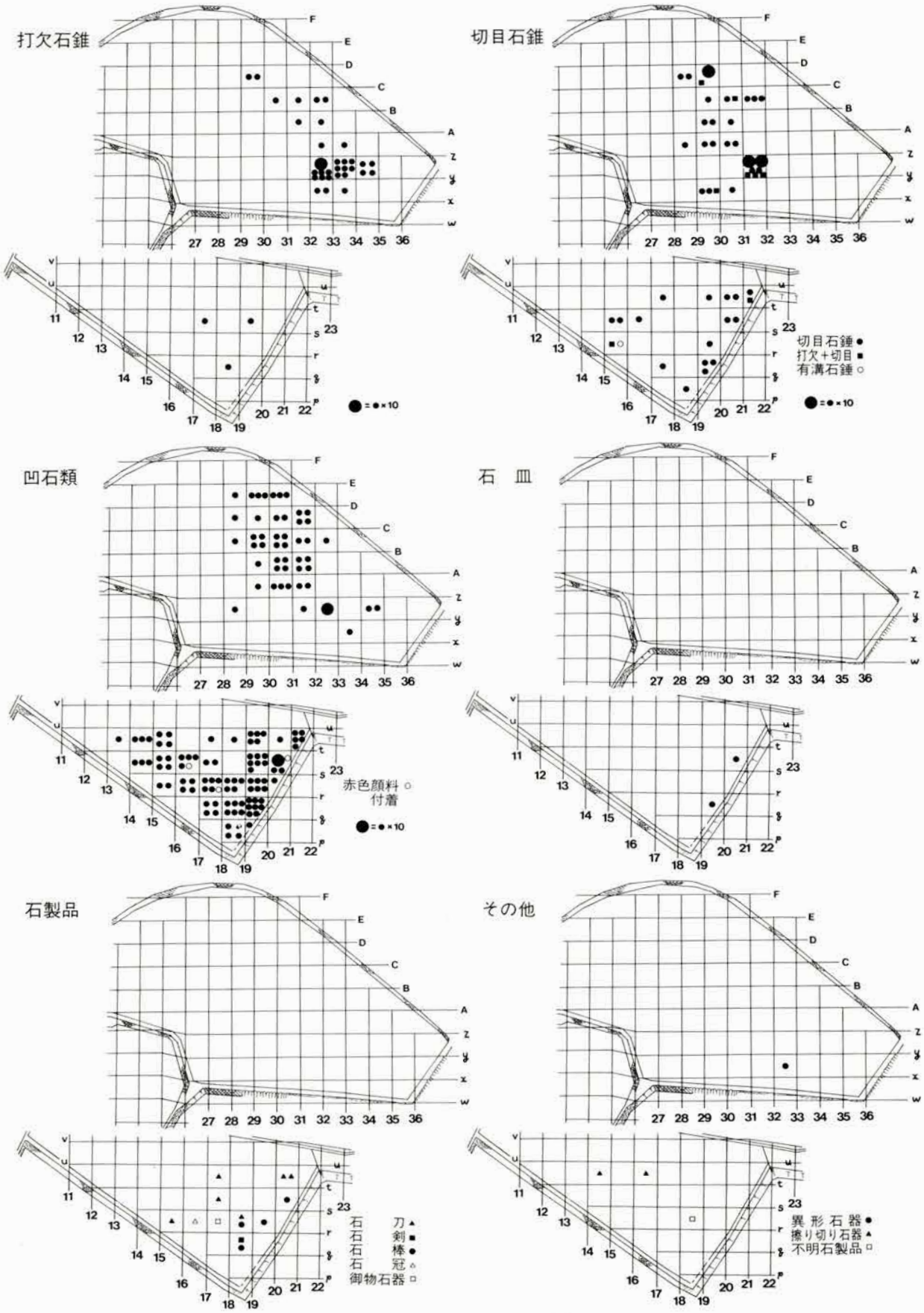
一方、下の段では、1,111点（遺構出土石器も含む）の石器が出土し、このうち、石核、ＲＦ、ＵＦ、剥片を除いた268点の組成は第71図③の通りである。これを見ると、下の段では、凹石類、石鏃、切目石錘、石製品の出土の割合が高い。下の段は、後期後葉～晩期の土器が出土し、下の段から出土した石器の時期についても、後期後葉～晩期と考えられる。後・晩期に多いとされる石製品の出土は下の段のみであった。また、凹石類や石鏃の出土の割合が高かったのも目についた（凹石類については別に考察）。後期後葉から晩期にかけての石器組成が把握できた点は、徳山地域の概期の生業等を考えていく上で大きな成果となった。反面、上の段から出土した石器について、早期と中期に分けられなかった事は課題として残った。

なお、組成表から除いた石核・ＲＦ・ＵＦ・剥片の多くは上の段から出土しており（Ｐ116第10表）、早期（もしくは中期）の石器製作過程で、沢山のこうした石器が残ったと考えられる。[1)]

1）早・前期を主体とする小の原遺跡（第２集）でも、多数の石核・剥片・砕片・未製品が出土している。



第122図　石器出土地点(1)



第123図　石器出土地点(2)

第44表　石器の器種別石材一覧表

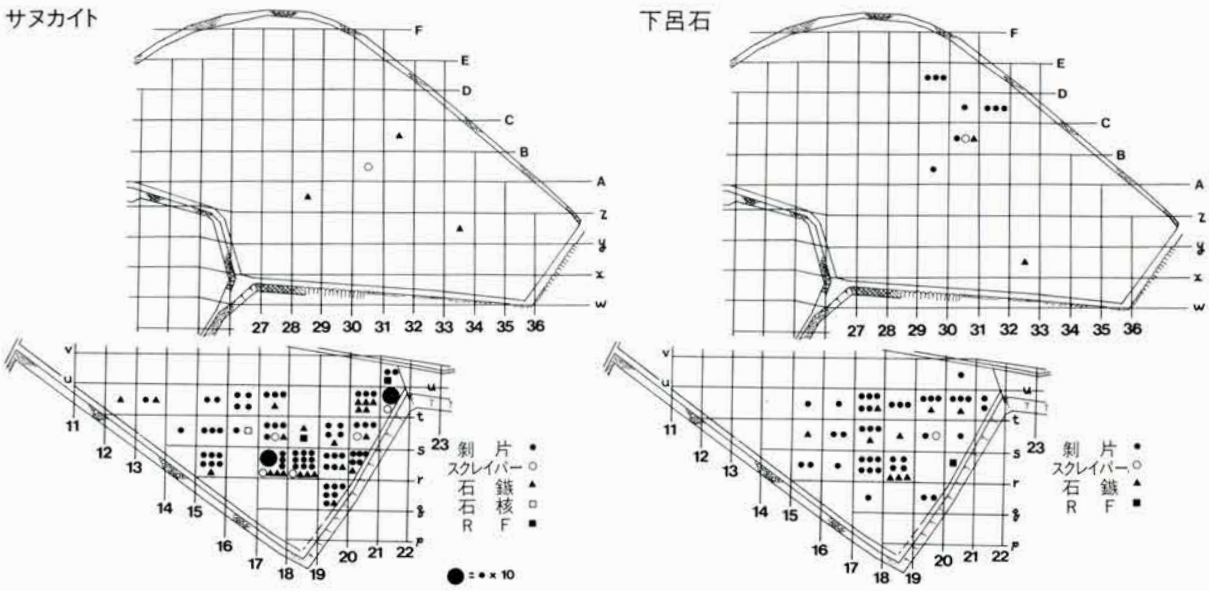
	チャート	砂岩	泥岩	安山岩	下呂石	サヌカイト	流紋岩質溶岩	閃緑岩	閃緑斑岩	はんれい岩	花こう閃緑斑岩	アプライト	凝灰岩	玄武岩	石英	ひん岩	結晶片岩	石英斑岩	その他	計
石鏃	182 (82.3)			1 (0.5)	11 (5.0)	26 (11.8)	1 (0.5)													221
石錐	52 (100)																			52
スクレイパー	49 (86.0)				2 (3.5)	6 (10.5)														57
ピエス・エスキーユ	7 (100)																			7
打製石斧		10 (50.0)	10 (50.0)																	20
磨製石斧			1 (6.7)	2 (13.4)				1 (6.7)			1 (6.7)	2 (13.4)	3 (20.0)	1 (6.7)		1 (6.7)			3 (20.0)	15
石核	55 (98.2)					1 (1.8)														56
R F	93 (93.9)		1 (1.0)		1 (1.0)	4 (4.1)														99
U F	108 (97.3)		1 (0.9)			1 (0.9)	1 (0.9)													111
剥片・砕片	4047 (95.7)	12 (2.8)	14 (3.3)	1 (0.0)	52 (1.2)	92 (2.2)	7 (0.2)					1 (0.0)			2 (0.0)					4228
打欠石錘		11 (40.7)	13 (48.1)	2 (7.4)							1 (3.7)									27
切目石錘		55 (59.1)	26 (28.0)	1 (1.0)				1 (1.0)		1 (1.0)	3 (3.0)	4 (4.0)	1 (1.0)			1 (1.0)				93
凹石類		83 (50.9)		47 (28.8)				4 (2.5)	16 (9.8)	8 (4.9)	4 (2.5)							1 (0.6)		163
石皿		3 (100)																		3
石製品		2 (15.4)	6 (46.2)						1 (7.7)		1 (7.7)						2 (15.4)		1 (7.7)	13
その他	1 (25.0)											2 (50.0)		1 (25.0)						4
計	4594 (88.9)	176 (3.4)	72 (1.4)	54 (1.0)	66 (1.3)	130 (2.5)	9	6	17	9	10	9	4	2	2	2	2	1	4	5169

＊（　）は器種別における石材の割合（パーセント）。

(3)　石材、特にサヌカイト・下呂石について

本遺跡で出土した石器の器種別石材一覧は、第44表の通りである。これを見ると、石鏃、石錐、スクレイパー、などの小型の剥片石器の石材はチャートがほとんどで、やや大型の打製石斧は砂岩を利用している、打欠・切目石錘、凹石類などの礫石器の石材は砂岩、泥岩、安山岩が多い。

次にサヌカイトと下呂石の石器の出土地点を示したのが第116図である。これをみるとサヌカイト及び下呂石製の石器のほとんどは下の段から出土しており、特に、サヌカイトは剥片のすべてが下の段からの出土である（P142、第23表参照）。本遺跡に限って言うならば、サヌカイトおよび下呂石がもたらされ、多数利用されるようになったのは後期後葉から晩期にかけてと考えられる。



第124図　サヌカイト・下呂石出土地点

(4)　凹石類について

本遺跡において多数出土した凹石類について、ここでは種々のデータを基に分類し、考察を試みた。

それらをまとめると、形態については円礫が多かったが楕円礫や長楕円礫も比較的多くみられた。質量としては201～700ｇのものがほとんどで、片手に持って丁度よい質量といえる。使用痕としてはまず、凹みの形状では、敲打痕が集中して凹みとなるものが大半で、すり鉢状に凹むものは少なかった。また凹みが１つ～２つみられるものが多く、楕円礫や長楕円礫には２つの凹みが離れるものが多いようである。磨面は、表と裏にみられるものが多く、凹み＋磨のものが多かった。敲打痕が長軸上にみられるものは、楕円礫や長楕円礫に多くみられた。石材では、安山岩が多く利用されており、近くの川原からこうした石材を選択的に持ち込んだと考えられる。折損（欠損）では、長楕円礫では中央部付近での折損が、円礫では先端部での欠損が多くみられた。

ここでは、本遺跡で出土した凹石類について上の段（縄文時代早期と中期の土器が伴出）と下の段（縄文時代後期後葉から晩期の土器が伴出）の様相の違いをみていきたい。

凹石類は上の段からは57点(1194～1207)、下の段からは102点（1208～1246ピット出土の５点を含む）出土し、表採の４点を加えると全部で163点出土した。下の段からの出土の多さが目につく。この数は下の段から出土した石器組成の39.6%を占め（第71図参照)、下の段、即ち後期後葉から晩期にかけての本遺跡における中心的な石器であったと考えられる。

まず、形態では、第97図及び第28表にみられるように上の段・下の段ともに第２群の円礫の割合が高い。その一方で、上の段では、１～３群のものがほとんどで、形態に均一性がみられるのに対して、下の段では３群や４群といった楕円礫・長楕円礫の割合が高くなり形態にバラつきがみられるようになる。質量についても形態同様に、上の段では均一性がみられるのに対して、下の段ではバラつきがみられるようになる（第98図)。

次に使用痕についてみてみると、第30表より、３群・４群といった楕円礫や長楕円礫に凹みが２個以上みられるもの(ｃ・ｄ・ｅ類)は下の段に多いようである。

また、磨面の見られる位置は、上の段では、表裏両面や片面、両面サイドといった限られたところに磨面がみられるのに対して、下の段では、これに片側、片面と片側（隣り合わせの面)、四面、全面、更に表面と裏面の左上と右上といった色々なところにも磨面がみられるようになり、多様性に富んでくる。(1236･1240)のように四面すべてに磨面のみられるもの(ｆ類)や、(1223～1225)のように表面と裏面の左上と右下に斜めの磨面のみられるタイプ(ｈ類)は、下の段のみにみられ、中でもｈ類の３点（1223～1225)は、この石を使って赤色物質を磨りつぶしたと考えられる。なお、赤色物質の付着した凹石類はこれ以外にも２点(1211･1228)みられ、ともに下の段の出土である。これらの赤色物質は蛍光Ｘ線分析の結果、(1211)が水銀朱で他はベンガラとのことであった(第６章)。こうした赤色物質がみられるようになるのは下の段、即ち後期後葉から晩期と考えられ土器に赤彩のみられるのと合致する（第117図)。敲打痕については、長軸上に敲打痕(叩き痕)のみられるａ類は下の段に多くみられる。

石材では、下の段で安山岩製の凹石類の割合が高く、はんれい岩も下の段のみの出土である(第34表)。折損(欠損)では、上の段５点(上の段で出土した凹石類57点中の５点で8.8%)、下の段27点（下の段で出土した凹石類102点中の27点で26.5%）と、下の段で出土した凹石類に多くの折損（欠損）がみられ、また折損（欠損）率も高い。中でも、４群の長楕円礫が中央部付近で横位に折損したａ類（下の段で７点）や、２群の円礫の先端部が欠損したｃ類（下の段で５点）が目立つ（第102図)。

以上のように、上の段で出土した早期・中期の凹石類では、形態や質量に比較的均一性がみられる

のに対して、下の段で出土した後期後葉から晩期にかけての凹石類では、形態や質量にバラつきがみられ、楕円礫や長楕円礫の使用も増えてくるようである。使用痕としての凹みも楕円礫や長楕円礫には２個みられるものも多い。磨面も色々な位置にみられるようになり、中には赤色物質（水銀朱、ベンガラ）を磨ったものもみられた。石材も多様化してくるようである。また折損（欠損）の割合も高い。そして、後期後葉から晩期にかけて、凹石類の石器組成中に占める割合も増加し、重要な石器となっていったと考えられる。徳山地区の西谷では、戸入地区の「戸入村平遺跡」[1]（中期後葉～晩期）や「はいづめ遺跡」[2]（晩期中葉～後葉）でも多数の凹石類が出土している。

１）(財)岐阜県文化財保護センター　1994　「戸入村平遺跡」
２）岐阜県教育委員会　1989　「はいづめ遺跡」

３　赤色顔料とその付着した土器・石器について

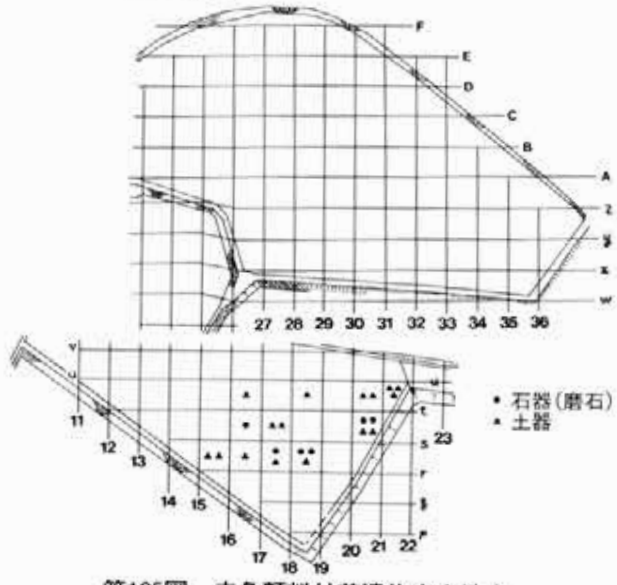
本遺跡では、赤色顔料の付着した遺物が何点かみられた（第45表）が、これらはすべて下の段からの出土である（第125図）。このうち土器では、後期後葉から晩期中葉にかけての北陸系のものに赤色顔料の付着が多いようである（303・304・323・331～333他）。一方、石器では磨面のみられる凹石類に赤色顔料の付着がみられ、中でも、表面と裏面の左上と右下に斜めの磨面のみられるｈ類には、３点ともに赤色顔料が付着しており、この石器が赤色顔料をすりつぶす道具であったと考えられる。これらの赤色顔料については、分析したところ、ほとんどがベンガラであったが、全面に磨面のみられる(1211)の赤色顔料だけは水銀朱という結果が得られた（第６章）。本遺跡の上流の門入地区には、「こうもり穴」・「弘法穴」（第９図の(37)・(38)）といった水銀鉱山の存在も知られており、[1]その関連が注目される所である。なお、東谷の「塚遺跡」で出土した中期後葉の土器に付着していた赤色顔料も水銀朱であるとの分析結果が出ている（第７集）。

１）牛丸周太郎・梶田澄雄　1963　「揖斐川上流地域学術調査報告（地質）」
『揖斐川上流地域総合学術調査報告書　岐阜県文化財調査報告書第３輯』

第45表　赤色顔料付着遺物一覧表

	遺物番号	分類	出土地点・層序	備考
石器	1211	磨石類	１８ｓⅢ	◎水銀朱
	1223	磨石類	２１ｔⅢ	
	1224	磨石類	１７ｔⅠ	◎ベンガラ
	1225	磨石類	１９ｓⅢ	
	1228	磨石類	２１ｔⅢ	◎ベンガラ
	1262	その他	１９ｓ(P126)	◎ベンガラ
土器	303・304	第４群４類	２１ｕⅢ	◎ベンガラ
	323	第５群１類ａ種	１６ｓⅢ	
	331	第５群１類ｂ種	２１ｔⅢ	
	332	第５群１類ｂ種	２２ｕⅢ	
	334	第５群１類ｂ種	２１ｔⅢ	
	335	第５群１類ｂ種	１９ｕⅢ	
	336～338	第５群１類ｂ種	１６ｓⅢ	◎ベンガラ
	364	第５群４類	１８ｓⅢ	◎ベンガラ
	376	第６群４類	１８ｔⅢ	
	377	第６群４類	２２ｕⅢ	
	382	第６群５類	２１ｕⅢ	

＊　◎印は分析を行ったものを示す。巻頭図版（２）及び第６章参照。土器については掲載分のみを表にした。



第125図　赤色顔料付着遺物出土地点

引用・参考文献

＜縄文時代早期の土器関係＞

南知多町教育委員会　1980　『先苅貝塚』

勝山市教育委員会　1977　『破入遺跡』

米原町教育委員会　1986　『磯山城遺跡』

国府町教育委員会　1988　『宮ノ下遺跡』

伊吹超教育委員会　1993　『起し又遺跡発掘調査報告書』

長野県考古学会縄文時代（早期）部会　1997　『シンポジウム　押型文と沈線文』

縄文セミナーの会　1994　『早期終末・前期初頭の諸様相』

蒲郡市教育委員会　1982　『形原遺跡発掘調査報告書』

増子康真　1983　「八ッ崎Ⅰ式土器をめぐって」　『古代人41』　名古屋考古学会

山下勝年　1990　「東海地方西部地域における縄文中期中葉の土器群」　『知多古文化研究６』

山下勝年　1993　「柏畑式・上ノ山式・入海０式各土器の再検討」　『知多古文化研究７』

平安学園考古学クラブ　1956　『石山貝塚』

東浦町文化財保存会　1955　『入海貝塚』

茅野市教育委員会　1986　『高風呂遺跡』

洞戸村教育委員会　1988　『市場遺跡発掘調査報告書』

岐阜市教育委員会　1989　『椿洞遺跡』

滋賀県教育委員会他　1992　『螢谷遺跡・石山遺跡』

滋賀県教育委員会他　1998　『赤野井湾遺跡』

（財）岐阜県文化財保護センター　1997　『西田遺跡』

可児通宏　1989　「押型文系土器様式」　『縄文土器大観１』

谷口康浩　1989　「条痕文系土器様式」　『縄文土器大観１』

宮下健司　1989　「東海条痕文系土器様式」　『縄文土器大観１』

＜縄文時代前期の土器関係＞

南知多町教育委員会　1976　『清水ノ上貝塚』

滋賀県教育委員会他　1984　『粟津貝塚湖底遺跡』

宮本一夫　1987　「近畿・中国地方における縄文前期初頭の土器細分」
『京都大学埋蔵文化財研究センター紀要Ⅴ』

福井県教育委員会　1979　『鳥浜貝塚　縄文前期を主とする低湿地遺跡の調査１』

福井県教育委員会他　1987　『鳥浜貝塚』

網谷克彦　1989　「北白川下層式土器様式」『縄文土器大観１』

＜縄文時代中期の土器関係＞

紅村弘・増子康真他　1981　『東海先史文化の初段階』

増子康真　1986　「東海西部沿岸地域縄文注記土器型式の検討」『知多古文化研究２』

静岡県考古学会他　1998　「縄文時代中期前半の東海系土器群　北屋敷式土器の成立と展開（予稿集）」

間壁忠彦・間壁葭子　1971　「里木貝塚」『倉敷考古館研究集報』第７号
間壁忠彦　1988　「船元・里木式土器様式」『縄文土器大観３　中期』
小江慶雄　1954　「滋賀県醍醐遺跡発見の縄文式土器」『京都学芸大学学報』Ａ（文科）№５
京都教育大学考古学研究会　1989　「考古学資料室所蔵遺物の資料紹介」『史林』第22号
浅井町役場企画広報課　1998　『醍醐遺跡』
泉拓良　1988　「船元・里木式土器様式」『縄文土器大観３・中期』
泉拓良　1988　「咲畑・醍醐式土器様式」『縄文土器大観３　中期』
京都大学文学部博物館　1991　『先史時代の北白川』
春日井恒　1996　「東海地方縄文中期における中富式土器群の問題」『美濃の考古学』創刊号
紅村弘・増子康真他　1977　『東海先史文化の諸段階　資料編』
美濃加茂市教育委員会　1973　『牧野小山遺跡』
可児町北裏遺跡発掘調査団　1973　『北裏遺跡』
和泉村教育委員会　1978　『後野遺跡』
＜縄文時代後・晩期の土器関係他＞
石川県立埋蔵文化財センター　1982　『金沢市犀川鉄橋遺跡第１・２次　発掘調査報告書』
石川県立埋蔵文化財センター　1989　『犀川鉄橋遺跡Ⅱ』
野々市町教育委員会　1983　『史跡　御経塚遺跡』
石川県立埋蔵文化財センター　1989　『金沢市米泉遺跡』
河合村教育委員会　1971　『下小鳥ダム関係埋蔵文化財調査報告書』
財団法人岐阜県文化財保護センター　1993　『阿弥陀堂遺跡・深作裏垣内遺跡』
縄文セミナーの会　1996　『第９回　縄文セミナー　後期中葉の諸様相』
浜松市教育委員会　1958　『蜆塚遺跡』
財団法人愛知県埋蔵文化財センター　1991　『麻生田大橋遺跡』
財団法人愛知県埋蔵文化財センター　1993　『三斗目・三本松遺跡』
第１回東海考古学フォーラム豊橋大会実行委員会　1993　『突帯文土器から条痕文土器へ』
三重県埋蔵文化財センター　1995　『天白遺跡』
伊吹町教育委員会　1988　『杉沢遺跡発掘調査概要報告書』
滋賀県教育委員会他　1994　『穴太遺跡発掘調査報告書Ⅰ』
中村健二　1996　「縄文晩期土器棺墓の調査方法について　近畿地方の場合」
『紀要　第９号』財団法人滋賀県文化財保護協会
泉拓良　1985　「Ⅱ縄文時代」　『図説　発掘が語る日本史４　近畿編』
泉拓良　1990　「西日本凸帯文土器の編年」　『文化財學報　第８集』　奈良大学文学部文化財学科
泉拓良　1996　「縄文土器出現」『歴史発掘』２
泉拓良　1988　「縁帯文土器様式」　『縄文土器大観４・後期・晩期・続縄文』
丹羽佑一　1988　「凹線文系土器様式」『縄文土器大観４・後期・晩期・続縄文』
南久和　1988　「北陸晩期土器様式」　『縄文土器大観４・後期・晩期・続縄文』
泉拓良　1988　「西日本磨研土器様式」『縄文土器大観４・後期・晩期・続縄文』

泉拓良・山崎純男　1988　「凸帯文系土器様式」　『縄文土器大観４・後期・晩期・続縄文』
家根祥多　1981　「近畿地方の土器」『縄文文化の研究４　縄文土器Ⅱ』
三輪若葉　1996　「貝殻を使用した器面調整技法に関する基礎実験　縄文土器を中心に」
『東大阪市文化財協会ニュース　VOL.6　№4』
財団法人大阪府文化財調査研究センター　1998　「向手遺跡」（向手遺跡現地説明会資料）
渡辺昌宏　『縄紋の祈り・弥生の心』「近畿における縄紋後・晩期の墓制」
（大阪府立弥生文化博物館）

＜土器全般＞

永峯光一編　1981　『縄文土器大成４―晩期』
小林達雄・小川忠博　1988　『縄文土器大観１・草創期・早期・前期』
小林達雄・小川忠博　1988　『縄文土器大観３・中期』
小林達雄・小川忠博　1988　『縄文土器大観４・後期・晩期・続縄文』
小林達雄　1994　『縄文土器の研究』
戸沢充則編　1994　『縄文時代研究事典』
大川清・鈴木公雄他　1996　『日本土器事典』

＜石器関係＞

後藤秀一　1983　「縄文時代石器研究の基礎作業　　凹石・敲石・磨石の器種分類についての検討」
『考古学論叢Ⅰ』
桃野真晃　1982　「石器を作るハンマー―凹石の用途について―」
『考古学論考　小林行雄博士古希記念論文集』
山本直人　1998　「縄文時代における敲打製石製品出現の技術的背景」
『楢崎彰一先生古希記念論文集』
渡辺誠　1973　『縄文時代の漁業』
渡辺誠　1978　『福井県勝山市古宮遺跡発掘調査報告書』（勝山市教育委員会）
渡辺誠　1991　「石錘ピット出土の礫石錘について」
『垣内遺跡発掘調査報告書』（高山市教育委員会）
伊藤禎樹・篠田通弘　1982　「美濃徳山村の切目石錘（越美山系をめぐって）」『岐阜史学』第76号吉
田英敏　1989　『塚原遺跡・塚原古墳群』（関市教育委員会）
鹿児島県教育委員会　1988　『草野貝塚』
河口貞徳　1991　「市来式と擦切手法」　『鹿児島考古 第25号』
金津町教育委員会　1993　『桑野遺跡発掘調査概要』
佐野康雄　1997　「岐阜県の石器組成の変遷」『農耕開始期の石器組成４』国立歴史民族博物館
鈴木道之助　1991　『石器入門事典―縄文―』
町田勝則　1996　「石器の研究法　報告文作成に伴う観察・記録法①」
『長野県の考古学』　(財)長野県埋蔵文化財センター研究論集Ⅰ
福井県教育庁埋蔵文化財調査センター　1988　『鳴鹿手島遺跡』
(財)長野県埋蔵文化財センター　1993　『北村遺跡』

岐阜市教育委員会　1995　『御望遺跡』
財団法人岐阜県文化財保護センター　1995　『西乙原遺跡・勝更白山神社周辺遺跡』
財団法人岐阜県文化財保護センター　1999　『上原遺跡Ⅰ』

＜赤色顔料関係＞

岐阜県教育委員会　1963　『揖斐川上流地域総合学術調査報告書　岐阜県文化財調査報告書第３輯』
永江秀雄　1984　『門入と丹生の研究』
徳山村の自然と歴史と文化を語る集い（徳山村ミニ学会）　1985
『徳山村　その自然と歴史と文化（２）』
市毛勲　1984　『増補　朱の考古学』
市毛勲　1998　『新版　朱の考古学』
成瀬正和　1998　「証文時代の赤色顔料Ⅰ・赤彩土器」　『考古学ジャーナル　№438』

＜旧徳山村の遺跡関係＞

小川栄一　1952　『美濃の石器時代文化』
徳山村史編集委員会　1973　『徳山村史』
小澤一弘　1975　「美濃徳山村宮ケ原遺跡出土の縄文時代遺物」『古代文化』第27巻第10号
徳山村の歴史を語る会　1984　『徳山村のあけぼのを求めて―岐阜県揖斐郡徳山村遺跡分布調査中間報告―』
徳山村の歴史を語る会　1984　『徳山村の遺跡（増補版）』
篠田通弘　1986　『大昔の徳山村―縄文人の息吹きを追って―』（徳山村教育委員会）
岐阜県　1972　『岐阜県史　通史編原始』
岐阜県教育委員会　1984　『揖斐川上流域徳山ダム・杉原ダム水没地区埋蔵文化財分布調査報告書』
岐阜県教育委員会　1989　『はいづめ遺跡』
岐阜県教育委員会　1991　『小の原遺跡・戸入障子暮遺跡』
財団法人岐阜県文化財保護センター　1993　『追分遺跡・下開田村平遺跡』
財団法人岐阜県文化財保護センター　1994　『戸入村平遺跡』
財団法人岐阜県文化財保護センター　1994　『長吉遺跡・普賢寺跡』
財団法人岐阜県文化財保護センター　1997　『山手宮前遺跡』
財団法人岐阜県文化財保護センター　1998　『塚遺跡』
財団法人岐阜県文化財保護センター　1999　『上開田村平遺跡』
財団法人岐阜県文化財保護センター　1999　『上原遺跡Ⅰ』

＜その他＞

揖斐郡教育会　1992　『岐阜県揖斐郡　ふるさとの地名』
水資源開発公団徳山ダム建設所　1997　『美濃徳山の地名』
埋蔵文化財写真技術研究会　1998　『報告書製作ガイド』

図　　版

調査前の様子

作業風景

完掘状況

遺構

図版 1

いんべ遺跡（C地点）
調査前の様子
（北東より）

上の段
完掘状況①
（南より）

下の段
完掘状況①
（北西より）

作業風景

上の段
完掘状況②
（南西より）

下の段
完掘状況②
（北西より）

図版 3

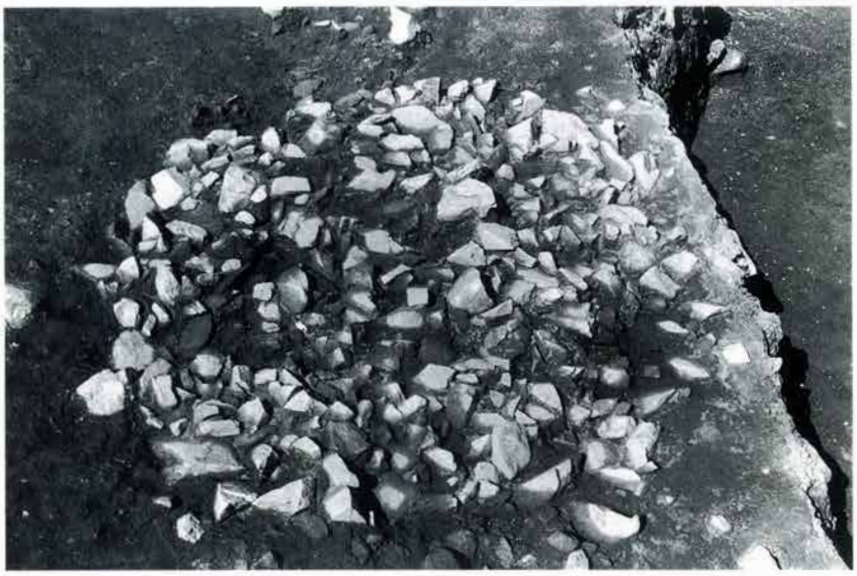
第１号焼礫集積遺構
（SI１　奥）
第２号焼礫集積遺構
（SI２　手前）
（南より）

第１号焼礫集積遺構
（SI１）
（北西より）

同上
半截
（北西より）

第２号焼礫集積遺構
（SI２）

（南より）



同上
四分割

（南東より）

同上
下部の様子

（南東より）

図版 5

第 2 号焼礫集積遺構
（SI 2）
下部の様子
（南西より）

第 4 号焼礫集積遺構
（SI 4）
（北より）

同上
半截
（南東より）

第１号土器棺墓
（SZ１）
（北西より）

第２号土器棺墓
（SZ２）
（北西より）

第３号土器棺墓
（SZ３）
（北東より）

図版 7

第 4 号土器棺墓
（SZ 4　右側）
第 5 号土器棺墓
（SZ 5　左側）
（南西より）

第 5 号土器棺墓
（SZ 5）
（北西より）

第 6 号土器棺墓
（SZ 6）
（南より）

第7号土器棺墓
（SZ 7　左側）
第8号土器棺墓
（SZ 8　右側）
（南西より）
（上）

同上
半截
（南西より）

第9号土器棺墓
（SZ 9）
（南東より）

図版 9

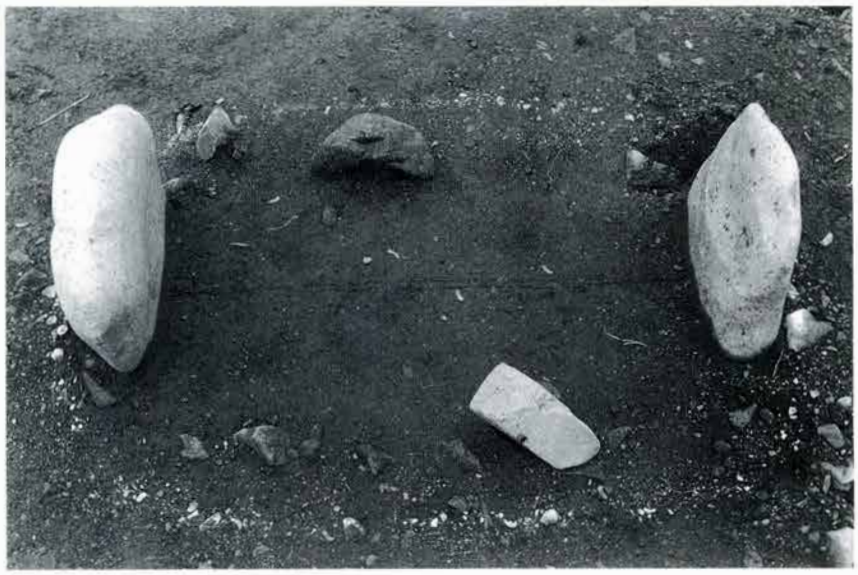
第10号土器棺墓
（SZ10）
（北西より）

第11号土器棺墓
（SZ11）
（南西より）

第１号土器集中区
（SU１）

第１号配石土壙
（SX１）
（北西より）

第２号配石土壙
（SX２）
（南より）



第３号配石土壙
（SX３）
（南東より）

図版 11

第１号配石土壙
（SX１）
半截
（南東より）

第２号配石土壙
（SX２）
半截
（南より）

第３号配石土壙
（SX３）
半截
（南東より）

図　　版

遺　　物

炭化材

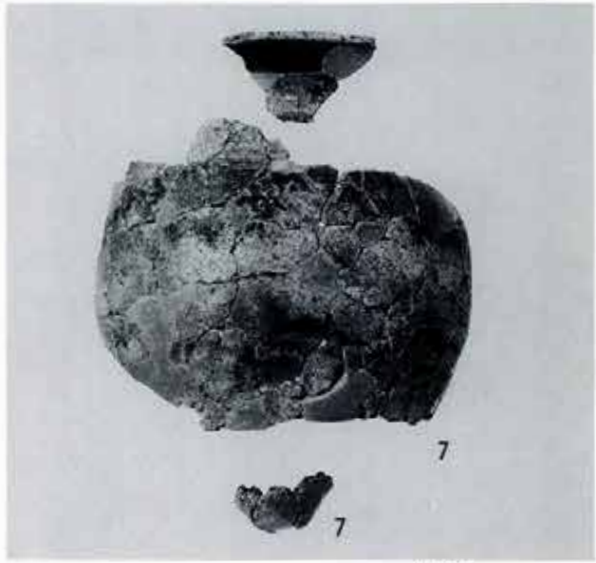
SZ 6

SZ 6

SZ10

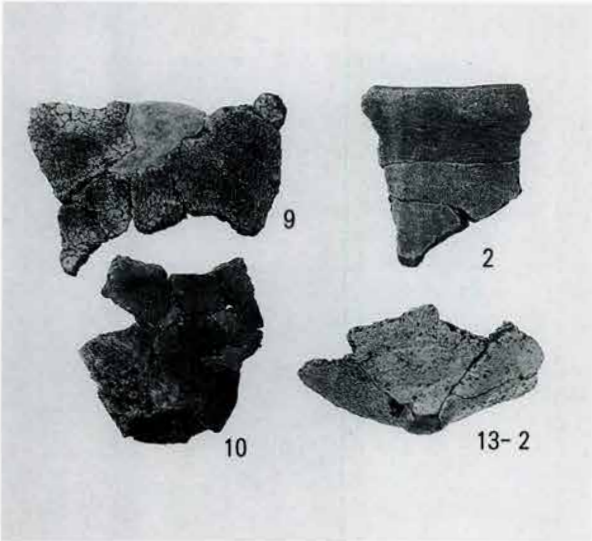
SZ 5

SZ 1



SZ 1

遺構（SZ）出土土器（SZ 1・5・6・10）



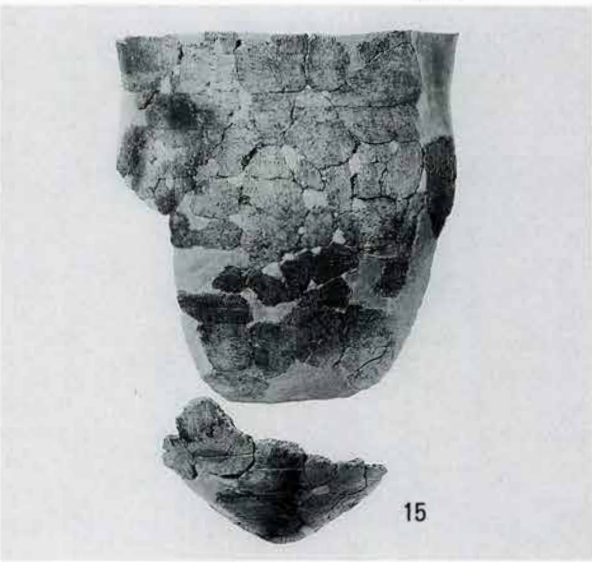
SZ 3・5・7

SZ 7

SZ 7

SZ 7

SZ 2



SZ 2

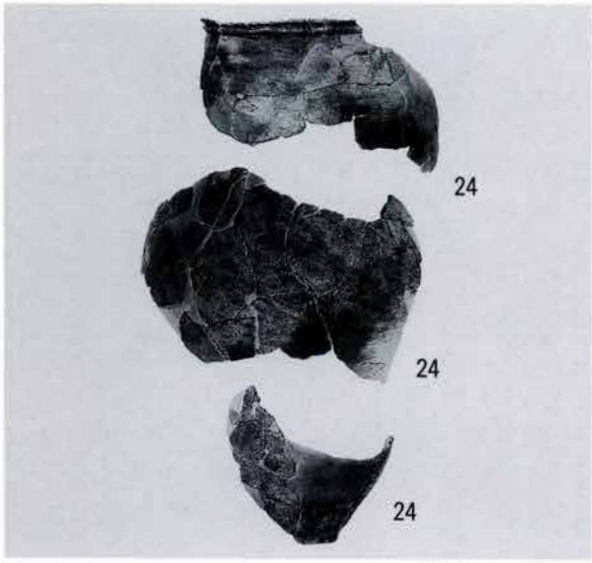
遺構（SZ）出土土器（SZ 2・3・5・7）

SZ 8

SZ 8

SZ 9

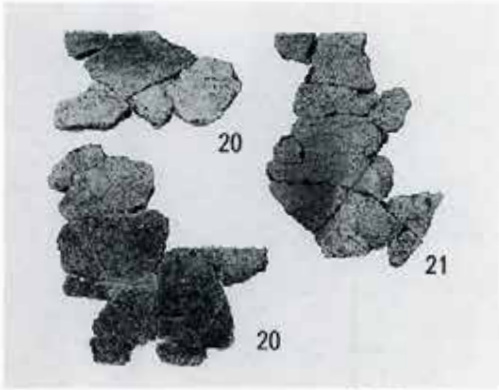
SZ 9



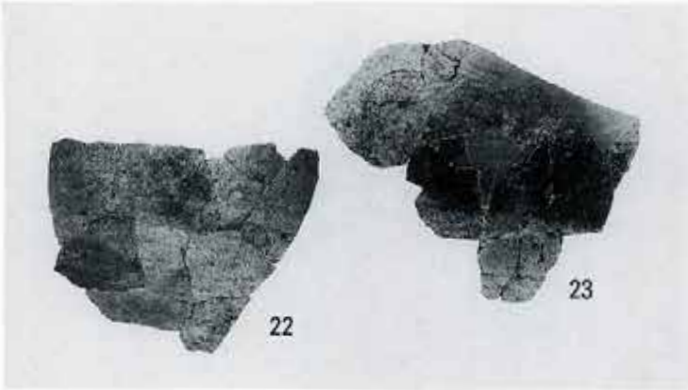
SZ 4

SU 1

遺構（SZ、SU）出土土器（SZ 4・8・9、SU 1）



SZ11



SZ11

16（SZ８）の口縁部（外面）

16の口縁部（内面）

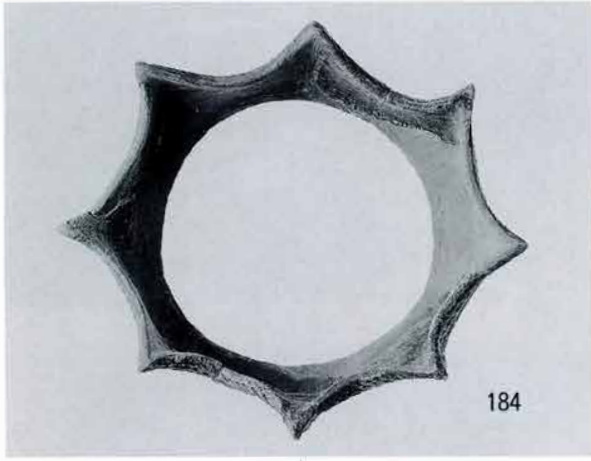
16の胴部

16の底部付近

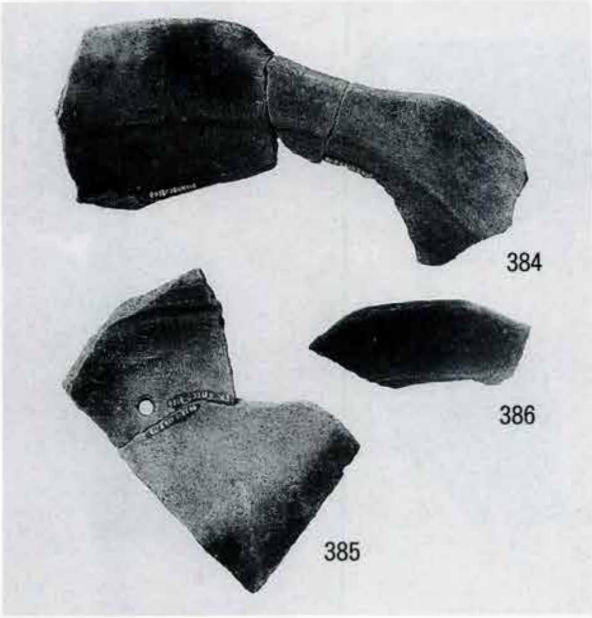
SZ６（上から）

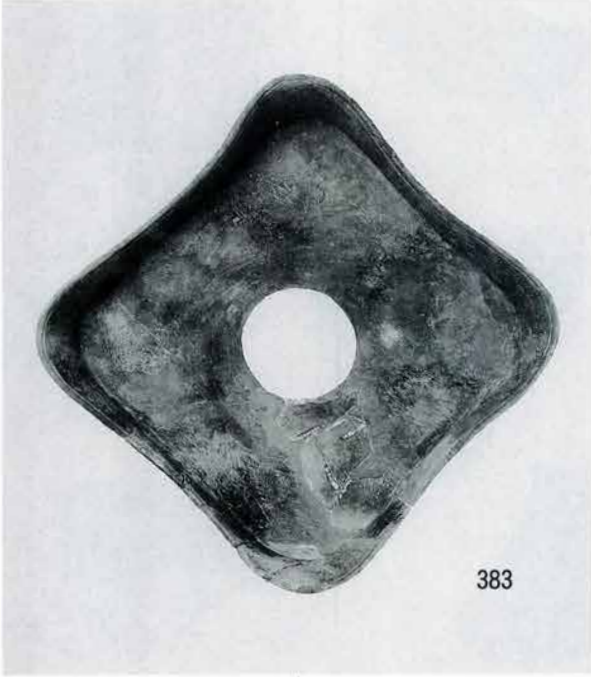
SZ８（上から）

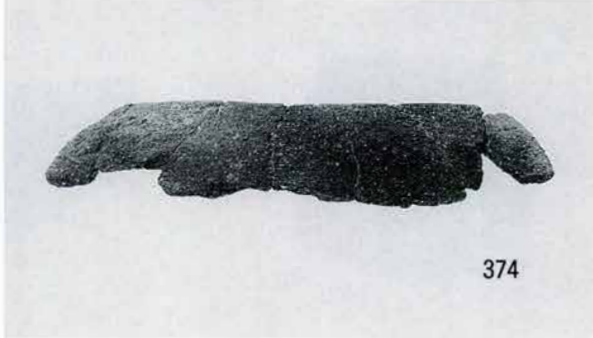
遺構（SZ）出土土器　(SZ11)、調整痕の拡大写真（SZ８）、内面の炭化物（SZ６・8）

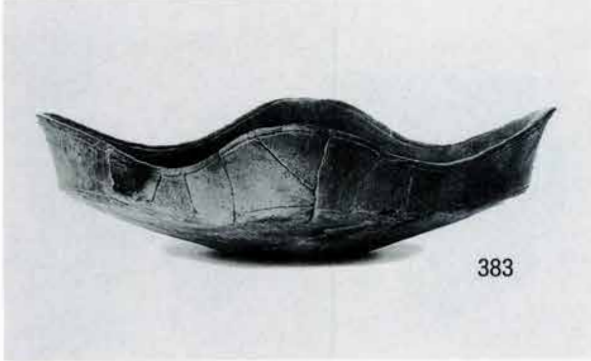


包含層（上の段・下の段）出土土器　復元個体



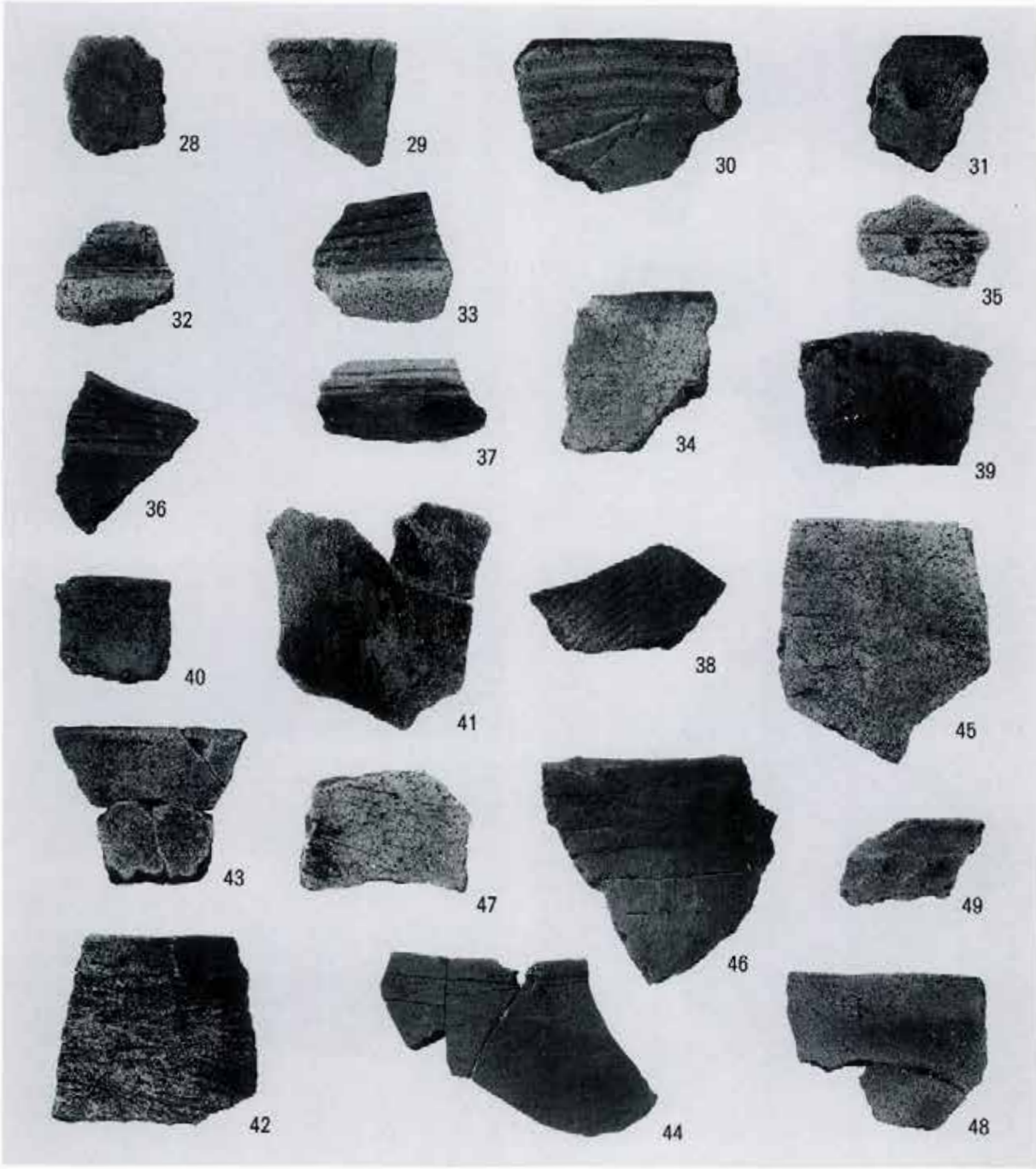


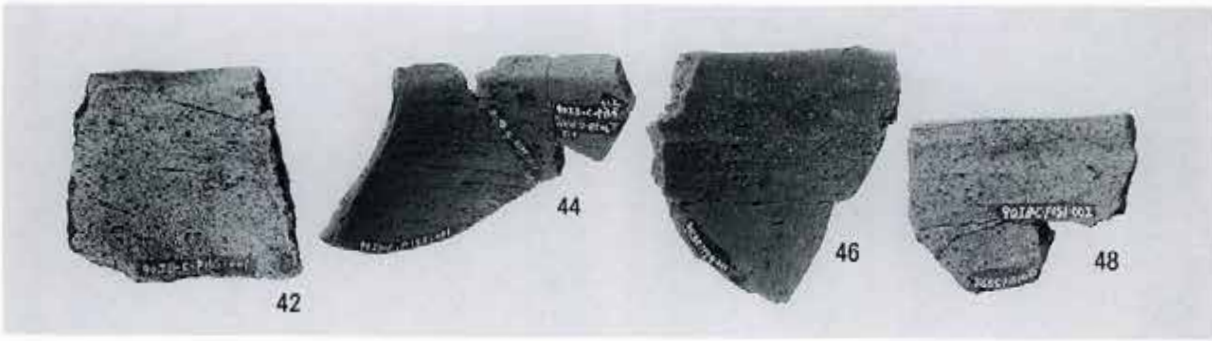




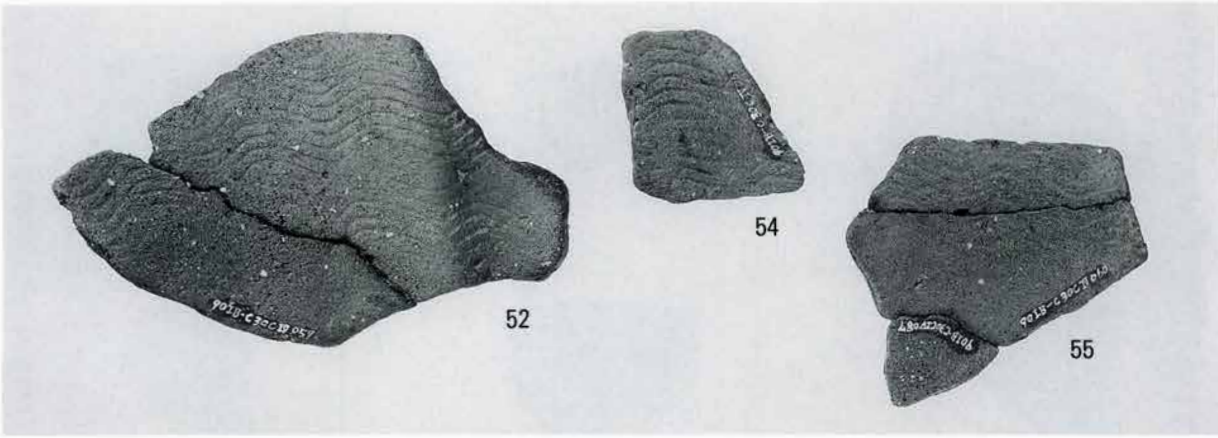
373の口縁(372)は図版(38)

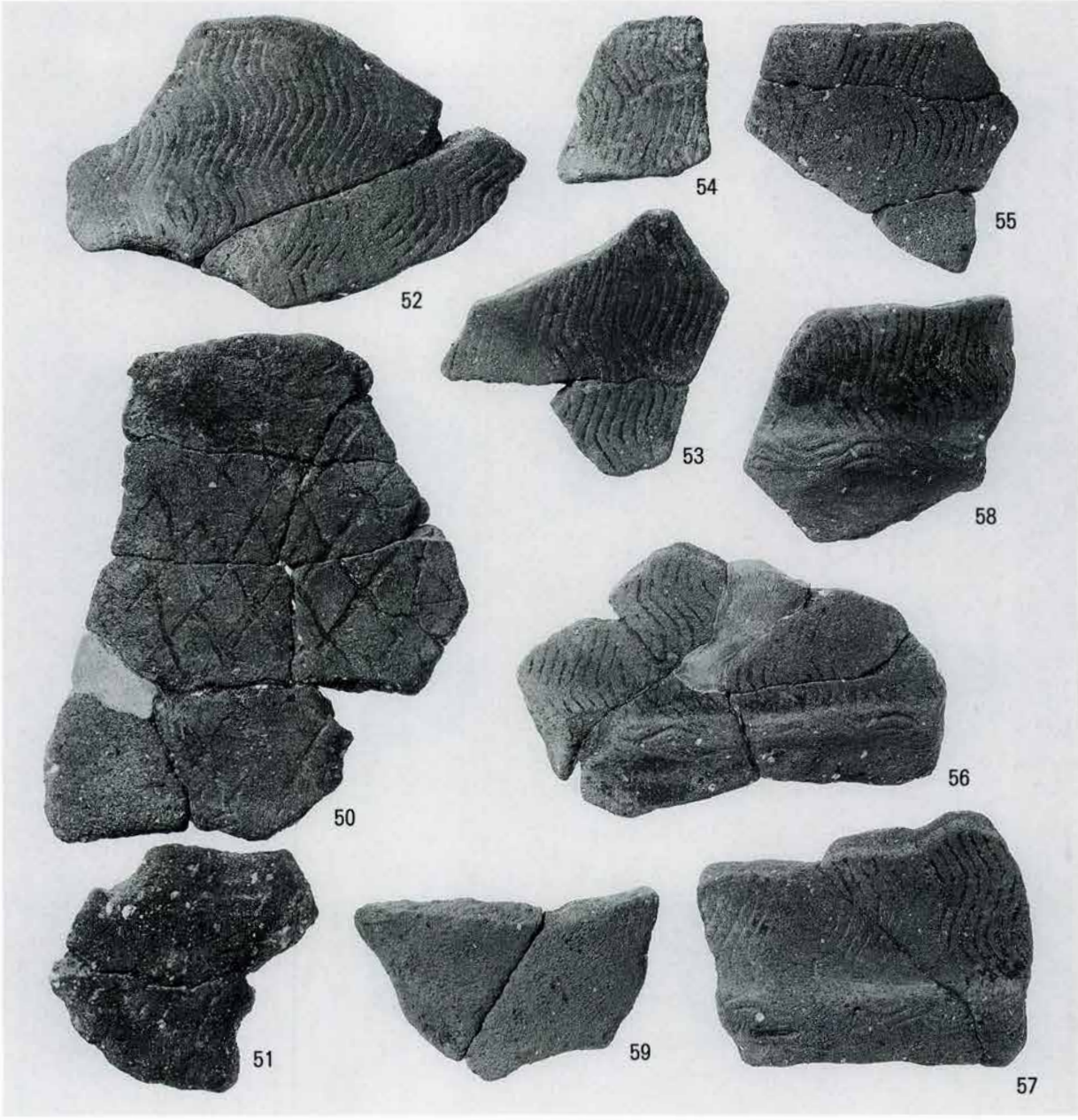
包含層（下の段）出土土器　復元個体、浅鉢、皿



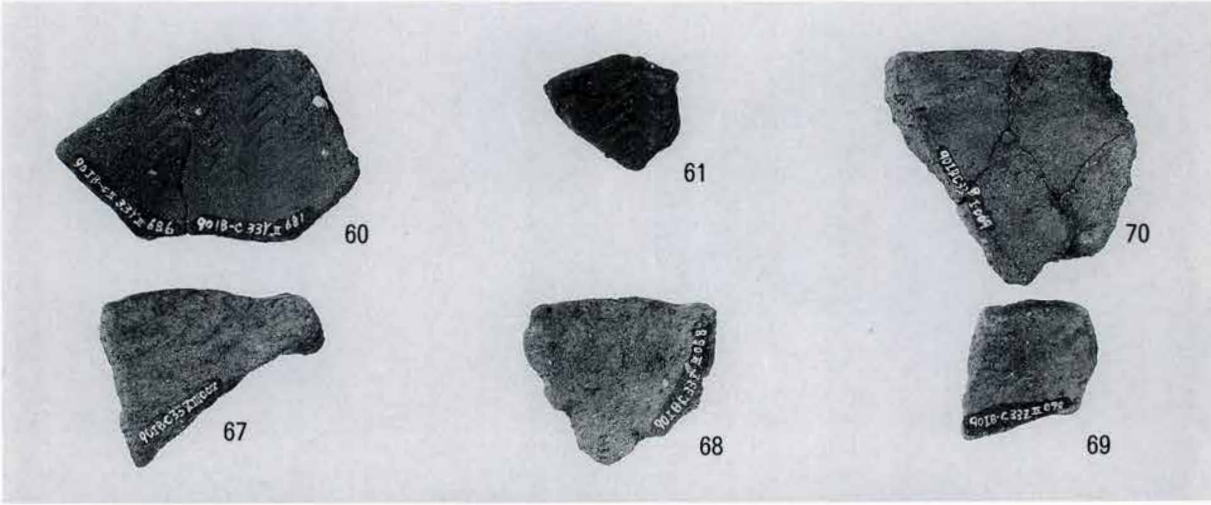


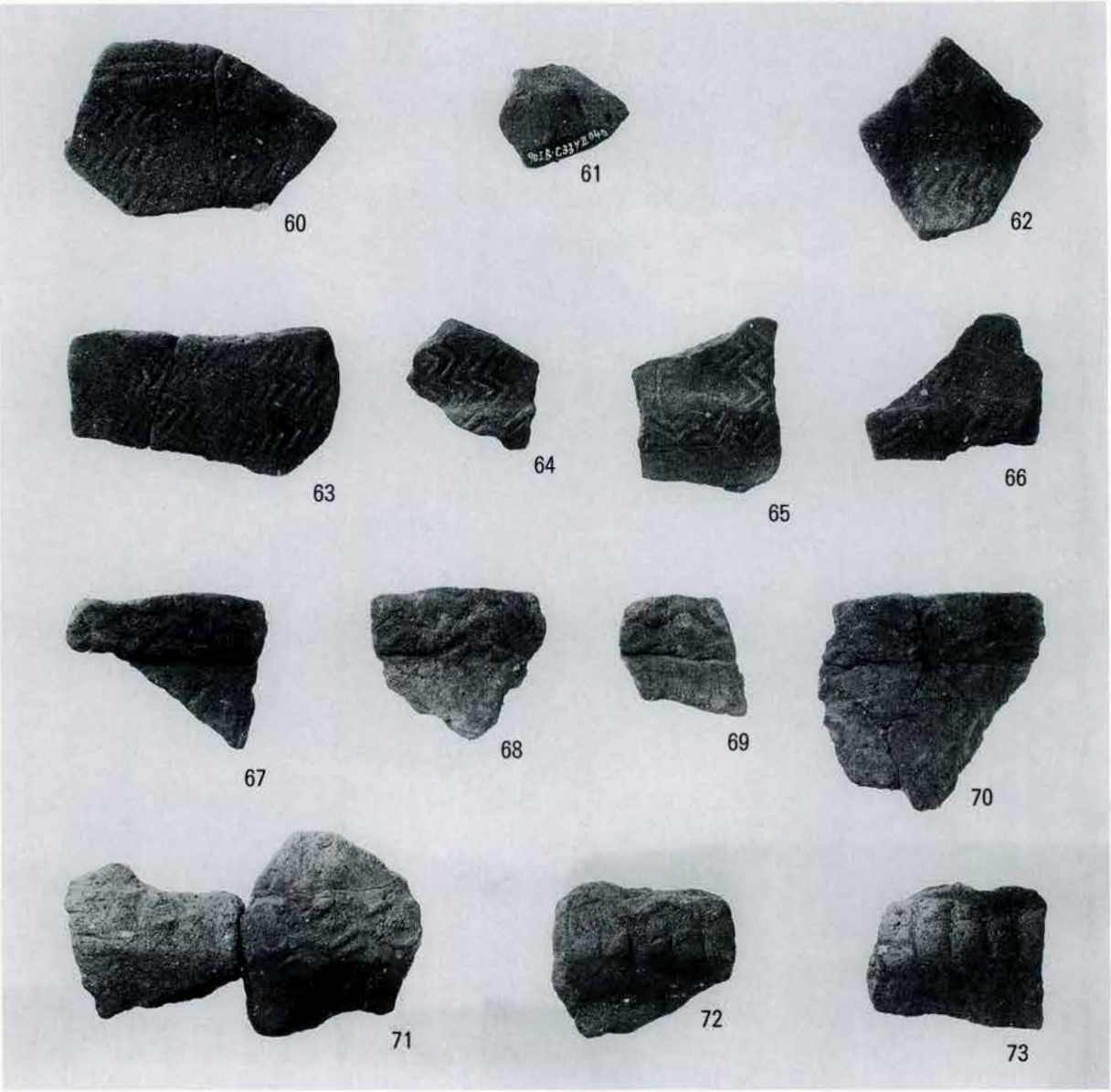
遺構（SI・SK・Pit）出土土器（下段は内面）



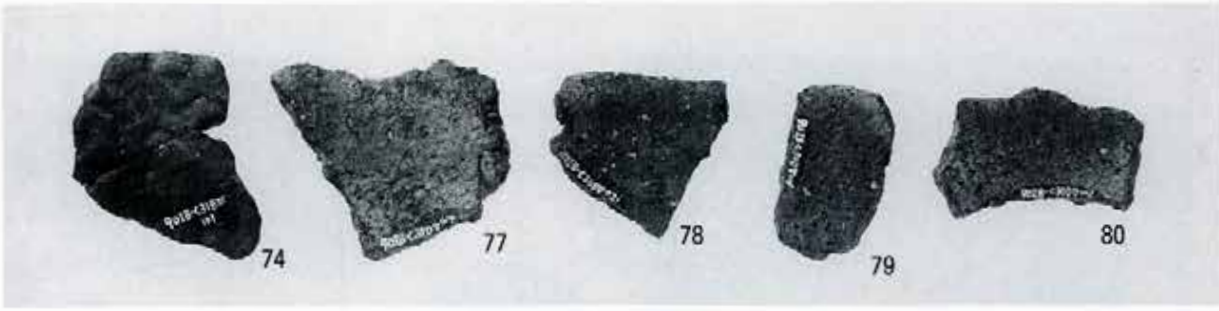


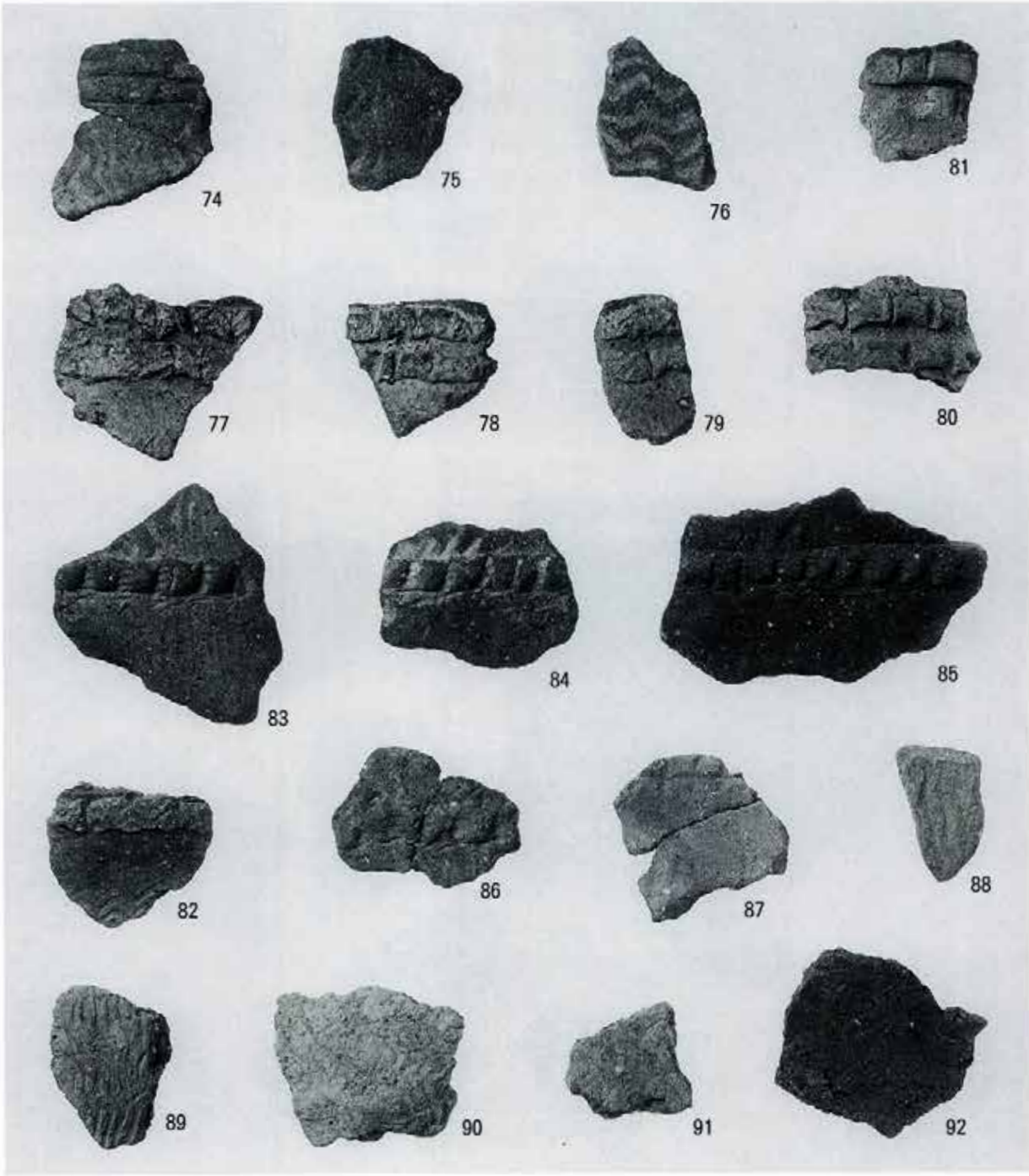
包含層（上の段）出土土器　第１群１類（ａ・ｂ種）（上段は内面）



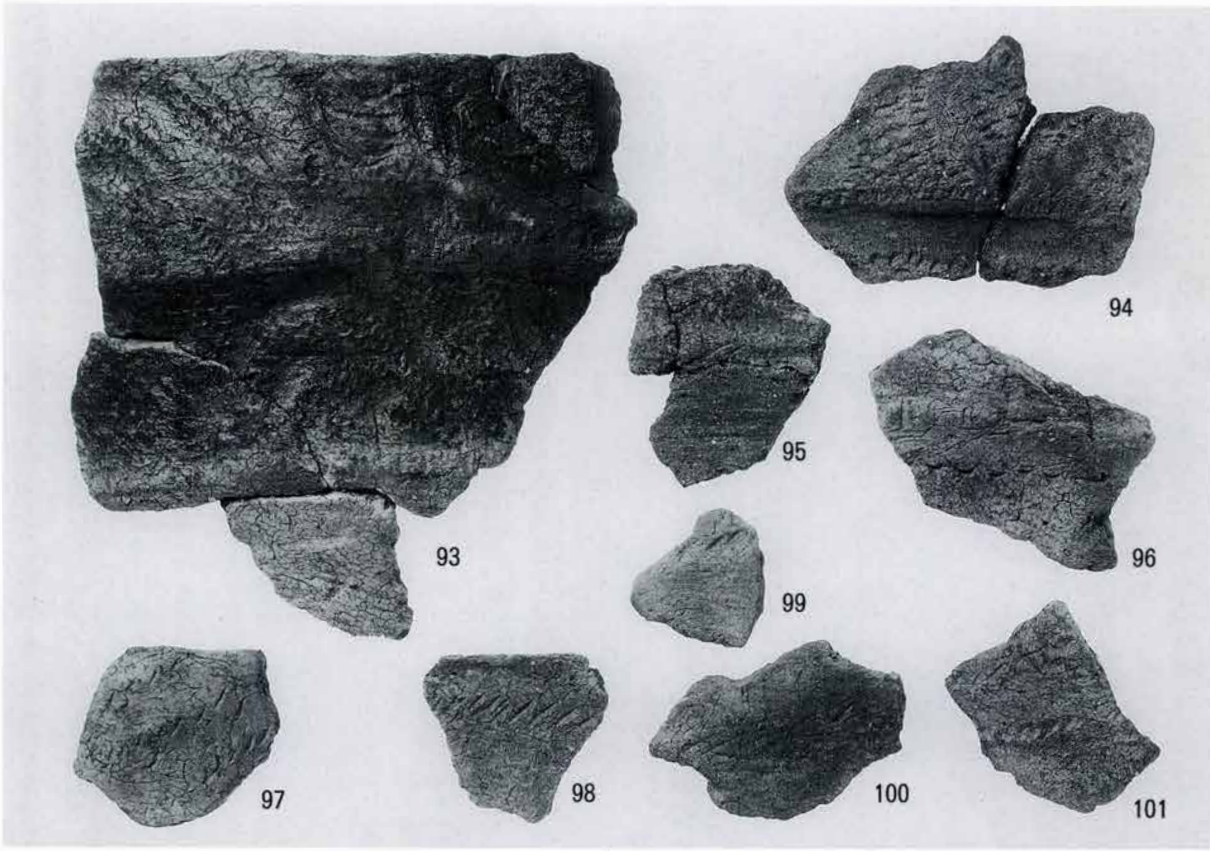


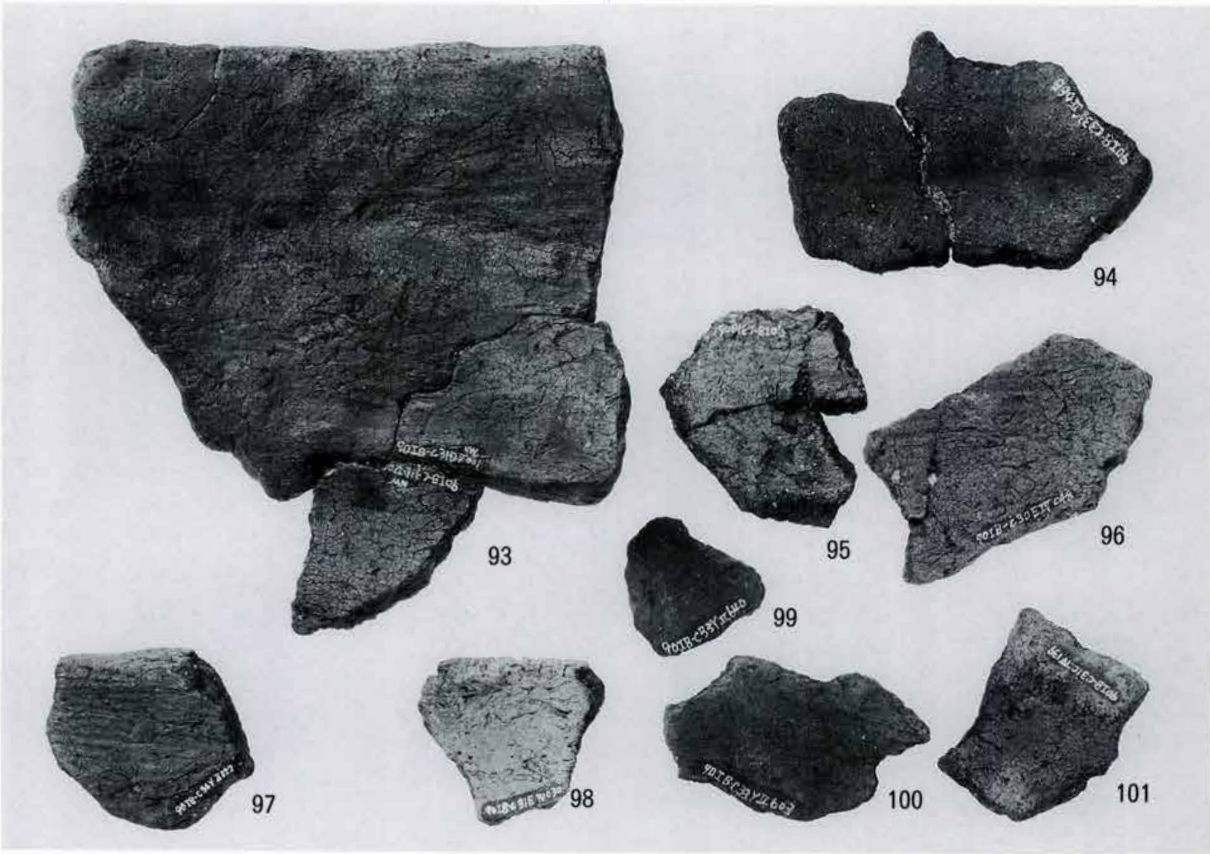
包含層（上の段）出土土器　第１群１類（ｂ種）（上段は内面）



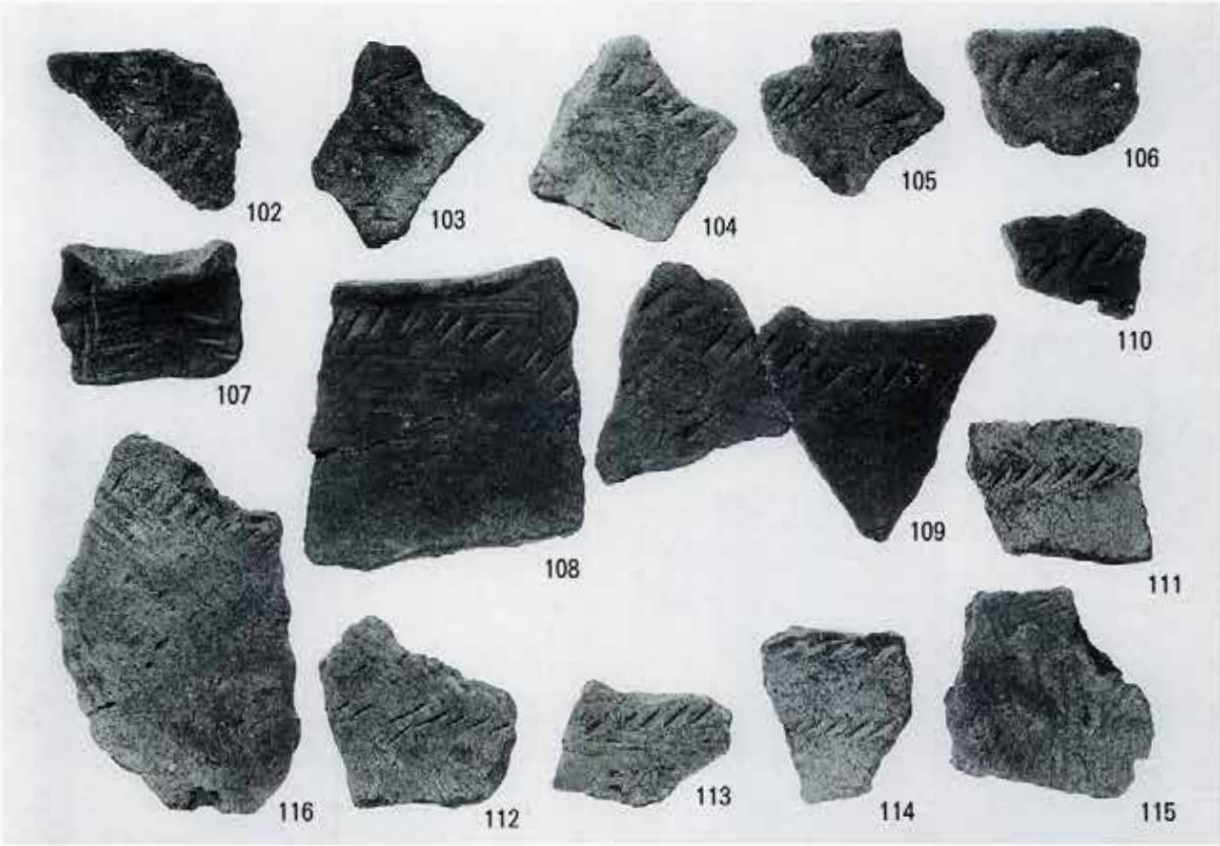


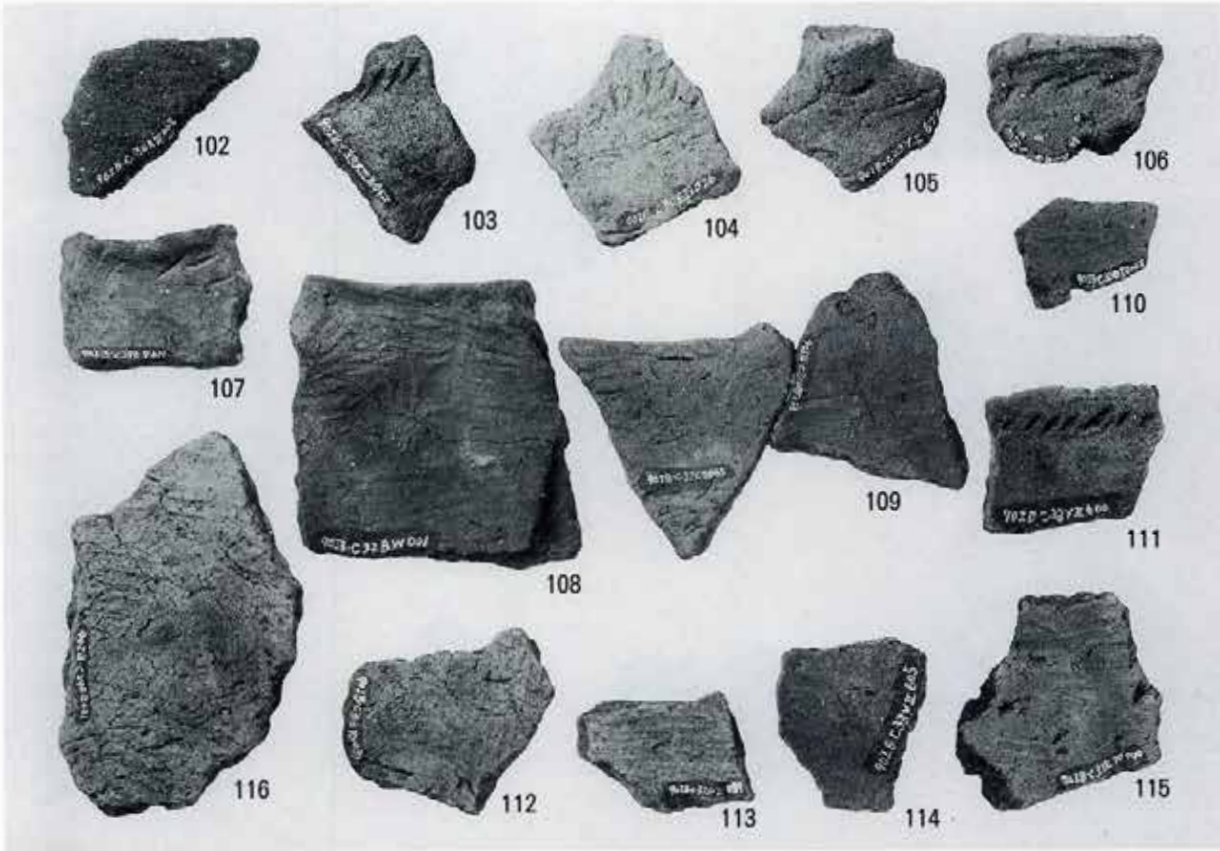
包含層（上の段）出土土器　第１群１類（ｂ・ｃ種）（上段は内面）



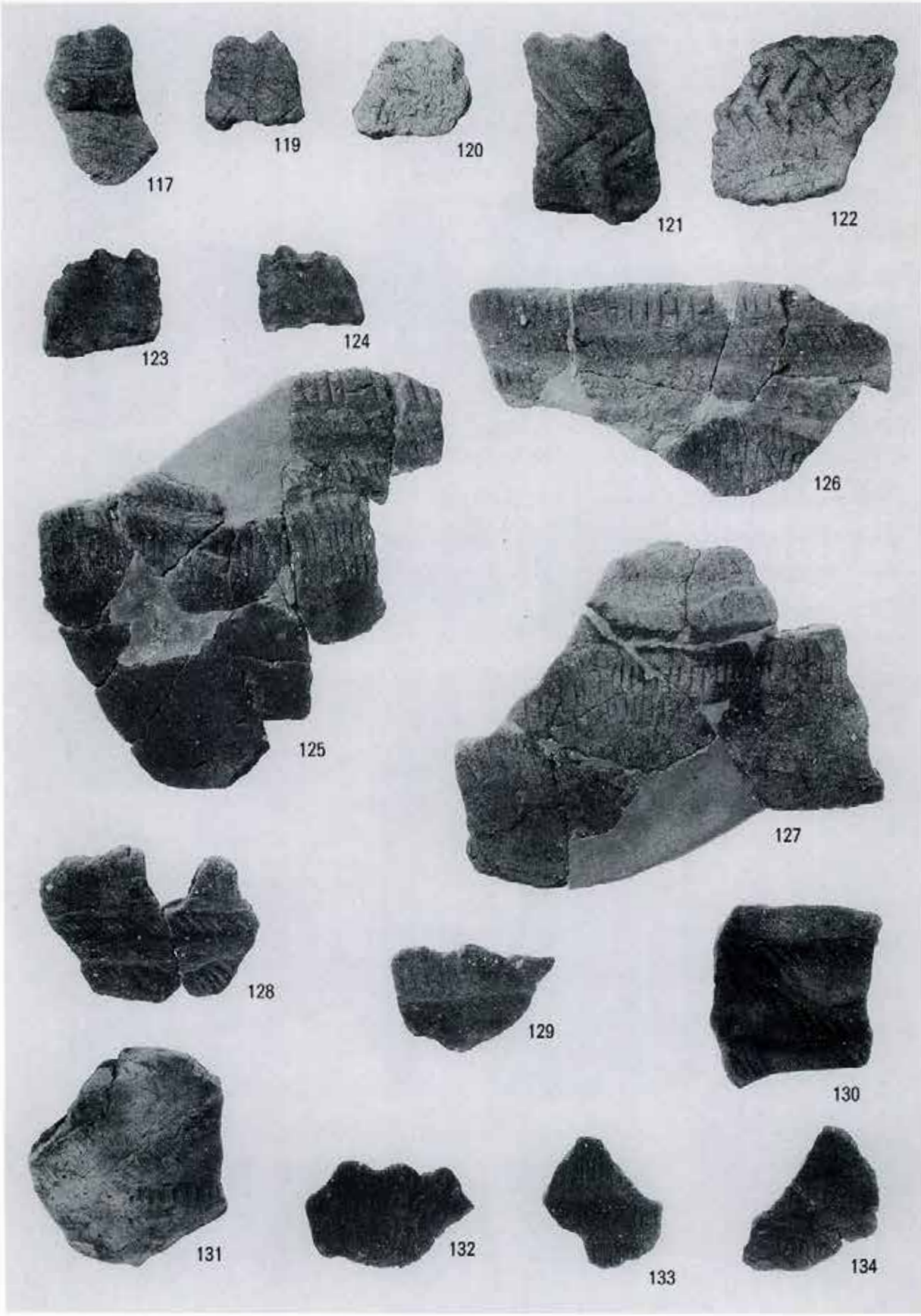


包含層（上の段）出土土器　第１群２・３類（ａ種）（下段は内面）

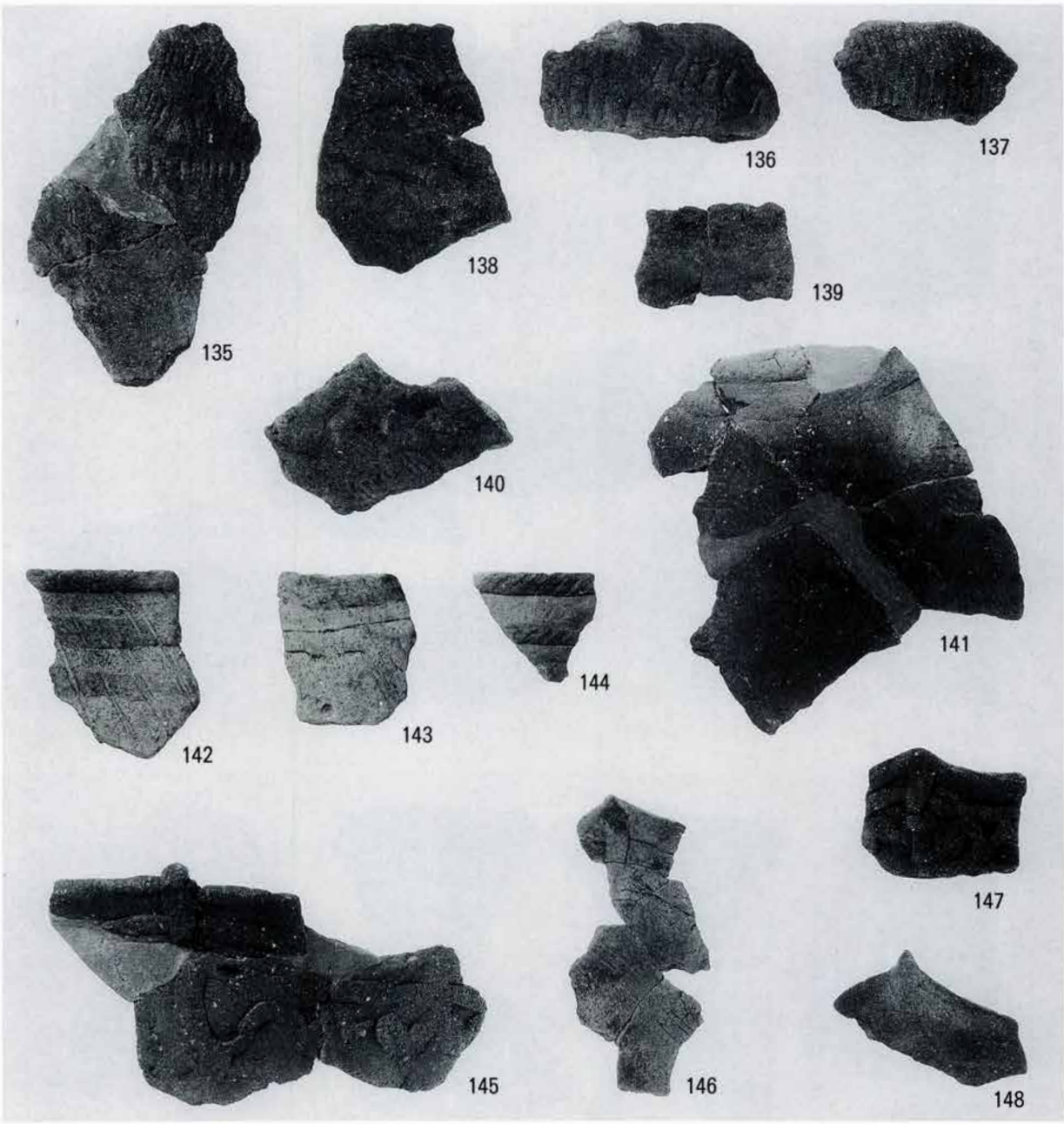


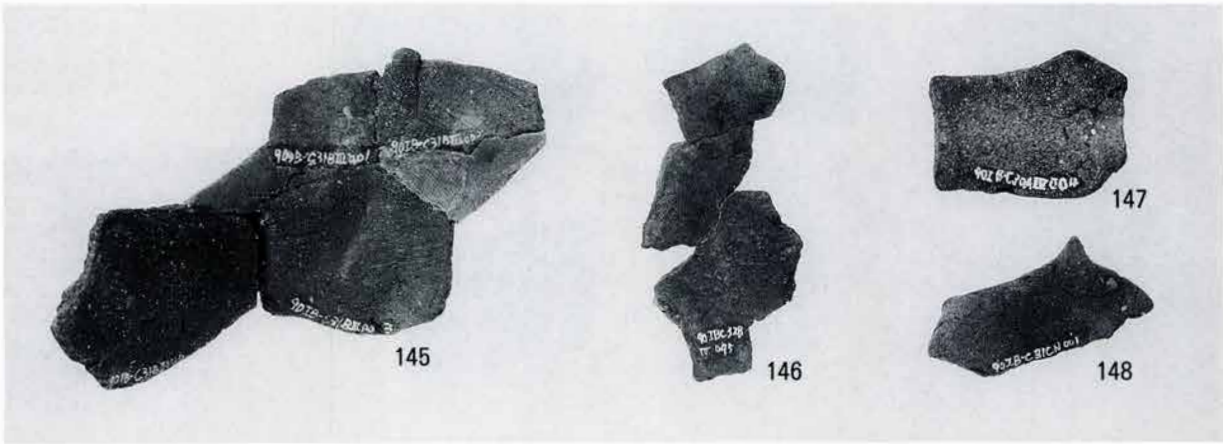


包含層（上の段）出土土器　第１群３類（ａ種）（下段は内面）

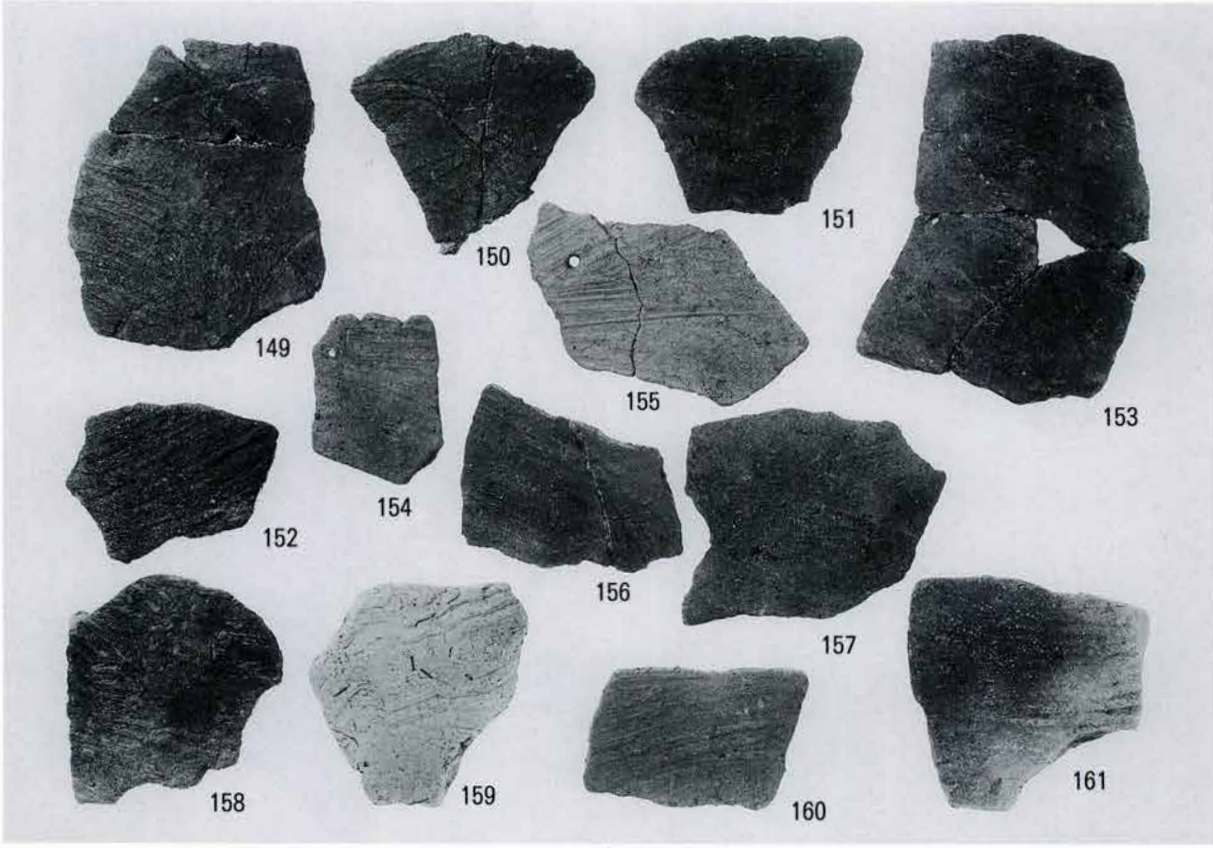


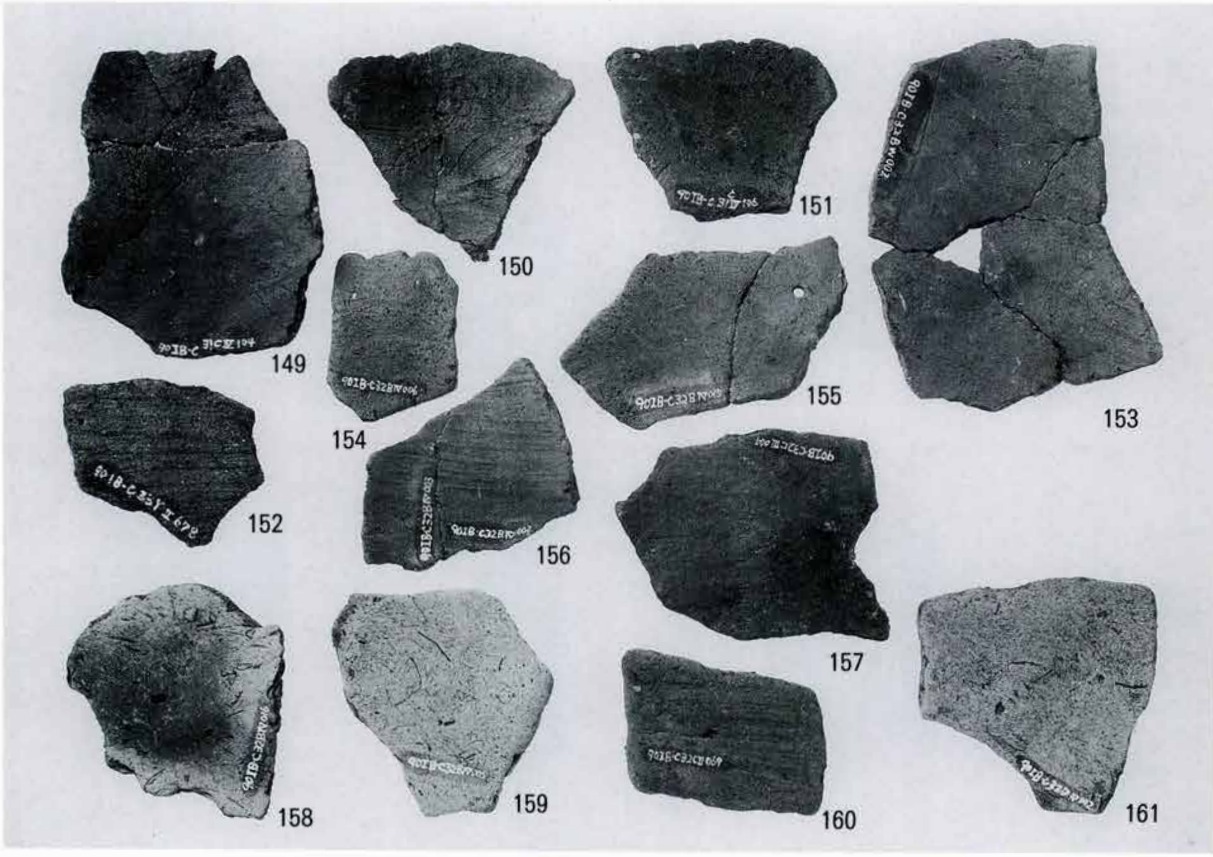
包含層（上の段）出土土器　第1群3類（b・c種）



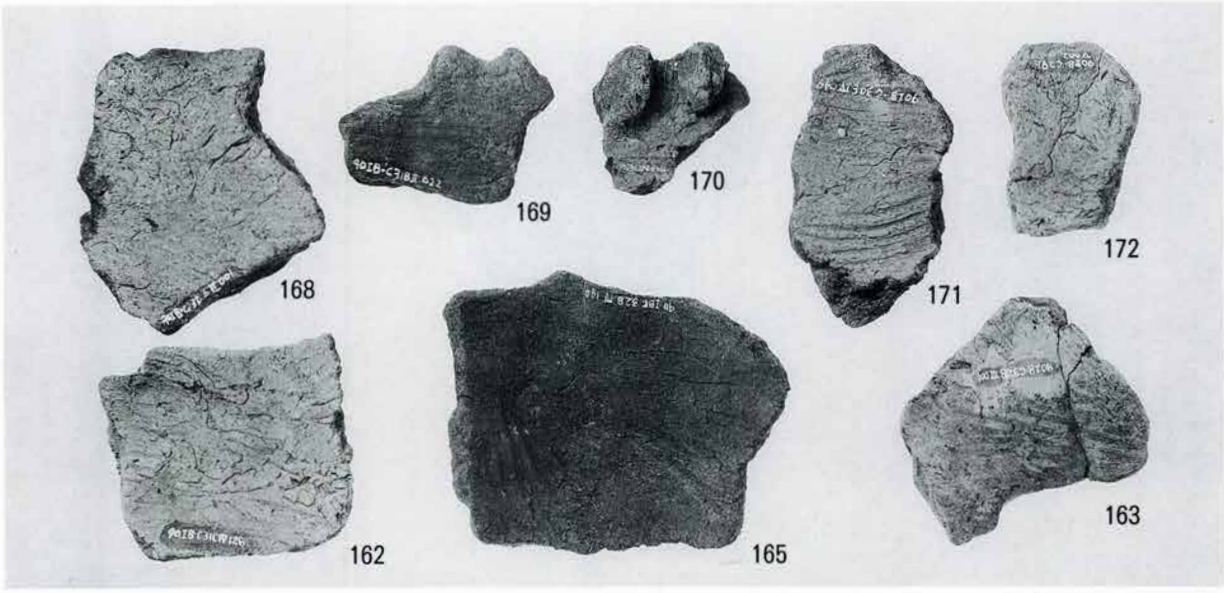


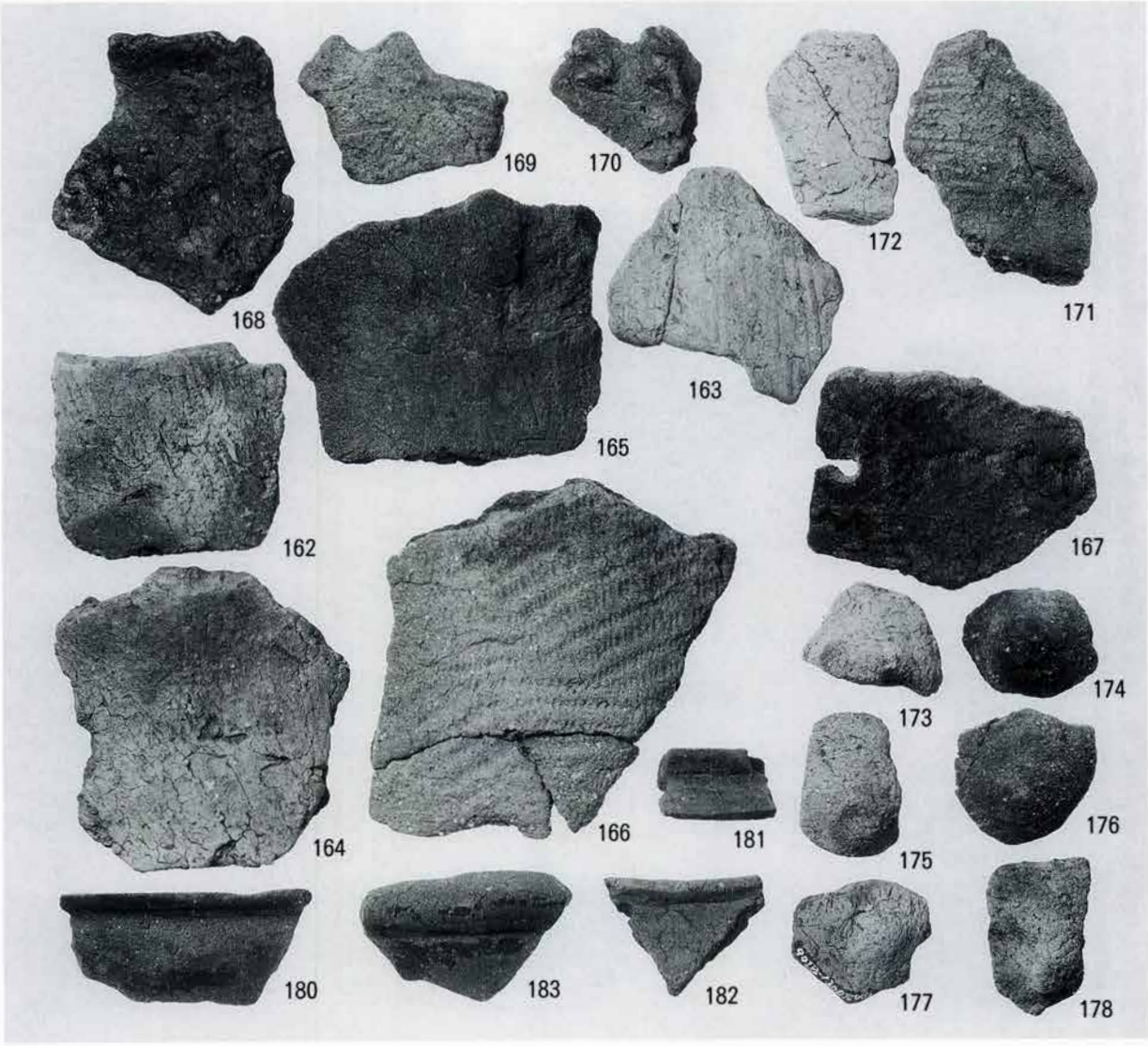
包含層（上の段）出土土器　第１群３類（ｄ～ｇ種）（下段は内面）



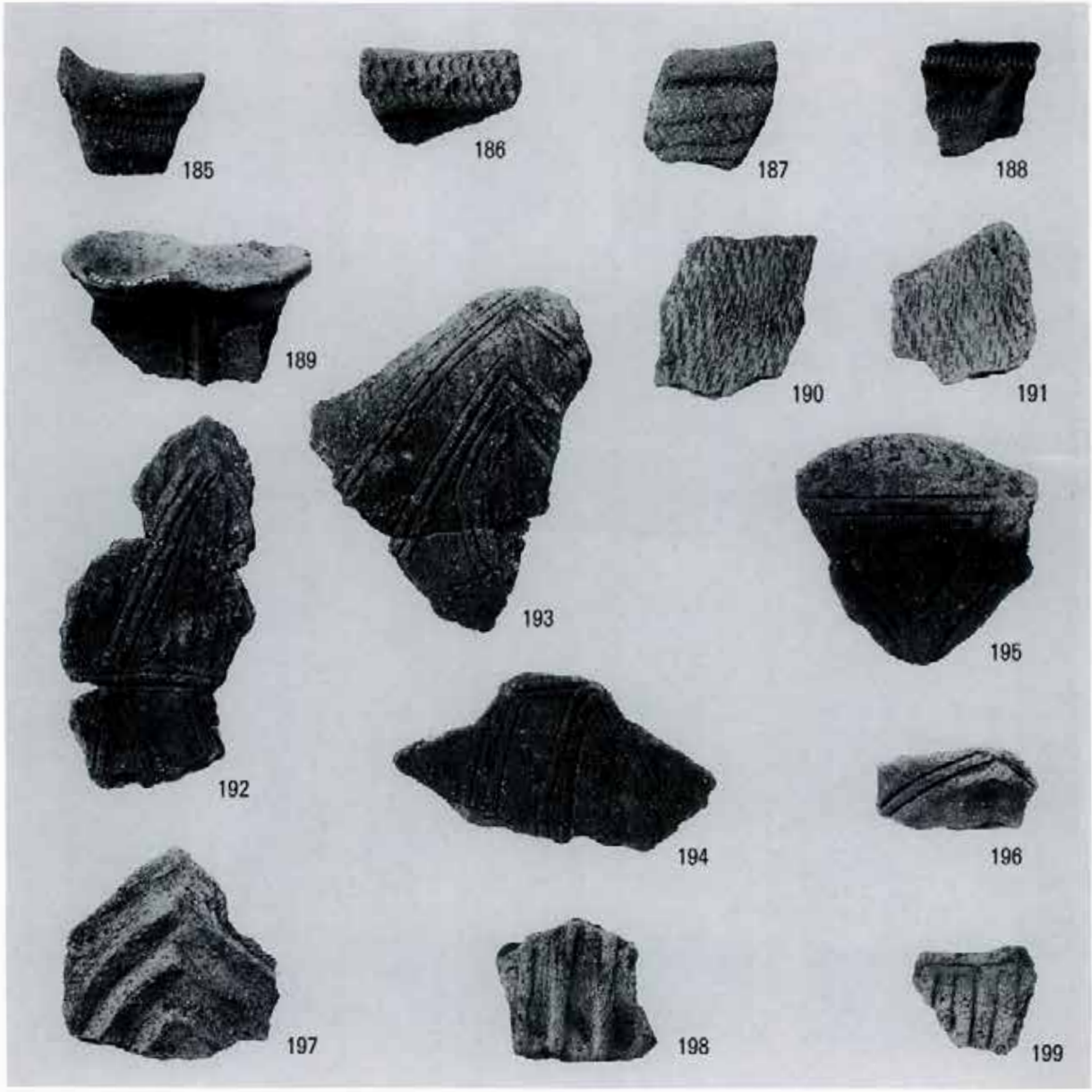


包含層（上の段）出土土器　第１群３類（ｈ種）（下段は内面）

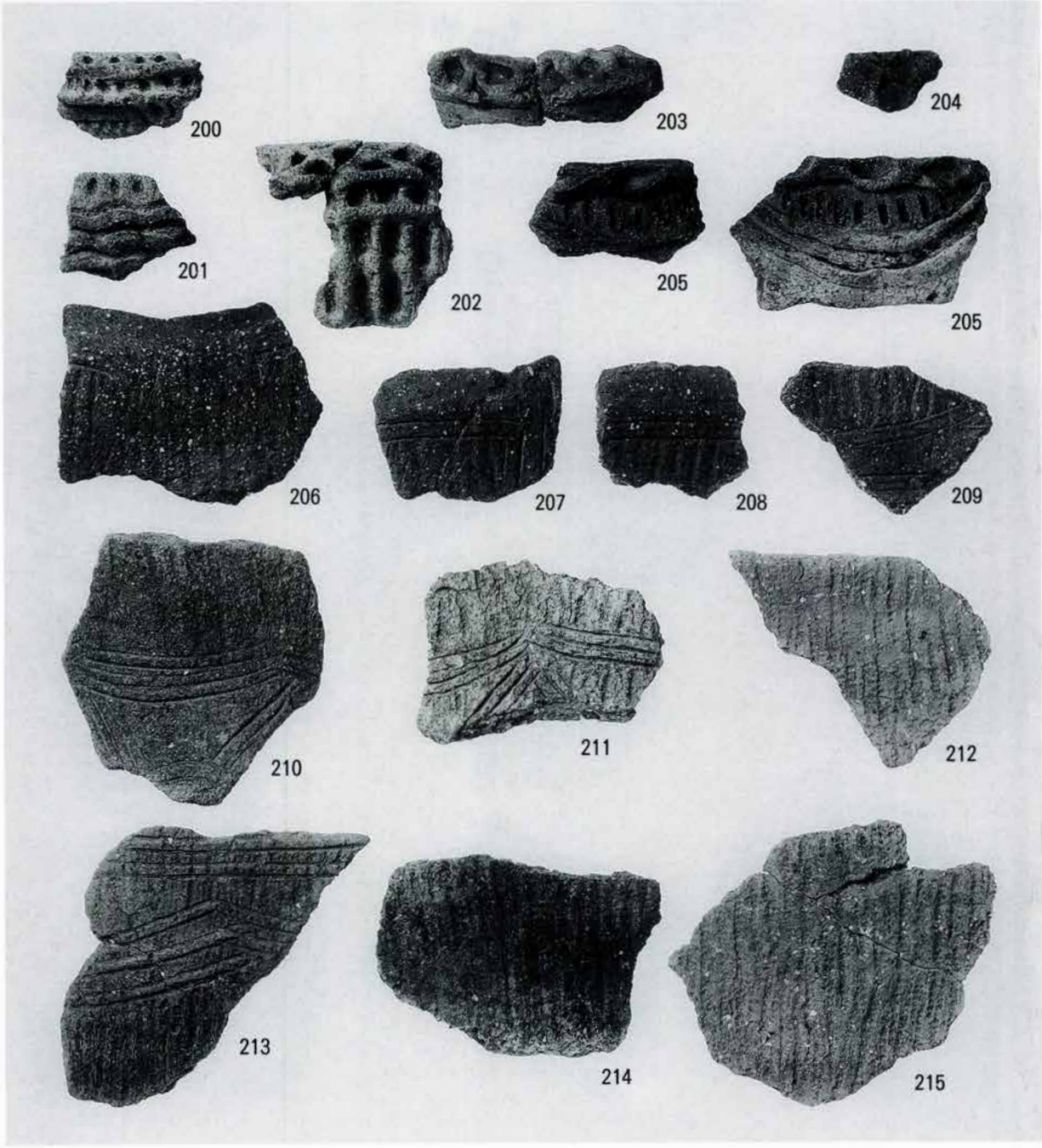




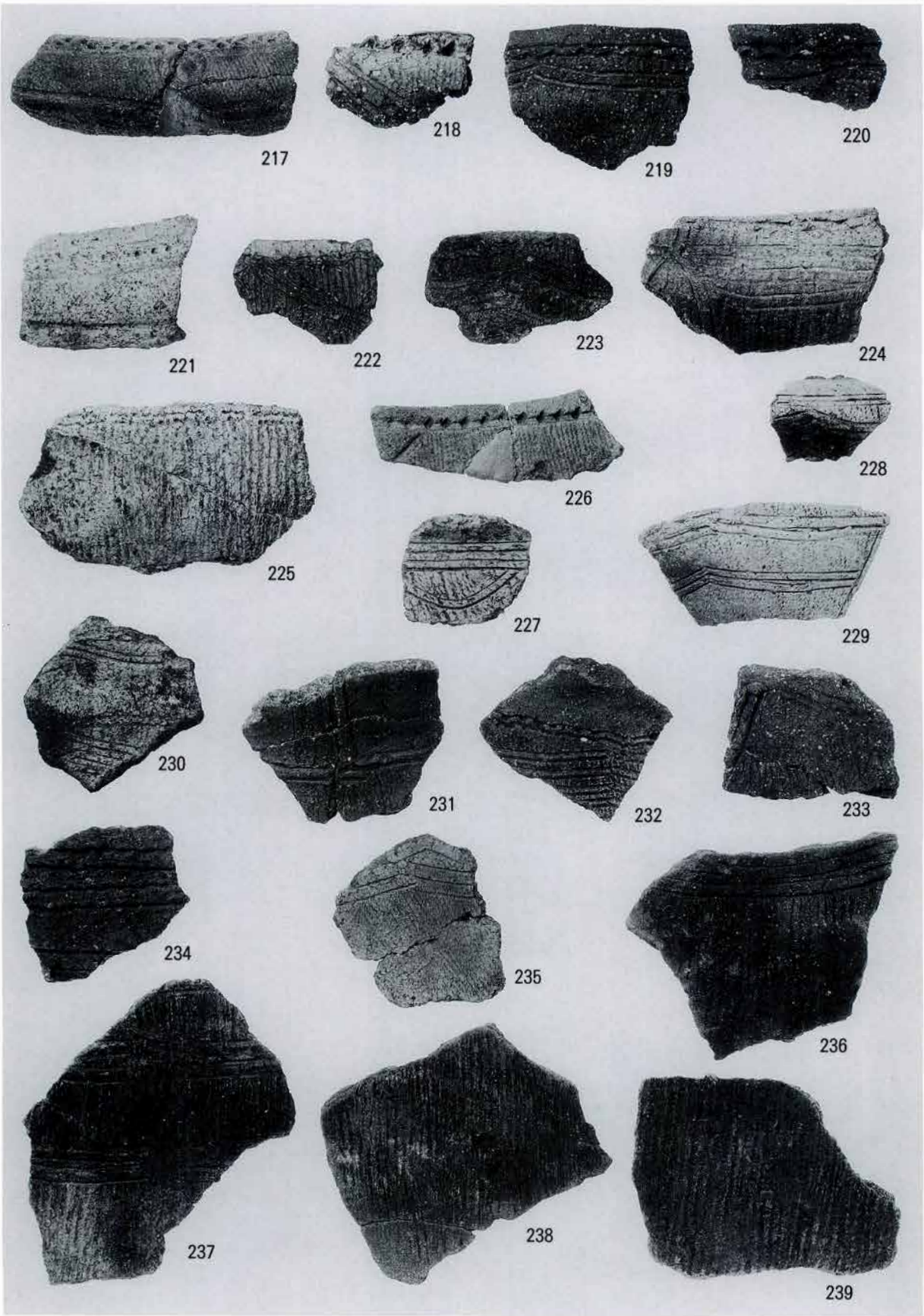
包含層（上の段）出土土器　第１群３類（ｈ種）、４類、第２群（上段は内面）



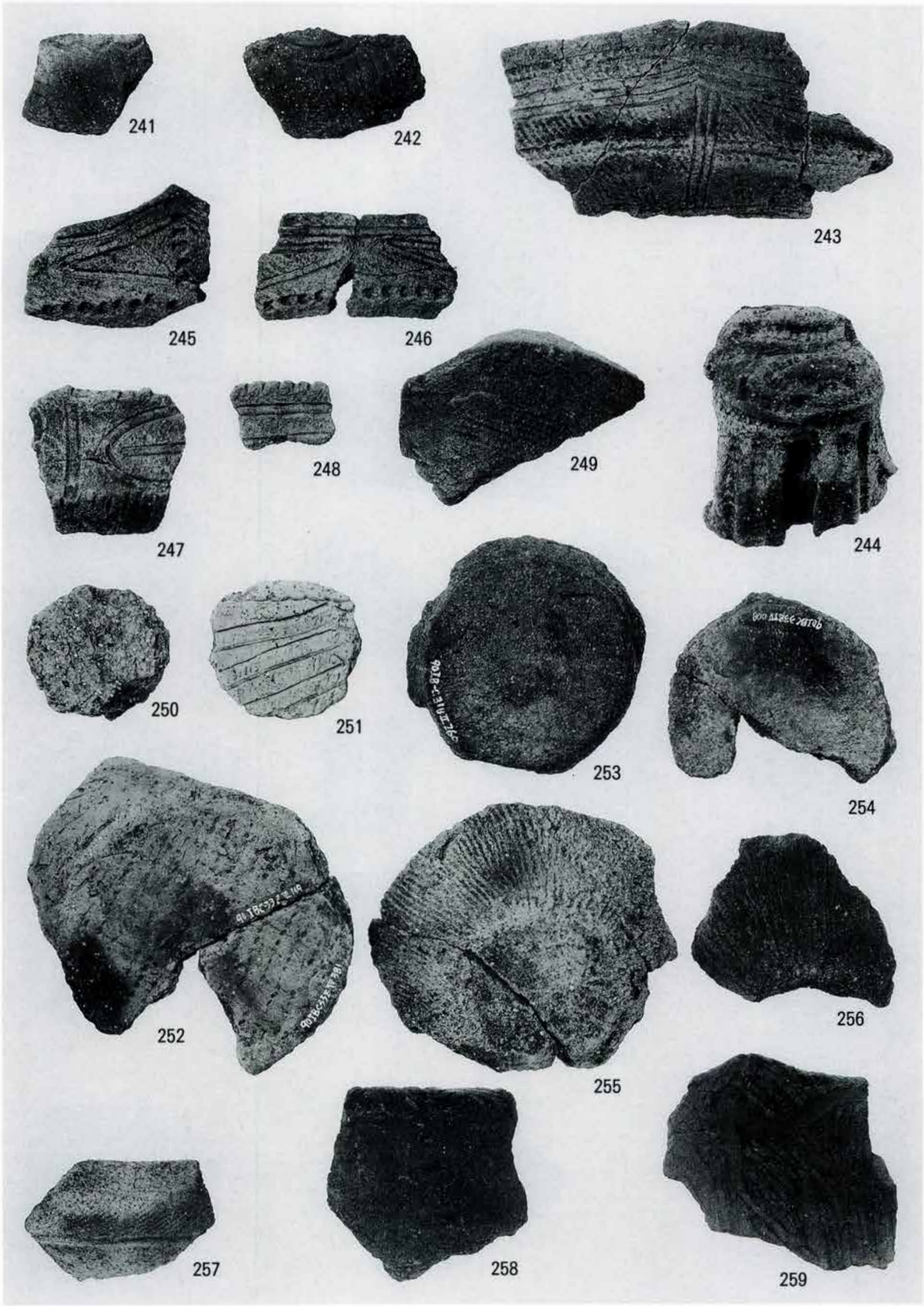
包含層（上の段）出土土器　第３群１・２類（ａ・ｂ種）（上段は内面）



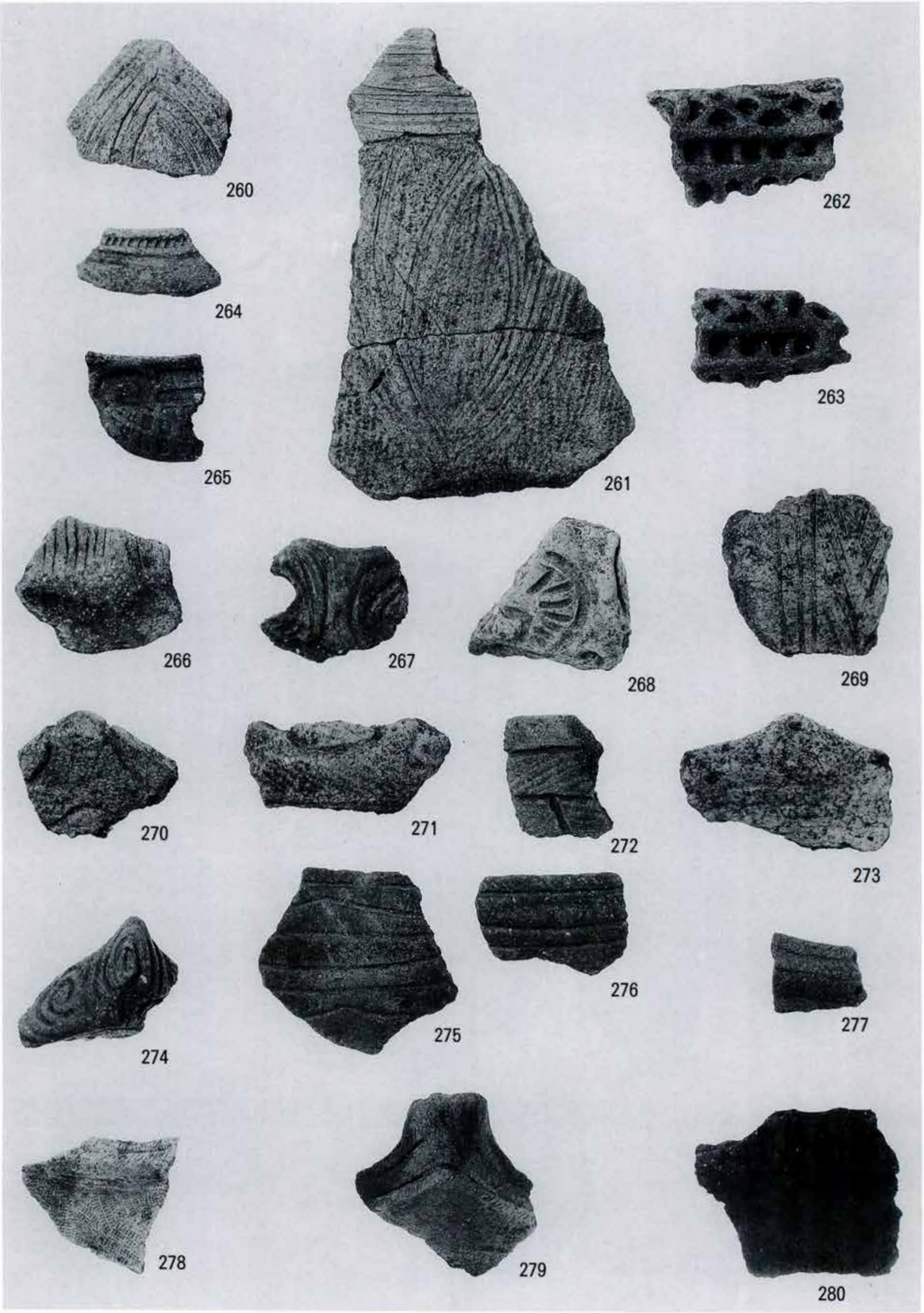
包含層（上の段）出土土器　第３群２類（ｂ・ｃ種）（上段は内面）



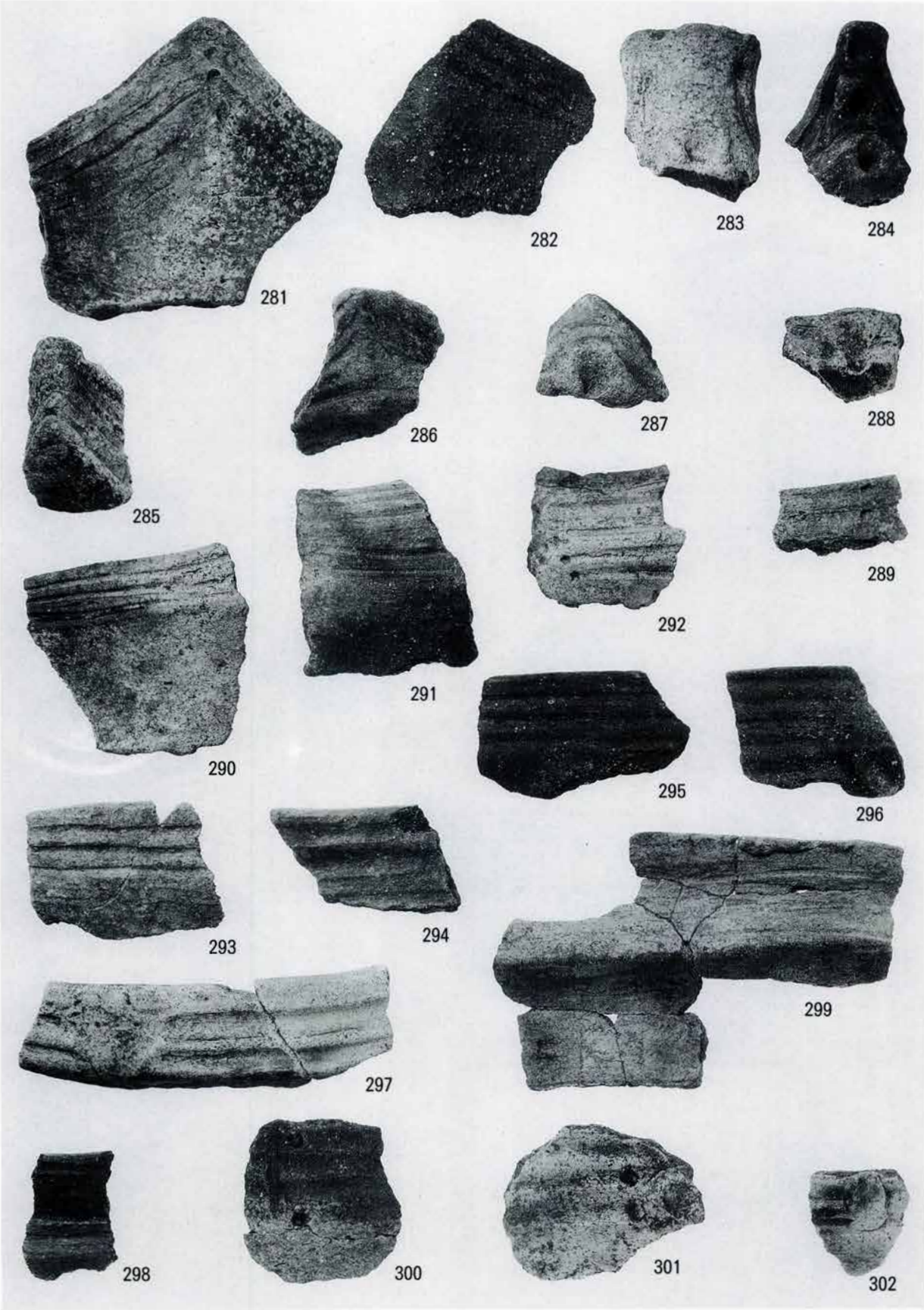
包含層（上の段）出土土器　第３群２類（ｄ種）



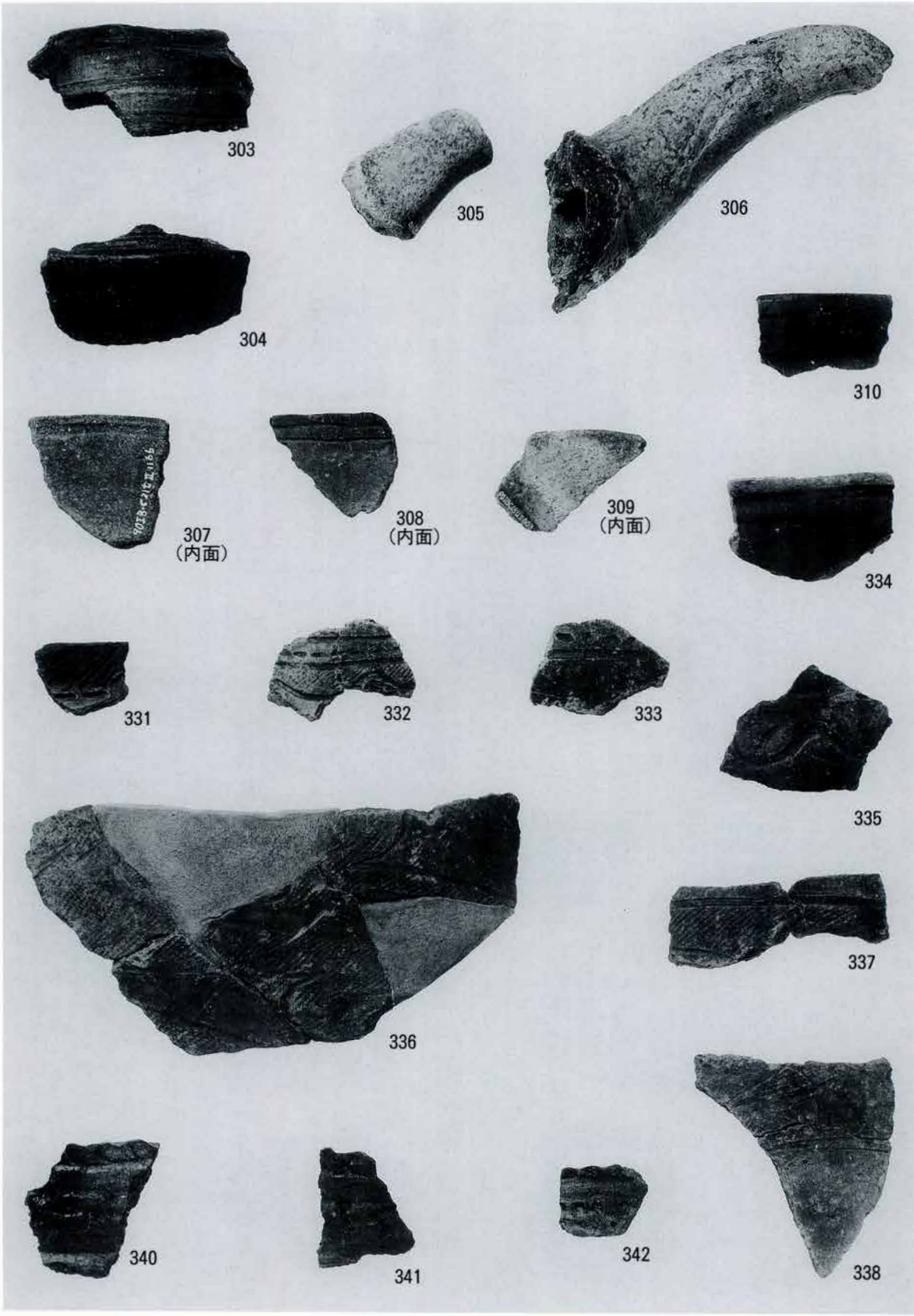
包含層（上の段）出土土器　第３群２類（ｅ種）・３類、第４群



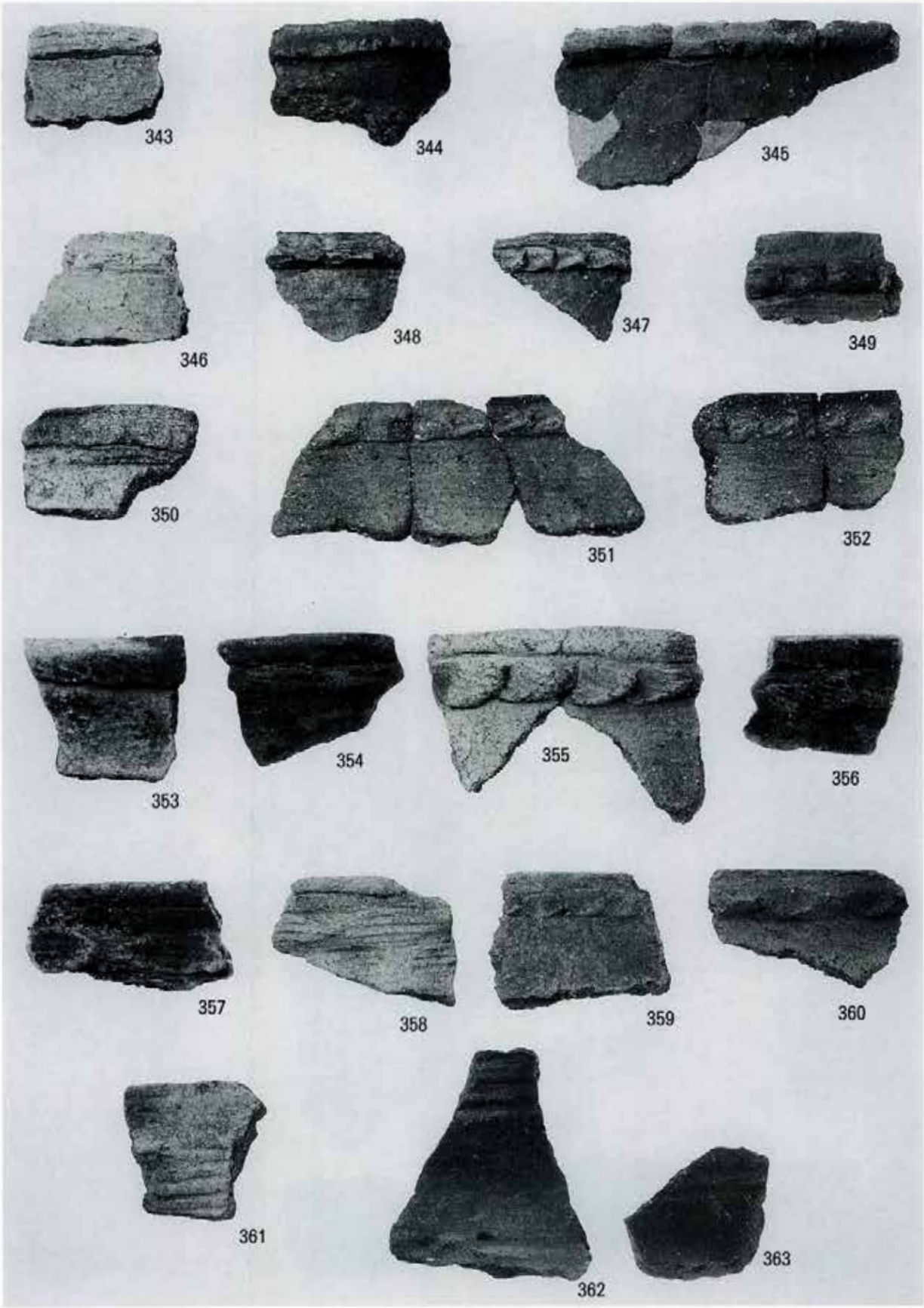
包含層（下の段）出土土器　第３群、第４群１・２類



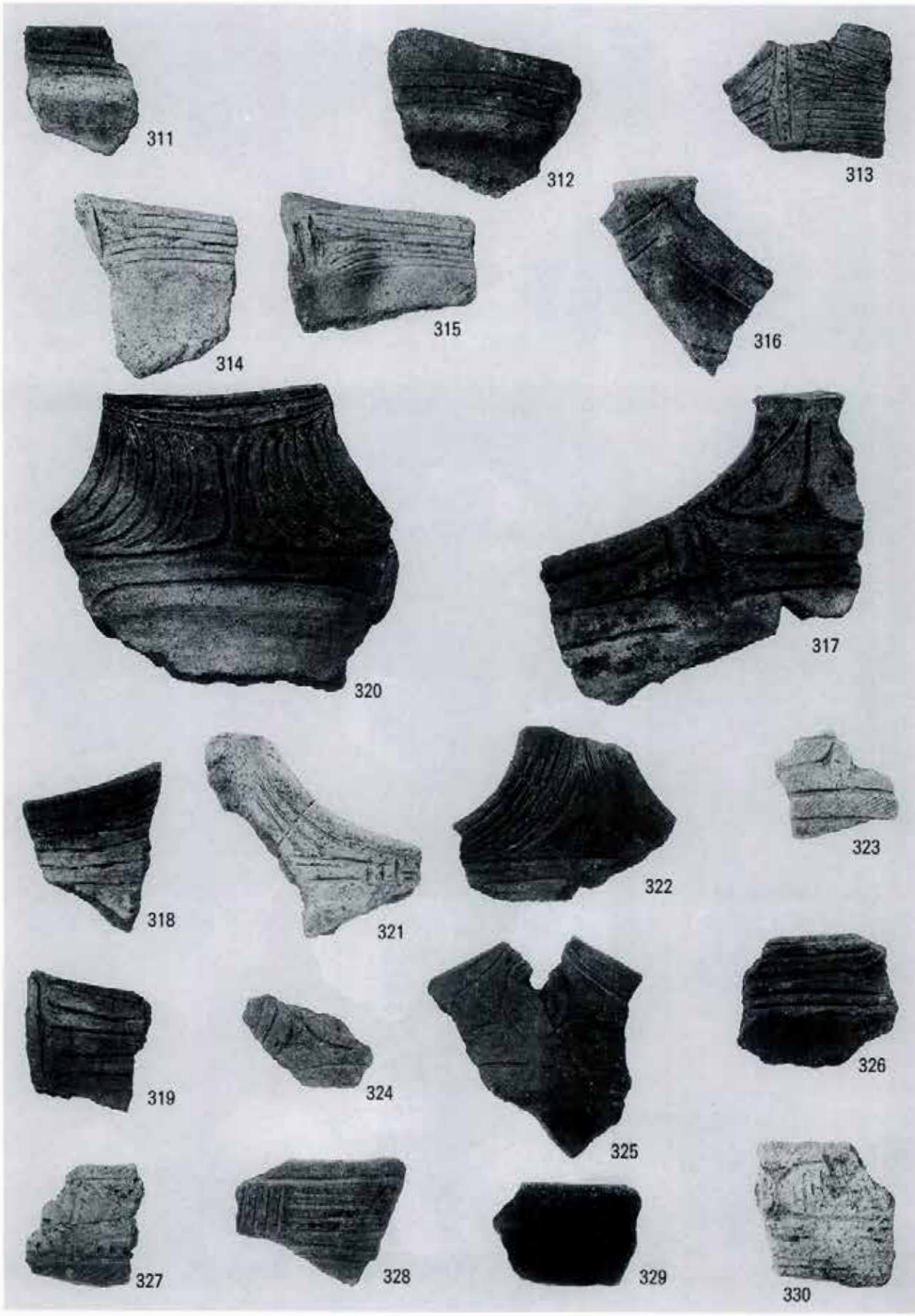
包含層（下の段）出土土器　第４群３類



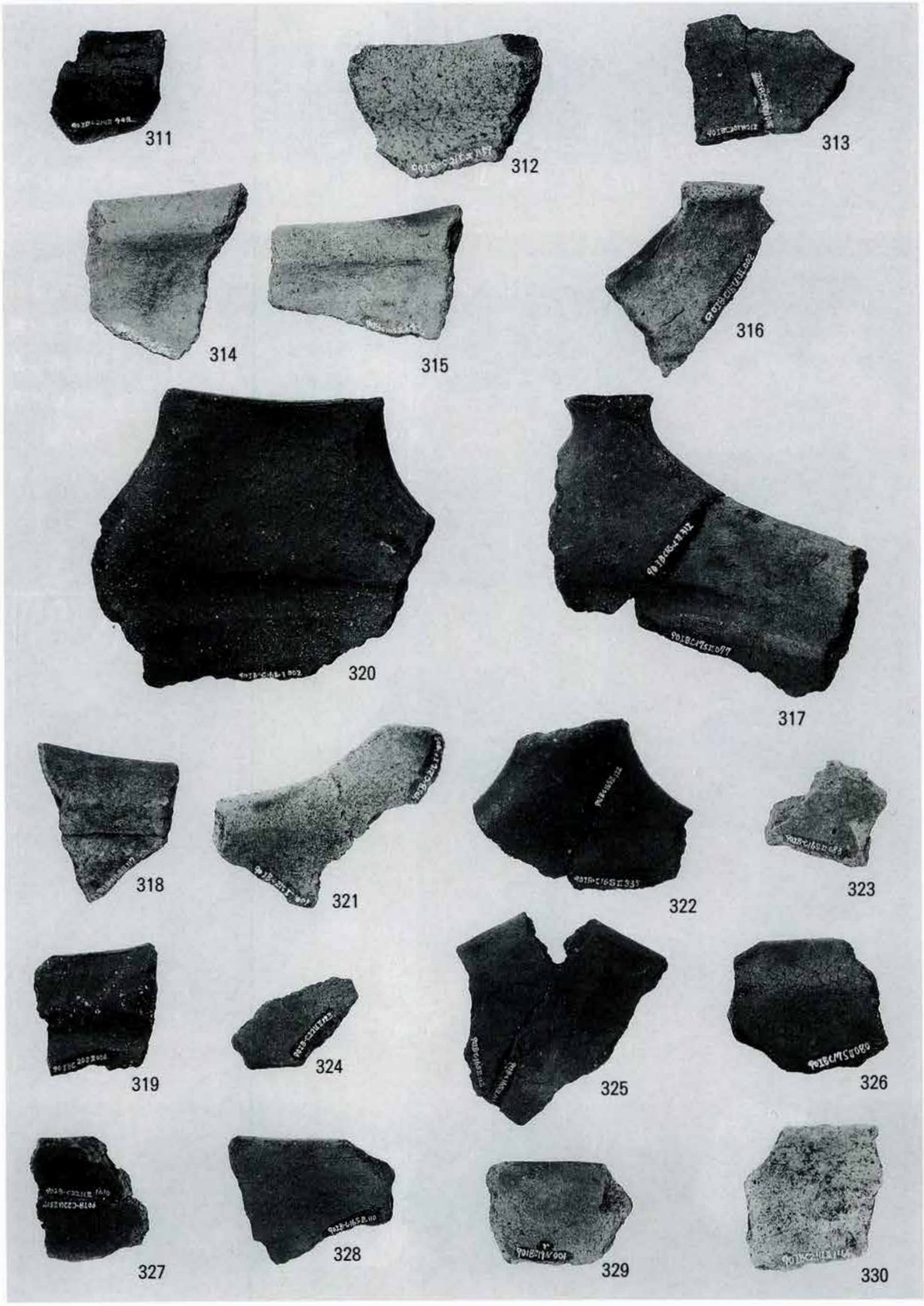
包含層（下の段）出土土器　第４群４・５類、第５群２類



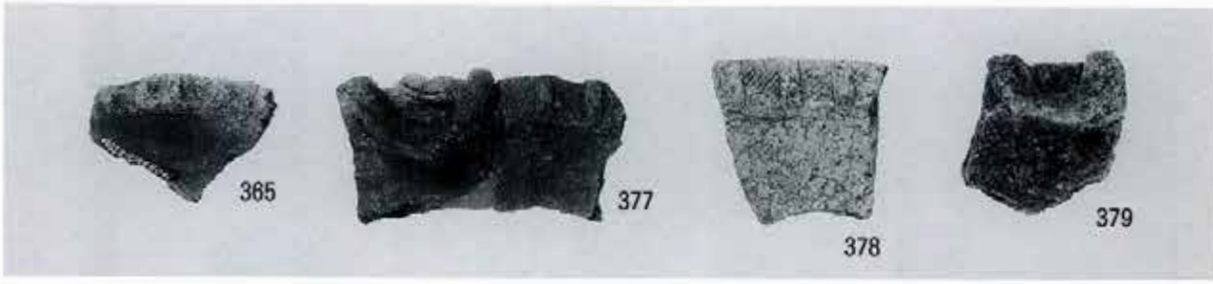
包含層（下の段）出土土器　第５群３・４類

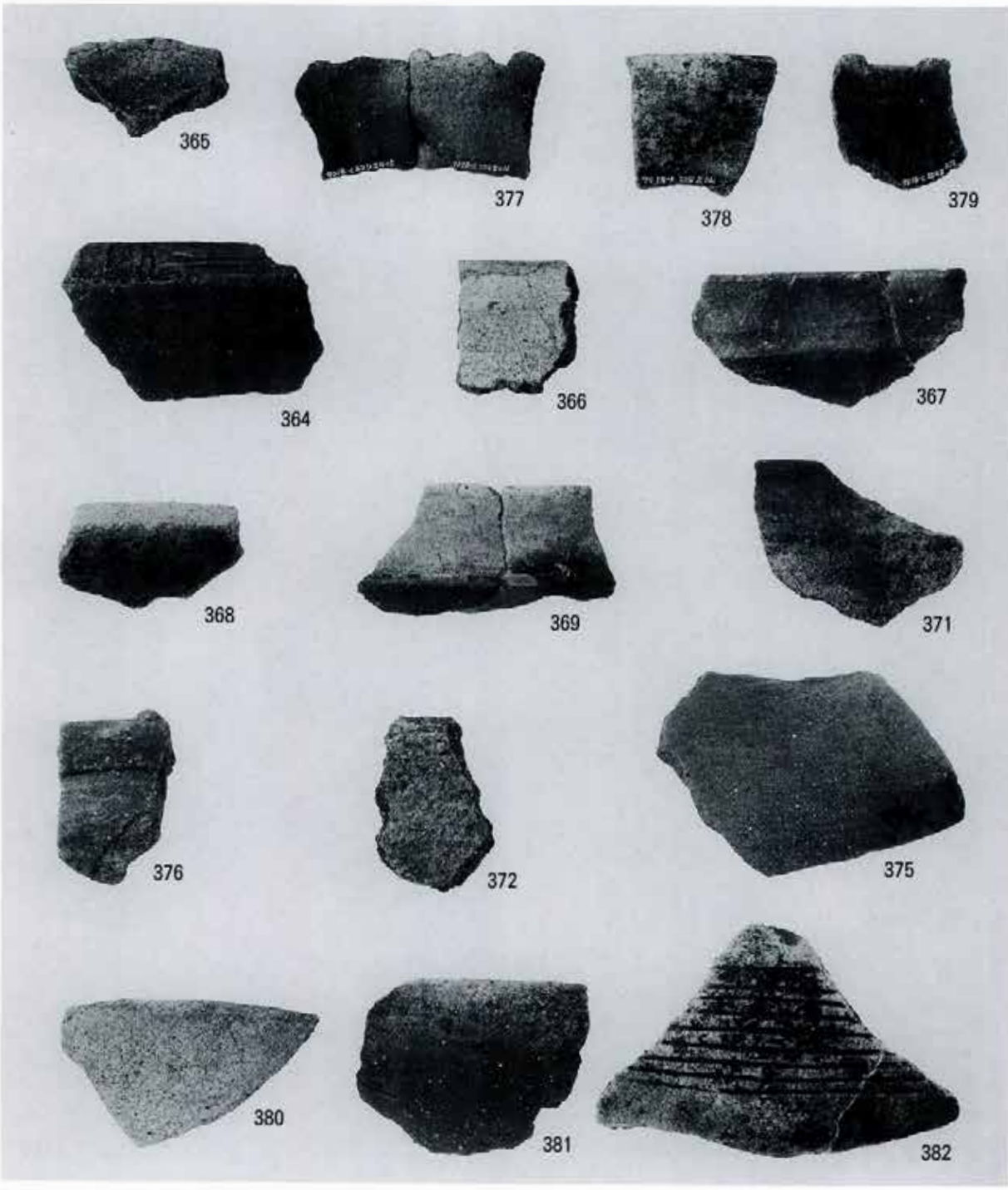


包含層（下の段）出土土器　第4群3類、第5群1類

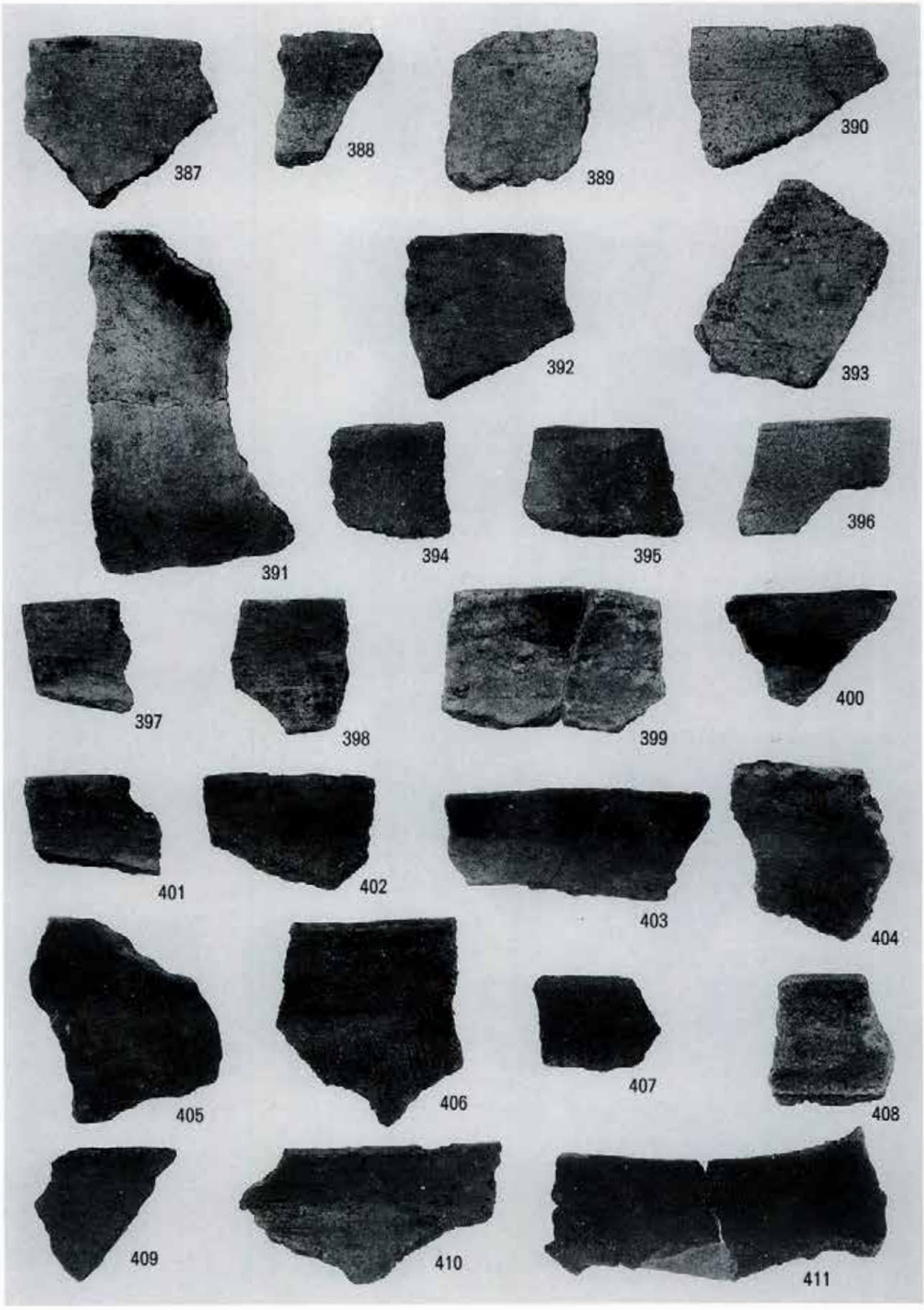


包含層（下の段）出土土器　第４群３類、第５群１類（内面）

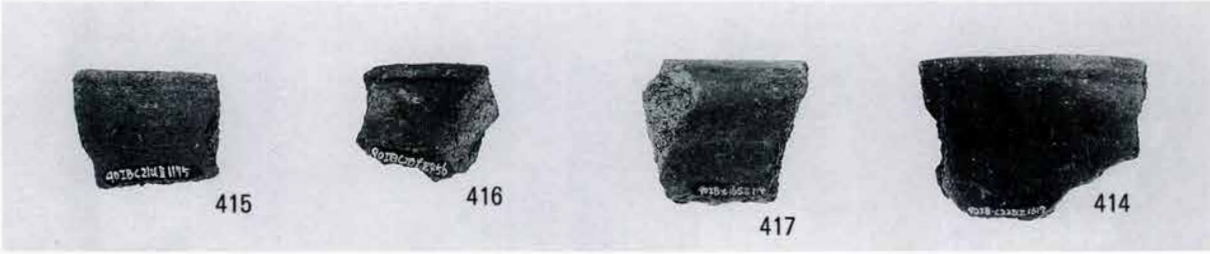


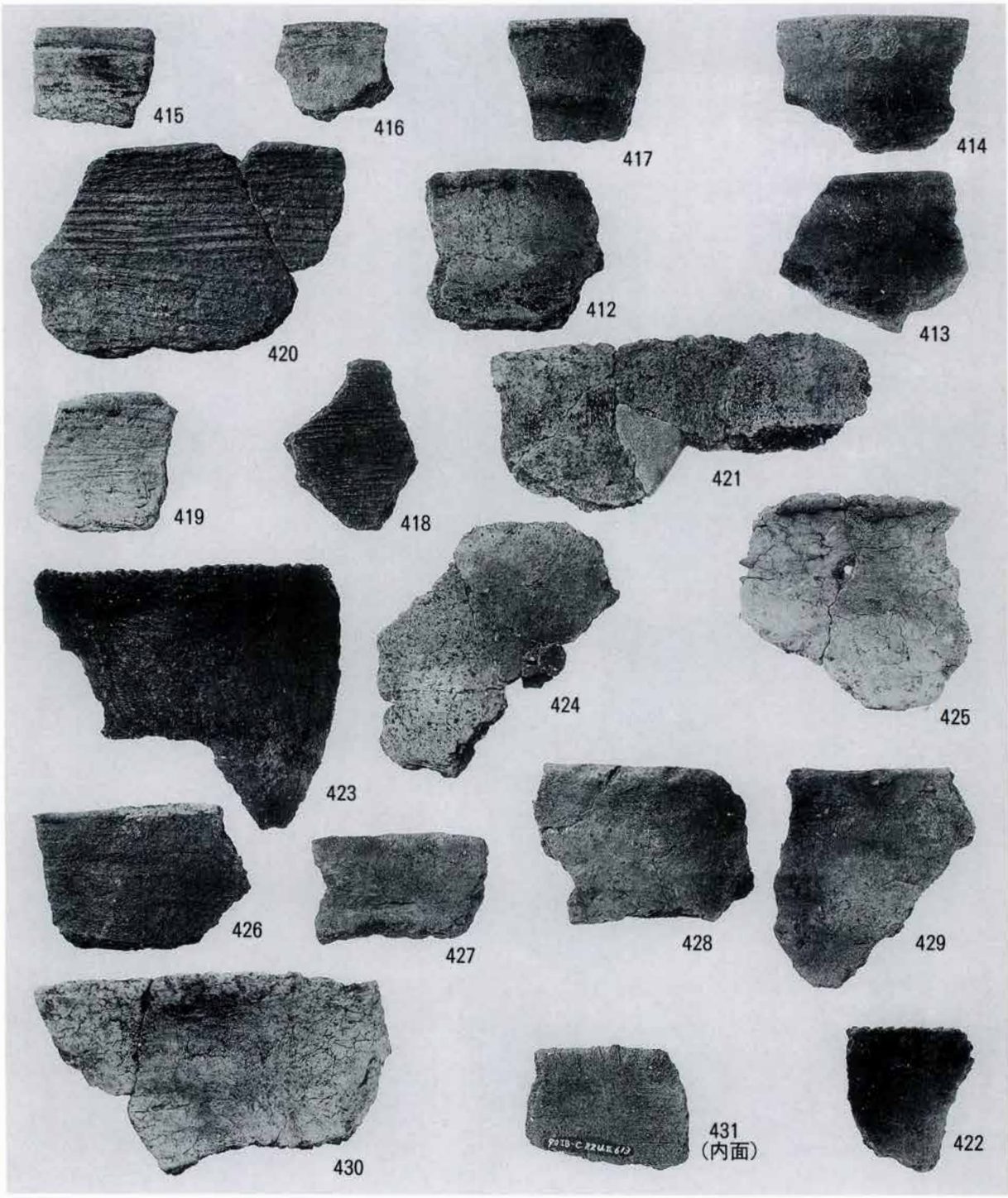


包含層（下の段）出土土器　第５群４類、第６群４・５類（上段は内面）

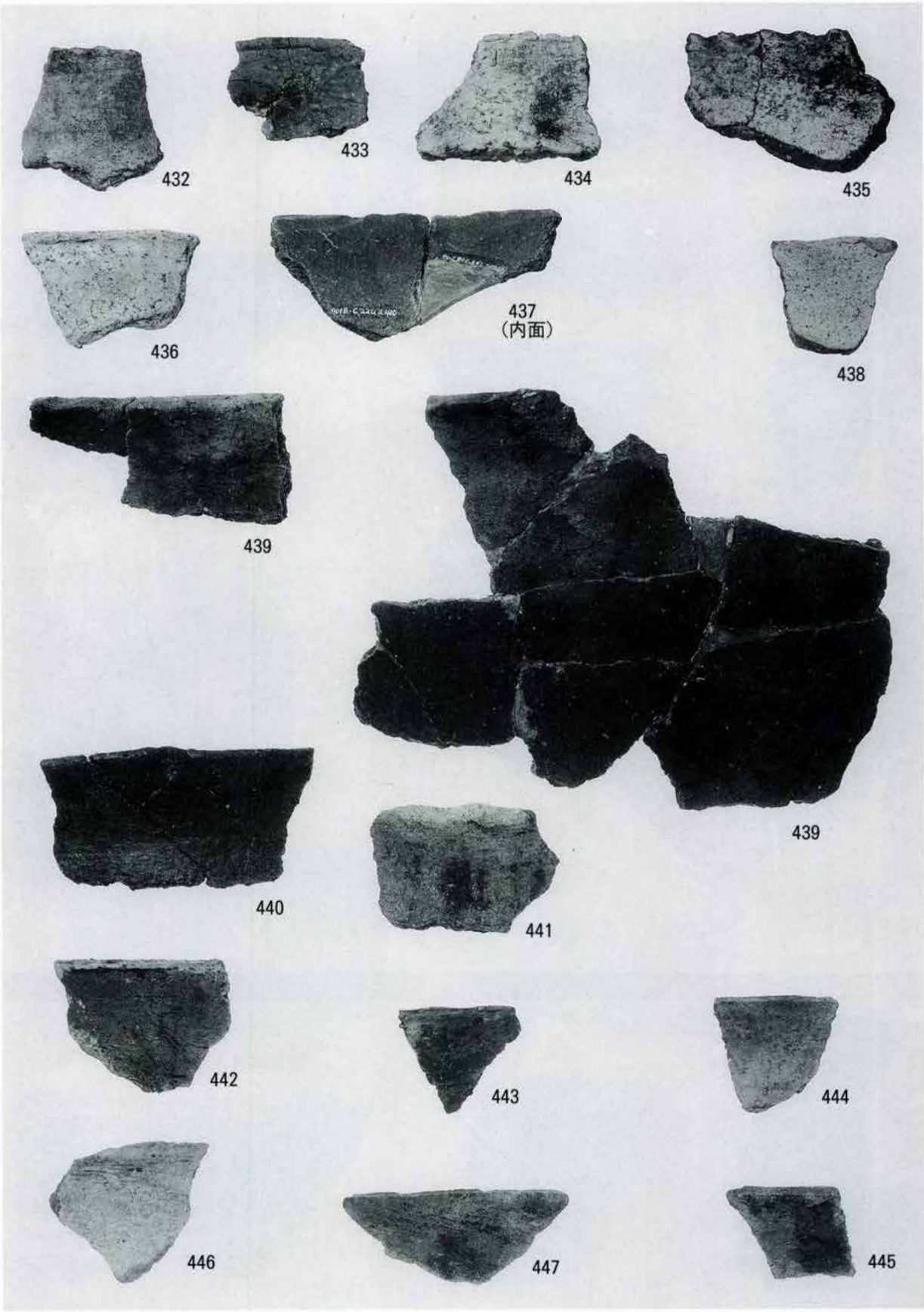


包含層（下の段）出土土器　第６群１類（ａ種①）

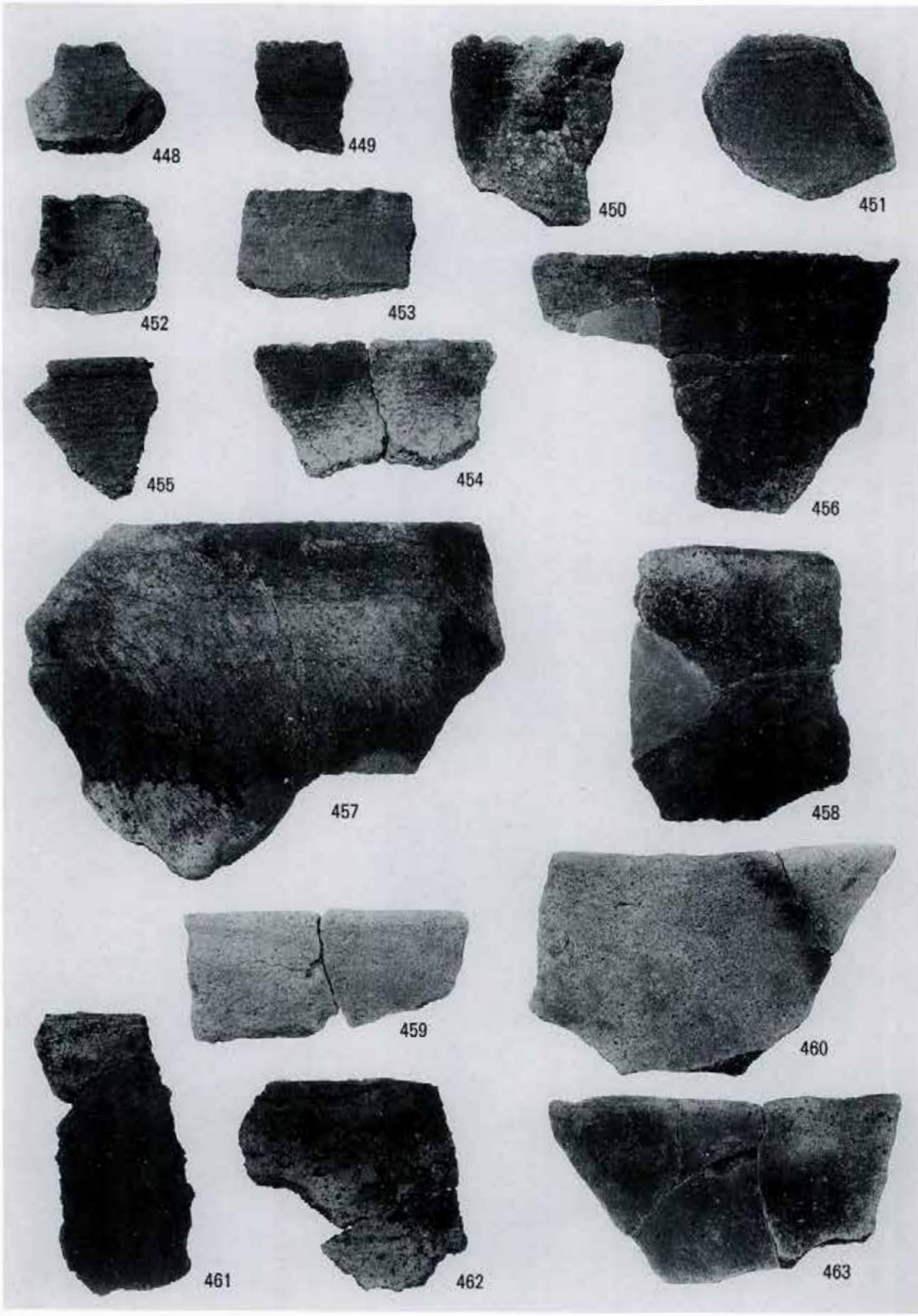




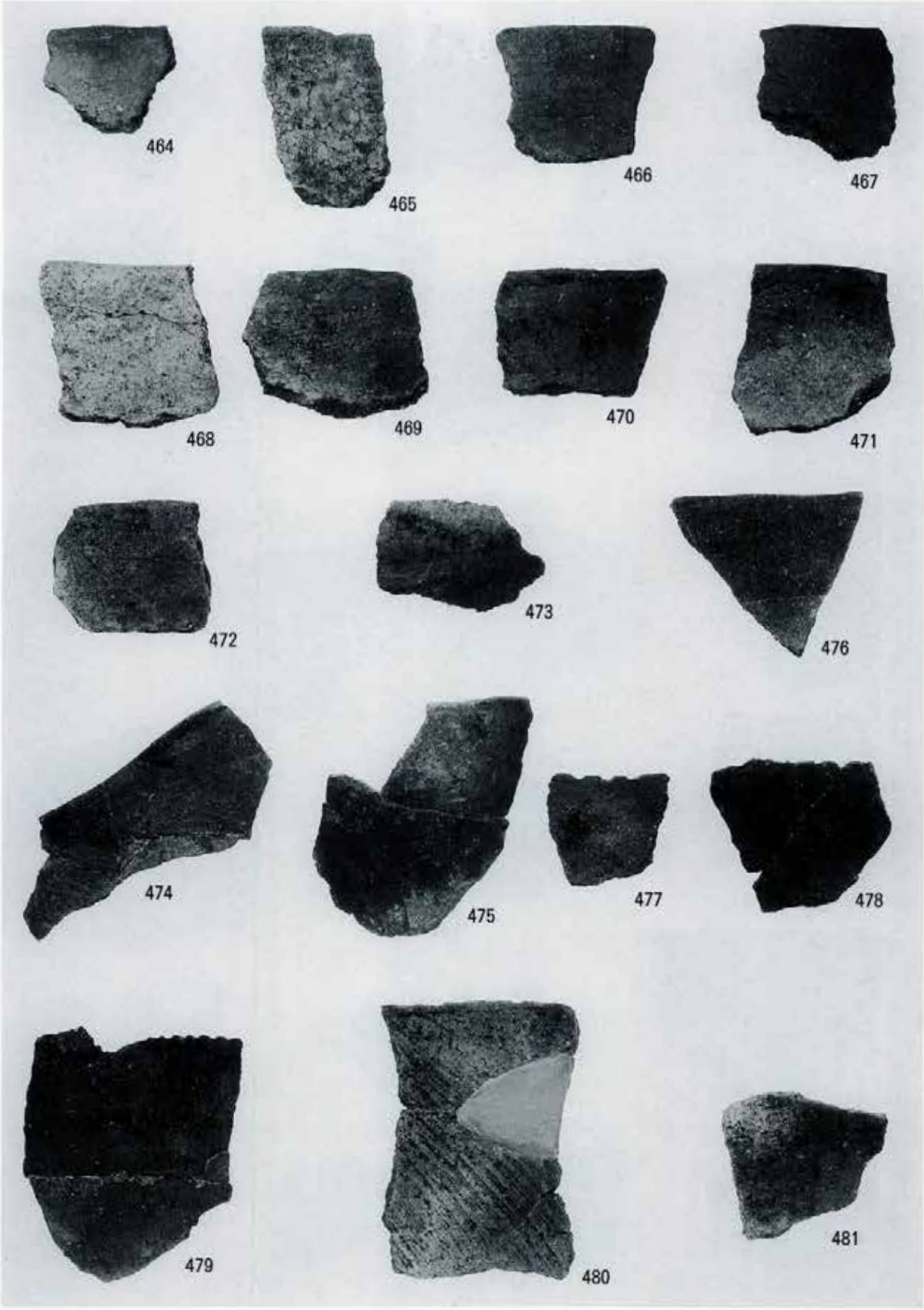
包含層（下の段）出土土器　第６群１類（ａ種①・②）（上段は内面）



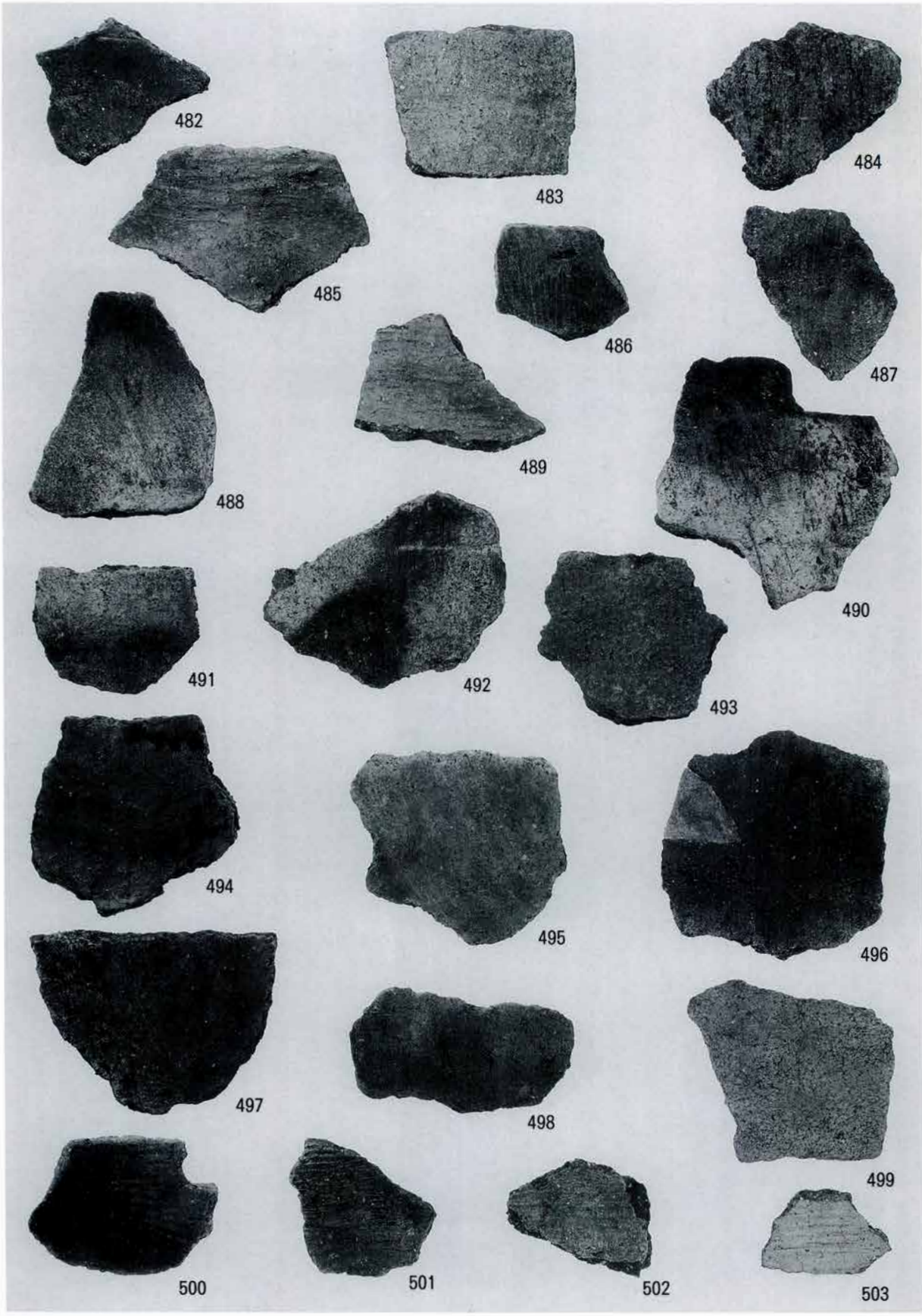
包含層（下の段）出土土器　第６群１類（ａ種②）



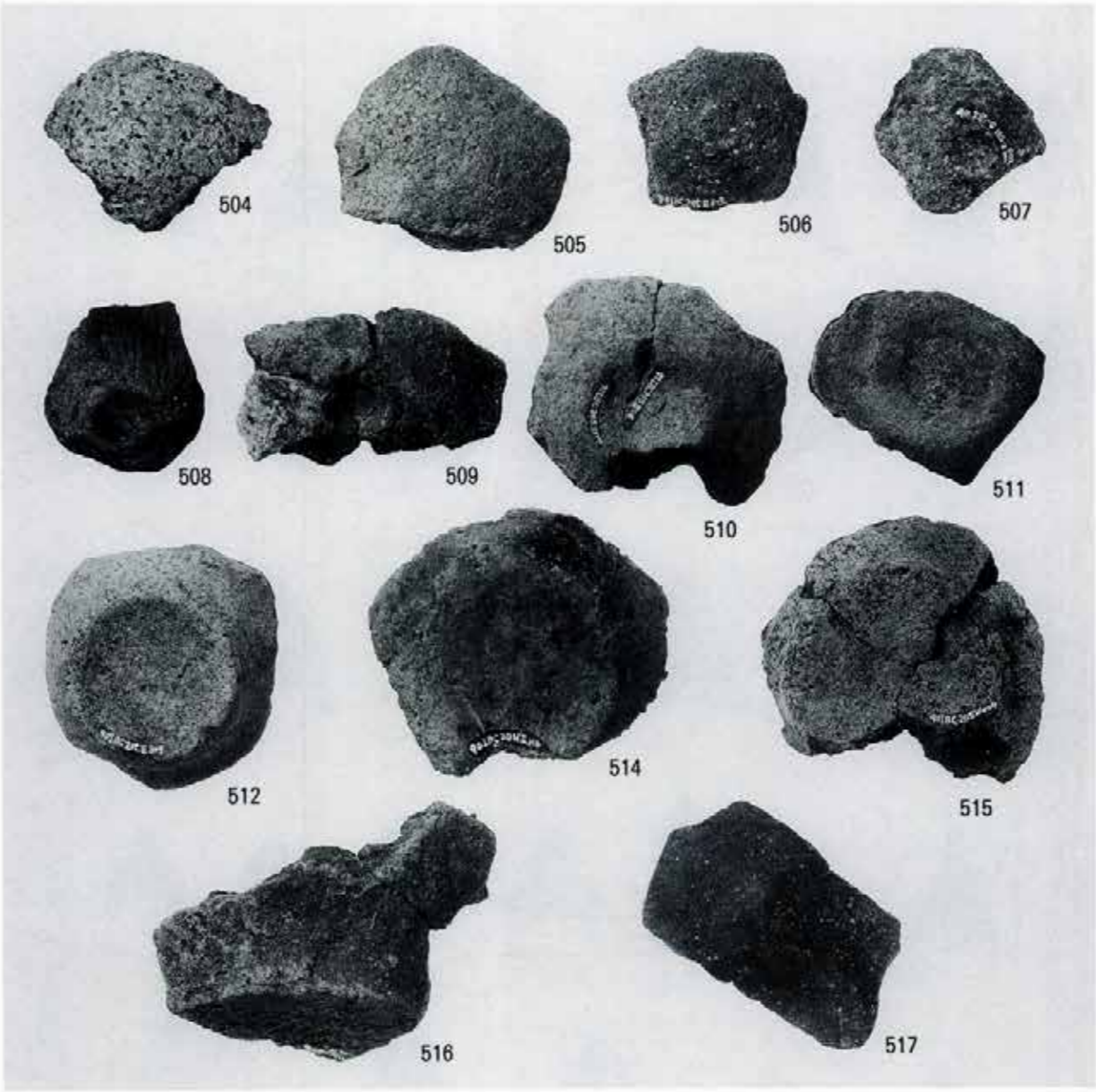
包含層（下の段）出土土器　第6群1類（a種②、b種①）



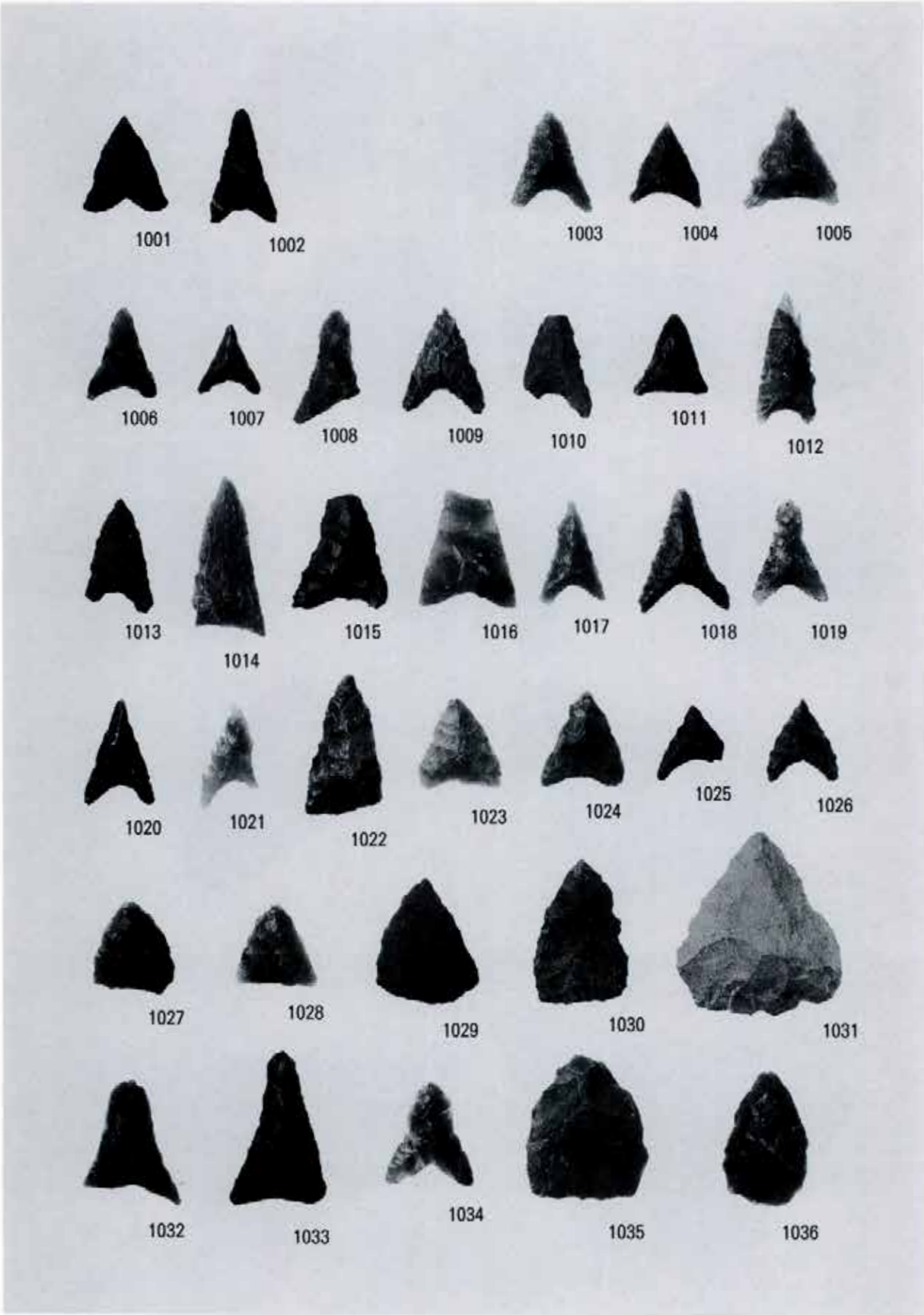
包含層（下の段）出土土器　第6群1類（b種①②）



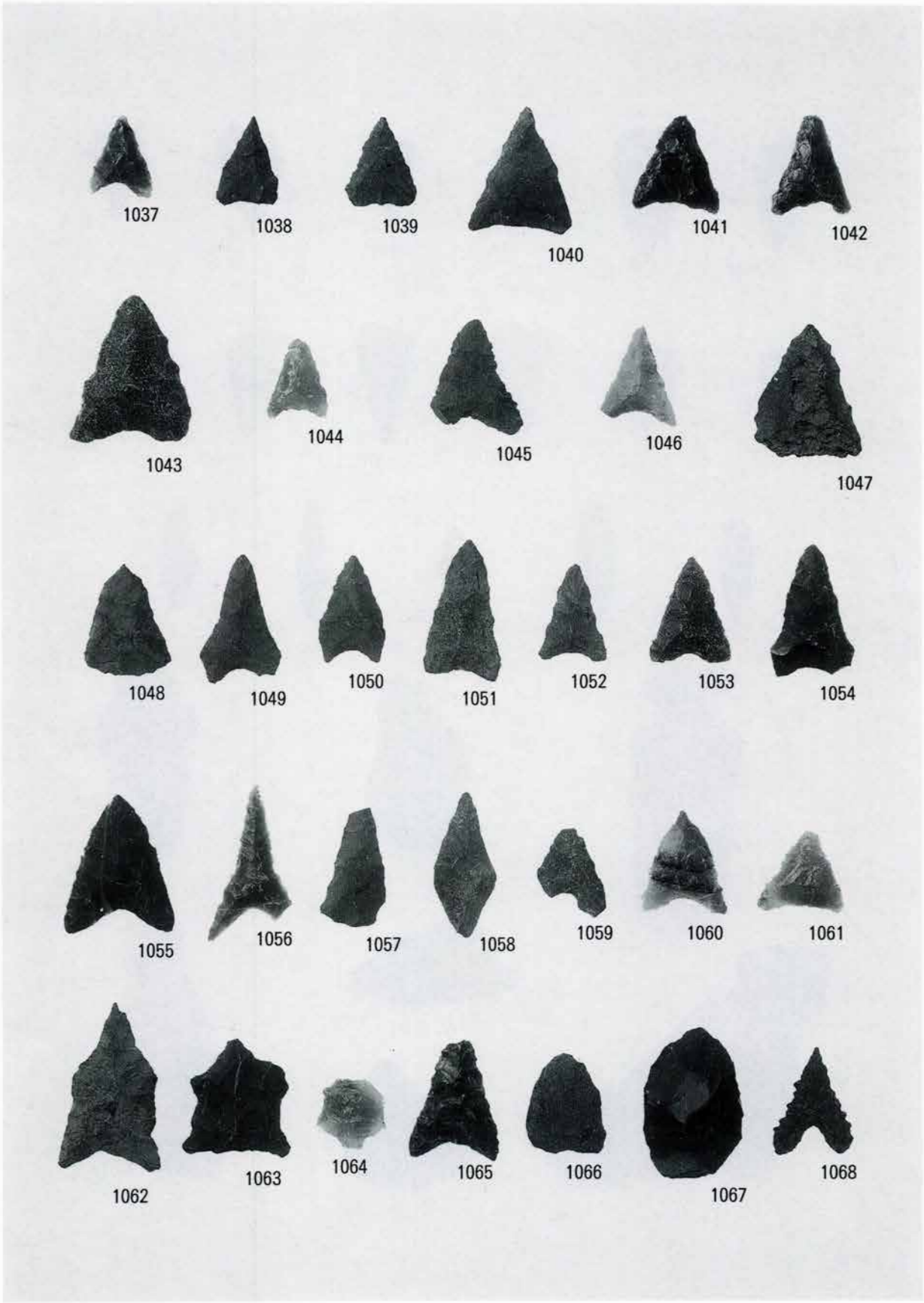
包含層（下の段）出土土器　第 6 群 2 類



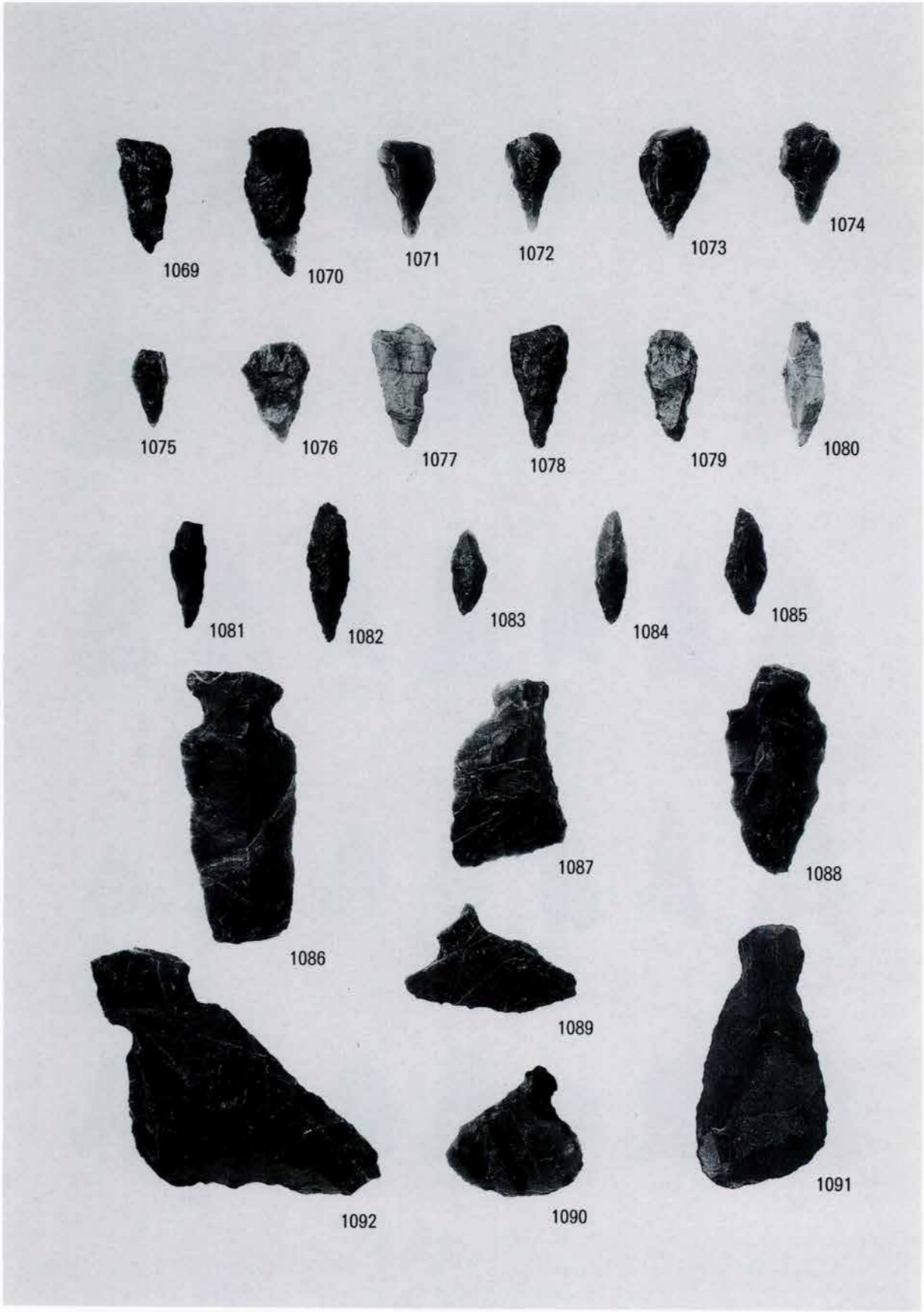
包含層（下の段）出土土器　第6群3類


1001
1002
1003
1004
1005
1006
1007
1008
1009
1010
1011
1012
1013
1014
1015
1016
1017
1018
1019
1020
1021
1022
1023
1024
1025
1026
1027
1028
1029
1030
1031
1032
1033
1034
1035
1036

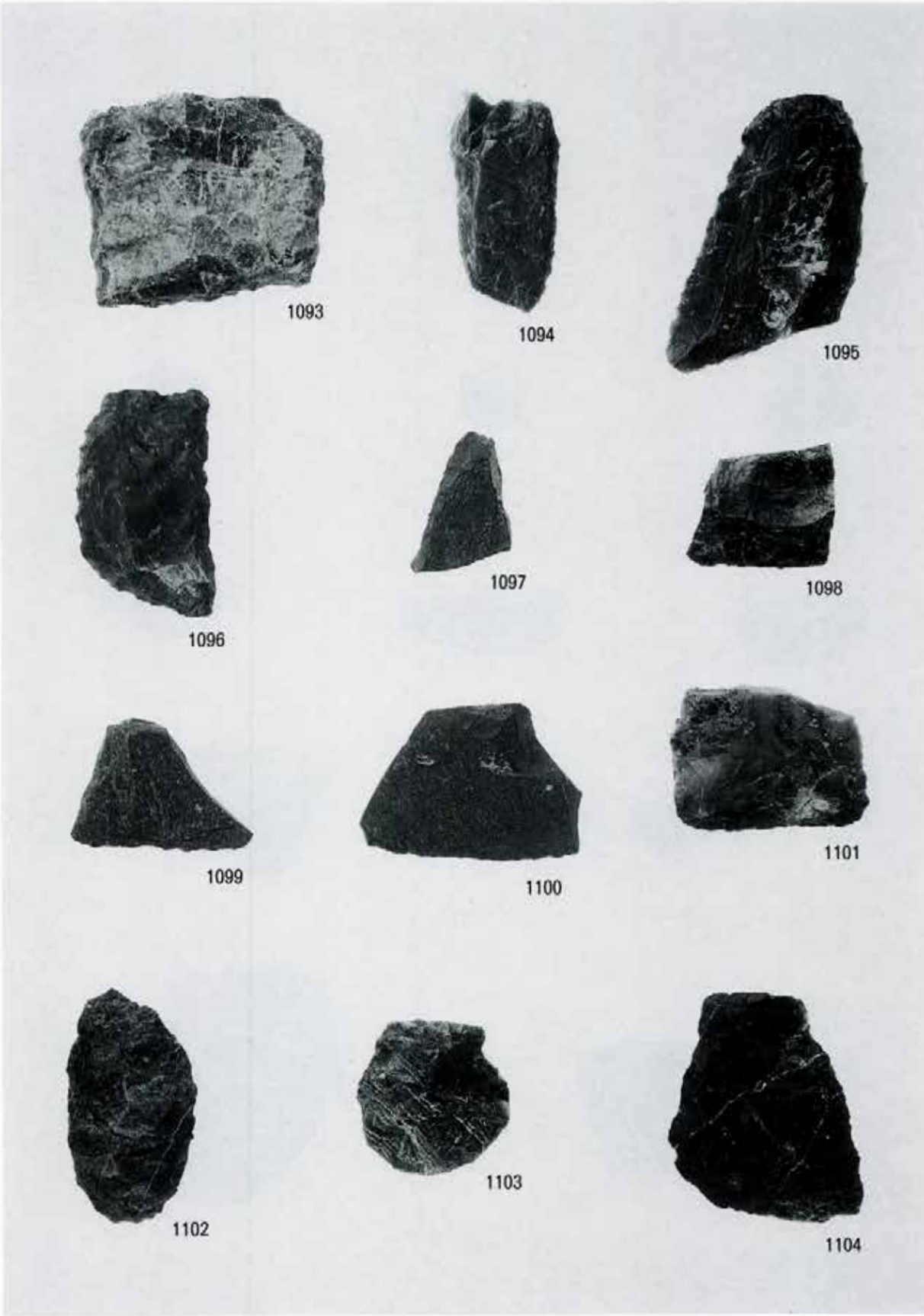
石鏃(1)（遺構・上の段出土）


1037
1038
1039
1040
1041
1042
1043
1044
1045
1046
1047
1048
1049
1050
1051
1052
1053
1054
1055
1056
1057
1058
1059
1060
1061
1062
1063
1064
1065
1066
1067
1068

石鏃(2)（下の段出土）

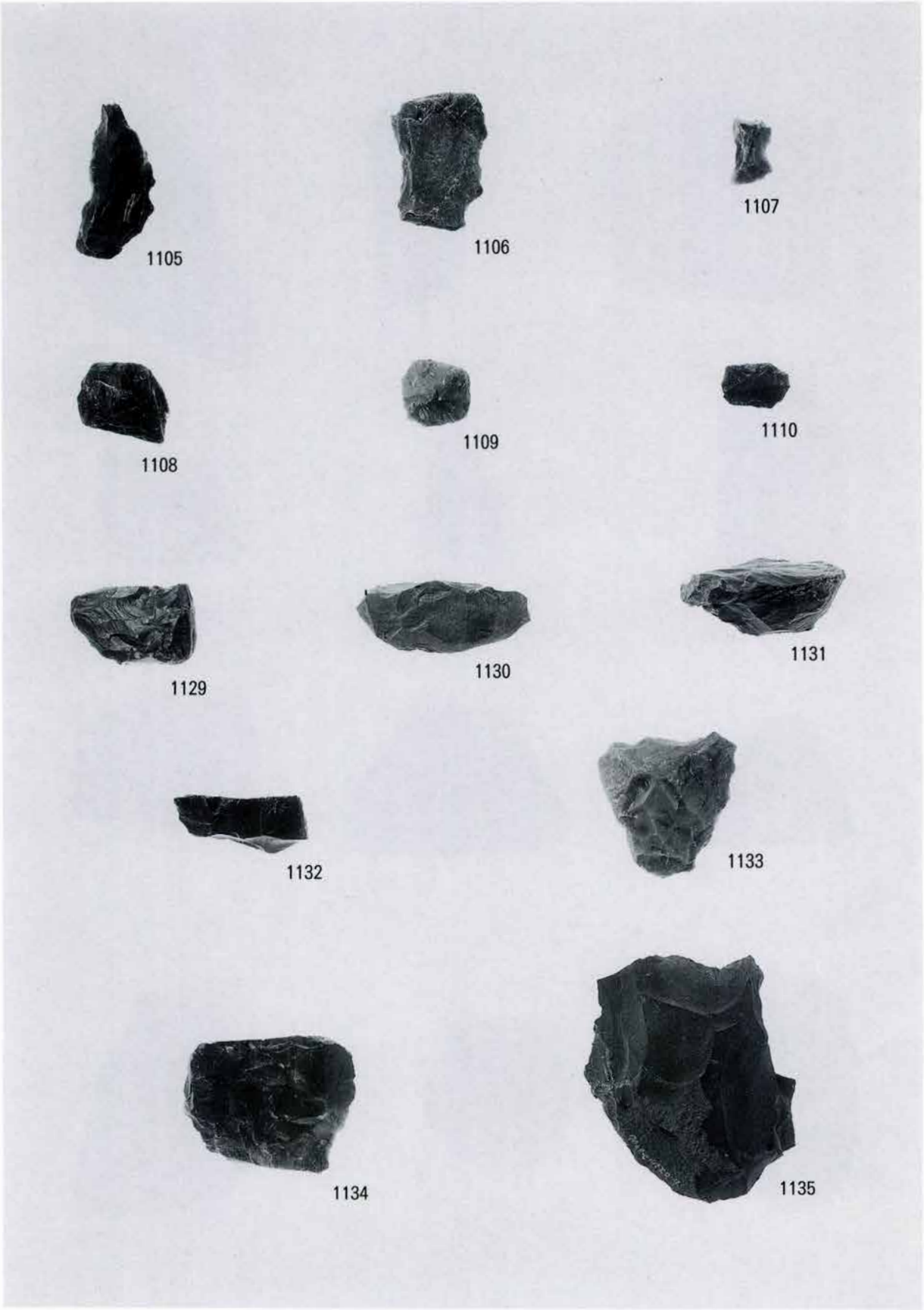

1069
1070
1071
1072
1073
1074
1075
1076
1077
1078
1079
1080
1081
1082
1083
1084
1085
1086
1087
1088
1089
1090
1091
1092

石錐、スクレイパー１類

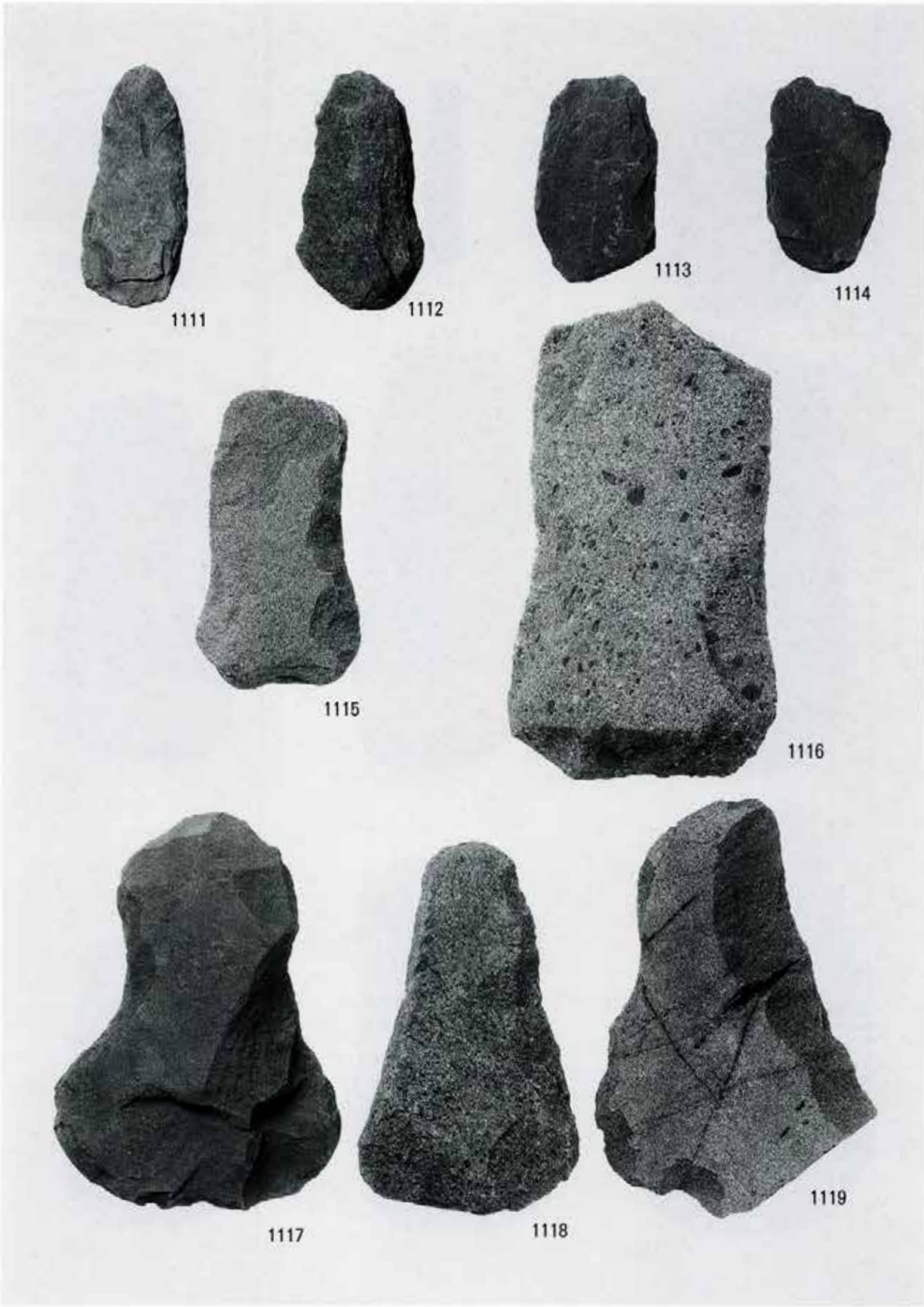


スクレイパー 2 類

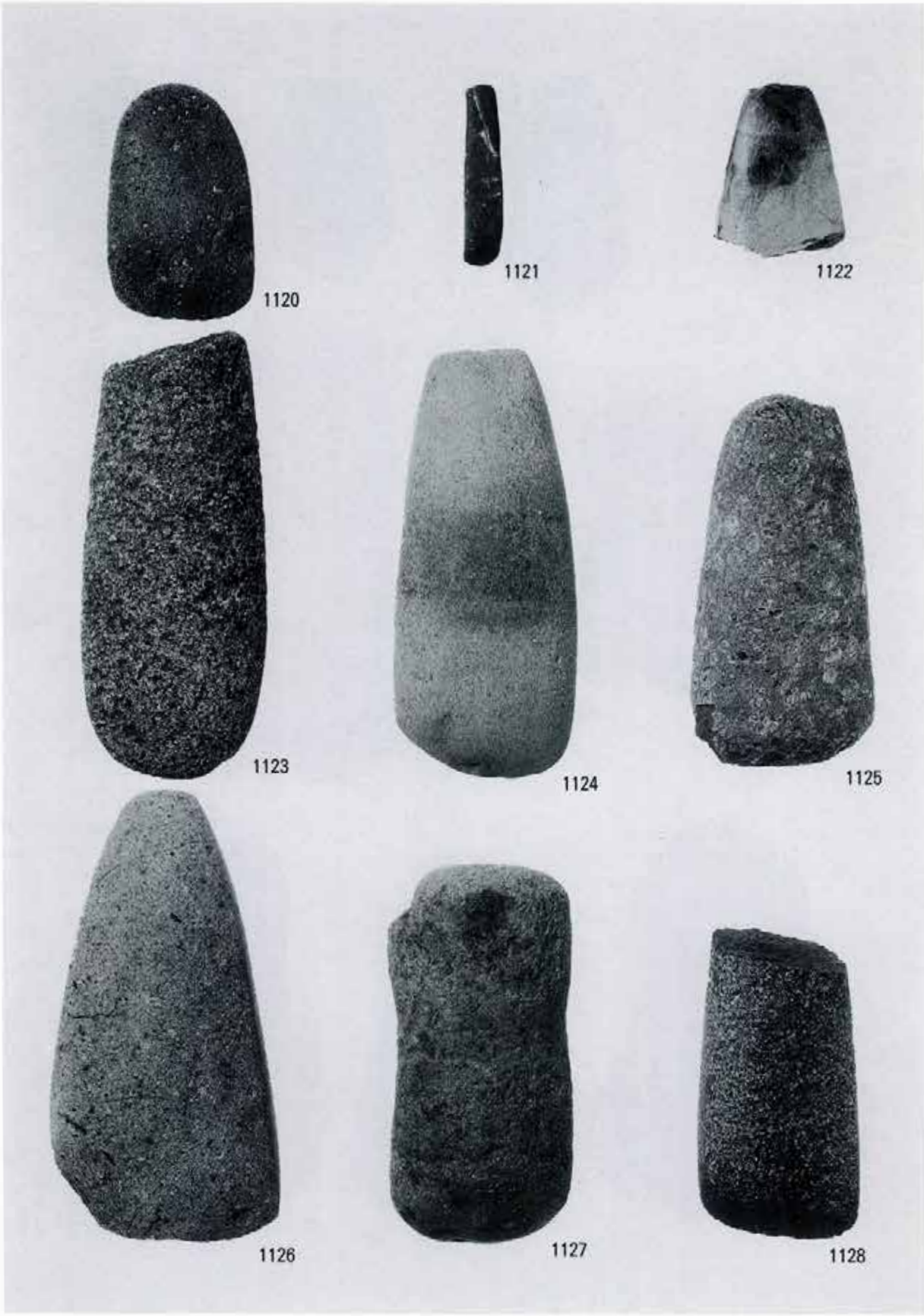
図版 50



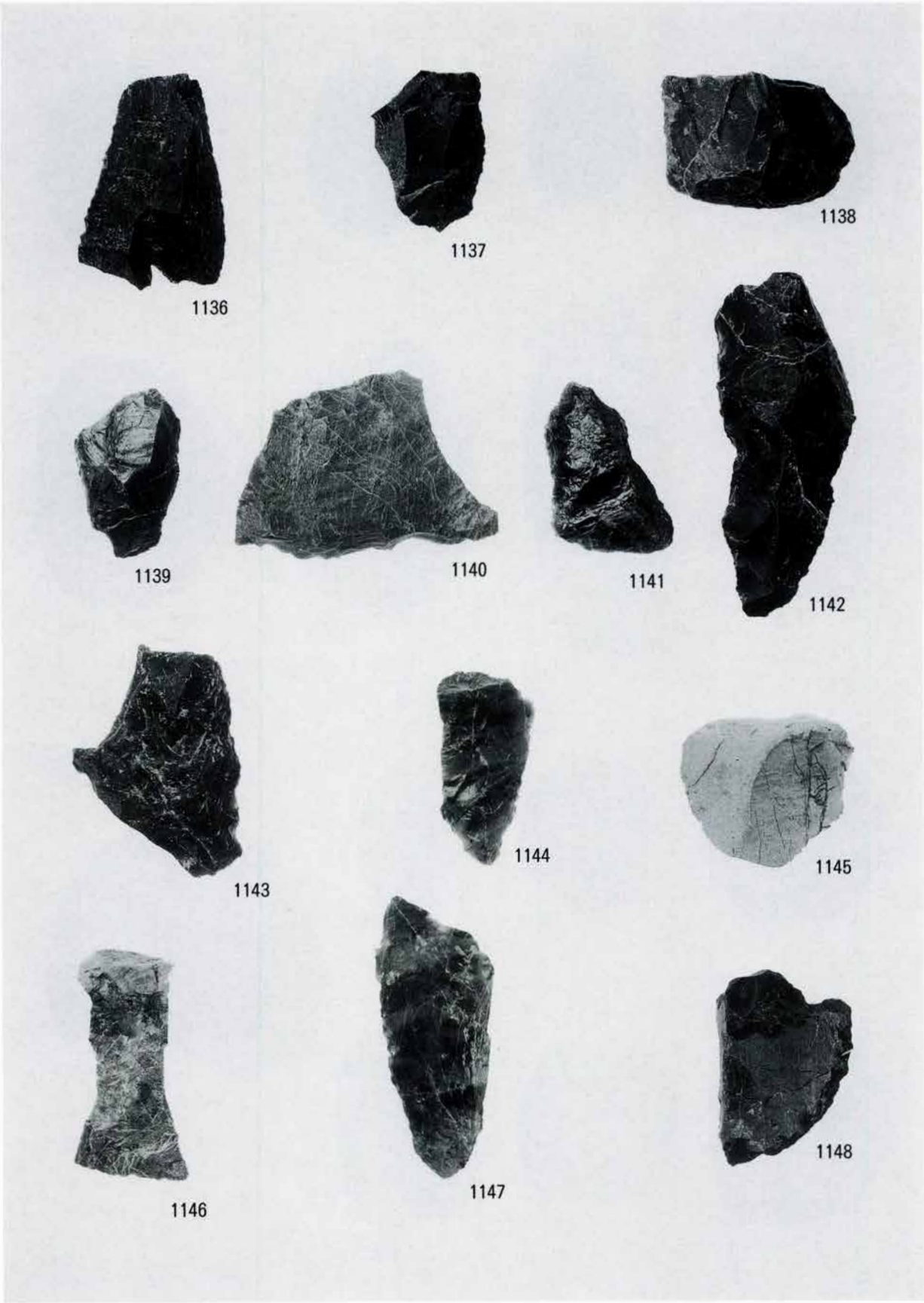
スクレイパー 3 類、ピエス・エスキーユ、石核



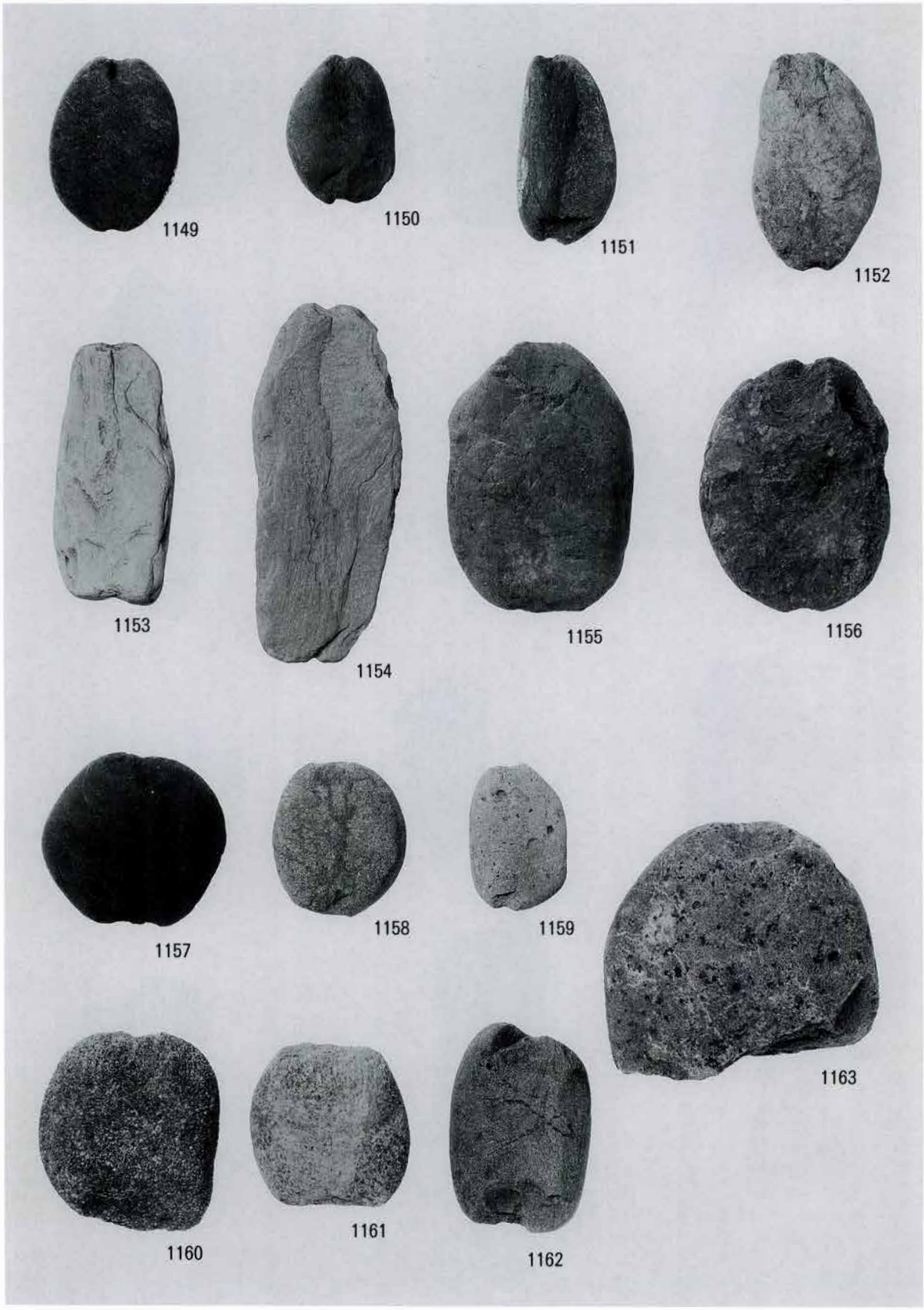
打製石斧



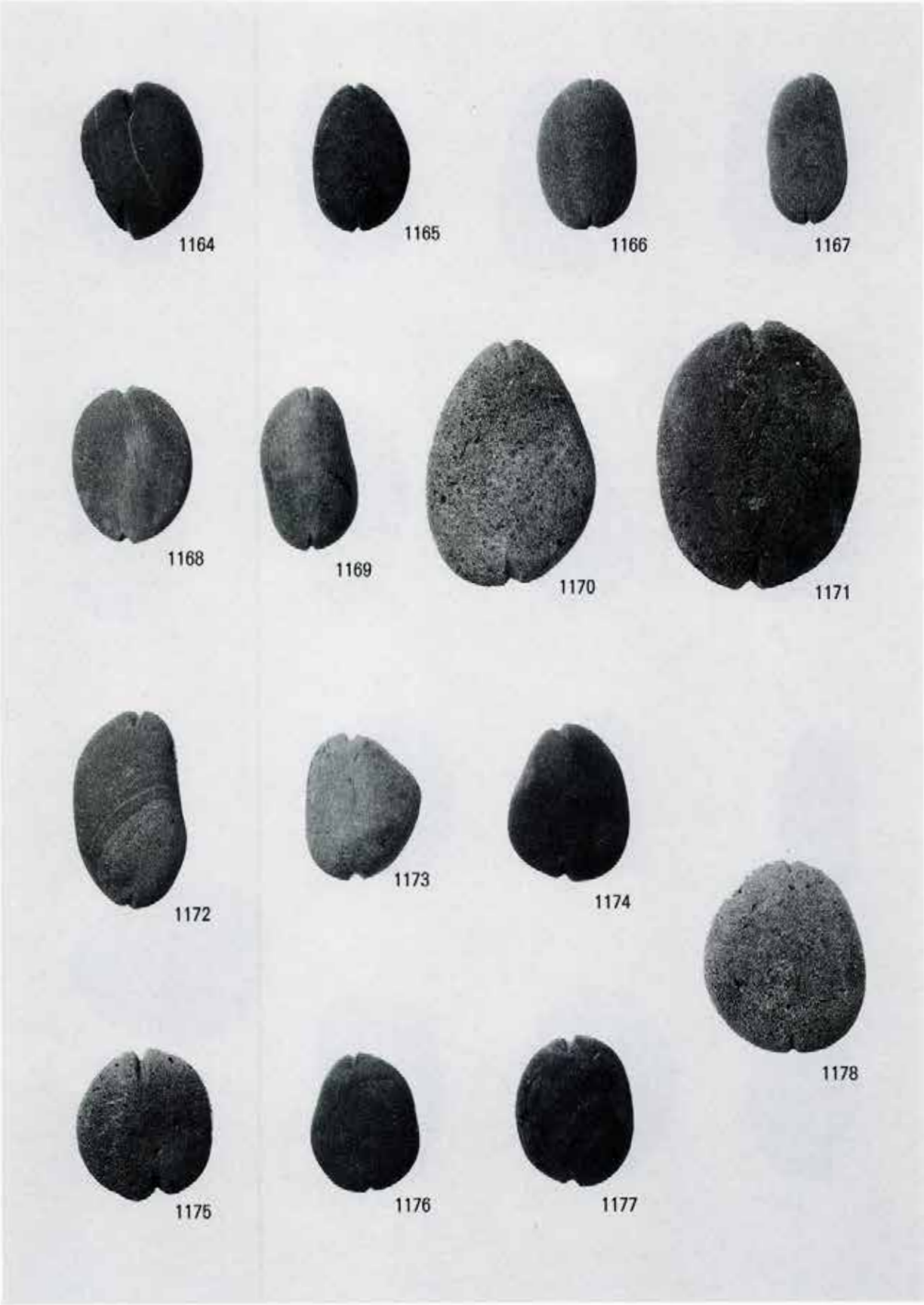
磨製石斧



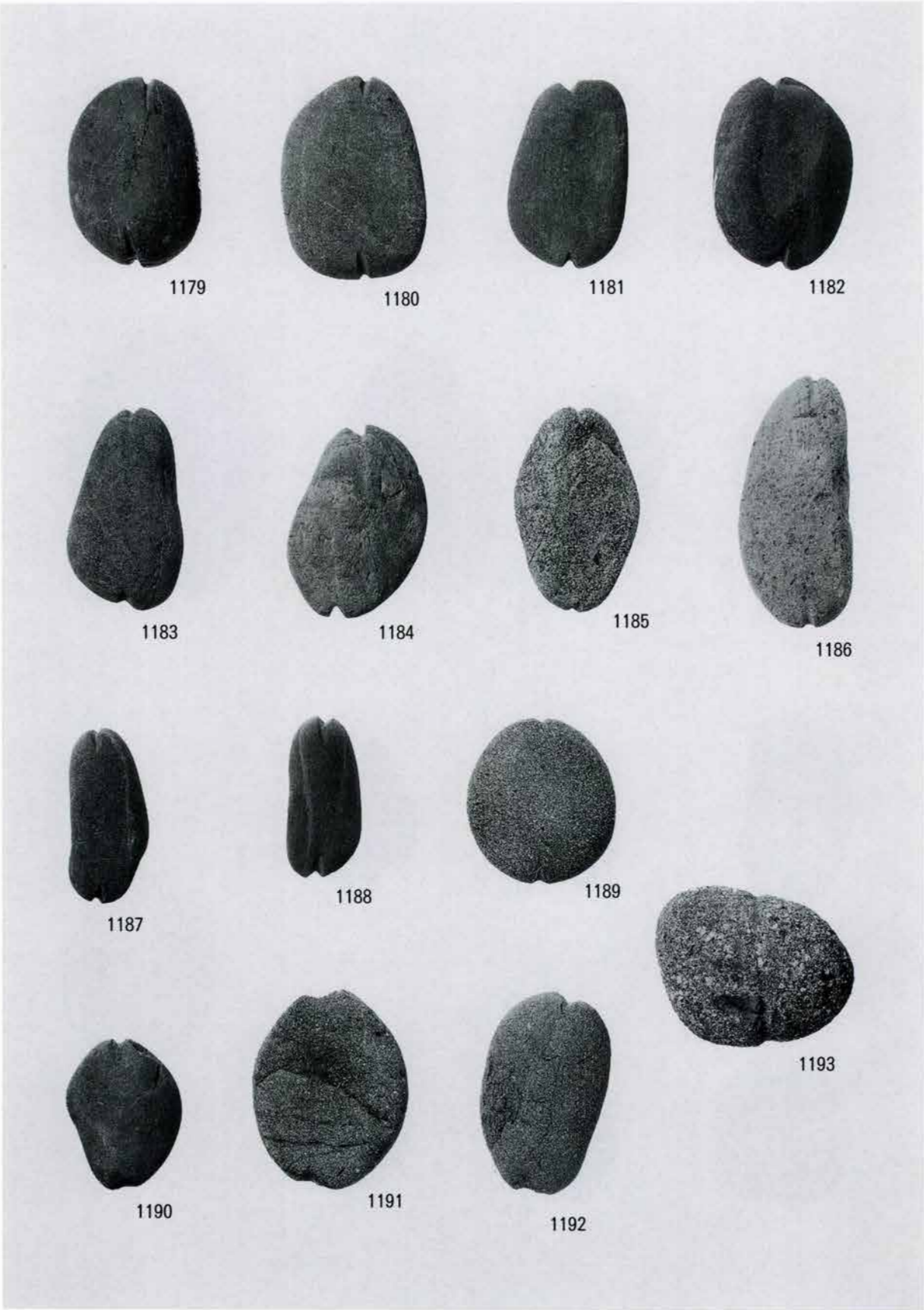
2次加工のある剥片（ＲＦ）、使用痕のある剥片（ＵＦ）


1149
1150
1151
1152
1153
1154
1155
1156
1157
1158
1159
1160
1161
1162
1163

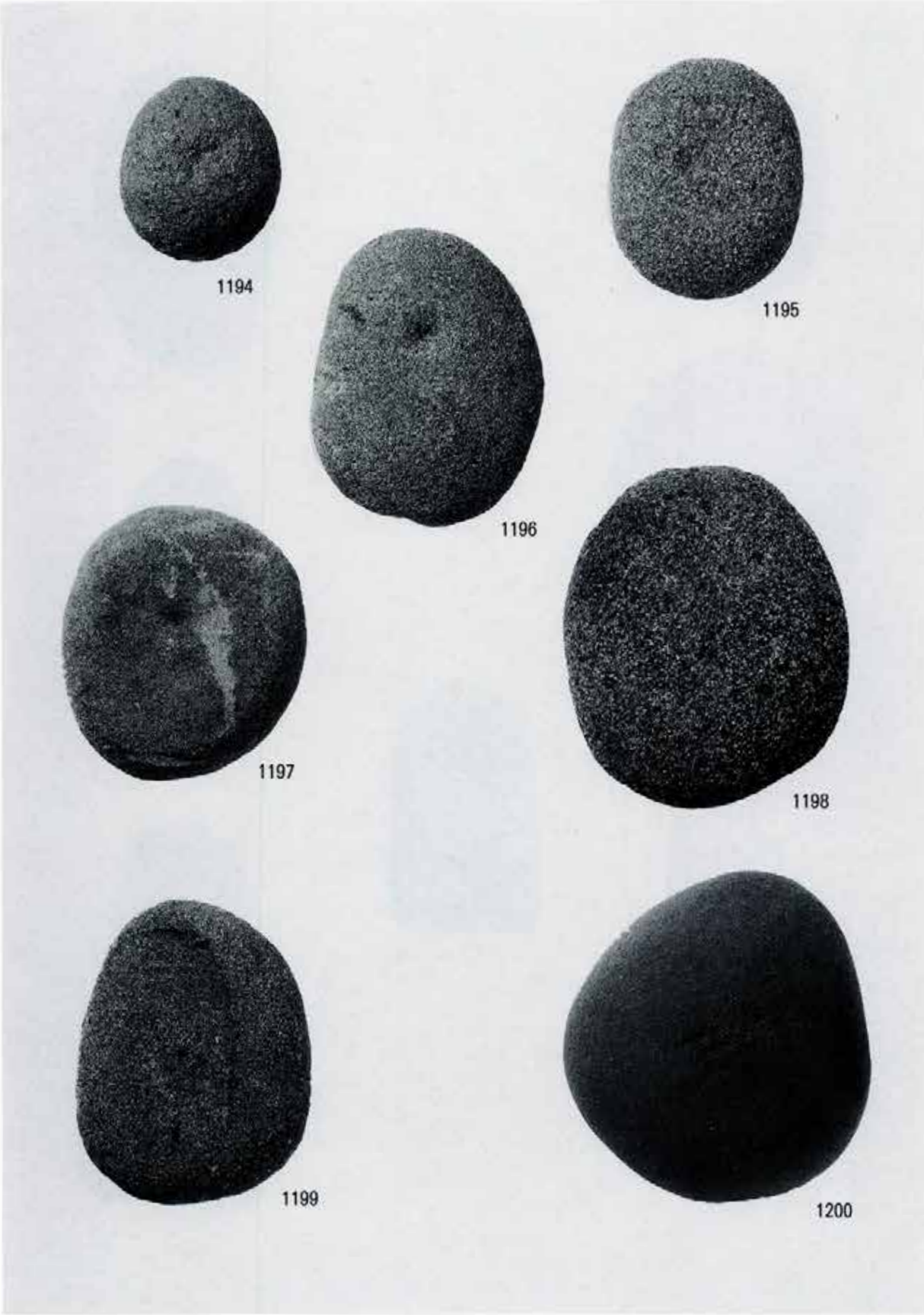
打欠石錘


1164
1165
1166
1167
1168
1169
1170
1171
1172
1173
1174
1175
1176
1177
1178

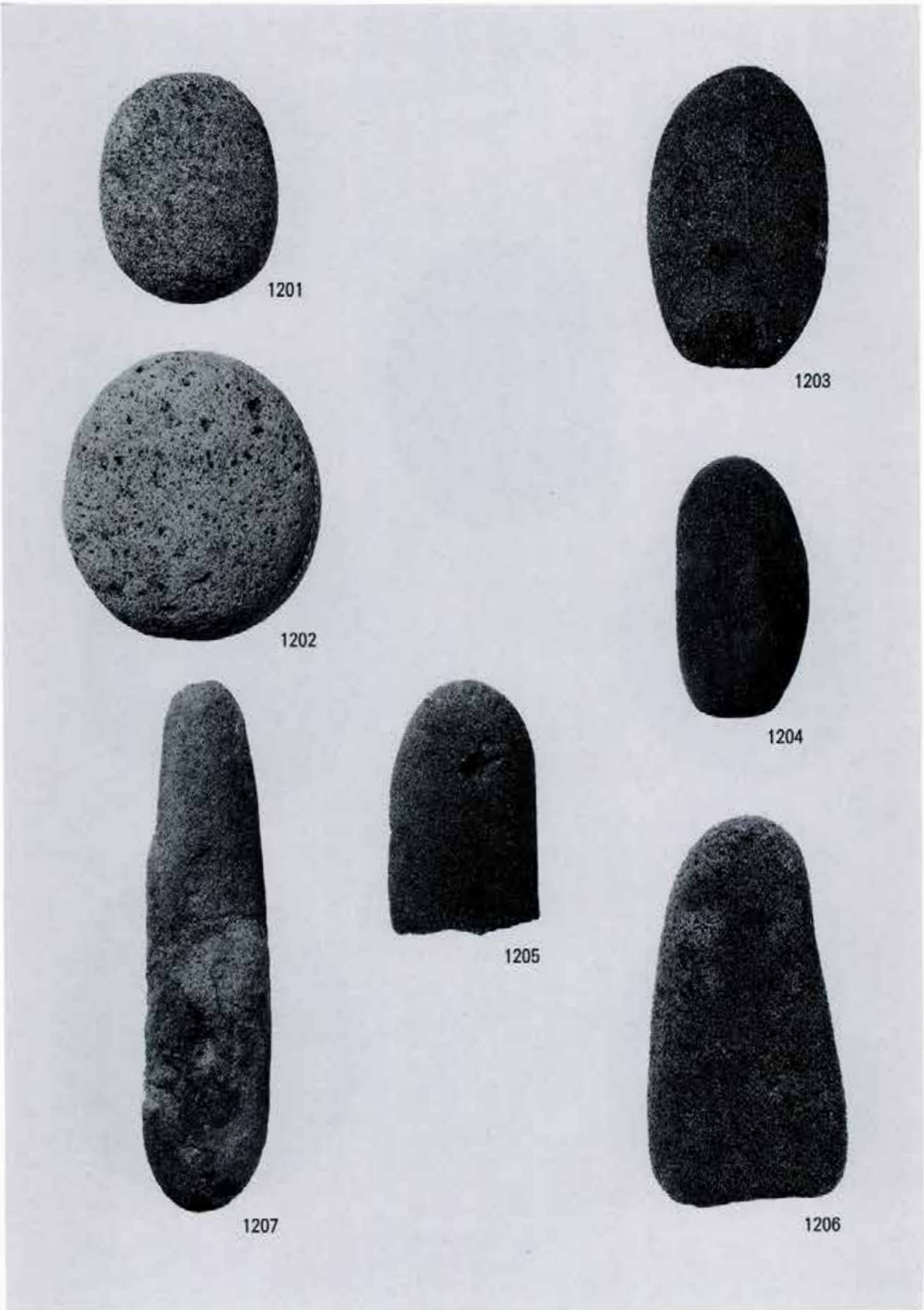
切目石錘(1)


1179
1180
1181
1182
1183
1184
1185
1186
1187
1188
1189
1190
1191
1192
1193

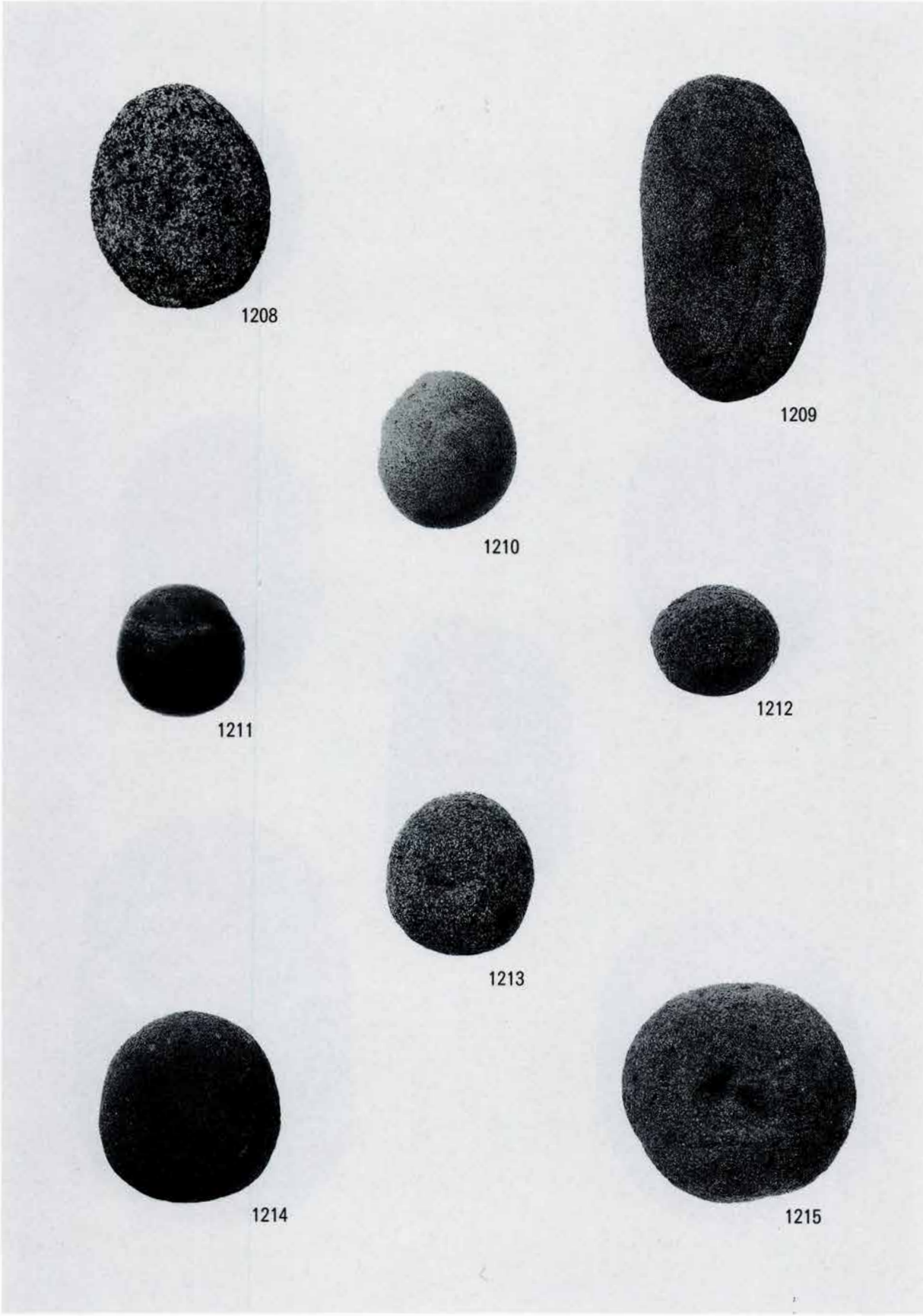
切目石錘(2)



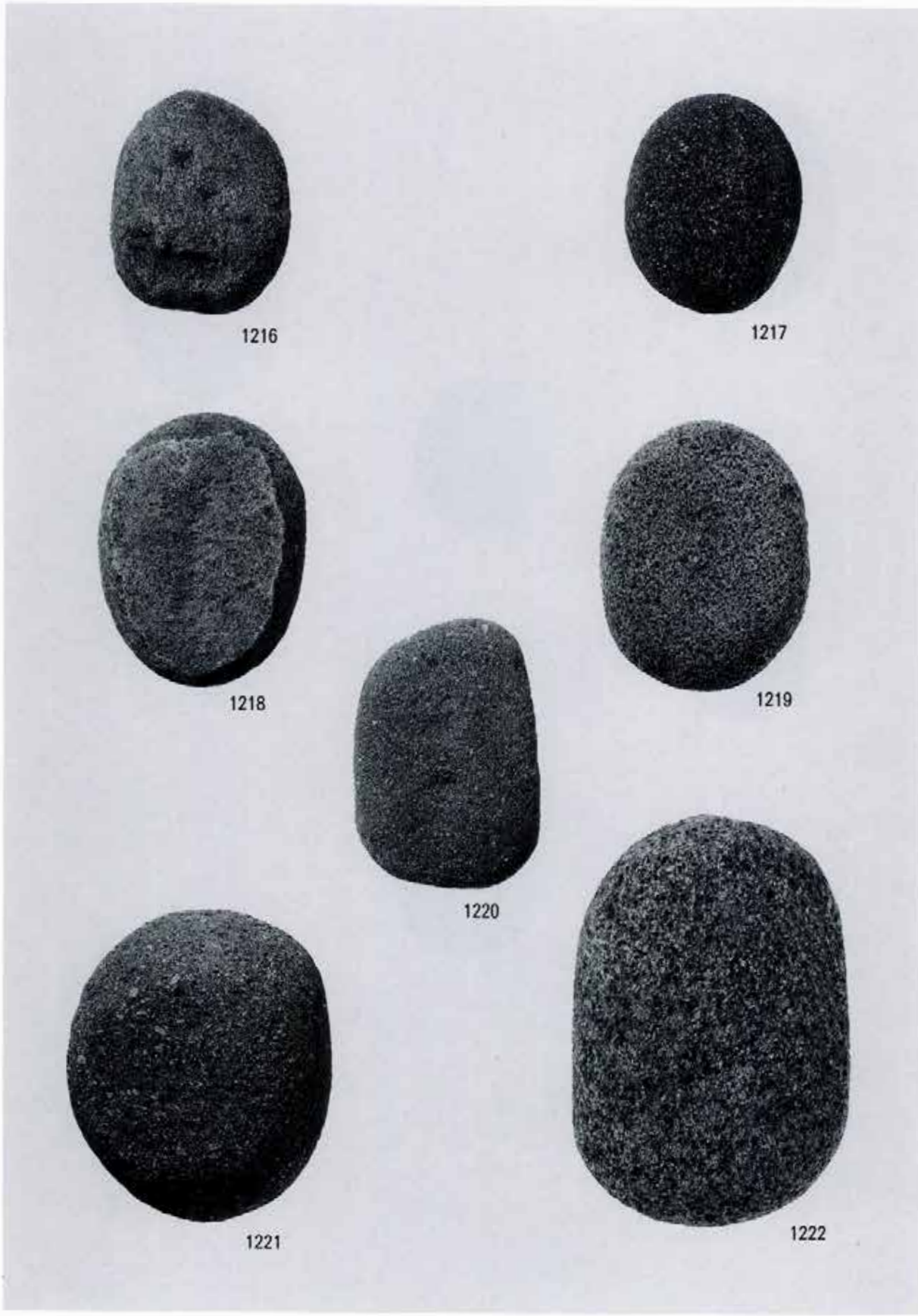
凹石類　上の段出土①（1・2群）



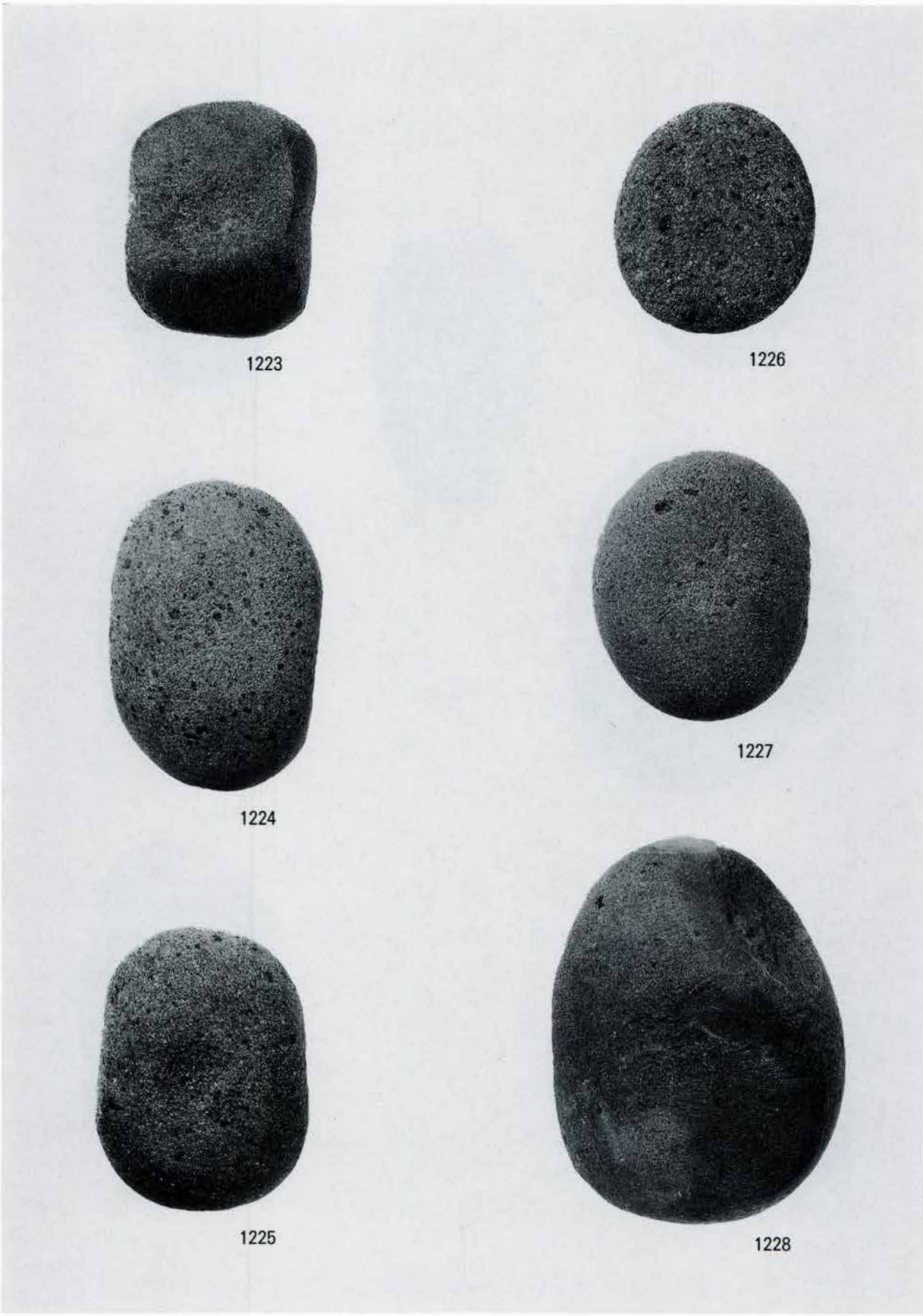
凹石類　上の段出土②（2～5群）



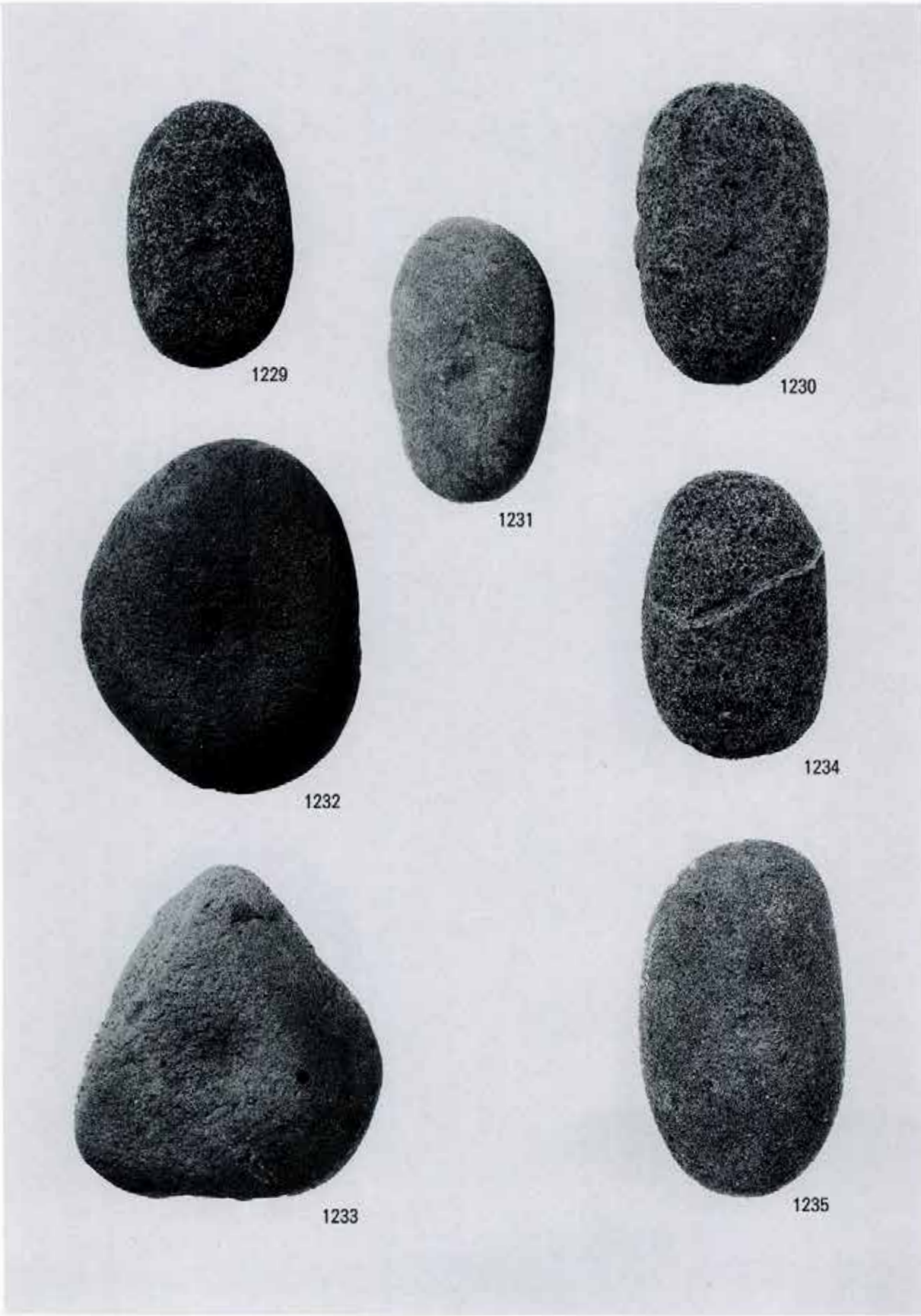
凹石類　遺構出土　下の段出土①（1群）



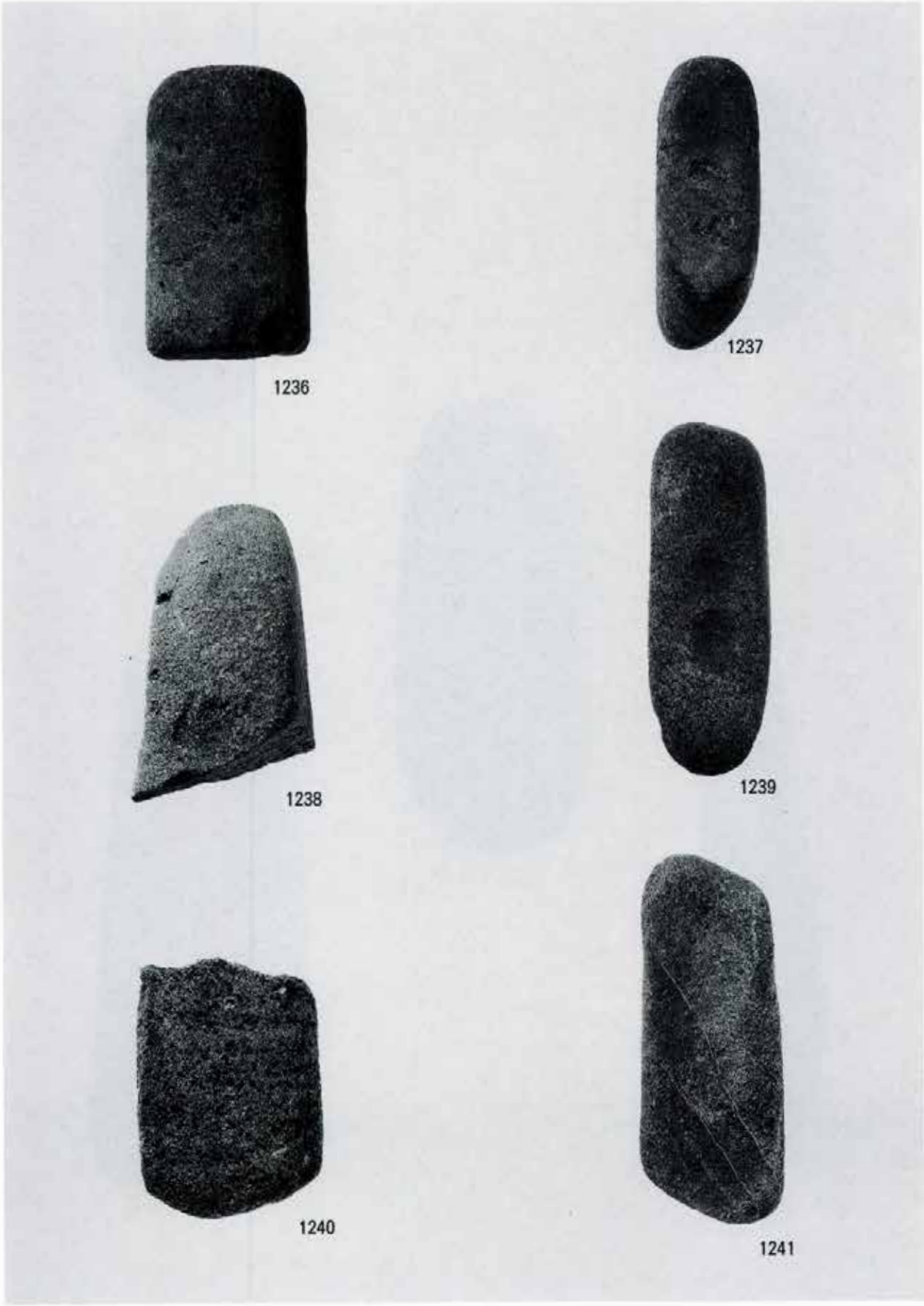
凹石類　下の段出土②（2群）



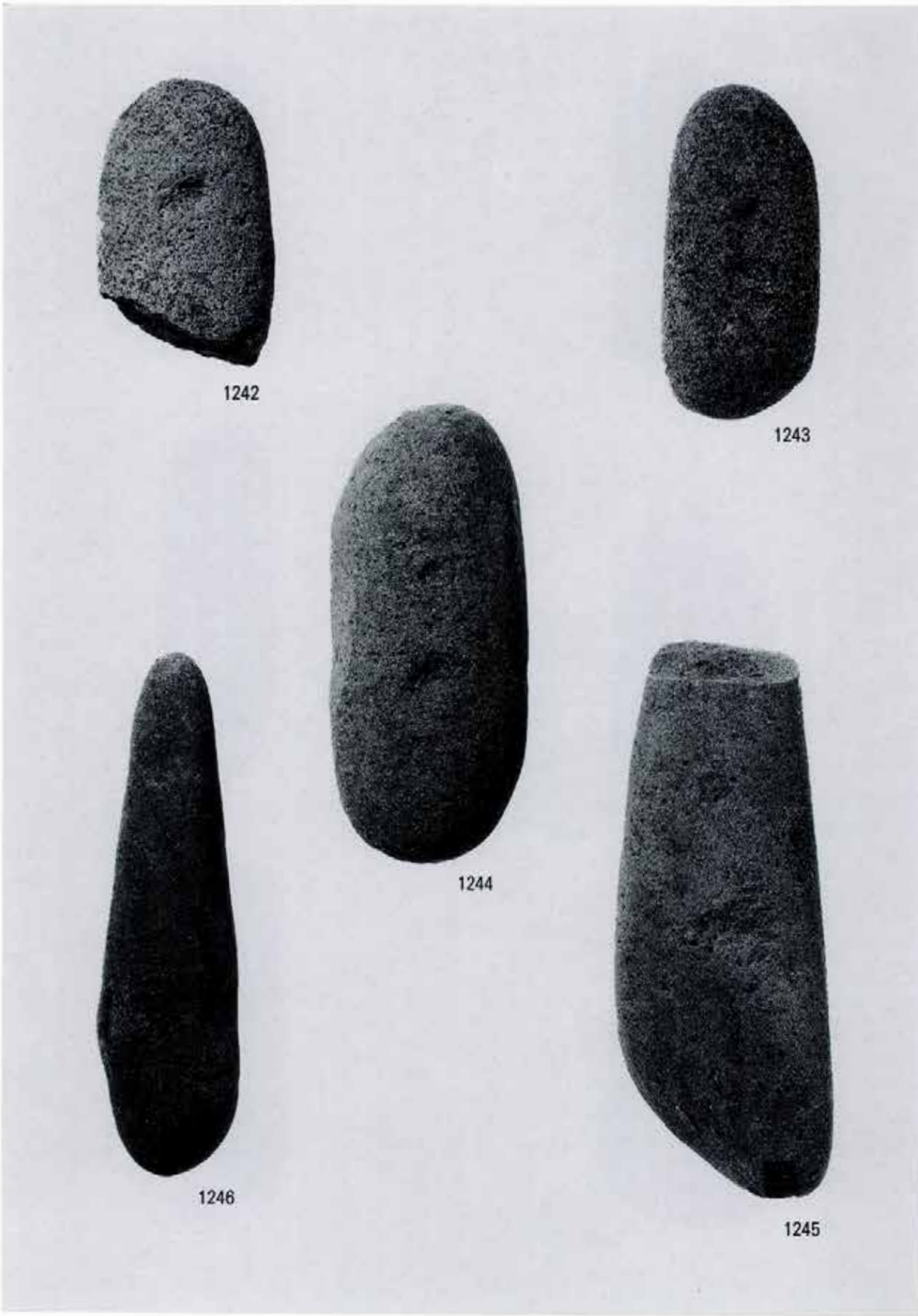
凹石類　下の段出土③（2群）



凹石類　下の段出土④（2・3群）



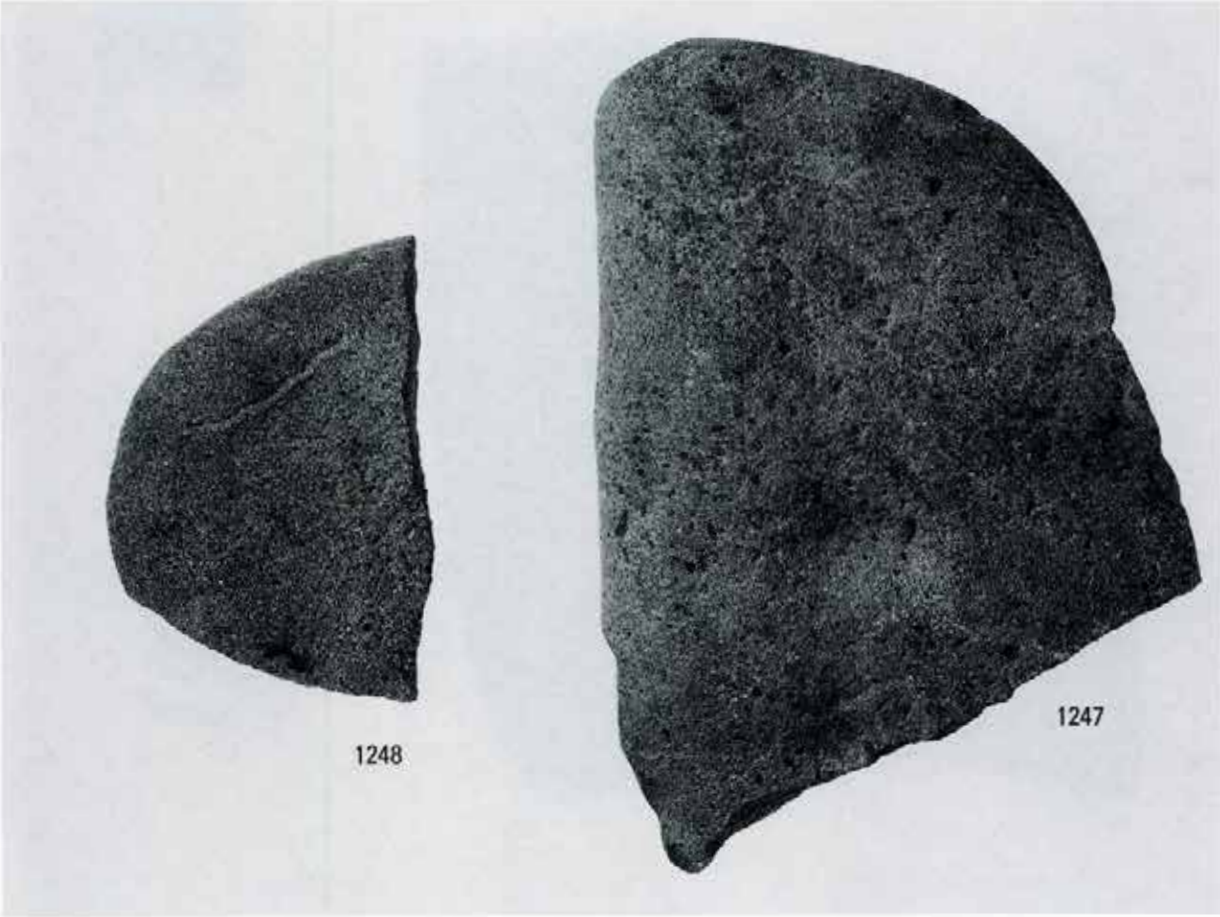
凹石類　下の段出土⑤（3・4群）



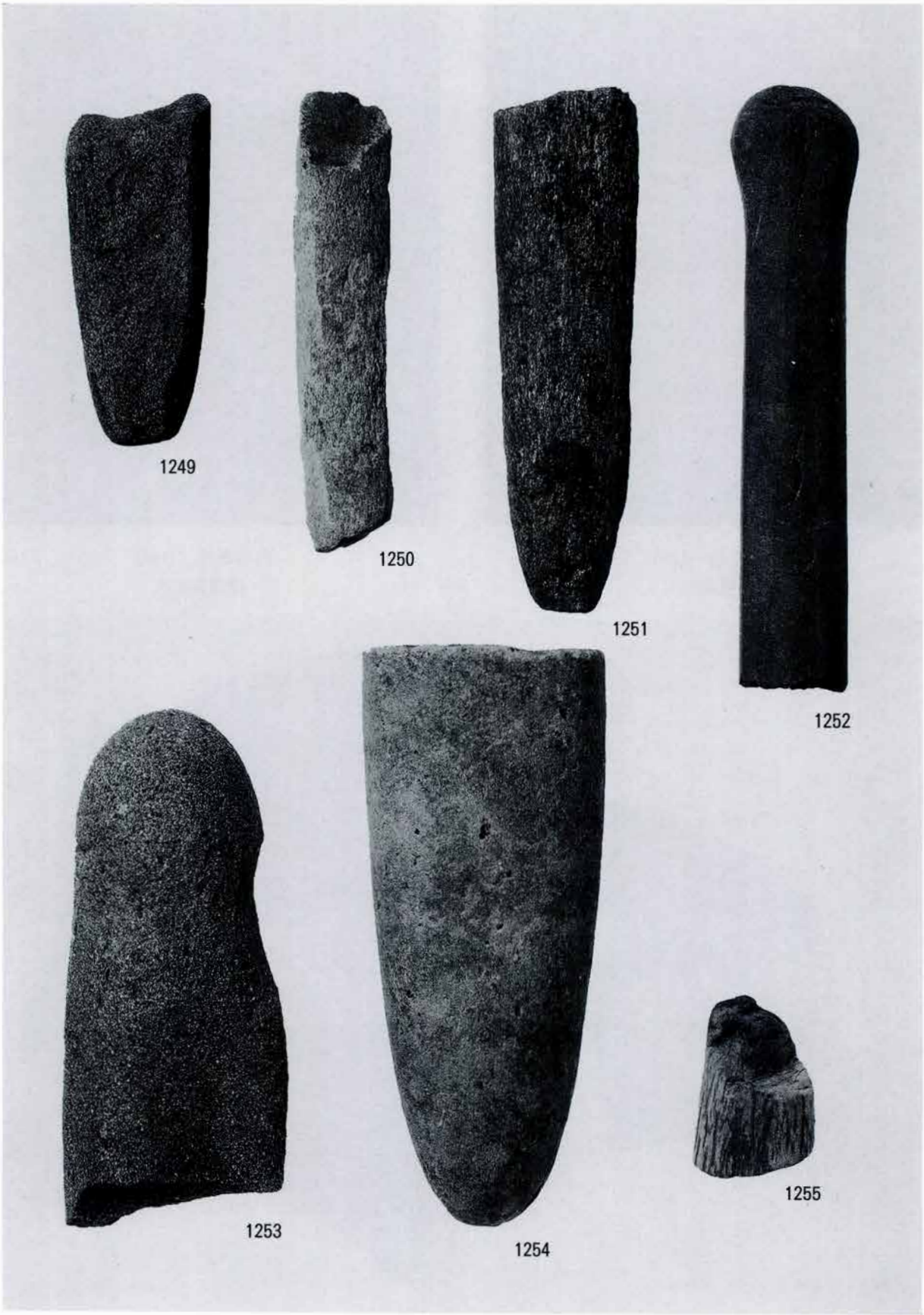
凹石類　下の段出土⑥（4・5群）

凹石 I 類（1200）
使用痕拡大

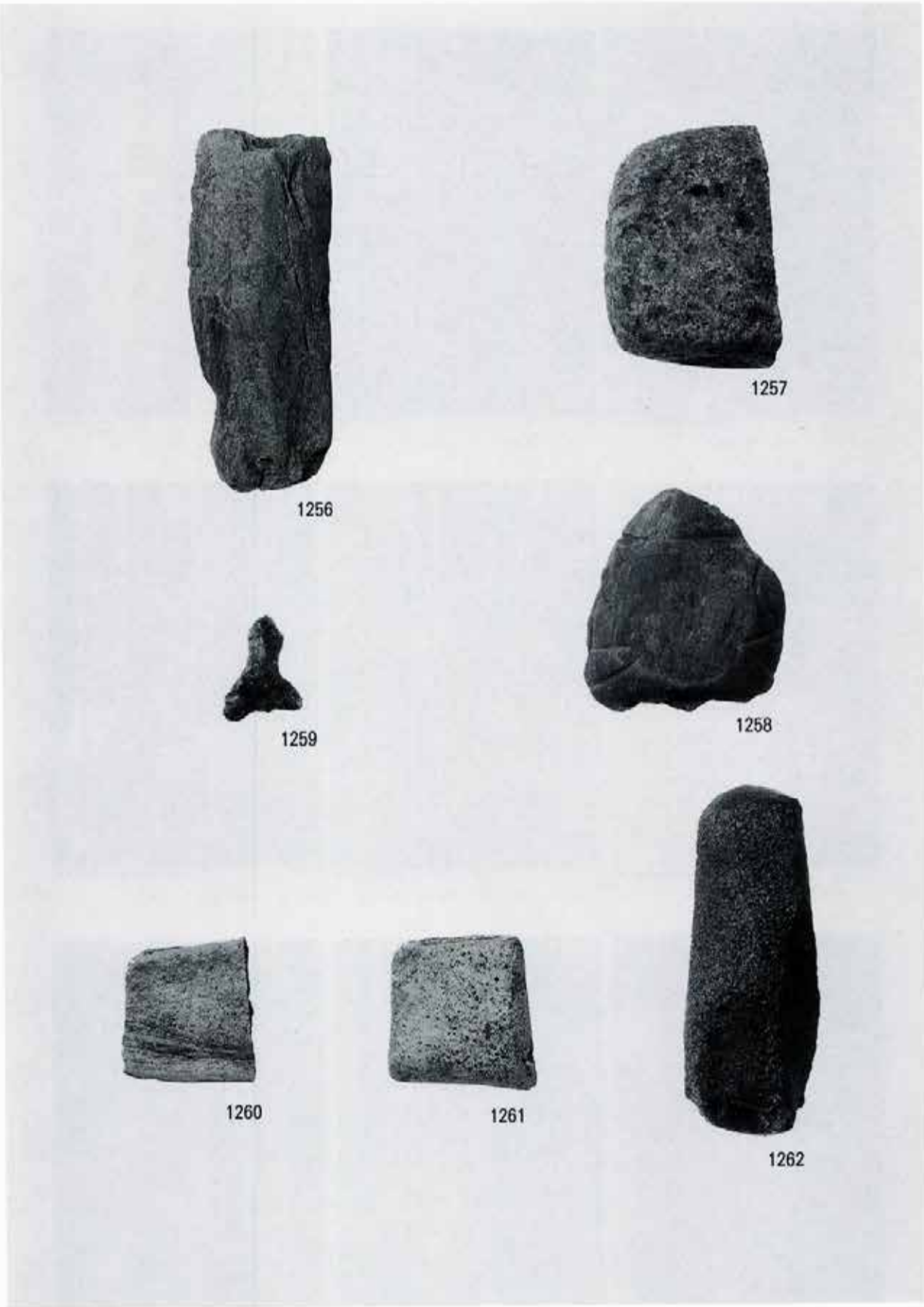
凹石 II 類（1196）
使用痕拡大



石 皿



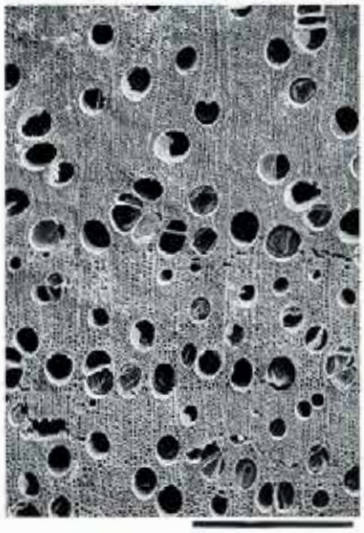
石製品(1)



石製品(2)、その他の石器

図版 68

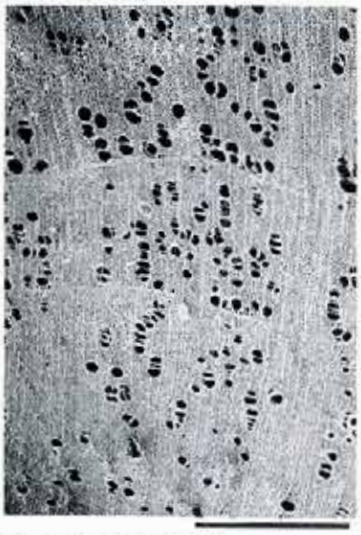
いんべ遺跡出土炭化材(1)



1a. オニグルミ（横断面）
S12 bar:0.5mm

1b. 同（接線断面） bar:0.1mm

1c. 同（放射断面） bar:0.1mm



2a. イヌシデ節（横断面）
S14 bar:0.5mm

2b. 同（接線断面） bar:0.1mm

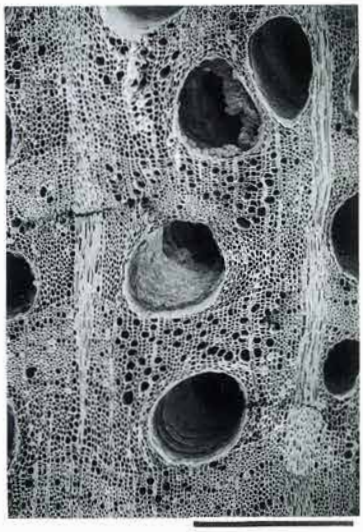
2c. 同（放射断面） bar:0.1mm

3a. ブナ属（横断面）
S12 bar:0.5mm

3b. 同（接線断面） bar:0.5mm

3c. 同（放射断面） bar:0.1mm

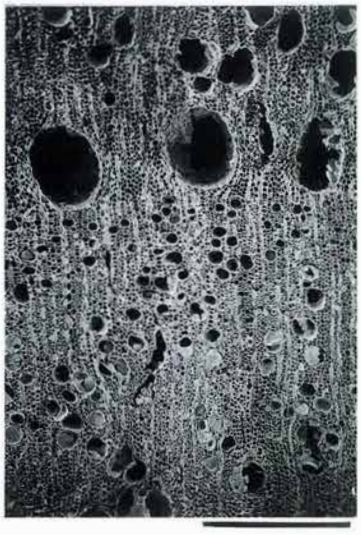
いんべ遺跡出土炭化材(2)



4a. コナラ節（横断面）
30C　V層　bar:0.5mm

4b. 同（接線断面）　bar:0.5mm

4c. 同（放射断面）　bar:0.5mm



5a. クリ（横断面）
SI2　bar:0.1mm

5b. 同（接線断面）　bar:0.5mm

5c. 同（放射断面）　bar:0.1mm

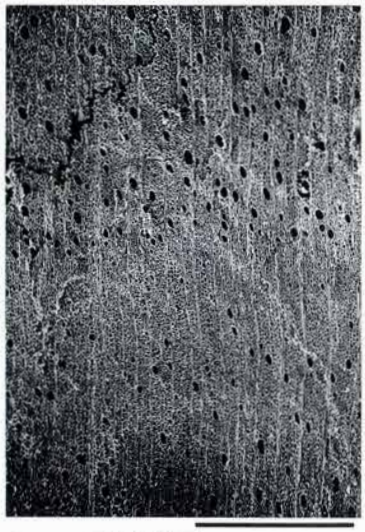
6a. サクラ属（横断面）
SI4　bar:0.5mm

6b. 同（接線断面）　bar:0.1mm

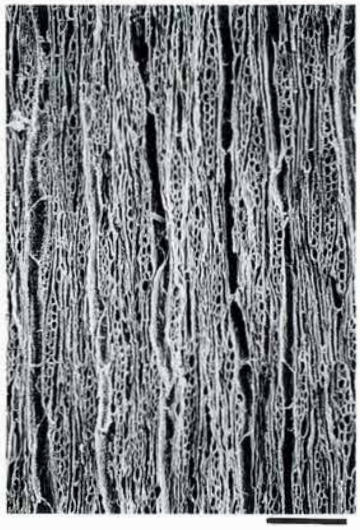
6c. 同（放射断面）　bar:0.1mm

図版 70

いんべ遺跡出土炭化材(3)



7a. ナシ亜科（横断面）
SI4 bar:0.5mm



7b. 同（接線断面） bar:0.1mm

7c. 同（放射断面） bar:0.1mm

8a. フジ属？（横断面）
SI1-E bar:0.5mm

8b. 同（接線断面） bar:0.1mm

8c. 同（放射断面） bar:0.1mm

9a. カエデ属（横断面）
30C V層 bar:0.5mm

9b. 同（接線断面） bar:0.1mm

9c. 同（放射断面） bar:0.1mm

いんべ遺跡出土炭化材(4)

10a. ケヤキ（横断面）
SI2 bar:0.5mm

10b. 同（接線断面） bar:0.1mm

10c. 同（放射断面） bar:0.1mm

報 告 書 抄 録

ふりがな	いんべいせき
書名	いんべ遺跡
副書名	徳山ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書
巻次	第 12 集
シリーズ名	岐阜県文化財保護センター調査報告書
シリーズ番号	第 55 集
編集者名	小谷和彦、藤岡比呂志、藤根 久、植田弥生他
編集機関	財団法人岐阜県文化財保護センター
所在地	〒502-0003 岐阜県岐阜市三田洞東1丁目26番地の1 TEL 058-237-8550
発行年月日	西暦2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間 調査面積	調査原因
いんべ遺跡	岐阜県揖斐郡 藤橋村大字 門入字立石谷	21407	06371	35° 41′ 49″	136° 24′ 43″	19900605 ～ 19901214 19920707 ～ 19920709 1,906㎡	徳山ダム建設事業に伴う事前調査

所収遺跡名	種別	時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
いんべ遺跡	集落	縄文時代 早期 前期 中期 後期 晩期	焼礫集積遺構4基 土器棺墓 11基 土器集中区1ヶ所 配石土壙 3基 ピット・土坑 240基	縄文土器 25,168点 石器 5,169点 その他 172点 合計 30,509点	・縄文時代早期、晩期の土器、石器がまとまって出土。 ・凹石類が多数出土。 ・水銀朱検出

岐阜県文化財保護センター調査報告書　第55集

いんべ遺跡

徳山ダム建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書　第12集

2000年3月31日　刊行

編集・発行　財団法人　岐阜県文化財保護センター
岐阜県岐阜市三田洞東1－26－1
印　　刷　舟橋印刷株式会社